

東方鬼神録

ヘタレ寝癖人間

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

これは東方幻想録とはまた別の次元の話
記憶喪失の少年とふれあう少女達の物語

目次

プロローグ	
拝啓名も知らぬ両親へ	1
少年の名前は	5
東方紅魔郷	
そーなのかー	11
アタイ! アイヤ!	15
ムツキくんモヤシと小悪魔とPAD	20
吸血姉妹と凸凹コンビ	26
神のまにまにどんちゃん騒ぎ	30
酒呑童子	36
宴会とこれから	46

万事屋零ちゃん活動篇	
万事屋零ちゃんと三月精	57
万事屋零ちゃんと小さな百鬼夜行	67
万事屋零ちゃんと⑨フレンズ(前編)	73
万事屋零ちゃんと⑨フレンズ(後編)	77
真実の欠片	84
悪戯兎と月のニートと月の頭脳	88
妹紅(不老不死)と輝夜(不老不死)と 零(不老不死)	92

五つの難題

96

東方妖々夢

月の兎と冬の象徴

100

九尾と猫又

108

普通の魔法使いと七色の魔法使い

113

鬱躁幻想の騒霊

117

うどみよん？友情と勝負

125

死へと誘う西行の亡霊

132

西行妖と黒夜叉

138

本当の決着！西行妖と黒夜叉！

153

片腕有角の仙人は妹属性の様です

163

人斬りみよん吉の挑戦！

170

宴会後半戦！獣は居ても除け者は居ない！

181

万事屋零ちゃんお騒がせ篇

初めての帰宅

186

初めての帰宅（Ⅱ）

194

初めての帰宅（Ⅲ）

202

初めての帰宅（Ⅳ）

210

マ○オエン○レスエ○ト

218

愉快的鍛冶屋なベビーシッター

225

地獄ピクニック

232

畜生な鬼と畜生ども

240

ギャーギャーギャーギャー喧しんだよ

！

250

東方永夜抄

月が綺麗ですね

261

コウモリと亡霊と不老不死

265

巫女と魔女っ子

272

人数集まると分かれたりするけど実際

全員で行った方が楽

276

魔界の令嬢と悪戯兎、半人前の剣士と

月兎

282

月の頭脳？いえ、マッドサイエンティ

ストです

286

参上！草の根妖怪ネットワーク！

294

やはりと言うか宴会回

299

パラッチと阿礼乙女と貸本屋

307

二回と思ったか？残念三回だ！

311

万事屋零ちやん危機一髪篇

その男、ハゲである

316

零死す！

321

風切零（ドS）と風見幽香（ドS）

328

悪戯兎、餅をつかずに嘘をつく

332

何故山を登るのか？そこに山があるか

らさ

338

ゴメン・・・やっぱ入れるわ秋姉妹

344

回れ回れ回れ回れ回れ回れ回れ回れ！可憐

に花卉散らすように！

349

鳥と狗は使い用

353

夢の記憶

359

乱れ乱され咲き乱れ

364

銭の河原と川の古代魚

369

神になるまでの黙示録（未来都市）

373

神になるまでの黙示録（分隊長の教官）

378

神になるまでの黙示録（部下と月への

移住計画）

382

神になるまでの黙示録（人妖大戦）

387

What!?

396

逃げる事に夢中になっていた俺は背後

から近づいてくるもう一人の仲間に気付

かず睡眠薬を嗅がされ気付けば・・・

403

座薬兔のウサミちゃん

408

怖くないよ小傘ちゃん！

413

煮えてなんぼのおでんに候！	420	死を覚悟した事はあるか？俺はある	467
七夕と願ひ事はマツチする	425		
幕開け	432	闇の大妖怪と前博麗の巫女	471
写真の中の少女	436	鬼は笑い巫女は呆れる	476
ケロちゃんと零ちゃんのピンクな秘密	440	仮面の秘密	480
殴ったね！ブライトさんにも殴られた	444	アバヨ。旧友（ダチ公）	487
事無いのに！	444	敵は百鬼夜行	493
ガンキヤノンキヤノ子	448	アンコ	498
これぞ神の奇跡の力です！	453	常闇の妖怪	506
鳥料理撲滅委員会とゴリラ撲滅委員会	457	P T Aに訴えられんぞ!?	520
ハゲ坊主と元ハゲ坊主	463	地獄より地獄な館	524
		シヨタ零ちゃん争奪戦	528
		ヤンデレ？ツンデレ？やっぱノーマル	

が一番っしょ！

――

532

幽香と萃香

――

536

君が居た夏は遠い夢の中

――

540

剣対拳

――

548

ようやく秋が来たッ！

――

553

東方風神録

秋の稔と姉の本気

――

557

河童と雛人形

――

561

神遊び

――

566

我は神なり

――

571

万事屋零ちゃん月面戦争篇

零ちゃん月へ行く

――

576

兎は大抵臆病です

――

581

イーグルラビイ！二人は仲良し？

586

元主と元ペット

――

591

八つの頭に八つの尻尾

――

596

この世界は残酷だ

――

602

そいつは客!?サグメの隠謀！

――

608

玉兎の戦闘訓練

――

620

万事屋蛮奇ちゃん始動篇

零帰還！一方その頃・・・

――

624

アツパーヤード

――

630

ラグナロク？神達のサバイバル

634

零帰還！超絶ランダム七変化！

東方地霊殿

小傘とデート!? 穴の下に広がる世界!

643

唐傘と土蜘蛛、夜叉と橋姫

647

爆誕! 怪力乱神、力の勇儀!

652

貴女の心を覗きます! 嫌われ者の覚り

妖怪

657

地獄の火車と八咫鳥

662

お前と俺の一つの約束

668

小傘と蛮奇、究極の宴会芸

672

地底の妖怪? 山の妖怪? いえ、リュウ

グウノツカイです

676

忌み嫌われも恋はしたいお年頃

681

万事屋零ちゃん主人公奪還篇

中国と夜叉と大ナマズ! ———— 684

前編

689

後編

696

超発明、ニトロニツクギア

704

ヤクザじゃない!

713

トリック・オア・トリート

723

東方星蓮船

新たな異変は宝探し? 夢の国のネズ

魔界の一般人？	770	ミーマウス！	728
実体と幽体	766	小傘のビックリ大作戦、入道使いは怒り心頭	733
		夜叉の性	737
		ドジツ虎武将の毘沙門天	740
		いざ南無三！	744
		正体不明のお祝いパーティー	750
		天摩様だーれだ	754
		万事屋零ちゃん旧作篇	
		ヒロインって、何なんだろうね	758

結成！野良神連合軍！	819	妬ましい・・・	774
妖夢の恋愛七日間戦争	814	パルスィ妬むの止めるってよ	780
		メリークリスマス！	784
		東方神霊廟	
		お前みたいないな一ボスが居るか！	789
		山彦と唐笠とゾンビと	793
		昔の友は今の敵	797
		聖徳王の帰還	801
		佐渡の大親分と鬼の大家分	808
		万事屋零ちゃん宗教戦争篇	

反転家族	938
鬼と一寸法師の一寸の喧嘩	944
万事屋零ちゃん現代入り? 篇	
零さん現代? に行くの巻	947
万事屋と秘封倶楽部	953
科学者対魔法使いとデートの行方	958
次はくきさらぎく	968
赤か青かを選んで皿は割れる	
975	
人と鬼の間	981
オカルティックJK	987
苦し紛れの春ですよー	991

恐怖の董子探検記	996
博麗の巫女の務めとは	1001
万事屋零ちゃんヤンデレ篇	
ピーしないと出れない部屋	1009
ヤンデレ再来!	1015
大天狗と百足の姫	1020
マインクラフト百々世	1024
鈍感が愛染香を吸うとどうなるのか	
1028	
君の瞳にFOR IN LOVE	
1033	
天邪鬼と鬼邪天II	1044
東方紺珠伝	

プロローグ

拝啓名も知らぬ両親へ

目の前がぼんやりと見える

空があり回りでは人が救急車を呼んだり

俺の写真を撮ったりしている

??? (そうだ・・・俺、トラックに引かれて・・・)

そして俺はふと疑問を感じる

??? (俺って・・・誰だっけ?)

意識が落ち目の前が真っ暗になった

次に目を覚ますと辺りは暗い

??? 「・・・」

俺はポケットからスマホを取り出した

やはり圏外なのでスマホのライト機能で辺りを照らした

どうやら辺りは竹林らしい

それで目の前に大きな屋敷

??? 「デツカイ屋敷だこつて・・・」

俺が目の前の門の扉を押すと何と扉が開いた

??? 「ちゃんと鍵くらい閉めるよ。無用心だなあ・・・」

そう思いながら屋敷に入る

これ、不法侵入である

門を通ると格子から煙が出ているのが見えた

??? 「調理場か？ちよつと覗いてみよう」

しかしこの選択が間違이었다と今の俺が知るよしも無かつた

格子を覗くとストレートな黒い髪的美少女が居た

しかし驚くのはそこではない

彼女は裸だった

そしてようやく気付いた

ここは風呂で有り今の俺は覗き魔であることに

どうやら彼女も俺に気付いた用で鋭い視線を向けて来る

やばさを感じた俺は急いでその場を立ち去ろうとした

しかし

目の前から土煙が吹き荒れた

??? 「よくも・・・よくも私の華麗なるお風呂姿を覗いたわね！」

そう言う少女はさつき風呂呂に入っていた美少女である

今度は服も来ていて安心だ

??? 「安心じゃねえよ！壁突き破るってどんな力してんだ。このゴリラ女！後よくこの一瞬で服来たな！」

??? 「そんな事はどうでもいいのよ。今はお前を肅清するのが先よ」

今俺は自分が何者か分からないがしななければいけない事は本能で分かる

??? 「す、す、す、すんませんでしたアアアアアアアアアア!!!」

トングラをこく事だ

??? 「待て！」

美少女が後ろから追って来る

何か光る玉を撃って来るが調べる余裕も無い

しばらく走って今度はボロ小屋を見つけた

??? 「はあ、はあ、まだ追って来てやがる」

後ろを見ると遠い人影が見える

??? 「仕方ねえ！」

扉を蹴り破って中に入ると今度はお着替え中の白のシャツに赤いズボン？長い白髪にリボンを幾つも付けている少女が居てこちらを見て居た

次第にまたは後ろの少女のように殺意の目に代わり手から炎が飛び出した

??? 「うわっ！ちよ！あぶ！」

間一髪交わすと前の少女から舌打ちが聞こえた

??? 「あら、妹紅。そいつを殺すのは私よ。邪魔しないでくれない？」

どうやら後ろの少女が追い付いてきたようだ

妹紅「輝夜・・・安心しろ。二人まとめて殺してやるよ！」

いきなり二人が光の玉や炎を飛ばし始めた

だが俺は不覚にも二人のそれらが美しいと思いついてしまった

??? 「！い、今の内に逃げよ・・・」

俺は急いでその場を後にした

少年の名前は

あれから一晩中走り回り竹林を抜けた

???"腹・・・減った・・・"

空腹で倒れた

また目の前が黒くなり意識が落ちた

回りが焼けて居る

何人もの悲鳴が上がる

足元には人の死体の山

だが額に角がある人ばかりだ

そうか・・・俺は・・・

こいつらの屍の上で生きてんだ

??? 「は！」

目が覚めるとそこは知らない天井だった

どうやら朝のようで鳥の囀ずりが聞こえる

??? 「おや？起きたか？」

声をかけられた方を見るとそこには青い髪に青い服頭には大学生が付けている帽子の様なものを被っている女性が居た

??? 「ここは・・・？」

??? 「私は上白沢慧音。ここは私の家だよ。君は人里の前で倒れて居たんだ」

??? 「人里？」

人里とはなんぞやと言う疑問に目の前の慧音が頭を抱えた

慧音 「まさか外来人か？一つ聞くが君は幻想郷を知っているか？」

幻想郷・・・その響きには覚えがある

でも思い出せない

次第に頭痛が来て俺は頭を抱えた

慧音「大丈夫か!？」

???「わ、悪い。わかんねえな。俺今自分が何者かすら分かってねえんだ」

慧音「そ、それはすまない事を言ってしまったな・・・」

空気が悪くなってしまった・・・

慧音「そ、そうだ!水でも持って来よう」

慧音は立ち上がって台所に行ってしまった

???「・・・」

しばらくボーっとしていると玄関の開く音がした

???「おーい。慧音。いるかー?」

慧音を呼ぶ声がある

しかも聞き覚えがある

つい昨日聞いた

確か・・・

???「そうだ!もこたんだ!」

大声を出してしまい口を防ぐが遅かった

こちらに走る足音が聞こえて扉が襖が勢いよく開いた

妹紅「お前・・・何で・・・」

???「いや、その・・・」

俺は目を反らすしかなかった

妹紅がプルプル震えて降り目は殺気付いていた

???「ヤバイよ! どうしよ! そりやね、勝手に入った俺が悪いよ? でもさ、だからって

殺そうとしなくてもさ・・・」

ぶつくさ考えて辿り着いた答えは

???「すいませんでした!」

土下座で謝罪する事だった

妹紅がそれを見て溜め息を付いた

妹紅「・・・もういいよ。お前も輝夜に追われてたみたいだし・・・」

???「感謝します、もこたん様」

妹紅「もこたん言うな。で、お前名前は?」

名前、か・・・

『お前名前は?』

誰だよお前・・・

『名前が無い?』

そう名前なんて無い

いや、無かった

『じゃあ私が付けてやるよ』

余計なお世話だ

『そうさね・・・』

ふと顔も分からぬ彼女が笑う

???'「風切零・・・。それが俺の名前だ」

妹紅「！そ、そうか・・・。いい・・・名前だな・・・」

零「？」

気のせいだろうか

妹紅の顔が固まったような・・・

慧音「大変だ！空が！」

俺達が外に出ると空は紅色になっていた

零「紅い霧・・・？」

慧音「この霧・・・異質な物を感じるな・・・」

妹紅「ああ、このままじゃ人里の人間は外に出れないぞ・・・」

俺は足を動かした

慧音「待て！何処に行く？」

慧音が俺の肩を掴んだ

零「一つ聞く」

二人の頭に？が浮かんでいた

零「あの霧さえ無くせば人里の皆は外あるけんだよな？」

慧音「あ、ああ」

零「なら話は簡単だ」

妹紅「まさかお前！」

妹紅が声を荒らげた

零「ああ。乗り込んでやろうじゃねえか。この霧作つた親玉の元によお！」

東方紅魔郷

そーなのかー

あの後慧音と妹紅に反対されたが俺はそれを無視して人里を出ようとした

人里の八百屋のおっちゃんの話によると霧は最近現れた紅い館、紅魔館の方から来たらしい

零「て、言っても俺力何ぞねえからなあ・・・」

これからどうしようか悩んみながら紅魔館に向かつて歩いていると

??? 「ねえねえ」

零「？」

声をかけられた振り向くとそこには黒い服に赤いリボンで金髪の少女が居た

零「どうしたんだい？迷子か？人里はあっちだよ」

俺が人里を指差すと少女は首を振った

??? 「違うのだー」

零「え？違うの？」

??? 「私が言いたいのは・・・お前は食べていい人類かどうかって事なのだー」

零「……………へ？」

三人称視点

零が行った後慧音と妹紅は人里の入り口を固めていた

こういう時周りの妖怪は活性化し人里を襲おうと目論む

妹紅「……………」

慧音「どうしたんだ妹紅？」

妹紅「！な、何でも無いんだ」

紅い霧をポーつとみていた妹紅に慧音が声をかけると妹紅は我に返った

慧音「……………零の事が気になるのか？」

妹紅「へ!？」

慧音「ずっと空を見ているぞ。彼の安否が気になるんだろ？」

慧音の言葉に妹紅が複雑な表情を浮かべる

妹紅「あ、うんそれもあるけど……………（あいつが何故ここに居るのかの方が気になるんだよな）」

慧音「？」

妹紅「悪い慧音。私ちよつと行ってくる！」

そのまま妹紅は走っていった

慧音「お、おい！そつちは迷いの竹林・・・」

慧音をその場に残して

零視点

零「にやアアアアアアアアアア」

???「まてー！」

俺は今絶賛幼女に追われていた

零「いやいやいやいや！待てる訳ねえだろ！おらあまだ喰われたくねえよ！」

俺は叫んだ

すると幼女の足音が聞こえなくなった

後ろを見ると幼女は人里のうつ伏せで泣いていた

???「分かっているのだー・・・私の事を皆嫌っている事も私がこの幻想郷でいらぬ子なのも・・・」

俺は何も言えるはずが無かった

???「でも私は人を食べないと生きて生けない妖怪なのだー。どうする事も出来ないのだー」

それでも俺は幼女に近付いた

零「バカかお前は」

??? 「ふえ？」

俺は幼女の頭に手を置いた

零「お前のそれが修正つてなら俺が何とかしてやる。皆がお前を嫌うならいらねえ子つて言うなら、俺はその分お前と一緒に居てやる。お前はいらねえ子じゃないつて肯定してやる。だからもう、自分を卑下すんのは止めろ」

俺はまあ紅魔館に向かって歩き出した

零「あ、そうそう。どうしても我慢出来ねえなら噛む嫌いなら我慢してやるよ」

おれがそう言うといきなり頭に痛みが走り顔に水がたれた

手で水を触るととても真っ赤でありとても鉄の匂いが酷かった

普通なら見ることの無い光景の筈なのに何故か既視感があり頭を噛まれて血が出るなんてはじめての筈なのに何故かそんな気はしなかった

むしろそれが俺の『日常』のような気がしていた

アタイ！アイヤ！

さて、幼女ルーミアに案内されて紅魔館の前にある霧の湖のほとりまで来た
しかし如何せん湖が広すぎて回り道するのがめんどくさい

零「さてどうしようか・・・」

ルーミア「普通に歩けば言いと思うのだから」

零「だからそれがめんどくさいからどうしようか考えてんの」

やはり歩くしか無いのだろうか

そう考えていると

??? 「やい人間！」

零「あ？」

空から氷の羽？が生えた少女に声をかけられた

??? 「アタイはチルノ！この幻想郷最強の妖精だ！」

最強を名乗る幼女はいきなり手に氷を作り出して俺に飛ばしてきた

零「おお！氷を創れんのか！」

ルーミア「チルノは冷気を操る事が出来るのだ」

零「へえー」

俺、良いこと思い付いちやったかもしれない

零「なあチルノ。最強ならこの湖全部凍らせられるよな?」

チルノ「もちろん!アタイは最強だからな!」

そう言うのとチルノはカードを取り出した

チルノ「凍符『パーフェクトフリーズ』!」

チルノが叫ぶと湖が一瞬で凍った

零「す、すげえ・・・」

ルーミア「あれはスペルカードなのだー」

零「スペルカード?」

ルーミアが頷いた

ルーミア「スペルカードは博麗の巫女が作った人間と妖怪のいざこざを平等に解決させるルールの技みたいな物なのだー」

零「ほお・・・」

俺はチルノを見る

チルノはアタイ最強!と笑っていた

零「んじゃ行くか」

俺は凍った湖を渡り始めた

そして渡り終わった頃

零「で、何でチルノまで来てんの？」

チルノ「何か面白そうだしな！」

確かにチルノは強そうだが典型的なバカだと思いはじめた今日この頃

さてそろそろ門見えて来た

しかし門が破壊されている

零「何じゃこりや・・・」

色々問題は有るのだが一番問題なのはこの悲惨な状況でたって寝ているチャイナ服を着ていて帽子に龍とかかれた星をつけた女性がいる事だ

チルノ「あ！中国だ！」

見た目どおりすぎて驚いた

???「は！寝てません！寝てませんよ！」

女性はいきなり起きると周りを見渡した

???「・・・貴方がこれを？」

聞かれて俺は思い切り首を横に振った

???「あ、そうですか。ではお休みなさい」

女性がまた寝てしまった

つかの間の静寂が訪れた

零「……行くか」

チルノルーミア「……うん」

俺が門を通ろうとすると

???「て、行かせませんよ!」

零「いや、既に通してるだろこれ」

???「それでもです!腐ってもこの紅魔館の門番です」

零「ええ!?!お前門番だったの!?!」

???「逆に何だと思ってるんですか!私は正真正銘門番の紅美鈴(ホン・メイリン)です!」

俺はそれを聞いてルーミアを見る

ルーミアは頭を縦に振る

零「じゃ、じゃあ何?門番の癖に居眠りこいて挙げ句こんなド派手な侵入許しちゃつ

てんの?この中国……」

美鈴が涙目で赤くなる

美鈴「もう許しません!彩符『極彩颯風』!」

零「!」

美鈴が段幕を飛ばしてきて俺は何とかルーミアとチルノを引つ張つて避けた

美鈴「どうです! 入れる物なら入つてみなさい!」

零「・・・・・・・・」

怪我は無いようだがルーミアとチルノは氣を失っているようだ

零「君子危うきに近寄らず・・・・・・・・」

美鈴「?」

零「障らぬ神に崇り無し・・・・・・・・」

美鈴「何を・・・・・・・・」

俺はゆらゆら立ち上がつて美鈴を見る

零「全く・・・・・・・・ついてねえよ。お前!」

そして俺はニヤリと笑つて走つた

ムツキユンモヤシと小悪魔とPAD

あれから10分美鈴は顔を赤くして倒れていた

美鈴「ひ、卑怯ですよ！」

零「生まれたての子鹿みたいにぶるぶるして立てねえ奴に言われても怖くねえな」
俺はルーミアとチルノルール担いで門を潜った

紅魔館に入ると戦闘跡のようでお札やナイフがあちこちに転がっていた

零「……………」

辺りを見渡す

明らかに見た目よりも広い

零「ほんと幻想郷つとんでもねえとこだな」

俺はそのまま一階の探索を始めた

たまに建物が揺れる

門や玄関みたい誰かが戦っているのだろうか

そうこうしていると大きな扉が現れた

入ってみるとこれもまた荒れた図書館だった

俺はルーミアとチルノを壁際で寝かせて俺は辺りを散策した

やはり本がいつぱい落ちておりその全てが知らない文字である

零「この住民はいつたい何人だよ・・・」

そうブツブツ言っていると本に埋もれた二人の女性を見つけた

一人は紫パジャマの女性でもう一人は頭に羽を生やした女性だ

二人とも気を失っているようだ

零「揺れも酷いな・・・」

ここも何時潰れても可笑しくはない

俺はとりあえず本を束ねた長い紐を紫パジャマに結び背負い頭に羽を生やした女性を抱き上げえ図書館の入り口まで歩いた

零「こつからルーミアとチルノもか・・・」

俺は一度二人を下ろして羽を生やした女性を紫パジャマと一緒に紐に結んでルーミアとチルノを担いだ

零「お、重い・・・」

文句を言いながら廊下を歩いていると天井が崩れ落ちる

零「本格的にヤベエな・・・」

俺は急いで歩いたがそのとき今までで大きな揺れが怒った

零「!」

上の天井が崩れて来た

零（ヤベツ！これは死ツ「蓬萊『凱風快晴フジヤマヴオケイノ』!!」！）

いきなり瓦礫が潰れた

零「な、何だ？」

驚いていると地面に木刀が刺さっており柄には黑夜叉と描かれていた

俺は自然にそれを掴んでいた

妹紅「そのボタンを押せ！」

穴が空いた壁から妹紅が叫んでいた

零「これか？」

俺は柄に付いていたボタンを押した

すると木刀の先から黒い液体が出る

妹紅「押すと醬油が出る」

零「いるかアアアアアアあ!!!」

俺は木刀を叩き付けた

零「何なんだよこの機能！全然要らねえよ！」

また頭上に瓦礫が落ちてきた

妹紅「あ、いい忘れてたけど幻想郷じゃあ能力を持つてる奴がさらに居る」

零「ほおチルノの冷気を操る程度の能力つてのもか？」

妹紅「そうだな。私は老いることも死ぬことも無い程度の能力だ」

零「つまりは不老不死？」

妹紅の顔が明らかに渋った

妹紅「化け物と言って蔑んでくれても構わないよ。事実だしそんなの言われなれてるしな」

妹紅は苦笑いをする

零「・・・言わねえよ」

妹紅「え!？」

零「ここにはお前みたいなのがゴロゴロしてんのが普通なんだろ？ならんな事言ってもきりねえよ」

妹紅「本当にお前はその時から変わってないな」ボソツ

零「ん？何か言ったか？」

妹紅「いや、何も」

何か言ったような気がしたが気のせいだったようだ

咲夜「あの・・・」

咲夜が声をかけて俺達は咲夜を見た

咲夜「良さそうな話をするのは良いのだけどそろそろパチュリー様達を下ろしたら？」

零妹紅「?」

言われた事を理解するのに時間は要らなかつた

俺の背中には紫パジャマ事パチュリーと頭に羽を生やした女性事小悪魔は俺に背負われておりルーミアとチルノは両肩で担いでいた

零妹紅「あ」

??? 「フラン！先にあつちを片付けるわよ！」

フラン 「うん！御姉様！」

紫の方が赤い方にフランと読んだ

つまりは紫はレミアアだろう

四人が俺に段幕を放つ

妹紅はあとでしばらくとして今はどうこの状況を打開するかだ

??? 『貴方には剣が似合いますね』

誰だ？

俺に名前をくれた奴とは違う声

??? 『その技、カッコいいと思いますよ』

その技？

いったいどの技だよ

いや、分かってる

忘れていても体が覚えている

俺は木刀を右手で左脇まで持つてきた

そして体の中にある炎を木刀に移す感じで木刀に力を込めた

??? 『その技の名前、私が決めて良いですか？』

神のまにまにどんちゃん騒ぎ

起きたらとりあえず俺は暎夜に案内されてレミリアの元に来た

しかしながらこれは非常に気まずい

零（やべえよ！俺あの子倒しちやっただよ？きつとこれから報復されるんだ！）

レミリア「さて、言葉を交わすのはこれが初めてね」

最初に口を開いたのはレミリアだった

零「は、はい！それで御座いますね！」

レミリア「な、何でそんなしやべり方をしてるの？私は只お礼を・・・」

零「御礼参り!? ヤバイ。相当切れてるよあの人！」い、いえ！当然の事をしたままですから！」

レミリア「そんな訳にはいかないわよ！主として友とその従者を助けてくれた事にお礼も無いなんて・・・」

零「ふざけんなよ！なんなん貰ったら俺死ぬわ！）いえいえ！俺そろそろ帰らねえと慧音と妹紅が心配するんで！」

俺は立ち上がって部屋を出ようとした

レミリア「……………今日は夕方から異変解決の宴会があるわ
俺そのまま立ち去った

咲夜「……………よろしかったのですか？」

咲夜がいきなり柱から現れた

レミリア「ええ。彼ならもしかしたらフランの遊び相手になつてくれると思つたのだ
けどね」

咲夜「彼、宴会に来ますかね？」

咲夜の言葉にレミリアは笑つた

レミリア「来るわ。だって……………そう言う運命ですもの」

あれから歩いて人里の入り口に来た

零「あー疲れた。妹紅みたいに飛べたら一瞬なんだけどな……………」

文句を言いながら入ろうとすると

零「ふぎや！」

何かにぶつかった

見るとそれは人里を囲う塀で入り口はもう少し右だった

零「おいおい。酔つてないよな……………」

目を擦って見るとまた入り口が消えていた

その代わり今度は左に入り口がある

零「いったい全体どうなってんだよ・・・」

困っているとき笑い声が聞こえた

???「見て見てスター。あの人間の滑稽な姿」

零「・・・・・・・・」

スター「見てるわサニー。全く滑稽ね」

零「・・・・・・・・」

サニー「あの人間は死ぬまでここを彷徨続けるのよ」

零「・・・・・・・・」

スター「しかも私たちがしているとは知らずに延々と彷徨うの!」

零「・・・・・・・・」

サニー「何て滑稽!何て無様!」

二人の笑い声が重なる

零「あのさ・・・聞こえてるんだけど・・・」

声の聞こえる方にしゃべりかけた

サニー「な!気付いてる!?!ルナの力があるのに!」

スター「サニー！ルナなら向こうで転んでるわよ！」

見ると縦髪ロールがこけている

零「つまりこの件にあいつは関係ねえと・・・」

俺はそう結論付けると

声の聞こえる方に手を伸ばした

何かに当たった

どうやら頭らしい

零「よう。クソガキ。テメエら只で帰れると思うなよ？」

二人を捕まえるとうようやく本当の居る口が見えた

零「じゃあ行くか。公衆の面前で無様で！滑稽な！姿をさらしやがれ！」

俺は紐で二人を結んで引きずり出した

サニー「ギヤアアア!!!」

スター「鬼イイイイ!!!」

零「何度でも言いやがれ！こちとら疲れて今すぐにもベッドでゴロゴロしてえんだよ！なのにテメエらの下らないイタズラに俺の貴重な時間が消え去った！謝れエエエエエエエ！全俺に謝れエエエエエエエ!!!」

サ

ニー

ス

ター

・ ・ ・ ・ ・ 何で俺こいつと知り合いみたいに話してんだ・ ・ ・
??? 『ん？ 呑まないのかい？』

この状況で呑めるか

??? 『うくん・ ・ ・ でもこの死体の山はお前が作ったんだろ？』
え？

俺は下をみた

下は死体の山

あ、ああ、アアアアアアアアアアアア
!!!!!!

慧音「そろそろ出発する時間だな」

そう言えばレミリアも言っていた

零「これって俺も行かなきゃ行けないやつか？」

妹紅「何言ってるんだ。当たり前だろ？お前が異変を解決したんだから」

零「はあ」

てことで俺達は博麗神社に向かった

道中は険しい獣道があるわ階段は糞長いわで大変だった

零「はあはあし、死ぬ・・・」

着くと周りでは既に呑んでいる奴がいた

そいつはまた幼女で頭に角が生えている

酒を好み頭に角が生えている種を俺は知っていた

零「鬼・・・」

妹紅「お、良く分かったな。そう、あいつは鬼で幻想郷では山の四天王で古参の妖怪だ」

零「・・・」

それがあんな幼女なのか？と聞こうと思ったが幼女がこちらを見つめてきた

??? 「ん？お前は・・・！」

いきなり幼女が走ってきて抱き付いてきた

零 「え、ちよ！おい！って酒臭！」

この光景に俺、妹紅、慧音が驚いた

??? 「やつと見つけたよ！零！」

どうやらこいつは俺を知っているようだ

零 「あのくお宅どちら様？」

??? 「忘れたのかい？昔はあんなに私に甘えてたのに」

零（・・・フア!?何だと！俺はこんな幼女に甘えていたのか？とんだロリコンじゃ

ねえか！）

幼女は口を腕で拭くといきなり殴りかかってきた

零 「危ね！」

ギリギリ避けたが殴った所が抉れている

慧音 「萃香殿！止めてk」

慧音が萃香静止する前に萃香はまた俺に殴りかかり土煙が舞い上がった

妹紅視点

私は動く事が出来なかった

不老不死である私は死への恐怖など無い

むしろ死への憧れすらある

しかし目の前の鬼を見た時また死ぬ事を恐れた

例え不老不死だろうと結局は人間なのだ

鬼との力の差など歴然だ

そして目の前の記憶喪失の少年も「今は」只の人間なのだ

彼女の攻撃など受けたら塵も残らないだろう

妹紅「あ、あ・・・」

零が殴られて土煙が立ち何も見えない

ようやく煙が晴れるとそこで見たのは

零「おいおい、ずいぶんな挨拶だなこの野郎」

零は木刀で萃香の拳を受け止めていた

萃香「あいかわらず良い剣捌きだねえ」

零「だーかーらー！俺はアンタなんて知らねえって言ってるだろう、がッ！」

零が萃香を蹴り飛ばして後ろに跳んだ

萃香「ふーん・・・力は人間並み・・・なめてんのか？」

一気に殺気が増した

それは並みの人間なら直ぐ気を失う位の物だ

萃香「あのさー零の力が普通の鬼の三分の二つてのは知ってるけどさ、それでも鬼だ。人間より力は遥かに強いはず何だけどねえ」

零「は？鬼？何言ってやがる・・・」

零と慧音が驚いている

当然だ二人とも今まで零の事を普通の人間と思いこんでいたのだ

つまり

零「んな太閤名人が女子高校生探偵の兄でFBI捜査官の弟ですって言ってるようなもんだぞそれ！」

零が走って萃香が斬ろうとしてが萃香が霧になって消えた

萃香「私の能力、密と疎を操る程度の能力の前にはその攻撃は無意味だよ！」

辺りから萃香の声がする

零が辺りを見るとその後ろに萃香が現れて零を殴り零が血を吐いた

萃香「脆いねえ」

萃香は酒を呑みながら零の頭を鷲掴みして地面に叩き着けた

零「が！」

萃香「記憶が無いってのは知ってたよ。能力でどこでも見れるしね」

萃香が零の胸ぐらを掴んで森に投げ飛ばした

萃香「なら今から思い出させてやるよ。昔のお前を」

萃香が零に向かつていく

慧音「妹紅、零を助けるぞ！」

妹紅「……………」

慧音「妹紅！」

慧音の声に私はふと声が漏れた

妹紅「無理だ」

慧音「？」

妹紅「今のあいつは本気だ。私達じゃ勝てない……………」

慧音「！だからって！このままではアイツが！」

妹紅「……………」

それは分かっている

でも私は知っている

あいつは…………零は何時こんな状況に直面しそれを乗り越える

“あの時”もそうだった

あいつは私に生きる術を覚えてくれた

だからこそ私があいつが負けるとは思っていない

妹紅「慧音。あいつは負けない！」

慧音「……はあ。分かった……」

その時爆発が起きた

零視点

俺が鬼？

訳がわかんねえ

目の前の鬼は俺を鬼と言った

零（一体俺は……何者何だ？）

今はそんなこと考えている暇は無いのにな何故か考えてしまう

そうこうしている内にあの鬼は目の前に立ち手を伸ばす

零（そーういやあいつは俺に名前をくれた奴と同じ声だな）

萃香『良いかい』

まただ

またあの鬼の声だ

萃香『闘う時は相手の動きを見るんだ』

俺は萃香の腕を掴んだ

萃香「！」

萃香は腕を抜こうとするが抜けない

そして萃香はまた霧になった

萃香『そして・・・自分の能力（ちから）を理解するんだ』

俺は近くの空を握った

すると次第に霧が集まり萃香となった

零「逃げんなよ。第二ラウンドと洒落込もうぜ・・・名付け親」

そう言うのと萃香はニヤリと笑った

俺はそのまま萃香を投げ飛ばし立ち上がった

萃香「少しは思い出したかい？」

口の血を吐き出しまた萃香が殴りかかってきた

零「ああ、お前が俺の頭つてこたあな！」

萃香の拳を木刀で受けて足を掴んだ

萃香「じゃあ頭にこんな事して良いのかい？」

零「んな事いったら姉御だった誰かと喧嘩しまくってただろうが！じゃんけんと言う

名の喧嘩だろ！」

俺は萃香を木刀で地面に叩き着けた

萃香「それは華扇が喧嘩は駄目って言うから！」

今度は俺が殴り飛ばされた

萃香はそれに俺より速く飛び上空で俺を地面に叩き着けた

零「はあはあ」

萃香「私は怒ってるんだよ。零。お前は私たちを裏切ったんだ。先代博麗の巫女と人喰い妖怪と一緒にお前には自分の死を選んだ。紫がお前と先代、人喰い妖怪の気を消して回っていたのは驚いたね」

目の前が霞んで居て前がほとんど見えない

でも分かったのは

萃香「忘れられないに決まってるだろ！お前はっ！お前はっ！私達にとって家族同然何だ！」

目の前の少女が泣いている事だった

零「・・・・・・・・・・はあ」

俺は立ち上がって萃香に近づいた

零「何言ってやがる」

萃香「え？」

そして萃香の頭を撫でた

零「確かに昔俺はお前を置いて行つた（かもしれない）。でも今はここに居る。何時だつて俺はお前の事を大切な頭と思つてるからな」

萃香「うぐっ……」

萃香は目を擦つてこう言つた

萃香「……うん！」

それはまるで鬼の頭領などと言う面影が無く純粹無垢な只の少女のような笑顔だつた

宴会とこれから

泣きつかれてか酒に酔ってか萃香はその場で寝てしまった

零「たく、とんだ頭だよ。・・・そう言や俺ここに来てからほとんど餓鬼にしか会ってネエんだよな・・・」

俺は萃香を背負いながら博麗神社に向かい森を抜けると三人が俺を待っていた

二人は言わずもがな妹紅と慧音、そして三人目は赤が印象的な鬼だった

この場合鬼は萃香のような種族では無く例えとしての鬼だ

???「アンタら、これはどういう状況か教えて貰うわよ・・・」

慧音「れ、霊夢・・・零は何も悪く無いんだ！」

霊夢「ほお・・・」

まるで般若のような顔で慧音を睨み着けた

慧音「じ、実はだな・・・」

慧音がいきさつを説明してくれて何とか俺は無罪方面となった

霊夢「全く・・・萃香も何やってんのよ」

霊夢は俺の背中で寝ている萃香を呆れた顔で見ながら呟いた

俺も萃香を見たが何とも幸せそうな顔だ

霊夢「まあそんなことよりとりあえず賽銭を入れていきなさい」

もとよりそのつもりだったので俺は残りの財産千円の内五百円を入れた

まあ騒いでしまった訳だし迷惑料だ

後ろを見ると霊夢が驚いている

零「な、なんだよ？五百円じゃ不満か？」

霊夢「……………」

霊夢はいきなりブルブル震え出すと俺に歩み寄りガシツと肩を持った

霊夢「神様ですか！」

零「はあ!？」

霊夢「天下の五百円玉を恵んで下さるとは！これでしばらくは凌げるわ！」

霊夢の反応を見て妹紅が補足してくれた

妹紅「霊夢はいわゆる貧乏なんだ。神社がこんな場所だから人間の参拝客も少ないし良く妖怪が来るから妖怪神社って言われて人里の奴で来るのは慧音か鈴奈菴の店主か稗田家の当主かなんだ」

零「それでも賽銭位妖怪も入れるだろ？」

霊夢「ああそれなんだけどね……………」

「れーいーむー(れーいー)!!!」
? ? ? ? ?
既に五百円を掴み踊って居る霊夢の元に誰かが落ちた

零「なるほど・・・大体分かったわ」

落ちてきた人物を見るとそれは魔女服の少女・・・確か魔理沙だったか？

魔理沙「フウ・・・着地成功だぜ」

霊夢「どこがよ！見なさい！あんたのせいで家の賽銭箱がボロボロじゃない！」

確かに潰れていた

魔理沙「それよりだ！」

魔理沙が俺を見て辺りを見る

魔理沙「何でこいつが居るんだ？それにこの状況もこいつが起こしたのか？後何でルーミアはこいつの頭を噛んでるんだ？」

魔理沙は警戒していた

と言うか頭が痛いと思つてたらルーミアが噛んでたのね

慧音「だ、だからそれは・・・」

また慧音が説明してくれた

魔理沙「お、おう・・・何となく分かったのぜ」

こうして何とか誤解も解け宴会の準備を始めた

零「そろそろ皆集まってきたな」

ルーミア「そーなのかー」

見た所知り合いはチルノと紅魔館の一行、後三バカ妖精だ

そして俺はふと疑問に思った

零「なあルーミア。俺ってどんな姿してるんだ？」

ここに来てから四日がたった

それまで鏡を見ていないので自分の用紙が分からなかった

強いて分かるのは身長が大体160センチメートル位だと言う事だ

ルーミア「うくん・・・寝癖でボサボサでまるで子供のよな顔なのだー」

なるほど大体分かった

零「ありがとさん。さ、チルノの法に行ってきたな」

ルーミア「はーい」

ルーミアがチルノの方に向かい俺は縁側で酒を飲み始めた

・・・・・自身で大体17歳だと思っていた時と違うので楽だ

妹紅「皆と呑まないの？」

妹紅が隣に来て座った

零「酒一緒に呑める知り合いなんてお前か慧音位だろ」

俺は酒をまた盃に入れて呑む

妹紅「じゃあ彼処の八ツ目鰻の屋台で呑んだら？」

妹紅が指指す先には確かに屋台がある

零「まあつまみも欲しかったし行くか・・・」

俺が立ち上がると妹紅も立ち上がってどこかに行ってしまった

??? 「いらっしやい」

背中に鳥の羽が生えた少女がそう言った

零「?お嬢ちゃん一人?店主は?」

席に座ってそう言う少女が怒りだした

??? 「お客さん、店主は私! まあ初めてだから勘違いするのは分かるけど・・・」

零「あ、そうかい。そりゃ悪かったな」

俺はとりあえず八ツ目鰻を頼んだ

??? 「お客さんってチルノとルーミアが言ってた外来人?」

どうやらチルノの知り合いらしい

まあ子供だからチルノと知り合いなのは不思議では無いのだが

零「おお、そうだよ。もつとも元々はこっちに住んでたみたいだけど・・・」

???「へえー」

零「そう言やお嬢ちゃん名前は？」

今更だが聞いて見た

???「私はミステイア・ローレイ。夜雀の妖怪よ。気軽にミスチーって呼んでね」

そう言いながらミスチーは八ツ目鰻を俺の前に置いた

零「俺は零ね。まあ好きなように呼んでくれ」

ミスチー「じゃあ零さん、零さんが異変を解決したんだって？」

零「らしいな。どこで知ったんだ？」

ミスチー「それは・・・」

???「それはこの私、清く正しい射命丸文の文々。新聞です！」

今度は黒髪のミニスカでカメラを持った姉ちゃんが来た

文「取材良いですか！」

零「お、おう・・・」

八ツ目鰻を食べながら俺は文の質問に答えて行った

文「では先ずあの吸血鬼姉妹と霊夢さんと魔理沙さんを倒したと聞きました。あな

たつて本当に人間ですか？」

零「ああ俺もついさつきまでそう思ってたんだけどな、実は俺鬼らしいんだわ」

文「と、言うത്？」

零「ここに来た時にいきなり萃香に襲われてな、戦いの最中俺はあいつが頭を張ってたえーと……まあその中の一人らしいんだわ」

文「曖昧ですね……」

文は唸っていた

零「ミスチー、八ツ目鰻お代わり」

ミスチー「はい」

その間にお変わりを頼む

文「では次に貴方は外に帰りますか？残りますか？私的には残っていて欲しいですが……」

その質問に俺は少し考えて

零「外に帰ってもおらあ記憶ねえしな……元々はこっちに住んでたみたいだし残る事にしたよ」

文「そうですか」

ミスチー「はい、八ツ目鰻ね」

零「サンキュー」

俺はまた八ツ目鰻を加えた

文「では最後です。貴方はまた生活基盤ができていませんが何かやりたい事とかありますか？」

やりたい事・・・か

やりたい事・・・ね

気付けば俺は笑っていた

零「そうさな、耳の穴かっぽじってよおく聞いとけ！家事手伝いから、人探しまで何でもござれ！困った事が有るならここに来な！一事が万事、金さえ貰えば何でもやるよ。つて事で万事屋でもやるさ」

文「あつりがとうございました！では私はこれで・・・」

文が飛び去ろうとした時俺は文の手を掴んだ

零「まあまあ、取材に協力してやったんだ。おごつてくれるよな？」

文「あ、あやややややややややや・・・」

腹いっぱいになったのでまた酒を呑む事にした

零「カアアア！」

萃香はどうやら皆に自分の酒を吞ませ回っている

いる
チルノ、ルーミア三バカ妖精、後知らない二人はあちこち走ったり飛び回ったりして

慧音と妹紅は紫髪の少女とオレンジ髪の少女と吞んでいる

紅魔館組のところでは咲夜の料理にいろんな奴が群がっている

零「全く賑やかだねえ・・・？」

しばらくそんな光景を見ていると森に一本の道があつた

零「・・・・・・」

何故か俺の足は動いていた

しばらくして開けた場所に出た

辺りには気は無いが明らかに戦つた後が長い間放置されていた事は分かつた

そんな所にポツンと一つの墓があつた

名前も何も書いていない

俺は墓の前に座ると猪口に酒を入れて墓の前に置き自分の盃に酒を入れて吞んだ

??「貴方、何してるの？」

いきなり声をかけられた

俺は振り向かず口を開いた

零 「自分でもわかんねえわ」

??? 「これが誰の墓か知ってるの？」

零 「さあな。．．ただ何だろな。これを見た時懐かしくもあり悲しくもあつたが．．一番虚しさがあつたよ。まるで自分だけ取り残されたような．．」

??? 「．．．．．」

誰かは俺の後ろまで来た

俺は後ろ誰かに振り向く

傘を指した金髪の女性だった

??? 「申し遅れました。私は八雲紫。この幻想郷の管理をしていますわ。．．．幻想郷は全てを受け入れますわ」

俺は立ち上がって頭を書いた

零 「さよけ。んじゃあおらあ宴会にもどらあ」

俺は紫に手を降って戻った

紫 「．．．．．」

しばらく紫に見られていたとは知らずに．．

宴会に戻ると萃香が待っていた

顔が真っ赤である

萃香「零い！勝手に居なくなるなよお！」

零「酔ってるな・・・」

とりあえず何処かに運ぶか考えていると萃香が近付いて来た

そして萃香の瓢箪を啜えさせられた

萃香「呑め呑めエ」

零「ちよ！止めつ！アアアアアアアアアアアアアアアアアア!!!」

拝啓名も知らぬ両親様

この世界でバカな奴らとバカやるのが楽しくなつてきて居ます

もうしばしはこうバカやって過ごす事にします

万事屋零ちゃん活動篇

万事屋零ちゃんと三月精

目が覚めた

確か昨日は宴会で無理やり萃香に酒を吞まされてぶっ倒れたような気がする

零「二日酔いで頭痛え・・・」

どうやらここは博麗神社のようだ辺りを見ると倒れている奴が何人もいた

慧音と妹紅は帰ったようでない

置き上がろうとして違和感に気付いた腹に違和感がある

腹を見るとルーミアと萃香が寝ていた

零「おい、起きろ」

二人を揺すが起きない

零「・・・寝よ」

仕方無いので二度寝しようとするど頭に衝撃が走った

霊夢「何また寝ようとしてんのよ。起きたならこいつら連れて帰ってくれない？」

どうやら霊夢が頭を叩いたようだ

霊夢の手には暴れているチルノと三バカ妖精がいた

零「……俺コイツらの家知らねえぞ？」

霊夢「この三バカは神社裏の森の中よ」

零「チルノとルーミアはと萃香は？」

霊夢「萃香は地底でチルノは湖、ルーミアは……知らないわ」

何だそりやと思つたが口にはしなかつた

零「んじやあそこの三バカの家から行くか……」

俺がそう言うのと霊夢は三バカとチルノを放した

サニー「誰が三バカよ！」

零「お前らだよ！人里の入り口で迷わせやがつて」

霊夢「へえ、あんたらそんな事やってたの？」

霊夢が怒気を孕ませて言ってきた

スター「ち、違うのよ！これは全部サニーの案で私たちは利用されただけなの！」

ルナが頭を縦に振つた

サニー「それにその人間に引き摺られてからはやって無いわよ！」

霊夢「あら、あんたが退治してくれたの？」

零「まあ疲れててムカついてたしな。ほら行くぞ」

三月精『アアアアアアアア!!!』

今は森を歩いている

俺が前を歩いて後ろを三バカが歩いている感じだ

サニー「ちよつと！どうすんのよ！」

スター「安心して！私が助けて上げる！」

サニー「いやあんたも助けて貰う側！」

スター「そんな事無いわ！きっと私が助けて上げる！だから安心して！」

スターは明るい顔をして輝いているが対してルナは暗い顔をして辺りが暗くなっていた

ルナ「どうせ、皆死ぬんだ」

サニー「!？」

スター「諦めたら試合終了よ！某バスケ漫画でもそう言ってたでしょ！」

ルナ「何が辛いつて希望を持って死んで行く事よね」

サニー「何か交互にブラックな事挟んでくる奴がいるんだけど！」

零「おい、五月蠅いよ」

俺はいい加減の五月蠅さに俺は三人を注意する

スター「惑わされなさい！」

ルナ「スターの戯れ言に？」

サニー「ねえ何してるの二人とも！何で天使と悪魔の囁きみたいになってるの！」

サニーが叫ぶと

スター「いいえ、私でもルナでも無い」

ルナ「そして私でもスターでもある」

スタールナ「そう、全ては白でも黒でも無い。真の闇へと返る」

二人が融合して真っ黒になった

サニー「結局ただの真っ黒に妖精になったアアアア!!!」

零「だからうるせえつつってんだろ!？」

後ろを見ると知らない妖精とサニー

零「おいサニー、残り二人は？」

サニー「目の前の妖精よ！いいえ、あれは……」

さつき妖精と紹介した事は訂正しよう

明らかに妖力が以上だ

これじゃあ……

零サニー「狂気の影……」

しかも融合した、だ

おそらく今の俺達には勝てない

零「逃げるぞ！」

俺はサニーの手を引つ張った

サニー「嫌だ！」

しかしサニーは動かなかつた

零「サニー！あんな奴と戦つたらお前は一回休みじゃすまねえぞ！」

サニー「それでもよ！私はスターとルナのリーダー！サニー・ミルクよ！二人を置いて逃げられる訳が無いじゃない！」

サニーが俺に向かって叫んだ

その後ろで二人の影がサニーを潰そうとしていた

零「！サニー！」

サニー「え？」

サニー視点

殺られる！

私はそう思った

目を瞑って思ったのは何時も皆としていた事の数々

チルノに熱湯をかけたリグルをゴキブリの妖怪って嘘ついたりだ
たまに人里の外にいる人間にイタズラをしたりもした

サニー（もう・・・二人とイタズラすることも笑う事も出来ない・・・）
もうすぐ来る死に恐れた

しかし一向に来ない

恐る恐る目を開ける

そこに居たのは今まで逃げようと提案していた人間だった

サニー「な、何で・・・」

私が尋ねると人間は笑った

零「霊夢の依頼はお前から全員を家に送り届ける事だ。一人でも欠けちゃあ意味がねえ
んだよ！だから逃げろ！逃げて霊夢に伝える！」

零は真剣な顔つきに戻ると影を見た

何故この人間は笑って居るのだろうか

何故さつきまで逃げると言っていた彼が闘って居るのだろうか

この質問に私はある答えを導き出した

彼は自分を犠牲にしても一度護ると決めた者は護り通すのだと

でもそれで本当にいいのか？

いいわけが無い

だから私はこう答えた

サニー「断るわ！」

零「!？」

零が驚いた顔をした

零「何言つてやがる！こんなのと戦つても死ぬだけだ！」

サニー「それでもよ！さっきも言つたけど私はリーダーで二人の家族よ！」

それを聞いて零は目を閉じた

零視点

サニーの言葉を聞いた時俺はサニーの事を勘違いしていたらしい

サニーは弱い

しかしサニーは逃げたりしない

サニーは確かに力は弱い

しかし心は強いのだ

零「たく、弱いのは俺だな・・・」

サニー「？」

俺は自分の両頬を叩いて笑った

零「うし！じゃあ二人であいつらを助けようぜ！」

サニー「・・・ええ！」

また影が向かってきた

俺とサニーが見た

零「さあ来い！イタズラ好きなバカ餓鬼は・・・」

サニー「私を差し置いてバカするバカな家族は・・・」

零サニー「俺（私）達が説教してやる！」

そう叫ぶと目の前が光った

光に触ると一つのカードが現れた

零「何だこれ？」

サニー「これはスペルカード!？」

零「それってチルノのパーフェクトフリーズみたいな奴か？」

俺の言葉にサニーが頷く

サニー「たぶんこれは二人で一人のスペルよ。だから一緒に詠むわよ！」

零「分かった！」

サニーに言われて俺はスペルカードを掲げて叫んだ

零サニー「憑依『太陽の妖精』!」

俺とサニーが輝いて一つになった

零『おいおい、どうなってるの?』

どうやら髪の毛がオレンジ色になり背中に羽が生えていてまるでサニーのようだ

装飾品までサニーになっている

しかも声が俺とサニー同時だ

簡単に言えばこれはヒュージョンだな

サニー『私零と一緒にになったの?』

零『みたいだな・・・』

影が段幕を放ってきた

俺はそれを避けた

サニー『私に任せなさい!』

そう言う俺の体が透明になる

零『おお!』

サニー『まだまだだ!日符『ダイレクトサンライト』!』

サニーのスペルが影に当たり影が倒れた

零『すげえぜサニー！』

サニー『そ、そう？／＼／＼』

零『アア！』

俺は自分の木刀を空に掲げた

零『ちよつとお前の力借りるぜ！』

そしてまた目の前にスperlカードが現れた

それを取り俺は叫んだ

零『結界『仲良し三月精・陽』！』

影の下に太陽と月と星が重なった印が出る

それが光ると影が上から崩れ始めた

それが全て崩れるとスターとルナが降りてきた

俺とサニーも分離して二人に近づく

零『二人とも大丈夫そうだな』

サニー『そうね・・・よかった・・・』

そう言いサニーが泣き崩れた

俺はサニーが泣き止むまで隣で座る事にした

万事屋零ちゃんと小さな百鬼夜行

無事に三月精の面々を家に送った

何故かサニーが寂しそうだったので撫でてあげたら元気を出して入れた

やはり子供は元気が一番だ

今はとりあえず博麗神社に向かっている訳だが歩いている間に先ほどの事を考える事にした

先ず何故スターとルナがああなったかだ

正直見当が付かない

しかしこれが他でも起こるとしたら大変だ

これは異変なのかもしれない

後で霊夢に聞いてみよう

そして次

俺とサニーが合体した事だ

今憑依のスペルカードを見ても真っ白なのだ

サニーのはそのままだったのだが謎だ

そして何故かスターやルナのスペルカードも出てきた事だ

こちらは影を倒した時に出たのかもしれない

そして三つ目

いつの間にポケットに入っていた

三月精と萃香のメダルだ

何だろうこれでウオツチツチでもすれば良いのだろうか

いやしかし昔は時計にメダルを入れたら召還するって感じでキャラも子供向けだった
でも今を見ろ

学園物にシフトチェンジしちゃってるしそのちよつと前は子供トラウマ待った無し
だった

まあ三月精のメダルはともかく萃香のメダルが何故あるのかは気になる所だ

零「ダアアアア！考えたってわっかんねえ！止めだ止め！」

こうして俺は考える事を放棄した

三人称視点

ここは幻想郷で最も猫が集って居る場所

そして幻想郷の管理人八雲紫、その式八雲藍、またその式橙が住んでいる結界で隔離された場所マヨヒガでとある二人の会話があった

???「紫様、今回現れた影が零によって討伐されました」

一人は九つの尻尾を持つ妖狐八雲藍

紫「・・・そう」

そしてその主、八雲紫だ

藍「紫様、どうして彼を幻想郷に連れ戻したのですか？」

藍の質問に紫はそうねえと言った後こう言った

紫「藍、貴女は彼の事覚えてる？」

藍「はい、彼は命の恩人です。忘れる何て考えられません」

紫「でも私は貴女を含めた幻想郷の住民から彼の記憶を奪ったわ」

紫の言葉に藍は黙ったまま聞く

紫「でも幻想郷の実力者には抵抗されてね。忘れさせても直ぐに思い出していたわ。これが何を示しているか分かる？」

藍「それは・・・」

藍は答えられなかった

紫「彼はこの幻想郷に影響を及ぼすわ。それは良い影響かはたまた悪い影響かは分か

らない。今回の異変は外が関わっている。結界の調整で私も霊夢も出ない今彼が必要なの。だから私は今回は彼が良い影響を及ぼしてくれるって信じる事にしたの」

藍「紫様……」

紫が藍に振り向く

紫「だから藍陰ながらでいいから彼を手助けしてくれる？」

紫の頼みに藍は頭を下げた

藍「勿論です。私は貴女の式です。それに私は……」

藍が言い淀み紫が笑った

紫「期待してるわ」

零視点

博麗神社に戻って来た

零「？霊夢が居ねえな……」

萃香「霊夢なら今は人里に行つてて居ないよ」

霊夢の代わりに向かえてくれたのは巫女服姿の萃香出会った

萃香「いやあ、昨日は楽しかったねえ」

零「俺は途中からテメえのせいでぶつ倒れてたよ！」

霊夢が居ないので仕方なく俺は縁側に座った

チルノとルーミアは庭で遊んでいる

零「たく、本当に餓鬼は気楽で良いねえ・・・」

萃香「それは私にも言ってるのかい？」

零「さてね」

萃香「それはそうとさつき紫の所の式が来たんだよ。しかも零目的で」

零「ほお・・・」

俺は掃除している萃香を見ながら続きを待った

萃香「人里にお前の店を建ててくれるってさ」

零「なるほど・・・」

俺は縁側から立ち上がって階段まで歩いた

零「うし！行くぞ餓鬼共！」

ルーミアチルノ「はい（なのかい）」

ルーミアとチルノが走って俺の先を行ってしまった

俺はそれでも普通に歩いて俺は鳥居で止まり萃香を見た

零「萃香！」

萃香「ん？」

零「その服、似合ってるぜ！」

萃香「え!?! / /」

そのまま俺は後ろ向きに手を降って階段を降りた

萃香「・・・まったく・・・何時になってもその天然は治って無いね・・・」
そう言つて萃香は空を見上げた

万事屋零ちゃん⑨フレンズ（前編）

人里に降りて来て最初に慧音の家に向かった

チルノ「なあなあ、何でけーねの家に行くんだ？」

零「あ？んなもん今まで世話になったからだよ」

ルーミア「そーなのかー」

零「そうなの・・・ところで・・・」

俺は二人を見た

零「何で俺の手握ってんの？」

二人が手を握って放してくれないのだ

周りから変態だのロリコンだの

しまいには「お母さん、あの人は？」「し！見てはいけません！」何てテンプレな会話まで聞こえる

そして一度無理矢理手を放したら二人が落ち込んで今度は周りからカスだのクズだの鬼畜だの畜生だの自衛団に言っ来ていだの言葉が聞こえた

零「ねえ泣いて良い？もう君たちが手を繋ぐせいで別の物に繋がれそうになってんだ

けど・・・独房の鎖に繋がれそうなんだけど！」

ルーミア「そーなのかー」

零「そーなのかー・・・じゃ、ねえだろ！何だテメえら、さつきからニギニギニギニギと子供の弁当で握り飯つく作ってるお母さんですかこのヤロー！」

俺は二人から手を抜いて歩こうとした

チルノ「待て！あたいは零の手を握って最強になるんだ！」

ルーミア「そーなのだー。もつと一杯握ってお腹一杯食べたいのだー」

零「んな理由かよ！それ吹き込んだのは誰だ！」

チルノルーミア「文（なのだー）」

あのクソガラスは何を言っているのだろうか・・・

今度会ったらしばき回してやろう

そう考えながら俺は歩を進めた

その時地面が揺れた

轟音も聞こえて人里内部で煙も上がっていた

??「チルノちゃん！」

その煙のしたからエメラルドグリーン製の髪で青い服、透明な羽を生やした少女が飛んできた

チルノ「大ちゃん！」

零「大ちゃん？」

俺がルーミアに聞くとルーミアが口を開いた

ルーミア「大ちゃんは大妖精って名前なのだよ。チルノの友達でお目付け役なのだよ」

大妖精「はい、よろしく御願います。じゃなくって！

チルノちゃん！大変なの！」

大妖精がチルノを揺する

零「お、落ち着け落ち着け……。一体どうしたんだよ？」

大妖精「じ、実は……。私今日は慧音先生の授業を受ける日で……。それで私ミスチーとリグルと一緒に寺子屋に向かったんです。それで途中からいきなり二人が暗くなつて……。つて何処に行くんですか!？」

この状況を俺は知っている

だからこそ知らぬ間に走っていた

あれが人里で暴れば被害は計り知れない

朝ははスターとルナが暗くなりいきなり狂気の影となつた

これがミスチー建ちにも起こっているのだとしたら最低一体はいるのだ

零「だぁもお！まだ憑依の力すらまともにならなかってねえのに！くそつたれ！」
こうして俺は人里の為助けてくれた慧音と妹紅の為に走った

万事屋零ちゃん⑨フレンズ（後編）

幻想郷縁起

幻想郷縁起とは代々稗田家が人間の生活の安全を確保するために妖怪等の能力や実態、または幻想郷における危険地区を記録し、理解や対策の啓蒙、準備の為の知識伝播をする為に書いた物である

そこには代々妖怪退治を生業とする歴代博麗の巫女の事についても事細かに記されている

慧音「そして先代……12代博麗の巫女は歴代で最も闇に長けており博麗奥義の夢想転生では闇を使う、か。阿求、何だこれは？」

寺子屋に居た慧音は阿求に渡された一枚の紙を見て阿求に質問した

阿求「……………」

慧音「阿求？」

阿求「実は……それは私が始めて書いた幻想郷縁起の一部なんです」

慧音「一部？」

阿求「はい。慧音さん、私の能力を覚えていますか？」

慧音「一度見たものを忘れない程度の能力だろ？」

阿求「……覚えて無いんです」

慧音「え？」

阿求「先代博麗の巫女の事も、私が最初に書いた幻想郷縁起の内容も……」

慧音「……」

しばらく慧音も阿求も何も言えなかつた

所変わって俺は人里の寺子屋付近に居る

そこに居たのは二体の影腹の辺りに人の上半身がある雀と首から上が虫の影だった

雀がミスチーで虫がリグルだろう

二体がこちらを見るといきなり二体が襲ってくる

ミスチーの影が上空に飛び急降下で鋭い爪を俺に向ける

零「グッ！」

俺は木刀でそれを受けたが少し掠り頬から血が流れている

零「チ！」

舌打ちをして後ろに引いたが足が着いた瞬間にリグルの影が下から出てきて体制を崩された

更に追い討ちで頭突きで地面に叩き付けられた
零「ガッ！」

血を吐いて地面に転がった

零（ヤベエ・・・さすがに、キツイ・・・）

目の前が霞んでいる

周りの音も聞こえなかった

誰かが前に立った

誰だろう

見えない

??? 「~~~~~！」

何言ってるんだよ・・・

誰かが影に殴られて俺の後ろに飛んだ

何やってんだ！

早く逃げろ！

しかし誰かは逃げない

??? 「~~~~~！」

また影に向かって行く

???（聞こえるか？）

聞き慣れない声が頭に響く

???（私は八雲藍。紫様の式神だ）

そうかい

んで目の前で戦ってるのが誰なのか教えてくれんかい？

藍（氷精だ）

！チルノの野郎何やってやがんだ！

サニーと言いいチルノと言いい状況把握も出来ねえのかよ！

藍（そう言ってるやるな。アイツはお前を助ける為に戦ってるんだぞ？）

.....

藍（どうした？）

どうしたもこうしたもあるか！

俺も戦う！

藍（どうやって？お前は今朝から戦い通して体は既に限界だ。これ以上やればお前は

死ぬぞ？）

は！んなもん知るか！自分助ける為に命張ってる奴に自分も命賭けずにどうするっ

てんだ！

藍（・・・・・・・・・・）

・・・・・・・・あの・・・・・・・・

藍（ん？）

俺のスペルカード真っ白になってんだけどどうにかならない？

藍（・・・・・・・・・・はあ）

俺はゆっくり立ち上がった

チルノ「零!？」

零「チルノ！やるぞ！」

チルノ「お、おう？」

俺の白いスペルカードが光りチルノの前にスペルカードが現れた

零チルノ「『憑依』⑨『妖精』!」

俺とチルノが光だし一つになった

チルノ『うお！何だこれ？』

俺が自分を見ると背中に氷の羽

服もチルノとサニーのチルノ版だ

しかし違ったのは木刀が氷で出来ていた

零『チルノ！スペルだ!』

チルノ『え？あ、うん！凍符『パーフェクトフリーズ』！』

チルノのスペルが二体に当たって二体が凍った

零『よし！結界『アイスフェアリー』！』

凍った二体に氷が刺さった

俺とチルノが光ってまた別れた

そして氷が砕けるとミスチーの影が居なくなりミスチーが出た

しかしリグルが影は腹に穴が空いて居るのにまだ動いている

零「な！」

藍（白紙のスペルカードにメダルをかざせ！）

藍の声がまた頭に響く

俺は言う通りに萃香のメダルをカードにかざした

するとカードが光だしカードにまた何か書かれていた

零「……………」

俺は精一杯息を吸って叫んだ

零「憑依『小さき百鬼夜行』！」

すると俺の頭に萃香の角が生え萃香の腕着いて居る鎖が腕に着いていた

藍の話によるとこれはメダルの中にある本人の力を憑依させる物らしい

零「酔符『鬼縛りの術』！」

霧がリグルの影の動きを止める

零「これで最後だ！ 鬼符『大江山悉皆殺し』！」

力を腕に集めて影を殴る

すると影がボロボロと溢れそこからリグルが現れた

俺は憑依を解除するとそのまま倒れた

真実の欠片

ここは何処だ？

暗い闇だ

次第に周りが見えてくる

そこに人影が三つ

俺とルーミア、紫だ

三人は隙間から何かを見ている

俺も見ようとするが見えない

しかししばらくしてルーミアが崩れた

崩れて現れたのは大量の札だ

俺は目の前の俺を見る

零『紫……』

紫『……何かしら？』

零『俺を……殺してくれ』

零「ハッ！」

俺が起き上がると頬から水が流れた

外を見ると竹林がある

外に出てみようと思ふと足を動かそうとしたが何か重さを感じた

見るとルーミア、チルノ、大妖精、ミスチー、リグルが寝ている

零「……（何だこれ!? いやいや! いやいやいや! え? 何? 何でコイツら俺の上で寝てるの? まさかそう言う事なの? いや、待て! 良く考えるんだ俺! 俺もコイツらも服を来ている! よって何も無い! うんそうだ! そうに違いない!）」

俺が立ち上がろうとすると銃声が響き横で煙が上がっていた

??? 「もお、駄目じゃないですか!」

そこには指を銃の形にした笑っているのに笑っていないウサミ制服少女がいた

??? 「師匠に貴方が起き上がろうとしたら止めてくれって言われてるんです!」

零 「止めてくれって何? 息の音?」

とりあえずこのままではまた撃たれかねないので布団に寝転がる

??? 「私は鈴仙・優曇華院・イナバよ」

零 「あ、俺は……風切零さんですよ?」 お、おう?」

鈴仙は笑つてが正直怖い

零 「な、何でそんなに怒ってるんだ?」

鈴仙「怒ってませんよ？」

零「え？いやだつてじゃあ何でそんなに殺気立ってんの？」

鈴仙「実は着いついこの前家の姫様が覗きにあつたらしくて……」

鈴仙の耳が垂れる

零「……」

しかし俺はあることを考えていた

それはここが竹林と言う時点で気付くべきだった

零（ヤベエ……それ完全に俺じゃん！絶対バレてるよ！

あの目は俺を殺そうとしてる目だよこれ！）

鈴仙（やつと……やつと会えました！もう絶対に何処にも行かせません！）

零「えつと……俺そろそろお暇したいんだけど……」

鈴仙「駄目です」

なんとも非情な一言だ

零「でもほら、俺元気だし……」

鈴仙「駄目です」

……

もう諦めよう

ところで……

零「……コイツらどうしよ……」

鈴仙「寝かせてあげましょう」

優しいなと思いつつながら俺はまた寝転がる

鈴仙「じゃあ私はご飯を作つてきますね」

零「い、いや悪いって！そんなのそれが……」

言いきる前にバンツと言う音が出た見ると鈴仙が指を銃の形にしていて指が指している所では畳に穴が空いていて煙が上がっている

零「………お願いします……」

鈴仙「はい！」

鈴仙は満面の笑みで出ていった

零「何だったんだ？」

俺はただそれを見つめるだけだった

悪戯兎と月のニートと月の頭脳

鈴仙が行って俺は暇になった

零「・・・コイツら何時まで寝てんだよ・・・」

俺は皆の頬をプニプニしたり頭をナデナデしたりする

すると反応が面白い

手を握ってきたり手を退けたりだ

こうして続けていると

??? 「ウササ、これは面白そうウサ」

零 「あ？」

声の聞こえた襖を見るとそこにはウサミミを生やした幼女がいた

??? 「寝てるのを良いことに触りまくってるウサか？良い性格してるウサ」

零 「そう言うお前はそれをこっさり見て面白そうとか良い性格してんな」

??? 「分かってる事ウサ」

目の前のウサギは笑いながらこちらに歩いて来る

??? 「私 は て る。 因 幡 て る ウ サ」

てゐは俺の横に座った

てゐ「優しい私から一つ忠告ウサ」

? 優しい? 何かの間違いではないのか?

てゐ「・・・お前の考えは読めるウサよ。」

おつと失礼

てゐ「はあ・・・鈴仙とお師匠様、姫様には気を付ける事ウサ」

そう言うとしてゐはそのまま立ち上がり出て行ってしまった

とりあえずチルノ達も寝てる事だししばし探検しよう

俺は立ち上がって縁側に向かった

やはり竹林だ

??? 「ああもう! 誰よバナナ置いたの! あ、私だった・・・」

聞き覚えのある声に俺は動きを止めた

??? 「・・・来たわスター!」

どうやら声の主はマ○オカー○をしてるらしい

零「いや、待てエエエエエエ!!」

俺は襖を蹴飛ばして部屋に入った

輝夜「何!?!」

前の襖から赤と青が印象的な変な服を来た女性がいた

輝夜「永琳！そいつを止めて！」

永琳「え!?!でも姫様、その人は・・・」

輝夜「良いから！早く！」

永琳と呼ばれた女性がスベルカードを取り出した

永琳「天丸『壺中の天地』！」

目の前から段幕が飛んでくる

木刀もないので書き消す事も出来ない

これは死んだ、そう思ったとき

???「凱風快晴『フジヤマヴォルケイノ』!!!」

聞き覚えのある声が聞こえたと思うと目の前の段幕が炎の鳥で書き消された

???「大丈夫か!？」

俺は声の主を見る

そしてこう叫んだ

零「おう！妹紅！」

妹紅（不老不死）と輝夜（不老不死）と零（不老不死）

輝夜「あら、誰かと思えば私が帝に渡した蓬萊の薬を勝手に飲んだ大罪人じゃない」

妹紅「それはこつちのセリフだ！ニート！」

輝夜「私はニートじゃないわよ。私は姫よ？働かなくても大丈夫なの」

妹紅と輝夜が睨み合う

零「それってニートなんじゃ・・・」

輝夜「うるさいわよ！」

そのまま二人が飛んで何処かに行ってしまった

零「・・・」

永琳「家の姫様が迷惑かけたわね」

俺が呆然とそれを見ていると永琳が口を開いた

零「いやまあ悪いのは俺だし。それに・・・」

俺は二人が飛んで行った方向を見る

微かに爆音やレーザーの音が聞こえる

零「あいつらは互いが不老不死だと知ってんのに殺そう

としての。仲の良い証拠さね」

永琳「そう・・・ね」

永琳もそちらを見る

??? 「見つけました！」

そうこうしていると声をかけられた

永琳「あら、優曇華」

そこに居たのは鈴仙だった

鈴仙「私、言いましたよね？動いちゃ駄目だつて・・・」

鈴仙は目のハイライトが消えていてゆらゆらとこちらに歩みよってくる

零「待て待て待て！助けて！HELP ME えーりん！」

俺は永琳に助け船を求めるが・・・

永琳「・・・頑張つて・・・」

零「ああああああああ」

永琳は目を反らして俺を見捨てた

世の中は非情である

鈴仙「さ、戻りますよ！」

鈴仙が俺の服の首裏を掴んで引つ張る

俺は抵抗するがやはり力は負ける

しかし次の

鈴仙「全く……確かに零さんは不老不死で再生力も高いですけど……それでもやっぱり心配なんです！」

鈴仙の言葉に俺は抵抗を止めた

零「今……何て？」

鈴仙「え？心配って言いましたけど？」

零「違うそこじゃねえ！その前だ！」

俺は少し強めに言ってしまった

鈴仙「……不老不死、ですか？」

そこだ

零「俺が……不老、不死？」

俺の言葉に鈴仙が頷いた

鈴仙「はい。零さんは姫様や妹紅さんを一人にしないために自ら蓬萊の薬を飲みました」

永琳「ええ。その薬は言わば呪いよ。私の作る薬でも解く事は不可能よ。だからこそ貴方は自ら不老不死になって彼女達を殺す手段を考えようとしたのよ」

俺はあまりの事に絶句した

鈴仙「その矢先です。零さんは先代博麗の巫女と共に失踪しました」

また出た

先代博麗の巫女

萃香も俺が博麗の巫女や人喰い妖怪と一緒に死を選んだと

その時俺は先ほどの夢を思い出した

ルーミアだ

きっとその人喰い妖怪はルーミアで間違いないだろう

では何故俺もルーミアも生きている

俺は頭をボリボリ書いた

零「じゃ、じゃあ何だ？俺は人間で鬼で不老不死？訳わかんねえ……。俺は……。何

なんだ？」

永琳「今思い出さなくて良いの。ゆっくりと思いついていけばいいよ」

そう言うのと永琳は俺の肩に手を置いた

五つの難題

あれから部屋に戻った

するとさつきまで寝ていた面々が起きておりスプーンや箸を持っている

鈴仙の話によるとどうやらリア充しかすること許されぬあの『あーん』をしてくれるらしい

しかしそんなのされたら恥ずかしくて死ぬるので伝えると鈴仙がまた撃つて来たので俺はそれに甘んじることとなった

そしてご飯を食べ終わって俺は今寝転がっている

零「……なあルーミア」

ルーミア「何なのだー？」

零「お前つて紅霧異変の前から俺の事知ってたか？」

俺はお腹の上で寝ているルーミアに聞く

ルーミア「知らないのだー」

零「だよな」

やはり勘違いなのだろうか

鈴仙「では、何かあったら言ってくださいね」

零「おお」

そのまま鈴仙は部屋を出ていき俺は天井の木目でも数える事にした

しばらくして襖が開く音がした

起き上がって襖を見るそこにはボロボロの服を着た輝夜が居た

零「えつとね、確かに俺間違えて覗いたかも知れないよ？でもね、昼から誰か風呂に入ってると思わないわけで・・・その・・・すみませんでした・・・」

俺は頭を下げた

しかし輝夜はこちらに近付いてくる

殴られると思ったがこれは仕方ない事なので受け入れる事にした

しかし予想とは裏腹に輝夜は俺に抱き付いた

輝夜「お帰りっ・・・なさいっ・・・」

しかも泣きながらだ

零「ちよちよっ!？」

この状況をどうにかすべく俺は打開策を考えたが何も思い付かない

輝夜「永琳から聞いたわ。貴方記憶を失くしているのでしょ？」

零「・・・・・・・・・・・・・・・・」

輝夜「失踪したのも記憶を失くたのも誰かを守った代償だって私は信じてるわ」

零「そ、それは嬉しいんだけどそろそろ襖閉めてくれない？寒い・・・」

そう外では今雪が降っている

・・・？雪が降っている・・・？

輝夜「気付いた？」

零「なあ、今つて四が・・・卯月だよな？」

輝夜「ええ」

零「じゃ、じゃあ何で外じゃ積もる位に雪が降ってんだ？」

俺が聞くと輝夜がニヤリと笑った

輝夜「私は輝夜。平安時代、絶世の美女として名を馳せた月の姫。私を訪ねる者は必

ず私の難題に答えないとね」

輝夜のウインク

滅茶苦茶嫌な予感がする・・・

輝夜「てことで五つの難題第二題目！この現象を止めてきて！」

やっぱりだ

無茶難題、それが輝夜の最大の暇潰しなのであった

東方妖々夢

月の兎と冬の象徴

朝になった

俺は皆が寝ている内に身仕度を整えて部屋を出た

玄関まで行き扉を開く

鈴仙「行くんですか？」

いつの間にか後ろには鈴仙が居た

零「ああ。お前んとこの姫さんにこの異変解決してこいつで難題出されちまったしな・・・」

俺の言葉を聞くと鈴仙はため息をついた

鈴仙「じゃあ私も行きます！」

零「はあ!？」

あまりの事にすつとんきような声が出た

鈴仙「私だつて零さんに助けて貰いました！次は私が助けたいんです！」

今の鈴仙は息は荒いし顔も赤い正直風邪なんじゃないかと思う

零「風邪引いてる奴連れて行くほど俺非情じゃねえよ……」

鈴仙「か、風邪じゃないんです！ちよつとその……」

零「？まあ風邪じゃなきゃ良いんだ。んじや行くぞ！」

俺は歩き始めた

鈴仙「……はい！」

迷いの竹林は鈴仙のお陰で迷わなかった

しかし途中のてゐが仕掛けた罠が大量に俺達を襲った

零「はあはあ、てゐの野郎幾つ罠仕掛けてやがんだ……」

てゐに恨みを込めそう呟く

鈴仙「す、すみません……」

零「ま、良いや。とりあえずどつちに向かうか……」

看板には三つの4つの矢印と4つの地名が書いている

零「北は人里で南は太陽の花畑。東は博麗神社で西は魔法の森か……」

鈴仙「はい！」

俺が悩んで居ると鈴仙が手を上げた

零「元気でよろしい。鈴仙君」

俺が鈴仙の名前を呼ぶと鈴仙は手を下げて前に出た

鈴仙「魔法の森に行きましよう」

零「その心は？」

鈴仙「博麗神社に行っても今はもぬけの殻だと思えます。それに太陽の花畑はとても強い妖怪が住んで居るって噂です。人里は既に薬を売りながら情報も手にいれていきます」

零「なら魔法の森が無難、か」

鈴仙「その通りです！」

言いたい事が俺に伝わったからか何時も少し垂れている鈴仙のウサ耳がピンと立っている

本当に分かりやすい

俺は鈴仙を撫でて西に歩き出した

零「でさ、人里で手に入れた情報って何なんだ？」

鈴仙「それはですね、最近人里で辻斬りが多発してるみたいなんです」

零「辻斬り？」

鈴仙「はい。しかも昨日でもう12人です」

確かに辻斬りは気になるがそれがこの異変に関係あるのだろうか・・・

零「他に情報は？」

鈴仙「あります。その辻斬りが現れたのと同時期に銀髪の刀を二つ携えた少女が八百屋さんや魚屋さんで野菜や魚を買い占めているみたいで……」

零「その少女と辻斬りが同一人物の可能性があるな……」

しかしそれは辻斬りと少女が結び着くだけでやはり今回の異変とはまだ結び付かない

零「情報はこれだけか？」

鈴仙「はい……すみません……」

鈴仙がウサ耳と首がダランと垂れ下がった

零「たく、そんな項垂れんな！笑え！そっちの方が可愛いぞ！」

鈴仙「か、可愛い!? // // //」

零「おう！」

今度は顔を赤くして頭から煙を出し始めた
とことん面白い体だな

ようやく魔法の森の入り口が見え始めた

鈴仙「見てください！もうそろそろです！」

零「……そういや魔法の森に入って住んでるのか？」

鈴仙「はい。魔理沙さんとアリスさんの店がありますよ」

零「魔理沙は知ってるけどアリスは初耳だな……」

鈴仙「そうですね。まあ魔理沙さんも異変解決に向かっているとしますから先ずはアリスさんの家に「きゃアアアアアアアアアアアアアアアア!!」

悲鳴が聞こえて俺と鈴仙が辺りを見た

何処にも居ない

鈴仙「！上です！」

零「上エ？」

上を向いた時にはもう遅く既に俺の上に誰かのお尻がジャストヒットしてしまった

???「イタタくやられちゃったわ……ん？」

零「ん……！（早く退いてくれ!）」

???「キャ！」

短い悲鳴と共に落ちてきた誰かがスカートで俺の頭を隠す

零「ん……！（逆だ！逆!）」

俺も抵抗するが力は向こうの方が強いらしい

鈴仙「ちよ！レテイさん！一度立って下さい！」

鈴仙がレティを引つ張つてようやく俺はお尻から解放された
視界が戻りレティを見る

薄い水色のショートボブで白いターバンのようなものを巻いている

服はロングスカートにエプロン、首にはマフラーと見るからに冬の妖怪だ

レティ「……………エッチ……………」

零「何でだよ！」

レティ「責任はとつて貰うからね？」

零「はあ!？」

いきなりの発言に突つ込む

零「て、今はそんな事をしてる場合じゃねえんだ！」

鈴仙「そうですね！レティさん、この異変は貴女が起こしたのですか？」

レティは鈴仙の質問に少し考える素振りをして

レティ「違うわ〜」

そう答えた

零「何で考えた？」

レティ「さつき白黒魔法使いにも同じ事を聞かれて黒幕つて答えたの〜。そしたらい

きなり攻撃されて落ちたのよ〜」

その魔法使いは魔理沙の事だろうかレテイもレテイだ

鈴仙「何でんな嘘ついたんですか？」

レテイ「んゝ。面白そうだったから？」

零「俺に聞くなよ。でも良かった」

レテイ「？」

俺の言葉にレテイが首を傾げた

零「俺が下敷きにならなきゃ今頃お前は
大怪我だぜ？そしたらせつかくの美人が台無しじゃねえか」

レテイ「それってお世辞？」

零「いんや本心」

俺はそのまま魔法の森に歩く

後ろから鈴仙も着いてきている

零「んじやあ俺は行くけど通り魔紛いな奴には気を着けるよゝ」

俺は手を降った

レテイ「……本当に、責任はとって貰うからね？」

何か言っているようだが距離が距離だけに聞こえなかった

兎の鈴仙なら聞こえていただろうか

零「なあ、今あいつ何か言ってたか？」

鈴仙「もう知りません！」

零「ええ・・・」

鈴仙も何故か頬を膨らませて起こっている

零（女つてのは良くわかんねえなあ・・・）

こうして俺達は魔法の森に入ったのであった

九尾と猫又

零「迷った……」

現在進行形で迷ってしまった

鈴仙「私も何度かこの森に来た事がありますがけどこの道は初めてですね……」

零「……」

俺は辺りを見渡す

そこに一つ屋敷を見つけた

零「……屋敷だ……」

鈴仙「え？あ、本当ですね……」

零「道聞いてみるか」

鈴仙「そうしましょう……」

俺達は屋敷に向けて歩き出した

気付いたのだがこの辺りにはやたらと猫が多い

ようやく屋敷に着いた

見た所人気はない

零「すいませーん！」

反応がない

只の屍のようだ

鈴仙「居ないんですかね？」

???「何ですか？」

零「え？」

声が聞こえたが誰も居ない

鈴仙「ま、まさか・・・幽霊!？」

幽霊?ゴースト?

俺は急いで床下に潜ろうとするが背中が突っかかって潜れない

???「・・・何してるんですか？」

零「い、いやあ・・・アンダーワールドへの入り口を探してね・・・ん？」

今の声は鈴仙ではなかった

それに声は前から聞こえて来たのだ

俺は前を見るとそこには尻尾が二つ生えた猫がいた

零「・・・お前は・・・？」

???「はい、藍しやまの式神の橙です！」

藍、と言ったらつい昨日俺の精神に働き書けてきた奴だ

鈴仙「あの……」

零「？」

鈴仙「そろそろ出ませんか？」

確かにずつと頭を入れてるのも何なので俺は頭を外した

それと一緒に橙が出てきた

橙「で、貴方達は誰ですか？」

零「俺は風切零」

鈴仙「私は鈴仙・優曇華院・因幡よ」

橙「じゃあ案内しますから着いてきて下さい！」

こうして俺達はここ、マヨヒガから出ることが出来た

三人称視点

零達が橙に案内されているなか一方藍は……

藍「紫様、零が異変解決に乗り出しました」

紫に零の行動を報告していた

紫「……そう」

しかし紫の返事はそれだけだった

藍「今回の異変、あの方が主犯なのは間違いありません。なのに何故紫様は彼女に止めるよう説得なされないのですか？」

それが藍には不思議だった

今回の異変、春雪異変は紫の友人が主犯だ

幻想郷の管理者として、友人として、説得を止めるように言うものだと思っ
た

紫「藍・・・彼女は頑固なの。一度言ったら聞かないわ。・・・あの時もそうだったしね。それに私が言うより零が言った方が彼女も聞くとと思うの」

藍「?何故ですか?」

紫「彼女も恋する乙女って事よ」

紫が微笑んだ

しかしすぐにその微笑みは消え真剣な顔付きになった

紫「彼女が解こうとしているあれはこの幻想郷を破壊しかねない代物よ。もしかしたら零でも太刀打出来ないかも知れない」

藍「!?ではいかがなさいますか?」

紫「・・・どうもしないわ」

藍「え？」

藍は聞き間違いかと思い紫を見る

紫「確かにこれは賭けよ。とても不確定。でもね、零の事を信じてるの。零なら必ず彼女もあれも止めてくれる。私達はそのサポートに尽力を尽くすの。分かった藍？」

藍「・・・・・・・・はい」

藍は頭を下げるとそのままスキマを出た

紫「・・・・・・・・・・本当に貴方は良くも悪くもこの幻想郷に影響をくれるわね・・・・・・・・」

普通の魔法使いと七色の魔法使い

橙のお陰でマヨヒガから脱出出来て俺達はアリスなる人物の家まで来た

鈴仙「ここがアリスさんの家です」

俺は扉の前まで行きノックする

??? 「はい」

ドアが開き出てきたのは金髪で青のワンピースみたいなノースリーブ、ロングスカートを着ていて頭にはヘアバンドのような赤いリボン、肩にはケープを羽織った少女だった

おそらくこの少女がアリスだろう

アリス「何か用？」

鈴仙「はい、今回の異変で調査をしているんですけど・・・何か知っている事はありますか？」

俺の代わりに鈴仙が答えた

アリス「知ってるわよ。ちょうど同じ用事の人も中に居るし入って」

アリスは扉を全開にすると俺達を部屋に入れた

魔理沙「お、何だ。お前らも異変の調査か？」

零「あ、魔理沙！お前通り魔みたいな事は止めるよ・・・」

魔理沙「ま、気を付けておくれ」

満面の笑みで魔理沙が笑う

こいつ反省してねえわ

アリス「話を始めて良いかしら？」

鈴仙「あ、はい。お願いします」

鈴仙がそう言うときアリスがテーブルに暑い本を取り出した

魔理沙「何だこの本？」

アリス「この本はパチュリーから借りた外の歴史の本よ」

アリスが本を開く

零「それが今回の異変と関係と関係あるのか？」

アリス「ええ」

アリスが頷く

アリス「簡単に説明すると鎌倉時代にある桜の木があったの。そこである貴族が病死したわ。でもその貴族はね、使用人にも優しくて気前も良かったの。だから貴族を尊敬している人はこぞって自殺していったわ。そんな事が続いているから何時日かその桜

は人の生気を吸いすぎて妖怪となったわ。名前は、西行妖。西行妖は人々の生気を吸い始めた……」

鈴仙「うっ！」

鈴仙が口に手を当てて顔も真つ青だ

零「大丈夫か？」

鈴仙「は、はい。すみません……」

背中を擦る

アリス「……………続けるわよ？」

俺達は頷く

アリス「それは封印をしないといけなくなつた」

魔理沙「妥当だな」

アリス「でも普通の封印は効かなかつた」

鈴仙「じゃあ……どうしたんですか？」

アリス「……………貴族の娘の命を使って封印されたらしいわ」

零「なんじゃ……そりゃ……」

そんな酷い話があるのだろうか

アリス「そしてその封印は今何者かに解かれようとしているわ」

魔理沙「ま、待てよ！それとこれにどう関係があるんだ？」

アリス「西行妖の封印を解くのに必要なのはね・・・春よ」

鈴仙がいきなり立ち上がった

鈴仙「じゃ、じゃあこの時期にまだ冬なのは・・・」

アリス「そう言う事よ」

零「で、その桜は一体何処にあるんだ？」

アリスが立ち上がって窓を見る

アリス「冥界よ」

・・・・・・冥界？

幽霊がいるあの・・・冥界？

零「・・・無理・・・」

俺はそのまま机に突っ伏すのであった

鬱躁幻想の騷霊

零「イーヤーだー！俺はおこたでヌクヌクするんだあ！」

鈴仙「ならこの異変を解決すればヌクヌク出来ますよ！」

今俺はアリスの家から鈴仙に首根っこ引つ張られて空を飛んでいる

鈴仙「ほら、見えましたよ！」

そこにはあつたのは大きな柱と大きな扉だった

零「ほ、ほら。閉まつてるだろ？俺達呼ばれてないんだよ！帰ろ？帰って皆で蜜柑とぜんざい食べよ？」

鈴仙「何なんですかさつきから！冥界って聞いた辺りから可笑しいですよ本当！」

鈴仙が俺を柱の上に落とした

鈴仙「そんなに幽霊が怖いんですか？」

零「ば、バーロー！幽霊何て居るわけないだろ!?そう言うのはな、スタンド何だよ！もしくは空飛ぶ大根だ！」

鈴仙「何訳の分からない事言ってるんですか！私はあの扉調べて来ますからその間に覚悟決めて下さいね！」

そのまま鈴仙は飛んでいってしまった

零「……はあ」

深く溜め息を着いてしまった

とりあえずここから逃げようと下を覗く

やはり降りられそうにない

だってここ雲の上にあつて下が見えないんだもん

そのまま顔を引つ込めようとした

???「何してるの？」

零「!?」

いきなり後ろから声をかけられた

後ろを向くとそこには金髪の少女と白髪の少女、そして茶髪の少女がいた

???「あ、危ない！」

茶髪の少女が叫んだ

零「え？」

気付いた時には俺の視界は逆さまで落ちていた

零「アアアアアア!!!」

???「お兄さん！」

零 「アアアアア!!!」

??? 「お兄さん!!」

零 「アアアアア!!!」

??? 「お兄さんつたら!!!」

零 「アアアアア!!!・・・あ?」

目を開けると俺は浮かんでいた

見ると三人が俺を持ち上げてくれている

??? 「全く・・・焦りすぎだよ」

俺を柱の上におろして茶髪の少女が言う

零 「いや、だってここ冥界の前だし・・・」

??? 「だからって・・・そこまで怖がらなくても・・・良いと思う・・・」

金髪の少女はテンションが低い

零 「はい。・・・すいません」

??? 「分かれば良いのよ。私はメルラン」

??? 「私はリリカだよ」

??? 「・・・ルナサ」

どうやら金髪がルナサ、白髪がメルラン、茶髪がリリカのようにだ

リリカ「三人合わせて・・・」

リリカメルラン「プリズムリバー三姉妹!」

零「・・・・・・・・・・・・・・・・」

ルナサが言っていないのだがそれは一体・・・

リリカ「姉さん! 何で一緒に言ってくれないのよ!」

ルナサ「・・・・・・・・・・恥ずかしい・・・」

まあ恥ずかしいのは分かるでも・・・・・・・・

ルナサついていちいち・・・入れないと喋れないのかな?

ルナサ「別に・・・そんな事ない・・・」

と、言いながらもしつかり・・・が入っている

てかさらつと心読んだなこの子・・・

メルラン「違うよ。お兄さんさつきから思ってる事が口に出てるんだよ」

零「え、マジ?」

メルラン「マジマジ」

マジでか・・・

それって社会の窓全開で歩いてるような感じだよ・・・

零「そう言えばお前らは何でこんな所に居るんだ?」

ルナサ「・・・宴会」

零「え、宴会？」

リリカ「うん。この扉の奥でねお花見の宴会があるの」

メルラン「私達はお祭りとか宴会でライブしたりするの
なるほどだから呼ばれたのか

零「でも扉閉じてるけどどうやって入るんだ？」

ルナサ「・・・これ・・・」

ルナサが俺に見せたのはピンクの券だ

零「何だ？」

メルラン「これはね、お花見の招待券よ」

リリカ「これを持つてる人はね。ここを通れるんだよ」

零「ほお・・・」

リリカ「でもね、この先ね何か不吉な感じがするの」

メルラン「私達は騒霊だけですがにここは悪寒がするの」

零「騒霊？幽霊・・・じゃなかったスタンドなのか？」

ルナサ「うん・・・幽霊・・・」

怖くない

零 「うつシヤア！幽霊がこんな可愛い美少女なら怖くねえ！こんな美人が幽霊なら冥界だろうが何処だろうがいつてやらあ！」

リリカ 「!?」

メルラン 「!?」

ルナサ 「!?」

いきなり三人の顔が赤くなった

零 「?どうした?」

リリカ 「可愛い……／＼／＼／＼／＼／＼／」

メルラン 「美少女……／＼／＼／＼／＼／」

ルナサ 「美人……／＼／＼／＼／」

皆がボソボソと呟いている

聞こえないのだがまあ今は良いだろう

零 「あ、そうだ！よかつたらその券二枚貰えないかな?」

ルナサ 「え?」

零 「この先に今回の異変の犯人がいるんだ！頼む！」

俺はルナサの手を持って頼んだ

ルナサ 「あう／＼／＼……分かった……」

ルナサは俺にルナサとメルランの券をくれた

零「ありがとう！異変解決したら博麗神社で宴会開くと思うから来てくれよな！」

リリカメルラン「はーい!!」

三人はそのまま外に降りていく

零「さてと・・・れいせいん！」

俺は扉にいるハズの鈴仙を呼んだ

鈴仙「なんですか？」

零「入る手段が 見つかったぜ」

俺は二人分の券を見せる

鈴仙「！零さん！」

零「ああ、行つてやろうじゃねえか・・・冥界へよ！」

こうして俺達は冥界の扉を潜った

一方その頃魔理沙と言えば・・・

魔理沙「なあ、アリス。そろそろ良いだろ？」

アリス「駄目よ。今までのツケをチャラにする代わりに今日一日は家事をして貰うか

ら」

アリスに捕えられていた
魔理沙「誰か助けてくれエエエエ!!!」

うどみよん？友情と勝負

冥界の中は霧があつて辺りが見えない

零「何もないな……」

鈴仙「そうですね……。うわ！」

そんな声が聞こえたと思つたらいきなり頭に血が上り始めた
背中に衝撃が走る

零「うーん……大丈夫か？」

鈴仙「はい……つてえ!？」

鈴仙が顔を赤らめる

鈴仙「あ、あの……何でこんな体勢何ですか？」

零「体勢？」

俺が自分を見ると俺は鈴仙を押し倒している体勢となつていた

鈴仙「ハウウ……」

俺はそのまま立ち上がつて鈴仙に手を出す

零「あれは偶然だ。はい立つ！」

鈴仙は何故かしよぼんとして立ち上がった

ようやく霧が晴れたかと思うと見えたのは博麗神社の階段寄りも長い階段だった
あれから三十分

零「はあはあ、何て長げえ階段だよ・・・俺冥界で死にそうになるとか始めてだよ」

鈴仙「私もですよ・・・」

鈴仙に飛んで貰うのが一番楽なのだが

重力が可笑しいらしく飛べないらしい

零「こりゃあ鈴仙所の姫様に何かご馳走して貰わねえと割に合わねえわ・・・」

鈴仙「その時は交渉を手伝います・・・」

しかし不思議だ

ここに有るのは階段とその端にずらつと並んだ灯籠の紫色の光だけだ

ようやく天辺かと思つたがそこには人がいた

そこに居たのは銀髪で頭に黒いリボンを付けていて腰に二つの長さの違う剣を携え

ていた

???「ここは冥界、亡霊の住まう所・・・」

零「いや、知ってるし・・・」

???鈴仙「・・・・・・・・・・・・・・・・」

二人が俺を見る

鈴仙「ちよつと零さん！今あの娘格好付けてるんですから駄目ですよ！」

零「いや、だつて分かつてるし・・・それにあの娘つて鈴仙が言つてた最近人里に来る娘じゃね？」

鈴仙「え？」

今度は俺と鈴仙が銀髪少女を見る

???'「・・・命ある人妖よ、疾くお前達の顛界に引き返すがよい」

零「流したよ！あいつさっきの会話無かつた事にしてるよ！」

鈴仙「しー！向こうにだつて意地とか何かあるんですよ！」

零「てか何？あの娘が抱いてる白いの？」

俺は銀髪少女の抱いている白くて丸い何かを指差す

鈴仙「あれは只の人魂ですよ！」

零「人魂？んな訳ねえだろ。あれはきつと空飛ぶビート板だろ」

鈴仙「そつちの方が無いでしょ!?!」

零「分かつた。じゃあ間を取つて白い金〇、略して白〇にしよう」

鈴仙「何処をどう間取つたらそうなるですか！」

???'「うゝ、私を無視するなー！」

いきなり少女が剣を抜き斬り掛かってきた

俺と鈴仙は左右に避けて飛んだ

??? 「それにこれは私の半身です! 変な呼び方しないで下さい!」

零 「あ、気にしてたのね」

少女が目を瞑る

??? 「それにこれは人魂ではありません」

少女の目がくわつと開いた

??? 「スタンドです! 私は私自身をスタンドとしているんです!」

鈴仙 「貴方も!」

スタンドがそこまで流行っているのか少し不安になる鈴仙

??? 「……我が名は魂魄妖夢! 我が主の為、貴方達をこれ以上奥には行かせない

!」

妖夢が刀がこちらに向けてくる

俺も木刀を握ろうとするが鈴仙が俺を止めた

鈴仙 「私がやります。零さんは早く言っして下さい!」

鈴仙の赤い目は真剣だった

俺は溜め息を着いて木刀から手を話した

零「この異変が終わったらその堅っ苦しい喋り方は止めてくれ」

鈴仙「！気付いたんですね・・・」

零「まあな。・・・最後に一つ・・・」

俺は歩き始めた

零「死ぬなよ」

鈴仙の横を通るときに一言そう言った

鈴仙「お互い様ですよ」

それを聞いて俺は走り出した

妖夢「行かせないって言ってるでしょう！」

妖夢が俺に向かって走ってくる

しかしその時銃声が聞こえ妖夢の動きが止まった

鈴仙「貴女の相手は私よ！」

俺はそのまま走った

鈴仙視点

妖夢「貴女がああ男の何なのかは知りませんが奴は人間で貴女は妖怪です。何故助けたりしたのですか？」

そんなの分かりきっている

とても簡単な答え

でもそれを出すまでは難しい答え

鈴仙「私は・・・零の事が大好きだからよ！」

妖夢「そうですか・・・なら仕方ありません・・・」

さつきと殺気が違う

どうやら彼女は本気で私を斬るようだ

妖夢「妖怪が鍛えしこの楼観剣、斬れぬ物などあまり無い！」

妖夢が私目掛けて走ってきた

妖夢「人符『現世斬』！」

斬撃とともに段幕も飛んでくる

私も段幕を放ってそれらを相殺する

妖夢「断迷剣『迷津慈航斬』！」

鈴仙「惑視『離円花冠（カローラヴィジョン）』！」

私も段幕を撃つが全て妖夢に弾かれた

妖夢「遅い！」

妖夢は至近距離まで走ってきて私の首元に刀を突き付けた

妖夢「今逃げるなら命だけは見逃しましょう」

そう言われて私は笑った

鈴仙「貴女・・・今私の目を見たわね？」

妖夢「幻術!？」

鈴仙「私の幻朧月睨（ルナティックレッドアイズ）は見た者を狂気に陥れる！」

そのまま私は妖夢に指を突き付ける

鈴仙「幻爆『近眼花火（マインドスターマイン）』！」

指から出た何発もの弾丸が妖夢の心臓を貫通した

しかしこの技は体でなく精神に攻撃するので死んでは居ないだろう

鈴仙「勝った・・・」

しかし私もかなり着かれてしまった

鈴仙「後は・・・頼んだわよ・・・」

私はそのまま深い眠りに着いた

死へと誘う西行の亡霊

鈴仙と別れて俺は走り続けた

そして満開大きな桜の一本見えた

零「あれが西行妖・・・」

綺麗だとは思うが何故だろう背筋がぞつと言うような悪寒がする

そこから一人こちらに向かってくる人影があつた

近づいてきてその姿が見えた

ピンクの髪に青い浴衣の妖艶な女性だ

???「あらまあ、博麗の巫女じゃなくて貴方だったの・・・」

奴さん俺を知っているようだ

零「俺ってそんな有名？」

???「そうねえ・・・紫が貴方の記憶を消して回る前ならそうだったわねえ」

まただ

また紫が俺の記憶を消して回った事

いや、今は良い

今やるべき事は・・・

零「お前を倒して春を取り戻す！」

だが目の前の女性は只笑っていた

そして弾幕を放ってくる

???「フフフ、ご覧なさいな、この桜・・・西行妖を・・・」

零「満開で綺麗だと思っただけだね！」

俺は弾幕を避けながら喋る

???「ええ、まだ蕾の物もあるでしょ？もう少し春が必要なのよ」

確かにそうだ

しかし

零「こいつの封印が解かれたら此方にとっても大迷惑だね」

今度は大量の蝶の弾幕が向かってくる

???「これに当たれば貴方は死ぬわ」

零「ご丁寧にも！」

俺は大量の蝶を木刀で叩き落とす

零「そろそろ名前教えてくんね？」

???「名乗ってほしいならまず貴方から名乗ってご覧なさいな」

零「こいつぁ失敬。俺は風切零。お前を倒す男の名だ！」

それを聞いて女性はまだ笑った

???「私は幽々子。この冥界の主にして今回の異変の首謀者……」

幽々子はそう言ってまた弾幕は放つ

零「く！」

今は何とかよけているがこのまま続けばギリ貧

零（何か！何かねえのか！）

ここら辺で見えるのは灯籠と桜と西行妖……

零「これだ！」

俺は真つ直ぐ走った幽々子は弾幕で追撃をかけてくる

俺はそれを木刀で弾きながら走る

とうとう幽々子の下を通り過ぎてまだ走る

幽々子「何を……」

幽々子は俺の走る方を見る

そこにあるのは西行妖

幽々子「まさか！」

俺はその勢いのまま走り西行妖を上る

幽々子より少し高い位置で西行妖を蹴り幽々子を斬ろうとする
しかし避けられぬ地面が激突して地面から岩が飛び出す

零「まだまだあ！」

俺はその岩に上って飛ぶ

だが幽々子に届かない

そして俺は白紙のスペルカードとミスチーのメダルを持つ

零「憑依『森の中の夜雀』！」

ミスチーの格好になって俺は空を飛んだ

幽々子「く！」

幽々子の蝶の弾幕を木刀で叩き落として飛んだ

零「四天王奥義『三步爆発』！」

一步目

俺は幽々子を掴んで下に投げた

二歩目

落ちてくる幽々子を木刀で叩き上げた

三步目

俺は何もせず幽々子が落ちた

俺は幽々子の顔を覗く

幽々子「止めは指さないの？」

零「逆に指してほしいのかい？」

幽々子「いいえ・・・」

幽々子は笑う

こうして異変が解決した

よ
う
に
見
え
た

西行妖と黑夜叉

次の瞬間幽々子が浮かんだ

幽々子「!?」

幽々子にすらこの状態は分からなかった

しかし幽々子だけでなく零でも分かるほどの妖力が幽々子が流れていた

零「なんだ!？」

零がよく見るとそれは西行妖から出ていた

つまりそれは……

零「西行妖が……復活しやがった!」

アリスが借りた歴史の本、それにはまだ続きがあつた

しかしそれを話すには封印される少し前に遡る必要がある

それは鎌倉の元年俺は大江の山の頂上に華扇と住んでいた

華扇「兄さん!何時も言ってるけど天狗や河童にちよつかいかけるのは止めてください

い!」

今は零は華扇に説教を受けている

零「別に良いだろ？天魔に頼まれて文とはたて、椀とにとりを一人前になるまで育てたのは俺だし育ての親として見に行かないとだろ？」

華扇「なら私も育ての親です」

まあ確かにそうだ

零「なら俺が父ちゃんでお前が母ちゃんか？」

華扇「そ、そう言う事になりますね／＼／＼」

何故か華扇の顔が赤い

零「ま、そう言うことで俺は散歩してくるわ」

華扇「あ、待って！」

そう言う華扇を無視して家の外に出た

紫「良いのかしら？」

零「ああ何時もこんな感じだ」

俺はスキマから覗いている紫に話し掛ける

紫「まあ、貴方はあの娘の事頼まれたのだもね。私が口出しするのも不粋つてものですわ」

本当に生け簀かねえ奴だなと思ひながら俺は山を見る

紫「どう？山の妖怪達は幻想郷が出来た時に来てくれそう？」

零「そうさな・・・天魔はそう言ってるが下の大天狗どもはまだ納得してねえみてえだな」

俺は紫の幻想郷って言う妖怪達の居場所を作る計画に協力している

零「まあ、地底に行つた筈の俺と仙人になるために仙界にいる筈の華扇がまだここに居るんだ。繰り上げで地位に上り詰めた大天狗からしちやあ俺の言う通りにするのはおもしろく無いんだろうぜ」

紫が溜め息をつく

零「それはそれとしておめえ・・・今日は何の用だ？」

紫が俺の元に来るのは何か厄介事を持つてくる

紫は笑つたままだ

嫌な汗が出る

足元を見ると既にスキマが開いていた

零「うゝん・・・」

俺が目覚ますとそこにはデカイ屋敷が有つた

零「・・・」

紫がこの屋敷に飛ばしたと言う事は何らかの事がここで起こると言う事である

零「とりあえず入るか・・・」

俺は門を潜ろうとするすると

零「!？」

いきなり斬撃が飛んできた

???「何者だ」

そこに居たのは刀を持った老人だった

老人の短い言葉には普通の人間なら気絶する程の鋭い殺気が含まれていた

零「黒夜叉、と言ったら分かるか？」

???「!」

さらに老人は殺気を強めた

零「まあそうカツカしなさんな。俺だつて紫にここに連れられてここにいんだから

ト

???「何？紫様が・・・？」

老人の殺気の緩んだ

零「とりあえず中に入れてくんね？」

???「・・・・・・・・」

老人はまだ悩んでいるようだ

??? 「入れて上げなさい、妖忌」

現れたのは青い浴衣の妖艶な女性

妖忌 「は、しかし幽々子様・・・」

幽々子 「大丈夫よ。紫から話は聞いてるわ」

幽々子がそう言うのと妖忌が刀を鞘に納めた

幽々子がそれを見ると俺に向き直る

幽々子 「当家の庭師が御迷惑をお掛けしました。私は西行寺の主、西行寺幽々子と申します」

零 「大丈夫大丈夫。こう言うのは慣れっこだから。それに・・・」

俺は妖忌を見る

零 「良い従者じゃねえか」

幽々子 「フフ、有り難うございますわ」

こうして俺は西行寺家の屋敷に入った

今俺は幽々子を前にして妖忌の入れてくれたお茶を飲んでいる

零 「んで、紫が俺をここに飛ばしたって事は何か困った事でもあるんじゃないか?」

幽々子は笑顔を崩さずに頷いた

幽々子「ええ、実は・・・」

幽々子の話によると桜が好きだった幽々子の父が桜の下で死に後を追うように従者が死んでいった

そんな事が続いているとその桜に自我が芽生え妖怪化してしまった

そして今その桜が人里に降りて人間の生気を吸いに来るとらしい

零「じゃあ俺はその桜を封印すれば良いのか？」

幽々子「いいえ。封印は私がするの」

零「ほお・・・」

確かに普通の妖怪なら封印出来るだけの霊力は持っていそうだ

零「ちなみにその桜が来るのは何時なんだ？」

幽々子「・・・三日後よ」

零「は!？」

俺は立ち上がる

零「桜がある場所は!？」

幽々子「ここから見える丘の上だけど・・・」

零「俺ちよつと行ってくる!」

そのまま俺は飛んだ

妖忌「よろしいのですか？」

幽々子「ええ」

妖忌の言葉に幽々子が笑う

幽々子「妖忌、貴方から見て彼はどう？」

妖忌「……一度手合わせ願いたいですな」

二人は飛んでいく俺の背中を見るのだった

零「ここか……」

目の前の桜を見る

綺麗だと見とれてしまう

しかし……

零「妖気が異常だな……こんな幽々子でも命使って封印出きるかどうか……！」

まさか！

俺はある事が頭の中に浮かんだ

すると後ろにスキマが現れ紫が出てきた

紫「そう言うことよ。彼女は自分の命を使ってこれを封印しようとしているの」

バカとしか考えられない

普通自分の命を使ってまで封印しようと思うだろうか

紫「私は・・・友達として彼女に死んでほしくないの」

きつと幽々子は紫の始めての人間の友達なのだろう

紫「だからギリギリまで待って貰ってるの。必ず封印する方法を見つけ出すわ。で

も・・・もし間に合わなかった時は・・・」

零「・・・分かった。その時は俺が何とかしてやる」

俺の言葉を聞くと紫は笑った

そのまま屋敷に戻った

幽々子「お腹空いたわぁ・・・」

帰ってきて幽々子の開口一番はこれだった

妖忌「では夕食をお作りしますので暫しの間お待ちを・・・」

素振りをしていた妖忌が刀を鞘に納め屋敷に入ろうとする

零「待った！爺さんはそのまま特訓しとけ。料理なら俺が作ってやるから」

妖忌「しかし・・・」

幽々子「良いじゃない。零に任せてみましょ？」

妖忌「……………ではお言葉に甘えさせて貰います」

妖忌はそのままさっきの位置に戻り俺は台所に向かった

そして半刻経ち俺は三人分の料理を置いた

焼き魚と穀物、後は漬物だ

全員で手を合わせる

零幽々子妖忌「頂きます（ました）」

……………は？

今頂きましたと言うおかしな単語が聞こえたような……

いやいや、あり得ない

なぜならまだ十秒も経ってないのだ

俺は皆の皿を見る

俺の皿はある

爺さんの皿はある

幽々子の皿は……………無い……

幽々子「ねえ？」

零「まさか……………」

幽々子「おかわり」

たつた一言

しかしそのたつた一言を幽々子は屈託の無い笑みで言ってくる

零「……何人分……？」

妖忌「零殿、幽々子様は最低でも三十人分はお食べになります……」

米を食べながらそう言う妖忌

零「……」

幽々子が笑ってこちらを見る

作れと言う意思表示だろうか

零「わあつたよ！作るよ！作れば良いんだろ！」

俺はそのまま走って飯を三十人分作った

まあ喜んで食べてくれるだけ嬉しい

その後妖忌と剣の試合をしてから寝かせて貰った

そして俺は夢を見た

俺は妖気の漏れだしたあの桜の前で立ち尽くしている

そして目の前では目に光が灯っていない幽々子と妖忌が血まみれで倒れていた

零「ああ、まだ……また、護れなかった……」

そう言う俺は、笑っていた

零「は！」

俺が起き上がるとまだ夜だった

零「夢か・・・」

妖忌「零殿、よろしいでしょうか？」

妖忌の声の外から聞こえてくる

零「ああ」

そう言うと妖忌が入ってくる

零「んで、何か用か？」

妖忌「幽々子様の事で・・・」

零「幽々子の？」

妖忌が頷く

妖忌「・・・幽々子様は零殿と紫様には三日後に西行妖を封印すると申しました。

しかし実際それは今日なのです・・・」

俺は立ち上がる

そして部屋を出ようとする

妖忌「何処へ？」

零「……………幽々子を止めてくる」

妖忌「……………」

妖忌は黙っている

俺はそのまま丘に飛んだ

そこにはたくさんの人が魂を吸われていた

零「……………胸糞悪い……………」

辺りを見渡すとそこには幽々子が居た

幽々子は自分の手首に小刀を当てる

零「止めろおおおお!!!」

幽々子の手首から大量の蝶が舞い西行妖に向かう

蝶が西行妖の周りを飛び始め次第に西行妖が枯れていく

しかし西行妖はまだ動いていて幽々子を根っ子で縛り付けた

俺は助けようとするがもう遅かった

西行妖は完全に封印され幽々子も既に死んでいた

零!!! あ、ああ、ああアアアアアアアアアアアア

ア!!!」

俺は膝を付き泣きわめいた

たった半日の付き合いだった女性の死に俺は悲しんでいるのだ

しかしたった半日と言っても楽しかったのだ

紫「・・・・・・・・・・」

いつの間にか後ろには紫が居た

零「・・・・・・・・紫・・」

紫「・・・・・・・・何かしら」

零「妖忌は・・どうだった？」

紫は目を閉じた

紫「彼は半分死にそして半分は生き残ったわ。私が魂に境界を付くってね。今は彼が

目覚めるのを待って彼のことを聞くつもりよ」

俺は目の前で死んでいる幽々子を見ながら立ち上がる

零「俺は・・やっぱ弱い・・」

紫「？」

零「今回だって何も出来ずに幽々子が死んだ・・」

俺は小傘が作ってくれた木刀を地面に刺す

朝日が上り封印された西行妖に影が出来俺に被る

零「俺は・・もつと強くなつて背負こんだもんは全部護り通してやる！例えそれが

誰かの願いを踏みにじるもんだったとしても！」

紫「その背負い込んだ物には幻想郷は入っている？」

零「………たりめえだ………」

俺は紫と幽々子に誓いまた一步を踏み出した

頭の中で俺の記憶が流れ込んだ

そして涙が出る

そうだ……俺は……

零「西行妖！幽々子の敵は取らせて貰う！」

そう叫んだ

三人称視点

藍「………よろしかったのですか？」

先ほど零に記憶が流れてきたのは紫が封じた零の記憶を紫本人が解いたからである

紫「ええ、出ないと彼は死ぬかも知れなかったから」

藍「………」

藍もまた幽々子が死んだ時その場に居た

だから心配なのだ

藍（感情で動けば勝てるものも勝てないぞ。零！）

しかし藍は観ることしか出来ない

だから藍は零の無事を祈った

本当の決着！西行妖と黒夜叉！

幽々子「フフフ・・・」

幽々子、いや西行妖が笑い出す

西行妖「外に出るのは何時ぶりか！」

西行妖が自信を見て手を動かす

零「・・・・・・」

流れて来た記憶も収まり頭痛も引いてきた

西行妖「貴様とも久しいのう、黒夜叉」

零「・・・・・・あれ？俺ってお前と会った事あったっけ？」

そう確かに前に立った事はあったが喋ったり意志疎通してたりはしていない

西行妖「何を言っておる。私は貴様とは話した事も無いがその噂は私にまで届いておるわ」

まだ何故黒夜叉と呼ばれているかとか自分を兄さんと呼ぶピンク髪でシニョンを付けた奴は誰か、この木刀を作った小傘が誰なのかも分かっているのだ

一体自分が何して噂なのかも分からない

零「まあ分かる事は・・・」

俺は木刀を西行妖に向ける

零「もういつペンテメエを封印すりやあ全部解決だ!」

西行妖は一瞬驚いた顔を見せたがまた笑い出す

西行妖「やってみろ化け物!」

西行妖が弾幕を放ってくる

俺はミスチーの羽で飛びながら弾幕を弾いて進む

しかし・・・

零「ち!数が多すぎる!」

そう如何せん弾幕の数が多すぎる

ちつとも近づけない

西行妖「ハハハ!その程度か!黒夜叉も大した事がないな!」

零「しま!」

とうとう俺は被弾した

零「ガハッ!」

地面に落ちて血を吐いた

だがまだ立ち上がれる

西行妖「……………気に入らぬな……………」

西行妖の力が増す

西行妖「貴様の目的は春を取り戻す事だ。だが私が復活した今それは達せられた。貴様にはもう戦う理由はない筈だ。なのに何故まだ戦う？何故まだ立ち上がる？」

零「約束した！」

俺はよろよろする足に力を込めて揺れる体を押さえる

零「輝夜に鈴仙！ルナサにメルランにリリカ！約束したんだ！異変を解決するって！男が……………鬼が約束した事を護らずに！テメエを倒さずに！異変解決じゃあねえだろが！」

俺の言葉を聞いてい西行妖が溜め息をつく

そして一言……………

西行妖「……………下らん。実に下らん！かの大妖怪、鶴と並び平安京を恐怖のどん底に叩き落とした黒夜叉が、どれ程の物かと見てみれば中身は只の腰抜けとは……………」

零「！」

西行妖「良いか？幾ら約束をしようが崇高な理念を持つのが力が無ければ只の戯れ言、只の嘘だ。今の貴様では私を封印する事は出来ん。つまりん理由で戦うな！」

西行妖は冷たい視線を俺に向けてくる

西行妖「……興が冷めた。今逃げるなら命は取らん」

今逃げれば生き残れる

……だがそれで良いのだろうか?

俺が生き残つてもいざれこいつは幻想郷の全ての命を奪うだろう

慧音が八百屋のおっちゃんがルーミアが美鈴が小悪魔がパチュリーが咲夜がレミリアがフランが萃香が霊夢が魔理沙がミスチーが紫が藍がリグルが鈴仙がてゐがレティが橙がアリスがルナサがメルランがリリカが妖夢が幽々子が死ぬ……..
え? 妹紅とチルノとサニーとスターとルナと大ちゃん輝夜と永琳? アイツら死なねえじゃん!

……とにかくそんなの俺は嫌だ

例え今的だろうが生きて見える明日もある

俺は木刀を構える

西行妖「……それが貴様の選択か?」

零「ああ」

西行妖「良からう。なら貴様は今ここで死ぬが良い」

と言つてもこいつと俺とは何もかも違う

恐らく俺はここで負けて死ぬだろう

でも……

零「仲間見捨てて生きる事なんて俺にやあ出来ねえ！」

西行妖が出した蝶の弾幕が一斉に俺を向かってくる

零（ゴメン、鈴仙。約束護れそうにねえや）

俺は目を閉じ自分の最期を待った

しかしその時が一向に来ない

目を開けると目の前に九本の尻尾に狐耳の女性が居た

???'「全く……情けないぞ！それでも私を倒した男か！」

その声には聞き覚えがある

零「藍……」

そして隣からスキマが現れ紫が出てきた

零「紫……」

紫「これは私から万事屋零ちゃんへの依頼ですわ。西行妖を封印して私の友達を……

助けて下さい」

零「……勿論だ」

紫「ではお礼としてこれを差し上げます」

それは鉄の腕輪だった

俺はそれを付ける

すると力が溢れてきた

藍「私からはこれだ」

そうして渡されたのは藍のメダル

藍「さつきはああ言ったがあれはお前だけで倒せる相手ではない。すまなかつたな」

零「へ、良いさ。これ終わったら油揚げ好きだけ奢ってやる!」

藍「本当だな!?!約束だぞ!」

あ、やっぱ狐って油揚げ好きって聞いた事があつたけど本当何だ

油揚げ出した途端元気に尻尾と耳動き出した・・・

零「ああ、約束だ!行くぞ!」

俺達はスペルカードを取り出した

零藍「『憑依』『スキマ妖怪の式』!」

俺と藍が一つになった

光が収まり自分がどうなったか確認すると

零『うおっ!角生えた!』

そう額の右に一本曲がった角が生えている

藍『それがお前の本来の姿だ』

尻尾と狐耳が生えている

零『・・・・・・・・・・・・・・・・』

藍『・・・・・・・・今私とお前は一心一体だから何を考えているか分かるんだが・・・・・・・・』

零『じゃあ跡でして良い？』

藍『ああ』

西行妖「あの・・・・・・・・」

藍と話していると西行妖が声をかけてくる

西行妖「私・・・・・・・・空気？」

俺達が頷く

西行妖「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

西行妖が涙目だ

零『えつと・・・・・・・・ゴメン・・・・・・・・』

西行妖がまた弾幕を放ってくる

だがさつきと違って動きが見えるため量が多くても避けられた

西行妖「小癩な！」

俺が木刀を振りかざすが扇子で防がれる

今度は藍が妖術を放つが俺も威圧で下記消された

西行妖「いくら伝説の妖獣と一つになろうが今の貴様には戦闘センスの欠片も無い! 貴様に私は封印出来んぞ!」

零『例えそうだろうが俺はコイツらとお前を越えていく!』

藍『そう言う事だ。大人しく封印される! 私の油揚げが待ってるんだ!』

一瞬別の言葉が聞こえたが無視しよう

零藍『『封印』『玉藻前』』

西行妖「クソ! こんな所で! 私は封印される分けにはいかんだ!」

封印の陣を破った西行妖の目の前まで俺は走り木刀で斬り付ける

すると幽々子と妖気の塊が分裂した

西行妖「な!」

藍「行け! 零!」

後ろでは先ほど別れた藍がいる

零「これで最期だ! 幻想符『幻想斬(イマジナリースラッシュ)』!」

西行妖「うあああああ! 今に見ている! 今度私が復活した時が貴様らの最期だ!」

そう言い残し西行妖が消えていった

そしてまた自分の体を見る

零「角が消えてる?」

藍「安心しろ。あれはお前の妖力の現れだ。妖力が戻ればまた生えてくるさ」
嫌別にそれは心配して無いんだけど……

零「……つてそんな事より幽々子！」

俺は倒れた幽々子の元に向かった

零「……息してない!？」

藍「亡霊だからな」

零「あ、そっか」

そんなこんなしていると幽々子が唸り目を開けた

零「大丈夫か？」

幽々子「フフ、また助けられちゃった」

幽々子は笑っているが体はボロボロだ

零「俺は正直まだ自分の正体もお前らの事も殆ど思い出しちゃいない。……でもな

幽々子、俺は何故かここにいる奴ら全員助けようとしちゃうのさ。じやなきや俺が俺

じやなくなっちゃうのさ」

俺は幽々子を背負う

幽々子「フフフ、安心して。貴方は昔と何一つ変わってはいないわ」

こうして春雪異変は解決し無事春が戻った

そして俺は五つの難題の一つ目をクリアした

片腕有角の仙人は妹属性の様です

あれから一週間が経った

その間俺は幽々子と妖夢と一緒に永遠亭で入院していた

妖夢は精神のカウンセリングで俺と幽々子はあばら骨らしい

・・・・幽霊にあばら骨なんてあるのかな？

永琳「ヒビはもう見当たらないし退院してもOKよ」

永琳が俺のレントゲンを見てそう言う

零「お、そうか。世話になったな」

本当にだ

ご飯に治療と至れり尽くせりだった

てか治療費どうしよう・・・

永琳「治療費は只で良いわよ。この異変の解決に向かったのは姫様のお願ひみたいだしね」

それには俺も苦笑いしかなかった

零「そう言や輝夜は？」

永琳「今は妹紅と殺り合ってるわよ」

零「またか……」

俺が帰ってきた時偶然妹紅が居たので永遠亭までの道を聞こうと思ったたら妹紅がいきなり俺の肩をつかみ

妹紅「その傷はどうした!？」

と聞いてきたので俺は輝夜の頼みで異変を解決したと言ったら何故か殺し合いに発展して今に至る

零「そう言や今日が宴会だったな」

普通は異変を解決した次の日なのだが異変を解決した俺

と鈴仙が居ないのは可笑しいと言う事で永琳が俺を一週間で直すと言断言し一週間経った今日が宴会な訳だ

正直俺はそんな配慮とか要らないわけだがまあそう思ってくれて居たのは嬉しいので素直に受け取っておいた

零「んじやあ鈴仙連れて宴会行ってくるわ」

永琳「ええ、楽しんできてね」

てことで俺は永遠亭を出て直ぐの所に居た

零「鈴仙……」

鈴仙「……………何ですか？」

俺は目の前の惨状を見る

零「何だこの状況…………？」

目の前ではボコボコの地形に燃えたり折れたりした竹、後は落とし穴に落ちたような跡とほぼ全裸の二人が居た

鈴仙「……………」

鈴仙が俺を見て黒い笑みを浮かべる

零「あの、怖いよ？」

鈴仙「……………」

しかし笑みは止まらない

鈴仙がピースサインを見せると俺は視界が真っ暗になった

零「いったい目がアアアアアア!!!」

そのまま俺は意識を失うのだった

気が付くとそこは妹紅の背中の上だった

零「ああ……………」

隣には鈴仙も居る

零「ここは？」

妹紅「博麗神社の階段だ」

妹紅は俺を下ろすとそう言った

鈴仙「あの、さっきはすみませんでした……」

零「ああ、俺は大丈夫だよ。それに……」

妹紅「？」

俺は妹紅を見る

これは言ったら殺されるな……

零「いや、何でもない」

俺達はまたこの鬼畜な階段を上り始めた

上り終えて見えた光景は……

???「全く、博麗の巫女の貴方が異変の解決をせずは何をしてたんですか！」

霊夢「だから紫に今回は動くなって言われたのよ！」

ピンク髪のシニヨン少女が霊夢に説教している所だった

……？ピンク髪のシニヨン少女？

俺はそいつを知っている

あの記憶のなかで見た

確か名前は……

零「……華扇？」

鈴仙「知り合いですか？」

零「うーん……知らん！」

鈴仙「知らないのに何で名前を知ってるんですか？」

零「さあ？てかお前結局敬語なのな」

鈴仙「はい。やっぱこっちの方が良いです」

零「さよけ」

俺はまた霊夢と華扇を見る

すると華扇がじつとこつちを見ている

正直めつちや怖い

妹紅「なあ、アイツこつち見てないか？」

零「き、気のせいだろ」

妹紅「いや、でもアイツこつちに歩いて来てるけど？」

零「か、帰るんじゃ無いかな？」

妹紅「いや、何か力ためてるけど？」

零「と、飛ぶのに力溜める必要があるんじゃねえの？」

華扇の右腕の包帯が延びて俺の顔面にクリンヒットした
零「へブウ！」

宙に浮かんだと思つたら今度は胸倉が掴まれた
零「へ？」

次の瞬間俺は地面に叩き付けられ地面が抉れた

霊夢「ちよ！華扇！何やってんのよ!？」

霊夢の怒号が響く

しかし華扇はそれを無視して俺を見る

霊夢「ちよつと！聞いてんの！」

華扇「少し黙って！」

華扇が一括すると霊夢が黙った

スゴい殺気だ

華扇「貴方は・・・貴方は一体どこで何をしていたんですか!！」

殴られると思つたが華扇は泣き出した

零「え？どう言う事でせう？」

涙が顔に滴ってくる

とりあえず戦う意思は無いと見ていいのかな・・・

人斬りみよん吉の挑戦!

零「待て待て待て！妹ってどう言うこつた！」

いきなりの妹発言に俺は戸惑いを隠せなかつた

華扇「貴方は私の親に私を託されました。そして貴方は私の我が儘にも付き合つてくれてまるで妹の様に接してくれました。だから私は貴方の妹です！」

うんまあ何となく言い分は分かつたよ

零「んじやあとりあえず誰か来るまで何しよ・・・」

霊夢「とりあえずその穴埋めてくれない？」

てことで俺と華扇と妹紅と鈴仙で穴を埋めた

そうこうしている内に宴会の時間になつた

零「んで、何で犯人のお前まで宴会に参加してんの？」

今俺の隣には幽々子がミスチーを齧っている

幽々子「お詫びの印にね」

零「つたく、そろそろミスチーを離してやれよ」

幽々子「はい・・・」

幽々子がミスチーを離すとミスチーが泣きながら抱きついてくる

ミスチー「零さーん！」

零「おうおう、痛かったな。もう大丈夫だからチルノらと遊んで来な」

俺はミスチーの頭を撫でながら涙を拭う

ミスチー「うん！」

そのままミスチーが飛んでいき俺はまた酒を飲む

幽々子「子供の扱いに馴れてるのね・・・」

零「あ？んな訳あるか。雰囲気合わせてんだよ」

隣の刺身を食べながら答える

???「お兄さーん！」

零「？」

今度来たのはリリカだった

リリカ「お兄さん！私達の演奏聴いて！」

零「おう、今行くな」

リリカに引つ張られて俺は三人の前に座らされる

三人が演奏し始める

ルナサがヴァイオリン、メルランがラッパ、リリカがキーボードだ

三人の演奏は結果言うと素晴らしかった

俺だけで聞いていた筈がいつの間にかチルノやミスチー、紅魔館の面々や鈴仙、妹紅、慧音も聴いていた

リリカ「ありがとー！」

演奏が終わり全員が拍手をする

メルラン「お兄さんどうだった？」

零「おお、かつこ良かったし可愛かった！後お前ら演奏してる時が一番良い笑顔してんなーって、どうした？」

何故か三人が赤い顔をしている

俺はメルランとリリカの額に手を当ててルナサの額に額を当てた

零「……すげえ熱じゃねえか！ほら、縁側行くぞ！」

てことで俺は三人を縁側に座らせた

幽々子「あら、もう帰ってきたの？」

零「いや、コイツらがすげえ熱でな休ませに来た」

メルラン「そりゃあんな事言われたりされたらね……」

リリカ「初めて男の人に触られた……」

ルナサ「……ズルイ……」

零「な、麗されてんだよ。何か酷い幻覚でもみてんじやねえかな？」

幽々子「・・・・・・・・・・・・・・・・」

幽々子が笑っている

幽々子「大丈夫よ。すぐ治るわ。とりあえずジュースでも持ってきて上げなさいな」

零「お、おう！そうだな！」

俺は走ってオレンジジュースを取りに行く

少しして後ろを見ると三人と幽々子が何か話している

まあ元気そうで何よりだが・・・

零「んで、何でテメエは人の背中で酒飲んでやがる萃香！」

萃香「良いじゃないか」

零「良くねえよ！背中にびちやびちや溢れてんだよ！ビョビョなんだよ！」

萃香「あははは、ほら、私美女だから」

萃香が背中で暴れる

零「美女だけにビョビョってか？喧しいわ！それにテメエは美女じゃねえ、呑んだく

れの幼女だ」

萃香「あははは手厳しいねえ」

離そうとすると余計締め付けてくる

零「離しやがれ!」

萃香「いゝやくだ〜!」

華扇「こら萃香!」

そこに華扇が来てくれて萃香を引き離した

零「助かったぜ華扇」

華扇がこつちに微笑んだ後また萃香を睨む

萃香「なんだよ〜邪魔するなよ〜」

フラフラな萃香が暴れている

華扇「止めなさい!それにそこは私の席です!」

零「オイコラ、誰の席でもねえよ。てか席でもねえよ!」

華扇「だつて兄さんは何時も私を背負ってくれたでしょ?」

零「覚えてねえけどたぶんそれはお前がガキの時だ。今のお前背負ったら多分ある意

味不審者だよ」

華扇が頬を膨らます

華扇「もう知りません!行くわよ萃香!今日は潰れるまで付き合つて貰うわよ!」

萃香「あーれー!」

零「……………何だつたんだあれ?」

??? 「あの・・・」

今度は何だと俺は背後を振り返った

そこに居たのは妖夢だった

零 「まあ幽々子が居るなら居るとは思ったけど・・・」

妖夢 「居たら悪いですか？」

少し不満気味な妖夢

零 「いや、悪くねえよ？んで、何の用だ？」

妖夢は深呼吸をする

妖夢 「私と勝負してください！」

零 「は!？」

いきなりな事に俺は酔いが覚めた

妖夢 「零さんは剣を使いますよね？」

零 「あ、ああ・・・」

妖夢 「貴方の強さは師匠と同等以上だと幽々子様聞いております」

幽々子は何を話しているのだろうか・・・

妖夢 「今の私の力を試して見たいんです！」

零 「はあ・・・」

ウ〜ン・・・

どうしようか?正直怪我也治ったばっか出し鬩いたくないって事もある
零「あく・・・ま、いつか。うんやろう」

妖夢「有り難うゴザイマス!」

てことで皆に場所を開けて貰い木刀を構えた

魔理沙「いや〜今回の宴会は楽しくなりそうだぜ」

霊夢「アイツら暴れて神社壊さないわよね・・・」

霊夢と魔理沙が眩く

零「ルールは単純なる剣の打ち合い、寸止めで終わらせる」

妖夢「分かりました」

妖夢も2つの刀を構える

幽々子「頑張つてね〜妖夢〜」

俺は小石を上になげ落ちるのを待つ

小石が落ちると妖夢が動いた

長い刀を振りかざし俺を斬ろうとする

零「ッ!」

それを俺は間一髪で浮けた

しかし妖夢は短い方の刀で俺を刺そうとする

それを俺は素手で掴んで止める

止めた矢先手から血が滲む

妖夢が後ろに飛ぶ

妖夢「何してるんですか！」

妖夢が怒鳴る

零「何って剣の打ち合いだぞ？」

妖夢「そうじゃなくて何で素手で刃を受けるんですか！」

その質問に俺は笑う

零「だって彼処で退いてたらお前は突進して斬りかかってくるだろ？そしたら俺は防

ぎきれないしな」

妖夢「……………」

妖夢が黙りこくる

零「来ないならこつちからいかせて貰うぜ！」

俺は妖夢に走り刀を振るった

妖夢はそれを受ける

だが

零「貰った!」

俺は短い方の刀を持つ手を蹴り上げ妖夢は短い方の刀を落とした
遠くにある刀を妖夢は見る

零「これで二刀流で出来ねえだろ?」

妖夢「なるほど、確かに良い一手でした。ですが!」

妖夢は俺を押し戻し俺は体勢が崩れた

すかさず妖夢が斬りかかってくる

俺は体勢を立て直して妖夢の剣を避ける

そして横に薙いで来たときに俺は刀を踏みつけた妖夢が前のめりになった所で左足を軸に右足で左回転で流し妖夢を倒した

そして俺は倒れた妖夢に木刀を……

零「はい、しゅーりよー。俺の勝ちな」

刺さずに俺は木刀を腰に納めた周りからも歓声上がる

妖夢「……何が駄目だったんでしょか……」

妖夢が言葉を溢す

零「ん?」

妖夢「私は師匠に剣を教わりました。師匠が居なくなつた後も私は毎日修行をしまし

た。しかし私は師匠みたいに強くなれない・・・何が足りないんでしょうか？」

俺は考える

そしてこう答えた

零「妖夢：．．確かにお前は修行を怠ってはなかった。だからお前の剣は真つ直ぐだった。でも真つ直ぐ過ぎたんだ。だから俺は避けられたし剣を封じる事も出来た」

妖夢が下を向く

零「でもそれだけじゃ駄目だ」

妖夢「え？」

妖夢がこちらを見る

零「強くなるには場数を踏む必要がある」

妖夢「場数・・・」

零「ああ、それは辻斬りじゃあ決して得られねえもんだ」

妖夢「・・・・・・・・・・・・・・・・」

妖夢が驚く

そして俺は妖夢の頭に手を置いた

妖夢「みよん!？」

零「自分を知って強くなれ妖夢！俺はそれまで好きだけ特訓に付き合っただけやる！」

妖夢「はい！有り難うございます！」

妖夢が笑った

その笑顔は今初めてみた妖夢の笑顔でおそらくこの笑顔はこの先でも一番の笑顔だと想う

宴会後半戦！ 獣は居ても除け者は居ない！

さて妖夢との劍の打ち合いも終わり俺は鈴仙に手を手当てして貰った

鈴仙「まったく・・・何故零さんはそんなに無茶するんですか！」

零「いや〜アハハ・・・」

鈴仙「怪我ばつかかる零さんは・・・」

鈴仙が一瞬笑った後

鈴仙「・・・拘束しちやいますよ？」

笑った

正確に言えば笑っているように見えて目が笑っていない

これはマジの目だ

零「き、極力努力するよ・・・」

鈴仙「極力じゃなくて絶対です！」

零「は、はい！」

正直怖かったのですがっておこう・・・

零「あ、そう言えば鈴仙って妖夢に勝ったんだよね？」

鈴仙「はい。でも本当にギリギリでした……」

鈴仙の耳が垂れる

零「……………そう言えば何だけどさ……」

鈴仙「はい?」

零「その耳って痛覚あるの?」

鈴仙「ありますよ?」

有るのかと思う反面俺はある事を思った

零「……………触って良い?」

鈴仙「え!?!」

鈴仙の顔が赤くなった

鈴仙「良いですけど……優しく、してくださいね?」

そう言うと鈴仙が目を閉じた

俺はゆっくり鈴仙のウサミミを触る

鈴仙「ん／＼／＼」

耳の毛がさらさらでとても気持ちいい

それにシャンプーの良い匂いもする

今度は耳を指で挟んでグリグリする

鈴仙「ひゃ！／＼／＼／」

零「だ、大丈夫か？」

鈴仙「は、はい／＼／＼／」

声に力が無い

零「えつと……もう終わるよ。ゴメンな？」

鈴仙「あ……」

俺は立ち上がる

零「じゃあまた行ってくら」

鈴仙「え？あ、はい。気を付けて行ってきて下さいね」

そうして俺は盃二つと一升瓶と手作りのあるものを持って墓に向かった

墓の前に着くとそこには紫と藍が居た

紫「あら、また来たの？」

紫が俺に気付いてこちらを向く

零「ああ、やつはこの墓の主は俺の大事な奴らしい」

藍「……」

俺は紫の隣で座り酒を二つの盃に入れる

紫「……そのお酒、頂けるかしら？」

零「あ? ああ、まあ良いや。ほら」

俺は自分の盃を紫に渡す

それを紫が呑む

零「……お前は宴会に参画しねえのか?」

紫「私は余り人前には出たくありませんわ」

零「……お前がそんなだから藍がしつかりしてんだな」

俺は藍を見る

零「ほれ」

俺は藍にあるものを渡す

藍はそれを見ると驚いた顔をする

零「大変だったんだぞ? 油揚げ作んの」

藍「有り難う。橙と一緒に美味しく頂くよ」

凄く喜んでいいる事が分かる

耳がピコピコしている

零「なあ今あれ良いか?」

藍「あ、ああ」

俺は藍の後ろに回り藍の尻尾を触る

ふわふわしてて気持ちいい

零「ZZZZ……」

藍「まったく……仕方無いな」

俺はそのまま眠りに落ちてしまった

万事屋零ちゃんお騒がせ篇

初めての帰宅

目を開けると知らない天井

部屋の外からは包丁で何かを斬っている音が聞こえる

部屋を出ると廊下が有り左に玄関右が置くに続いている

俺は奥に向かって歩いた捕まえ

突き当たりの部屋に入るとそこはリビングとキッチンが融合した部屋だった

そこで見たのは一人の女性だった

零「な、何してんすか。藍さん……」

藍「いや、朝食をだな……」

零「いや、そんな俺が作るから……つかここどこよ?」

藍「?ここはお前の家だぞ?」

その時俺の中に衝撃走る!

今まで藍が家を経ててくれてから色々会った

一日目にミスチーとリグルの影と戦い倒れて

二日目に目を覚まし永遠亭で目を覚まし一日目入院

三日目に異変解決に赴きまた永遠亭で入院

十日目に退院して宴会

そして今日、とうとう家に入ったのだ

こんな事ってある？

俺は涙を流す

零「ようやく来れた・・・」

とりあえず俺は藍の作ってくれたご飯を食べて皿を洗う

藍「そう言えばお前に仕事の依頼が来ていたぞ？」

零「それは速く言えよ！」

俺は藍から依頼人の居場所を聞いて家を出た

依頼人は慧音で依頼内容は寺子屋の一日教師らしい

そんなわけで寺子屋に来た

生徒はまだ来ていないようだ

零「間に合った・・・」

慧音「ギリギリだけどな」

寺子屋の庭から慧音が来た

零「久しぶり」

慧音「ああ……。それで今日私は阿求の所で資料の整理があつてな。今日はお前に任せたいんだ」

零「分かった」

こうして慧音はそのまま行つてしまった

とりあえず俺は教室に入る

前の机まで行き上を見る

そこには今日の授業内容が書いてある

時間になりどんどん生徒が集まつてくる

そこには人間も居ればチルノや大ちゃんの様な妖精、ルーミアやミスター、リグルの様な妖怪

零「はい、今日慧音先生の代わりに先生をする風切零だ。一限目は俺への質問とす
るつて書いてるから何か質問ある人」

そう言うのと皆手を上げる

零「よし、じゃあ大妖精」

大妖精「零さんは何処に住んでるんですか？」

零「人里だよ。位置的には人里の中心の大通り前だな。」

はい、次」

そう言うときまた手が上がる

零「はい、んじやミスチー」

ミスチー「零さんは趣味とかあるの？」

零「趣味？・・・強いて言うて寝る事だな」

『・・・・・・・・・・・・・・・・』

教室全体が重い空気になる

零「は、はい、次い！」

俺は何とか話題を変えようと次の質問が有るかを聞く

誰も手を上げない中上げる強者・・・いや、空気読めないバカ二人

零「んじやルーミア」

ルーミア「零は好きな人とか居るのか？」

ルーミアの質問に何人か顔を赤くしてその他の女子はキャー!!、男子はヒュー

ヒュー、と言う歓声が上がっている

零「ん・・・居ないな。まあ俺みたいな奴好きになる方が物好き何ぞ居ねえだろう

しな」

全員が溜め息を吐く

零「ん？どうした？」

チルノが手を上げる

零「えつと・・・チルノ」

チルノ「零って唐変木なのか？」

さすがチルノ！

有る意味空気すら凍らしてしまおう！

そこに痺れも憧れもせんが・・・

零「アホか。俺はあれだ。事件目の前にしたバローメガネ波に鋭いわ！」

また溜め息が響く

零「つてもうこんな時間か・・・よし、五分休憩の後に算数だ。用意しとけよ」

てことで俺は一旦部屋を出た

元気一杯な奴が大勢居て大変結構なのだが一人笑っていない奴が居た

いや、笑っては居るのだが心が笑っていない

まるで心が空っぽの様に・・・

零「・・・はあ、先が思いやられらあ・・・」

俺はまた教室に入る

零「はいはい、んじやあ教科書20ページを開けえ」

そう言うのと全員が教科書を開く

零「えつと・・・12と24の最大公約数と最小公倍数を答えろか・・・んじやまず最大公約数をリグル」

リグル「え、えつと・・・12？」

零「正解。んじやあ最小公倍数は・・・その帽子の子」

全員がキヨロキヨロする

零「ほらお前、一番後ろの端に座ってる・・・」

男子「先生何言ってるの？」

零「え？」

女子「そこに人は居ないよ？」

零「いや、居るだろ・・・帽子被って目が三つある・・・」

もう一度少女が居るだろう場所を見ると居ない

零「居ない・・・。あ、悪い。じゃあお前」

男子「24！」

零「正解だ」

そんなこんなで二限目三限目も終わり四限目となった

零「四限目はお前に任せるって・・・適当過ぎんだろ・・・」

皆がこつちを見る

零「えつと・・・庭で鬼ごっこでもするか」

そう言うのと皆が立ち上がった庭に走り出した

俺が鬼で皆が逃げる

最終的にチルノが逃げきり俺の負けとなった

零「はい、今日はここまで。皆気を付けて帰れよ」

『はーい！』

こうして皆が帰った後に俺は慧音に頼まれていた皆の様子をノートに書き留めていた

その時・・・

零「・・・雨か・・・」

雨が降ってきた

俺は傘を持っていないためどうしようか考えた

零「・・・濡れて帰るか・・・」

俺は濡れて帰る覚悟を決めて寺子屋を出た

零「あ？」

出ですぐに横を見るとダサい傘があつた

その傘は紫色で目と舌がある

只今はそれでも無いよりましだ

俺はその傘をさし家に帰った

帰った頃には既に辺りは暗くなっており居酒屋等が騒がしい

零「俺も飯食って寝るか・・・」

俺はカレーを作って食べる

食べ終わって皿を洗って布団に入る

零「あ、そういや今日も宴会だった・・・」

初めての帰宅（Ⅱ）

目を開けると知らない天井

部屋の外からは包丁で何かを斬っている音が聞こえる

部屋を出ると廊下が有り左に玄関右が置くに続いている

俺は奥に向かつて歩いた捕まえ

突き当たりの部屋に入るとそこはリビングとキッチンが融合した部屋だった

そこで見たのは一人の女性だった

零「な、何してんすか。藍さん……」

藍「いや、朝食をだな……」

零「いや、そんな俺が作るから……つかここどこよ?」

藍「?ここはお前の家だぞ?」

その時俺の中に衝撃走る!

今まで藍が家を経ててくれたから色々会った

一日目にミスターとリグルの影と戦い倒れて

二日目に目を覚まし永遠亭で目を覚まし一日目入院

三日目に異変解決に赴きまた永遠亭で入院

十日目に退院して宴会

そして今日、とうとう家に入ったのだ

こんな事ってある？

俺は涙を流す

零「ようやく来れた・・・」

とりあえず俺は藍の作ってくれたご飯を食べて皿を洗う

藍「そう言えばお前に仕事の依頼が来ていたぞ？」

零「それは速く言えよ！」

俺は藍から依頼人の居場所を聞いて家を出た

依頼人は慧音で依頼内容は寺子屋の一日教師らしい

そんなわけで寺子屋に来た

生徒はまだ来ていないようだ

零「間に合った・・・」

慧音「ギリギリだけだな」

寺子屋の庭から慧音が来た

零「久しぶり」

慧音「ああ……。それで今日私は阿求の所で資料の整理があつてな。今日はお前に任せたいんだ」

零「分かった」

こうして慧音はそのまま行つてしまつた

とりあえず俺は教室に入る

前の机まで行き上を見る

そこには今日の授業内容が書いてある

時間になりどンドン生徒が集まつてくる

そこには人間も居ればチルノや大ちゃんのような妖精、ルーミアやミスチー、リグルの様な妖怪

零「はい、今日慧音先生の代わりに先生をする風切零だ。一限目は俺への質問とす
るつて書いてるから何か質問ある人」

そう言うのと皆手を上げる

零「よし、じゃあ大妖精」

大妖精「零さんは何処に住んでるんですか？」

零「人里だよ。位置的には人里の中心の大通り前だな。はい、次」

そう言うのとまた手が上がる

零「はい、んじやミスチー」

ミスチー「零さんは趣味とかあるの？」

零「趣味?・・・強いて言うのと寝る事だな」

『・・・・・・・・・・・・・・・・』

教室全体が重い空気になる

零「は、はい、次い！」

俺は何とか話題を変えようと次の質問が有るかを聞く

誰も手を上げない中上げる強者・・・いや、空気読めないバカ二人

零「んじやルーミア」

ルーミア「零は好きな人とか居るのか？」

ルーミアの質問に何人か顔を赤くしてその他の女子はキャー!!、男子はヒュー

ヒュー、と言う歓声が上がっている

零「んく・・・居ないな。まあ俺みたいな奴好きになる方が物好き何ぞ居ねえだろう

しな」

全員が溜め息を吐く

零「ん?どうした?」

チルノが手を上げる

零「えつと・・・チルノ」

チルノ「零って唐変木なのか？」

さすがチルノ！

有る意味空気すら凍らしてしまおう！

そこに痺れも憧れもせんが・・・

零「アホか。俺はあれだ。事件目の前にしたバーローメガネ波に鋭いわ！」

また溜め息が響く

零「つてもうこんな時間か・・・よし、五分休憩の後に算数だ。用意しとけよ」
てことで俺は一旦部屋を出た

元気一杯な奴が大勢居て大変結構なのだが一人笑っていない奴が居た

いや、笑っては居るのだが心が笑っていない

まるで心が空っぽの様に・・・

零「・・・はあ、先が思いやられらあ・・・」

俺はまた教室に入る

零「はいはい、んじやあ教科書20ページを開けえ」

そう言う全員が教科書を開く

零「えつと・・・12と24の最大公約数と最小公倍数を答えろか・・・んじやまず

最大公約数をリグル」

リグル「え、えつと・・・12？」

零「正解。んじやあ最小公倍数は・・・その帽子の子」

全員がキヨロキヨロする

零「ほらお前、一番後ろの端に座ってる・・・」

男子「先生何言ってるの？」

零「え？」

女子「そこに人は居ないよ？」

零「いや、居るだろ・・・帽子被って目が三つある・・・」

もう一度少女が居るだろう場所を見ると居ない

零「居ない・・・。あ、悪い。じゃあお前」

男子「24！」

零「正解だ」

そんなこんなで二限目三限目も終わり四限目となった

零「四限目はお前に任せるって・・・適当過ぎんだろ・・・」

皆がこつちを見る

零「えつと・・・庭で鬼ごっこでもするか」

そう言うのと皆が立ち上がって庭に走り出した

俺が鬼で皆が逃げる

最終的にチルノが逃げきり俺の負けとなった

零「はい、今日はここまで。皆気を付けて帰れよ」

『はーいー！』

こうして皆が帰った後に俺は慧音に頼まれていた皆の様子をノートに書き留めていた

その時……

零「……雨か……」

雨が降ってきた

俺は傘を持っていないためどうしようか考えた

零「……濡れて帰るか……」

俺は濡れて帰る覚悟を決めて寺子屋を出た

零「あ？」

出ですぐに横を見るとダサい傘があった

その傘は紫色で目と舌がある

只今はそれでも無いよりましだ

俺はその傘をさし家に帰った

帰った頃には既に辺りは暗くなっており居酒屋等が騒がしい

零「俺も飯食って寝るか・・・」

俺はカレーを作って食べる

食べ終わり皿を洗って布団に入る

零「あ、そういや今日も宴会だった・・・」

初めての帰宅（Ⅲ）

目を開けると知らない天井

部屋の外からは包丁で何かを斬っている音が聞こえる

部屋を出ると廊下が有り左に玄関右が置くに続いている

俺は奥に向かつて歩いた捕まえ

突き当たりの部屋に入るとそこはリビングとキッチンが融合した部屋だった

そこで見たのは一人の女性だった

零「な、何してんすか。藍さん……」

藍「いや、朝食をだな……」

零「いや、そんな俺が作るから……つかここどこよ?」

藍「?ここはお前の家だぞ?」

その時俺の中に衝撃走る!

今まで藍が家を経ててくれてから色々会った

一日目にミスターとリグルの影と戦い倒れて

二日目に目を覚まし永遠亭で目を覚まし一日目入院

三日目に異変解決に赴きまた永遠亭で入院

十日目に退院して宴会

そして今日、とうとう家に入ったのだ

こんな事ってある？

俺は涙を流す

零「ようやく来れた・・・」

とりあえず俺は藍の作ってくれたご飯を食べて皿を洗う

藍「そう言えばお前に仕事の依頼が来ていたぞ？」

零「それは速く言えよ！」

俺は藍から依頼人の居場所を聞いて家を出た

依頼人は慧音で依頼内容は寺子屋の一日教師らしい

そんなわけで寺子屋に来た

生徒はまだ来ていないようだ

零「間に合った・・・」

慧音「ギリギリだけどな」

寺子屋の庭から慧音が来た

零「久しぶり」

慧音「ああ……。それで今日私は阿求の所で資料の整理があつてな。今日はお前に任せたいんだ」

零「分かった」

こうして慧音はそのまま行つてしまつた

とりあえず俺は教室に入る

前の机まで行き上を見る

そこには今日の授業内容が書いてある

時間になりどンドン生徒が集まつてくる

そこには人間も居ればチルノや大ちゃんの様な妖精、ルーミアやミスチー、リグルの様な妖怪

零「はい、今日慧音先生の代わりに先生を置くにする風切零だ。一限目は俺への質問とするつて書いてるから何か質問ある人」

そう言うのと皆手を上げる

零「よし、じゃあ大妖精」

大妖精「零さんは何処に住んでるんですか？」

零「人里だよ。位置的には人里の中心の大通り前だな。はい、次」

そう言うのとまた手が上がる

零「はい、んじやミスチー」

ミスチー「零さんは趣味とかあるの？」

零「趣味?・・・強いて言うのと寝る事だな」

『・・・・・・・・・・・・・・・・』

教室全体が重い空気になる

零「は、はい、次い！」

俺は何か話題を変えようと次の質問が有るかを聞く

誰も手を上げない中上げる強者・・・いや、空気読めないバカ二人

零「んじやルーミア」

ルーミア「零は好きな人とか居るのか？」

ルーミアの質問に何人か顔を赤くしてその他の女子はキャー!!、男子はヒュー

ヒュー、と言う歓声が上がっている

零「んく・・・居ないな。まあ俺みたいな奴好きになる方が物好き何ぞ居ねえだろうしな」

全員が溜め息を吐く

零「ん?どうした?」

チルノが手を上げる

零「えつと・・・チルノ」

チルノ「零って唐変木なのか？」

さすがチルノ！

有る意味空気すら凍らしてしまおう！

そこに痺れも憧れもせんが・・・

零「アホか。俺はあれだ。事件目の前にしたバーローメガネ波に鋭いわ！」

また溜め息が響く

零「つてもうこんな時間か・・・よし、五分休憩の後に算数だ。用意しとけよ」
てことで俺は一旦部屋を出た

元気一杯な奴が大勢居て大変結構なのだが一人笑っていない奴が居た

いや、笑っては居るのだが心が笑っていない

まるで心が空っぽの様に・・・

零「・・・はあ、先が思いやられらあ・・・」

俺はまた教室に入る

零「はいはい、んじやあ教科書20ページを開けえ」

そう言う全員が教科書を開く

零「えつと・・・12と24の最大公約数と最小公倍数を答えろか・・・んじやまず

最大公約数をリグル」

リグル「え、えつと・・・12？」

零「正解。んじやあ最小公倍数は・・・その帽子の子」

全員がキョロキョロする

零「ほらお前、一番後ろの端に座ってる・・・」

男子「先生何言ってるの？」

零「え？」

女子「そこに人は居ないよ？」

零「いや、居るだろ・・・帽子被って目が三つある・・・」

もう一度少女が居るだろう場所を見ると居ない

零「居ない・・・。あ、悪い。じゃあお前」

男子「24！」

零「正解だ」

そんなこんなで二限目三限目も終わり四限目となった

零「四限目はお前に任せるって・・・適当過ぎんだろ・・・」

皆がこつちを見る

零「えつと・・・庭で鬼ごっこでもするか」

そう言うのと皆が立ち上がって庭に走り出した
俺が鬼で皆が逃げる

最終的にチルノが逃げきり俺の負けとなった

零「はい、今日はここまで。皆気を付けて帰れよ」

『はーいー！』

こうして皆が帰った後に俺は慧音に頼まれていた皆の様子をノートに書き留めていた

その時……

零「……雨か……」

雨が降ってきた

俺は傘を持っていないためどうしようか考えた

零「……濡れて帰るか……」

俺は濡れて帰る覚悟を決めて寺子屋を出た

零「あ？」

出ですぐに横を見るとダサい傘があった

その傘は紫色で目と舌がある

只今はそれでも無いよりましだ

俺はその傘をさし家に帰った

帰った頃には既に辺りは暗くなっており居酒屋等が騒がしい

零「俺も飯食って寝るか・・・」

俺はカレーを作って食べる

食べ終わり皿を洗って布団に入る

零「あ、そういや今日も宴会だった・・・」

初めての帰宅（Ⅳ）

目を開けると知らない天井

部屋の外からは包丁で何かを斬っている音が聞こえる

部屋を出ると廊下が有り左に玄関右が置くに続いている

俺は奥に向かって歩いた捕まえ

突き当たりの部屋に入るとそこはリビングとキッチンが融合した部屋だった

そこで見たのは一人の女性だった

零「な、何してんすか。藍さん……」

藍「いや、朝食をだな……」

零「いや、そんな俺が作るから……つかここどこよ?」

藍「?ここはお前の家だぞ?」

その時俺の中に衝撃走る!

今まで藍が家を経ててくれてから色々会った

一日目にミスターとリグルの影と戦い倒れて

二日目に目を覚まし永遠亭で目を覚まし一日目入院

三日目に異変解決に赴きまた永遠亭で入院

十日目に退院して宴会

そして今日、とうとう家に入ったのだ

こんな事ってある？

俺は涙を流す

零「ようやく来れた・・・」

とりあえず俺は藍の作ってくれたご飯を食べて皿を洗う

藍「そう言えばお前に仕事の依頼が来ていたぞ？」

零「それは速く言えよ！」

俺は藍から依頼人の居場所を聞いて家を出た

依頼人は慧音で依頼内容は寺子屋の一日教師らしい

そんなわけで寺子屋に来た

生徒はまだ来ていないようだ

零「間に合った・・・」

慧音「ギリギリだけだな」

寺子屋の庭から慧音が来た

零「久しぶり」

慧音「ああ……。それで今日私は阿求の所で資料の整理があつてな。今日はお前に任せたいんだ」

零「分かった」

こうして慧音はそのまま行つてしまつた

とりあえず俺は教室に入る

前の机まで行き上を見る

そこには今日の授業内容が書いてある

時間になりどンドン生徒が集まつてくる

そこには人間も居ればチルノや大ちゃんの様な妖精、ルーミアやミスチー、リグルの様な妖怪

零「はい、今日慧音先生の代わりに先生をする風切零だ。一限目は俺への質問とす
るつて書いてるから何か質問ある人」

そう言うのと皆手を上げる

零「よし、じゃあ大妖精」

大妖精「零さんは何処に住んでるんですか？」

零「人里だよ。位置的には人里の中心の大通り前だな。はい、次」

そう言うのとまた手が上がる

零「はい、んじやミスチー」

ミスチー「零さんは趣味とかあるの？」

零「趣味？・・・強いて言うのと寝る事だな」

『・・・・・・・・・・・・・・・・』

教室全体が重い空気になる

零「は、はい、次い！」

俺は何とか話題を変えようと次の質問が有るかを聞く

誰も手を上げない中上げる強者・・・いや、空気読めないバカ二人

零「んじやルーミア」

ルーミア「零は好きな人とか居るのか？」

ルーミアの質問に何人か顔を赤くしてその他の女子はキャー!!、男子はヒュー

ヒュー、と言う歓声が上がっている

零「ん・・・居ないな。まあ俺みたいな奴好きになる方が物好き何ぞ居ねえだろうしな」

全員が溜め息を吐く

零「ん？どうした？」

チルノが手を上げる

零「えつと・・・チルノ」

チルノ「零って唐変木なのか？」

さすがチルノ！

有る意味空気すら凍らしてしまおう！

そこに痺れも憧れもせんが・・・

零「アホか。俺はあれだ。事件目の前にしたバーローメガネ波に鋭いわ！」

また溜め息が響く

零「つてもうこんな時間か・・・よし、五分休憩の後に算数だ。用意しとけよ」
てことで俺は一旦部屋を出た

元気一杯な奴が大勢居て大変結構なのだが一人笑っていない奴が居た

いや、笑っては居るのだが心が笑っていない

まるで心が空っぽの様に・・・

零「・・・はあ、先が思いやられらあ・・・」

俺はまた教室に入る

零「はいはい、んじやあ教科書20ページを開けえ」

そう言う全員が教科書を開く

零「えつと・・・12と24の最大公約数と最小公倍数を答えろか・・・んじやまず

最大公約数をリグル」

リグル「え、えつと・・・12？」

零「正解。んじやあ最小公倍数は・・・その帽子の子」

全員がキヨロキヨロする

零「ほらお前、一番後ろの端に座ってる・・・」

男子「先生何言ってるの？」

零「え？」

女子「そこに人は居ないよ？」

零「いや、居るだろ・・・帽子被って目が三つある・・・」

もう一度少女が居るだろう場所を見ると居ない

零「居ない・・・。あ、悪い。じゃあお前」

男子「24！」

零「正解だ」

そんなこんなで二限目三限目も終わり四限目となった

零「四限目はお前に任せるって・・・適当過ぎんだ

ろ・・・」

皆がこつちを見る

零「えっと・・・庭で鬼ごっこでもするか」

そう言うのと皆が立ち上がって庭に走り出した

俺が鬼で皆が逃げる

最終的にチルノが逃げきり俺の負けとなった

零「はい、今日はここまで。皆気を付けて帰れよ」

『はーいー!』

こうして皆が帰った後に俺は慧音に頼まれていた皆の様子をノートに書き留めていた

その時・・・

零「・・・雨か・・・」

雨が降ってきた

俺は傘を持っていないためどうしようか考えた

零「・・・濡れて帰るか・・・」

俺は濡れて帰る覚悟を決めて寺子屋を出た

零「あ？」

出ですぐに横を見るとダサい傘があつた

その傘は紫色で目と舌がある

只今はそれでも無いよりましだ

俺はその傘をさし家に帰った

帰った頃には既に辺りは暗くなっており居酒屋等が騒がしい

零「俺も飯食って寝るか・・・」

俺はカレーを作って食べる

食べ終わり皿を洗って布団に入る

零「あ、そういや今日も宴会だった・・・」

マ○オエン○レスエ○ト

零「いや、可笑しいだろ！」

布団から飛び起き叫ぶ

零「何がマ○オエン○レスエ○トだ！何でマ○オエン○レスとエン○レスエ○トだよ！何でピーとピーーーーーーなんだよ！何番煎じだコラ！作者出てこいや！」

作者「はい。お呼びですか？」

罪と書いた袋を被った黒タイトの男が現れた

零「誰だよ！」

作者「あ、作者です」

零「作者!?!」

作者「そうですよ。だからあの・・・恐いです・・・」

俺は指をポキポキならして作者を殴る

零「知ってる事全部吐け」

作者「いや、あの・・・実はね今回は萃夢想の編にしようと思ったのよ」

零「ほう、それで？」

作者「それでね、萃香さんに頼んだのよ。異変起こしてって」

零「バカだろ！」

作者「その時は萃香さん快諾してくれたんだけど何か暴走しちゃったみたいで……」

零「……………」

作者「作者特権奪われちゃった??」

俺はもう一度作者を殴る

零奪われちゃった??じゃねえだろ！なんだコラ！三話連続手抜きかと思っただけ何してんだコラ！」

作者「全ての情報は渡した。後は……貴方次第です」

そう言うのと作者が消え去った

零「ええ……全ての情報つか俺お前のバカな行動しか聞いてネエんだけど……」

まあやることは分かったのだが……

零「はあ……………」

俺はダサい傘を刺して溜め息を付いて外に出た

零「あ、そう言や俺萃香の居場所知らねえじゃん！」

まあとりあえず適当に博麗神社にでも向かう事にした

人里を出て博麗神社の階段に続く獣道を歩こうとする

零「なんじやこりや……」

そこはいつもの開けた獣道では無く何故か露店が開かれた言うなれば祭り時の参道だった

しかし居るのは全員萃香だ

零「……こう言うのは一番上に居るのがセオリーだよな……」

俺は獣道を歩き始めた

たまに萃香達が絡んでくる

そいつらを何とか掻い潜り頂上を目指す

ようやく階段が見えてきて俺はダサい傘を見る

零「……傘置いてくか……。後で取ってけば良いし……」

こうして俺は階段の横の石壁に傘を立て掛けて階段を上り始めた

上るたびに霧が濃くなり息もしづらくなる

零「たく、萃香の野郎……ハッスルし過ぎじゃあねえのか？」

階段を上り切る

零「はあはあ」

既に息も切れていて体力も残り少ない

やるなら短期戦だなこりや……

零「にしても霧濃すぎだろ・・・何にも見えやしねえ・・・。てか、霊夢は何してんだよ・・・」

そんなことを思っているとなんか音がする

零（何か・・・いる？）

俺が周りを警戒していると目の前から何か巨大な影が現れる

目を凝らすとそれは萃香の顔のような何かだった

しかもその周りに大量の萃香が居る

おそらくこれが暴走した萃香だろう

俺は木刀を腰から抜き萃香に斬りかかった

しかし斬れたのは空で萃香には当たらなかった

零「な！」

確かに萃香を捉えた筈なのに当たらなかった

しかし次の瞬間萃香に殴られた

そのまま俺は頭から地面に叩き付けられた

零「ゴハッ！」

俺は立ち上がると頭と口から血が出ている

零「何しやがる！これ以上怪我したら鈴仙に監禁されるわ！」

俺は何処に居るか分からない萃香に叫ぶ

俺は血を腕で拭いてまた萃香を探す

影が見えた

斬りかかるがまた空振りで周りの萃香に殴られる

しかも周りの取り巻き萃香も同様に斬っても空振りだ

それを何度も続けていた

零（畜生！斬っても斬っても当たんねえ……！まるで霧だ……。ん？霧？）

俺は最初に萃香に会って戦った時を思い出した

そう言えばアイツの能力は密と疎を操る程度の能力だった筈だ

零（俺はその時霧になろうとした萃香に確かに触った。どうやった！一体どうやって

触ったんだ！）

頭の中で悶絶するがやはり答えは出ない

あの時俺は萃香の言葉を思い出して……

萃香『自分の能力（ちから）を理解するんだ』

零（俺の能力（ちから）？）

とりあえず力を手に込めてみる

そしてこつちに向かってきた取り巻き萃香の一匹を捕まえた

取り巻き萃香が逃げようと暴れている

俺は取り巻き萃香を上放り上げ木刀に力を込める

取り巻き萃香が落ちてきた所で俺は萃香を横風にする

木刀に当たった取り巻き萃香が神社の賽銭にぶつかって消え去る

これを見た取り巻き萃香達が一齐に掛かってきた

俺はそいつらを片っ端から叩き斬る

零（当たる！こっからは反撃だ！）

取り巻き萃香を全員叩き斬ると今度は萃香本体が襲ってくる

俺は萃香の突進を木刀で受けた

そのまま三メートル程押される

零（あの時よりも力が強え．．．でも！）あの時の方が手強かった！

あの時萃香は力だけでなく頭も使い殴ってきた

だから手強かった

しかしこいつは本能で動いている

そして俺はスペカを取り出した

零「憑依『妖怪の蟲姫』！」

俺はリグルを憑依して走り出す

さつきよりも速い

萃香が辺りを一心不乱に攻撃するが俺はそれを避ける
俺はそのまま萃香の後頭部に蹴りを入れて木刀で殴る

そのまま萃香が倒れて萃香の体がボロボロと崩れる

中から萃香が出てきて倒れた

零「俺の・・・勝ちだ・・・」

そのまま俺は地面に倒れた

その頃霊夢と言えば・・・

霊夢「ウヘヘ、これで私も大金持ち・・・」

金銀財宝の夢を見てご満悦出会った

愉快な鍛冶屋なべビーシッター

目が覚めると知らない天井・．．．な訳では無く家の天井だった

零「あ？何で俺こんな所で寝てんだ．．．？」

起き上がると俺はあることに気付く

零（．．．．．何で裸？）

いや、半裸だった布団を捲るとパンツを履いている

いやそれが普通なんだけどね！

全裸の方が不自然だから！

横を見ると小さな膨らみがある

しかも動いている

零（え？人？嘘、マジ？ちよ、これ、もしかして．．．）

俺は一瞬固まる

零（ジャンプでK点越えたアアア！飛んでもねえ不祥事やらかしちまった！疲れが貯まって、こんな、こんの慧音と妹紅に知れたら俺も作者も殺されて小説の連載が終っちゃう！落ち着け！昨日あれから一体何があったか思い出せ！もしかしたら何も起

こつてないかも！駄目だあ！残念ながら何も思い出せねえ！いや、残念とか行ってる場合じゃねえよ！つかこれ誰？全く思い出せねえ！せめて知り合いだけは避けて！頼む！）

俺は恐る恐る布団の膨らんだ場所を剥ぐ

顔が見えた

オレンジの髪に大きな角の幼女

俺は一度布団を元に戻しまた剥ぐ

やはりそこに居たのはオレンジの髪に大きな角の幼女、萃香だった

萃香も目が覚め辺りをキョロキョロ見回し状況が把握出来たのか頬を赤らてこう

言った

萃香「全く零つてば、だ・い・た・ん／／／／／／」

零（け、K点所か大気圏ぶち抜いたアアアア!!!）

とりあえず俺は布団から抜け出る

零「な、何で萃香が隣で寝てんだ！しかも全裸で！」

萃香「大丈夫！パンツは履いてたから」

零「あ、そつか。それなら安心・・・出来るか！」

俺はそのまま立ち上がる

零「良いか！俺は服取ってくるから動くんじゃねえぞ！」

萃香「言われなくても動かないよ」

俺はそのまま部屋を出てリビングに向かう

リビングに入ると俺の服が綺麗に畳まれていた

とりあえず俺は服を着て萃香の服を探す

零「風呂場か？」

俺は風呂場に向かった

脱衣場に入るとシャワーの音が聞こえる

零「今度は誰だよ！」

俺は脱衣場から浴場に行く扉を思い切り開く

零「こうら！人の家で何風呂入ってんだゴラア！」

???「あ」

零「あ」

そこに居たのは青髪のオッドアイの少女だった

少女の顔がみるみる赤くなる

???「キヤヤヤヤヤヤヤヤヤ!!!」

俺はそのまま気を失った

BGMオンリー

碎月

背景

風切家

萃香「いや・・・何これ？」

???「作者の気紛れでこうなつたみたい」

萃香「いや、そうじゃなくてさ、前回凄いいシリアスだったよな？」

???「いやいや、前回の前半見てみてよ。あれはもうギャグだよ？作者って異変以外は

ギャグで固めたらしいの」

萃香「え？じゃあ万事屋零ちゃん活動編のあれ何？大半がシリアスで構成されてたよ

ね？」

???「あれはオリジナル異変の序章的なあれって行つてたよ？」

萃香「・・・てか、お前誰？服取つてきてくれた事には感謝するけどさ」

???「あちき？あちきは只の傘だよ？」

萃香「・・・まあ妖怪って事は分かるけどさ・・・」

???「・・・」

萃香「・・・・・・・・・・・・・・・・」

???「・・・・・・・・・・・・・・・・」

萃香「・・・・・・・・・・・・・・・・」

零「いや、喋れよ」

???「あ、起きた」

零「起きたじゃねえよ。どんだけ強い力で殴ってたんだ。

まだ痛えよ。・・・・・・・・顔歪んでない？」

萃香「大丈夫だよ」

零「あ、そう。・・・・てか、お前らさつきからメタいよ！」

???「大丈夫大丈夫。こんな小説なんて作者の気分しだいでもなる脆い物だから」

ら

零「元も子もねえよ！てか、何時までBGMオンリーの背景のみ出てきてやってんだ

！背景のみってか背景すらねえよ！」

萃香「それは作者に絵心が無いから背景が作れないんだよ」

零「・・・・・・・・よし、じゃあ見た目を皆で読者に伝えよう！はい！BGMオンリー

終了！」

こうして強制的にBGMを止めて背景書いた板をぶつ潰す

萃香「そんなこと言われてもどうするの?」

???「そうそう、幾ら私達が言っても全て作者が作った言葉だから全部作者次第だよ?」
二人がそう言う

零「てか、お前誰よ?」

俺は青髪オッドアイの少女に聞く

???「あちき? あちきは多々良小傘! 零ちゃんに拾って貰った傘だよ!」

小傘が笑って抱き付いてくる

零「な、何で抱き付いてくんの?」

小傘「だって零ちゃんはおちきのご主人様だもん! 初めてだったんだの。あちきを拾ってくれた人は・・・」

萃香「あ、なるほど。またか・・・」

小傘が顔を赤くして何故か萃香が呆れた顔をしている

そして萃香が反対の腕に抱きついついてくる

零「何でお前まで抱き付いてくんだ!」

萃香「あた!」

俺は萃香の頭を叩く

零「んで、何で萃香は暴走してたんだ?」

萃香「あゝ・・・私も良く分かんないけどね、作者が異変起こしてくれて私の所に来た後私誰かに丸薬を飲まされたんだ」

零「誰かって誰だよ？」

俺は萃香に聞き返した

萃香「それは分かんないんだけど・・・」

零「わかんねえのかよ・・・」

だが待て

あれは確かに萃香だったがそれ以前にあれは萃香の影だった筈だ

萃香の言っている事が本当なのならスターヤルナ、ミスチーヤリグルを襲った犯人も

同一人物と言う事だ

零（どうやらこの異変、そう簡単にやあ解決出来そうもねえぜ・・・）

地獄ピクニック

あれから萃香が帰り俺はゆっくりソファーに座って寛いでいた

小傘「ねえ零ちゃん」

零「ん？」

俺は小傘の声に反応する

小傘「本当にあちきがここにいて良いの？」

零「？今更だな。良いよ別に居て」

俺は隣の場所を叩いて小傘を座らせて頭を撫でる

零「それにお前は俺の傘なんだろ？なら居ないとな」

小傘「うゝ／＼／＼」

俺は立ち上がる

零「ちよつと散歩に行つて来る。留守番よろしく」

小傘「あ・・・」

俺は後ろ向きに小傘に手を振つて家の外に出た

あ、そう言えば前回言つてた家の形をお教えしよう！

まず一階

何故か小傘の鍛冶屋が在り奥の扉が小傘の寢室となっている

そして二階

万事屋零ちゃんの仕事所兼家となっている

さて説明も終えた所で適当に歩く

一時間くらい歩き辺りを見る

零「ここ・・・何処？」

さつき山を迂回してまた真つ直ぐ歩いて来た

そして彼岸花が両端に咲いている道に来てその後、外の世界で見たことある懐かしい物を拾ったりした

零「取りすぎかな・・・」

???「ここは危ないよ」

いきなり声を掛けられて俺は飛び上がる

そこに居たのは青い袴を来た女性だった

零「どう言う事だよ。危ないって」

???「ここは無縁塚って言つてね死者の魂が来る場所さ。生きてるあんたが来たら殺さ
れちまうよ」

零「警告どうも。んで、どう見てもあんたは取られる側より取る側だよな？」

俺は女性の持つている鎌を見る

零「死神つて所かい？」

女性は笑う

???「あんた良い眼してるね。そいさ、あたいは死神だ。でも安心しなあたいはここに

昼寝に着ただけだから」

そう言つて女性は岩を枕に寝始めた

零「……ま、もう少しだけ回らせて貰うさ」

俺はまた奥に向かって歩いた

しばらくして川に着いた

零「ここで終わりか……」

俺は帰ろうと踵を返す時にあるものがまた見えた

船だ

小さな小舟

零「何でこんな所に船が……」

いや、不思議は無い

ここは川なのだからあるのに不思議は無い

まあこれで川の向こうまで渡れる

俺は舟に乗って漕ぎ始めた

向こう岸に着く

岸に上がり舟を紐で繋ぐ

??? 「何者ですか？」

零 「？」

俺はその声に振り向く

そこには青い服を来て変な帽子を被った少女が居た

??? 「あなた、ここが何処だか分かっていますか？」

零 「知らねえよ。所でお嬢ちゃん名前は？」

俺は少女に質問する

??? 「私は四季映姫・ヤマザナドゥ。地獄の閻魔です」

零 「閻魔あ？んな訳ねえだろ」

俺は映姫を見る

明らかに小学生だ

映姫 「今私を見て何を思ったか正直に言って貰おうか」

零 「な、何の事かな？」

俺は目を反らして口笛を吹く

映姫「……………今すぐ帰りなさい。そうしたら今回の事は白とします」

零「白って刑事かテメエは。まずはテメエの身体見直してから発言しなさい」

俺は映姫の頭を撫でる

映姫「……………警告はしましたからね？」

零「はっ、裁けるもんなら裁いて見やがれ！このロリ閻魔が！」

俺がそう言うのと映姫がハンマーを叩く

映姫「被告人、風切零は黒。よって無限地獄行きです。連れて行きなさい」

モブ鬼A「は！」

こうして俺の腕を繋いだ手錠に結んである紐を鬼が掴み引つ張る

零（も、モノ本の閻魔だったアアアア!!!）

俺は逃げようと暴れるが鬼に取り押さえられる

零「ちよ、ちよつと待てエエ！聞いてねえぞこんなん！あんなロリ閻魔存在して良いと思ってるのか！仕事して良いのは高校生になつてからだぞ！」

映姫「安心しなさい。あなたは生者です。二年したら解放します」

零「安心出来るか！何を安心しろつつうんだ！何も安心できねえよ！」

俺はそのまま鬼に引き摺られ延々と続く炎の道に連れてこられた
零「アツチ！ ああもう！」

俺は道端に寝転がった

喉も乾くし最悪だ

??? 「大丈夫？」

声が聞こえたと思っただらば変な・・・

??? 「・・・・・・・・・・」

独特なセンスのＴ－シャツを着た女性が俺の顔を覗いていた

零「これが大丈夫に見えるか？ ○ヤ○ロツ○カ○○りにボコボコにされたモ○キー・

○ル○イみたいになっただらうが・・・」

??? 「私はヘカーティア・ラピスラズリ、地獄の女神よん」

俺はヘカーティアに連れられヘカーティアの家に来た

零「お邪魔しま〜???」 「不倶戴天の敵！ 嫦娥よ。 見ているか!?!」 「・・・・・・・・」

入るや否やいきなりそんな言葉が聞こえた

零「・・・・・・・・ 随分可笑しな奴が住んでんだな・・・」

ヘカーティア「何時もの発作よ。 気にしないでね」

俺はヘカーティアに連れられ奥の部屋に入る

そこには対になったソファと机がある

俺はヘカーティアの前に座る

ヘカーティア「先ずは此度の閻魔の非行、お詫びするわ」

零「いや、俺も言いすぎちまったしな」

俺は頭を下げるヘカーティアの頭を上げる

ヘカーティア「それで・・・こんな事を言うのは何なのだけれど貴方って万事屋なのよね？」

零「あ？ああ、そうだけ。とりあえず収入が欲しかったからな」

俺は目の前に置かれた紅茶を飲みながら言う

ヘカーティア「で、今から話すのは依頼の話よん」

零「依頼？」

ヘカーティア「ええ、最近地獄に居る死者が良からぬ事を企ててるみたいなのよん」

零「良からぬ事？」

ヘカーティアが頷く

ヘカーティア「肝胆に言えば下剋上よん」

零「は!!」

そんなこと地獄であり得るのだろうか

ヘカーティア「貴方の思ってる事なんてお見通しよん。過去三回反乱が起きた事があるわ」

零「逆によくそこまで反乱許したな」

ヘカーティア「ぐうの音も出ないわ・・・」

俺は紅茶を飲み終わるとソファアから立ち上がる

零「ま、何とかしてみるさ」

畜生な鬼と畜生ども

あれから数日ずっと無限地獄を延々と歩いている

零「……………あ、どうやって出よう……」

そう呟いていると目の前に光が満ちた

一方その頃映姫は……

映姫視点

それは私が何時もの様に小町の様子を見に行こうとしたある日久しぶりにその人に
出会った

しかしその人は私の事を忘れていて私は少しイラッとなりました

そして私は彼に二年間の無限地獄行きを言い渡しました

ヘカーティア「これで良いの？」

私が地獄の視察をしているとヘカーティア様が私に話し掛けてきた

映姫「はい、私情云々の前に彼は殺人や窃盗、暴行等を繰り返し返しました。その罪を地獄で最もキツイ地獄、無限地獄で二年間閉じ込めて精算させるだけです」

ヘカーティア「相変わらず彼には厳しいわねえ」

映姫「それが私なりの彼への愛情表現です」

ヘカーティア様が笑った

ヘカーティア「それで、その愛情表現は彼に伝わっているのかしら？」

映姫「それは……」

私は無限地獄を見る

彼は延々と歩いているようだが私の愚痴を言いながらだ

映姫「やはり私は嫌われているのでしょうか……」

ヘカーティア「そんな事無いと思うわよ？少なくとも私はそう思うわよん」

そう言つてヘカーティア様は去つていった

数日後

今日も地獄の視察に来た

今日も彼は延々と歩いている

また私が歩き始めると私の目の前に男達が立ちはだかった

三人称視点

三途の川の渡しである小町はまた無縁塚で昼寝をしていた

??? 「小町！」

そこに牛の様な女性、牛崎潤美が走ってきた

小町 「んあ？なんだい、潤美か」

潤美 「何だじやない！今地獄は大変な事になっているのよ！」

小町の呑気さに潤美が声を荒げた

小町 「・・・何があつたんだい？」

潤美 「私も地獄の関所に居る久侘歌からお前への言伝を預かったただけだが、どうやら地獄でまた罪人達が反乱を起こしたらしい」

それを聞くとまた小町が寝入る

潤美 「な、行かないの!？」

小町 「心配要らないさ。今地獄にはあいつが居る」

潤美 「あいつって？」

潤美が聞き返す

小町 「地獄の鬼より鬼畜な鬼さ」

小町はそう言うと本当に眠った

一方地獄では

罪人A「探せエ！閻魔も関所の奴らも近くに居る筈だ！」

罪人達が地獄で働く者達の住宅街にまで攻め行っていた

???「閻魔様、私達が奴等を食い止めます。その間にお逃げ下さい」

喋ったのは鶏の羽と尾、頭にヒヨコを乗せた女性庭渡久侘歌だ

周りには彼女に似た者が数人と鬼が二人が居る

映姫「いいえ、私が出ます。貴方達は今回の反乱に巻き込まれた者とこちら側の負傷者を連手当てしてください」

久侘歌「しかし！」

映姫が立ち上がる

映姫「良いですか。彼らが狙っているのは私です。私の所為で貴女達に傷ついて欲しくはありません」

久侘歌「……お気を付けて」

映姫は歩きだし罪人の前に出た

映姫「……貴方達、今すぐ投降しなさい。そうすれば刑の延長を減らす事が出来ます」

罪人B「うるせえ！いつもいつも偉そうに言いやがって俺達はここから出て自由になるんだ！」

罪人Bが映姫を殴ろうとすると罪人Aがそれを止めた

罪人A「まあまあ、今ここでコイツを殺すのも良いがそれじゃ面白くねえ。どうだ皆、ここはいつちよこのガキにも地獄を見せてやろうぜ」

「うおーー!!!」

「そうだ! そうだ!」

「目に物みせてやれ!」

罪人Aの言葉で何人も歓声を上げる

罪人C「餓鬼を捕まえろ! 無限地獄にぶちこんでやる」

罪人達が映姫を捕まえようと走る

映姫も逃げようとするが罪人達が人間離れな速さで映姫を捕まえる

そのまま映姫は無限地獄まで連れていかれた

映姫「……貴方達、罪人ではありませんね。い

え、正確に言えば地獄の隣、畜生界の動物霊ですね」

無限地獄の入り口で映姫がそう言った

罪人A「ほう……」

映姫「何が目的ですか?」

罪人A「強いて言うならこの地獄の支配だ。そうすれば俺達も畜生界を牛耳るあいつらの仲間入りさ。開けろ」

罪人Aがそう言うのと罪人達が扉を開けた

そして映姫を捕まえている三人が入った

罪人D「俺らも行こうぜ！」

罪人E「ああ！ガキに大人の怖さを見せてやる！」

そう言つて二人が無限地獄に入ろうとすると先程入った

罪人三人の内二人が飛んできた

罪人A「な！」

罪人が無限地獄の扉を見る

そこから出たのは一人の鬼だった

零視点

目の前に光が満ちるとその中から三人の男に捕まった映姫がいる

罪人F「あ？んだテメエ！」

罪人G「退けよ！じゃねえとテメエもぶつ殺すぞ！」

罪人H「おい、どうした！ビビって動けねえのか!？」

それを聞いて俺は笑った

零「んだよ。テメエ等から来てくれてんじやねえか……」

罪人G「ああ？何ごちやごちや言ってるんだ！」

罪人Gが殴り掛かってきた

俺はそれを避けて頭を掴み地面に叩きつける

罪人H「テメエ！」

罪人F「死ねエ！」

残りの二人も鉄パイプを振りかざしてきた

俺はそれを防いで鉄パイプを叩き落とし二人に鼻フックをして外に放り投げた

映姫「……」

映姫を見るとあちこちに傷がある

零「ちよつと待つてろ……」

映姫「え……」

俺は外に出て周りの男衆を見る

零「おい、輪廻転生不可能なテメエ等に良いこと教えといてやらあ。人の地獄に入るときは先ずノック、地獄エチケツトだ。特に無限地獄なんて地獄には気を付けな。おつ

かねえ極悪人が住んでるかも知れねえからよ」

ヘカーティア「あら、出ちやつたの」

扉の上から声が聞こえそちらを見るとそこに居たのはヘカーティアだった

零「まあな、うるさかつたから苦情言いに来た」

「テメエ・そいつ等に何されたのか忘れたのか!」

罪人の一人が叫ぶ

零「忘れるも何も俺は無罪だしこいつらに何もされちやいねえ。でも冤罪出田のは捕まってるしな、こつからは俺にやらせる。テメエ等はもう十分ウサア晴らしただろ? それでも暴れたりねえなら俺が付き合つてやる。なあ、ヘカーティア」

俺がヘカーティアを呼ぶとヘカーティアが俺を見る

ヘカーティア「何?」

零「依頼料の話だがよ、暴れたら釈放!」

ヘカーティアがそれを聞くと笑う

ヘカーティア「良いわよん。それで」

俺はそれを聞くとヘカーティアのように笑う

零「じゃあ!誰が一番ウサア貯まってるか天下一ストレス舞踏会、始めようか!」

俺が叫ぶと全員が一斉に掛かってきた

零「ようこそ！俺の無限地獄へ！」

三人称視点

地獄の関所を護る久侘歌は映姫を救うために走っていた

久侘歌「閻魔様！ご無事ですか！」

久侘歌が映姫に走るとその隣を零が歩いていく

久侘歌「待ちなさい！」

久侘歌がライフルを零に向ける

へカーテイア「止めなさい」

久侘歌「しかし女神様！」

映姫「良いですよ。だって・・・」

映姫が無限地獄を視る

久侘歌「な!？」

久侘歌もそれを追って無限地獄を見ると暴れた罪人達が無限地獄の入り口にギチギチに詰められていた

翌日所変わって畜生界では零の事が持ちきりだった

頸牙組の組長驪駒早鬼は

早鬼「そいつと一度戦ってみたい！」
と考へ

鬼傑組組長吉弔八千慧は

八千慧「家に欲しいわね・・・」

と考へていた

そして後に彼は畜生界で名を轟かせ零ちゃん一派と呼ばれる事となるがそれはまだまだ先の話である

そして当の本人はと言うと

零「ブワックシユン！」

慧音「風邪か？」

零「あくこりや誰かが俺の噂してんな」

呑気に慧音と阿求の家で呑気に居るのだった

ギャーギャーギャーギャー喧しんだよ!

地獄から家に帰っていきなり小傘に抱き付かれた

零「ちよいちよい、小傘さん？」

俺が小傘に声を掛けると今度は顔を擦り付けてきた

零「もしかして・・・泣いてる？」

小傘「・・・バカ」

そう言うとき小傘は顔を上げる

小傘「零ちゃんはバカだよ！急に居なくなっちゃってたら悲しいに決まってるでしょ！」

俺は気付いてしまった

今回小傘には悲しい思いをさせてしまっていたのだ

零「・・・ごめん。今度から気を付ける。だから泣かないで欲しい。お前は笑ってる方が可愛いし、そっちの方が俺は好きだ」

俺は小傘を抱き締める

小傘「うん。約束だよ？」

零「ああ」

そして今日俺達は一緒に寝た

勿論だが如何わしい事は何も無い

次の日

朝御飯を食べに食べどころに向かった

零「さてと、好きなもん頼みな。昨日の詫びだ」

小傘「うん！」

俺がそう言うのと小傘がメニューを見始めた

俺もメニューを視る

零「カレーにオムライスにスパゲッティ……って洋食なもんばつかだな……。和

食は……。あ、カルピスあった」

何を隠そう俺はカルピスが大好きである

でもカルピスはたまに流れ着く程度なのか値段が高い

ちなみにこの幻想郷ではお金の単位が厘、銭、円で一厘が十円、一銭が百円、一円が

一万円との事だ

あ、右が現代、左が幻想郷ね

んで、カルピスは八錢と八厘つまり八百八十円である

家の近くの自販機のカルピスが百十円だからと言って八倍である

零「ま、いつか。すいませくん」

???「は〜い」

呼んで来てくれたのは和服を来た赤い髪で紫色のリボンを着けた女の子だった

零「えつと、カルピスとカレーで」

小傘「あちきはオムライス!」

小傘も注文すると女の子が会釈してその場を行ってしまった

しばらくして料理が来て俺達は食べ始めた

またしばらくして大きな音が鳴った

見るとさっきの女の子が男二人に殴られて居る

男A「おいおい、何で妖怪がこんな所に居るんだあ?」

男B「おい妖怪! テメエが居ると飯が不味く何だよ! 分かつたらとつとと死んでくれ

よ

男が笑う

??? 視点

私はろくろ首だと言ったことがバレて奴等に終わっていたとうとう奴等が私が働いている所にまで乗り込んできた

??? (終わった……。これでここには居られない……)

いや、それ以前に今から殺される

そう思った時私と同じくらいの年の見た目の少年が立ちふさがった

男A「何者だ貴様！」

男B「我々が誰か解つての狼藉か！」

少年は腰に刺した木刀を抜く

零「ギヤーギヤーギヤーギヤー喧しんだよ。発情期ですか？この野郎」

そして少年はカルピスのグラスを前に出す

零「見ろこれ、テメエ等が騒ぐもんだから俺のカルピスが……」

少年は木刀を振りかざし二人の内一人の男を叩き付ける

零「丸々零れちやつたじゃねえか！」

男B「貴様何をするか！我々は人間の害である妖怪を排除しようとしているのだぞ

！

男がそう言い少年が私を見る

零「じゃあ、言ってみろよ」

男B「何?」

零「こいつがいつ人間に害を及ぼした? 時間帯、被害者、証拠品全部言ってみろよ」

少年が男を睨む

男B「そ、そんなのそいつが妖怪と言うだけで十分だ!」

少年がそれを聞き溜め息を付く

零「そんなくそつたれた理由の為に通常百十円の所を八百八十円で頼んだカルピスが

溢されたのか・・・」

少年はまた私に振り向く

零「立てるか?」

???「え、ええ・・・」

そして少年は少し笑うと男を見る

零「俺は人間派でも妖怪派でもどっちでもねえ。そりや人間を殺すのを生きがいとする妖怪も居るだろうし人間を喰わなきや生きていけねえ奴も居る。そいつらなら殺そうと何しようとしても文句は言わねえ。お互いが命を奪い合ってるんだからな。只な、今回コイツを見る限り人を殺す妖怪じゃあ断じてねえ。そんな奴だつて居るんだ。今回みたいには害のねえ奴を殺るつてんなら俺が相手をしよう」

少年はそう言うとも男は後退り倒れた男を担ぎ逃げて行つた

零「んじや俺も行くわ。勘定はそこに置いとつから」

小傘「零ちゃん待つて〜」

その少年は人間と言うには異常な殺気を放っておりかと言つて妖怪と言うにはあまりにも優しい目だつた

零視点

零「いや〜良いことやつた後は気分が良いねえ」

小傘「零ちゃん！あいつらが誰なのか知ってるの？」

小傘が聞いてくる

零「知らねえ！大体あいつらムカつくんだよ！」

小傘「まあそれは認めるよ。そもそも人里は妖怪共存派と妖怪撲滅派が居るんだけどね、撲滅派が少し過激って言うか・・・」

零「ああ・・・何となく分かるわ」

確かにあれは周り関係無しだつた

そんなこんなで家の近くに来た

小傘「あれ？家の前に誰か居るよ？」

そんな言葉に俺は家の方を見ると確かに誰か居る

紫色の髪に浴衣の少女

零「あいつよく宴会で慧音と一緒にいるやつだな・・・」

彼女も此方に気付いたのか近付いて来る

???「あの、万事屋零ちゃんはどこでしようか?」

零「そうだけど家に何かようかい?」

???「依頼したい事があるんです」

とりあえず俺達は家に入りソファに座る

零「先ず名前から聞いて良い?」

???「はい。私は稗田阿求と申します」

零「それは風切零だ。それで依頼ってのは?」

阿求「実は貴方に家の資料の整理を手伝って貰いたいのです」

零「?慧音が居るんじゃないのか?」

阿求「それが自衛団の方で何かあったらしくて・・・」

俺は何があつたのか考える

しかし分からないので俺は考える事をやめた

零「よし、その依頼承った！」

こうして俺達は稗田の家に来た

零「おい、これってどっち？」

阿求「それはこつちにお願ひします」

俺は資料を言われた本棚に直す

ちなみに小傘は家で夕食の準備をしてきている

零「よし、これで終わりつと」

そんな事を続けてやつと終わった

阿求「お疲れ様でした」

阿求が机にお茶を置く

俺はそれに手を取り飲む

阿求「そう言えば零さんは外人ですよね？」

零「あ？そうだけど……」

阿求「どうですか？ここの生活は」

零「そうさな……楽しいよ。まあたまに異変に巻き込まれたり地獄に迷い込んだりしたけど……」

その言葉に絶句する

阿求「じ、地獄にいったんですか!？」

零「ああ、地獄で暴れた奴等ボコして出たよ」

阿求「そ、そうですか・・・」

あれ？俺なんか変な事言っちゃったかな？

阿求がメチャクチャ複雑そうな顔をする

そんな時

慧音「零は居るか！」

慧音が入ってきたる

阿求「慧音さん、どうしたんですか？」

慧音「今日起こった食べどころで起こった騒ぎ、零が関わっていると聞いてな」

零「あく・・・んなこと有ったかな・・・？」

とりあえず誤魔化す事にする

しかし

???「嘘付け！あんたが暴れた癖に私に木刀押し付けやがって！」

そう言った少女の手には俺の木刀がある

零「あ、それ俺の木刀・・・態々返しに来てくれたのか？」

??? 「違うわよ！助けてくれた事には感謝するけど私バイトクビになったのよ！どう責
任取ってくれんのよ！」

俺は考える

確かに俺のせいでコイツには迷惑を掛けてしまった

零 「じゃあお前俺の所で働くか？」

??? 「……………」

少女がいぶかしそうに見てくる

零 「三食ご飯におやつ付き」

??? 「……………まあ、悪くない……………」

少女がそう言うのと木刀を放り投げた

俺はそれを受けとる

零 「改めて、俺は風切零。万事屋零ちゃんの社長だ！」

俺は少女に手をさしのべる

??? 「私は赤蛮奇。よろしく」

蛮奇も手を出す

そんな時慧音が咳をする

慧音 「悪いがその前に零にはキツイ説教が待ってるぞ」

こうして俺は三時間ぶっ続けで説教されるのであった

東方永夜抄

月が綺麗ですね

慧音の説教の後

俺は一人夕暮れの道を歩いていた

俺はそろそろ出かかっている月を見る

零「ん？」

その月に何か違和感を感じた

零「……まあ、気のせい……」

こうして家に帰り小傘と晩御飯を食べ布団に入った

目が覚めて辺りを見渡す

まだまだ暗い

零「もう一眠りするか……」

そしてまた布団に入って眠る

また目が覚めて辺りを見るとまだ暗い

零「さすがに長くね？」

そう思い俺は起き上がる。一度外に出て月を見る。

よく見ると偽物だ。

となるとこれは異変と言う事だろう。

零「月が偽物になる異変か……。月っていうと……」

日本に留まらずがいこがでも有名な昔話。

そしてその話から古来より月の裏側には都市があると。言う都市伝説すら残されてる。

その書物の名は……

零「竹取物語……。まさかあいつらがこれを？」

正直あいつらにはスゴい恩が有るから戦いたくは無。

しかし本当に月だけなのか。

月を奪ったとしてずっと夜にする必要は無。

零「まあ、そうであつても違つても行つて損はねえか」

こうして俺は木刀を持ち置き手紙を小傘の部屋に置いて家を出た。

そして迷いの竹林方面の人里出口に着く。

そこに居たのは慧音だった。

慧音「零、こんな所でどうしたんだ？」

零「いや、月が偽物になつてるもんだから犯人をブツ飛ばしに行こうかと思つて」

な」

慧音「駄目だ」

俺が動機を説明するや否や慧音がそう言った

慧音「外では妖怪が活発になっている。現にリグルやミステイアも我を失っていた
門の外を見るとそこには気を失った二人が居た慧音「だから私は私の能力で人里があつた歴史を隠している。しかしお前が出ればそ
れが歪んで妖怪に見つかり中の人間に危害が及ぶ」

確かに慧音の言っている事は最もだ

だが・・・

零「慧音、今日は月が綺麗だな」

慧音「！な、何をいきなり言っているんだ！?／／／／／／／／／／」

顔を赤くして慧音が叫ぶ

零「でもさ、こんな偽物の月より本物の方がもつと綺麗だと思う」

慧音「あ、そつちか・・・」

何故か残念そうな顔をする

零「それにさ、ずっと人里の皆を護つてたらお前の身も持たないぜ」

俺はそう言いながら門を出ようとする

慧音「待て」

しかし慧音が俺の肩を掴む

慧音「良いこと言っているように見せて出ても無駄だぞ」

零「永遠亭に行くだけだよ。妹紅に道案内してもらおうし大丈夫だよ」

慧音「う、うくん……しかし……」

妹紅「大丈夫だよ」

門を見るとそこに居たのは妹紅だった

妹紅「今回の異変、十中八九輝夜の仕業だ。私はあのバカ姫を止めたい」

俺と慧音が妹紅を見る

零「で、どうするのかね？」

俺は慧音に話し掛ける

すると慧音は溜め息を着く

慧音「仕方無い……。ただし！危なくなったら迷わず逃げろ」

零「分かっているって……」

こうして俺と妹紅の異変解決が始まった

慧音「全く霊夢と言いだす魔理沙と言いだす妖夢と言いだす……」

……どうやら俺達だけでは無かつたらしい

コウモリと亡霊と不老不死

竹林に入って直ぐに竹林が荒れていた

妹紅「何だこれ・・・」

妹紅も気付いて居なかったようだ

奥の方で段幕の光も見える

零「誰か戦ってんな・・・」

俺達は走った

さつきよりも荒れていて辺りは焼け野原だ

上を見ると四人の人影があった

零「・・・あれは・・・」

妹紅「紅魔館の連中と冥界の連中だな・・・」

妹紅が言っただけ俺は目を細める

確かに戦っているのは妖夢と咲夜が誓っていて

その近くでは幽々子とレミリアも戦っている

妹紅「どうする?」

零「どうするつつつてもな……」

正直あれに入つてもろくなことが無い気がする

零「ほつところ……」

俺は先を歩こうとする

その時俺の頭が妹紅に捕まれた

零「ちよいちよい妹紅さん？何で頭を掴んでるんでせう？」

俺の質問に妹紅が笑顔を送る

これには俺も苦笑いを浮かべるしかなかった

妹紅「行つてこい」

そう言つて妹紅は俺を四人の元に投げた

零「デジャビユウウウウウ!!!」

とりあえず気を取り直して俺は木刀を抜く

零「まあ、感謝はするぜ！」

妖夢「断命剣『瞑想斬』！」

咲夜「メイド秘技『殺人ドール』！」

俺は木刀で妖夢夢のスペルを弾いた後木刀を回して咲夜のスペルを防ぐ

妖夢「れ、零さん!？」

咲夜「何してるのよ！」

俺はそのまま落ちる

と、思いきや下に居た妹紅が受け止めてくれた

零「さ、サンキュー妹紅・・・」

妹紅「お安いご用だよ」

俺は妹紅に下ろしてもらう

それと同時に妖夢と咲夜も降りてくる

零「何でお前ら戦ってたんだよ・・・」

俺はまだ上で戦っている幽々子とレミリアを見ながら聞く

妖夢「それは夜を止めたのが咲夜さんだからです」

妹紅「それはどう言う事なんだ？」

妹紅が妖夢に聞き返すと妖夢が咲夜を見る

妖夢「おそらく、月が偽物に変えられたのを良いことに夜を止めて吸血鬼であるレミ

リアさんが活動出来るようにしたんだと思います」

咲夜「そんな事するわけ無いでしょ！そもそも月を偽物に摩り替えたのも夜を止めた

のも白黒魔法使いと人形使いよ！」

妖夢の言葉に咲夜が反論する

零 「?魔理沙とアリスが異変の真犯人なのか?」

咲夜 「おそらくね」

これは困った

この異変の犯人を妹紅は輝夜だと言い妖夢はレミリアと言い咲夜は魔理沙と言う

零 「………訳わかんねえ………」

正直今のままでは情報が少なすぎる

零 「………とりあえずあいつら止めるか………」

俺は上で戦っている二人を見る

そして妖夢に近付く

零 「ちよつとお手を拝借」

妖夢 「え!?!?!?!?!?!?!?!?!?!」

俺が妖夢の手を握ると手の中が光る

そこからスペルカードとメダルが出てくるが出てくる

俺はメダルを取り妖夢にスペルカードを渡す

零 「妖夢、会わせろよ」

妖夢 「は、はい!」

零 妖夢 「憑依『半人半霊の庭師』!」

俺達は光りその光が収まる

そして自分の姿を見る

その姿は妖夢の姿だ

しかし……

妹紅咲夜「……………」

何故か二人が微妙な顔だ

零『どうした?』

妹紅「い、いや、何でもない……。ちよつと十万十六歳みたいになってるだけだから……………」

零『?』

言ってる意味が分からなかったが俺達は上の二人に向かって飛ぶ

妖夢『貴様らをお味噌汁飲んだ後に底に溜まるカスで作った人形にしてやろうか!』

零『妖夢さん!』

俺は妖夢の変わりように驚く

そしてようやく気付く自分が閣下になっている事に……

零『十万十六歳ってそう言う事オオオオオオオ!!!』

その叫びに幽々子とレミリアが反応する

幽々子「妖夢、どうしたの？いきなりスタンドを取り込んで？」

レミリア「スタンドって何よ！」

どうやら俺は妖夢を憑依させて妖夢のスタンドまで取り込んだらしい

そしてスタンドと言うおそらく俺と妖夢と幽々子しか分からない単語にレミリアが突っ込む

零『戦うのを止めろ！たぶん敵は別に居る！』

幽々子レミリア「……………」

俺の言葉に二人が素直に地面に降りる

それを見て俺達も降りる

憑依を解除して俺は二人を向く

幽々子「敵は別に居るってどう言う事かしら？」

レミリア「冗談だったら只じゃ置かないわよ？」

俺は深呼吸をして声を出す

零「まず月を奪ったのはこの竹林に住む奴等だ。それは間違いない」

レミリア「それには私も同意見よ。運命が犯人がここに居ると告げていたからね」

幽々子「じゃあ夜が終わらないのはどうなるの？」

一番のポイントを幽々子が聞いてくる

俺もそれは引つ掛かっていた

零「それは分からない。月を偽物にしたのを隠すためか、あるいは何か他に目的があるのか……」

幽々子「前者は無いわ。妖怪だったら月が偽物ってことくらい直ぐに分かるもの……となると後者かと考えるとさつきまで黙っていた妹紅が口を出した

妹紅「もしかして月が奪われた事と夜が終わらない事、犯人は別何じゃないか？」

慧音の言葉、迷いの竹林、輝夜姫、竹取物語

妹紅の一言で全ての糸が一本に繋がった

零「そうか……そうだったんだ！だから夜が終わつちや行けなかったんだ！」

咲夜「何か分かったのね」

妖夢「本当ですか!？」

二人の言葉に俺は笑う

零「ああ、行くぞ。永遠亭に！」

巫女と魔女っ子

あれから急いで永遠亭に走った

妖夢「どう言う事ですか？夜が終わったら行けないって！」

妖夢が走りながら聞いてくる

零「この異変は月が偽物に摩り替えられた事が今回の異変だ。んで偽物って事は月が沈む事もねえ。つまり……」

咲夜「私達はともかく人里の人間からしてみれば本物同然。月が日が昇っても見えてたら明らかに不自然ね」

零「ああ、だからこそ夜を止めてなきやならなかったんだ」

レミリア「それで、夜を止めた犯人は誰なの？」

零「それは……」

俺は走るのを止めて息を整える

俺に会わせて妹紅、妖夢、咲夜、レミリア、幽々子も止まる

飛んでいただけあって息は切れていない

そして上を見る

魔理沙 『ブレイジングスター!』

そのまま魔理沙が箒に八卦炉を着けて飛んで行った

魔理沙 「ギャアアアアアアアアアア!!!」

そのまま魔理沙が爆発した

アリス 「魔理沙!?!」

アリスが魔理沙が助けに行きそれ以外は俺をジト目で見てくる

零 「あく・・・紫、あいつら止めれば夜は終わらせるんだよね?」

紫 「え、ええ」

零 「よ、よろし、皆行くぞ!」

『誤魔化した・・・』

こうして俺達は永遠亭に走り出した

その頃慧音が護っている門の前では

ミステイア 「イエーイ!!!皆楽しんでる?」

『イエーイ!!!』

リリカ 「こつちも元気足りないよ!」

『イエーイ!!!』

ミスチーとプリズムリバー三姉妹がライブを開いていた

慧音「お、お前達何をしている!？」

メルラン「お兄さんがこの異変を解決しようとしてるんでしょ？」

メルランの質問に慧音が頷く

ルナサ「なら・・・私達が妖怪達を引き止める・・・」

慧音が黙り告る

慧音（これが零の影響か・・・。正直ここまで来ると異質だ・・・。このままでは零

が居なくなつた時この幻想郷は間違ひなく滅びるぞ・・・）

この瞬間慧音は零の危険性に気付いてしまったのだつた

人数集まると分かれたりするけど実際全員で行った方が楽

さて、永遠亭の前まで来た

紫「さあ、ここからは別れて探索しましょう」

紫の一言で俺は頭に？を浮かべた

零「何でだよ？全員で乗り込む方が楽だろ」

紫「まあ、そうなのだけれど実際そろそろ人里の人間達が怪しむ頃よ。だからここからは戦力より犯人撃破を最優先とするわ」

と、言う訳で俺と妹紅、霊夢と紫、妖夢と幽々子、咲夜とレミリアで別れる事となった

え？魔理沙とアリス？魔理沙が気絶してるから二人はこのままさ

てことで中に入る直前

零「妖夢」

俺は妖夢を呼び止めた

妖夢「なんですか？」

零「視覚だけを頼るな。全感覚を使い」

妖夢「はあ……」

俺は妖夢に遠回しなアドバイスをする

これは自分で気付くしか無いからだ

そして今度こそ俺達は永遠亭へと入った

アリス視点

私は今零によって気を失った魔理沙の看病をしている

アリス「まったく……キノコって聞いたら後先考えないんだから……」

だからこそ彼は魔理沙を利用したのだから

キノコと聞けば簡単に動かし魔理沙の火力なら竹林を吹き飛ばす位わけないからだ

そして私は魔理沙を玄関に座らせて立ち上がる

アリス「……何時まで覗いているのかしら？」

私が振り向くと竹林から一匹の兎が出てきた

てゐ「きしし、見つかつちやつたウサ」

妖夢視点

私は幽々子様の周りを警護しながら辺りを散策していた

幽々子「妖夢く私は大丈夫だから犯人探しに集中しなさいな」

妖夢「そう言う訳には行けません！只でさえ私は幽々子様が異変解決するのに反対なのは何で来ちやつたんですか!？」

そう私は幽々子様が異変解決をされると言い出されたので

我慢してもらおう変わりに私が解決に行く事になった

しかし何故か幽々子様が着いてきてしまったのだ

幽々子「まあまあ、異変解決に来たおかげで彼に会えたでしょう?」

私はそれを聞き内心ビクツとした

妖夢「か、彼は関係ないです!」

幽々子「フフフ♪」

妖夢「まったく・・・っ!」

私は気配を感じて前に飛ぶ

すると私が居た場所を通るように襖から襖に段幕が貫通した

幽々子「どうやら私達の相手は彼女みたいね」

そう言うとお幽々子様が襖を開いた

そこに居たのはかつて私を倒した鈴仙だった

霊夢視点

私は長い廊下を延々と紫とレミリア、咲夜と歩いてた

霊夢「分かれて探索って言ったのに何であんたら着いてくんのよ？」

レミリア「良いじゃない。四つもあれば全部探せるでしょ？」

私が聞くとレミリアが答えた

レミリア「それに、私達は異変の解決は出来ないわ」

紫「どう言う事かしら？」

レミリアの言葉に紫が時を孕みながら言う

レミリア「この異変、私達は只手伝うだけの運命……零、彼こそ今回の異変を解決出来る運命を持つ唯一の人間よ」

咲夜「お嬢様、来たみたいですよ」

咲夜がそう言うのと廊下の襖が外れそこに宇宙が広がった

零視点

俺は妹紅は縁側を歩き輝夜の部屋に向かって居た

零「で、どうすんのこれ？」

今俺達の目の前には白目で倒れた輝夜が居る

何故こうなったかと言うとそれは本の数分前の事である

零「なあ妹紅」

妹紅「何？」

零「絶対離れんなよ？」

俺は暗闇の中で妹紅に抱き付いていた

暗いの怖くない？

妹紅「分かっているから・・・ほらこれで明るいだろ？」

妹紅が手から炎を出し辺りが明るくなる

そして俺は妹紅から離れる

その時俺の手の甲にカサカサと言った感触が広がった

俺は自分の手を見ると手に蜘蛛が引っ付いて居た

零「キャ！蜘蛛だあ！」

俺は後ろに飛んだ

妹紅「うわっ！」

そして俺は妹紅にぶつかりそのまま倒れる

零「イテテ・・・悪い妹紅・・・」

俺が立ち上がろうとすると

ムニツ

零「ムニツ？」

下を見るとそこには妹紅の主張が控え目な胸が俺の手にあつた

零「えくと・・・」

妹紅「な、な、な・・・何さらしてんだアアアアアアアアアア!!!」

零「アアアアアアアアアア!!!」

俺は妹紅に投げられる

輝夜「何よ!うるさいわよ!」

その時輝夜が縁側に出て俺とぶつかった

そして現在に至る

零（やっちまった〜!輝夜に会いに来たら輝夜フライアウェイ!三途の川バタフライアウェイ!このままじゃ俺達もバタフライアウェイ!そうなる前に・・・ランナウェイ!）

こうして俺達は走って逃げるのであつた

魔界の令嬢と悪戯兎、半人前の剣士と月兎

永遠亭玄関にてアリスは因幡兎のてると対面していた

アリス「行きなさいシャンハイ！」

『シャンハイー！』

二体のシャンハイがてるに槍を向けて突撃する

てる「甘いウサ！」

てるはシャンハイを交わしてシャンハイを蹴り飛ばす

するとシャンハイはネバネバの網に掛かり身動きが取れなくなった

アリス「なッ！」

てる「ウササ、この竹林は私の庭みたいなもんウサ。あちこちにトラップを仕掛けてるウサよ」

アリス「それは厄介ね・・・」

アリスは辺りを見渡す

一見何も無いように見える

しかしよく見ると細かい糸があったり穴を隠した宛が見える

てゐ「お前は私に手出し出来ずに只やられるしか無いウサ！」
てゐがそう言うのとアリスは笑う

アリス「ねえ、トラップを使えるのは貴女だけだつて誰が言ったの？」
てゐ「ウサ!!」

てゐが気付いた時には既にてゐは拘束されていた

アリス「シヤンハイに特殊な糸を持たせていたのよ！」

てゐ「そ、そんな・・・不覚ウサ。まさか私よりトラップを使いこなす者が居ようとは・・・」

こうして永遠亭前の戦い、アリス対てゐ

勝者アリス

そして妖夢の方ではギリギリの戦いが続いていた

近接主体の妖夢に対して遠距離の鈴仙、ちなみに幽々子は後ろで見物をしている

妖夢「人鬼『未来永劫斬』！」

妖夢はスペルカードを使うが鈴仙のルナティックアイズに掛かっており鈴仙の場所を捕らえる事が出来ない

鈴仙を斬ろうとして空を斬りその代わりに鈴仙の段幕が被弾する

鈴仙「師匠と姫様の為に負けるわけにはいかない！」

幽々子「それは・・・どう言う事かしら？」

鈴仙の言葉に幽々子が反応する

鈴仙「貴女達に話す道理は無い！」

そう言つて鈴仙はまた段幕を撃つ

妖夢「クツ！（鈴仙の場所がわからない・・・何か・・・何か！）」

そう妖夢が思っていると幽々子が言葉を発した

幽々子「妖夢、零の言葉を思い出しなさい」

妖夢「え？」

妖夢は零に言われた事を思い出す

零『視覚だけを頼るな。全感覚を使え』

妖夢は自然と目を閉じて神経を集中させた

妖夢（分かる・・・幽々子様と鈴仙の息づかい、衣の擦れる音、風の動き・・・零さんが言いたかったのはこう言う事だったんだ・・・）

妖夢は刀を鞘に納める

鈴仙「何を・・・」

鈴仙が言葉を発したとともに妖夢は鈴仙の位置を完全に把握して鈴仙の方をむく

鈴仙「!?」

鈴仙が気付き直ぐに攻撃しようとした時には遅かった

既に妖夢は居合いの構えで鈴仙を斬っていた

しかし鈴仙から血は出ない

一振で幽霊を大量に殺せる楼観剣は人を殺す事は出来ないのだ

切ってもその痛みがのこるだけ

しかしそれだけで十分だ

これは殺し合いでは無い

妖夢「妖怪が鍛えたこの楼観剣に斬れる物などあんまり無い!」

そのまま鈴仙が倒れる

幽々子「お見事」

永遠亭 客間の戦い、妖夢対鈴仙

勝者、妖夢

零「じゃねえだろ!?!こんなふざけた勝ち方あるか!貸せ!輝夜は俺が運ぶ!」
そう言つて俺は輝夜の肩を持つ

妹紅「嫌だ!まだこいつを引き摺る!」

しかし妹紅が輝夜を放さない

しばらく輝夜の死体を引き合い

ブチッ!

とうとう輝夜が二つに割けてしまった

血も割けた所から一杯出ている

零「割けたアアアアアアア!?割けちゃったよ!?な、妹紅これ以上輝夜に何も出来

ねえよ!もう輝夜許してやろうぜ?な?」

俺の言葉に少し妹紅は考えて舌打ちをした

妹紅「わかった・・・」

零「よし、俺は上半身を持つからお前は下半身を持つてくれ」

そう言つて俺達は血黙りから輝夜を取り出す

零「よし、行くか」

そして俺は輝夜の上半身を背負い襖を開ける

部屋に入つてもう一度襖を開ける

そこにあつたのは宇宙だった

そこには霊夢と紫、レミリアと咲夜、そして永琳が戦っていた
全員がこちらに気付く

零「……………」

とりあえず俺は襖を閉めようとする

『ちよつと待てエエエ!!』

俺は襖を閉じようとした

零「何だよ? お前から戦ってんだろ? 邪魔しないように退散しようとしてんの……」
こうして俺はまた襖を閉じようとする

霊夢「だから待ちなさいよ!」

零「あ? 何だよ?」

レミリア「あんたこそその背中の死体は何よ!」

零「何が?」

レミリアの言葉に俺は惚ける

咲夜「何がって思いつき死体背中に背負ってんでしようが!」

零「死体? え? 俺の背中にもしかして何か見えんの? 参ったなく。何かに取り付かれ
ちやつたかなく?」

紫「じゃ無いでしょ！取り付かれる所かぐつたりして動かないわよ！下半身無いわよ！
！貴方の下半身まで血まみれよ!？」

妹紅「どうしたんだ？」

そこに妹紅も入ってくる

レミリア「下半身あつたわよ！しかも引き摺られて持つてこられたわよ!？」

零「どうやら俺達何かに取り付かれたらしいぞ？」

妹紅「不味いなそりや。ひよとしたら私達もうすぐしんじやうかもね」

霊夢「あんたらの前に誰かが真つ二つになって死んでんのよ!？」

俺達がそんな会話をしている間永琳がプルプルと震えていた

零「ち、違うんだよ！これはあれだ。不慮の事故だったんだ!？」

永琳「零……妹紅……」

このままじゃ殺される

そう思った

しかしそれは永琳の一言で肩透かしを食らう

永琳「今すぐ家中の斬魄刀を用意して頂戴！今のうちに

姫様で試したい薬があるの!？」

零「わ、分かつ輝夜「させるかアアアアアアアア!!」

輝夜が俺と妹紅の頭をナイフで刺した

頭から血が吹き出し俺達は倒れる

輝夜「何人が気絶してる内に薬の実験台にしようとしてんのよ!」

そう言つて輝夜は俺の背中を這い下半身と合体する

永琳「姫様!良かった生きてらしたのね!」

輝夜「そもそも私は不老不死よ?死ぬわけ無いじゃない!それと永琳!私に何の薬を

使おうとしたの?」

永琳「え?ゴキブリと意思疎通出来る薬ですけ

ど・・・?」

輝夜「・・・・・・」

永琳の言葉に輝夜が絶句する

それは霊夢達もであった

霊夢「あいつら、何やってんの?」

紫「さ、さあ・・・」

レミリア「でも今なら話が出るんじゃないかしら?咲夜」

咲夜「はい」

零妹紅「イタッ!」

俺と妹紅は地面に落ちた衝撃で目が覚めた

紫「零、お願いがあるのだけど？」

俺は紫を見る

零「あくハイハイ。言ってきましたよ」

こうして俺は輝夜達に歩く

輝夜「あら？どうしたの？私達につく気になったの？」

零「・・・座れ・・・」

輝夜「え？」

零「座れ！」

輝夜「え？あ、はい」

輝夜が座るのを見て俺も胡座をかく

零「まず、この異変はお前を月から守る為だと推測している。合ってるか？」

輝夜「そこに鈴仙も入れると良いわ。・・・ええ、正解よ」

零「そうか・・・」

俺は頭をかく

そろそろ小傘も起きる頃だろうか

零「あのな、輝夜・・・ここは霊夢と紫・・・いや、藍が管理してる結界で隠れてる

から月の連中が来ることは出来ねえのさ」

輝夜が驚いた顔をする

後ろでは「私は?ねえ私は?」「うるさい!」「痛いッ!」等の会話も聞こえる

輝夜「……………それを証明する事は?」

零「……………あるにはある。でもそれには多少の危険がある」

輝夜が目を閉じる

輝夜「そう……………なら五つの難題三題目よ。月の連中が来れない事を証明してみなさ

い」

俺は輝夜の目を見る

さつきとはうってかわってとても真剣な目

零「分かった。じゃあ月を返してくれないか?」

輝夜「どうして?」

零「簡単だ。来れるか来れないか、そんなの道を作つてれば分かる」

輝夜「……………つまり危険があるのは貴方では無く私達つて事?」

零「……………そうだ」

輝夜「断るわ」

そう言うと思つた

だから俺は土下座をして頭を床に擦り付ける

零「頼む！これしか無いんだ！てみるも鈴仙も永琳もお前も！俺が護る！お願いだ！月を返してくれ！」

この部屋に要る全員が俺を見る

輝夜「………永琳」

永琳「はい」

輝夜「月を返して上げなさい」

永琳「………はい」

これを聞いた霊夢は

霊夢「紫、全部戻しなさい」

紫「ハイハイ」

こうして俺は今から朝になるまで永遠亭の警備に回った

そして結局月の連中は来なかった

参上!草の根妖怪ネットワーク!

あれからまだ午前8時だ

何とか小傘が起きる前に帰って来れたので手紙を回収してご飯を作った

小傘「おはよう、零ちゃん」

寝ぼけ眼で小傘がこっちに歩いてくる

零「おはよ。ほら、今日は宴会あるらしいから仕事は五時までな」

小傘「はくい」

小傘が食べ始めた所で蛮奇も来た

零「おう。飯ならもう出来てるぜ」

蛮奇「・・・・・・・・・・」

俺は蛮奇を呼ぶが蛮奇はその場で立ち止まって動かない

零「どうした?」

蛮奇「・・・・・・・・・・何でも」

零「?」

俺は気になって蛮奇に近付く

蛮奇の顔を見ると汗をかいている

そのまま俺は玄関まで行き扉を開ける

すると二人の少女が倒れてくる

小傘「え!?何!?!」

そのまま小傘も走ってくる

俺は二人を見る

狼と人魚の少女だ

零「あの・・・お宅ら誰?」

俺がそう聞くと二人は飛び上がり何かのポーズを取る

「私は竹林に住む狼女、今泉影狼!」

「霧の湖のプリンセス、わかさぎ姫!」

蛮奇「ひ、人の恐怖と頭を飛ばす飛頭蛮・・・赤蛮

奇・・・／／／／

蛮奇も後ろで顔を赤くして叫ぶ

影狼わかさぎ姫蛮奇「二我ら（・・・）!草の根妖怪ネットワーク（・・・／／／／／）

!

零「あゝハイハイ。そう言う方々ね。飯ならまだあるから食べてきな」

こうして俺は部屋に戻る

零「お前も、苦勞してんだな・・・」

蛮奇「わかつてくれる?」

零「ああ・・・」

蛮奇を通り過ぎる時にはこのような会話が起こった事はここだけの秘密である

さて皆でご飯を食べ終わり話を聞く事にした

零「それで・・・その草の根妖怪ネットワークさんが家に何の用で?」

俺は緑茶を飲みながら聞く

わかさぎ姫「蛮奇ちゃんの心を射止めた方を見に来たんですよ」

そんな奴が居るんだな〜と思いつつながら蛮奇を見る

顔を赤くして座っている

零「ん?じゃあ何で家にくるんだ?」

影狼「え?」

零「え?」

影狼の反応に俺も疑問を抱く

そこで考える事にした

家に来ると言う事は家に蛮奇の好きな奴がいると言うことだ

つまり俺か小傘……

ここから導き出される答えは……

零「あく！ハイハイ。そゆことね！」

俺は立ち上がる

零「とりあえず影狼さんとわかさぎ姫さんはこつちに……」

小傘「零ちゃん？」

零「悪いな小傘しばらく待っててくれ」

そう言つて俺は影狼さんとわかさぎ姫さんと一緒に部屋を出る

そして踵を返して外から二人を見る

影狼「……何してるの？」

この状況に影狼さんが聞いてくる

零「そりゃ小傘と蛮奇を二人にして蛮奇の小傘への想いを確かめてんだよ」

わかさぎ姫「え？」

零「え？」

わかさぎ姫「ど、どうして？」

わかさぎ姫さんが聞いてくる

零「どうしてって蛮奇が好きなのは小傘何だろ？」

わかさぎ姫影狼「「え？」」

零「え？」

零わかさぎ姫影狼「「え？」」

とうとうお互いのえ？が重なった

そのままわかさぎ姫さんがため息を吐く

わかさぎ姫「これじゃあ蛮奇ちゃんも大変ね」

影狼「そうね」

零「え？」

俺は聞き返すがわかさぎ姫さんと影狼さんは外に行こうとする

わかさぎ姫「じゃあ私達はそろそろお暇させてもらうわ」

影狼「蛮奇ちゃんよろしくね」

零「あ、ああ。そうだ！今日竹林の永遠亭で宴会だから良かったら来てくれ！」

そのまま二人は出ていった

零「本当に何なんだ？」

こうして非日常の中の至って穏便な日常が今日も過ぎて行く

やはりと言うか宴会回

さて、日常が過ぎ去りとうとう非日常が始まる

零 「はい、宴会の時間だ女郎ども。行きますよこーがささん蛮奇つきさん」
俺は今一重に変なテンションである

蛮奇 「何あれ？」

小傘 「さあ？」

後ろにも引かれている

・・・・・・・・何故こうなっているのか

それは数時間前にさかのぼる

等と言うテンプレは無くただ単に宴会が楽しみすぎてこうなってるだけなのだ

零「……………何か、ごめん」

小傘「あ、戻った」

てことで家を出る

小傘「そう言えばどうして今日宴会があるの？」

零「そ、それはだなく」

今回小傘に内緒で異変を解決したので黙っている

一昨日注意されたばっかだからってのもあるが・・・

蛮奇「竹林の連中の仲間入り宴会だつてさ」

零「そう、それ！」

蛮奇が助け船をくれた

おそらく蛮奇はあの時起きていて月の異変に気づいていたのだろう

蛮奇「貸しだから」

耳元でこそつと言つてくる

零「ああ、ありがとな」

ようやく竹林に来た

零「妹紅の奴は居ないな・・・」

まあ何回も来ているので何となく道は覚えている

零「てかお前ら飛んで行けるだろ？俺は歩いて行くから先に行つてくれていいんだぞ？」

そう小傘も蛮奇も飛べるのだ

現に上では空を飛んで宴会に向かう奴らもいる

小傘「ううん。零ちゃんと一緒に行く！」

小傘が右腕にしがみつく

そして何故か左腕に蛮奇もしがみついている

零「あの・・・蛮奇さん？」

蛮奇「本当は先に行きたいけど仕方なく！零と行って上げる」

零「は、はあ・・・それは、ありがと？」

とりあえず歩く

後ろからカシヤカシヤとカメラのシャッター音が聞こえる気がするが気のせいと言
うことにしておこう

三十分経ちようやく永遠亭に着く

零「到着。さ、こっからは自由行動。楽しんできな」

小傘蛮奇「は〜い」

今居るのは今回の異変の関係者、バカルテット+α、三月精、残りの紅魔館メンバー、
萃香、華仙、草の根妖怪ネットワークの二人、後はプリズムリバー三姉妹、文、後阿求
とたまに人里の甘味処で見る少女だ

零「賑わってんな〜」

輝夜「おかげさまでね」

そこに輝夜が近付いてきた

輝夜「どう？一緒に呑む？」

零「ああ」

こうして俺達は永遠亭の屋根に登った

輝夜がお猪口に酒を入れて俺に渡す

今度は俺が輝夜のお猪口に酒を入れる

輝夜「いい忘れていたわね。難題解決おめでとう」

零「あ？あんなの解決じゃねえ。・・・只の力業だ」

俺は月を見る

それに合わせて輝夜も月を見る

輝夜「それでもね、私は嬉しかったわ。私は永琳、鈴仙、てゐ、兎達・・・皆家族だ

と思ってるわ。それを貴方は守ってくれると言った。鬼は嘘は付かないのでしょ？」

零「オラア鬼は鬼でも嘘を平気で付く天邪鬼さ」

輝夜「それでもよ。この輝夜姫に約束をしたんだから守りなさいよ？」

零「ハイハイ」

早々破るつもりもないので俺は適当に返事をする

俺は摘まみの団子を食べると立ち上がる

零「んじゃ色々回ってくらあ」

輝夜「いってらっしやい」

まず来たのは紅魔館メンバーの所だ

零「よ、楽しんでるか？」

レミリア「愚問ね。勿論よ」

零「にしてはフラン以外動いて無さそうだが？」

そう、フランはさつきからチルノ達と遊んでいる

レミリア「あの子は今まで地下室に閉じ込められていたの。・・・私が彼女の能力を恐れてね」

レミリアが話し出すと回りも少し暗い顔になる

レミリア「それから495年、ようやく外に出られる位には落ち着き始めた。だから

フランにはその分たくさん遊んで欲しいのよ」

レミリアが話し終わり俺は酒を一杯呑む

零「・・・大切なんだな」

レミリア「ええ」

レミリアが微かに笑う

レミリア「それと・・・」

レミリアが横に動き後ろからパチュリーが来る

パチュリー「その・・・助けてくれて、ありがとう」

う・・・」

零「別に礼を言われる筋合いはねえさ。オラアお前とお前の使い魔に死んで欲しくなかつただけだよ」

俺がそう言うのとパチュリーと小悪魔が顔を赤らめる

零「？何か不味い事言ったか？」

そう聞くと美鈴がため息を付く

美鈴「だから零さんは鈍いんですよ。私にもあんな事しといて・・・／／／／」

咲夜「あんた美鈴に何したのよ？」

零「何したって・・・」

俺は少し考える

美鈴と会ったのは確か紅霧異変の時だ

あれ一度だからおそらくそこしかない

零「ああ、こちよこちよした」

『・・・・・・・・・・・・・・・・え』

零「いや、だから！妹紅から木刀貰う前だったから素手で戦う訳よ。でも確実に拳法使いだと思っただからこちよこちよこちよしてしばらく動けない用にしたんだけど・・・」

『・・・・・・・・・・・・・・・・』

美鈴 「／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／」
全員が悶絶している
零 「えつと・・・俺、行くわ」

パパラッチと阿礼乙女と貸本屋

今度来たのは阿求達の所だった

零「よう、阿求。元気か？」

阿求「はい。まだお酒を呑める歳ではないのでミステリアさんにオレンジジュースを貰いました」

そう言つて二人はオレンジジュースを飲んで

零「んで、そつちの嬢ちゃんはたまに甘味処で会う・・・」

???「本居小鈴です」

小鈴が笑いながらそう言う

零「俺は風切零だ。よろしく」

小鈴「うん。所で人里の甘味処だどこが一番？」

零「そりや人里の南門の近くにある甘味処だろ」

俺がそう言うのと小鈴の顔が輝く

小鈴「そうですよね！やっぱり甘味処はあそこですよ！

そして極めつけのスイーツは！」

零小鈴 「イチゴパフェスペシャル（！）」

俺と小鈴の声が合わさる

小鈴 「私零さんと気が合うみたい！」

阿求 「良かったね、小鈴」

小鈴 「うん！」

何かスゴい喜んでくれている

文 「アヤヤヤ！これはまた大スクープです！題名は『又々発見!? 万事屋零ちゃんの妻

！』これで決まりです！」

零 「これで決まりです！じゃねえだろ！」

俺は立ち上がり文の頭を掴む

零 「何勝手に人のデマ流してんだコラ！てかまたって何だ！俺が持てない非リアって

事くらいテメエが一番分かってんだだろうが！」

俺は文を放して泣く

小鈴 「えつと・・・大丈夫。零さんは一人じゃない。私達が居るよ」

小鈴が俺の頭を撫でてくる

零 「ウオオオ、ありがとう小鈴ちゃん！」

俺は小鈴の胸が顔を埋めて泣きじゃくる

小鈴「れ、零さん!?!?!?!?!」

文「酔ってますね・・・」

文がそう言うのと小鈴と阿求が俺を長椅子に寝かせる

阿求「零さんって何時もこうなんですか?」

阿求が文に聞くと文は手帳を開く

文「そうですね・・・何時もちやらんぼらんで子供ぼくって、でもやるときはやる人です」

文が熱く語るのを二人は呆然と聞く

文「つて、これ全部取材して分かった事ですけどね」

阿求「そう言えば零さんって地獄から戻って来たつ

て・・・」

文「はい、本当ですよ。後にあそこで働いている久侘歌様に聞いたのですが彼散歩で地獄まで来たみたいで昔色々やっていて無限地獄二年の判決が下ったんです」

小鈴「そんな事が・・・」

文「でもそんな日、地獄で囚人達が暴れ始めました。彼はそれを止める為に無断で無限地獄を飛び出しました。それは地獄の女神の依頼で報酬は釈放だったと」

阿求「・・・・・・・・・・・・・・・・」

阿求と小鈴がまた呆然となる

小鈴「本当にスゴい人ですね。零さんって……」

そう言つて小鈴は寝てる筈の俺を見る

小鈴「あれ？零さんは？」

そこに俺は居なかつた

二回と思つたか？残念三回だ！

零「Hey! あの子は太陽の小町、angel! やや乱れてYosay!」
俺は酔いながら歩く

酔っているせいで自分が何を歌っているかも分かっていない

零「あ？」

そんな時竹林に人影が見える

俺がその人影に近付くと徐々に人影の頭から角が生えているのが分かる

零「おゝい、誰だか知らねえがそんな所に居たら危ねえぞ。今ここに居ちや妖怪と来たら即退治の鬼巫女が退治しにくんぞ」

??? 「っ! 零……」

零「あれ〜? 慧音〜? 何で角が生えてんだ〜」

そこに居たのは慧音だった

慧音「……………酔ってるのか？」

慧音は俺が手に持っている酒を見る

慧音「神便鬼毒酒か……………」

零「何らそりゃ〜」

少し失礼作者です

神便鬼毒酒とはかつて源頼光が酒呑童子、もとい萃香を倒すのに使った酒である
つまりはものすごい度数の高い酒なのだ!

・・・変なのが割り込んだ気がするがまあ酔ったせいだろう

慧音「お前は・・・どう思う?」

零「あ?」

慧音「今の私を見てどう思う」

俺は考える、と行っても酔っているのでまともな思考は出来ていない

零「どう思うって・・・そりゃバケモンだな」

慧音「そうか・・・だが、それも慧音ら」ええ?」

零「正直俺は人間らろうがバケモンらろうがどつちれもいいのさ。そこに居るのは間違
いなく俺が知っているお前何だ。確かにお前はバケモンなのかもしれない。表の面
のお前なのかもしれない。裏の面は残虐非道でくそつたれらろうがどつちもお前な
のさ。らつたら俺は表の面を信じるね」

それを黙って聞いていた慧音がフツと笑う

慧音「表の面信じる、か・・実にお前らしいな」

俺は立ち上がる

そしてそのまま倒れるのだった

??? 「目覚めよ。秘めし内なる力解放する時が遂に来た。そつと開くのだ。その目を。その閉じられた限界への扉を」

俺は起き上がる

先程までの酔いはない

??? 「目覚めよ！」

辺りを見ると真つ暗だ

零「んだこれ・・お先真つ暗処か視界0%だよ・・もう良いや、寝よ・・ZZZ

Z

こうして俺はまた眠りに付く

??? 「目覚めよ！秘めし内なる力、解放する時が遂に来た」

零「うつせえな・・誰だよ？俺の眠りを妨けても良いのはカルピス王国のカルピス

王女だけだよ？」

??? 「目覚めの時は今だ!」

零 「テメエのせいで今何時かもわかんねえんだけど?」

??? 「いまは朝の七時だ」

零 「ご丁寧にどうも。じゃ、十時になったら起こしてね」

??? 「私は何か? 目覚ましか!」

段々声が大きくなってくる

零 「そうだよ。これは夢何だから目覚ましの音が夢に入ってきてても不思議じゃ無いぞ

?」

??? 「・・・あの、本当に起きてくれないか? これじゃあ話が進まないんだ。無駄

に字数を使ってるだけになってしまう」

零 「ZZZ・・・」

??? 「起きろっていつてるだろう! いい加減にしろ! 何で異空間で二度寝!?! お前空気読め!」

零 「んだよ・・・今日は休日だろうが。何時だと思ってるやがる」

俺は声がいい加減ムカついて起きる

??? 「休日だろうと平日だろうともう社会人は活動しているぞ!」

零 「てか、お宅誰?」

??? 「私か？私は魅魔。怨霊さ」

魅魔の言葉に俺がびくつく

怨霊・・・つまりはスタンドだ

零 「まあこんな美人なスタンドなら大歓迎だけど・・・」

目の前に居るのは緑髪の魔女スタンドだ

魅魔 「はあ、お前のそう言う所嫌いでは無いぞ？」

零 「そりやどうも」

魅魔 「そろそろ別れの時だな」

零 「は？お前何のために来たんだよ・・・」

魅魔 「字数的なあれだ。まあまた何時か会おうぞ」

最後にメタ発言を残して目の前が真っ白になった

万事屋零ちゃん危機一髪篇

その男、ハゲである

目が覚める

ゼロ距離で小傘の寝顔がある

俺は布団から手を出して小傘の頭を撫でる

零「つたく、本当にお前はガキだな」

そう呟いて反対側を向く

今度らゼロ距離で蛮奇の少し不服そうな顔があった

蛮奇「……………変態」

零「可愛い物があつてら愛でたくなるのは生き物の性だ
と思うがね」

そう言つて俺は蛮奇を撫でる

今度は少し緩んだ顔になった

蛮奇「……………もう少しこのままで居させて」

零「あ？ああ」

俺はしばらく蛮奇を撫でていた

小傘「うくん……」

小傘も目が覚めた様で動き出す

零「はい、終わり。俺等も起きようぜ」

蛮奇「あ……」

俺は起き上がる

小傘「零ちゃん、おはよう」

零「おはよう」

そして俺は頭に違和感を覚えた

俺は頭に手を乗せる

無い

何がつて？

それは人類の殆どが持っているもの

ヨーロッパではそれで塔を作り高さを競っていた物

髪の毛だ

零「ん？んんんん？」

いや、実際横に髪の毛がある

つまり……

零「何かザビエルハゲになってるウウウウウ!!!」

小傘「あ、本当だ」

零「今気付いたのかよ!」

蛮奇「何でそうなったの?」

零「こつちが聞きてえよ……」

俺はもう一度頭を触る

うん、見事なペツちんプリンだ

零「俺、もう外に出られねえよ……」

蛮奇「帽子とか株ったら良いじゃん」

零「それもそうか……」

零「てことで永遠亭に来ました!」

俺はとりあえず頭にバンダナを付けてザビエルハゲを隠している

零「永琳ならこれ何とか出きるかもしれないし」

小傘「うん!」

蛮奇「ハイハイ……」

永琳亭の門を潜る

鈴仙「あれ？零さんどうしました？」

零「ああ、実は・・・」

俺はバンダナを取る

零「こう言う感じでした・・・」

鈴仙がこれを見てハツした一言、それは・・・

鈴仙「何ですかその河童頭!」

である

零「河童!」

小傘「あくそれあちきも思った!」

蛮奇「私も」

零「酷くね!」

俺は河童だといわれて少々凹んだ

零「だから永琳に育毛剤作ってもらおうと思つて」

鈴仙「分かりました!師匠の所に案内しますね!」

こうして俺達は鈴仙の案内で診察室に来た

永琳「あら、零じゃない。どうしたの今日は?」

零「いや、その……」

永琳が俺の頭を見る

永琳「ああ……」

零「これを直して欲しいんだ……」

永琳「それは出来るんだけど……今材料が無いのよ」

零「材料？」

永琳が頷く

永琳「ええ」

小傘「その材料って何なの？」

後ろに居た小傘が聞く

永琳「それはね、青薔薇の蜜よ」

零「青薔薇の蜜？何処に有るんだよ。それ……」

永琳「それは……太陽の花畑よ」

零小傘蛮奇「……え？」

こうして俺は地獄への片道切符を切るのだった

零死す！

幻想郷縁起・・・妖怪の危険度や対象方が記されている

その中で断トツの危険度、危険度極高の妖怪が居る

伊吹萃香、西行寺幽々子、レミリア・スカーレット、フランドール・スカーレット等々色々居るわけだが

その中の一人、風見幽香は太陽の花畑に住んでいた

やって来ました太陽の花畑

小傘と蛮奇には危ないから永琳亭に残ってもらった

そして太陽の花畑の入り口に来たわけだが

零「綺麗だな・・・」

一面に向日葵が咲いている

今は梅雨であり向日葵には早すぎる

零「たく、季節には季節ごとの花の美しさってもんがあるだろうに・・・」

??? 「あら、例えばどんな花かしら？」

零「そうだな・・・紫陽花とかか？」

???「そう・・・考えておくわ」

俺は声の主を見る

緑髪で白の傘で明らかに俺よりも背が高い女性

???「ところで貴方は何しに来たのかしら？」

零「あ？青薔薇の蜜を風見幽香って奴に貰いに来たんだよ」

???「ふん・・・」

女性が俺を見ってくる

???「ま、いいわ。分けて上げる」

零「分けて上げるってお前風見幽香じゃねえだろ？」

???「・・・自己紹介がまだだったわね。私が風見幽香よ」

零「はあ!？」

俺は女性、幽香のカミングアウトに驚く

零「てか、マジで青薔薇の蜜をくれるのか!？」

これは生存出来る!?!と思った瞬間・・・

幽香「ただし、条件があるわ」

零「条件？」

幽香「ええ。貴方、私と戦いなさい。そして勝つことが出来たら上げる」

飛んでもねえ死亡フラグを落としてきやがった

幽香は不敵に笑うと傘を閉じて俺に殴りかかる

俺が避けるとさつきまで居た地面が抉れて十メートル位の高さまで跳ねる

それを幽香は傘で射つ

傘の使い方を完全に間違っている

小傘が居ればガチギレもんである

俺はそれを木刀で軌道を変える

今度は俺が斬りかかるが幽香が空を飛ぶ

零「ありや、こりや俺も空飛ぶ練習とかした方がいいかな？」

幽香「ふざけてるの？」

幽香がいきなり話す

零「あ？」

幽香「ふざけてるのって聞いているねのだけども？」

零「別にふざけてねえよ。そもそもそんな殺気全開で殺しにかかっている奴相手にふざ

けろって方が無理だよ」

幽香「!?・・・さすがね。でもね、一つ言っとくわ」

次の瞬間幽香が俺の目の前に現れる

零「な!？」

そして傘で殴る

零「ガッ!？」

幽香「貴方、このままじゃ死ぬわよ？」

現在進行形で殺しにかかっている奴が何を言っているのだろうか

口から血と胃の内容物が出ている

それを全部吐き出して立ち上がる

零「んな事してんだよ……。このままじゃ俺は誰も守れねえ……。でもな、俺

だつて進歩はするんだぜ」

幽香「？」

俺はゆらゆらと歩きだす

俺は足に力を込める

少しずつ浮遊していく

零「おとと……難しいな……」

幽香「ふくん……飛べるように、ね」

幽香が口だけ笑う

幽香「面白い・・・面白いわ！」

幽香が傘を振りかざす

俺はそれを木刀で弾く

幽香「誉めて上げるわ浮気者！私を個々まで楽しませたのだから！」

零「浮気者って・・・俺達初対面だよね？」

幽香「・・・あら？私の所有物の分際でご主人様の事も忘れたのかしら？」

幽香の攻撃は更に激しくなる

息も瞬きも出来ない

それをすれば確実に死ぬ

幽香「さつきより動きは鈍いわよ？」

零「・・・」

幽香「だんまりかしら？」

俺は辺りを見渡す

こう言うのは西行妖いらいだ

使える物はない

憑依を使おうにもその隙もない

自力でどうにかするしか無いのだ

何とか軌道をずらして空に打ち上げた

幽香の青くなつた顔が戻っていくのが見える

俺はそれを最後に眠つた

風切零（ドS）と風見幽香（ドS）

目を覚ますと知らない天井だった

零（確か幽香と戦って負けて・・・あれ？その後どうなったんだっけ？）
如何せん記憶が無い

最近そんな事が多すぎてもうなれてしまった

幽香「あら？起きた？」

声が聞こえて辺りを見ると幽香が机で紅茶を飲んでいた

幽香「貴方あの後倒れて大変だったのよ？」

零「そりや悪かったな」

俺が礼を言うのと幽香は暗い顔をする

幽香「何で・・・守ってくれたの？」

零「あ？」

幽香「私の花、守ってくれたんでしょ？」

零「ああ、だって・・・あの花はお前にとって大事な物らしかったからな」

そう、あの時幽香の顔は真っ青だった

その理由は下を見て分かった

綺麗な向日葵達、これは全て綺麗に咲いていた

きつと幽香が端正込めて咲かせたのだ

零「だから守った。テメエの花（魂）を気にしない程俺は出来た人間じゃねえのさ」

俺がそう言うのと幽香が笑った

幽香「そうね、貴方はその頭と一緒にでそう言うひねくれた人だものね・・・」

零「・・・さつきからあんた俺を知ったような口調だが俺とお前はと言う関係なんだ？」

俺は幽香に気になる事を聞く事にした

幽香「そうね・・・貴方が鬼だとしたら私は桃太郎、もしくは浦島太郎と乙姫か・・・

ま、好きなように考えれば良いわ」

全く分からん・・・

一体どういう意味なのだろうか？

零「あ、それで青薔薇の蜜つて分けて貰えるのかな？」

幽香が唸りながらこちらにくる

幽香「うゝん・・・そうね・・・」

幽香は俺の前で立ち止まり俺の顔と同じ位置に顔を持つてくる

零「?」

次の瞬間幽香の顔がゼロ距離まで来た

そして唇が重なるなを感じた

零「な、何してんのお前!」

俺が聞くと幽香が笑った

幽香「貴方は私の所有物よ。今回だけは浮気を許して上げる。でも次からは許さないわよ」

そう言つて幽香は金色の液体に入った小瓶を渡された

正直浮気の件は一切分からないどころか付き合つてすらいない

零「おらどつちかかっつたら縛られるより縛りたいんだけどな……」

幽香「同意見ね」

零「ま、ありがたく頂いとくよ」

こうして俺は青薔薇の蜜を手で永遠亭に飛んで帰るのだった

三人称視点

幽香「……」

幽香は飛んで行く零を見る

幽香「……………紫、居るんでしょ？」

幽香がそう言うのと幽香の後ろからスキマが現れた

しかしそこから現れたのは紫ではなく藍だった

幽香「あら、狐の方が来たの……」

藍は殺気を放ち幽香に近づく

藍「風見幽香……お前零が力も記憶も封印されているのは知っているだろう？」

幽香「ええ、知ってるわ」

幽香がそう言うのと藍が幽香のむかぐらを掴んだ

藍「知っていて何故戦った？」

さつきよりも殺気がましている（ダジャレじゃないよ？）

幽香「……………彼は何れこの幻想郷を滅ぼすわよ？生きとし生ける全ての生物が

消えるでしょうね。その時貴女は彼を殺せるかしら？少なくとも私は出来ない」

幽香が空を見る

それを藍はただ黙ってみているしかなかった

悪戯兎、餅をつかずに嘘をつく

幽香に青薔薇の蜜を譲ってもらい俺は永遠亭に飛んで帰っていた

零「たく、何で俺がこんな目に会うんだよ・・・」

ザビエルハゲから始まり幽香との死闘と精神も体力も既に限界だ

俺は永遠亭の門の前で降りて門を潜る

てゐ「おや、どうしたウサ？」

そこに居たのはてゐだった

零「ああ、永琳に治して欲しい事があつてな、でもその薬の材料が足りなかったらしくてちよつと取りに行つてた。んで今はその帰りさ」

てゐ「それはご苦労様ウサ。で、どんな症状ウサ？」

俺はてゐに聞かれてバンダナを外す

てゐ「ああ、こりや大変ウサね・・・。まあ、私からしたら面白いの一言しか無いウサ」

零「・・・やっぱお前性格悪いわ」

てゐ「褒め言葉として受け取っておくウサ」

俺はてゐの隣を通り抜ける

零「あ、そういやさ……」

てゐ「ん？」

零「そこ、落とし穴あるぜ？」

てゐ「え？ウサア！」

俺は自分の掘った穴にてゐを嵌めて永遠亭に入るのだつた

鈴仙「あ！零さんおかえりなさい！」

玄関で迎えてくれたのは鈴仙だつた

零「ただいま。貰つてきたぜ」

俺は鈴仙に青薔薇の蜜を見せる

鈴仙「そうですね。それにしても心配しましたよ？一日も帰つて来ないんですもん」

零「……今何と？」

鈴仙「え？一日も帰つて来ないんですもん」

零「……」

俺は絶句する

まさかそんなに眠っていたとは……

幽香やっぱりスゲエな……

じゃねえ！てことは幽香は寝ずに俺の看病してくれていたと言うことか？

いや、机に突つ伏して寝てたのか？

どつちにせよ悪いことしちまった

零「あ、それじゃあ小傘達はどうしたんだ？」

鈴仙「小傘ちゃんと言奇さんは一度お家に帰ってもらいました。場所が場所だけに……」

皆に苦勞をかけたらしい

そうこうしている間に永琳の部屋に着いた

俺は襖を開ける

永琳「姫様、流石にそれはやりすぎです」

輝夜「わ、悪かったわよ……」

そこには永琳が輝夜を説教している姿があつた

白髪お姉さん説明中

零「なるほど……つまりは俺がザビエルハゲになつたのは輝夜とてゐるが俺の呑んだ神便鬼毒酒に永琳のゴキブリと意志疎通出来る薬を入れたらこうなつたと？」

輝夜「……」

俺が輝夜に質問すると輝夜が目を反らす

零「おい、こつち見ろ」

輝夜「ああ！もう！悪かったわよ！」

零「まあ、なおんなら怒っても仕方ねえか……」

俺はそのまま青薔薇の蜜を机に置く

零「んじゃ、俺はそこら辺の回ってくるわ」

こうして俺は永遠亭を出る

一応てゐを穴から出さしてそこら辺にくくりつける

そして俺が来たのは妹紅の家に来る

扉をノックすると妹紅が出てくる

妹紅「零か、どうした？」

零「話に来た」

俺がそう言うのと妹紅が家に入れてくれた

妹紅「で、話って？てか何でパンダナ？」

俺は妹紅の質問を無視して話を始める

零「俺は……万事屋だ」

妹紅「知ってるよ」

零「依頼であれば犬の散歩から戦争を終焉に導く所までやる」

妹紅「ああ」

零「これから何万何億年の時間、俺とお前、輝夜と永琳は生きるだろう。例えば地球が滅びて俺達以外の生物が生き絶えたとしても・・・」

妹紅「そうだな」

零「そんな時俺は正気を保ってられないと思う」

妹紅の眉が上がる

妹紅「そりやあ今のお前の精神は人間だ。当たり前前だな」

零「だからこそ俺は、人間を止めようと思う」

妹紅「はあ!?!」

零「もつと簡単に言えば俺は人間を止めるぞ○○○○オオオオ!だな」

妹紅「どこぞの吸血鬼風に言わないでも分かるわ!つてそうじゃなくてお前それは意味が分かっていってんのか!?!」

零「分かっている。でもこうしないと俺は皆を守れねえ!」

背後にドンツ!と聞こえた気がした

妹紅は下を見る

妹紅「何で……」

零「？」

妹紅の顔から水が垂れる

涙だ

妹紅「何でそれを私に言うんだよお……」

零「ここに来て一番世話になってるからな」

妹紅「何時も何時も、お前は私を心配させて、本当はお前に戦って欲しくないんだ！」

妹紅が叫ぶ

零「……妹紅」

俺は妹紅の頭に手を置く

零「俺は何も心まで人間を止める訳じゃない。だから安心してくれ。俺は何処にも行

きやしねえ」

妹紅が泣き崩れてしまった

俺は妹紅が泣き止むまでずっと背中を擦り続けた

何故山に登るのか?そこに山があるからさ

結局永琳の薬を吞んで何時ものフサフサに戻った

そして次の日

零「よし、山に行こう」

蛮奇「い、いきなりどうしたのよ?」

ソファで右隣に座っている蛮奇が聞いてくる

零「いや、たまには皆でピクニックでもと・・・」

小傘「ピクニック!? 楽しそう! あちきも行く!」

てことで来ました妖怪の山!

零「さて、弁当はちゃんと持ったか? おやつは三銭までだぞ」

蛮奇「小学生の遠足か!」

蛮奇に突っ込まれる

零「良いじゃねえの。どうせこの編何て東方風神録編までの繋ぎだから」

蛮奇「メタい!」

零「大体何だよ万事屋零ちゃん危機一髪編って・・・」

完全に俺が命の危機に瀕してゐるじゃん。てか既に瀕したし、頭と身体で瀕したし！」俺はザビエルハゲと幽香を思い浮かべる

小傘「そもそもこの編を秋まで続けようとしてゐる時点で作者の行き当たりばったり感が滲み出てゐるよね」

蛮奇「小傘もそう言う事言わない！」

俺と小傘の爆弾発言に驚く蛮奇

蛮奇「……てか、え？この編秋まで続くの？」

零「あ？ああ、作者が言うには「秋姉妹は秋に出したい！」らしい」

小傘「たぶん今までで一番長い章になると思う」

零「て言うか原作がそもそも秋だし、オマケに作者は原作未プレイ、戦闘描写下手なもそも書くのが下手とか言う負の三拍子だからね」

蛮奇「もういい加減にしてよ。突っ込むのもめんどくさいよ……」

二人にため息を付く蛮奇

てか正直言うところの小説ってソードゲンソウオンラインの次回作までの繋ぎだしね

蛮奇「おい腐れ作者！」

おっと失礼

零「まあメタい話はこれくらいにしてさっそく登るか」

俺は歩き始める

後ろから小傘と蛮奇も来ている

流石幻想郷と言うべきか、自然も豊かだ

空気が美味しい

そう思った時

目の前に誰かが降りてきた

姿を見ると狗耳に尻尾の少女

頭に変な帽子?が着いている

零「天狗か?」

???「その通りです」

少女は太刀を俺に向ける

???「私は哨戒の白狼天狗、犬走権。ここは妖怪の山です。即刻出ていってもらいます

!

零「アブな!」

権が太刀で斬り掛かってきた

俺はそれを後ろに飛んで避ける

小傘蛮奇「零ちゃん(零)!」

零「ここは戦略的撤退！」

俺は小傘と蛮奇を担いで山を走った

椀「待ちなさい！」

何とか椀を巻いて来たのは滝壺だった

零「はあはあ、何なんだよ？」

蛮奇「妖怪の山は昔鬼が支配してたみたいだけど今は天狗が支配してるの。天狗って結構排他的で余所者は追い出される」

零「なるほど・・・」

俺は川に近付いてきて水を救おうする

すると

???「ひゅい!?／＼／＼」

声が聞こえた

何故か柔らかい感触もある

どんどん何かが浮かび上がってきた

???「な、なんだい君！いきなり人の胸もみしだいて！」

零「え？あ、悪い」

俺は手を離す

零「えつと・・・誰?」

俺は目の前の青服の少女に聞く

???「私かい?私は河童の超妖怪弾頭、河城にとりさ。よろしく盟友!」

零「河童あ?嘘着け!頭に皿がねえじゃん」

にとり「君は私の胸を揉みしだいた上に恥部を晒せつて言うのかい?」

小傘「零ちゃん・・・」

蛮奇「最低・・・」

後ろで二人が冷たい目を向けてくる

零「何か・・・ゴメン」

にとり「ハハハ、良いさ」

・・・そう言えば西行妖と戦っていた時に思い出した記憶の中にとりと椀と

文が居た

零「本当・・・俺って何なんだろう・・・」

にとり「そんなことは誰にも分からないよ。神のみぞ知るって奴さ」

零「・・・それもそうだな。ありがとよ」

俺はにとりを撫でる

撫でた瞬間数ヶ所で雷が落ちた

小傘「何!?!」

雷が落ちた場所が燃えている

零「にとり、二人を頼む・・・」

にとり「・・・・・・・・気をつけて」

零「ああ」

俺は火の元に飛んで行くのだった

ゴメン・・・やっぱ入れるわ秋姉妹

零「おいこら糞作者！秋姉妹秋まで出さないんじやねえのかよ！」

いや、異変がそもそも秋だしね

零「はあ、この回終わったら待ってる」

と、言うことで俺は飛んだ

零「・・・？芋の匂い・・・」

後キノコ

燃えている場所に辿り着くと鮭とキノコが暴れていた

周りでは白狼天狗達が倒れている

俺は木刀を抜いてキノコを斬り着けようとする

しかし鮭が手にもった鮭で防ぐ

零「食べ物武器にするなよ！」

俺は鮭を弾く

今度はキノコが胞子を巻く

くしやみが止まらない

俺はカードを取り出す

零「憑依『人間ヴォルケイノ』！」

俺は妹紅を憑依させて身体に鳳凰を纏わせる

これで胞子は効かない

零「蓬莱『凱風快晴フジワラヴォルケイノ』！」

キノコが燃えて中から人が出てくる

俺は一旦憑依を解除する

そしてもう一枚カードを取り出す

零「憑依『亡霊姫』！」

今度は幽々子を憑依させる

零「死符『ギヤストリドリーム』！」

蝶の段幕を鮭に放つ

鮭がどんどん身体を崩していく

また誰かが出てきた

見た目的に姉妹だろうか・・・

いや、まあタイトルに書いてあるからそれは確定なんだけども！

とりあえず二人と周りの白狼天狗達を木陰に寝かせて応急手当をする

幸運にも命に別状は無さそうだ

しかし他の箇所も気になる

だがこいつらを置いてく事も出来ない

零「さて、どうするかね・・・」

???「うくん・・・」

どうやら鮭だった方が起きたらしい

しかも芋の匂いはいつらしい

零「よう、起きたか？」

???「君は？」

零「俺は風切零」

???「え!?あのいく先々で問題を起こしては女に手当たり次第に手を出す下衆野郎の

!？」

零「おいこらどこ情報だそれ!?てかまあ大体分かるけど!」

???「ひ、来ないで!そうやって私とお姉ちゃんに乱暴するつもりでしょ!エロ同人み

たいに!エロ同人みたいに!」

零「しねえよ!テメエみたいなガキ許容範囲外だよ!」

???「流石にちよつとはしろや!」

俺は目の前のガキに殴られた

??? 「あんたそれ女の子に一番言っちゃいけない言葉だからね!」

零 「てか、名乗ったんだからお前も名乗れや!」

??? 「私? 聞いておののき崇めなさい! 私こそが豊穰の神、秋穰子よ!」

零 「あゝ……だから芋臭いのか」

穰子 「芋臭いって言うな〜!」

穰子が俺を殴ってくる

零 「あゝもう! 分かったから! 芋臭くないから!」

穰子 「何? 私が秋の神様っぽく無いって言うの?」

零 「めんどくせえ! 神様酷くめんどくせえよ!」

俺は叫ぶが今いるのは目の前の自称神様(バカ)ただ一人

穰子 「……まあ、助けてくれたことは感謝するわ……」

俺は少し驚いてそして笑った

穰子 「な、何よ!」

零 「いや、何でも。俺は他を見てくるから皆を頼むわ」

俺は飛ばうとする

しかし立ち止まる

零「何時か・・・お前の作った芋食わせろよ」

穰子「え・・・」

こうして俺は腐れ作者をぶちのめしに飛ぶのだった

回れ回れ回れ回れ回れ回れ回れ！可憐に花卉散らすように！

穰子と別れて作者をぶちのめした後俺はまた火の元に向かう

そこに居たのは身体を隠すのがリボンのみの痴女がいた

……え？これ出していいの？

一樣これ健全な小説何だけど？

銀魂ネタとか下ネタ言ってる時点で健全じゃないと思ってるその君は後でお話しよう

零「どうしよこれ……正直関わりたく無いんだけ

ど……。豊○真○子と野○村○竜○並みに関わりたく無いんだけど……」

しかも何かくるくる回っている

正直ヤバイやつだ

零「いや、オレだって助けたいよ？でもあれ変態じゃん？ちよつと何か喜んでそうじゃん？」

俺は一人で誰かに言い訳をする

そうこうしていると向こうがこちらに気付いたようで回りながら近付いてきている
零「あ、お前あれか?サ○ジの燃やして蹴るあの技をやりたいんだな?分かるよ?俺
だつてカ○カ○波とかゴ○ゴ○のくやりたいもん」

俺は相手の蹴りを避けながら喋る

零「でも現実是非情なんだ。いくらそれを夢見ても出来ねえもんは出来ねえんだ」

下では意識のある白狼天狗がこちらを見ている

俺は痴女を叩き上げる

そして落ちてきた所を横に斬り着けて痴女が前に飛んで山にぶつかった

零「ま、俺はどつちかつつたらウ○〇プとバ○ーの方が好きだけどね」

・・・・・てか初めて影を憑依無しに倒せたわ

俺は痴女に向かって飛ぶ

痴女の形が崩れてやはり中から人が出てくる

中の人はちゃんと服を着ているみたいだ

服は赤白緑のゴスロリで頭にリボンを着けた緑髪の女性だ

???「・・・・・あれ?私は一体・・・」

今回は早めに起きてくれた

零「大丈夫か?」

女性は俺を見るとすぐさま距離をとった

??? 「近付かないで」

零 「別にとって食ったりしねえよ」

??? 「そうじゃないの」

零 「あ？」

俺は首を傾げる

??? 「私は鍵山雛。．．．厄神よ」

また神様だ

この山は神様のバーゲンセールだな．．．

雛 「私が近くに居たら貴方が不幸になるわ」

俺は雛の話を聞きそして．．．

雛 「!？」

雛に向かつて歩き出した

雛 「貴方！今私が言ったことが理解出来なかったの!？私に近付くと不幸になるのよ

!？」

俺は黙って歩く

頭に手洗が落ちてきた

まだ歩く

今度はデカイ丸太が落ちてくる

頭から血が流れているのが分かる

雛「来ないで・・・来ないで！」

俺は雛の前で立ち止まり笑った

零「安心しろ。俺は既に不幸だ」

雛「え？」

零「異変に巻き込まれたり地獄に迷ってきたり今もこうして面倒ごとに巻き込まれてる。だからお前の厄なんて屁でもねえの」

雛「・・・・・・・・・・私は・・・」

零「ん？」

雛「私は・・・貴方の近くに居ても良いの？」

零「何分かりきった事いつてんだよ。当たり前だろ？」

俺がそう言うのと雛が泣き崩れてしまった

ずっと一人だったのだろうか？

ただ分かるのは俺は彼女を救えたのだろうかと言う事だった

鳥と狗は使い用

さて、雛と別れた後とうとう最後の場所に来る

そこに居たのはやはり影と一人の白狼天狗、椀だった

影は鳥籠に頭と羽と足が付いている

椀「文様！止めて下さい」

椀がなだめているようだが影なので当然聞く耳を持たずに椀を爪で引っ搔こうとする

俺は木刀を投げて軌道を反らす

木刀は地面に刺さっている

椀「貴方は・・・ッ！」

俺は地面に降り歩いて木刀を抜きに行く

また文の影が俺を切り裂こうと飛んでくる

椀「危ない！」

椀視点

椀「危ない！」

私は侵入者に叫ぶ

彼を殺そうとしているのは一時間前に雷に打たれた文様だ

文様と侵入者がぶつかり土煙が上がった

何故私は侵入者を心配しているのだろうか・・・

分からない・・・

でも私は確かに彼に死なないで欲しいと思っている

椀「零さん！」

そして私は知らない筈の彼の名前を叫んだ

土煙が晴れてきた

そして目を凝らしてみる

零さんは文様の攻撃をただの木刀で受け止めていた

零「あ、あ、あ、あ・・・危ねえええええええ!!」

椀「・・・え？」

私はその光景をただ見ていた

零さんはまた文様の攻撃を反らして抜け出る

零「ハアハア、バカと雛の比じゃねえぞ・・・」

私は零さんに走り寄る

椀「貴方何してるんですか！」

私は零さんに叫ぶ

零「あ？んなこと言う前にまず訓練でもしたほうが良いんじゃないやねえの？全滅してたじゃん」

椀「ぜ、善処します……。ってそうじゃなくって何であんな危ない真似したんですか！」

零「お前の方が危ないだろが。剣向けずにただ叫ぶだけ……。無謀にもほどがあるだろうが！」

私は軽くシヨックを受ける

私の目から涙が流れる

零「でもな……」

零さんは私の頭を撫でる

何故か懐かしくって落ち着く

零「俺が怒ってるのはそんなことじゃねえんだ」

椀「え？」

零「何処の誰かは知らねえが……。人を化け物に変える事が唯唯許せねえ！」

零さんが立ち上がった

零視点

俺は秋姉妹と雛、他にも影になった奴の顔を思い出す

もう一度木刀を強く握る

文の影に斬りかかるが弾き飛ばされ地面に叩き付けられた

零「カハツ！」

口から血が垂れそれを腕でぬぐう

椀「もう・・・もう止めてください！」

椀が叫び俺は椀を見る

椀「貴方が傷付くのは見たくないんです！大体貴方は余所者の筈です！なのに何故貴方を追い出そうとした私達を助けるような真似をするのですか!!」

俺は踵を返して椀に向かって歩く

そして椀の胸ぐらを掴んで顔を近付ける

零「俺はお前達が好きだ！」

椀「なっ!?!／／／／／／／／／／／／」

零「幻想郷が好きだからそこに住んでるお前達も好きだ！」

俺がそう言うとは何故か椀の耳と尻尾が垂れる

零「だから俺はこの幻想郷の全てを守るぞ？ 敵だろうか何だろうか関係ねえ。俺は我儘なんでねえ」

俺はそれだけ言うとは俺は椀を放す

椀「……………分かりました。なら私も協力します」

そう言つて椀が剣を握つた

そして目の前にスペルカードが現れた

俺と椀はそれを手にとつて叫んだ

零椀「『憑依『下つ端天狗』！』（つて誰が下つ端天狗ですか!?!）」

俺と椀が光だして俺に白い狗耳と尻尾が生え、椀が着ていた服になる

零『さて、行くぞ!』

椀『ハイ!』

俺はもう一度文の影を斬ろうとするが避けられる

そして文の影は高速で飛び目に見えない

椀『後ろ右斜め45℃からきます!』

俺がそちらを見ると文の影が爪を立ててこちらに近付いてきていた

俺は木刀を両手で掲げて振り下ろす

そして文の影の頭に直撃して地面に叩き付けた
まだ倒せていない

文の影が立ち上がって猛スピードで飛んでくる
俺は木刀と椀の剣を逆手に持って文の影を斬り着けた
文の影が崩れて中から文が出てくる

椀「文様！」

椀は俺と別れて文に走り寄る

これで全部解決か・・・

そう思った時俺は頭に痛みが出て意識を失った

夢の記憶

俺が起きると目の前が真っ暗だ

何も見えない

自分すら見えない

だんだん明るくなってくる

見るからに山だ

そこにいるのは四人のこどもと……俺？

四人の子供は文と椀とにとりと……誰だろう？

??? 「あれは姫海棠はたてですね。現在は引きこもりで、花果子念報なる新聞を作っているみたいですよ」

ね……」

零 「へえ……つてうおっ！」

俺は後ろにいる声の主に驚き倒れた

そこに居たのは青髪で、赤いナイトキャップを被りボンボンが着いた白黒のワンピースを着た女性だった

??? 「驚かしてしまつて失礼しました。私はドレミー・スイート、獾です」

零 「獾？」

ドレミー 「はい、ここは夢の世界。貴方は夢を見ているんです」

つまりはこの俺達は……

ドレミー 「はい、夢です。しかしあれはれっきとした貴方でもある……」

零 「どう言うことだ？ それと今さらつと心読んだ

な……」

ドレミー 「あれは貴方の過去つて事です。それを忘れていても心の奥底では今も覚えて
ているんでしょうね……。あとここは夢の中ですから貴方の考えてる事も大方分か
りますよ」

俺はまた自分の夢を見る

俺が四人を撫でて遊んでいる

ドレミー 「それにしても……。貴方みたいな人はまた珍しい……」

零 「あ？」

ドレミー 「夢の中では誰もが現実とは違う。例えばほら」

俺はドレミーが指差す方を見る

そこに居たのはチルノだ

チルノ「フツハツハツ！アタイ最強！」

チルノは霊夢と紫を踏みつけて立っている

ドレミー「他には……」

またドレミーは別の方角を指し俺はそちらを見る

霊夢「皆呑みなさい！今日も私が奢って上げるわ！」

霊夢が自腹で皆にご馳走していた

ドレミー「普段ならあり得ない事が出来てしまう。それが夢です。それに伴って性格も変わる。なのに……」

ドレミーはまた俺を見る

ドレミー「貴方は何一つ変わっていない。さすがあの方達が認めた方ですね」

零「あの方達？」

それは誰だ？と聞こうとして俺は振り向く

ドレミー「まあ、かと言う私も貴方には一目置いてるんです。私なんかと違い貴方は誰にでも必要とされている。正直うらやましい限りです」

零「……お前、少し自分を大切にしなさ過ぎじゃねえか？いや、もつと厳密に言うな他人の事を気にしすぎて自分が厳かになっちまってる……」

ドレミー「……そうですね。正直私はそうでしょ。しかし私は貴方達からした

ら悪です。傷つけるなら傷つけられる方が良い。裏切るなら裏切られる方が良い。結局私はめんどくさがりなだけなんです」

零「うくん……でも少なくとも俺にはお前が必要だぞ？」

ドレミー「え!？」

ドレミーがこちらを振り向く

零「いや、だってお前は猿何だろ？悪い夢を喰ってくれる」

ドレミー「そう……ですね……。ただ食べていただけですが……」

零「それでもさ。人間ってのは自分に都合が悪けりや妖怪と呼び害悪呼ばわりをする。でも逆に都合が良ければ神として崇めようとする……。結局俺も同じさ。だからもつと自分を大切にしろ」

俺はドレミーを撫でる

ドレミー「それは……貴方に最も言われたく無いですね……」

零「俺は何時でも自分が大事さね」

ドレミー「……そう言うことになって上げますよ。さて、そろそろ起きる時間ですよ」

零「お、そうか。じゃあな」

こうして俺は夢を去った

三人称視点

零が去った後ドレミーは一人立っていた

ドレミー「……………それで、久しぶりに会った感想はどうでしたか？」

ドレミーがそう言うのと翼が一つしかない女性が現れた

???『やはり零は変わっていなかった』

女性はスケッチブックに文字を書きドレミーに見せる

ドレミー「……………サグメ様、今は夢なので喋って大丈夫ですよ……………」

サグメ『こっちの方が慣れている』

ドレミー「そうですか……………会わないで良かったんですか？」

サグメ『まだその時では無い』

ドレミー「分かりましたよ……………」

サグメ（それに零ならあの子も……………）

そうしてサグメも元居た場所に戻るのであった

乱れ乱され咲き乱れ

俺は目を覚ます

いつもの部屋だ

小傘が横で椅子に座って寝ている

看病してくれたのだろうか・・・

俺は起き上がって自分の被っていた毛布を小傘にかけて俺は台所に向かう

そこに居たのは蛮奇が料理を作っていた

零「おはよう」

蛮奇「おはよう」

そのまま蛮奇に肩を捕まれる

蛮奇「で、済むと思つた？」

零「デスヨネー」

俺は蛮奇に正座させられる

蛮奇「あんたつてやつは何で何時も倒れて帰つて来て！その度に心配して看病してる

小傘の気持ちも考えて！」

蛮奇の言うことは最もなので何も言い返せない

蛮奇「それに・・・わたしだって心配したんだから・・・」

俺は目を丸くして蛮奇を見る

零「そつか・・・」

俺は蛮奇を抱き締める

蛮奇「ちよっ!?／／／／／／／／」

零「ごめんな。心配ばっかかけちまって」

俺は抱き締めながらそう言う

蛮奇は俺を突き放してまた台所に戻る

零「何で怒ってんだ？」

俺はそう呟きながらソファに座る

???「たのもー!」

その時外から声が聞こえてきた

家を出て階段を降り小傘の工房から外に出るとそこに居たのは鬼だった

???「これは・・・。頼みごとをしに遙々着たがまさか珍しい顔触れに会うとは・・・」

どうやら向こうは俺を知っている用だ

零「えっと・・・どちら様？」

俺はその鬼を見る

頭に大きな角があり服はまるで武士しかし・・・

零（あ、足がない!? スタンド!? え? マジ?）

スタンド特有のふにやふにやしたらやつがある

??? 「そうか、お前は今記憶が無いのだった

な。・・・私はコンガラ。鬼として今は地獄の鬼どもの長をしている」

零「は、はあ・・・。それで頼み事って何さ?」

コンガラ「その事何だが・・・。お前に私が帰って来るまで地獄の鬼の長を任せたい」

・・・・・・うん?

零「いや。いやいや。いやいやいや。いやいやいや! 無理だろ俺にや!」

コンガラ「いや、出来るさ。お前は例の一件で鬼にも罪人にも恐れられているからな」

例の一件とはあれか? 俺が罪人ぼこぼこにした奴か・・・

・・・・・・てかさろそろ聞いても良い?

俺はコンガラの頭を見る

零「その頭に輝く136位って何?」

そう、実は蛮奇の頭には69位、小傘には20位と出ていた

コンガラ「これか？これは今年の人気投票の結果さ」
零「人気投票？」

コンガラ「ああ、この時期は大体こうさ。だが今年は少し違う。毎年一位は霊夢だったが今年白玉楼の庭師らしい」

妖夢が一位なのか・・・

零「で、何で俺が1日地獄の管理をしねえといけねえんだ？」

コンガラ「それは・・・まあ、またあれだ」

零「・・・ああ・・・」

あれ・・・おそらく異変の事だろう

コンガラ「サボり間の死神がこの忙しい時期にサボってな、こちらに死者の魂が溢れ帰って四季折々の花が咲く始末さ」

何となくその死神が分かるような気がする

零「分かったよ・・・」

コンガラ「感謝する」

俺は一旦部屋に戻る

零「蛮奇！仕事だ！」

蛮奇「あつ！今日は小傘の工房の方の手伝いが・・・」

零 「んじやあ小傘の方を頼む」
俺は薄い上着を来て地獄に向かうのだった

銭の河原と川の古代魚

さて、人里を出て無縁塚まで飛ぶ

無縁塚まで来て見慣れない場所に疑問が浮かぶ

そこら辺に石の塔が立っている

飛ぶのも疲れたしそこに降りる事にする

零「にしてもスゲエ量だな……」

しかも全て綺麗に並んでいる

???「あら？貴方誰？」

零「あ？」

声が聞こえそちらに目を向ける

福耳が特徴的な女性だった

零「俺はコンガラに頼まれて一日コンガラの代わりをするもの何だけど……」

???「ああ！話はコンガラちゃんと閻魔様から聞いてるよ！私は戎櫻花、水子の霊よ。
着いてきて三途の河まで案内してあげる！」

こうして俺は櫻花の後を着いていく

零 「ここには積み石が一杯あるみたいだけど・・・全部お前が作ったのか？」

櫻花 「こちら辺はね。手前の方は他の子供達が作ってるの」

零 「ふくん・・・」

俺は櫻花の頭を見る

零 「125位か・・・」

櫻花 「え？」

零 「あ、いや、何でも・・・」

俺は自分の頭を見る

論外それが俺の頭に浮かぶ文字

わ いや、まあ俺オリ主だからそうなのは当たり前だけどせめて何も書かないでほしい

櫻花 「着いた！」

零 「え？」

そこにあつたのは何時もの河

零 「おお、ありがとな」

俺は櫻花を撫でる

櫻花 「えへへ／＼／♪」

俺は櫻花と別れて船に乗り漕ぎ始める

零「ビnkスの酒を届けに行くよ♪」

俺は鼻歌を歌いながら船を漕ぐ

???「こんな所に人間とは・・・今日はどうしたんだい？」

また知らぬ声が聞こえた

見ると牛の角が生えた赤ちやんの地藏を抱いた女性が浮いている

零「只の依頼さね。ところであんたは？」

???「私は牛崎潤美。牛鬼だよ」

潤美は船に降りてくる

潤美「で、依頼って？」

零「サボリ癖のある死神の後始末にあり出された鬼の代理ってとこだよ」

俺の説明に潤美が溜め息を付く

潤美「あんたも大変だねえ」

零「まあそう言う面倒事を受け持つのが仕事なもんでね」

潤美「ハハハ！つくづく可笑しな奴だねえ」

笑う潤美に俺は苦笑いを浮かべまた潤美の頭を見る

121位だ

11の2乗

零「ハイハイ、ドーせ俺はおかしゅーござんすよ」

俺はまたオールをもち船を漕ぐ

零「ヨホホホく♪ヨくホ、ホくホく♪」

俺は鼻歌を歌う

潤美はエサを巻き周りに巨大魚が群れてくる

潤美「可笑しいは可笑しいでもお前の場合は面白可笑しいだな」

零「あ？どう言うことだよそれ？」

俺は潤美の言葉に違和感を覚える

潤美「気付いて無いのかい？お前さん、半人半妖で妖力、靈力共に申し分無いが、その実神力がある。つまりあんたは神でもあるってことさ」

潤美が言い終わると一匹の古代魚が跳ねた

神になるまでの黙示録（未来都市）

今から数億年もの遙か昔、妖怪蔓延る山の中に彼は倒れていた
少年の名は風切零生まれも育ちも日本だが親も家も無い少年だった
しかし今の彼はそんな事は知るよしも無かった

零視点

零「イツツ・・・あ？何処だここ？」

俺は辺りを見渡す

森森森

辺り一面森だった

そして俺は立ち上がり・・・はっ

零「カ〜メ〜ハ〜メ〜波〜！」

かめはめ波の練習をし始めた

零「きやくめえくひやくめえく・・・」

俺は視線に気付き後ろを見る

そこに居たのは赤と青の変な服の白髪の女性だった

??? 「……………」

零 「ど、どうも……………」

俺が会釈すると女性は持つていた弓を引きこちらに向ける

零 「ちよちよ!?!何で弓向けんの!?! やっぱあれか? 不味かったか? かめはめ波の練習! でもだつて俺だつてあんな必殺技撃ちたいだもん!」

??? 「御託は要らない。貴方は何処から来たか吐いて貰うわ」

俺は周りを見る

使えそうな物は無い

しかし俺が何処から来たのかも分からない

ただ分かるのは自分の名前だけ

零 「ま、待て!俺に敵意はない!」

??? 「……………」

女性は黙って弓を戻す

??? 「…………分かったわ。そこは信じて上げる。着いてきなさい」

俺は女性の後ろを歩き始める

零 「ところであんた誰何だよ?」

??? 「八意永琳」

零 「ここは何処だ？」

永琳 「私が住む都市の周辺の森」

零 「今日は何時代の何日だ？」

永琳 「時代の名は分からないけどそうね．．．他の集落は皆石で動物を採ったりしているから石器時代とでも言っておこうかしら．．．」

零 「へ、へえ．．．」

永琳 「．．．．．」

か、会話が続かねえ．．．

そうこうしている間に壁が見えてくる

そう、某巨人アニメの様な壁だ

零 「なあ．．．．．」

永琳 「何？」

零 「ここって巨人でも居んの？」

永琳 「居るわけ無いでしょ？」

零 「だ、だよな．．．」

俺達は門に向かう

一度門兵に止められたが永琳の口添えで何とか入れたにしてみすごい街だ

そら飛ぶ車、未来的な風景

まるで未来都市だ

次に連れられたのは都市で一番大きな屋敷

永琳「貴方はここで待つて頂戴」

そう、言われて三十分ちつとも来る気配がない

零「はあ……」

俺は溜め息を付いて欠伸をした

零「……ん？」

俺はまた視線を感じそちらを向く

そこに居たのは二人の幼女だった

???「お姉様バレましたよ！」

???「依姫、逃げるわよ！」

幼女は俺が話しかける前に走り去ってしまった

零「……何だったんだあれ？」

永琳「待たせたわね」

永琳の声が聞こえて振り向く

永琳「ツクヨミ様との話が長引いてね」

零「別にそれは良いけど結局俺の処分ってどうなの？」

永琳「そうね・・・率直に言うとな貴方には軍に入って貰うわ」

零「・・・は？」

そう、これが俺の・・・風切零の人生を変える初めての重大事件なのであった

神になるまでの黙示録（分隊長の教官）

あれから十年経つ

ここは穢れが浄化されついているとか何とかで18歳位から成長が著しく遅い俺なんてちつとも身長が伸びずにチビのままだ

ちなみに今まで十年昇格とか何やらで分隊長になった

しかしそこに要る隊員は一人

十年前ツクヨミの屋敷で俺を見ていた幼女の一人、名は綿月豊姫と言った

そして今俺達は桃を貪りながら昼間堂々とサボリと言う名の休憩を決め込んでいた

零「いや、十年前のガキがまさか家の隊に来るたあなあく」

豊姫「フフ、私だって貴方が私の上司になるなんて思ってもいなかったわよ」

零「いや、お前が来てくれて良かったよ」

豊姫「え？」

零「ほら、俺って実質出生不明じゃん？まあそうだからなく外から来たつてのも……

結局俺は穢れが多いと思われちまつてる訳だ」

豊姫「そんなのその人達の好きに言わせとけば良いのよ。現に貴方は分隊長になって

るでしょ？貴方が穢れていないって知っている人もちゃんと居るって証よ」

俺は豊姫の言葉を聞いて桃を一齧りする

零「そう言や依姫はどうしてるんだ？」

依姫「そうですね。通常なら士官学校の勉強で忙しいですが貴方達のせいでそれが減っていますね」

気付けば後ろに依姫が居た

俺達は椅子から飛び降りて依姫を見る

依姫「全く、貴方達が毎回サボるせいでその度に私が探す羽目に……」

零「ま、まあまあ……」

依姫「八意様も心配してますよ？」

零豊姫「「ぜ、善処します」」

こうして俺達は依姫の長い説教の果て帰る事が出来た

それから一年……

時期的に士官学校の入試がある時期だ

その入試では実技と筆記がありなぜか俺が実技を見る事となった

零「何でこんなことに……」

永琳「あら、貴方観察眼は良いじゃない。ようは誰を自分の隊に入れたいか、誰が入

れば軍に益があるか見極めれば良いのよ」

隣で座る永琳がそう言う

零「つつつてもな・・・」

俺は実技をしている人を見る

零「依姫は別として他はほとんどやる気がねえよありや」

永琳「そうでしょうね。正直言うとな九割はそう言う人達よ今の軍は」

零「おいおい、最悪じゃあねえか」

俺は他の試験官を見る

マジでやる気が無い

永琳「ええ、このままでは軍が崩壊して妖怪どもに蹂躪されるでしょうね」

事の重大さは何となく分かった

零「まあ、光るのがあるのは何人か入るからそいつらかな」

永琳「そう、じゃあお願いね」

零「え？」

永琳「選んだ子は自分で教育しろって事よ」

零「はアアア!?!」

俺は実技にもかかわらず叫んでしまった

しかし永琳は知らなかったのだ
零の教育がどんな物なのかと言うことが・・・

神になるまでの黙示録（部下と月への移住計画）

あれから半月経ち

俺のところに来た三人も依姫一人になっていた

零「何でだろ？」

依姫「何でだろ？じゃないですよ！あんなスパルタ教育逃げて当たり前です！」

零「例えば何処？」

依姫「何処もかしこもです！大体普通訓練開始初日に真剣の打ち合いをさせた挙げ句一時間以内に一回当てなければ訓練所百周なんて！」

零「俺も一緒に走ってるだろ？」

依姫「そう言う問題じゃないでしょ・・・」

零「じゃあ何でお前は残ってんだよ？」

俺が聞くと何故か依姫は顔を赤くした

依姫「き、聞かないで下さいよ恥ずかしい／＼／＼／＼」

零「恥ずかしい？」

俺は頭に？を浮かべる

零「まあ、とりあえず今日の訓練は終了だ。座学に行つてこい」
依姫「はい！ありがとうございました！」

依姫が走つて座学舎に戻つていく

零「さてと、俺も戻りますかね」

俺も踵を返して持ち場に戻ろうとする

永琳「零」

その時永琳がこちらに歩いてきた

零「永琳……」

永琳「話があるわ」

俺は永琳に連れられて永琳の家に来た

零「で、話つて何だよ？」

永琳「率直に言うわ。今上層部で月への移住案が出ているの」

零「それを……何で俺に言う？」

永琳「貴方をここに置き去りにするか、それが今の議題よ」

零「……」

永琳「正直状況は最悪よ。私とツクヨミ様以外貴方をここに置き去りにするに賛成しているわ」

そりやそうだろう

俺は外から来た厄介者なんだから

永琳「その計画が結構されるのは十年後、いまからなら貴方を隠して月に連れていけるわ。話はそれだけよ。考えておいてね」

俺は黙って家を出てそのまま持ち場に戻る

そこに居たのは豊姫と上層部の人間の一人だった

豊姫「止めて下さい！」

「何故だ？ 我の嫁になれ！」

豊姫「嫌です！」

「くそー！」

男が豊姫に殴り掛かる

俺はその腕を掴む

零「ちよつとちよつと、俺の部下に手え出すんじゃねえよ」

「き、貴様は?！」

豊姫「零さん……」

「く、この手を放せ！ 私は上層部の人間だぞ！」

俺は男の腕を放す

「そうだ。貴様の様な下つ端兵は私の言いなりになっておけば良いのだ！」

そうして男が俺に殴り掛かって来る

が、俺はそれを避けてそいつを殴る

「な、何をする！」

零「殴られる覚悟もねえやつが上から拳振るつてんじやねえぞ……」

「クッ！」

そのまま男は去ってしまった

零「……………」

豊姫「零さん……………」

零「悪かった」

豊姫「え？」

零「お前にヒデエ想いさせちまった」

豊姫「そ、そんな事……ッ！」

零「俺は余所者だ。こんな奴の下に居たら今の比じやねえ……。だから……ッ！」

俺は言葉が続けようとする。と豊姫が俺の頬を叩いた

豊姫「何弱気な事を言ってるの！それは貴方だけの行けんよ！私は何があらうと貴方

の隊から放れない！私は……私と依姫は貴方を慕っているから！」

零「豊姫………」

俺の目から涙が溢れる

その涙を吹いて俺は今精一杯の笑顔を見せる

零「分かった！でもそう言うなら死ぬことは許さねえ！

何せおまえは俺の唯一の部下だから！」

こうしてまた一日は過ぎていく

月移住とか課題は山積みだがまあ何とかなるだろう

とにかく今は豊姫に依姫、永琳に街の一般市民、兵達を護れる様に強くならなきゃいけないと思う今日この頃だった

神になるまでの黙示録（人妖大戦）

あれからまた十年

結局答えは出せていない

変わったと言えば依姫がうちの隊に来たくらい

永琳「それで、とうとう明日な訳だけれど答えは出たのかしら？」

そう、明日がとうとう月移住結構の日だ

一ヶ月前から公表され皆移住の準備を進めていた

零「・・・・・・・・・・」

永琳「良い？上層部は貴方を殺そうと考えているわ。月に来させない様に・・・・・・・・。今までの貴方の活躍とかを見ても私達の敵になることはあり得ないのに・・」

零「・・・・・・・・・・」

永琳「貴方はそれで良いの？ここで死んでも・・。豊姫や依姫を悲しませても？」

零「・・・・・・・・・・いい訳ねえだろ。俺は決めたん

だ・・。あいつらを護るってこんな所で死んでたまるかよ」

永琳「なら、行くのね？」

俺は頷く

永琳「分かったわ。準備しておきましょう」

その日はそのまま家に帰り床に付いた

ウ~~~~!

深夜になって警報がなった

『妖怪の進行を確認！兵は直ちに門前に集合せよ！一般の者は直ちにワープホールに集合し指示に従い行動せよ！繰り返し！~~~~!』

とりあえず門に向かおうとした時電話が鳴った

永琳『零！今すぐ来なさい！』

電話に出ると永琳の声が聞こえてきた

永琳『上層部の一人が今朝から行方不明なの！おそらく計画を妖怪に教えていたのよ！理由は貴方の抹殺よ！今すぐ貴方を月に送るわ！』

零「~~~~永琳~~~~」

永琳『?』

零「俺のせいで皆死にそうに~~~~なってるの、か？」

永琳『~~~~ええ、そうね』

零「腐ってやがる・・・ッ！」

俺は電話を切って門に走り出した

門に着いた時には既に戦いが始まっていた

死者も居る

俺は壁の上に飛ぶ

そこに居たのは他の分隊長達だ

「このままでは危険だ！今すぐ避難しよう！」

「待て！兵はどうする?！」

「あんなの使い捨ての駒に過ぎん！今は我々が助からねば！」

分隊長全員が了承してテレポーターまで逃げていく

・・・・・・本当に腐ってやがるッ！

今も下では兵が命懸けで戦っている

そこには豊姫や依姫の姿もある

俺は血が出るまで嘔み締めた

俺はそこら辺に落ちていた通信機を拾う

そして全部隊に繋げて話し出す

零「・・・・・・今下で戦っている兵の諸君。悪い知らせだ」

一瞬静まり変える

『ふ、ふざけるな！まだ一般人の避難も完了していない！それなのに我々が逃げれば妖怪どもはどうなる！余所者が口を出すな！』

零「これは命令だ！余所者だろうが何だろうが俺はテメエらの上官だ！命令違反でしょつぴかれたくなかつたらとつとと逃げろ。その変わりに俺が一人で殿を務めてやる。安心しろお前らの所には行かせねえ」

俺がそう言うのとまた静まり返り全員踵を返すと門の中に入っていく

妖怪も入ろうとするが俺はその前に壁の上から飛び降りる

零「テメエらは行かせねえよ・・・」

俺が剣を向ける

妖怪達が爪や牙を立てて襲ってくる

俺が靈力を込めた剣を一振すると何百匹の妖怪が消え扶れた地面が残る

零「テメエらにも並々ならぬ理由があるのかもしれないが俺も色々背負ってんでね、ここは誰も通さねえよ」

こうして俺の長い戦いが始まった

三人称視点

零に庇って貰い撤退していた兵士は住民の避難の支援をしていた
しばらくして次が兵士の番となった

依姫と豊姫は零を呼びに走った

依姫「零さん！そろそろ・・・ッ！」

豊姫「ッ！」

二人が見たのは零の左手が無く血が出ている所だった

零「豊姫・・・依姫・・・」

豊姫「ど、どうしたの貴方その腕!?!」

豊姫は零の腕の血を止めようと布で強く括る

零「や、やベエのが居る。お前ら早く逃げろ！」

依姫「出来ません！一緒に月に行きましょう！」

依姫が俺の肩を担いで走り出す

零も連れて足が動く

妖怪達も追ってくるが豊姫が扇子を降ると皆粉々になって消える

そんな事を続けてとうとうワープホールまで来た

依姫「さあ、早く行きましょ、う・・・」

豊姫「どうしたの依ひ、め・・・え？」

ぬらり「ほお、実に興味深い話だ。だが……」

ぬらりひよんが上を向く

何かロケットの様な物が落ちてくる

そう、あれは……

零「核か……。上はどうしても俺を消したいらしいな……」

俺がまたぬらりひよんを見ようとするとそこにはもう居なかった

零「逃げたか……」

俺はそのまま地面に倒れる

零「はあはあ、悪いな……。そっち行けそうにねえや……」

もう体も動かない……

核も迫ってくる

とうとう落ちて光に包まれる

熱すぎて熱さも感じない

サヨウナラ依姫、豊姫、永琳……

時は過ぎ今の永遠亭

輝夜「へえ……。そんな事があったのね」

永琳「そのあとで上層部は解体されて零はツクヨミ様と一緒に信仰される様になつたわ。軍神としてね」

永琳が昔の零の事を輝夜に話していた

てる「だからアイツから神力を感じるウサね」

鈴仙「豊姫様と依姫様とそんな所で繋がってたんですね・・・」

てると鈴仙も途中から聞いていた

永琳「これは私達とあの二人の秘密にして頂戴。彼に知られない様にね・・・」

永琳はそれだけ言うと部屋から出ていった

What!?

あれから一日経って俺は目が覚める

確か昨日はコンガラの依頼で地獄の鬼を統括していた

それが終わってミスチーの店で呑んで・・・あれ？それからどうなったわけ？

俺は辺りを見る

どうやら自分の部屋みたいだが・・・

俺が起き上がると何故か俺は裸だった

そして腹の上に違和感を感じる

布団をひっぺがすとそこには裸の小傘が居た

・・・何か前にもこんな事があつたよう

な・・・

零「こ、小傘さん？」

俺は小傘を揺する

小傘「うくん・・・あ、零ちゃんおはよう」

零「うん、おはよう。で、何でここで寝てんの？しかも裸で」

俺がそう聞くと小傘が俺の顔に近づくと

小傘「あちき、零ちゃんの子供欲しい！」

零「……… what!?!」

一先ず服を着てソファに向かい合って座る

ちなみに蛮奇は今日はワカサギ姫、通称姫と影狼とお茶会で休みだ

零「………で、何でいきなりあんな事言い出したんだ？」

小傘「あちき良くベビィシッターしてるでしょ？」

零「そうだな。そう言う依頼は何時も小傘が行ってくれてたな」

小傘「あちき思ったの！自分の子供が欲しいって！」

零「そ、そうか……」

正直反応に困る

零「じゃ、じゃあ寝てる間に何かしたのか？」

小傘「する？子供って裸で一緒に寝たら出るんじゃないの？」

正直俺もそれについてはよく分からないが何か違う様な気がする

あ、でも俺も寝ると出きるって聞いた事がある

零「小傘、子供はな、良い子にしている男女が寝ている間にコウノトリが運んで来る

んだよ」

小傘「そうなの？」

零「ああ、だからちやんとパジャマを着て寝よ。な？俺は何時でも一緒に寝てやるから」

小傘「うん！あちき良い子にする！」

俺は小傘の頭を撫でてご飯を作る事にする

そう言ういや皆の頭から順位が無くなってる

異変も解決してみたみたいだし・・・

零「よし、出来た」

俺はお米と味噌汁とベーコンエッグを作って机に置く

零小傘「いただきます」

俺達は朝ご飯を食べ始める

零「あ、そうだ・・・」

小傘「どうしたの？」

俺は木刀を取り出す

零「最近刃こぼれしてきたからさ、小傘に研いで貰いたいんだよ」

俺は木刀を小傘に渡す

小傘「うん。このくらいだったら今日一日で直りそう」

零「そつか、そりや良かった」

思えば木刀にはずっと助けられてきた

今は小傘に任せようと唯唯そう思つたのだ

零「さてと、今日は依頼もねえしゆつくりしようかね・・・」

俺は皿を台所に置いてソファに寝転がる

その時扉のノック音が聞こえる

俺は起き上がって玄關の扉を開く

そこに居たのは文だった

文「どうも！清く正しい文々。新聞の射命丸文です！」

俺は即効文の頭にアイアンクローをかます

文「あややや！痛いです！痛いです！」

零「テメエよくも変な噂流してくれたな！何が行く先々で手当たり次第に女に手を出

す糞野郎だ！」

文「糞野郎は書いてません！私が書いたのは鈍感ハーレムが幻想入りです！」

零「ほぼ変わってねえだろ！それに俺は鈍感なんかじゃねえ！」

文「じゃあ、貴方自分が何人の女性に好かれてるか分かりますか!？」

零「あ？何言ってるんだ・・・俺の事好きな奴なんていねえだろ？」

文「やっぱ鈍感じゃ無いですか・・・」

俺は文をアイアンクローから放す

零「んで、何の用だよ？」

文は何か手帳の様な物を開く

零「何だそりゃ？」

文「文花帖ですよ。これに取材情報を書き込むんです」

文はあるページで手を止める

文「妖怪の山の皆さんから伝言です。まずにとりさんから

にとり「やあ盟友、今度私の発明を使ってみてくれ」

です

次に秋姉妹さんから

静葉「私達を助けてくれてありがとう。今度来たら穰子の薩摩芋でもプレゼントする

わ

穰子「来たらブッコロス！」

いやゝ愛されてますねゝ」

零「何処が!?軽く殺害予告されたんだけど!？」

文「新手のツンデレってやつですよ。あ、他にもあるけど聞きます?」

零「いちよう・・・」

文「はい、次は雛さんですね。」

雛「今度は何時来てくれるの?あの約束は嘘だったの?ねえ・・・答えてよ。ねえねえねえねえねえねえ・・・」

零「・・・」

こ、怖エエエエエ!!!

文「本当、ちゃんとして行ってあげないと何時か刺されますよ?」

零「か、考えとく・・・」

文「後は椀と幽香さんですね」

零「?幽香から?」

文「はい。」

幽香「貴方また浮気したわね?待つてなさい、直ぐに殺しに行つてあげる」
みたいですよ」

零「今すぐ?」

俺がそう思うと窓が割れる音がした

零「やべエ!じゃあな文!後でまた聞く!」

こうして俺は走って家をでる

文「何時か思い出してくれませよね・・・?だつて・・・」

文「椛「私達のお兄ちゃん何ですから」

文が最後に何と行ったのか聞かずに・・・

逃げる事に夢中になっていた俺は背後から近づいてくる
もう一人の仲間に気付かず睡眠薬を嗅がされ気付け
ば……

身体が縮んでしまったわけではなかった

零「んだ？この空間？」

確か俺は幽香に追われてて……

俺は立ち上がろうとしたが手が楔で繋がれている

「お目覚めかな？万事屋」

零「テメエはッ！」

そこに居たのは以前蛮奇がバイトしていた店に来ていた
過激派の一人だ

「貴様は妖怪どもを店に匿っているらしいな……？」

零「……」

バレている

だが・・・

零「だからどうした？アイツラは家族同然なんだ。匿っている何てそんな言い方は止めろ！」

「そうか・・・」

男は俺に近付くと俺の心臓を刀で刺す

息が出来ない

そして俺は気を失った

三人称視点

零が誘拐される時それを見ている少女が居た

??? 「た、大変！」

鯨の帽子を被っている少女だ

少女は奥野田美宵、鯨吞亭の看板娘である

美宵は直ぐにその場から離れると直ぐに慧音の居る寺子屋へと走り出した

慧音「じゃあルーミア、この問題分かるか？」

ルーミア「うん・・・？」

慧音「惜しいな、正解は12だ。これは3を4回足すと言う意味だ」

慧音は今寺子屋で算数を教えていた

ルーミア「そーなのかー」

美宵「慧音さん大変！」

そこに美宵が入ってくる

慧音「落ち着け。今は授業中だ。いったいどうしたんだ？」

美宵「ひ、人攫いよ！」

美宵は息を整えながらそう言った

慧音「何!？」

零視点

「起きろー！」

水をかけられて俺は目を覚ます

まだ心臓に刀が刺さっている

それに力も入らない

「無駄だ。博麗印の札を張ってある妖怪だろうが人だろうが力を封印するな」

前を見ると何人もの男達が刀や斧、ハンマーを持って

こちらを見ている

「貴様が邪魔なのだよ我々には・・・。無害な奴は殺すな？バカを言え、害悪だから妖怪なのであろうツ!!」

男は刀で俺の左目を切り付ける

零「グアアアアアアア!!!」

周りも笑いながら俺を蹴ったり斬ったりする

鼓膜も破れたようで右耳耳から血が流れなにも聞こえない

「我々人間が幻想郷を支配するには温厚派を消し、妖怪のせいにするのが手っ取り早い。貴様が従えて居る妖怪も皆重鎮揃い・・・せいぜい利用させて貰おう!」

嬉々として語る目の前の男に俺は鼻で嗤う

次の瞬間全員が刃を向ける

零「従えてる？馬鹿言ってるんじゃねえよ。アイツらは人に従うような玉じゃねえよ・・・んな獣みたいな崇高な奴らじゃねえ。言えばアイツらは・・・」

俺はニヤツと笑う

そして後ろの扉が吹き飛びその風圧でまた何人かの男が飛んでくる

零「ケダモノだよ」

男達がそちらを見る

座薬兔のウサミちゃん

零「結局また来ちまった・・・」

俺は今また永遠亭のベッドで寝転がっている

横ではチルノ達が何故か俺への差し入れの果物を食っている

ミスチー「零さん、あーん」

零「あーん」

その中でミスチーだけは俺に果物を運んでくれる

何と言うか・・・天使だ

話は変わるが結局あのあとアイツらは妹紅達にボコられて壊滅した

俺の傷も不老不死と妖怪と言うのが合間って全治一ヶ月だそうだ

目とか耳とかそんな早くなおんねえと思うんだけど・・・

その間は眼帯を付けておくように言われた

ルーミア「あー！ミスチーが零にあーんってしてる！私もやるのだー」

チルノ「あたしも！」

すると俺の口に二人が果物を詰め込んでくる

零「んくくく!!!」

俺は起き上がって部屋を飛び出る

いや、良い子にだよ？あの子達

そりやあもう、あの娘達が妹なら良いのに位の感じには

零「ハアハア……」

鈴仙「零さん……」

疲れてへばつていると鈴仙がスゴい怖い目をしてこちらを見つめていた

鈴仙「私、言いましたよね？次怪我したら監禁つて……」

零「ま、待て鈴仙！今回は俺は悪くない！」

鈴仙「へえ……言い訳するんですかあ？」

これ……ヤバイかも知れない

明らかにこいつヤル気だ

ゆらゆらと近付いてくる

もうだめだと思つた瞬間鈴仙が抱き付いてくる

零「え？」

鈴仙「無事で良かったですよ……」

いきなり鈴仙が泣き始めた

零「え?え?」

鈴仙「知ってましたよ。今回は零さんは只の被害者って事は」

零「そ、そうか・・・」

鈴仙「はい、貴方が連れてこられた時に妖夢に全部聞いたんです。零さんは私達と仲良くしてるからあんな目にあつたんですよね・・・」

鈴仙の耳が萎れる

俺はそれを見ると鈴仙を撫でた

零「あれは俺が気付かなかつたのが悪いんだ。お前等のせいじゃ断じてねえよ」

俺はそれだけ言うのと踵を返さして自分の部屋に戻る

零「まあ、人生山あり谷あり、俺はちよびつとそれが多いだけさね」

欠伸をしながら後ろ向きに手をふり鈴仙に聞こえるように呟いた

部屋に戻るとチルノとルーミアとリグルとミスチーと大ちゃん俺の布団で寝て
いた

零「たく・・・」

俺は五人に布団を被せて壁に背を寄せて寝る

零「で、何時まで見てんだ紫?」

俺がそう言うのと目の前にスキマが現れる

紫「貴方、日に日に人間を止めてるわね」

零「それは自負してる。……てかさ、後ろで何か禍々しい気を感じるんだけど……？」

紫「藍がちよつと機嫌が悪いのよ……」

零「何かあつたのか？」

紫「……」

紫が苦笑いを浮かべて笑っている

紫「ところで貴方、何故あの時あの人間どもを殺さなかつたの？」

零「あん？」

紫「確かに貴方は半人半妖、靈力と妖力を盛っている。でも貴方はその反面現人神でもある。つまりは神力が残っていた筈よ。貴方の神力なら人なんて簡単に殺せる筈。一体何故黙ってそんな怪我まで負つたの？」

確かにあの時力は少し余っているのを感じていた

あいつ等を殺すのも容易だった

零「まあ、出来るなら殺したくないってのが一番の理由だよ。結局あいつ等が殺つちまつたが……」

そう、今もあそこには伐り殺された死体や首が無い死体、焼死体や原型が残っていない

い死体などが留まって居るだろう

紫「つまり貴方は死ぬつもりはないけど殺すつもりも無いって訳ね？」

零「まあそう言う事だな」

紫「分かったわ。でも肝に命じておきなさい。殺す覚悟がないとなにも護れないわ
そう言う」と紫はまた消えた

俺もまた寝るのだった

怖くないよ小傘ちゃん！

永琳の退院許可が降りてはや数日

また何時通りの万事屋家業に戻っていた

帰ってきて直ぐに小傘が抱き付いて泣いて来た

結局その日は一緒に寝て起きたのは夕方になっていた

それから今日まで平和で過ごせている

小傘「零ちゃん今日はどうするの？」

零「そうだな・・・」

俺が今日は何しようか考える

???「では、家で修行何ていかがですか？」

いきなり声が聞こえて振り向くとそこには華扇が居た

零「え？お前何時来たんだよ？」

華扇「いえ、作者の事ですから下手したら私出なさそうなので・・・」

零「メタいな・・・」

小傘「その事なだけで作者華扇ちゃんの事は東方神霊廟編位に出すって言ってたよ

？」

小傘が俺に乗っかってそう言う

華扇「それって何時くらいですか……」

零「そだな……。この秋までこの編が続いてそこから風神録編に突入して冬に地霊殿で夢月抄とかしたり何かあれだ番外編みたいなものやって星蓮船やってようやく神霊廟だからな……。来年位じゃね？」

華仙「そこまで出番無いんですか？」

零「ま、そう言うこつたな」

俺はもう一度寝転がる

華扇「だから一緒に修行しましょう！兄さんと私の仲睦まじさを見せるんです！」
いきなり可笑しな事を言い出す華扇に俺と小傘がはあ？

と言う顔をする

零「まあ……。暇だし別に良いけどさ……」

小傘「あちきも行くー！」

結局そのまま俺達は華扇の仙界に行く事となった

仙界に来てまず見たのは虎

どうやら華扇のペットらしい

撫でたら喉を鳴らしてくれたりなかなか可愛い奴だ

華扇の家に入ってとりあえず昼飯を作つて食べる

そして始まる修行

俺は気の使い方や妖力、霊力、仙術も教えてもらった

零「でさ、何か・・・近くね？」

そうさつきから華扇の実つた二つの饅頭が当たつているのだ

華扇「兄さんと二人つきりは何百年ぶりですから！一杯甘えさせて貰います！」

零「二人つきりつて・・・小傘が居るだろ・・・」

華扇「あの子は今竹林で驚かす練習をしています」

零「あ、そう」

小傘はご飯で少しは腹はくふらむが人の驚きの方が膨らむらしい

だからたまに人里で驚かそうとしているが失敗している

やっぱ可愛いから驚かないんだろうね

華扇「だから兄さんも私に甘えてください！」

零「いや、甘えねえよ!？」

俺はそのまま小傘が居る竹林に向かおうとする

零「何やってんだよ」

華扇「え？」

半ば泣きかけの華扇に声を書ける

零「腕位なら組んでやつから早く行くぞ」

華扇「兄さん……」

華扇はそのまま俺の腕に引っ付いてくる

そしてその状態で俺達は竹林に入る

零「おっ、小傘。何処だ」

俺は辺りを見ながら小傘を呼ぶ

だが返事が無い

零「おっしいな……」

もう華扇の家に帰ったのだろうか？

華扇「……兄さん……」

零「ん？」

華扇「何か……禍々しいモノが近付いてきます」

華扇に言われて俺は気で辺りを感じる

確かにここにあつて異質な者？物？いや、モノが近付いてくる

俺は木刀を抜いてモノが近付いている方向を見る

華扇も拳を構えている

竹がドンドン倒れて出てきたのは土下座をした小傘の上に乗った小傘の傘だった

零「・・・・・・・・・・・・・・・・」

華扇「・・・・・・・・・・・・・・・・」

あ、よく見ると傘に顔ある・・・

小傘の影がいきなり奇声を上げて土下座しながらこつちに走ってくる

零華扇「ギ（キ）ヤヤヤヤヤヤヤヤ!!!」

俺達は急いで踵を変えて走る

零「何だ!?何だあれ!?めっちゃ怖いんだけど!」

華扇「土下座で走ってましたよ!?傘乗つけてそのまま動いてますよ!」

しかもそんな移動をしてるくせに意外と速い

華扇「・・・・・・・・兄さん、戦いましょう」

零「はあ!」

華扇「このままじゃ殺られます!」

零「戦ったとして後の事はどうする!?戦ったらお前の仙界が無茶苦茶に・・・ツ!」

俺が立ち止まると華扇も立ち止まる

華扇「らしく無いですよ兄さん。人の事をずっと気にする様な人じゃ無いでしょ？」

零「……………はあ。分かった。じゃあ後の事は……………」

小傘の影が思い切り飛びかかってくる

それを俺は木刀で殴り華扇は拳で殴った

零華扇「「ブツ飛ばしてから考える!!!」」

小傘の影は体制を立て直してまた迫ってくる

華扇「包符『義腕プロテウス』!!!」

華扇は腕を模した包帯をほどきその包帯で大岩を掴んで小傘の影に投げつける

大岩が当たってバランスを崩した小傘の影が倒れそうになり俺は下に潜り木刀で叩

き上げる

小傘の影が空を舞い地面に落ちる

華扇「兄さんこれを！」

華扇がスペルカードを投げてきて俺はそれを浮けとる

華扇「今の兄さんなら私のスペルも使える筈です！」

俺はニヤリと笑ってスペルカードを掲げる

零「うっしや! 『氷消波洗旧苔髭(氷消えては波旧苔の髭を洗う)！」

何故だろう不思議な感覚だ

初めて聞いた筈なのに初めての気がしない

『気晴風梳新柳髪（気晴れては風新柳の髪を梳る）』

『水消波洗旧苔髭（水消えては波旧苔の髭を洗う）』

頭に流れてくる

一人は華扇だろうか？

もう一人は・・・分からない。見たこともない

いや、今は戦いに集中すべきだ

俺は勢い良く小傘の影を貫いた

そのまま小傘の影は崩れて中から小傘が出てきた

零「ハアハア・・・」

俺は落ちてくる小傘をキャッチしてそのまま華扇のところまで歩き出す

結局あれは何だったんだらうか？

煮えてなんぼのおでんに候!

修行から帰り俺は小傘を寝かす

今日も今日とで非日常の疲れる一日だった

俺が部屋を出ようとする和小傘に袖を掴まれる

もう一度小傘を見ると寝ている

零「……………」

俺は椅子を引つ張つてきて座り小傘の寝るベッドの前に座る

小傘「お願い……捨てないでえ」

涙を流しながら寝言を言っている

傘だった頃にそんなひどい目に合ったのだろうか?

零「ああ、捨てない。せいぜいこき使つてやるさ」

俺はそう言つて椅子に座りながら寝るのだった

幽々子「一緒におでん食べましょう」

零蛮奇「は?」

その次の日、何時も通りの万事屋家業を何時もメンバーで幽々子の依頼を聞いていたいや、依頼でも無いかな？

零「いきなりどうしたよ？」

幽々子「たまには皆でたべるのも良いでしょ？」

零「まあそうだけど・・・何？まさかここで食うのか？」

幽々子「いいえ、今妖夢が家で作ってくれているわ。」

さ、紫のスキマで行きましょう」

幽々子がそう言うのと幽々子の後ろにスキマが出てくる

零「ハイハイ、小傘起こしてくっから先行き言ってる」

俺はそう言つて小傘を寝かせた自分の部屋に行く

疲れていたのか影を倒したからか小傘はまだ寝ていた

零「小傘、起きろ。出掛けるぞ」

小傘を揺ると小傘がゆっくりと目を開く

小傘「あ・・・れ？零ちゃん？」

零「おう、零ちゃんだぞ」

俺がそう言うのと小傘が抱きついてくる

零「お、おい？」

小傘「暗かった・・・怖かった・・・ずっと一人で・・・寂しかった!」
俺は小傘を撫でる

零「大丈夫だ。俺はずっとお前の側に居てやる。多分蛮奇も、皆もそうさ。だから行こうぜ。今夜は関東炊きだ」

小傘「・・・うん・・・」

こうして俺は小傘と一緒にスキマを潜って白玉楼に行くのだった

そこに居たのは言わずもがな幽々子と妖夢、そして紫と藍と橙だった

関東炊きの鍋は俺達用と幽々子用に分けられていて幽々子用が俺達用の五倍はある

『いただきます!』

蛮奇「あ!それ私が狙ってた大根!」

零「早い者勝ちだもんねー!」

藍「橙、ちゃんと冷まして食べるんだぞ?」

橙「はい!藍しやま!」

妖夢「そろそろ刀を研ぐべきですかね?」

小傘「うくん・・・まだ大丈夫!」

妖夢「そうですか」

紫「幽々子、何故貴女はそこまで食べて太らないの?」

幽々子「さあ？分からないわあ」

零「栄養が全部胸にいつてんじやねえか？」

妖夢「・・・・・・・・・・・・・・・・」

藍「妖夢、そんなに一気に食べたら・・・」

妖夢「ムグッ！」

蛮奇「ああ！妖夢が喉に餅巾着を詰ませた！」

零「吐け！今すぐ餅を吐け！」

小傘「あ！出た！」

橙「水です！」

妖夢「プハア！た、助かりました・・・」

幽々子「フフフ、はしゃいじゃって♪」

零「酒だあ！酒持ってこい！」

妖夢「こつちに有りますよ」

藍「猪口を出せ。注いでやる」

妖夢「大丈夫です。私がします」

藍「いや、私が」

妖夢「いえいえ私が」

幽々子「あらあら、ここはやっぱり私がしようかしら」

紫「大丈夫よ。私がするわ」

小傘「零ちゃん! あちきもお酒呑みたい!」

零「もうちよつと大人になったらな。じゃあお酒入れてくれるか?」

小傘「うん!」

蛮奇「良い? これが漁夫の利だよ」

橙「はい、分かりました!」

この日、白玉楼では楽しそうな声が響き渡ったのだった

七夕と願ひ事はマツチする

今日とはあるリア充の特別な日

年に一回会える特別な日なのだ

そう、七夕だ

零「よおし、願ひ事を書こう！」

蛮奇「またあんたはいきなりだね……」

零「竹なら妹紅と輝夜が一本送ってきてくれたからか」

俺はそう言つて竹を床に立てて固定する

そして願ひ事を書く紙を蛮奇に渡す

蛮奇「願ひ事ね……」

零「まあ、何か書いたら良いから」

俺は立ち上がつて玄關に行く

零「じゃあ小傘にも渡してくるわ」

こうして俺は下に降りた

蛮奇視点

零が降りて私は紙とにらみ会う

願い事・・・姫と影狼と小傘と・・・アイツと・・・

蛮奇「ッ！何でアイツの事考えてんだろ・・・」

出合いも罪を押し付けられたとか最悪な出合いの筈なのに・・・

零「あ、後で妖怪の山に行くからな」

蛮奇「ッ！」

私は零の声に驚いて近くにあつた時計を投げる

零「ポリエステルッ！」

変な叫び声を出して零は気絶してしまった

蛮奇「・・・あ、ヤバッ！」

私は数秒経ってから全て理解して零に駆け寄った

零視点

小傘に紙を渡した後連絡事項は伝えに戻ったら蛮奇に時計を投げつけられて倒れた

目を覚ます

蛮奇「起きた？」

上に蛮奇の顔が見える

零「ちよつと待て」

俺はそれに違和感を感じて蛮奇に待ったをかける

零「頭の下にある妙に柔らかい感触、腰掛けの掛る部分から見える蛮奇の体制、そして蛮奇が座つて俺が寝ていると言うことは……」

蛮奇「そんなに確認しなくてもちやんと膝枕よ」

零「マジですか!？」

俺は起き上がろうとする

蛮奇「駄目。しばらくはこうしてなさい」

零「え、でも……」

蛮奇「良いから」

俺はしばらく黙つてもう一度蛮奇の膝に頭を付けた

蛮奇視点

な、なにしてんだろ私……

別にコイツの事なんてどうでも良い筈なのに……

コイツを見ていると何故か胸が苦しい

蛮奇「ねえ……」

零「ん？」

蛮奇「私、たまに可笑しいの……」

零「可笑しい？」

蛮奇「うん。胸がドキドキして苦しくなったりする。これって何かの病気かな？」

零「あゝ、そりや病気だな。それも飛びつきりの」

蛮奇「つ！それはどんな病気？」

零「そうだな……恋の病」

零が笑いながらそう言う

まただ。また胸が苦しい……

ああ、そうか……

私はコイツの事が……

蛮奇「ねえ」

零「ん？」

蛮奇「好き」

零「そうか……ん？まあ良いや……」

私はコイツの事が好きなんだ

だからこんな事をしたいと思った

コイツの事だからちやんと伝わって無いだろうけどそれでも良い

今日は七夕で特別な日

今日くらいは彦星も織姫も許してくれるよね？

零視点

あれから皆で妖怪の山を登っている

何故か蛮奇が俺の右腕を組んで放さない

そして左には雛が腕を組んでいる

と言うか蛮奇は小傘が好きなのではなかったか？

零「あのさ、歩き辛いから離れてくれない？」

蛮奇「ヤダ」

雛「ええ、久しぶりに会ったんですもの」

小傘「零ちゃんモテモテだね」

にとり「本人は分かかってないみたいだけどね」

後ろで小傘と雛と一緒にいたにとりが何か話しているが距離が離れていて聞こえな

い

そんなこんなで妖怪の山に着くとそこには既に何人かが空を眺めていた
文「あ、零さん！」

零「よお文」

俺は二人から腕を離して文に近付くと俺は横から蹴りを入れられた

穰子「来たらぶつ殺すって言わなかつたっけ？」

零「おめえに会いに来たんじゃねえよ。星見に来たんだよ！」

稔子「ほお、じゃああんたは私達より星を選んだわけね？」

零「ほんつとうにめんどくせえなお前……」

穰子「フフン！さあ、私を崇めなさい！」

文「あのくお二人はどういう関係で？」

俺と穰子が言い合っていると文が話しかけてきた

零穰子「敵ー！」

俺達がそう言うともう一度にらみ会う

その時上から誰かが降ってきた

見るとそれは杖で剣をもっている

零穰子「ギ（キ）ヤヤヤヤヤヤヤ！！！」

杖「零さん大丈夫ですか!？」

零 「大丈夫つつうかお前今俺ごと斬ろうとしたよな？ ついでに言うから殺気全開だったよな？」

静葉 「穰子、大丈夫!？」

そこに来たのは静葉だった

静葉 「妹がお騒がせしました」

椀 「いえいえ、家のバカこそお騒がせを・・・」

零穰子 「「お母さん!？」」

俺はそこに寝転がって空を見る

皆そんな風に空を見る

そこにあつたのは満天で満点の星空だった

その頃

俺の家の竹には三つの願い事がたなびいていた

零小傘蛮奇 『『何時までも皆で一緒にいられますように』』

幕開け

俺は今レミリアの依頼で紅魔館に来ている

レミリア「さて、貴方に来て貰ったのは他でも無いわ。

咲夜と一度戦って貰いたいのよ」

零「何で？」

レミリア「私達は暫く幻想郷を離れるの」

零「はあ……」

確かに紅魔館の後ろに歪なだるま落としみたいなポケットがあったがまさか月に行くのだろうか？

レミリア「てことで、咲夜」

咲夜「はい」

咲夜は俺の目の前に現れるとナイフを持ち出した

零「え!?ここで戦うの!？」

咲夜がいきなりナイフを投げってくる

俺は木刀でナイフを弾く

弾き終わったと思ったら次は後ろにナイフがあった

それを弾こうすると木刀が消えていた

この距離はもう避けられないと思いい腕をクロスしてガードする

腕や足などにナイフが刺さる

俺は辺りを見渡し咲夜を探す

居た

懐中時計とナイフを持って立っている

零「全く、だから嫌だったんだ。服なんて毎回縫って血も生姜使って落としてんだぜ

？」

咲夜「あら、それは大変ね。でも私には関係無いわ」

そう言つて咲夜はまたナイフを投げてくる

俺はそれを無視して後ろを向いて飛ぶ

咲夜「なッ！」

そこに居たのは咲夜だ

咲夜も後ろに飛んで避けようとする

俺はその瞬間に咲夜の懐中時計を奪った

零「ハアハア……。お前の能力はこの懐中時計の物だったんだ……。俺の勝

ちだ!」

咲夜「いえ、まだ「貴女の負けよ。咲夜」……」

今まで黙っていたレミリアが口を開いた

レミリア「咲夜の時計を奪った時点で零の勝つ運命運命に変わったわ。そこから貴女が懐中時計を取り返せない運命も、ね」

レミリアがそう言うと咲夜がナイフをしまう

レミリア「さて、零。貴方を見て面白いことに気付けたわ」

零「面白いこと?」

レミリア「ええ、近々私達は月に行くのだけれどもそこで面白そうな事があるわ。その中心にいるのは……貴方よ、零」

零「……」

俺はそれだけ聞くと踵を返す

レミリア「帰るの?」

零「ああ。月で俺がどうしようとするそれは未来の俺だ。今の俺にや関係無いね」

そのまま俺は部屋を出て門に来る

案の定美鈴は寝ていた

零「たく……。おい美鈴起きろ」

俺が揺ると美鈴が起きた

美鈴「あ、零さん。もう帰るんですか？」

零「ああ、お前も昼寝せずに頑張れよ」

俺は美鈴を撫でてそのまま家に戻るのだった

三人称視点

藍「紫様。紅魔館の吸血鬼は既に月へ行く準備を始めています」

紫「そう……」

紫はスキマを開いて零を見る

紫「藍、私が零と会ったのは何時だと思う？」

藍「？私と零が出会う前ですから大化の改新の頃でしょうか？」

藍の答えに紫は少し笑う

紫「そうね。私としてはそこで合っているわ。八雲紫としては、ね」

藍「それは……どう……」

紫「蓮子、零は今も昔も、そして未来も変わらないままよ」

紫は藍に聞こえないようにそつと未来の友人の名を呟くのだった

写真の中の少女

紅魔館から家に帰ってまずは服を縫って生姜で血を落とす

そして俺はあることを思い出す

零「久しぶりにスマホでも弄ってみるか・・・」

そう！スマートフォンが存在だ

一話に登場して70話、何の音沙汰もなかったスマホだ

俺は自分の部屋に置いてあるスマホを持ってきて開く

そこに写ったのは俺と三人の女性だった

一人は巫女服緑髪の少女、また一人は目玉の付いた防止を被って鳥獣戯画のスカート
を履いた幼女、そしてもう一人はしめ縄を背中に付けている女性だ

その写真を見た瞬間俺は涙を流した

零「・・・紫」

紫「なにかしら？」

俺の目の前にスキマが現れて紫が出てくる

零「しばらく俺も外の世界にいったいいいか？」

紫「……何故かしら？」

紫が少し殺気を孕めて言ってくる

零「このスマホの中の奴らに会いたい」

紫「断るわ。それをしたとしてこの幻想郷にメリツトは無いですもの」

零「なら、いかせてくれたら俺は月だろうが戦争だろうが何だって付き合ってやる」

俺はそう言つて紫をじつと見つめる

しばらくして紫は溜め息を付く

紫「分かったわ。但し外に行くのは貴方の意識だけ。その意識を幻想郷に来る少し前の貴方へ乗り移させるわ。それが最大の妥協案よ」

零「分かった。それでいい。頼む」

俺がそう言つた瞬間意識を失つた

??? 「おい、起きろ！」

零「んあ？」

誰かに起こされ目を覚ます

どうやら寝ていたらしい

周りを見渡す

学校か？

先生「とりあえず自己紹介をしろ」

先生だろう人にとりあえず俺は席を立ちあがる

零「え、風切零です。趣味は惰眠とカルピス摂取。後比較的スタンドの類いは信じません。よろしく」

俺が座ると拍手が起こる

???「東風谷早苗です。よろしくお願いします」

その後二人自己紹介が終わって聞き覚えがない筈なのに懐かしい声に振り向く
そこに居たのは緑髪の少女だった

その後ろには何故か早苗を見つめる二人が居た

残りの二人だ

だが可笑しい

どう考えても異質な奴らが居るのに何故皆反応しないのだろうか

零「なあ、東風谷の後ろの奴って誰だか分かるか？」

俺は隣の男子に聞く

男子「何言ってるんだ？そんな奴居ないぞ？」

はい、確定した

あいつらスタンドだ

そして早苗は・・・

零（スタンド使いかよオオオオオオオ!!!）

何で外にスタンドがいんだよ！

てか偉いフランクなスタンドだな・・・

早苗の自己紹介で我が子を見ているように騒いでる・・・

あ、目が合った

ってこっち来やがった！

死んだふりだ！こういう時は死んだふりだ！

て言うか死んでるのあっち！あっち本職！

二人が俺の前で立ち止まる

???「放課後、守谷神社で待ってるよ」

目玉の付いた帽子を被った幼女がそう言うのと二人は教室を出ていった

ケロちゃんと零ちゃんのピンクな秘密

放課後になり俺は学校を出る

スマホを弄って守谷神社の場所を調べる

守矢神社は京都と茨城後長野にあるがここは京都だ

守矢とは実際洩矢神社のことで遥か昔縄文時代に洩矢の土着神のミシヤグジと大和の神建御名方尊が戦い洩矢神社が建御名方尊神社となり現在は京都で守矢となつてい

る
世にこれを諏訪大戦と言うとか何とか

さて、そういう話している間に守矢神社の階段前まで来た

ここを登れば俺はあのスタンドが見えると言う事を証明してしまう訳だが

零「・・・バックレようか」

そう言つて俺はそのまま何処か知らない家に帰ろうとする

??? 「ちよつとちよつと、何処に行こうつて言うのさ!」

その声に振り向くとそこに居たのは俺をここに来るように仕向けた幼女だった

??? 「ほら、久しぶりに戻ったんだから早く来て!」

三人称視点

これをまた別の所から見ている人物が居た

紫「・・・・・・・・・・・・・・・・」

八雲紫である

しかしこの紫は零の知っている紫ではない

それ以前の紫である

紫「どう言う事？零の記憶は封印したはず・・・・。なのに今はまるで昔の記憶がある

ような・・・」

???「違いますわ」

紫の後ろにスキマが現れる

紫のスキマから出てきたのは紫だった

この紫こそが零の知っている紫である

現紫「今の零は紛れもなく記憶がありませんわ。過去の私」

旧紫「・・・・・・・・・・どう言う事かしら？」

現紫「今の彼は今から半年後のかれ、私が意識を移しました」

旧紫「一体何のために？」

現紫「彼たつての希望ですわ。彼こちらに戻ってくる際に記憶を無くしましたの。今彼が思い出しているのは幽々子が西行妖を封印した時の記憶くらいですわ」

現紫がそう言うのと旧紫がまた零を見る

旧紫「貴女は、彼をどこまで知っているの？」

現紫「あら、貴女は私なのだから分かっているでしょ？」

私も貴女も知っている範囲は同じ。まさか零が諏訪の神と知り合いなど思っても見ませんでしたわ」

現紫はそのままスキマに戻ろうとする

現紫「そうそう、近々月とまた衝突するのだけれども良かったら見に来なさい。今の零を見せて上げる」

それだけ言うと紫はスキマを閉じた

殴ったね! ブライトさんにも殴られた事無いのに!

零「よし、現状を確認しよう。先ず俺は学校で諏訪子にここに来るように指示されたあ。神社に来るう。バックレようとしたあ。諏訪子に捕まるう。突然カミングアウトされたあ。現在に至る……うん。ワケわからん」

諏訪子「とりあえず零と私は契りを結んでてその結果早苗のご先祖様が生まれたって覚えておけばいいよ」

諏訪子に言われて俺は早苗を見る

俺の子孫にしては似ていない

零「とりあえず、神社に入って良いか? 話はそれからだ」

早苗「あ、はい。どうぞ……。私は服を着替えてきます」

こうして俺は諏訪子と早苗と鳥居を潜って神社に入る

早苗と別れて俺と諏訪子は境内の縁側に座る

諏訪子「記憶もないみたいだしまずは零の出生の話をしようか……」

そう言っつて諏訪子は酒を飲む

てかこんな時間からのものかよ……

諏訪子「零は縄文の諏訪に産まれたの。でも零を産んだ女はそんな事をしたことが無いと言う。妖怪の作業と思つて人々は土着神の私に零の処分を頼んだ訳だよ。でも零は確かに霊力と妖力を持つてたけど一番驚いたのは月から信仰が来て神力を持つてた事だよ」

零「神力……」

確か潤美も言つていた

俺は神でもあるつて

諏訪子「呑む」

零「今高校生だから呑めねえよ」

諏訪子「連れないねえ……。ま、良いや。それから何年も経つて零は私と同じくらいの見た目に成長したよ。でね、そろそろ神社に巫女がほしいこれだったのよ。でも巫女になるにもある程度の才能が要つた」

零「なるほど……。だからある程度霊力が高くて妖力と神力を持つてる俺つて訳か……」
諏訪子が頷く

諏訪子「でもね、ちょっと恐かつたんだ。だから零の髪の毛を貰う事にしたの」

零「か、髪？」

諏訪子「零はどうやったら子供が出来るか知つてる？」

零「んなもん夫婦が一緒に寝てたらいつの間にかコウノトリが女の腹に入れてくんだよ」

諏訪子「何か違うけど……まあコウノトリつのは合ってるよ。それは私が作った術式の名前だよ。男の遺伝子を入れれば種が出来てそれを最初にさわった女の中に入るって仕組み。だから零はある意味童貞のチェリーって事だね」

零「何で二回も童貞言った!?!」

俺は涙を流しながら叫ぶ

諏訪子「まあまあ。で、それで産まれたのが早苗のご先祖三人で暮らしてたんだけどねそんな日常が終わりを迎え……た訳でも無かったんだけどね」

???「お、来たかい?」

そこに来たのはしめ縄を背負った女性だった

諏訪子「ほら、来た。日常を奪った張本人、八坂神奈子だよ」

神奈子「随分な紹介だねえ。と言うか零に自己紹介何て今さら過ぎないかい?」

諏訪子「零は今記憶が無いんだよ」

神奈子が俺を見る

零「……建御名方尊……」

神奈子「私の事知ってるじゃないかい」

零「いや、今のは諏訪大戦を知ってたからだ」

神奈子「ほお・・・じゃあこっからは知ってるだろ？」

俺は頷いて目を閉じる

零「ミシヤグジが使ったのは鉄の輪だ。それに対して建御名方尊が使ったのは御柱。ただ勝敗を決めたのは建御名方が鉄を腐らせる方法を知ってたからだ。建御名方は諏訪を納めようとしたがミシヤグジは崇り神誰も神を乗り換えようとはしなかった。だからミシヤグジを表の神にして信仰を集めたんだ」

俺が説明すると二人とも満足そうな顔をする

神奈子「うん。大体合ってるね」

諏訪子「そこを知ってるならもう教えることは無いね」

そう言うと神奈子が立ち上がった

神奈子「じゃあ闘おうか」

零「は？」

神奈子のその言葉に俺はすつとんきような声を上げるのだった

ガンキャノンキャノ子

ここは守矢神社の裏にある湖

そこには多数の御柱がある

そこに俺と神奈子は居た

諏訪子「ちよつと神奈子！何するつもり!？」

神奈子「あのとときは零め小さかったからねえ。今なら零の力を見れるだろ？どうやら妖力も神力も封印されたみたいだけどねえ」

零「封印?」

俺は神奈子に聞き返した

神奈子「妖力も神力も無い。だがその残り香はある。封印されてるのさ」

零「・・・・・・・・」

つまり俺は今只の人間と言うことか・・・無理じゃね?

しかも今は憑依のメダルとスペカもない

零「ちなみに戦わないと言う選択肢は・・・」

神奈子「あると思うかい?」

零「ですよねえ。じゃあちよつと待ってる」

そう言つて俺は諏訪子の元に飛んだ

五分が経過して俺は神奈子の元に戻る

神奈子「それは家に有つた刀かい？」

零「ああ、諏訪子に取つてきて貰つたのさつてウオツ！」

神奈子がいきなり御柱を飛ばしてきた

神奈子「待つたのだからこれくらいは良いだろ？」

零「ああ、まあ良いか」

俺は刀で御柱を反らす

神奈子「ほお、これを退けるか・・・なら！」

こんどは先程よりも巨大な御柱が俺を潰す

諏訪子「零！・・・神奈子！いくら何でもやりすぎだよ！」

神奈子「いや、まだだ・・・」

諏訪子「え？」

諏訪子が声を上げると御柱にひびが入り始めた

零「効かアアアアアアアアアん!!!おれ、硬いから。あ、血い出てる・・・」

俺はおでこを触る

!!!

血がベツタリと指に付いている

神奈子「アハハ！良いねえ！そうじゃないと面白くない！」

今度は巨大な御柱が何本も向かってくる

零「そろそろか・・・」

俺はカードとメダルを出す

確かに最初は無かった

だが逆に良く考えるんだ

零「ねえなら作っちゃえば良いんだと！憑依『ミシヤグジ様』！」

俺は諏訪子の力を憑依させる

今回はどうやらケロちゃんハットが諏訪子を憑依させた証みたいだ

俺は鉄の輪を取り出し御柱にぶつける

神奈子「憑依か。良いねえ！面白くなってきたじゃないかい！だが・・・」

御柱が後ろから飛んでくる

神奈子「詰めが甘かったね！」

零「詰めが甘い？」

俺は自然と笑う

零「そりゃあそつちだろ」

神奈子「何!？」

俺は刀で御柱を叩き落として飛ぶ

また飛んできた御柱に乗って走り飛び移っては走る

とうとう神奈子の目の前まで来た

そして俺は飛び神奈子の後ろに行く就先に投げたもう一つの鉄の輪を弾いた

零「俺は天下無双の天邪鬼。騙しにフェイントはお手のもんってね」

刀を鞘に納めて俺は陸に行く

諏訪子「凄いよ零!まさか神奈子に勝っちゃうなんて!」

零「バカ言え。俺が凄いいんじゃなくて神奈子が強かっただけさ」

諏訪子「どう言う事?」

零「神奈子は鉄の輪を腐らせようとしたけど俺の霊力がそれを拒んだ。それにすぐ気

付いた神奈子は次に神力でそれを書き消した。でも腐らない。何故かって?元はから

鉄じゃあ無かったからさ」

諏訪子「じゃあ何だったの?」

零「それは・・・」

神奈子「黒曜石だろ?」

零「まあそう言うこつた。で、満足したか?」

俺は神奈子に向き直って聞く

神奈子「ああ、大満足さ。これなら大丈夫かもね」

神奈子の言葉に俺は首を傾げる

諏訪子「大丈夫ってまさか！」

諏訪子は何かに気付いたらしい

神奈子「零！お前を守矢神社の神に迎える！」

これぞ神の奇跡の力です！

何故だ・・・

何故こんなことになってしまったのだ・・・

俺は早苗の用意してくれたたご飯を食べながら考えていた

てか気付いたら食べ終わってたわ

早苗「零様。少し良いですか？」

零「あ？ああ」

俺が返事をするると早苗が入ってくる

早苗「あ、食事中でしたか？」

零「いや、もう食い終わってたから。で、話つて？」

早苗「はい。実は守矢神社は今深刻な信仰不足なんです

す。だからこのままだと諏訪子様と神奈子様が消えてしまうんです！」

零「それを俺に話してどうするよ？」

早苗「諏訪子様達は私の為に一年も待っててくれてるん

です。・・・何時消えてしまうかも分からないのに・・・」

零「……………はあ、つまりは俺にアイツラを説得させれば良いんだろ？」
俺は考える

零「そう言やどうやって信仰を回復させるつもりだよ？」

早苗「……………幻想郷です」

零「ハア!？」

俺は聞いたことのある場所に驚く

零「正気か!?!こつちでは存在が無かったことにされんだぞ!」

俺は早苗の肩を掴む

早苗「それでも私は諏訪子様と神奈子様に仕える巫女ですから……………」

俺はそれ以上何も言えなかった

早苗が出て行って俺は声を上げる

零「……………紫」

紫「何かしら？」

零「もう、戻してくれて良い……………」

紫「あら、もう良いの？」

零「ああ、これ以上俺がここに居て出来る事はない。これはアイツラの問題なんだ」

俺は立ち上がる

紫「わかつたわ。じゃあお休みなさい」

それがここで最後に聞いた言葉だった

三人称視点

早苗「零様くはいりますよ〜？」

早苗は零の部屋に入る

早苗「零様？」

ソコでは零が寝ていた

早苗「そんなところで寝たら風邪引いちゃいますよ？」

そう言つて早苗が零に近付くと一つの神 紙が目に入った

そこには何か書かれている

早苗「……守矢神社の皆々様、幻想郷への移動は今年秋と決定致しました。これは決定事項です。異論は認めませんコノヤロー。それと早苗、零様は止めろ。先輩とよベコノヤロー。最後に幻想郷は全てを受け入れる。お前らが来るのを楽しみにしている……」

早苗の頬から水が垂れる

涙である

そして現在幻想郷

零「あく寝た寝た」

穰子「おはよう」

そこに居たのは稔子だった

零「………何で居んの？」

穰子「お姉ちゃんに野菜持っていけって。この前の七夕のお詫びだった」

零「いや、そうじゃなくて……鍵閉めてた筈なんだけど……」

穰子「ああ、扉ぶっ壊して入った」

零「ふん！」

零は穰子を蹴り飛ばす

穰子「何するのよ！」

零「何するもこうもダメエがなにしてやがんだ！だ大体な……」

こうして今日も幻想郷は平和であった

鳥料理撲滅委員会とゴリラ撲滅委員会

零 「鳥料理撲滅の署名イ？」

俺は目の前に居るミスチーに先ほど言われた単語をもう一度言う

ミスチー 「そう！私が八ツ目鰻を広めても鳥料理が減る事が無いから直接的な手段に出るわ！」

零 「はあ………」

ミスチー 「既に射命丸さんと久侘歌さんも協力して貰ってるわ」

零 「そりやあ鳥だからだろ……」

ミスチー 「とにかく！ここに署名を！さあ！さあ！」

今日のミスチーはえらく積極的だ

そこまで鳥料理を無くしたいのか？

??? 「ちよつと待ったー！」

そこにまた知らない女の子が入ってきた

零 「えつと……どちら様？」

??? 「私は奥田野美宵！鯨吞亭の看板娘よ！」

零「ああ！あんたが俺が誘拐された時慧音に伝えてくれた娘か！ありがとな！」
俺は美宵の頭を撫でる

美宵「うゝ／＼／＼／＼」

零「で、何か用か？」

美宵「そうだ！私、零さんにお願いがあつたんですけど鳥料理撲滅の話が聞こえて……。」

零「それは後でいいや。「え!？」で、お願いつて？」

美宵「その……小鈴ちゃんが妖怪と政略結婚させられそうなんです！」

三人称視点

てか既に結婚式は始まっていた

見合いして即行である

司会「皆様、お待たせ致しました。新郎新婦入場です！」

入り口の扉が開く

そこから入ってきたのは小鈴と……ゴリラ型の妖怪だった

蛮奇「ねえ姫。人間一体どう転ぶとあんな事になるの？」

ワカサギ姫「お見合いで脱糞してワントラップ入れるとああなるのよ」

阿求「女の子がそんなはしたない言葉を言う物じゃないですよ！それに笑い事じゃないですよ」

ワカサギ姫の言葉に阿求が注意する

ワカサギ姫「別に笑ってないわよ？」

影狼「て言うか笑えないわよ。他人の結婚式で哀れみが込み上げたのは初めてよ」

阿求「何とかならないんですか？一様霊夢さんと魔理沙さんにも来て貰ったけど二人ともあの調子だし・・・」

阿求の目の先には酒を呑みながらバナナを食べる霊夢と魔理沙と萃香の姿がある

阿求「とにかく！貴女達に暴れて貰ってこの結婚式を壊して欲しいのよ」

蛮奇「壊すって最初から壊れてるでしょこれ？ゴリラだらけじゃない。最初から壊れてるもの壊すなんて神様でも無理よ」

その時阿求の懐から電子音が響く

香霖堂で売っていたトランシーバーだ

小鈴『こちら小鈴！応答願いますどうぞー！貴女達なにやってるのよ!?早く結婚式を壊してどうぞー！何のために呼んだと思ってるの!?ご飯食べさせる為じゃないわよ！どうぞー!』

影狼「ご飯って・・・バナナしかないじゃない」

小鈴『私だつて逃げたいなら逃げるわよ！でも今回はお父さんの意向なの！どうぞー！』

霊夢「何処産よ？どうぞー！」

そこに来たのは霊夢だった

小鈴『え!?!』

霊夢「このバナナは何処産かつて聞いてるのよどうぞー！』

ぞー！』

小鈴「バナナの事はどうでも良いのよ！ちよつと気に入ってるじゃないバナナどうぞー！』

ぞー！』

霊夢「果物の王様はやつぱバナナよ。どうぞー！」

小鈴『どうぞじゃないわよ！そんなこといちいち報告しなくて良いのよ！どうぞー！』

ぞー！』

小傘「あちきちよつと眠くなつてきちやつた・・・」

小鈴『勝手に寝てくださいどうぞー！』

そんなこんなしているうちにとうとう新郎新婦の共同作業となつた

そこに出てきたのは大きなベッド

小鈴「・・・・・・・・・・・・・・・・（え、ちよ、ま、ええ!?!）」

そこにゴリラが寝転がる

小鈴（嘘！嘘だよな？私のアワビにバナナ入刀？ムリムリムリムリ！私のお腹が破けちゃうって！確かに共同作業だけど！てかゴリラども！きつきから何ガン見してんのよ！机のバナナと思つたら今度は私のアワビ!?助けて皆！）

小鈴に皆を見るが話をしていたりバナナを持ち帰ろうとしていたり酒を呑んで騒いでいる

小鈴はどうとう持ち上げられて投げられる

下ではゴリラが待ち受けている

小鈴（ああ、零さんと一緒に・・・甘味処に行きたかったな・・・）

次の瞬間小鈴に向かって木刀が飛んでくる

そのまま小鈴が壁に貼り付けられ木刀を投げた張本人を見る

そこに立っていたのは零だった

小鈴「零さん！」

零はその手に持っているトランシーバーを口に近付ける

零「メデーメデー。こちら零さんどうぞー！今からここは結婚式場ではなく宴会場で
す。暴れたい奴は暴れてどうぞー！」

次の瞬間ゴリラ達が暴れだし一般人が逃げ出す

ハゲ坊主と元ハゲ坊主

零「・・・・・・・・・・・・・・・・」

小鈴「・・・・・・・・・・・・・・・・」

???「・・・・・・・・・・・・・・・・」

今俺の前にはハゲのおっさんが居る

零（すいません。え？誰あれ？小鈴が連れてきたよな？）

小鈴（う、家のお父さんです・・・）

俺はもう一度小鈴のお父さんを見る

零「え、えつと・・・お名前は・・・」

???「本居宣造。皆からはさすらいの酒飲みと言われている」

零「なるほどなるほど・・・うすらいの酒飲みね・・・」

宣造「え？うすらいの酒飲みって何？さすらいって言ってるよね？もしかしてバカに

してる？」

零「いや、さすらいの酒飲みとか言われてる時点ですでに人里の全員にバカにされて

るよね？」

宣造「プツツンとなったよもう。小鈴ちゃん、こんなやつと結婚なんてお父さん断じて許しません！」

俺はもう一度小鈴を見る

零（おい！何か変な勘違いしてない？あのハゲ）

小鈴（ごめんなさい！実はお父さんがこの前の結婚式を零さんがぶつ壊したって聞いて私の彼氏だと思ってるんですよ！）

何じゃそりゃあ……

俺はコーヒートオレンジジュースとカルピスを入れる

それを机に置く

零「ドーピング剤でも入れてやろうか？」

宣造「それは何？俺を禿げさせようって算段か？」

零「何言ってるの？既に禿げてるだろ」

宣造「君何なの？一様お義父さんになるかもしれないんだよ俺？」

宣造はコーヒートを飲み干し俺を見る

俺もカルピスを少し呑んで置く

零「大体あんた俺が小鈴の何なのか小鈴に聞いたのかよ？」

宣造「そう言えば小鈴ちゃん、こいつ小鈴ちゃんの何なの？」

俺と宣造が小鈴を見る

小鈴「えつと・・・お兄ちゃん？」

小鈴のその言葉に数秒部屋が静まり返る

宣造「小鈴ちゃんはやらん！」

零「さっきの言葉聞いてた!? 小鈴否定してたよね!？」

蛮奇「てかあんたら私ら居るの気付いてる？」

俺が上を向くとそこには蛮奇と小傘が居た

てか実は言うとも最初から居た

宣造「何だお前達は!?! 私は目の前のチビに話しているんだ!？」

蛮奇「あのね! 言つとくけど零は鈍感でバカで朴念仁だけどね、その行動の一つ一つに魂が宿つてる! あんたにどうこう言う資格は無い!」

零「ちよちよ、蛮奇さん!？」

俺が立ち上がると小傘に殴られる

蛮奇「小傘さん!？」

小傘「零ちゃんは黙つて!」

零「はい!」

宣造「・・・・・・・・・・なるほど、何となく分かった。認めよう。風切零。今

からお前は小鈴ちゃんの旦那だ！」

零「いや、あの、話聞いてた？ほら、小鈴も何か言つてやれ！」

俺は小鈴を見る

なぜか顔を赤くしている

小鈴「そ、その・・・よろしくお願ひします！」

俺はまた騒がしそうな日常を迎える気がするのだった

死を覚悟した事はあるか？俺はある

何故か小鈴と結婚ってかまあ、うん。

結婚してしまった

まあ、それでも俺は何時も通りに接すれば良いだけなのだが……

蛮奇「やってしまった……。説得するつもりが何故か結婚を押ししてしまった……」
零「まあなっちまったもんは仕方ねえよ。気長に居りや何か改善するかも……」大変ッ

！「ん？」

そこに来たのは小傘だった

零「どうしたんだよ小傘？」

小傘「とにかく大変なの！この新聞！」

小傘が手に持っていた文々。新聞を机に置く

零「何々……噂の万事屋零ちゃんついに籍を固めるう!?」

明らかに昨日の一件だ

零「あんのパカラスどっから見てもやがったんだ……」

小傘「とにかく！文ちゃんに取り消して貰わないと！」

??? 「その前に、私の質問に答えてもらおうかしら?」

その声に俺は肩をびくつかせる

そしてそれと同時に俺は死を覚悟した

零 「ゆ、幽香さん!」

そこに居たのは少し前俺をボコボコにした風見幽香その人だった

幽香 「私、言わなかったかしら? 浮気をしたら許さないって。一回目は許してあげた。二回目も。でもこれで三回目……。私の顔もなんとやら。今度こそゆるさないわよ」

俺は後ろに居る蛮奇と小傘を見る

零 「あるえ、何で二人とも後ろにさがってんのおく?」

俺も近付こうとするが幽香に襟を捕まれて動けない

零 「う、裏切り者お!せ、せめて死ぬなら皆に見守られながら……」

幽香 「とにかく話を聞かせてもらおうかしら」

零 「いや、やっぱ天命まで成就した、い。え? 話?」

俺が遺言を残していると幽香の意外な言葉に幽香の顔を見る

それは裏切り者二人も同じ様で見ていた

幽香 「貴方みたいな朴念仁が結婚なんてどう転んでも起き得ないわよ。訳を話してみ

なさい」

俺は幽香に正直に話すことにした

幽香「なるほどね。つまりあの烏天狗が話を盛っていると……」

零「ああ、何か知らぬ間に小鈴の父親の了承まで取ってた始末だよ……」

俺はカルピスを呑みながら話す

蛮奇と小傘も一緒に呑んでいる

幽香「なら話は簡単よ。私と籍を入れたら良いのよ」

その言葉に俺たちは同時にカルピスを吹く

それが全て幽香に掛かる

幽香「まあ選ぶのは貴方よ」

零「にやんで俺ぢやけ……」

俺の顔には殴り傷やたんこぶが増えていた

幽香「女の子を殴るわけにはいかないでしょ」

零「お前って実は優しいよな。嫌いじゃねえぜ」

幽香「……そう」

何故だろ？

幽香が後ろ向いてプルプルしてる……

ね♪」

ルーミア「？」

紫「それじゃあまたね♪」

紫が去るのを見送ると次に仮面を被った巫女が現れた

ルーミア「……へえ。貴女が紫が言つてた人かしら？美味しそうね。食べていい？」

こうして二人が戦い始めた

次の日

俺は博麗神社の境内に座っていた

零「萃香に着いてきたら面白いもんが見られたぜ。昨日大捕物があるつつうから何かと思えばよもやよもやだ」

俺は隣で木に縛り付けられて座っているルーミアに話し掛ける

ルーミア「見てないで助けなさいよ」

零「やだよ。んなことしたら俺また縛られらあ」

ルーミア「だつたらせめて酒呑むの止めてくれない？見てるとお腹が減るのよ」

零「お前人間あんだけ喰つてきてまだ腹減つてんのかよ？」

ルーミア「貴方程じゃ無いわよ」
俺は黙りこくる

ルーミア「何千人と喰って殺してきた貴方にとつて私なんてかわいい物よ。でも博麗の巫女に退治されてから貴方は変わった」

俺は立ち上がって萃香の元に戻る

零「まあお前の飢えも直に治るさ」

ルーミア「・・・何でそんなこと分かるのよ？」

俺は立ち止まりルーミアを向く

零「俺も同じだったから」

ルーミア「？」

零「いや、何でもねえ」

俺はそのまま立ち去る

しばらく歩いていると目の前に小さな女の子が現れる

零「おお、どうした霊夢？」

霊夢「これあいつにやるの」

そう言つて見せたのはおにぎりだった

零「おお・・・手作りか？」

霊夢「そうだ！」

零「だろうな……」

だつて形が物凄い崩れてるもん

零「ま、その気持ちはあいつに伝わるだろうぜ？」

俺は霊夢を撫でて瓢箪に入れた酒を一口呑み縁側に座った

???「止めて欲しかったのだけどね？」

零「……霊華か……」

俺は後ろからする声に振り向かずか答える

零「別に止めても良かったがそれじゃあルーミアも変わんねえだろ？」

霊華「そう……。でも私は止めるわよ？」

零「……好きにしろ」

霊華が霊夢に向かって歩いていく

萃香「零くそろそろ帰るよ？」

零「お、萃香。俺しばらくここに住むわ」

萃香「分かったよ。霊華に迷惑かけるんじや無いよ？」

零「わあつてるって」

俺が返事すると萃香は帰って行つた

しばらくして俺はまたルーミアを見る

零「さて、お前は何処まで耐えられる？」

俺は少し笑いながら呟いた

鬼は笑い巫女は呆れる

あれから数日が経った

零「? 霊夢、また行くのか?」

傘とおにぎりを持つ鈴夢に俺が聞く

霊夢「おう!」

零「……………はあ。ちよつと待つてろ。俺も行く。霊華は……………「行かない」ハイヘ

イ……………」

俺も傘を持ち霊夢とルーミアの元に行く

零「……………見事にずぶ濡れだな」

ルーミア「……………」

ルーミアが俺の顔を見る

霊夢「はい!」

霊夢がルーミア背中と木の間に傘の取っ手を詰める

ルーミア「……………」

今度は霊夢を見る

零「さ、靈夢。今日も食わねえらしいし傘は渡した。戻るぞ」

結局その日ルーミアがおにぎりを食べることは無かった

次の日

零「ほらほら、逃げろ〜！じゃないと喰つちまうぞ〜！」

靈夢「わ〜！」

俺は靈夢と追い駆けっこしていた

零「ちよ！靈夢！一旦休憩！脇腹痛てえわ・・・」

俺はルーミアの隣に座る

ルーミア「・・・何で私の隣に座るのよ？」

零「ん？何だ？古い友人の隣に座るのは悪いことか？」

俺はそう言いながら目を瞑ると腹の音が鳴った

もう一度腹の音が鳴る

零「こ、今度は俺じゃねえぞ？」

ルーミア「分かてるわよ・・・」

そう、さつきの音は目の前で崩れたおにぎりを持つ靈夢の腹の音である

靈夢「お腹減った〜！」

ルーミア「お前の喰いもんだろ。それ食べればいいだろう？」

ルーミアの提案に霊夢は涎を滴しながら何かを考えていた

何か思い付いたようで顔が明るくなる

霊夢「うんツ！」

ルーミア「・・・つたく」

ルーミアが霊夢に呆れているとルーミアの目の前に三分の一のおにぎりが来る

ルーミア「？」

霊夢「はいっ！三分子ツ！」

零「お、俺にもくれるのか？」

霊夢「零もお腹減ってるんだろ？これで皆お腹いっぱい！」

零「そうか」

俺は笑いながらおにぎりを手に取り口に入れる

ルーミア「ありがとう・・・」

ルーミアが礼を言うと霊夢がおにぎりをルーミアの口にまで持つていく

俺はそれを見てから立ち上がって歩く

零「・・・良い娘じゃねえの。アイツの代で人間と妖怪の不和は少しでも緩むか

ねえ・・・」

俺は木の後ろに隠れている霊華に声をかける

靈華「そんなことにならないから妖怪退治を生業とする博麗の巫女が居るの。貴方も分かつてるでしょ？」

零「分かつてなかつたらアイツを彼処に縛り付けた意味も分かつてねえよ」

靈華「……まあ、反省は見えるし解放はして上げる」

零「全く、素直じゃねえなあ。親も子も、妖怪とも仲良くなるうとしちやあ居るが方や力で方や心。外見は違うが腹は全く同じ、か……。ま、俺も人間は好きな訳だがな」
そう言つて俺は懐に入れていた酒を呑む

零「……逃げんなよ？その道選んだのはテメエ自信だ。俺も紫も助力はするが手は出さねえ」

靈華「さすが鬼ね。下品で冷たくて……。でも温かくて真つ直ぐな天邪鬼さん」

零「けつ！食えねえ女」

俺はそのまま神社の縁側で寝るのだった

零「……知ってる」

ルーミア「!?」

零「俺がまだ暴れてた時、霊華が来て俺を退治しようとしたのさ。当然俺も抵抗した。でも勝てなかったよ。面を外した辺りからな」

ルーミア「で、どうだったんだ?」

ルーミアが身を乗り出して聞いてくる

零「鬼の俺から言わせりゃあ、アイツア鬼だ。……所でお前、アイツが人里の奴らからどう見えてるか分かるか?」

ルーミア「どう見えてるって……やっぱり守ってくれてるんだから感謝してるんじゃない……」

俺はルーミアの答えを聞き霊華と霊夢がいるであろう祭り囃子に包まれた人里をみる

零「俺等みたいなのは除くとして嫌でも妖怪は恨まれる。挙げ句同じ人間にまで恐れられる。博麗の巫女つてのはそう言うもんさ。困った時だけ担ぎ上げて、そうじゃないときや人間じゃねえ何かを見るような目。……本当にヘドが出る」

俺は拳を強く握り奥歯を噛み締める

零「俺はアイツにやられてお前みたいに縛られたけど……全然、痛くも辛くもな

かった。本当に、辛かったのは………アイツ何だ」

ルーミアも俺から目を反らして人里を見る

零「アイツはそんな視線から逃げるために仮面を被った。霊夢だつてそうだ。あんなガキなのに博麗の巫女だからとそう言う風に見られる……」

俺が話を続けようとすると頭にたこ焼きが飛んできた

俺はバランスを崩して鳥居から落ちる

そして結局皆で階段に座りたこ焼きやら焼きそばやらを食べる

ルーミアは……まああの話をした手間、元気が無いのは当たり前か……

零「つて霊夢、頭のリボンは？」

俺の言葉に霊夢がペタペタと頭を触る

霊夢「ああ!!」

霊夢の頭にリボンが無いことに気付いて霊夢は泣き出した

霊夢「ないっないっ!」

霊華「あー、きつとお祭りの何処かで落としたのね。ほら泣かないの。リボンなら買った買って上げるから」

霊夢「やだやだく!あれがいいのッ!」

一向に泣き止まない霊夢に困っているとルーミアが自分のリボンを霊夢に渡した

ルーミア「ほらッ、あげる」

霊夢が泣き止みルーミアを見つめる

ルーミア「その、私のでいいなら……。その……。嫌か？」

霊夢「ルーミアッ大好きッ！」

霊夢は笑顔になると思いつきりルーミアに抱きつく

ルーミアもさつきよりは元気が出たらしい

霊夢がルーミアの膝で寝て俺たちは再び階段に座る

霊華「……。ルーミア、さつきから元気ないようだけどうしたの？」

ルーミア「な、何でも無いわよ！……。ううん。やっぱある」

霊華「……。言ってみて」

ルーミア「あのさ……」

ルーミアが良いかけた途端花火が上がった

霊華「おお!! 始まった始まった！」

花火の音で起きたのか霊夢もいつの間にかはしやいでいる

霊夢「かーちゃん。霊夢もドーンするッ。ドーン！」

零「ドーン？花火か？んじゃあ俺が取りに行つてくるわ」

霊華「よろしくね」

ルーミア「あのさッ！」

俺が霊夢の後を追おうとするとルーミアの聲が花火の音の中から確かに聞こえた俺たちはルーミアに振り向く

霊華「・・・何よ？いきなり大声出して？」

ルーミア「・・・他の奴らがアンタをどう思ってるか何て私には分からない・・・けど・・・けど・・・少なくとも私は・・・私と零は・・・感謝しているから・・・だから一人で・・・苦しむなよ」

霊華「零」

零「ん？」

霊華「霊夢を見てて」

俺はそのままその場を立ち去った

霊華がルーミアに向かって歩く

ルーミア「言いたい事はそれだけ・・・」

ルーミアは自分の涙を拭う

その横を霊華が通り過ぎる

霊夢「零〜！早く〜！」

零「わあつた。わあつたつて。お、色々あるな・・・」

ルーミア「じゃあ私はこれで」

ルーミアが俺の持っている袋から線香花火を取り出す

霊夢「れいむこれにする！」

ルーミア「それは大人用だ。こっちにしとけ」

そう言つてルーミアはもう一本線香花火を取り出す

霊華「こらああ！零い！」

俺が振り向くとお面がこめかみに直撃する

零「何しやが、る!？」

霊華「フンツ！お節介天邪鬼が人の秘密勝手に話してくれちやつて!・・・でも・・・

まあ・・・そう言う妖怪が幻想郷に一人や二人居たって良いかもね・・・」

そう言つた霊華の顔はお面が無く美人な顔だった

霊夢が霊華に飛び付く

零「ルーミア、お前の気持ちがいイツの闇を打ち払つた

んだ」

ルーミア「・・・」

ルーミアはまだ呆然としていて返事がない

俺はその隙に酒をルーミアの口に入れようとする

するとルーミアは俺の腕を持ち俺の口に酒を入れてきた
ルーミア「お前がのめ！」

霊夢も霊華も笑っている

花火も終えて俺は酔いを冷ますために縁側に居た

零「くっそく行けると思っただのになく・・・」

俺が外を見るとルーミアが走って森の中に入って行った

アバヨ。旧友（ダチ公）

あれからルーミアが帰ってこない
理由は分かっている

人間を食べないルーミアが禁断症状を起こしたのだ

人を食う、では語弊がある

正確に言えば人の闇を食うのだ

では何故人喰いの俺が禁断症状を出さないか

答えは感嘆俺は人間でもあるからだ

人の食事だけで百年は生きていける

と、説明している間にルーミアを探しに出た霊夢とその霊夢を探しに出た霊華が帰ってきた

あれからもう一週間経つ

ルーミアが紫に与えられたタイムリミットは今日

零「……紫」

俺は霊夢を寝かせつけて紫を呼ぶ
するとスキマが開き俺は中に入る

そこにはスキマの外を見る紫と藍が居た

零「……本当に殺すのか？」

紫「諦めなさい。もうこうするしか無いの」

隣には少し小さなルーミアが居る

零「！狐の……面ツ！」

霊華が狐の面を付けていると言う事は……

零「本気、何だな」

なら俺も覚悟を決めなければならぬ

例えばそれがどちらのダチ公も失う事になろうとも

紫「……ルーミアは闇を操る妖怪。つまりルーミアが死ぬことは夜が失くなり
生態系が崩れ生きとし行ける全てが死ぬ事と同義よ」

藍「だからこそ、あの宵闇の妖怪の代わりを立てその上で殺す必要がある。お前なら
分かってるな？」

零「……ああ」

そのままオレは二人の戦いを見る

ルーミアが闇の手で攻撃し霊華が避けながら札を投げている

藍「……………零？何を……………」

俺は自然と歩いていた

紫「藍！零を抑えて！早く！」

藍は紫に言われるがまま俺を地面に組伏せた

零「フーツフーツ……………そのまま、押さえ付けてろ。藍！じゃねえと俺は……………霊華もルーミアも……………殺してしまおう！」

スキマから爆発音が聞こえる

見ると岩が宙を浮かび霊華が何度も跳ねながらルーミアを殴り続ける

霊華がルーミアを地面に叩きつける

だが霊華もその途中にルーミアの反撃を浮けて血塗れだった

霊華が札を持つと周りに陰陽玉が現れ霊華の周りを高速で周り始める

それが霊華を包み込む

陰陽玉が消えると霊華は黒く染まっていた

夢想転生

俺が霊華にやられた技だ

霊華が飛びルーミアは闇の盾を作る

しかしあつさり靈華に破られルーミアの腹を貫いた

はずだった

靈華の攻撃はルーミアの肩を掠めただけで当たっては居なかつた

俺は藍から抜け出そうと暴れる

スキマから血が飛んできて俺の頬に当たる

暴れるのを止めてスキマを見る

朝日が差し込む

煙が晴れて見えてきたのはルーミアの闇が靈華を貫いている所だった

俺が力無く地面にへたれると藍も拘束を解く

俺は立ち上がる

小さいルーミアが札になって崩れ去る

零「……………紫」

紫「……………なにかしら？」

紫がこちらを見ずに涙を流しながら聞いてくる

零「俺を……………殺してくれ」

自然と涙が頬を伝う

紫「……………あなたも泣いているの？ 幻想郷。本当、不器用な子達ね」

零「アイツは、靈華の夢想転生で纏わりつけた闇を吸収した。一生分の闇だ。殺すこと
たあもおねえ・・・」

靈華のお面が割れて落ちる

靈華も泣いていた

そしてルーミアの鳴き声だけが響いた

靈華が自分のリボンをルーミアの髪に結ぶ

目の前が真っ白になる

アバヨ。旧友（ダチ公）

敵は百鬼夜行

零「ちよ、ちよつと待てよ！何だそりや・・・俺が先代博麗の巫女とルーミアのダチだった？変な冗談は・・・」

よせと言いかけて俺は思い出した

それは萃香と初めて出会った日

萃香は俺を先代博麗の巫女と人喰い妖怪と一緒に死を選んだ裏切り者だと言った

そして鈴仙は俺が先代博麗の巫女と共に失踪したと言った

そしてまたその前に見た夢

今幽香が言っていた状況とそっくりだ

零「・・・マジ何だな・・・」

幽香「ええ」

零「・・・・・・・・・・ 蛮奇、小傘と一緒に外に出てろ」

蛮奇「・・・・・・・・・・ 分かった」

そう言うとき蛮奇は小傘を連れて外に出ていく

それを見届けた俺は溜め息を付いて紫を見る

零「で、幽香の話によると俺のせいみたいだから強く言えねえけど紫、お前は俺に関する何処までの記憶を消したんだ？」

紫「……………全部よ」

零「……………は？」

紫「外中問わず貴方が関わった資料は全て消して関わった人の記憶も消したわ」

零「じゃあ何で幽香や萃香鈴仙たちは覚えてたんだ？」

紫「彼女たちが私の術に抵抗したから、かしらね。ま

あ、永遠亭は結界で防いでいたみたいだけど……………」

紫は扇子で口元を隠しながら言う

俺「……………じゃあ博麗神社の近くにあるあの墓は……………」

紫「先代博麗の巫女の墓よ」

そう言うとき紫がスキマからリボンを取り出した

零「何だそれ？」

紫「先代博麗の巫女が最期に貴方に渡したかった物よ」

そのリボンは霊夢が付けているのと同じリボンだった

俺はそれを受け取ると腕に巻く

その時蛮奇が勢いよく入ってくる

蛮奇「大変！」

蛮奇の言葉に俺達は外に走る

辺りが暗い

蛮奇「そつちじゃなくてあつち！」

蛮奇が俺の首を無理やり動かす

あ、今グキって言った・・・

そこにあつたのは大きな立体映像だった

写っているのは角が生えた少女だった

??? 『ごきげんよう。下らない幻想郷の強者の諸君！私は鬼人正邪、天邪鬼です。本日

このような催しをさせて頂いたのは幻想郷の強者どもに死んで頂きたく・・・』

辺りがざわめく

そして次に写ったのは森に広がるアンコみたいな何かだ

正邪『今皆様をご覧になっているのは先代博麗の巫女の封印を解かれた宵闇の妖怪ルーミアの闇でございます。これに触れた物は解け、死に至る・・・。弱者の皆様が生き残るには今から我々百鬼夜行の提示するゲームに をしてもらいます。なくに簡単な事。闇が幻想郷を多く尽くす前にある者達を捕まえるか殺すだけ』

画面に写ったのはよく知る顔ばかりだった

☆1：霧雨魔理沙、魂魄妖夢、アリス・マーガトロイド、紅美鈴、古明地こいし、六夜咲夜、鈴仙・優曇華院・イナバ、パチュリー・ノーレッジ、永江衣久、小野塚小町、レミリア・スカーレット

☆2：フランドール・スカーレット、比那名居天子、風見幽香、射命丸文、古明地さと、八雲藍、西行寺幽々子、茨木華仙

☆3：靈鳥路空、博麗靈夢、星熊勇儀、伊吹萃香、八雲紫、藤原妹紅、四季映姫、蓬萊山輝夜、八意永琳

零「俺は・・・居ねえみたいだな」

正邪『そして、我々百鬼夜行が求める男、風切零！』

☆5：風切零とデカでかとなる

正邪『☆1つ事に一万円を差し上げます。それでは、弱者の皆様を健闘を祈ります』
立体映像が切れると辺りには既に何人か集まっていた

「す、すまねえ兄ちゃん・・・家族を護るためにはこうするしか・・・」

一人がそう言って来る

零「良い良い。じゃ、紫」

紫「なにかしら？」

零「結界の準備を頼む。それと誰も来させんなよ。もしもんときは俺事アイツを殺し

てくれ」

俺がそう言うのと紫がスキマに消えていく

零「さて、百鬼夜行だか何だか知らねえが覚悟しろ！テメエは俺がぶつとばす！」

アンコ

俺が飛び立ちます来たのはアンコみたいな闇の断片だった

俺はそれを木刀で斬りながら進む

零「で、何でついてきてんだ？」

俺は後ろの幽香に声をかける

幽香「あら、前回出番がほとんど無かったから忘れられてると思ってたわ」

零「んなの腐れ作者に言つてこい。忘れようにもお前なんて忘れられねえだろ」

幽香「一度忘れたくせによく言うわね。……貴方、死ぬ気でしょ？」

俺は黙る

全く持つてその通りだからだ

零「……俺には霊夢とルーミアを護る義務がある。それが生き残った大人の俺のすべき事だろが」

幽香「下らないわね」

零「何!？」

俺は飛ぶのを止める

幽香「その義務を負っているのは昔の貴方、今の貴方にあるのは義務じゃなくて権利
よ」

「居たぞ！お尋ね者だ！」

「我々百鬼夜行の力を見ろ！」

闇の方から二人の骸骨が近付いてくる

幽香「それを踏まえて答えなさい。逃げるか戦うか」

俺は少し笑う

「死ねエ！」

俺と幽香は木刀と傘を横に突く

それらは骸骨の頭を砕く

零「だとしてもだ」

幽香「・・・そう」

幽香が溜め息を付くと後ろを向く

幽香「聞いてたでしょ？これが零の覚悟。なら今まで助けて貰った私達はどうするべ

きかしら？」

零「？」

俺が何処に向かって言ってるんだ？頭狂ったか？と思つた瞬間後ろから大きな闇が

突っ込んできた

零「ヤベツ!？」

間に合わないと思つたそこ時

???「鬼符『ミツシングパワー』!」

???「疾風『風神少女』!」

いきなりデカイ萃香と何時もの服と違う文が現れて闇を消す

零「お前ら・・・何で・・・!？」

文「・・・今まで私達は助けて貰つてばかりでした・・・」

萃香「なら、次は私達が助ける番だ。知つてるだろ? 鬼は仁義を通す妖怪さ」

気付けば後ろにはお尋ね者になつた殆んど奴が居た

零「つたく・・・誰も来させんたていう言つただけだな・・・」

俺は一番前に出て少し出てきた涙を拭う

レミリア「あら、こんな面白そうな事を独占するつもり?」

魔理沙「そうだぜ! この前の異変じゃあお前に騙されて何も出来なかつたからな! せ

いぜい暴れさせて貰うぜ!

幽香「これでも・・・私達を突き放すかしら?」

幽香の野郎、囮りやがったな・・・

零「まあ、悪くねえ」

俺はもう一度皆を見る

零「頼む！ルーミアを助けるために俺に力を貸してくれ！」

頭を下げる

『………勿論！』

アリス「私達が闇と周りの奴を相手するわ」

妖夢「その間に零さんはルーミアちゃんを助けてきて下さい！」

零「………分かった！」

俺はまたルーミアに向かって飛ぶ

小町「………全く、釜を振るなんて仕事だけにしたいもんだね」

妖夢「仕事してるとこなんて見たこと無いですよ私……」

妹紅「来るぞ！」

妹紅が叫ぶとしたに居た百鬼夜行の妖怪達が飛んでくる

鈴仙「月の兔の力、見せてあげる！」

咲夜「中国、寝てると刺すわよ？」

美鈴「さすがに寝ませんよ!？」

パチュリー「早く終わらせたいわ……」

全員がスペルカードを取り出す

『スペルカード!』

後ろで激しい爆発音が響く

前でも闇が迫ってくるがたどり着く前に爆発する

しかし抜けて来た闇がこちらに迫ってくる

霊夢「霊符『夢想封印』!」

零「霊夢!」

霊夢「異変解決は巫女の仕事よ。私が行くわ」

零「馬鹿やろう!いくらお前でもあのルーミアにや勝てねえ!」

霊夢「何分かりきった事言ってるのよ」

零「は?」

霊夢「アイツを倒すのはあんたよ。私は・・・主犯を倒す!」

俺はまた前を飛ぶ

そろそろ到着する頃だ

零「じゃあ、健闘を祈るぜ」

霊夢「・・・そっちもね」

闇に入り辺りを見渡す

真つ暗だ

ルーミアは真ん中だろうか？

後ろから電車の音も聞こえる

紫も派手にやってるなあ・・・

しかもさつきから痛い血が腕や足、頬から出ているのが分かる

障壁をようやく抜けて見たのは夜の森

しかし全てが死んでいる

???"「あら・・・誰かと思つたら貴方だったのね」

声が聞こえて振り向く

そこに居たのはまあボツキユツボンなルーミアだった

ルーミア「霊夢は・・・元気がしら？」

零「・・・ああ、お前が危惧した通りに金と飯に意地汚ねえ奴になつたよ」

ルーミアは少し笑った

ルーミア「・・・そう。・・・それはそうと・・・」

俺はルーミアの言動を疑問に思つているといきなり腹に激痛を感じた

零（何で・・・浮いてんだ？）

見ると俺は闇の腕に貫かれている

ルーミア「貴方、美味しそうね」

零「て、テメエ・・・」

俺は腕を抜こうとするが抜けない

ルーミア「アハハハハハハハハハハ!!!」

ルーミアがいきなり笑い出す

ルーミア「一度貴方を食べてみたいと思つてたのよ!」

ルーミアの笑いが空虚に響く

笑いが止まりルーミアが俺を見る

ルーミア「・・・何時までその猿芝居を続ける気?」

俺はニヤリと笑うと携えていた木刀で腕を斬る

すると闇が消えて腹から大量の血が吹き出る

構わず俺はルーミアに斬りかかるが闇で防がれる

今度は後ろに周り斬ろうとするがルーミアが剣で防ぐ

ルーミア「あらら・・・そう簡単にはいかないわね・・・」

俺は一旦後ろに下がる

零「外であんだけ襲つたくせに良く言うぜ・・・」

いきなりルーミアが空を見ながらぐらぐら動きだし地面を見ると周りから闇が湧き

出した

零「!？」

ルーミア「私は何が何でもこの闇を解く気は無いわ・・・」
まだ何も言つて無いんだけど・・・

ルーミア「貴方の考える事くらい分かるわ」

マジかよ・・・

そうすると解く方法は・・・

ルーミア「もう一つしか無いわね」

俺には・・・

ルーミア「貴方には・・・」

零ルーミア（「アイツ（私を）殺せる（かしらね）のか？」）

常闇の妖怪

大量の闇の手と岩が襲ってくる

俺はそれを防ぎながら下がる

ルーミア「アハハハ！ やっぱり口だけねッ！ 丸で殺る気がないわねッ！」

零「何も言つてねえけど!？」

ルーミア「貴方は優しすぎる！ だから殺る気がない！・・・私はあるわよッ！」

岩の間からまた手が向かってくる

それを全部木刀で防ぐが押される

ルーミア「アハッ！」

俺は一旦したに下りて避けてルーミアに向かうが腕にまた腹を貫かれる

しかしそれを気にせず走る

零「幻想符『幻想斬（イマジナリースラッシュ）』ッ！」

俺はルーミアの心臓を突こうとする

零「~~~~~！」

しかしルーミアの笑顔を思い浮かべると剣先が揺れルーミアの肩に刺さった

ルーミア「……………やっぱり口だけなのね……………」

ルーミアが木刀を持つとそれを抜き俺のあたまを鷲掴みにして持ち上げる

零「ウルセエ……………俺は……………俺のやりたいようにやる……………ツ！幻想郷を滅ぼさせねえし……………お前を殺すつもりも、ネエ！テメエ……………何でこんなことしやる？」

ルーミア「……………」

ルーミアは俺を投げつける

背中に何本も木が当たる

ルーミア「何で……………ですって？……………貴方にも見えているはずよ？その闇からあふれでる怒り憎しみ悲しみが……………」

俺は口に溜まった血を吐きながら立ち上がる

俺は一步一步歩き出す

確かに闇から感じる

胸糞の悪い感じ

頭に響く謝罪

だが……………

零「んなもん知るか！これがテメエの質の悪い腹いせつつうのも理解した。これがテメエのじゃなく、霊華のつてのも。でもなあ……………少なくとも俺は怨んでねえし感謝す

らしてゐる！萃香も！紫も！それでテメエも！「貴方に何が分かるの!？」・・・」

ルーミアが叫ぶ

ルーミア「私は彼女が最後まで誰にも打ち明けずに抑えていたこの憎しみと悲しみを晴らす」

闇がルーミアを包む

ルーミア「だったらこの矛先を誰に向ければ良い？答えは簡単・・・それは人間が妖怪を退治し妖怪が人間を襲うことで均衡を保ってきたこの幻想郷（せかい）そのもの」

俺はルーミアの言葉を聞きニヤリとまた笑い目の包帯を取る

零「いいや・・・俺に向けるオ！」

次の瞬間地面が揺れる

零「恨みも怒りも悲しみも・・・全部俺が受け止めてやる！」

ルーミア「やとと・・・殺る気になったのね」

ルーミアの背中からは闇の手の骨が生えていて頭には輪っかが浮いている

闇の手が地面に当たり土埃が舞う

土埃が晴れると当たりが岩で囲まれていた

零「殺る気も何も俺は元から殺る気何ぞねえよ。こつからが本番だ。さあ、始めようぜ。この世で最も無駄なゲーム、でも美しい段幕ごっこをよ！」

俺はカードを取り出す

零「憑依『小さき百鬼夜行』！」

俺は萃香の力を憑依させる

ルーミア「スペルカード・・・？」

零「ああ。霊夢と紫が作ったどちらも死なない決闘方。まあ、言うなればお遊びだ」

ルーミア「・・・何を言っているの？私がそんなお遊びに付き合うと・・・」うるつ
せえ！」・・・」

俺はルーミアの言葉を止める

零「これが今の戦いかたなの！正直まだ馴れてねえけど死にたくねえの！分かったか
！」

零「鬼符『ミツシングパワー』！」

俺は大きくなりそこら辺の岩を投げる

それをルーミアは避けるがすかさず俺は殴りかかる

ルーミアは剣を降り剣が拳とぶつかる

拳から血が吹き出す俺は構わず殴り飛ばす

憑依を解き次のカードを取り出す

零「憑依『半人半霊の庭師』！」

妖夢を憑依させて二本の刀を持つ

零「断命剣『未来永劫斬』！」

俺はルーミアに斬りかかるがルーミアがそれを防ぐ

そしてすれ違いざまルーミアは俺の脇腹を斬った

またルーミアがこちらに向かってくる

俺はまた憑依を解き次は三月精を憑依させる

零「結界『仲良し三月精・然』！」

俺は気配、音、光の屈折で見えなくしたあと上に飛び木刀を振り上げる

ルーミア「……こんな攻撃じゃ何度やつても……私を傷つけることすらできな

いわよ……。私をバカにしているの？いえ、今に始まった事じゃない。貴方は何時も

私をバカにしていた……」

零「バカ言え。俺は何時だって真面目に不真面目だぜ？でもこれは殺し合いじゃな

い。自分の思いをぶつける決闘……相手の心を掴む闘いで相手倒しちゃうじゃないやろ

うがい！これが俺の闘いかた、そして幻想郷の闘い方

「スペルカードルール」！誰も傷つかねえ闘いさね」

ルーミアから歯軋りが聞こえる

ルーミア「なによ……それ……。ふざけるな!!!」

一層殺気が濃くなる

気を抜いたら気を失いそうだ

結界が割れる

零「ゲエ・・・!?」

俺は剣で斬りかかる

ルーミア「笑えないッ！笑えないッ！何なのよッ！このふざけた戦いはッ！」

木刀がルーミアに当たる

ルーミア「痛くもツ痒くもないッ！なのに・・・何でなのよッ！」

零「!?」

俺は動きを止める

ルーミアが泣いていた

ルーミア「どうしてこんなに・・・涙が止まらないのよッ・・・」

俺は溜め息を付く

零「ふざけるな、ねえ・・・。ふざけんよ？」

俺は刀を納める

零「何故お前は俺の心臓を刺さなかった？俺の頭を潰さなかった？お前は俺を殺せたんだ。でもしなかった・・・。一体何故？答えは簡単、結局お前も俺と同じなのさ!!？」

幻想郷を滅ぼす？違うな。お前は滅ぼさないといけないと思った。霊華の悲劇を繰り返さない為に」

ルーミア「次は・・・次は霊夢かもしれないのよ！」

零「なら・・・見てみるよ。外を。皆戦つてるこの幻想郷の為に・・・人も、妖怪も、霊夢も！もうこの幻想郷（せかい）は代わり始めてる！」

ルーミア「じゃあ・・・私のした事は・・・」

零「完全な無駄骨だな！」

ルーミア「ツ!？」

俺はルーミアに近付く

零「俺も人ん事は言えないけどお前相当バカだな。バカもバカ、大馬鹿者さ」

ルーミア「私が大馬鹿者オ!？」

零「んなことしても霊華は喜ばねえします俺が泣く」

ルーミア「!!だったら私はどうすればよかったのよツ!？」

零「んなの俺に聞くな。自分で考えろ」

ルーミアの前まで来て俺はルーミアに抱きつく

ルーミア「!」

零「でもな、お前には俺達がいる。俺を信じる！お前の信じる俺を信じる！」

次の瞬間闇の障壁が弾けとんだ

零「お前ももう・・・一人じゃない。お節介で勝手にお前の答えと一緒に探してくれる馬鹿どもが居る」

俺は後ろを振り向く

そこに居たのは先ほど見送ってくれた奴らだ

零「そんな馬鹿どもだから、俺は好きになつたし護りたいと思つたんだ。正直さ、会いは最悪だったよ。殺されかけもした。でも今はこうして一緒に戦つてらあ。今こうして居られるのも全部スペルカードのおかげだ。お前にもあるはずだぜ。このカードが・・・」

ルーミアから離れるとルーミアはまた泣いていた

そして闇がルーミアに集まっていく

ルーミア「・・・どうやら幻想郷は少しずつだけ変わっているみたいね・・・」

闇が集まりスペルカードになる

俺も憑依を解いてスペルカードを取り出す

ルーミア「今の貴方をみて・・・少し安心した

わ・・・。これなら霊夢も大丈夫そうね。だけど・・・私にはまだ・・・この異変を終わらせる訳には行かないわ。私のスペルカードは一枚だけ・・・貴方もどうやら残

「一枚……。これで決着を付けましょう……」

零「上等だ。俺の思いを全部ぶつけてやる！」

しばしの間静かになる

ルーミア「……。これが私の全力……。受けられるものなら受けてみなさい」

次の瞬間闇の壁と段幕が現れる

俺はそれを段幕で斬りながら進む闇の槍が向かってくるが俺は木刀で起動を反らす

俺は槍の上を走りルーミアに近付く

ルーミア「これで終わりよ」

辺りを見ると闇が俺を囲んでいる

ルーミア「捕まえた。スペル」

闇が膨らみ大きくなる

ルーミア「深淵『空亡』。……。霊夢のルール通り、命は取らないわ。この異変が

終わるまでそこで大人しくしてて頂戴……」

零「……。いや」

ルーミア「！」

俺は笑ってルーミアを見る

零「俺の勝ちだ！」

俺は闇を横一文字に切り裂き脱出する

また段幕が来るが俺は避ける

零「確かに未来もお前の危惧する通りなのかもしれないねえ！未来が見えるやつがそう言ったってよ、別に未来を変える権利は皆平等にあるんだぜ！」

段幕に当たりそうになるが俺はそれを叩ききる

零「だからよ！もう少し見ててくれ！未来の幻想郷をッ！」

俺はカードを掲げる

零「これが今の所の俺のラストスペルツ!!」

俺は力を溜める

零「四天王奥義『三步爆発』！」

一步目

俺は段幕を足場にしていた加速する

二歩目

木刀に力を溜めて段幕に飛び乗る

三步目そこから上に飛びルーミアを地面に叩き付けようとする

しかし闇に邪魔される

更に俺は力を居れる押され押し返す

零「コイツでしめえだアアアアアアアア!!!」

零ルーミア「ウオオオオオオオオオオ!!!」

次の瞬間闇の壁に亀裂が走り割れる

!!!

そして俺は闇を破ってルーミアを叩き落とす

力を失い俺も落ちた

地面は抉れて丸で爆発跡だ

ルーミア「……あーあ……どうやら私の……負けみたいね」

ルーミアのカードが消えて俺のカードが残っている

ルーミア「でも……安心したわ……。私は霊夢が霊華と同じ悲劇を繰り返さない

為に幻想郷にその事を伝えるために異変を起こしたけど、だけど……どうやら必要な

かったみたいね」

零「……たりめえだ。おらあ天邪鬼だぜ？」

ルーミア「貴方と霊夢は……私や霊華と違った……。貴方たちは本当の意味で強

さと言うものを理解していたわ。貴方と戦って……。それがよく分かったわ」

零「……何だお前？まるで……。最後みたいに……」

俺は横に寝転がるルーミアを見る

ルーミア「え？」

零「確かに俺は今からお前を封印しなきゃなんねえが別に死ぬ訳じゃねえだろ？」

ルーミア「何で……」

零「これいじょう……旧友（ダチ）に死んで欲しくねえんだよ……。俺達は血はバラバラだけど確かにあの時、本物よりも強い絆で繋がった家族だった……と、思う……。霊華の幸せを奪った分お前は幸せにならなきゃなんねえ。簡単には死なせねえよ。ねえなら作れ」

いつの間にか俺は泣いていた

零「約束だ！ テメエがガキになろうがボツキュツボンだろうがお前の幸せを俺が見つけ出してやる！ 生きてて良かったって思うくらいのでっかい奴だ！ だから……だからよお……」

ルーミア「こんな私を……まだそう読んでくれるの？」

ルーミアも泣いている

零「……たりめえだよお」

この日俺は
・
・
・
・
・
・

旧友（ダチ）との再開を果たし
・
・
・
・
・
・

そして別れた

P T Aに訴えられんぞ!?

ルーミアに俺の腕のリボンを付けて封印する

それを見た周りの百鬼夜行が逃げていく

俺は再びルーミアを見る

既に小さくなっていた

これで命を狙われずに済むし幻想郷が滅ぶ心配もない

零「あ、安心したら何か眠く・・・」

俺はそのまま眠ってしまった

さて、そんな事があつたのが次の日

零「まさか皆仲良く入院とは・・・」

この部屋には俺、ルーミアが寝ていて紫が見舞に来ている

零「つか、何で紫までいんだよ？」

紫「あら、誰も来させるなって言つて霊夢達を止めさせていたのは貴方よ？」

零「の、わりにはお前もドンパチしてたじゃねえ

か・・・」

紫は少し笑い天井を見る

紫「本当に・・・これでよかったのよ・・・」

零「・・・そう言えばよ鬼神正邪って奴は捕まったのか？」

俺は空気を変えようと話題を変える

紫「・・・霊夢の話によると逃がしたそうよ」

零「・・・そうか・・・」

余計空気が重くなる

ルーミア「ZZZZ・・・」

零「コイツ・・・こんな時にグースカ寝やがって・・・」

俺はルーミアの頬をつつく

紫「襲うの？」

零「んな訳あるか！PTAに訴えられんぞ!？」

紫「PTAの前に色々別の所から訴えられるわよ・・・」

永琳「その前に他の患者から苦情が来るんだけど？」

部屋に入ってきた永琳がカルテを見ながらそう言う

永琳「零は頭蓋骨にヒビが入ってるし肋も十数本折れてる、でそっちは基本的に擦り

傷が多いわね」

零「ルーミアはどうだ？」

永琳「零が付けた刺し傷と打撲傷以外は健康体よ」

俺は一安心しながらもルーミアには悪いことをしたと思う

紫「じゃあ私はこれで」

零「おう」

そのまま紫はスキマに消えていった

俺は側に置いてあつた新聞を見る

かなり古いが無いよりはましだ

内容はアメリカが初の月面着陸を

零「……………つて、いくらなんでも古すぎだろ！何年前の話だよ！」

永琳「……………」

永琳がこちらをじつと睨む

零「?どうかしたのか？」

永琳「……………!何でもないわ……………」

俺は寝転がり竹林を見る

こんな平和な一室の外では妹紅と輝夜が殺しあっている

零「にしても月かゝ……」

永琳「行つてみたいの？」

零「いや、なんつか昔に行つた事があるような気がするんだよなく……」

永琳「……気のせいじゃないかしら？」

零「？」

何故だろう

さつきから永琳のようすが可笑しい

零「はあ、永琳……いや、思兼」

永琳「!? 貴方……どうしてその名前を!？」

零「外の歴史書でな。で、月が心配か？」

永琳「……ええ。あそこには私の教え子も居るわ。月にいる狂つた月人に情

は無いけれど、教え子は違う！」

そろそろ羊の刻にさしかかる

俺はうつすらとみえる月を見た

零「変わんねえさ。月の狂気も……俺達の狂気も……」

俺は永琳に聞こえないように呟くのだった

地獄より地獄な館

さて、皆

いきなりだが俺は命の危機にひんしている

それは・・・

幽香「・・・・・・・・・・」

幽香が目の前で顔を赤くして座っている

蛮奇「あ、あの・・・粗茶です・・・」

蛮奇が粗茶を置くが反応がない

蛮奇（あんだ、あいつになにやったの!?)

零（何もしてねえよ!つい最近まで永遠亭で寝てたんだぞ!?)

蛮奇（でも顔真つ赤よ!?!あれ怒ってるわよね?)

零「あ、あのお・・・な、何か用で来たんだ?」

幽香「・・・・・・・・・・!・・・・来たのよ・・・」

零蛮奇「?」

幽香「だから!貴方達を家に招待しに来たの!」

ここは太陽の花畑から更に奥にある
その奥には鈴蘭畑が見える

無名の丘と言うらしい

零「で、来たは良いもの……」

俺は目の前に置かれた紅茶を見てから幽香を見る

家ではうってかわつての凛々しい姿

零「お前、家のでのあれ芝居だつただろ……？」

幽香「ふふ、上手い物でしょ？」

幽香は紅茶を飲みながら笑う

零「で、本当の要件は何なんだよ？」

俺は紅茶を少し飲む

熱い

夏何だから冷たい紅茶を用意してほしいものだ

幽香「ちなみに、私の紅茶は冷たい物よ」

このやろう……

幽香「……貴方をこの夢幻館に呼んだのは只単に貴方とお茶を飲みたかつただけ

「よ」

俺はティーポットの隣にあるクツキーを一枚食べてまた幽香を見る

幽香「私と貴方では住む場所が違いすぎる。私が入里に行くだけで入里の人間はおびえるでしょ？これじゃあゆっくりお茶出来ないじゃない」

次第に眠くなる

幽香「貴方との時間も台無しになる。だから・・・」

俺は眠ってしまっていた

幽香「今はゆっくり眠りなさい」

一人の少年が目を覚ます

見た目は大体小学一年生だろうか？

幽香「あら、起きたかしら？」

辺りを見渡さしていた用少年が幽香に振り向く

???「おねえちゃんだれ？」

幽香「私は幽香、貴方の家族よ。零」

零「れい？」

幽香「貴方の名前よ」

ところかわって永遠亭

???「うくん・・・」

永琳「どうしたのかしら？」

受付でメディスン・メランコリーと永琳が放していた

永琳の後ろでは鈴仙が薬を整えたりしている

メディスン「実はね、今日の幽香何か可笑しいの！」

メディスンは作った毒を渡す

それを受け取り永琳は鈴仙に渡す

すると鈴仙がまた受け取り棚に置く

永琳「可笑しいって具体的には？」

メディスン「えつとね！私に毒を作ってって頼みに来たの！」

永琳「それは・・・どんな毒なの？」

メディスン「人間が幼くなる薬・・・」

それを聞いた瞬間永琳と鈴仙に電撃、走る！

文「あややや！これは特ダネです！ついでに零さんも見に行きましょう！」

こうして何故かシヨタ化した零争奪戦が始まった

ショタ零ちゃん争奪戦

夕刊の文々。新聞にショタ零が幽香と散歩している写真が載せられた

ショタ零「おねえちゃん、これなに？」

幽香「これは新聞よ」

ショタ零「しんぶん？」

幽香「そう。最近あったことを教えてくれる物よ」

ショタ零「ふくん……。ねえねえ！あしたはなにするの？」

ショタ零が瞳を輝かせて幽香に聞く

幽香「そうね……。明日は家で遊びましょう。多分外が騒がしくなるだろうし……」

幽香が部屋をでる

ショタ零が一人椅子に座っていると窓が叩かれる音がした

ショタ零がみるとそこには文がいた

ショタ零が窓を開ける

ショタ零「おねえちゃんだれ？」

文「私は清く正しい烏天狗の射命丸文です！」

シヨタ零「あや？」

文「はい！零さん・・・零くん？零君、私のお家に行きませんか？」

シヨタ零「あやのおうち？」

文「はい。楽しいですよ？」

シヨタ零「じゃあ行く！」

文はシヨタ零を抱いて飛んで行った

しばらくして中に幽香が入ってくる

幽香「お待ちせ。お茶をいれてきたわ、よ？」

次の瞬間カップの割れる音が響いた

場所が変わって妖怪の山

そこでは何時も通りに椀が仕事の休憩にとりと将棋を差していた

にとり「ムムム・・・これはなかなか・・・」

椀「待ったは無しですからね」

にとり「分かってるって・・・」

にとりがしばらく考えていると椀の狗耳がピクツと動いた

にとり「？どうしたんだい？」

椀「・・・問題が発生したみたいです。人間・・・それも子供・・・」

にとり「じゃあ行ってきなよ。私はもう少し次の手を考えとくからさ」

文「さ、ここを登ったら私のお家ですよ」

ショタ零「ブー、つくかくれくたく」
!!!!

文「しようがないですねえ」

そう言うとき文はショタ零を背負う

文「ほら、これで疲れないでしょ？」

ショタ零「ZZZ・・・」

文「あやや、寝ちゃいましたか・・・まあ、子供ですから仕方無いですかね・・・」

椀「仕方無いじゃないですよ・・・」

そこに椀が降りてくる

椀「人間の子供を山に入れるなんて何考えてるんですか・・・？その子もしかし

て・・・」

文「はい。幽香さんに毒を盛られてちっちゃくなっちゃったみたいですね。だから戻るまでの保護ですよ」

椀が零の寝顔を見てから文を見る

椀「もし、戻らなかつたらどうするんですか？」

文「その時は私が責任を取って立派な烏天狗に育て上げます」

椀の尻尾がピクツと動く

椀「文様、その子は私が預かります。私が立派な哨戒天狗にしてみせます」

文「あやや、いくら椀の頼みでもそれは聞けませんね。本気でこの子を育てたいなら私を倒してみせなさい！」

文はそう言おうとシヨタ零を木陰に寝かせる

二人が飛び立ち段幕ごっこが始まった

ヤンデレ?・ツンデレ?・やっぱノーマルが一番っしょ!

にとり「おゝい」

文と椀が段幕ごっこしている下ににとりが現れる

にとり「ん?」

にとりが寝ているシヨタ零とそれを眺めている雛がいた

雛「あら、にとり」

にとり「やあ、雛。何してるんだい?」

雛「何ってナニよ?」

にとり「ひゅい／＼／＼!?」

雛「この子、零の幼児化だけあってすごく濃いので／＼(厄が)」

にとり「ひ、雛?女の子がしちゃいけない顔してるよ・・・?」

シヨタ零「・・・うゝん・・・」

そうこうしているとシヨタ零が起きた

そしてここは穰子の畑

シヨタ零「お姉ちやアアアん!!!喧嘩は止めてえええ!!!」

稷子「何してるの!」

そこに稷子が来る

そしてシヨタ零を抱き上げる

稷子「よしよし。もう大丈夫だからね」

にとり「た、助かったよ・・・」

雖「・・・と言うより貴女、その子零だけど大丈夫なの?」

稷子がシヨタ零を下ろして頭を撫でる

稷子「・・・関係無いわよ。私はあんな奴嫌い。バカだし意地悪だし・・・でもね、そんなのこの子には関係ない。私が嫌いなのはこんな小さな子じゃなくてあの憎らしい笑顔を浮かべたあいつなの!・・・それに、こんな事言ってるけど案外あいつ嫌いになれないのよね。私」

二人が稷子を見る

にとり「・・・結局皆同じ何だね。盟友に何故か引かれてしまう。だからこそ皆が盟友と一緒に居たいと思う・・・もう盟友は私達にとって大切な物になってるんだ」
にとりの口から言葉が零れる

その時近くの茂みがガサガサ動く

鈴仙「あ！師匠！零さん居ました！」

そこから出てきたのは鈴仙だった

永琳「本当!?!よくやったわ優曇華！」

すぐ後ろから永琳も駆け寄ってくる

永琳は鞆から注射を取り出すとシヨタ零に打つ

永琳「これで大丈夫ね・・・。しばらくしたら戻るはずよ」

三人は只注射で気を失ったシヨタ零を見るだけだった

幽香と萃香

シヨタ零が零に戻った頃、幽香は零を探して迷いの竹林に来ていた

幽香「・・・・・・・・何時まで見ているつもりかしら？」

幽香が空に向かって話し掛ける

次第にアタリの霧が集まり形を成す

萃香「残念だけど、零の所には行かしてやれないよ？」

幽香「あら、何故かしら？ 答えによつたら私は貴方を殺してでも先に行くわよ？」

萃香は酒を一口呑み口を腕で拭う

萃香「それはこつちの台詞さ。何故、零を子供に？ 答えによつちや生きて返す訳には

いかないよ？」

お互いにさつきを放つ

近くに居たウサギ達が気絶していく

幽香「・・・・・・・・貴方、月面戦争、知らないわけないわよね？」

萃香「・・・・・・・・そりゃ、私も参加してたからね・・・」

幽香「そこで、貴方は何を見たの？」

萃香「……………狂気」

萃香は百年ほど前の事を思い出す

妖怪に排他的な感情が渦巻いていた月人

萃香「……………そこには零も参加してた……………」

幽香「なら、貴方なら分かるわよね？そんな所に零が行けば……………」

萃香「まず間違いない……………」

幽香「ええ……………」

萃香幽香「また周りに女が増える……………」

二人が月を見る

その頃零さんは……………」

零「んあ？」

起き上がる

何故か文と椀と雛とにとりと稔子と静葉が居る

そして何時も通り永遠亭

零「もう、第二の家って行っても過言じゃねえわこりや……………」

永琳「病院が家って言うのはすごく不謹慎って分かってる？」

永琳が歩いてくる

永琳「一日経たずに逆戻り……」

零「待て、今回俺は関係ない」

永琳「人を信じすぎるのも難点ね……」

零「で、記憶がねえんだが俺はこいつらに何かしちまったのか？」

俺は六人を見る

永琳「……いいえ。何も……。まあ一つ言うなら……」

俺は永琳を見る

少し顔を明らめて此方を見る

永琳「か、可愛かったわよ？」

零「ん？ちよい待て。俺結局どうなったの？つて行くな行くな。おい、おい……
オイイイイイイイイ！！！！」

そのまま永琳が出ていってしまった

次に入ってきたのは鈴仙

鈴仙「あ、あの……大丈夫ですか？」

零「お、おう……」

鈴仙が隣に座る

しかし何も喋らない

零「あ、あのー・・・」

鈴仙「はい？」

零「な、何故何も言わずに寄り添ってくるのでせう？」

鈴仙「良い妻は何も言わずに夫に寄り添うと言います」

零「？」

鈴仙「結婚してたのか？」

いつの間に・・・？

零「えつと・・・その・・・おめでどう？」

鈴仙「え？あ、ありがとう、ございます？」

きつとこうして俺で練習してるんだらう

だったら俺は黙って居ようかね・・・

そうして俺は部屋から少し見える三日月を見る

零「今日も月は綺麗だね・・・」

君が居た夏は遠い夢の中

昨日の事はさっぱりなのだがまあ、良しとしよう

昨日の事より今日の事！

そして今日は夏祭り！

綿菓子やりんご飴！甘いものがたくさん出る屋台！

が、

慧音「いや、零が居てくれて助かったよ。ちょうど人手が足りなかったんだ」

・・・何故か祭りの巡回をしている

隣では浴衣を来た小傘と蛮奇が喋りながら歩いてくる

零「・・・別に二人は祭り回ってくれてよかったんだぞ？」

小傘「ううん。最近零ちゃんと一緒に居なかつたから一緒に居る！」

零「確かにそうかもしれないねえけど小説に書かれてねえところじゃほぼ一緒だろ？平凡

過ぎて書かれてねえけど・・・」

蛮奇「はい、そこ。メタ発言しない！」

俺は周りを見る

人も妖怪も一様に混ざっている

慧音「この祭りは人間と妖怪も親交を深めるための物だから妖怪も多い」

俺が思ったことを察したのか慧音が話し出す

慧音「だが、そう簡単でもないんだ。人間と妖怪には差がある。力、寿命、能力……。だからこそ、そこには不和も起こる」

俺はもう一度辺りを見る

慧音「だから、この巡回は大切なんだ。……引き受けてくれるか？」

慧音の質問に俺は笑う

零「おう！お前の依頼、この万事屋零ちゃんが引き受けた！」

て、ことで先ずは人里の南区から

人里は東西南北と四つの区画に別れている

まあ、だからと言って貧富に差があるわけでもない

ここは主に型抜きや射的など娯楽の屋台が多い

小傘「零ちゃん、あれなに？」

小傘が指差す方向には型抜きの屋台があつた

零「あれは型抜きつつつて上手くできればお金が貰えるんだ」

俺は一銭握って型抜きに向かう

リグル「いらっしやい」

零「お、ここはリグルの屋体か」

リグル「うん。どれにする？」

零「一番簡単な奴」

俺は一番簡単な蛇を指す

リグル「じゃあ一銭ね」

俺は一銭を渡す

そして出てきたのは

リグル「はい、一番簡単な神龍」

直方体の神龍の絵が書かれた飴だった

零「……………」

俺は頭を机に叩きつける

零「何でダアアアアア！絵と全然違うじゃねえか！」

リグル「ちよつと補正がかかてるから？」

零「補正とかそんなレベルじゃねえ！一体どうやって型抜くんだよ!?!」

リグル「うーん……抜くと言うより余計な部分を破壊する感じで……………」

リグルが飴を蹴る

すると見事に神龍が完成していた

零「……」

俺は頭が真っ白になりとりあえず小傘達の所に戻った

次に来たのは北区

ここでは食べ物を買っていた

にしてもここは知り合いが多い

チルノと大ちゃんがかき氷、ミスチーとルーミアは八ツ目鰻だ

俺は蛮奇を見ると蛮奇は何かに目を光らせている

その方向を見るとそこにあるのは影狼がやっている綿菓子屋だった

零「……食べたいのか？」

蛮奇「え!？」

零「ほれ」

俺は蛮奇に一錢を握らせる

零「買ってこいよ」

蛮奇「いいの？」

零「せっかくの祭りなんだ。欲しいもんくらい買つてやるさ」

俺がそう言うとき、蛮奇が影狼の屋台に向かっていく

何か話し込んでいる

小傘も小傘でチルノ達と話している

零「んじや俺は東区に行くから小傘よろしく」

蛮奇「うん」

俺は蛮奇にこれからの予定を話して東区に向かう

東区は展示ブース

河童の発明や烏天狗（主に文）の新聞が掲示されている

にとり「やあ、盟友」

零「おお、にとり。お前は何展示してんだ？」

にとり「私かい？私は・・・ほら」

にとりが指差す方向にあったのは二人の玉と一つの棒

正確には玉棒玉の順・・・つまりは完全なアレである

男の股に付いてるアレである！

にとり「ネオアームストロングサイクロンジェットアームストロング砲さ」

零「アームストロング二回言ったぞ。つか、女の子がこんな卑猥なもん作って良いのかよ？」

にとり「卑猥とは失敬だな！これは河童が二分してしまった時に敵の河童勢力を打ち敗った決戦兵器さ！」

・・・こんなふざけたのに敗れた河童勢力はさぞ無念だろうな・・・
にとり「まあ、他もこんな感じだからゆっくり見ていきなよ」

そう言われて俺はしばらく展示物を見ていたが力士の銅像や相撲取りロボ、ロボ相撲など技術はすごいのにあれな作品を背に俺は最後の西区に向かった

西区、ここではライブが開かれ芸に覚えのあるものが皆芸を見せている

次はどうやら、ルナサ達とミスチーの共同ライブのようだ

椅子に座って四人の演奏を聞く

前の方ではルナサ、メルラン、リリカ、ミスチーのファンが現代オタク顔負けのオタ芸を披露している

妹紅「隣、良いか？」

隣に妹紅が座ってくる

その手には酒もあり猪口が二つある

一つを俺に渡して酒を入れてくる

妹紅「祭りはどう？」

零「楽しんでるぞ？ちよつとあれな屋台もあるけど・・・」

妹紅「アハハ、私も見たよ。注意喚起はしたけどね」

俺は酒を飲んでライブを見る

零「人も、妖怪も、妖精も、笑って過ごしてる。・・・紫が望んだ世界はこう言う世界なのかね・・・」

俺は先ほどまで見てきた光景を思い浮かべる

皆笑っていた

そうこうしている内にライブが終わる

その瞬間、真つ暗な夜空に綺麗な一輪の大輪が咲いた

にとり「フツ、ネオアームストロングサイクロンジェットアームストロング砲は何も人を殺す兵器じゃない！空に綺麗な花を咲かせることによって河童の心を一つにしたのさ！」

花火のしたに居たのはにとり達河童とネオアームストロングサイクロンジェットアームストロング砲だった

どうやら、大砲は大砲でも花火玉の大砲らしい

・ ・ ・ デザインはあれだが ・ ・ ・

妹紅「さ、祭りも大詰めだ。精一杯戦おう！」

零「え!？」

俺の返答を待たずに妹紅が飛んでいく

俺も後を追い祭りが終わるまで段幕ごっこら続いた

剣対拳

また紅魔館に訪れた

今回は蛮奇と小傘が着いてきている

レミリア「……さて、今回貴方達……正確には零、貴方を呼んだのは他にも無いわ」

レミリアが指を鳴らすと扉から美鈴が入ってくる

俺達三人は頭に？が浮かぶ

レミリア「貴方と正々堂々と勝負をしたいらしいわよ？」

美鈴「はい！お願いします！」

美鈴が頭を下げる

零「いや、お願いしますつつわれても……」

蛮奇「戦つてあげれば？」

零「ええ……。大体何で戦いたいんだよ？」

美鈴「お嬢様達以外に初めてだったんですよ、負けたの……。だからリベンジです！」

零「いや、あれこちよこちよじゃん？」

美鈴「それでも！私は負けました……。それに、聞けば咲夜さんに勝つたみたいじゃないですか！」

零「あー……。あれはラッキーだったな」

小傘「そうなの？」

俺は小傘の頭を撫でながら頷く

零「あれは咲夜が油断してくれてたからだし、俺があいつの能力を見極めたから。次はああは行かないさ」

美鈴「……………」

ついには美鈴が涙目になる

レミリア「ほら、美鈴がこんなにもお願いしてるんだから勝負の一つや二つやってあげなさいよ」

レミリアをみて次に美鈴を見た俺は溜め息をついて頭をかく

零「分かった分かった……。勝負してやつから……」

美鈴「！ありがとうございます！」

てことで門前

この勝負を見に来たのは蛮奇、小傘、レミリア、フラン、咲夜だ

レミリア「見ておきなさい二人とも。あの二人の戦いは力の流し方の勉強になるわ」

フラン咲夜「うん！（はい）」

俺と美鈴は互いににらみ会う

一度強い風が吹き俺と美鈴の足元が抉れた

蛮奇「速い！」

次の瞬間俺の木刀と美鈴の拳がぶつかる

そしてまたその周りの地面が抉れる

零（重すぎる……ッ！これが美鈴の本気か……ッ！）

美鈴（重い……ッ！これが零さんの本気ですか……ッ！それに……）

美鈴が俺の目を見る

美鈴（あまりにも……狂暴な目……ッ！）

零「……俺の目なんて見てどうした？」

美鈴「な、何でもありませんよ！」

俺達は一度距離を取る

一瞬の隙もない

次に木刀を美鈴に投げて走り出す

美鈴「ッ！」

美鈴が木刀を弾き木刀が小傘の近くの地面に刺さる

美鈴「何処に……ッ！」

美鈴が上を見る

零「もらった！」

俺は美鈴を馬乗りで押し倒し拳を首に向ける

美鈴「……私の……負けですね……」

俺は拳を退ける

咲夜「……一体……何が……？」

レミリア「?どうしたの咲夜」

咲夜「いえ、何故美鈴は零は見逃したのでしょうか?彼女も決して彼から目を反らし

ている訳では無かったのに……」

レミリア「あら、分かってなかったの?零はまず木刀を投げて美鈴の注目を反らしたの。その隙に上に跳んで美鈴から逃げた……。ま、そんなところかしらね」

俺が背を向けてレミリアの説明を聞く

零「うん。見事にその通りだな」

俺は頷きながら笑う

美鈴「あ、あの・・・そろそろ・・・」

俺が下を見るとまだ俺は美鈴に馬乗りしていた

零「あ、悪い・・・」

美鈴「い、いえ。それより、ありがとうございました」
俺と美鈴は握手を交わす

こうしてまた幻想郷の平和な一日か過ぎた

ようやく秋が来たッ！

皆、喜べ

つい最近祭りがあつたばかりだが次は収穫祭だ

穰子「もちろんあんたは強制参加よ！」

豊作を感謝して静葉と穰子に礼をする祭りらしい

零「分かった。分かったから……。たく、タイトルにまでしやしやり出やがつて……」

穰子「良いのよ。見た？今回の東方ロストワードのイベントストーリー！私大活躍
だったでしょ？」

零「いや、お前が主に出たのは最初と最後だけだろ……」

穰子「とにかく！今日は私とお姉ちゃんが主役なの！」

あまりに五月蠅かったので俺は耳をふさいだ

穰子「塞ぐな塞ぐな！」

零「で、そう口舌垂れるからには、俺に何か依頼でもあんのか？」

俺が聞くと今まで騒いでいた穰子がドツカリと椅子に座る

穰子「そうよ！この収穫祭、お姉ちゃんを目立たせて上げて欲しいの！」

零「・・・・・・・・・・・・・・・・」

いや、参ったねこりや・・・・・・・・

実は静葉にも同じ事いわれてんのよ

本当仲良いつつうか何つつうか・・・・姉妹なんだな

俺は欠伸をしながら腕を伸ばす

零「・・・・・・・・ま、何とかしてやる」

とは言った物の・・・・・・・・

零「どうしよこれ？」

依頼をブツキンググさせてしまった・・・・

零「しゃあね。こうなりや二人とも目立たせるか！」

こうして収穫祭が始まった

まず始まったのが穰子の紹介と収穫の一分の米等を納品している

・・・・・・・・既に穰子は目立ってると思うが・・・・

零「・・・・・・・・てか、静葉は何処だ？」

俺は辺りを見る

静葉は人集りの後ろらへんにいた

俺は頭をかきながら歩いて近づくと

零「なにやっつてんだ？」

静葉「!？」

静葉が驚いて逃げようとする

零「ちよいちよい、何で逃げようとするんだよ・・・？」

俺は静葉の腕を掴む

静葉「人里の皆は秋の神と言ったら穰子と言うわ。私はそのオマケ。別に皆に必要とされてないもの」

俺は静葉を肩に担ぎ上げる

静葉「ちよ、ちよつと！放して！」

俺から降りようと暴れている

その騒ぎに気付いたのか穰子に注目していた人達がこちらを振り向く

零「ちよつとごめんよ」

俺は人の間を抜けて穰子の元に向かう

零「今回の依頼はお前ら二人を目だたせる事だ。・・・それにお前が必要とされない？バカ言っつてんじゃねえ。その証拠にホラ」

俺が辺りに耳を澄ます

「静葉様だ!」

「静葉様が降りてこられたぞお!」

「ありがたやあありがたやあ・・・」

俺の肩に冷たい物が落ちる

静葉の涙だ

零「・・・・・・・・秋姉妹は二人で秋の神様だろ?」

俺は穰子の元に着くと静葉を下ろした

静葉「穰子・・・・・・・・」

稔子「お姉ちゃん・・・・・・・・」

二人が抱き合う

それを俺と周りの皆が囲む

『秋姉妹バンザーイ!』

そして二人を抱き上げて胴上げする

こうして静葉を含めた収穫祭は順調に進み今日も平和な一日が過ぎていった

東方風神録

秋の稔と姉の本気

さて、皆は覚えているだろうか？

第74話にて俺が早苗達を秋に幻想入りさせると独断できめたあの話を・・・

それがどうやら今日らしい

理由は・・・

霊夢「これは立派な営業妨害よ！ちよつとあんた一緒に来てあのド腐れピーマンの神社潰してきなさい！」

と、言うことだ

そして蛮奇と小傘は例のごとく草の根妖怪ネットワークの集まりと鍛冶屋の仕事だ

零「……………とりあえず一緒に行くけど、本当にお前の神社を潰そうとしたかは俺が見極める」

てことで山の序盤

零「……………あ、ちよつとここら辺に用があるんだけど・・・」

俺が飛びながら霊夢を見る

霊夢「……………はあ。分かったわよ」

霊夢の許可は降りた

俺は静葉と稔子を探す

霊夢「……………誰探してるのよ？」

零「静葉と稔子。霊夢、先に行ってくれてて良いぜ？」

霊夢「じゃ、そうさせてもらうわ」

霊夢が飛んでいく

零「さて……………稔子のパンツはドロワーズう！」

しばらく山に声が響く

そして……………

稔子「何バラしてんだコラア！」

稔子が俺を蹴飛ばしてくる

稔子「てかその前に何で見てんのよ！」

俺は起き上がる

零「いや、そりや毎回そんな感じに蹴ってきたらいやでも見えるって」

稔子「フン！今に見てなさい！お姉ちゃんなんて凄いんだから！何とティーb」

穰子が何かを言おうとした途端木が倒れる音がした

見るとそこに立っていたのは静葉で何故か足から煙が出ている

つまり静葉が木を蹴り倒したのだ

しかし恐れるのはそこではない

いや、木を蹴り倒したんだから恐れるのか？

とにかく今蹴られた木は凹凸がないのだ

零（オイイイイ!? 静葉の奴木を足で斬り倒したぞ！乱脚か!? 乱脚なのか!?)

しかもその顔に一点の曇り無し

丸で次言ったらお前がこうなると言っているように・・・

静葉「・・・喧嘩はしない、ね？」

零穰子「イエ、イエッサー！」

静葉「で、零は何しに来たの？」

零「あ？ ああ、紅葉狩りと芋買いに・・・」

静葉「まさかあの約束覚えてくれたの!? もうずっと前の事なのに・・・」

零「当たり前だろ？ 俺は約束を守る天邪鬼よ」

俺は財布を渡す

零「じゃ、先に頂上の神社に行ってくるから後でな」

河童と雛人形

さて、玄武の沢まで来た

にとり「やあ、盟友。今日は何のようだい

？」

水からにとりが出てくる

零「頂上にできた神社に行こうと思つてな」

にとり「盟友もかい？ さつき巫女が私をぼこぼこにして上に行つてしまつたよ」

零「そ、そりやまた・・・」

俺は崖を見る

登れそうなどこはありそうだ

え？ 飛ばば良いつて？ いや、紅葉狩り楽しみたいじゃん？

俺が登ろうとするとりボンが俺を縛り付けた

零「え？ 何これ？ 離せー！ 俺は無実だー！」

雛「ええ、分かつてるわ。でも上には行かせられない」

俺は身体を捻つて雛を見る

零「なんでえ？」

雛「今上でとても濃い厄があるわ。危ないの」

零「・・・・・・・・・・・・・・・・」

俺は上を見る

確かに何だか騒がしい

にとり「・・・・・・・・そう言えば椀が今日は天摩様の護衛とか言つてたね」

零「・・・・・・・・・・はあ」

俺は溜め息を付く

零「・・・・・・・・雛、例え俺が無事だったとしてもそれじゃあ椀が危ない目にあつちまう。

もう、十分何だ・・・・・・・・大切な奴がいなくなんのは・・・・・・・・」

雛「・・・・・・・・それで、貴方が死んだとしても？」

俺は笑う

零「死なねえよ。お前ら捨てて死ぬもんか。俺が死ぬ時はここが無くなつてお前らが

死ぬときさ」

俺はリボンをほどいて崖を登り出す

にとり「・・・・・・・・・・良いのかい？」

俺が登り終えるのを見届けるとにとりが声を出した

雛「……………良いのよ。何言ったってあの人は行くもの。なら、私の役目は笑顔で彼を見送ることじゃない？」

にとり「……………そうだね」

にとりがまた見る

その頃スキマでは

紫「……………藍、百鬼夜行について何か分かったかしら？」

紫がスキマから守矢神社を見ながら話す

藍「はい、一つ分かったことがあります。最近幻想郷を騒がせる影ですが……………」

藍が紫の隣まで来る

藍「百鬼夜行の仕業である、と断定しました」

紫「……………そう。で、その妖怪の名は？」

藍「おそらく影法師でほぼ間違いないかと……………」

紫「……………そう」

二人が守矢神社を見る

そこには大量に倒れる白狼天狗と諏訪子の影と対峙する

霊夢と神奈子と早苗が居た

またまたその頃全く関係ない月では……

「そろそろですね……」

「ええ、そろそろよ……」

「地球の連中は月の表側に我が物顔で旗を立てました。しかしそれは我々の手で投げ返した……」

「これが何を意味するのかあの方達なら分からない訳がないわ」

場所がまたまたまた変わって永遠亭

ウサギ達が騒いでいた

永琳「………始まってしまうのね」

??????

永琳

「二月の民の穢れ無き戦い、月面戦争・・・」

神遊び

時は少し廻り霊夢は神奈子と対峙していた

霊夢「神様かなんか知らないけどとつととぶつとばす！」

神奈子「……はあ。神社は巫女のために有るのではない。神社は神が宿る場所。そろそろ……神社の意味を真剣に考え直すべきよ！神祭『エクスパンデッド・オンバシラ』！」

札とレーザーが霊夢に向かって飛んでくる

それを避けながら針を飛ばしていく

神奈子「筒粥『神の粥』！」

今度は楕円形の段幕が円上に二つ出てくる

近くに来ると更に分裂して迫ってくる

霊夢「クツ！霊撃！」

霊夢はそれを霊撃で書き消す

神奈子「なかなかやるねえ……。なら、贄符『御射山御狩神事』！」

中弾とナイフが大量に飛んでくる

靈夢「ああもう！うつつとうしいわね！」

靈夢はそれを避けながら毒づく

神奈子「天流『お天流の奇跡』！」

小弾が何列も靈夢に向かい先端から米粒弾が向かってくる

靈夢「だーかーらー鬱陶しいっていつてんでしょ！」

靈夢が避けながら一気に迫ってくる

神奈子「マウンテン・オブ・フェイス！」

札の段幕が円上に幾つも広がっていく

しかし構わず靈夢が突っ込んでいく

早苗「神奈子様！大変です！」

早苗に連れられて靈夢と神奈子が守矢神社に来るとそこでは蛇に巻き付かれた諏訪子のような物が暴れていた

神奈子「ナツ！」

靈夢「何よ……。これ……」

早苗「諏訪子様……。いきなり苦しみだして……。それで……」

早苗が泣き出す

神奈子「そうかい。……もう大丈夫だ。絶対諏訪子を正気に戻してやる」

神奈子が霊夢を見る

神奈子「……無視が良いのは理解しているが……私の友人を救うのに手を貸してくれないかい？」

霊夢「……はあ。こんなの野放しにしてたら私が紫に言われちゃうじゃない？」
霊夢が大幣を握る

そしてこの俺零さんと言うと……

崖を登りきって見た光景は血塗れで倒れている白狼天狗だった

死んでいるものは……居ないようだ

俺は守矢神社を見る

煙が上がっている

彼処の下で誰かが戦っているのだ

横からは白狼天狗達の呻きも聞こえる

俺は歩き出した

しばらく歩いてみるとある白狼天狗が目に入った

零「!? 権！」

椛だ

俺は椛を抱き上げる

椛「れ、零……さん？」

零「ああ！俺だ！もう大丈夫だぞ！」

椛が弱々しく辺りを見る

椛「あ、文様は……？」

零「文？見てないが……」

椛が俺の肩を掴む

椛「良いで、すか……？幻想郷の、敵は……何も先の百鬼夜行だけじゃないんで

す……敵は他にも……ッ！」

話している途中で椛が俺を押し飛ばした

零「!？」

次の瞬間椛に巨大な雷が落ちた

巨大な音と閃光で目が空けられない

閃光も収まり目を開けると椛が黒焦げで倒れていた

零「……」

俺は立ち上がってもう一度守矢神社に向かう

零「……待ってろ椀。今あのふざけた野郎ぶちのめしてくる」

我は神なり

神奈子と霊夢と早苗が諏訪子の影と闘い始めて三十分

一向に倒れる気配がない

神奈子「目を覚ませ諏訪子！」

霊夢「聞こえるわけ無いでしょ！」

諏訪子の影が神奈子を殴ろうとする

それを御柱で防ぐ

神奈子「覚えておくといい博麗の……。この世に絶対なんて事はないのさ……。ツ
！」

そう言う神奈子は既にボロボロで血塗れだ

早苗「神奈子様！下がってください！後は私が！」

神奈子「駄目だ！今の諏訪子の力は全盛期を上回っている……。早苗がやつても死ぬだけだ！」

次の瞬間神奈子の後で轟音と閃光を迸った

神奈子が後を見るとそこには雷に打たれて形を崩した諏訪子の影があった

中から諏訪子が出てくる

早苗「諏訪子様！」

神奈子「早苗！待て・・・ッ！」

早苗が諏訪子に近付こうとするのを神奈子が静止する

霊夢「・・・何者なのかしら？」

霊夢が上にいる人物に話し掛ける

その人物は半裸で背中に太鼓があり頭に布を被っている

???「ヤッハッハ、我は神なり！」

霊夢「雷？」

神奈子「・・・雷神ってところかい？」

神奈子が御柱を飛ばす

だが御柱は男の身体をすり抜けた

???「・・・さすが建御名方尊だ。下界の一神にしておくには勿体ない。どうだ？そ

このミシヤグジ共々我々と共に来ないか？」

神奈子「あいにくだが私はもう共に行く男を心の中で決めていてね・・・」

雷神が身体に電気を漂わす

???「2000万V（ボルト）放電（ヴァーリー）！」

神奈子に雷が向かう

早苗「神奈子様！」

早苗が向かおうとするが霊夢に連れられて神奈子から離れる

雷の閃光が神奈子を包む

??? 「フン！我々に着いてくれば命だけは助けてやったものを……」

零「……………おい」

??? 「ん？」

男が振り向くと吹き飛ぶ

零「俺のダチになにしてんだ、テメエ？」

そこに居たのは零だった

零視点

階段を歩き鳥居を抜けると男が神奈子に雷を神奈子に打っているところだった

俺は走って男の背後を取る

零「……………おい。俺のダチになにしてんだ、テメエ？」

男を木刀で吹き飛ばす

??? 「ガハッ！」

男が神社の柱にぶつかりと血を吐く

??? 「ば、バカな……。私に物理攻撃は効かないはず……。ツ！」

早苗 「せ、先輩……。？」

霊夢 「やつときたわね……」

俺は霊夢と早苗を見た後に神奈子を見る

神奈子 「なんない。やつば居たのかい？」

煤けた神奈子が立ち上がる

神奈子 「それに……。少しとは言え封印も解かれている……」

零 「ハイハイ。お前はもう休んでな……」

俺はゆっくりと歩き始める

零 「さて、幾つか質問させてもらおう……」

??? 「下界の猿がか……。まあ、良からう」

零 「まず、お前の名前は？」

??? 「……。雷……」

零 「あ、そこはエネルじゃねえのね。次に目的は？」

雷 「暇潰し……」

零 「……。最後に、文を何処やった……!？」

万事屋零ちゃん月面戦争篇

零ちゃん月へ行く

あれから目を覚めて2週間が経っていた
そして……

零「おーい、そつちのリングゴ取ってくれ」

霊夢「駄目よ。私のリングゴよ」

零「じゃあバナナで良いから……」

霊夢「あんた、魔理沙食べる気？」

魔理沙「おい、どういう意味だコラ。張った押すぞ」

レミリア「ちよつと黙ってくれる!？」

咲夜「お嬢様、うるさいです……」

レミリア「咲夜!？」

零「……で、俺が寝てる間に一体何があつたんだ？」

俺が聞くと全員が黙る

レミリア「少しまえ……貴方に言ったわよね？月に行くって……」

零「あ、ああ・・・」

魔理沙「私ら、そこに居るやつに負けちまったんだぜ・・・。段幕ごっこで・・・。」
俺は息を飲む

幻想郷で屈指の実力者の四人が負けたのだ
相手は途轍もなく強い

紫「そこで、貴方の出番よ」

そこに紫が現れる

霊夢「あら、今年はまだ眠らないのね・・・」

紫「これが終われば半年位眠るわ」

俺はベットから起き上がる

零「で、俺は何をすれば良いんだ？」

紫「簡単よ。幽々子が月の都に侵入してる間に月の都の前で暴れて貰うわ」

零「・・・一人？」

紫「一人」

俺が下を見るとそこにはスキマがあつた

零「覚えてろよオオオオオオオオオ」

俺が落ちたつぎの瞬間何が紫を横切りスキマに入った

紫「え!?・・・まあ、いつか・・・」

『いいんかい!』

さて、尻から地面に落ちる

零「イテテ・・・紫の奴、もうちよつと送り方考えや

が・・・「キャッ!」うおっ!」

いきなり上に誰かが落ちてきた

見るとそれは鈴仙だ

零「な、なにしてんだよ鈴仙?」

鈴仙「そ、その・・・零さんが月に行くつて聞いて心配で・・・」

俺は鈴仙を撫でる

そして俺は辺りを見る

海と桃だ

俺は桃を取つて鈴仙に渡す

鈴仙「あ、ありがとうございます!」

俺は桃を噛りながら海を見る

零「なあ、鈴仙・・・」

鈴仙「何ですか？」

零「今から俺は月の都の前で暴れるわけだけど、そこにはお前の同胞も居る。それでお前は一緒に来るか？今ならまだ戻れるぞ？」

鈴仙「……昔は月の兎でも今は地上の兎です。穢れをもった私は皆に狙われる……なら、私は零さんと一緒に戦います！」

俺はそれを聞くと俺は桃を頬張って立ち上がる

零「さて、行くか！」

次の瞬間銃声が響いた

その頃永遠亭では……

永琳「鈴仙が月に行った!?! どう言うこと!?!」

永琳が紫の胸ぐらを掴んで叫ぶ

紫「どういう事も何も貴女の所の兎が零に着いていった……それだけの事ですよ」

永琳「何故止めなかったの！」

永琳が睨む

輝夜「落ち着きなさい永琳」

そして輝夜が入ってくる

永琳「しかし姫！」

輝夜「永琳！」

永琳の反論を輝夜は一喝する

永琳「零を信じなさい。きつと鈴仙を護ってくれるわよ」

輝夜はそう言うのと紫を見る

輝夜「……でも、もし二人に何かあつたら覚悟しておきなさい」

輝夜は今までに無い殺気を放ち紫に言い放つ

魔理沙「あんな輝夜初めてだぜ……」

咲夜「それほど二人が大切なのよ……」

こうして幻想郷対月の全面？戦争が始まった

戦争が始まって今、0分

兎は大抵臆病です

銃声が響いた

鈴仙「零さん！」

??? 「やった！当たった！」

肩から血が吹き出す

周りからヘルメットを被った兎が現れる

鈴仙「!？」

鈴仙が兎に指を付き出す

??? 「つて貴女は!？」

一人が鈴仙を見る

??? 「しよ、初代鈴仙！」

鈴仙「初代!？」

??? 「申し遅れました！私はレイセン！今は貴女様の代わりにペットとして綿月家で飼われてます！」

鈴仙「豊姫様と依姫様の!？」

零「あのお！」

全員が俺を見る

零「俺血塗れ何ですけど!? え? このまま続けるの!？」

俺が叫ぶと周りの兎が俺に銃を向ける

零「……………え？」

レイセン「悪いですけど貴女を助ける訳にはいきません……………。今このあたりは警戒中です。地上から来た貴方達を通す訳にはいきません！」

俺は文句を言うのを止めて笑う

零「あい、分かった! 今からお前らは敵だ! 歯あ食いしばれ！」

俺は木刀を抜いてレイセン以外の兎を吹き飛ばす

「逃げるー！」

その一声に兎達が逃げていく

残ったのがレイセンだけになった

どうやら足を捻って逃げられないようだ

俺が近づくとレイセンが顔を青ざめる

俺はレイセンのまえまで来るとしゃがんで足を見る

零「……………鈴仙、包帯とかあるか？」

鈴仙「はい、一樣……」

鈴仙が鞆から包帯を出す

それを受け取って俺はレイセンの足を固定する

零「よし、応急手当完了！」

俺はそのままレイセンを背負う

レイセン「……え？」

零「ん？どうした？」

レイセン「なんで、手当何てしたんですか？」

零「？」

鈴仙「無駄よ」

俺がレイセンは何を言っているのだろうと思っていると鈴仙が声を出す

鈴仙「零さんが貴女を助けたのに理由なんてないわ。建前を持たずに何時も本心で私達にぶつかってくるから……困ったものよ」

零「わ、悪い……」

鈴仙「あ！べ、別に責めてる訳じゃないですよ？」

鈴仙の言葉にレイセンはある三人の言葉を思い出した

一人はバカ正直と

また一人はお人好しと

そしてまた一人は世話焼きと

皆言っている事はバラバラだが必ず何処か寂しそうな顔をする

レイセン「……………」

レイセンは自分を背負う俺を見る

零「……………ん？どうした？」

俺が振り向くとレイセンが外方を向く

零「鈴仙えん」

俺は泣きかけながら鈴仙に助けをこう

鈴仙「零さんが何時も通りで何よりです」

俺はそのまま前を向く

桃の木の林を抜けて歩くしばらくして都が見えてきた

そこで見たのは大量の兎達だった

零「アララ……………そこまで暴れたつもりはないんだけどねえ……………」

鈴仙「貴方あれで暴れてないと……………」

零「……………さっきの言葉訂正で……………」

俺はレイセンを鈴仙に預ける

零 「先に行け」

鈴仙 「………気をつけて」

鈴仙が行ったのを確認すると俺は木刀を抜いて走り出した
戦争が始まって今、2時間

イーグルラビィ!二人は仲良し?

先ほどから何万匹の兎を倒しただろうか
さつきから倒しても倒しても湧いてくる

零「ツ!」

とりあえず威嚇すると二万匹ほど気絶した

「わあ!逃げろ!」

また逃げていく

まあ、逃げる奴は追わないので俺はドンドン都に進む

???「どうしよ鈴瑚!?!敵がドンドン迫ってくる!」

鈴瑚「m g m gじゃあm g m g諦めるm g n g?」

餅を付くあれをもった青髪兎が団子を食つてる黄色兎に話しかけている

俺はそつちに向かつて走る

???「つてこつち来た!」

鈴瑚「あー・・・あれはケダモノの目だね」

???「きつとそうよ!ほら、私可愛いから?」

鈴瑚「いやいや、清蘭より私の方が……」

鈴瑚清蘭「……あ？」

……何故か二人が喧嘩し初めてる

零「えつと……お二人さんお二人さん？」

二人が俺を見る

清蘭「じゃあこの人に直接聞いてみようよ！」

鈴瑚「そうだね。ねえ、私と清蘭、どっちが可愛い？」

零「？何言ってるんだ。二人とも可愛いだろう？……それよりお願いがあるんだけど……」

顔を赤くしていた二人がハッと我に帰る

鈴瑚「お、御願い？」

零「ああ、団子を少し分けてもらいたいんだ」

清蘭「だ、団子？何で？」

零「いや、さつき桃一個食ったんだけどまだ腹が減ってたよ。頼む！」

俺は頭を下げる

二人が俺を見たあとお互いを見合う

目の前に団子が出される

俺はそれを一気に食べる

零「あく満腹満腹……」

俺は立ち上がったて二人の肩を叩く

零「……ありがとう」

俺はそのまま二人を通り過ぎようとする

しかし……

清蘭「待った!」

清蘭が俺の首に餅を付くあれを掛けてくる

俺は清蘭を見る

清蘭「私達をここに居る理由は貴方を先に行かせない為!」

零「……」

鈴瑚「清蘭……」

俺は溜め息を付く

零「たく……素直に通してくれば楽なだけどねえ……」

俺はまた木刀を抜く

零「……良いぜ。好きだけ付き合つてやる。ただし、負けても泣くなよ?」

お互いににらみ合い次の瞬間走った

「……か、今まで気になってなかったけど何気に重力は地上と一緒にらしい
木刀と餅を付くあれがぶつかる」

零「……なあ、それ何て言うんだ？」

清蘭「？杵だけど……何で？」

零「いや、さすがにずっと餅を付くあれって言うのが面倒だった。言うにも書くにも」

清蘭「メタイ！」

俺は一旦下がる

その隙を見逃さず清蘭が銃を撃ってくる

しかし弾が来たのは前では無く後ろ

零（ツ！どうなってやがるツ！）

ギリギリで弾を避けているがこのままじゃギリ貧だ

清蘭「私の能力は異次元から銃弾を飛ばす程度の能力！貴方に私の弾は見極められな
い！」

それを聞いて俺は立ち止まる

零「はあ、止めだ止めだ！」

俺の言葉に清蘭だけでなく周りの兎も首を傾げる

零「見極められねえなら端から見極めねえで良いじゃねえか」

俺は清蘭に向かって歩く

その間にも銃弾が飛び交う

腕に、足に、腹に、弾が被弾する

その痛みを堪えて俺は清蘭の元にたどり着く

俺は腕を上上げる

『清蘭!』

清蘭が目を瞑る

零「……………たく、どいつもこいつもそんな顔しやがって……………」

清蘭「……………え?」

俺は清蘭を撫でる

零「ちよつと待ってろ。今すぐこの戦争、止めてくる!」

俺はまた先に進むのだった

戦争が始まって今、3時間

元主と元ペツト

零が戦っているその頃鈴仙は月の都に侵入していた

途中玉兎達から受けた銃弾の怪我から真つ赤な血がながれている

鈴仙「……人が居ないわね」

そう、都には人つ子一人居ない

レイセン「都の住民は豊姫様や依姫様、後サグメ様達、月の重鎮の方々と今外で戦っている玉兎達以外は皆第一、第二、第三シエルターに避難してるんです」

鈴仙「そう……。なら、話は早いわね。レイセン、私を豊姫様達の元に連れてって
！」

レイセン「え!? 豊姫様達の所に!? だ、駄目ですよ! 私を助けてくれた事には感謝しますけど貴女は今敵です! 連れて行く事は出来ません!」

レイセンは鈴仙から降りると銃を向ける

レイセン「今すぐ投降してください!」

鈴仙「……………」

鈴仙が手を出す

レイセン「……………」

レイセンは鈴仙の腕に手錠をかける

レイセン「能力無効化の手錠です。暴れない方が身のためですよ？」

鈴仙「暴れないわよ」

こうして鈴仙はレイセンに連れていかれた

レイセン「依姫様、レイセンです！」

レイセンが扉を叩く

依姫『……………入りなさい』

鈴仙「ツ！貴女……………」

レイセン「これで貸し借り無しです……………失礼します！」

レイセンが鈴仙を連れて入る

依姫「何か報告ですか……………ツ！貴女ツ！」

依姫が鈴仙に近づくと

豊姫「どうしたの依姫？ツ！鈴仙!？」

豊姫も鈴仙に走る

豊姫「どうしたのツ!?怪我してるじゃない！早く治療しないと……………」

依姫「いえ、そんなことより……」

依姫が鈴仙を見る

依姫「鈴仙、貴方地上に逃げてそうとうの穢れが溜まっているはずよ？何故、ここに来たの？」

鈴仙「……私は、この戦争を終わらせる為に今、ここに居ます。そして、同じ目的で来た人がもう一人、今、玉兔達と戦っています……ッ！」

依姫「戦争を終わらせる？戦争を仕掛けた本人達が？可笑しな話ね。……して、そのもう一人の穢れを纏った者は一体誰なの？」

依姫が鈴仙に一步近付く

鈴仙「零さん……いえ、黑夜叉（くろのやしや）大権現様です！」

依姫豊姫「ッ！」

豊姫と依姫が驚く中ただ一人状況を把握出来ていなかった

レイセン「え!?! 黑夜叉大権現様ってあの軍神の!?! 零さんが!?!」

鈴仙「師匠から聞きました。お二人は師匠と零さんの弟子で、遙か昔零さんの分隊の隊員だったってッ! いくら零さんでもあの人数は流石に無理です! お願いです! 玉兔達を撤退させて下さい!」

三人が鈴仙を見る

豊姫「・・・・・・・・・レイセン」

レイセン「はい！」

豊姫「鈴仙を錠を解いて上げて」

依姫「ツ!?姉さま！」

豊姫の指示に依姫が突つ掛かる

豊姫「依姫、私達は既にこの戦いに勝っているわ。幻想郷の賢者の謝罪は取れたでしょ?それでも兵が止まらなかったのは何故？」

依姫「それは・・・・・・・・」

豊姫「それは上層部が自分の保身の為に兵を配備したに過ぎないわ。兵の事なんて一切考えてない」

依姫「・・・・・・・・・はあ、分かりました・・・・・・・・」

依姫が溜め息を付くとトランシーバーを手に持つ

依姫「全分隊に到達!今すぐそこで暴れている男と共に帰還しなさい!」

次に雑音と共に通信が入る

『こ、こちらイীগルラヴィー!前方から妖怪の大群!』

依姫「!?数は!」

『1000・・・・・・・・2000・・・・・・・・3000・・・・・・・・いや、それ以上!数はおおよそ5000

！
』

依姫「そうですか……。では、貴方達は負傷者を運びながら被害を最小限に撤退！
大群は……。私達が倒します！」

戦争が始まって今、3時間半

八つの頭に八つの尻尾

清蘭達イーグルラヴィイから離れて俺はまた都に向かった
周りから銃弾も飛んでくる

零「ああもう！しゃらくせえ！」

俺は木刀を逆手に持って回転する

そのまま進もうとするが問題が発生する

零「!?オロロロロ」

回りすぎて酔った

ゲロが回りに散乱する

それを見た周りのウサギ達が鼻をつまんで離れていく

その時、遙か遠くで爆発があった

零「!?」

爆発の煙が晴れそこにいたのは半分人間半分蛇のリザードマンに八つの頭に八つの尻尾の赤蛇が現れた

零「なんだ・・・?ありや・・・?」

??? 「野郎共オ！月の連中から金品を奪い！そして殺せ！奴らに恐怖を植え付けろオ

！」

『ウオオオオオオオオオオ!!!』

赤蛇の言葉にリザードマン達が手に持つ剣や銃弾を掲げて雄叫びを上げる

鈴瑚「ハアハア・・・何あれ？」

鈴瑚が走って近付いてくる

・・・まだ団子を食べている

零「・・・・・・鈴瑚、ちよつと下がってろ・・・」

鈴瑚「え？」

俺はリザードマンの大群を見る

零「一刀流・・・32 煩惱砲！」

俺は某三刀流の剣士の飛ぶ斬撃でリザードマン達を一行に吹き飛ばす

「何だ!？」

「敵だ!」

「あいつだあ!あの時の鬼だあ!」

零「あの時がどの時かは知らねえがテメエ等覚悟しろ？」

「テメエ等が俺の信者を殺そうってんなら俺がテメエ等をぶつ倒す!」

俺は木刀をリザードマンに向ける

鈴瑚「!?」

鈴瑚がそれを見て驚く

鈴瑚（まさか・・・いや、そんなはず・・・）

??? 「どけ！」

その声にリザードマンが道を作ると赤蛇が通ってくる

??? 「何故貴様がそこにいる!? 貴様は元々我々百鬼夜行の者だぞ!」

百鬼夜行・・・

俺はルーミアの事を思い出す

零「バカ言え！」

俺はもう一度斬撃を飛ばす

それを赤蛇は頭で打ち消す

??? 「・・・我が名は大蛇（オロチ）！百鬼夜行、十二怪の一人である！」

零「十二・・・怪？」

大蛇「ぬらりひよん様に忠誠を誓う十二人の大妖怪。その妖怪達を皆がそう称する」

俺は一步下がって鈴瑚に近づく

零「鈴瑚・・・青蘭に報告してくれ」

鈴瑚「・・・・・・・・・・・・・・・・」

零「鈴瑚！」

鈴瑚「!?あ、うん！」

鈴瑚が走って青蘭の元に行く

大蛇「女を逃がし己は残るか・・・」

俺は黙って木刀を構える

大蛇「良いだろう！その愚かな勇氣に免じて先ずは貴様から殺す事にしよう！野郎共！やっちまえ！」

大蛇の合図でリザードマンが迫ってくる

零「・・・・・・・・風切零、参る！」

その頃鈴仙達は・・・

依姫「敵は何処ですか!？」

「ハッ！現在南東でイーグルラヴィおよび先ほどまで敵だった男と交戦中！お急ぎ下さい！」

豊姫「!?何で交戦してるの!?依姫はその男を連れて被害を最小限に撤退するよう言つたはずよ！」

「そ、それが……」

玉兔が報告しようとしたその時二人の玉兔が飛んできた

「!?」

二人は壁にぶつかり倒れる

鈴仙「大丈夫!?!」

豊姫「安心して! 傷は浅いわ!」

鈴仙の問いに依姫が答える

しかしまた二人が立ち上がる

レイセン「ま、待つてください! これ以上戦ったら死んじやいますよ!?!」

依姫が二人を見据える

依姫「貴女達、所属と名前を言いなさい」

青蘭「い、イーグルラヴィ……青蘭です……ッ!」

鈴瑚「同じく……鈴瑚ですッ!」

依姫「……青蘭、鈴瑚、貴女達に問います。私は貴女達に撤退を命じました。し

かし今貴女達がしているのはどう見ても命令違反。どうしてそこまで? 貴女達をそこ

までさせる理由は……?」

鈴瑚「理由……ですか?」

二人が立ち上がる

鈴瑚「私達が信じている神様が戦っている」

青蘭「命を懸けるのにそれ以上の理由が要りますか？」

二人が走ってまた大蛇に向かう

依姫「何なんですか・・・貴方は・・・？」

三人が依姫を見る

依姫「周りに居るものを味方に引き込んで・・・」

依姫の頬から涙が流れる

依姫「貴方を恨んでいた私が馬鹿みたいじゃ無いですか・・・ッ！」

この世界は残酷だ

リザードマンが斬りかかってくる

俺はそれを避けて背中を蹴る

「うわああああッ！」

零「！」

今にも殺されそうな兎を見つけ殺そうとしているリザードマンに地面に落ちていた石を投げつける

大蛇「野郎共何してやがる!?! 相手はたかが数百! こっちは五千だぞ!?! とつとと血祭りにあげねえか!」

「し、しかし! 何分相手が素早く! しかも殺そうとすると黑夜叉が邪魔を!」

大蛇「だつたら一斉に斬りかかれば良いだろ!?!」

「そ、それが……大半の同胞が既にやられており、四方から飛ぶ砲弾に分断されています!」

大蛇が戦場を見る

零「邪魔だこの野郎!」

俺はリザードマンを地面に叩きつける

頭が埋まりまるで犬神家つてそうじゃない!

青蘭「このまま行けばこいつらを倒せる!」

鈴瑚「……ねえ、零つてさもしかして……」

青蘭「……うん。分かつてる……でも今は戦いに集中!? 鈴瑚! 危ないツ!」

鈴瑚が声を出す前に鈴瑚と青蘭が吹き飛ばされる

都市の防壁から上がる

大蛇「雑魚が……ッ! 貴様等全員、我が血祭りに上げてやるッ!」

零「……おい……ッ!」

大蛇「ん?!」

俺は大蛇の八つの頭の内一つを地面に叩き付ける

零「テメエ……今、誰を笑いやがった……?」

大蛇「何?」

零「そのクツセエ口で誰を笑ったのかつて聞いたんだ!」

大蛇「何度でも言つてやる! 雑魚が戦場ででしゃばるな! 確かに貴様等からしたら我々は悪かもしれない。だがそれがどうした? 正義か悪かなど散々入れ替わってきた。雑魚は正義を語れない。強者だけが正義だ!」

大蛇の頭の一つが炎と毒、光線を吐いてくる

俺はそれを避けて飛ぶ

空から大蛇を見てみるが弱点っぽい弱点が見当たらない

頭が二つ迫ってくる

俺は頭を一つ踏み台にして二つ目の頭に登り首を走る

しかし大蛇にたどり着く前に俺は首から振り落とされ首が一斉にこつちを向いた

大蛇「死ねえ！黒夜叉ア！」

頭からあらゆる攻撃が放たれる

零（囲まれた!?逃げ切れねえ!）

そう思った瞬間俺の周りに雷が落ちる

その雷が大蛇の攻撃を全て書き消した

鈴仙「大丈夫ですか！零さん!」

零「あ、ああ……。ところでこれは一体……」

鈴仙「豊姫様と依姫様に救援をお願いしました」

俺は後ろの二人を見る

一人が刀、一人が扇子を持っている

何だろう……。凄く強そうだ

特に扇子の方

あれは普段笑っているがガチで怒ったら真顔のパターンだよあれは・・・

刀の方が近付いてくる

依姫「その反応は、ま！た！忘れているみたいですね……。私は綿月依姫です。早速で悪いのですが八雲紫は既に敗けを認め月側に謝罪もしました。これ以上貴方には何の利もありません。即刻地上に降りなさい。後は私と姉さんで対処します」

零「……………鈴瑚と青蘭は無事か？」

依姫「？ええ、二人とも命に別状は……」

零「……………そうか」

俺は木刀を腰に戻す

大蛇も首をふって起き上がってくる

俺はそのまま大蛇まで歩く

鈴仙「零さん……………？」

豊姫「何を……………」

大蛇「よくも！貴様等はただでは殺さん！ジワジワと鬨り殺し、より苦痛を味あわせてやる！」

大蛇がこちらを睨むがその瞬間俺は大蛇の頭まで飛び頭を地面に殴り付ける

零「もう、俺には届きやしねえよ……」

残り七つの頭が俺に向かう

次の瞬間大蛇の身体に巨大な柏餅が落ちる

次に四方から銃弾が飛んでくる

大蛇「何もできないカス共がッ！おとなしくしていれば良いものをッ！」

大蛇が銃弾と餅を欠き消して迫ってくる

零「サンキュー青蘭、鈴瑚……」

俺は後ろを見るボロボロの二人がレイセンの肩に掴まってピースしている

もう一度木刀を抜くが誰かに首元を掴まれ後ろに飛ぶ

零「お、お前は……ッ！」

豊姫「フンッ！」

零「扇子の奴！」

豊姫「豊姫！」

豊姫が扇子を仰ぐ

すると大蛇の頭の七つが消滅した

大蛇「お、おのれ！おのれエエエエエエ！！！！」

豊姫「貴方の敗けよ！おとなしくもと居た場所に帰りなさい！」

大蛇「クツ！覚えていろ！いずれ月も幻想郷もおとしてくれる！」
そのまま大蛇は後ろに出来た穴に入って消え入った

そいつは客!?サグメの隠謀!

あれから一週間怪我の治療で今豊姫と依姫の屋敷に匿われている

つか、依姫は戦いの最中とつと帰れって言ってたような・・・

そして、幻想郷に帰るにはあと一ヶ月掛かるらしい

零「はあ、心配だあ・・・」

鈴仙「それを言うこと137回。蛮奇さんと小傘ちゃんがそんなに信用出来ませんか？」

鈴仙が俺の包帯を取り替えながら言ってくる

零「いや、心配なのは二人じゃなくて二人に降り掛かる非日常の話さ」

鈴仙「例えば？」

零「そうだな・・・家に我儘なお嬢様が落ちてきたり、そのお嬢様の国を守ったり？」

鈴仙「ハハハ・・・ま、まさかあ・・・」

鈴仙は苦笑いを浮かべながら包帯を巻き終わる

鈴仙「はい、終わりです。そろそろ動いてくれても大丈夫です」

俺は立ち上がって腕を回す

零「んじや、散歩してくる」

俺は扉のノブに手を掛けると鈴仙が肩に手を掛ける

鈴仙「ちよ、ちよつと待つてくください！」

零「?どうした?」

鈴仙「ひ、一つだけ警告が・・・」

零「警告?」

鈴仙「兎は年中発情期ですから捕まったら・・・」

零「つ、捕まったら・・・?」

鈴仙「確実に襲われます」

零「りよ、了解・・・」

俺は館を出て辺りを散策する

零「何か、中華街みてえだな・・・」

そう、至つて昔の中国の様な街並みだ

零「・・・」

俺は辺りを見る

三人・・・いや、四人か?

四人くらいの兎が俺の後を銃を持って着いてきている

零「え？違うのか？」

???『私が口に出して言ったことは反対になる。私にもこれは扱いきれていない』

零「・・・・・・・・・・・・・・・・」

俺はただただ困惑する

さすがの俺も反対を元に戻す事は出来ない

???『ところで貴方、鬼人正邪って子を知ってる？』

零「あ？正邪？どっかで聞いたような・・・」

???『本当!』

零「ああ・・・確かあれは・・・」

俺が言葉を繋げようとすると扉が開いた

玉兎「動くな。動いたら頭を撃ち抜く」

俺が後ろを向こうとすると冷たい物が後頭部に当たった

玉兎「月の都に侵入した挙げ句サグメ様をフシダラな目に！」

零「え？いや、それはしてない・・・」

玉兎「問答無用！」

零「アアアアアアアアアアアア!!!」

こうして俺は奉行所にしょっぴかれた

お奉行「これより大通り公衆トイレ痴漢事件の詮議を行う! それでは、詮議開始」
 俺はお奉行と何故か弁護士をしている鈴仙とこれまた何故か検事をしているドレミーを見る

ドレミー「被告人、風切零は本日大通りの公衆トイレにて被害者、稀神サグメが用をたしている所を無理矢理侵入。サグメ様を襲っていた疑いがかかります。これは明らかに痴漢行為である。暴行罪が妥当かと。兵も確認しております。詮議に掛けるまでもなく被告人は有罪かと」

鈴仙「意義あり!」

奉行「鈴仙弁護士」

鈴仙が手をあげて奉行が名を呼ぶ

鈴仙「被告人がサグメ様の居たトイレに侵入したのは事実です。しかしこれが故意であるものなのか、痴漢を目的で行われた物なのかは甚だ疑問であります! この事件は事故である可能性が高い! 犯人は何者かに追われてたまたま入ったトイレにサグメ様が居たと思われまます! よって私は被告人の無罪を主張します!」

色々とツツコミたいことはあるがさつきからサグメ様サグメ様ってアイツけっこう偉い奴なのか?

ドレミー「偶然? トイレ鍵が掛かっていた扉を無理矢理押し開けていたのにな?」

え？あれ鍵掛かたの？

それにしては・・・

鈴仙「意義あり！そもそも！被告人は女の人に興味がありません！それに色仕掛けを掛けるような物ならその者は問答無用で優しさの暴力にやられます！つまり！被告人は同性愛者です！」

鈴仙の主張に目の前が真っ白になる

いや、俺だつて女の子に興味あるよ!?

つか、いつ色仕掛けされたんだ？

ドレミー「意義あり！そんなわけ無いでしょう！現に夢では皆の見る彼がケダモノで・・・」

鈴仙「意義あり！証拠ならあります！」

鈴仙が写真を取り出す

そこには永遠亭で入院している俺の隣で寝ている皆だった

鈴仙「これが何回も続いて手を出さない・・・つまり！被告人は女の人に興味が無いんです！」

お奉行「被告人の意義を認める！以後被告人はゲイであると認識するように！」
認識するように！、じゃねえよ！何か俺が変人みたいじゃねえか！

そして、鈴仙!何やってやりました顔で親指立ててんだ!?中指立てんぞ!?

鈴仙「お奉行、ゲイである被告人がサグメ様に痴漢をしたとこじつけるからには余程の確固たる証拠があったんでしょね。その証拠を明確に示して頂きたい!ドレミー検事に証拠品の提示を求めます!」

お奉行「うん。ドレミー検事、証拠を示したまえ」

お奉行に言われるとドレミーが溜め息を付く

ドレミー「被告人の部屋を徹底的に調べた結果、このような物が出てきました」

全員が中を覗く

そこにあつたのはいかかわしいビデオの数々

ドレミー「このような下品な物、神聖な詮議の場、ましてや穢れを許さぬ月で出したく無かつたのですが……」

俺は膝を崩す

あんなもの身に覚えもない

ドレミー「所持数およそ三十枚、中には痴漢物も有りました。被告人の異常なまでの性への執着がこれで分かつていた頂けたかと思えます」

ど、どうしよう……

何かもう取り返しので付かない所まで来やがった!

てか、鈴仙！今度は何だ!?その軽蔑しきった目は!?

鈴仙「意義あり！ドレミー検事が示すこれらの物は証拠品としては不十分です！中を改めてさせていただきます！ビデオの再生を要求します！」

お前只みたいだけだろ!?

ドレミー「意義あり！お奉行！弁護人の要求は本件から逸脱しています！中身など確認しても意味がありません！」

お奉行「検事の意見を却下！弁護人の要求を認める。ビデオを再生しなさい」

お前も見たいんかい！

おい、これ何の裁判だよ!?

何だよこれ?ええ?

一体何が・・・

鈴仙「意義あり！」

何に対してだアアア!?

鈴仙「零さん！やつぱりおつきな方がいいんですか!?私のじゃ不満ですか!?!」

零「何がだよ!?!俺何も見えてねえよ！」

お奉行「私は巨乳派です！」

零「誰もテメエの意見は聞いてねえよ！」

こうして全てのビデオの鑑賞が終わった

お奉行「弁護士、これらの証拠に対し主の意見が聞きたい」

お奉行鼻血垂れてるよ!

鈴仙「問題無いでしょう。男性なら誰でも異性に興味があるのは当たり前のこと。被告人のコレクションは一般的な男子の思考を越えるレベルでは無いと思います」

いや、君さつき俺の事ゲイだの女の子に興味が無いだの言ってた? てか、顔赤いぞ? 大丈夫か?

鈴仙「むしろ、こう言うものを持っていない方が異常でしょう」

俺持っていないんだけどもしかして異常?

鈴仙「それともドレミーさん。貴女はこう言う物を一本も持っていないんですか?」

ドレミー「しかし、三十本は一般的に見ても多いと思われま。お奉行、お奉行の意見をお聞かせ願いたい」

お奉行「……被告人のコレクションは証拠不十分と見なす!」

三十本以上あるみたいだけど!?

鈴仙「ドレミー検事! 貴女はさしたる証拠もなく被告人を犯人と決めつけ……ドレ

ミー「ちよつと待った!」

ドレミー「私、詮議の前に被告人の身辺調査をさせてもらったのですが今までの経歴、

お奉行「被告人、静粛に！」

零「静粛に?これが静粛に居られるか!鈴仙を見ろ!何処が穢れてやがる!何を持つてテメエらが鈴仙を罵る資格がある!んなのはここに居る誰も持つちやいねえ!鈴仙はな、優しいんだよ……。永琳と一緒に怪我した奴を治して笑顔で見送る。そんな鈴仙だから俺は好きだし護りたいと思った。穢れがどうか知るか!俺は俺の思つた通りに生きる!」

鈴仙「零さん……」

しばしの沈黙の後拍手が聞こえた

その拍手の主はまさかのお奉行だった

お奉行「素晴らしい!やはり貴女は貴女なのね、零」

零「お、お奉行がオカマになった……」

ドレミー「違いますよ。あの方は……」

お奉行の後ろにあつた襖が開く

そこにいたのはパソコンを持ったサグメだった

零「……なあ、誰かメガネある?」

傍聴席の兎の一人からメガネを借りる

それをサグメに掛ける

鈴仙「あの・・・何してるんですか？」

零「おお、スイツチだ！」

ドレミー「す、スケツ○ダンスですか・・・」

サグメ『に、似合ってる？』

零「おお、似合ってるぞ。お奉行の声で言われると何ともあれだけど・・・」

ドレミー「いやー、すいません。試すような真似をして・・・」

零「ためす？」

俺は頭に？を浮かべる

鈴仙「この詮議は痴漢の詮議では無くて、零さんが月に仇成す穢れた者かどうかの詮議だったんです」

サグメ『そして、これで全てがハッキリした。被告人、風切零は・・・無罪！そしてこれより私、稀神サグメ、および綿月家の客人としてこの月に迎え入れる！あ、これにて閉廷！』

何はともかく一件落着・・・なのか？

玉兔の戦闘訓練

何だか分からない内に客人にされ早数日・・・

街を歩けば跪かれ、挙げ句貢ぎ物までされる始末

零「おら、普通に接したいだけなんだけどなあ・・・」

神奈子では無いがもつとフランクに接したい

依姫「そんな貴方に1つお願いが・・・」

俺の目の前に座っていた依姫が桃を食べて話しかけてくる

依姫「私と姉さんはしばらく会議で屋敷を開けなければなりません。留守はレイセンが居るので大丈夫なのですが訓練の方が・・・」

零「つまり、俺にレイセン達の訓練を見ろと？」

依姫「簡単に言えば」

零「ハイハイ。見といてやるからとつとと会議にでも何でも行ってこい」

依姫「・・・ありがとうございます」

てな訳で訓練所に来た

何ともまあ、皆やる気が無く只くつちやべっている

俺が手を叩くと皆がこつちを見る

零「ハイハイ、本日から大体一週間皆の指導をすることになりました。風切零です。それじゃ、今日のメニューを発表しまーす」

一週間後・・・

依姫「ただいま戻りました」

豊姫「皆賢くしてた？」

レイセン「それが・・・」

三人が訓練所を見る

そこでは兎がしていたのは餅つきだった

依姫「ちよちよ！何があつたんですか!？」

レイセン「実は・・・」

これはちょうど一週間前、俺の出した訓練メニューは鬼畜を示した

レイセン「普通倒れるまで走らせますか!?!しかもその後も倒れるまでうさぎ跳に5ト
ンダンベル持久持ち！そりゃ皆逃げますよ！」

豊姫「でも皆集まつてるじゃない」

レイセン「あ、それは……」

それは鬼畜メニユーの次の日俺は家に引きこもる兎達を強引に引っ張り出して目の前に臼と杵をだす

しかも人数分である

レイセン「零さんは最初のメニユーで皆の身体能力を判断してたみたいで一晩で皆の杵を作ったみたいです」

依姫「なッ!?!そんな一瞬で……」

零「お、お帰り。ほら」

俺は三人に皆が作った餅で作ったゼンザイを渡す

三人がそれを手に取り口に入れる

豊姫「ん〜!美味しい!」

レイセン「本当です!自分がついたお餅だから余計おいしく思いますね!」

依姫「これは……桃ですか?」

零「お、良く気付いたな。お前んちの桃を少し拝借してエキスを取り出したんだ。そのエキスを餅に染み込ませて桃餅にしたのさ」

俺もゼンザイを食べる

うん、自分ながら良く出来てると思う

何時の間にか行列が出来てイーグルラヴィの面々や鈴仙、サグメとドレミーまで来て
いる

零「ハイハイ！今日は桃餅パーティーだよ！ゼンザイだけじゃなくってアンコ入りに笹餅もあるよ！」

俺が叫ぶと歓声上がる

こうして幻想郷と変わらない穏やかな日常であった

幻想郷への帰還まで、後一週間

万事屋蛮奇ちゃん始動篇

零帰還!一方その頃・・・

あれから一週間、何事もなく過ぎた

あつたとすれば鈴仙達の風呂を覗いてしまい追い掛けられ屋敷が倒壊、俺が三日で建て直したりサグメとドレミーとお茶したりまあ、色々・・・

?全然何事も無くない?来月の五日までに次の章まで書かないといけないのよ!

依姫「では、レイセン。二人をよろしくお願いします」

レイセン「はい!」

レイセンは何か織物を羽織つてある

依姫「零さん。何かから何までありますがどうぞございました」

豊姫「鈴仙も、皆の治療ありがとね」

鈴仙「い、いえ!師匠の弟子として当然の事をしたままです!」

零「さてと、そろそろ行くか」

豊姫「また、月に来る機会があつたら寄つてね」

レイセン「では!行ってきます!」

こうして俺達は幻想郷に向けて飛び立った

一方その頃……

蛮奇視点

妖怪の山に守矢神社が来てから一ヶ月（零帰還一週間前）が経った

その一週間前に零が行方不明と妖怪の賢者に告げられ小傘は部屋に塞ぎこんでしまっている

最近では人里から霧の湖につながる森が巨大な穴を残して消失したり異常なことが立て続けに起こっている

蛮奇「私が……何とかしないと……。零の代わりに私が……」

私はそう意気込んでソファアから立ち上がる

そんな時零の部屋から何か大きな音がした

蛮奇「!？」

私は走り出して零の部屋に入る

天井が突き抜けていてその下には零のベッドに倒れている桃が付いた帽子を被った青髪の少女だった

私はとりあえず少女の体を揺する

??? 「う、うん・・・」

少女が目を覚ます

??? 「ここは・・・」

蛮奇 「ここは万事屋零ちゃんよ。今さっきあんたが空から天井突き抜けて落ちてきたのよ」

??? 「空から?・・・!?」

少女は少し考える素振りを見せてから勢い良く立ち上がる

しかし体がポロポロでよろけている

蛮奇 「ちよ!まだ動かない方が・・・」

??? 「離して!アイツ等ぶつとばす!」

私の手を退けて外に走り出そうとする

神奈子 「おっと・・・大丈夫かい?」

その時二週間前に妖怪の山に引越してきた神奈子が何故か少女にぶつかった

蛮奇 「あんたは何でサラツと家に居るのよ!」

神奈子 「ん?私の所にこれが届いたんだが・・・」

私は神奈子の出した手紙を読む

拝啓、建御名方尊、八坂神奈子殿及びミシヤグジ、洩矢諏訪子殿

神である貴殿等を六日後我等が企画した新生アツパーヤードで祭りがございます。
是非参加されたし

蛮奇「ま、祭り？」

神奈子「みたいだねえ。で、チケットもほら。二つ同封されてた」

神奈子が二つのチケットを見せてくる

蛮奇「で、それがどうしたの？自慢だったらぶつとばすわよ？」

神奈子「ハハハ、妖怪のお前が神である私をぶつとばすか！悪い悪い。いや、諏訪子の奴は行かないらしくてな、1つ私に來たんだ」

蛮奇「それは嬉しいんだけど・・・小傘も居るし・・・」

私はチケットを受けとりながら神奈子を見る

神奈子「それなら心配要らないよ。この祭りは神が対象。つまり付喪神のあの娘も対象さ」

蛮奇「・・・小傘、入って良い？」

小傘『・・・うん』

私はドアを開けて部屋に入る

小傘はベッドの布団でくるまっていた

小傘「……………蛮奇ちゃん、アツパーヤードに行くの?」

蛮奇「……………うん。小傘は……………」

小傘「あちきは行かない……………」

蛮奇「……………」

私は小傘を見る

???「なら、私にくれない?」

少女が小傘の部屋に入ってくる

蛮奇「あんたねえ……………」
「私はッ!」

私が少女に掴みかかろうとすると少女が叫んだ

???「天界の総領の娘、比那名居天子としてアイツ等をブツ飛ばさないといけないの!

あんた等が言ってるアツパーヤードってのはね、アイツ等が地上から持ってきた大地の

事よ。アイツ等はヴァースって呼ぶけど……………私はアイツ等をブツ飛ばして皆を衣玖を

助けたい!」

私は天子の主張を聞いて溜め息を付く

蛮奇「なら、私にそれを託すつもりはない?」

小傘天子 「「!?」」

蛮奇 「私は万事屋よ？ 国の1つ位救ってみせるわよ」

こうして私はアツパーヤードでの祭りに天子と行く事になった

アッパーヤード

あれから六日経ち私は天子に連れられてアッパーヤードに来た

そこには神奈子や雛、久侘歌等の神様も来ていた

神奈子「お、来たね。？あの唐笠の付喪神は？」

蛮奇「留守番。・・・零の行方不明がそうとう堪えたみたい」

神奈子「・・・そうか・・・」

久侘歌「お疲れさまでございます」

空気が重い所に久侘歌が割り込んでくる

神奈子「お前はたしか妖怪の山に居る庭渡神か」

久侘歌「はい。初めましてでございます。ここは鳥料理が無くて素晴らしいでございます」

神奈子「そ、そうか・・・。それは良かったな。にしても・・・」

神奈子が周りの神様を見る

神奈子「錚々たる面々だねえ・・・。秘神に、埴安神・・・閻魔も居るみたいだね」

天子「な、何で閻魔が居るのよ？」

久侘歌「閻魔様は元々お地藏様なんですよ」

天子「へえ……」

???「皆様」

私達は声のする方を見る

天子「衣玖!？」

衣玖「私は永江衣玖、皆様を招待したお二人のゴツドの側近でございます」

天子「何を……」

衣玖「この度、皆様にお集まり頂いたのはゴツドのフェアリーヴァース進行の仲間を集める為にございます。それに当たって皆様にはサバイバルを行って貰います。制限時間は5時間、逃げようとするものはゴツドの手により殺されます。それでは皆様の武運をお祈りいたします」

衣玖が話し終わると周りの神が走り出す

しばらくして周りに神が居なくなると天子が膝を付く衣玖に近づく

天子「衣玖……」

衣玖「総領嬢様……申し訳ございません！私は……ッ！私はッ！」

泣く衣玖の肩に天子が手をかける

天子「良いのよ、衣玖。私が居ない間、迷惑かけたわね」

天子がそう言うのと衣玖が泣き始めた

神奈子「こう言うのを見るとアイツを思い出すねえ」

蛮奇「アイツ？」

神奈子「零の事さ。全く何処で何をしているんだか……。とりあえず私達も行こうか。このサバイバルを早く終わらせないとね」

こうして私達が動き出した

周りでは既に戦いが始まっていた

雷「……何人生き残る？」

???「ああ。なに、軽いゲームさ」

遙か上空で様子を見ていた二人が口を開く

雷「……五人」

???「奇遇だな。俺もだ」

二人が笑うと雷が腕を上げる

雷「ヤハハ、さあ！祭りの始まりだ！皆のもの今宵は楽しめ！我等と共にあの穢れ無きフェアリーヴァースへ赴こうではないか！ヤハハハハハハハハ！」

??? 「全くお前はそればっかだな……。まあ、強い奴が居たら戦ってはみたいが……」
天界の遙か上空で二人のたからかな笑い声が響いた

ラグナロク?神達のサバイバル

既にサバイバルが始まって二時間が経過した

周りには気絶した付喪神達が倒れている

神奈子「…………二時間でこれとは…………五時間ではどれだけ倒れているか…………」

天子「……………」

蛮奇「天子?」

天子「大丈夫。ありがとう…………」

私はそう言うが暗い顔をしている天子を見て空をみる

こんな時、あいつなら何と言うだろうか…………

零「ブワックシユンツ!」

サグメ『風邪?』

ドレミー「それは無いでしょ。何とかは風邪引かないって言いますし」

零「おいこら…………」

等と帰る前とは思えない不毛な争いが続いていた

4 時間経過

更に戦いが加速して残っているのは私、天子、神奈子、久佐歌、閻魔、秘神、埴安神とゴツドの二人の計9人だった

そして私達はアッパードの中心部である少し開けた場所に来た

それは他も同じでゴツド以外の全員が居る

天子が剣を抜く

??? 「待ちなさい。戦う意思はありません。私は四季映姫・ヤマザナドゥ。地獄の閻魔です」

映姫がそう言うとき天子が渋々剣を下げる

??? 「なら、私も自己紹介をしようか。私は秘神、摩多羅隠岐奈。ここには暇潰しで来たがまさかこんな事になるとはね」

お互いが自己紹介をし終わる辺りで雷が落ちた

雷 「ヤハハハ、良く生き残った！」

神奈子 「お前はッ！」

雷 「ん？誰かと思えば建御名方尊ではないか！」

映姫 「・・・何の用ですか？」

雷「うん。私ともう一人、風はあるゲームをしている。それは五時間で何人残るか、だ。しかし我々合わせて残り9人。我々は五人と予言した。しかしサバイバル終了にはまだ4人多い、がお前達はもう戦わないだろ?てことで脱落したい者は?」

雷が手に雷を起こして聞いてくる

しかし・・・

蛮奇「・・・て、言ってるけど?」

天子「私は嫌よ。あんたは?」

神奈子「私もさ」

久侘歌「私もでございます」

映姫「貴女はどうなのですか?」

隠岐奈「もちろん。私もだ」

私たちはうつすらと笑みを浮かべて各々の得物を雷に向ける

『お前(貴方)達が降り(なさい)ろ!』

雷「そうか・・・なら、覚悟は出来ているな」

一時間後

零 鈴 仙 レ イ セ ン 「ウ
ワアアアアアアアアア

零帰還!超絶ランダム七変化!

俺が急いで森に向かう

開けた場所が見えてきてそこに向かつてはしる

??? 「待ちなさい」

しかしいきなり誰かに呼び止められた

??? 「動いたら電撃を流します」

零 「・・・お前は誰だ？」

??? 「名乗る必要はありません。貴方が向かおうとして居る所には総領娘様とそのご友人が賊と戦っています。今邪魔されるわけにはいきません」

零 「その総領娘つてのが誰かはわかんねえが今そいつらが戦っているのは正真正銘のカミナリだ。勝ち目はねえ」

??? 「だとしても私は総領娘様達を信じるまでです」

俺は一度溜め息を着いて地面に座る

??? 「何を・・・」

零 「何もしねえよ。・・・しかし」

俺は開けた方を見る

これはもう災厄だ

普通の人間ならすぐに死ぬだろう

そう思っていると誰かが開けた場所から飛んできた

誰かが木にぶつかって動きが止まる

零「神奈子!？」

神奈子「れ、零・・・!？」

俺は神奈子に近寄る

神奈子「お、遅かったね・・・」

零「悪い。ちと、月旅行にな」

神奈子「ハハハ、何と言うか零らしいねえ・・・」

神奈子が笑うと真面目な顔になる

神奈子「零・・・家族を待たせたからにはそれ相応の覚悟はあるんだよね？」

俺はだまって立ち上がる

???「待ちなさい！」

零「悪いな。どうやら俺はここで止まってる訳にはいかねえらしい」

俺はとある丸薬を取り出す

零「ランダム七変化!」

丸薬を嘔み砕いて飲み込み走る

そこでは雷が蛮奇の頭を驚掴みにしていた

俺は雷を殴りかかろうとすると・・・

零「腕が伸びた!?!」

俺は丸薬を貰ったときのことを思い出す

あれはたしか月での事・・・

零「・・・何これ?」

サグメ『丸薬』

零「いや、それは分かるんだけど・・・。どんな丸薬何だ?」

サグメ『貴方の力を込めた丸薬。なにが起こるか分からない』

零「ええ・・・。」

サグメ『八意さまに頼めば変えも作ってもらえるはず』

てな感じで渡された丸薬だ

まさか腕が伸びるとは・・・

俺の拳が雷に当たり雷が吹き飛んだ

蛮奇「零……」

零「悪い蛮奇。遅くなって……」

俺は泣く蛮奇を抱きしめる

蛮奇「本当よ……」

一度辺りを見渡す

まさに死屍累々だ

零「蛮奇……久侘歌……後何か知らない二人……」

蛮奇「皆、アイツにやられて……」

俺はもう一度雷を見る

雷「ヤハハ……まさかここまで力をつけるとは……」

零「ギア2!」

俺は弾んで血の流れを早める

雷「何!?!」

零「ゴムゴムのJETピストル!」

俺が殴ると雷が吹き飛ぶ

零「さすがのお前の見聞色……いや、心網（マントラ）も動きが着いてこれなきや

意味ねえだろ?」

吹き飛んだ雷が血を拭いながらこちらを見る

雷「どうやら今は分が悪い様だ。一度引かせて貰おう」

そう言うと雷が消える

俺はそのままその場で眠った

東方地霊殿

小傘とデート!? 穴の下に広がる世界!

目が覚めると何時もの自室に居た

隣には涙の後が残った小傘と蛮奇、レイセンが居る

俺は起き上がってキツチンに向かう

ご飯の調理をしながら一ヶ月分の文々。新聞を見る

そこには俺が行方不明の事、紫が冬眠に入った事、紅魔館に繋がる森が大穴を開けて消えた事等が書いてあった

零「ほへく。俺が月に居る間まさかこんなことが起こってたとはねく」

???「ああ、そうだな。お前が月に居る間皆寂しそうだったんだぞ?」

零「そりや、悪いことしちまったかな・・・ん?」

俺は後ろを向く

藍「いやいや、お前も紫さまの無理難題を聞いてくれたんだ。気を負う必要はないさ」

零「・・・何でお前が居るんだよ」

俺はいつの間にか後で狐うどんを食べていた藍に話し掛ける

藍「ん?紫様が冬眠されている間しばらくここに住むことにしたぞ?」

零「いや、別にそこはいいんだけどさ部屋足りねえぞ?」

藍「そこは安心してくれ。昨日の間に三階を作っておいた」

俺は急いで外に出る

確かに三階まで出来ている

零「藍つてスゲエ・・・」

???「あ、盟友!」

声が聞こえて振り向くとそこにはにとりが居た

零「にとり!久しぶり」

にとり「ああ、そうだね。そんな盟友に依頼があるんだ」

俺はにとりを家に入れて蛮奇と小傘を起こす

零「で、依頼の内容は?」

にとり「博麗神社に温泉ができたのは?」

零「知ってる」

蛮奇「そんなことが新聞に載ってたわね。文々。新聞だからあまり読んでなかったけ

ど・・・」

小傘「それでその温泉がどうかしたの？」

小傘が俺の膝に座りながらにとりに聞く

にとり「何故か怨霊が沸いてるんだ」

・ ・ ・ ・ ・ 怨霊 ・ ・ ・ オバケ ・ ・ ・

俺は小傘を抱きしめたまま食卓の下に隠れる

にとり「め、盟友？」

蛮奇「あ、あんまり気にしないで。でようは原因を探れば良いの？」

にとり「簡単に言えばね。もちろん通信機と発信器は渡すよ」

こうして俺達は原因究明に乗り出した

にとりの話によると怨霊は地底から来ているらしくその入り口は妖怪の山にあるらしい

零「そこまで分かってんならなんで自分で行かないのかねえ・・・」

にとり『仕方ないだろ？あそこには山の妖怪には苦手な妖怪がいるんだ』

零「へいへい」

俺はポケットに通信機をなおして歩き出す

零「蛮奇には家の事で残って貰ったけど別に小傘も残ってくれて良かったんだぞ？」

小傘 「うん。あちきが居ないと零ちゃんすぐに怪我するもん」

そう言う小傘は俺の腕をしっかりとホールディングしている

と、そんなことをしていると地底への穴が見えてきた

深くて底が見えない

??? 「えい♪」

零小傘 「・・・え？」

俺達は何者かに押されてそのまま落ちた

唐傘と土蜘蛛、夜叉と橋姫

目が覚めると俺はすぐに起き上がった

零「……………小傘は……………」

辺りを見るが小傘の姿が無い

俺は急いで奥に進み小傘をさがし始めた

目を覚ましたあちきが最初に見たのは大きな蜘蛛の巣だった

???「目が覚めたかい？」

そこにいたのは茶色い服に金髪の女の人だった

小傘「貴女だれ？」

???「私かい？私は黒谷ヤマメ、土蜘蛛だよ。そしてここは地底、封印されし妖怪の都
さ」

あちきが後ろを見るとそこには明るい都があった

小傘「あ！零ちゃんは!?あちきの他にも人が居たでしょ!？」

ヤマメ「ああ、アイツかい？あいつらほってきたよ」

小傘「何で!？」

あちきはヤマメちゃんに掴みかかる

ヤマメ「地底はそんな甘くなんて無いよ。ここに来るにもあらゆる障害がある。それ
を乗り越えられないようじゃあこの先に行かせてやる事は出来ないねえ」

小傘「・・・・・・・・・・もん」

ヤマメ「ん？」

小傘「零ちゃんはきつと来るもん！」

あちきが叫ぶとヤマメちゃんが笑った

ヤマメ「あんたの気前は良し！後は待つだけだね」

俺は走ってたどり着いたのは橋だった

零「はあはあ・・・・・・・・小傘はこの先か・・・」

???「・・・・・・・・妬ましい」

零「？」

俺が声の聞こえる方を振り向くと

そこには緑の目の金髪少女がいた

???「態々外から地底に来るなんて妬ましい」

零「はあ・・・あのさ、ずっとここに居るの？」

???「あら、質問？妬ましいわね。そうよ」

あ、一様返事はくれるらしい

零「じゃ、じゃあさ、ここに青髪のオッドアイで傘持った子来無かった？」

???「人探し？妬ましい。来てないわ。それと名前も告げないで話し掛ける何て妬ましい」

零「あ、俺は風切零」

???「水橋パルスィ・・・。私に自己紹介させるなんて妬ましい。もしかしたらキスメの所にいるかもね」

零「キスメ？」

俺がパルスィを見る

パルスィ「ええ。ここにきていないってことはそう言うことよ。妬ましい事にね」

俺はもう一度引き換えそうにする

パルスィ「・・・」

零「？何だ？」

パルスィ「貴女から負の感情が感じられないわ。ここまで嫉妬心を浮き出しにされてるのに・・・」

零「あゝ……別に嫌とは思ってないからな……。それに嫉妬は人間の当たり前の感情だぜ？それにいちいち嫌とか思ってもなあ……」

パルスイ「……………カハッ！」

零「パルスイイイイイイイ！」

てことでとりあえずパルスイを背負つてもどる

ヤマメ「へえ……零つてそんな奴なんだ」

小傘「うん！零ちゃんは何時もちき達の事助けてくれるの！」

あちきは零ちゃんが来る間にヤマメちゃんに零ちゃんのカッコいいところを話していた

ヤマメ「……………うらやましいなあ……」

小傘「え？」

ヤマメ「その零つて奴は同種の妖怪だけじゃない。人間にすら信頼され、愛されていゝる。この地底にはね、人間に裏切られた妖怪達がごまんといゝるのさ。あるものは異常な力を持つため嫌われ、またあるものは嫉妬を募らせて嫌われた。私だつてそうさ。私の能力は病を操る程度の能力。そのせいで人間に退治され地底に封印されたのさ」

あちきは言葉を出すことが出来なかつた

ここには人間に捨てられたあちきより悲惨な運命を送っている
こんな時、零ちゃんなら何と云うだろうか

零「へ〜」

振り向くとそこには零ちゃんがいた

誰かを背負つて鼻を小指でほじりななめら聞いていた

ヤマメちゃんが零ちゃんに掴みかかる

ヤマメ「お前に何が分かる!?地上でぬくぬくと過ごし人間を必要とされる妖怪のお前
がッ！必要とされない私達の何が分かるッ！」

零ちゃんは少し考える素振りをしたあと女の子を下ろして頭をかく

零「いや、だつてわかんねえし……」

ヤマメ「ッ!？」

零「それにお前らがいくら忌み嫌われようが俺には関係ねえな」

ヤマメ「……え？」

ヤマメちゃんが手を話すと零ちゃんが優しい顔でほじつて無い手でヤマメちゃんを
撫でる

零「俺は天邪鬼だぜ？世間の戯れ言には流されねえつつうの」

ヤマメちゃんは膝を崩して泣き崩れた

爆誕! 怪力乱神、力の勇儀!

ヤマメにパルスィを預けて雪が降っているなか俺達は旧都に向かった
そこには色々な賭け事や酒を呑んでいる鬼がたくさんいた

「お、何だ? 新人か?」

一人の鬼が近づいてくる

「まあ仲良くやろうや」

「大変だ! 向こうで喧嘩だ!」

「何だまたか? あんた等も気を付けな」

そのまま鬼達が言ってしまった

にとり『な、私が行きたく無い理由もわかるだろ?』

先ほどまで音沙汰がなかったにとりが話し掛ける

零「ああ、こりや来たくないな」

にとり『私達河童は平和に発明とか川泳ぎをして過ごしたいだけだからね』

零「にしては危険な発明が多そうだけだな・・・」

俺がにとりと話していると小傘が頬を膨らませていた

小傘 「零ちゃん見て！」

小傘は傘の上で片手倒立をしている

俺が拍手していると鬼が近づいてくる

小傘に肩が当たった鬼がたおれる

「うわあつ！」

「兄貴!? どのいしたんですかつ!？」

「う、腕の骨折ったツ！」

「何やて!？」

子分らしき鬼が小傘に近づいてくる

「おい、おまん！おまんのせいで兄貴が肩折ってん！どないしてくれんねん！」

小傘 「ご、ごめんなさい！」

「アア? ごめんなさいで済んだら閻魔は要らんのじゃ！謝罪の気持ちがあるなら慰謝料払えや！」

小傘 「その・・・今お金が無くて・・・」

「無いんやったらしゃあないなあ。身体で稼いでもらおか」

子分鬼が小傘の腕を掴むが小傘が抵抗する

「この！ええ加減に！」

子分鬼が小傘に殴りかかる

俺は腕を掴む

「何やねんお前!」

零 「小傘の連れだが?」

「そうか。ちようどええわ。こいつ兄貴の腕を折ったんや! 慰謝料払ってもらおか」

零 「ああ、それなんだけだよ・・・」

俺は木刀で子分鬼を兄貴鬼に向けてぶつ飛ばす

「ウオッ!」

兄貴鬼が子分鬼を両手で押し退ける

零 「あれれ? ちゃんと両手動いてるじゃん」

「このガキイツ!」

兄貴鬼が俺に殴りかかろうとしたその時

??? 「なんだい喧嘩かい?」

そこに一本角でブルマの体操服を着た女性が現れた

「あ、姐御・・・」

「勇儀の姐さん! ちようどええ所に。兄貴が恥かかされたんです!」

勇儀? 何処かで聞いたことが・・・

勇儀「にしてもだよ。あんたらじゃアイツには敵わないよ」

「何でだ姐御!？」

女性が俺を見つめてくる

勇儀「だって……そいつは下手したら私より強いよ?」

勇儀の言葉に鬼達が息を飲む

零「え、えつと……」

「ヒイイイイイ」

俺が近づくと二人が逃げてしまった

小傘「零ちやアアアアん!」

零「おお、よしよし。怖かったな」

俺は抱きついてくる小傘の頭を撫でる

勇儀「家の者がすまなかつたね」

零「いやいや、こつちもあつちを逆撫でしたしな。……ところでお前、勇儀だっ

け?俺を知っているっばいけど……」

勇儀「……萃香から聞いては居たが本当に記憶が……」

零「?」

勇儀「まあ、お前の姉貴分と思ってくれば良いさ。ところでお前達はどうしてこの

地底に?」

零「いや、地上の温泉から怨霊が沸くらしくて。勇儀は何か心当たりはあるか?」

勇儀「うーん、分からないねえ。だが、怨霊なら地霊殿に居る猫ならなにか知ってるかもねえ」

小傘「地霊殿?」

小傘の質問に勇儀が奥を指差す

勇儀「向こうにある人一倍大きな屋敷が見えるだろ?あれが地霊殿さ」

零「そうかい。情報提供ありがとな」

俺は手を振って地霊殿に向かう

小傘「待って〜」

小傘も走って着いてくる

勇儀「……………まったく、お前は何も変わってないねえ……………。これから先、幾つもの苦難が襲いかかるだろう。挫けたっていい挫折したっていい。只諦めるな、零」

貴女の心を覗きます！嫌われ者の覚り妖怪

遠くから見えていたが近くで見ると地霊殿が更にでかい

俺は門を開けて館に入る

??? 「にゃくん」

入ってすぐに見えたのは猫

勇儀が言っていた猫はこいつの事だろうか？

零 「いや、さすがに・・・」

小傘 「零ちゃん？」

零 「ああ、何でもないよ」

??? 「おや、客人ですか。珍しい・・・」

そこに居たのはピンクの髪の毛の小5ロリだった

??? 「ロリで悪かったですね」

いや、別にダメなんて言っただけ・・・

??? 「・・・貴方、またロリかって思いましたよね？」

そりゃ思うでしょ

バカルテツト+αに三月精とか・・・俺の周りどれだけロリいるんだよって感じだよ?
?

??? 「なるほど・・・ロリコンですね」

んなわけねえだろ・・・

零 「ん?あれ?俺しゃべってたっけ?」

??? 「いいえ。喋っていません。貴方の心を覗きました。わたしは古明地さとり、覚り妖怪です」

覚り・・・

さとり 「・・・やはり貴方もわたしを嫌いますか?」

俺は頭に?が浮かぶ

さとり 「おや?そうではない・・・ッ!」

小傘 「零ちゃんあの娘どうしたの?」

零 「さあ・・・いきなり驚きだったな」

さとり (この人、わたしを嫌わない!? それどころか可愛い何て! いえ、まだよ! 貴方の心の奥底を見てあげる!)

さとり 「・・・え?」

さとりが血相を変えて膝がぐずれている

さとり「……………」

???「さとり様！」

さとりが呆然としていると猫がさとりに近付いた

さとり「……………ッ！だ、大丈夫よお燐……………」

さとりが立ち上がったもういちど俺を見る

さとり「……………なるほど、地上で怨霊が……………お燐、どう言うこと？」

お燐と呼ばれた猫から煙がでて人の形になる

お燐と言うことはおそらく名前は燐なのだろう

燐「それが……………何でかお空が暴走してしまつてアタイでは止められ無かつたので

地上の奴を呼ぼうと……………」

さとり「何故先に私に報告しなかつたの？」

燐「その……………こんなことさとり様が知つたら私達嫌われちゃうかと思つて……………」

お燐がシユンとしているとさとりが頭を撫でる

さとり「バカね。失敗なんて誰にでもあるわ。そしてその失敗をどう次に活かすかが

大事なの。それにね、お燐、私はそんなことで家族である貴女達を嫌いになつたりしな

いわ」

さとりがお燐を抱き締める

さとり「……………さて、ここまで来てあれなのだけれども依頼があるの、万事屋さん」

零「へ？」

さとり「どうか、お空を止めて頂戴。お隣の心を読む限り今の私達ではお空を止められない」

俺は小傘と顔を見合わせて笑った

零小傘「「もちろん！」」

燐「じゃあアタイが案内するね。アタイが火焰猫燐」

零「おお、よろしく」

俺がお隣に着いていくとさとりが止める

さとり「貴女が行っても死ぬだけです。それに……………」

さとりが俺を見る

さとり「彼について話したいこともありますしね」

こうして俺とお隣は中庭に向かった

零ちゃんが行った後さとりちゃんと向き合った

小傘「それで、あちきに話して？」

さとり「零さんですが……彼は本当に生きていますか？」

さとり「ちやんの言葉にあちきは？を浮かべる

小傘「それは……どう言う……？」

さとり「彼には生気がありません」

小傘「!?う、ウソっ!？」

さとり「確かに信じられないかもしれませんが……。私も初めて見たとき目を疑いました。しかし間違いありません。彼は……。死んでいます」

地獄の火車と八咫鳥

中庭から地下に入った

零「中庭も熱かったけど地下はもつとあチイ・・・」

つか、燃える中庭って何だよ・・・

燐「ここは地核に近いからねマグマも沸いてるよ」

零「そんな所にまたなんでそのお空が？」

燐「この管理をするのがお空の仕事なんだよ」

またしばらく歩いて階段が見えてくる

燐「じゃあここからは一本道だから」

零「え、着いてきてくんねえの？」

燐「流石にここからはアタイでも簡単じゃなくて・・・」

こうして結局俺一人で行く事になった

そして歩いて十分

ようやく最下層が見えてきた

零「さあつてと、何処だ？」

俺はお空を探すため辺りを見渡す

???「何をお探して？久しぶりの人間さん」

そこに居たのは大きな羽にリボンを着けて片腕は大砲の女性だった

零「お前だよお前」

???「私？」

零「お前つてお空だろ？」

???「そうだよ。私が霊鳥路空だよ」

零「なら、間欠泉を止めてくれ！あそこから怨霊が沸いて迷惑してんだ！」

空「……もう間欠泉は止められないよ？」

先ほどまでの無邪気なお空から一転し、狂喜に変わる

空「私があまりに強い力を手に入れてしまったから火焰地獄の炎は強まる一方。それ

に伴い間欠泉も強くなるわ」

口調も変わり俺の警戒が更に強まる

零「強い力？」

空「ええ、究極の力。地上を全て溶かし尽くす最後のエネルギー……」

零「全てを溶かし尽くす？」

俺は少し考え一つの結論にたどり着く

今までのすべてのパーツが一繋がりになった

零「ツ!? おいおい! それってまさかツ!」

空「私の究極の核エネルギーは全てを溶かし尽くす!」

一瞬で殺気が解き放たれる

零「……やるしかねえか……」

空「黒い太陽、八咫鳥様。我に力を与えてくださったことに感謝します。地上に降り注ぐ太陽の光、それは原始を作る核融合の熱。究極の核融合で見も心も、幽霊も妖怪もフュージョンし尽くすが良い!」

お空が飛んでくる

空「核熱『ニュークリアフュージョン』!」

超デカイ大玉のあとに中玉が飛んでくる

俺はギリギリ避けて木刀を振るが腕の大砲で防がれた

空「やるわね! 爆符『メガフレア』!」

目の前でいきなり爆発が起きる

爆風に飛ばされたが何とか体制を立て直す

さて、こいつをどうするか……

俺はズボンのポケットを探る

そして一枚のカードとメダルを取り出した

零「憑依『ミシヤグジ様』！」

俺は諏訪子の力を憑依して飛ぶ

零「土着神『ケロちゃん風雨に負けず』！」

諏訪子のスペルで空のスペルを相殺する」

空「うゝん。全然ダメだなく。焰星『フィクスタスター』」

更に火力が上がった爆発が俺を襲う

零「チツ！流石に諏訪子の力の憑依じゃむりか。なら！」

今度はポケットから丸薬を取り出す

零「ランダム七変化！」

丸薬を嘔んで飲み込む

すると何故かペラペラになった

空「・・・布？」

どうやら布になったおかげで爆発を上手く避けられている

空「まさかここまでやるなんて。『地獄極楽メルトダウン』！」

お空が上下に弾を撃つ

すると弾が爆発してこちらに向かってくる

俺は変化を解くと木刀で当たりそうな弾を弾く

零「や、やベエ・・・捌けねえ・・・」

どんだんかすつていき血が流れる

とうとう腹に当たり穴が開いた

空「ようやく当たった」

俺は地面に落ちる

にとり『あーあー、聞こえるかい?』

意識が飛びそうなか中にとりの声が通信機から聞こえた

にとり『返事はしなくて大丈夫だよ。今から話すのは木刀の醤油機能についてだ』

醤油? そう言えば木刀の柄のボタンの押せば醤油が出るんだった

にとり『そのボタンを盟友の妖力を込めた後に使ってみてくれ。きつと驚くよ』

どう言うことかは分からなかったが俺はもう一度立ち上がった

お空「・・・まだ立ち上がるんだ・・・。じゃあこれで殺してあげる。『地獄の人

工太陽』!」

俺はお空に吸い込まれるが気にせず妖力を込める

零「・・・今だ!」

俺がボタンを押すと魔理沙のマスタースパークのような極太レーザーが出た
レーザーはお空に当たりお空が落ちる

零「おっと」

俺がお空を受け止めてそのまま降りる

そしてそこで意識が潰えた

お前と俺の一つの約束

目が覚めた

零「うん。なんか知ってた。異変の後はだいたいここだもん」
てことで来ました永遠亭

鈴仙「全く……どうしてこう何時も何時も……」

レイセン「全くです。貴方が死んだら豊姫様や依姫様……何より私が泣きます！」
俺は鈴仙とレイセンに説教されていた

零「い、いや……まあ、ごめん」

俺はとりあえず謝り起き上がる

藍「はあ、お前のおかげで幻想郷と地底との不可侵条約が無茶苦茶だ」

零「ご、ごめんって……」

藍「……まあ、そろそろ限界だとは思っていたからな……」

何とか許されて胸を撫で下ろす

鈴仙「あ、そう言えば零さんにお客さんですよ」

零「客？」

俺は鈴仙の視線の先にある襖を見る

襖が開くとそこに居たのは申し訳なさそうにするお空だった

零「お空じゃねえか。どうしたんだ？」

空「その……ごめんなさい」

零「……へ？」

いきなり頭を下げられたので訳も分からず可笑しな声が出た

空「その……貴方を殺そうとして……」

零「あ？ああ、全然気にしてねえよ。それにお前にその力やった奴の見当なら大体付

いたし……」

空「？」

零「あ、じゃあ一つ約束」

俺は小指を出す

零「その力はさとりやお憐を護るために使っておくんねえ。それが俺との約束事だ」

空「……うん！」

お空が無邪気な笑顔で笑う

零「……さて、そうとなつたら異変解決の宴会だ！場所は神奈子らの歓迎会も兼ね

て守矢神社でやるか」

藍「では、そのように手配しておこう」

鈴仙「じゃあ、私も師匠と一緒にいきますね」

レイセン「あの・・・じゃあ私も・・・」

俺は皆を見た後にお空を見る

零「もちろんお空もな。さとり等連れてこいよ」

空「うん！」

話が纏まった事で俺は立ち上がり守矢神社に向かった

零「全く・・・何でこんな山の上に神社があるんだよ・・・」

俺は神社に続く階段を歩きながら口を溢す

諏訪子「昔っから山には神が降りるって言われてるからだよ」

上を見るとそこには諏訪子が居た

諏訪子「久しぶり」

零「おお、諏訪子。元気にしてたか？」

諏訪子「うん。零こそ大事無い？」

零「つい先日腹に穴空いた」

諏訪子「よく生きてたね・・・」

俺は諏訪子と一緒に神社に入った

諏訪子「ごめんね。今早苗人里で布教活動してるからお茶が出せないんだ」

零「大丈夫大丈夫。それよりお前らの歓迎を兼ねた宴会があるから・・・」

諏訪子「それはさつき紫の所の式神がきて教えてくれたよ」

零「それとは別件でだ、お前お空に力与えたる？」

諏訪子「お空？ああ、あの烏の子？」

零「そう、その子」

諏訪子「彼女が欲した力だよ。・・・まあ、八咫烏の力が彼女を乗っ取ってたみたいだけども零のおかげで解消されたし、もう心配ないよ」

俺はそれを聞いて立ち上がる

諏訪子「ん？どこ行くの？」

零「ん？宴会料理を作んだよ」

こうして異変を解決した俺はまた何時もの日常に身を置くのだった

小傘と蛮奇、究極の宴会芸

料理を作り終わって外に出るとちょうど宴会が始まっていた

零「……何か宴会に来る度に人が増えてるような……」

諏訪子「賑やかで良いじゃん」

そう言つて諏訪子も走つて行つてしまった

早苗「あ！先輩！お料理を運ぶの手伝いますね」

零「お、わりいな」

俺は片手で持つていた刺身を渡す

いや、早苗が良い子に育つてご先祖様の零さんからしたら嬉しい限りだよ

サニー「あー！見つけた！」

そこに来たのはサニーとスター、ルナだった

零「おお、お前らも来たのか。じゃあほら、酒はやれねえからオレンジジュースな」

スター「ありがとう！」

ルナ「ありがとう」

スターとルナがオレンジジュースを手取る

サニー「つて！二人のバカ！零を神社の裏の落とし穴に嵌める作戦だったでしょ！」
零「ほほう……」

俺はすぐにサニーをふん路張ると神社の屋根に吊るして「反省中にて外すべからず」とサニーの顔に張る

神奈子「……結構厳しいんだねえ」

零「何回もはめようとするからな……」

神奈子「ハハハ……。呑むかい？」

俺は神奈子に御猪口を渡す

猪口に入れられた酒を飲み干して神奈子にも酒をつぐ

神奈子「まさかお前と酒を呑める日が来るとはねえ。前は子供だったからねえ……」

神奈子が遠い星空を見る

神奈子「……あ、そう言えばだね、お前に謝りたいって奴が宴会に来てるんだが……」

零「ああ？宴会の席でそんな湿っぽいことするか？普通……」

神奈子「私もそう行つたんだがねえ、どうしてもつて事だ。……まあ、そこら辺を歩いているだろうし歩けば向こうから近付いて来るだろう」

俺は縁側から立ち上がって皆が集まっている方に戻る

小傘「零ちやあぁん！」

いきなり小傘が飛び付く

零「おお、どうした？」

小傘「あのね！蛮奇ちゃんと新しい宴会芸思い付いたんだ！見て！」

そう言つて小傘は蛮奇に向けて傘を回す

蛮奇「行くよ！」

蛮奇は幾つもの自分の頭を小傘の傘に投げる

小傘「はい！何時もより多く回っております！」

『おおー！』

周りから簡単な声が漏れる

勇儀「お、面白そうだね。どれ私もやってみるな。萃香、手伝つてくれ」

萃香「お、やるのかい？」

零「……………へ？」

隣に居た勇儀が俺と萃香を持つと俺を投げあげた

零「アアアアアアアア!!!」

片方の勇儀の手に落ちると今度は萃香が飛んでいる

勇儀「人形お手玉、何時もより多く回ってるよ！」

『オオ！』

こつちもこつちで大歓声

それに対抗した小傘と蛮奇が更に頭を追加して高速で傘を回す
結局華扇が来て止めてくれるまでこれは続いた

地底の妖怪?山の妖怪?いえ、リュウグウノツカイです

零「はあ、ひどい目にあつた・・・」

俺は水を呑んで酔つた体を休める

パルスイ「注目の的何て妬ましい・・・」

隣でパルスイがじつと見ているのに気づいた

零「あの・・・パルスイさん?パルスイさんは何故俺なんかを見つめて居るのでせうか?」

パルスイ「自覚がないの?妬ましい。あんな熱烈なプロポーズをしたのに・・・」

零「プロポーズ?俺が?何時?」

パルスイ「・・・妬ましい」

ヤマメ「ダメだよパルスイ。こいつは無意識にあんなこと言うんだから」

ヤマメが頭に桶を乗せながらこつちに来る

零「何そのおけ?」

俺が桶をじつと見つめていると桶から稲刈るあれが飛んできた

零「アブね!」

ヤマメ「ごめんね。この子シャイで……」

零「いや、シャイってレベルじゃねえよこれ！近付く奴は皆殺しじゃねえか！」

ヤマメ「この子はキスメって言ってる昔ちよつとオイタして人間に退治されちゃつてね。それ以来人間恐怖症で……」

零「ハア……」

俺は猪口に酒を入れて桶に手を伸ばす

零「……呑むか？」

俺がそう言うのと桶から恐る恐る手が延びてきた

手が御猪口を掴んでそのまま桶に戻る

零「んじゃあ、行ってくるわ」

俺は立ち上がって歩き出す

ヤマメ「また、地底に遊びにおいで！」

俺はヤマメの言葉を背に辺りを見渡した

文「あやや、やつぱり宴会はネタの宝庫ですねぇ」

文が俺の前に降りてくる

文「今回の特別号は「またまた発覚!?地底に忍び寄る万事屋零ちゃんの魔の手!」で、

決まりですわね」

零「何だつたんだ？」

???「あの・・・」

俺がいまのことを考えていると後ろから声をかけられた

そこに居たのはアッパーヤードもとい地上から消失した紅魔館に続く森に居た女性だ

あ、ちなみに森は諏訪子がもとに戻してくれた

零「お前も来てたのか」

???「はい。私は永江衣玖、総領娘様の世話役です。先日の無礼な言動、改めてお詫び申し上げます」

零「別に良いよ、んな湿っぽい話・・・」

衣玖「し、しかし！」

零「大体俺は蛮奇と神奈子とまあ・・・その他を助けようと思っただけだし別にあの時の事は気にしちやいねえし・・・」

衣玖「・・・分かりました」

俺はようやく分かってくれたと思つて安堵した

衣玖「だったらこの永江衣玖、誠心誠意貴方のお世話をさせてもらいます！その・・・」

下の・・・」

前言撤回

何も分かってなかったわ

零「アホか!もつと自分を大切にしろっての!」

衣玖「でももうこれくらいしか・・・ッ!」

俺は衣玖を落ち着かせるため椀同様抱き締める

零「俺は・・・ここに居る皆が笑って暮らせればそれで十分さ」

衣玖が落ち着いたのを確認して離れた

しかしまだまだ宴会は始まったばかり

俺はもつと楽しもうと心に決めたのであった

忌み嫌われも恋はしたいお年頃

零「・・・・・・・・・・」

さとり「・・・・・・・・・・」

俺は何故か今さとりと見つめあつて居た

・・・・・・・・・・何で?

さとり「・・・・・・・・・・私は貴方が気になります」

いきなり何!?

さとり「お空や地底の妖怪達を精神的に救つてくれた貴方は、一体何を力にしているのか。その答えが知りたいんです」

んなこと言われてもよく分からない

さとり「普段は面倒くさがつてだらけていて女誑しな貴方がいざというときは何か煌めく物を魂（こころ）に宿す。一体何故?と言うかいい加減心で会話するの止めて貰えませんか?」

零「あ、はい。・・・・・・・・まあ、それは俺が皆を大切に思つてるからじゃね?」

さとり「・・・・・・・・・・はい?」

零「お前らを失いたくない。お前らに苦しい思いはしてほしくない。お前らに笑ってほしい……。そう言う思いが一本の軸になって俺の頭の上から股間までぶつ刺さってやがる。だからどんだけボロボロにされても真っ直ぐ立ち上がれんだろうな」

さとり「それは……。この能力のせいで忌み嫌われた私も、ですか？」

俺は一瞬理解できなかつた言葉を理解して笑ってさとりの頭を撫でた

零「当たり前だろ？」

さとりが驚いてこちらを見るとさとりの目に涙が溜まっていた

???「あー！お兄さんお姉ちゃんを泣かせた！」

不意な言葉に振り向くとそこにはさとりにた少女が居た

零「つて、お前寺子屋ん時の！」

???「あ、覚えててくれたんだ。私こいしって言うの！」

こいしはそう言うときとりに向かう

さとり「こいし、もしかして貴方が零さんを地底に落とされたの？」

確かに誰かに落とされたけど……。あれってこいしの仕業だったのか……

こいし「うん！お燐とお空が困ってたから！」

さとり「ハア……。零さん、すみません。少し席を外して貰っても？」

さとりがため息を着いて離れて行った

レミリア「お互い大変ね・・・」

うしろからレミリアと咲夜が歩いてくる

レミリア「妹の教育をする大変さ、私は分かるわね」

零「あく・・・そういや、お前も姉妹だったな」

レミリア「ええ、何時か天下一姉妹決定戦とかしてみたいわね。まあ、当然私達が勝

つだけれどね。ね、咲夜」

咲夜「はい。お嬢様と妹様の圧勝でございます」

誇らしげにするレミリアを他所に俺はまた歩き出した

宴会も順調に進んで居る

零「さ、呑むぞ呑むぞ〜」

俺は酒を取りに皆の輪に交じるのだった

天子「何で私だけ修理なのよオオオオオオオオ!!!」

一方博麗神社に要石を落とした天子は霊夢にボコられ一人修理に勤しむのであった

万事屋零ちゃん主人公奪還篇

中国と夜叉と大ナマズ!

??? 「……さん!……いさん!零さん!起きてください!」

誰かに体を揺すれて起きた

目の前に居たのは美鈴だった

零「……あれ?美鈴……。ここは……?」

美鈴「説明は後です!今はとりあえず戦う準備を!」

美鈴が木刀を渡してくる

躊躇いながらも木刀を手に持ち立ち上がる

するといきなり人形が襲いかかってくる

上海「シヤンハイ!」

零「上海人形!」

美鈴「来ましたね……」

美鈴が見る方向に居たのはアリス、魔理沙、霊夢だった

零「お、おいおい!何でアイツら攻撃してくるんだ!」

美鈴「彼女達は本物じゃないんです！太歳星君の手の者です！」

零「た、たい？何だつて？」

美鈴「太歳星君・・・奴が目を覚ませば地震によつて幻想郷は滅びます！」

零「あ？地震？それはアツパーヤードの一件だからちよつち古くねえか？」

美鈴「零さんですか!?パチュリー様も同じようなことを・・・」

俺が美鈴と話していると針が飛んでくる

霊夢「私達を無視するんじゃないわよ！」

次に魔理沙が魔法を放ってくる

魔理沙「こつちは三人！大人しく降参するんだぜ！」

美鈴「断る！」

美鈴が彩雨を撒き散らす

零「おいおい、マジか・・・。あんま気乗りしねえな・・・」

美鈴「見た目は知っている方々ですが中身は別物です。集中してください！じゃないと死にますよ！」

俺は強く木刀を握りしめてアリスに向かう

アリス「フフ、私とやるの？怪我しても知らないわよ？」

上海「シャンハイ！」

蓬莱「ホウラーイ！」

上海人形と蓬莱人形が向かってくる

二体の人形の攻撃を防ぐと更に六体の人形

アリス「最大八体、貴方にこれを攻略出来るかしら？」

俺は木刀を逆手に持つて回り始める

次の瞬間竜巻が起きる

そして突つ込んできた人形を防ぐ

アリス「なッ!？」

俺はそのまま突つ込んでアリスを吹っ飛ばす

そのままアリスは霧になつて消えた

零「さてと、美鈴！無事か！」

俺が美鈴に向かう

美鈴「勿論です！」

そこには二人を倒した美鈴が居た

霊夢「ククク、さすがだな……。だがもう疲れきつて居るだろう？さあ、今こそ真

の姿を見せるときが来たようだな」

霊夢が飛んでいくのを見て俺達は急いで後を追う

そして霧の湖に着くとそこに居たのは大きなナマズだった

零「何だあのナマズ・・・、食べるかな？」

美鈴「食べられる訳無いでしょ・・・」

???「ワシは伝説の大ナマズ様、かの最恐最悪の大妖怪、太歳星君の影の一つじゃ」

ナマズが一人語りを始める

零「ま、マジで太歳星君だったの!？」

俺は美鈴の話が本当だったことに驚く

美鈴「だから行ったじゃないですかあ！」

大ナマズ「ワシが跳ねれば大地は揺れる！これで浮き世もおしまいじゃあ！」

大ナマズが跳び跳ねて地面に着地する

すると地面が揺れて空から岩が落ちてきた

零「岩は俺が何とかする！美鈴はあのナマズを！」

俺は岩を砕いて木刀で美鈴を乗せる

そのまま木刀を降って美鈴を大ナマズに飛ばす

美鈴が大ナマズを殴り飛ばして大ナマズは気絶した

???「おめでとうございます」

いきなり辺りが真っ白になって後ろから声が聞こえる

零「……つてドレミー……」

そこに居たのはドレミーだった

ドレミー「いや、貴方をお呼びして正解でした」

零「で、どうなつてたんだ？」

ドレミー「実はですね、夢の世界に太歳星君の影が進行してきて居たので零さんと：

この手の妖怪に詳しい美鈴さんに来て貰った訳です」

零「なるほど。じゃ、俺は帰るとするわ……」

俺はそのまま眠りに入つた

ドレミー「出来れば、ずっと居て欲しかったのですが……。その方が、貴方は悲し

まずに済んだのですから……」

前編

目が覚めるとそこはごみ捨て場だった

零「……何で俺こんなごみ捨て場で寝てるんだ？」

とりあえず起き上がってゴミを払う

零「……帰ろ……」

てことで家に帰ってきた

零「ただいま……」

ドアを開けて靴を脱ぐ

零「零さんが帰ってきたぞー！居ないのかー？」

何時もなら小傘が走ってくるのだが……

零「思春期か？」

俺はリビング兼事務所に歩を進める

零「はーい！蛮奇つき、小傘ちゃんただいまー！帰ってこなくてメンゴメンゴ。ほら

これ土産！地霊温泉の地霊饅頭！」

俺が二人を見ると様子が可笑しかった

俺の言葉に反応するでもなく只キツチンを見ている

蛮奇「もく、何やってんのよ、遅いわよ？」

小傘「早く来て。お客さん来てるよ」

零「お、おお・・・悪い悪い。まさか客が皿洗いしてくれてるとは・・・」「百（ちゃん）！」・・・へ？百？」

俺は気になってキツチンを覗き見た

百「おお、悪い悪い。昨日ちよつと呑みすぎちまつて・・・頭いたくてよ」

そこに居たのは俺と服は似ているものの黒ではなく白で髪も白く、更には俺とは違い寝癖一つ無い髪の少年だった

百「すいませんお客さん。見苦しいところお見せして。俺が万事屋の風切百です。どうぞお掛けになってください。お客さん」

そう、これこそ風切百の新たな物語、東方機真録の始まりである！

零「すいません・・・。間違えました・・・」

俺は外に出る

零「んだよ、おい。寝ぼけて他所様の小説ん家に突撃朝ご飯しちゃったよ・・・。あゝ、ビックリした。知らなかったぜ。あのバカ作者が新しい小説書いてたなんて・・・」

かなり打ち切り臭漂つてたけど大丈夫か？第一回目からここまで死臭を漂つてんのはネタが全て他所の作品とか言う俺達以来だよ……。アドバイスしてやれば良かったかな。女の子の気持ちは分かり辛いつて……。タイトルも東方機真録つて、ワケわかん過ぎるだろ……。ここはメカの祓魔師（エクソシスト）おとかおしやれな感じで、あの人里に居たらモブみたいなの赤髪にメガネ掛けさせてホクロめっちゃ着けて主人公の妹とかにしないとお気に入りに入り一万件は狙えねえよ。あのオツドアイもどうせカラコンだろ……。どうせガキならもつとマスコットレベルまで小さくして何かの動物と一緒に踊らせときゃあ良いんだよ。極めつけは主人公で何だあ、あの滑かなフォルム？髪整つてたら印象に残らねえだろ。主人公はやっぱ寝癖だよ寝癖。しかし……。どっかで見たとあるような顔してたなアイツら……。新小説なのに……」

俺は万事屋百ちゃんの看板が付いた建物を一目見てまた歩き出す

零「まあ、良いや。帰ろ帰ろ」

そして念のためもう一度建物を見る

そろそろ本気で帰らねえ、と……。何処に？

そこにあつたのは紛れもなく俺の家だった

確かに青の祓魔師でもない、赤の祓魔師でもない、只の可愛いと可愛いのはクソシス

トだった……。・・・

あれは紛れもなく蛮奇と小傘だった

確かにタイトルこそ鬼神から機真に変わった

時代が進んだようで実際は退化した

だがしかし、この駄文に駄文を重ねた駄文！紛れもない、東方鬼神録だ

てことはこいつって爽やかな白髪さらさらへアーって・・風切百って一体誰なんだ

!?

昨日のうちに一体何が？

俺が考えていると中から三人が出てきた

蛮奇「ねえ、さっきの一人一体なんだったんだろう・・・」

小傘「何か百ちゃんと雰囲気似てたね」

百「そうか？俺の頭はあんな飛んでないぞ？」

蛮奇「そうよね。あんたは髪も性格も生まれついでサラサラへアーだもんね」

三人が笑っている

いつの間にか主人公の玉座が寝癖からサラサラへアーに変わってるウウウウ
!!!!!!

蛮奇「何だ、やっぱり仕事の依頼なんじゃない。急に帰るから何か言いづらい依頼内

容なの？」

とりあえず俺はまた三人に話しかけて鯨吞亭に来ていた

小傘「気にせずと言つて！私達万事屋は困つてる人が居たら何でも力になるよ！」

小傘つて万事屋の従業員だっけ？小傘つて鍛冶師兼ベビーシッターじゃなかつたっけ……

零「へえ……そうなんだ……。じゃあ思いきつて相談しちやおうかな……。実はね、あのね、一晩家を開けて帰つたら家がおかしくなつたつて言うか……小説がおかしくなつたつて言うか……。俺の居場所が無くなつて……。」

蛮奇「なるほど……」

小傘「それつて一晩出張に行つたら奥さんが男の人を連れ込んでたみたいな？」

零「そうそう……。知らねえ男が俺のバスローブ着て勝手に冷蔵庫開けて俺のおやつ食つてたあ、みたいな……」

小傘「それはムカつくね！」

零「そうでしょ？ぶつ殺したいでしょ？」

テメエら貞操概念ガツバガバのヤリマン淫乱団地妻をな！ちよつと家開けてる間にあんなヤリチンセールスマン部屋連れ込みやがつて！なに考えてんだコイツ！※既にS A N値は振りきられています

俺は百を睨み付ける

蛮奇「ま、とにかく依頼書作るから名前教えて貰える？」

零「風切零です……」

小傘「名前まで百ちゃんと似てるね！ひよつとしたら生き別れの兄弟だったりして」
完全に主人公の事丸々忘れてんじやねえか！

美宵「止めときなつて。百さんと兄弟にされたんじやお兄さんに迷惑だよ！」

百「おいおい、ひでえなあ……」

み、美宵まで、俺の事忘れてやがる！

文「百より零の方が知的そうです！」

零は文まで……

たった一晩の間に皆、零から百に鞍替えしてんだけど!?どうなつてんだこれ！零さん
との一年間の思い出何処のマンガラケに売り払ったテメエラ！零さんの思い出を！
どうやって塗りつぶしたテメエ！しかもコイツ……

百「まあまあ、呑みねえ、零さんとやら。血なんざ繋がって無くてもさ、酒一杯で繋
がるのが男つて奴さ。困つてんなら何でも言つてくれ。兄弟！」

零さんよりよっぽど主人公つぽいんだけど!?

小傘「さすが百ちゃん！だから大好き！」

蛮奇「よ！男だね、百！」

そして零さんよりよっぽど慕われてるウ!

百「よし!今回は俺の奢りだ!たらふく食え!」

金の景気も流石は百さんだあ!

こうして俺達は目的地もなく歩くのだった

後編

俺は、小説118話分頑張つて来たんだよ！

そんなかには死闘に重なる死闘すらあつたよ！?

小説118話つてちよつとしたタモさんなら暇潰し出来るよ!?!暇潰して良いともだよ!

一方あつちはどっかの漫画のおまけDVD位しか頑張つて無いよ!んなのタモさんのグラサンも立て掛けられないよ!まだまだヒルナンデスだよ!

なのにあの慕われよう、あの存在感、たった一晚俺が居ない間にこの幻想郷を、この小説を零から百に塗り替えちまつたつてのか!?

百「それで、兄弟よ、仕事の方なんだが奥さんを凝らしめたいのかそれとも不倫相手にケジメをつけたいのかどっちだい?」

零「どっちでもねえよ・・・」

百「え?じゃあなんなんだい?」

零でも百でもねえ!この幻想郷を一から始めてやるツつてんだよ!

零「そんなことより、このスマホ一緒に見てくれないか?」

俺はスマホを振り上げて百の頭を殴る

零「ああ！ごめん！118話もあるから重くて手が滑ったア！」

118話の角に頭ぶつけて死に晒せ！

小傘「百ちゃん！」

蛮奇「ちよつと！何やってんのアンタ！」

零「ワン〇ース取りためたHDDだあ！」

俺はワン〇ースを撮りためたビデオで百の頭を殴る

今コイツを生かしておいてはとんでもないことになる

蛮奇「止めろつてのが聞こえ無いか！」

蛮奇が頭を飛ばして俺に頭突きしてきた

零「グフツ！」

そのまま俺は吹っ飛ぶ

蛮奇「私達の百に何をやるの！アンタ最低よ！せつかく百が見ず知らずのアンタのために協力してあげてるのにこんなことするなんて！」

零「ま、待てよ。蛮奇つき。見ず知らずなんかじゃねえだろ？」

蛮奇「誰が蛮奇つきよ！気安く呼ぶな！」

零「う、嘘だろなあ！小傘、ドツキリ撮ってるだけだよな？何時も俺がほったらかし

にしているから仕返ししてるだけ何だよな？」

小傘「出てって……」

零「ツ!？」

小傘「二度と人里に近寄らないで!今度百ちゃんの前に出てきたら許さない!」

零「……」

俺は辺りが真っ白になる

零「ハツ!ま、待てよ蛮奇、小傘!百ちゃん百ちゃんってそいつこそ誰なんだよ!?!俺達は三人そろって万事屋じゃねえのかよ!今までね1-17話分の絆はそんなものだったのかよ!」

蛮奇「何いってんのよ……。私達が一緒に1-17話過ごしてきたのは百よ!」

俺は自分のスマホに映る文章を見る

確かにそこには俺は描写されていなく百が描写されていた

ぜ、全話サラサラヘアール修正かかってるう!

ば、バカな!こ、これは……。だ、誰がこんな……。まさか、あの腐れ作者が!?

慧音「おい、彼は大丈夫なのか?かなり寝癖があるぞ?助けてあげた方が良くないじゃ……」

妹紅「いや、止めとけ。新手の寝癖寝癖詐欺だろ?触らぬ寝癖に縮れ無しだ!」

慧音「でもほっとく訳には・・・」

妹紅「なら百に相談したらどうだ？」

慧音「そうだな」

そのまま二人が言ってしまった

あれから色々回ったが皆俺を忘れていた

俺はこの小説から存在を消されてしまった

今までの事全て、あの男、風切百に盗まれた！

ミスチー「お客さん、少し呑みすぎじゃない？」

俺はミスチーの店で酒を呑んでいた

零「いいんらよ！どうせミスチーも俺を忘れるんだ！」

ミスチー「もう！・・・あれ？」

???「よう、ミスチー。焼酎ね。この兄ちゃんにも」

誰かが酒を呑んで話しかけて来た

???「男には呑まなきややってられない時つてのがあるもんさ。なあ、兄ちゃん。何かあつたのか？」

零「何かも糞もねえよ！全部奪われちまつらよ！今まで命懸けでやったこと全て・・・」

過程から結果まで奪われちゃった……」

俺は今話している相手の顔を見る

そこに居たのは百だった

零「てめえ! どうして!？」

ミスチー「お客さん!？」

百「落ち着けて。仲直りしようじゃねえか」

百が杯を渡してくる

零「ふざけんな!」

俺は木刀を構える

零「蛮奇と小傘、皆に何したか知らねえが全部返して貰う!」

百「返すも何もあれは元々俺がしたことだ。小説だって見たんだろ? この世界がアンタの物語と思っているのはアンタだけ。可笑しいのはアンタの方さ。アンタは端で俺の見るうち何時しか自分を俺とは重ね会わせていた。アンタが今まで小説118話見ていたのはアンタの妄想だったのかも知れねえ」

俺はミスチーの屋台を出て歩く

俺は……何も出来てなんかいなかった

アイツが居る限り俺はモブ以外の何ものでも無かったんだ……

俺はゴミをあさって段ボールで家を作るが雨が振っているので水滴が滴る
こんな時に小傘が居てくれたらな・・・

??? 「あの・・・すいません」

零 「ああ？見せもんじゃねえぞ。モブはモブらしくそこらに転がつとくさ」

俺は寝ながら近付いてくる誰かを追い払おうとする

??? 「あの！聞いてます!？」

零 「だーからうるせえつつつてんだろ!」

俺は起き上がって相手を見る

そこに居たのは椀だった

椀 「やっぱり居た！夢じゃない!」

椀が俺に抱きついてくる

零 「お、おい。俺結構汚れてるよ？汚いよ?」

椀 「良いんです！今はこのままにさせて下さい・・・」

??? 「やっと思つつけた・・・。この世界にもまだ百に染まってない人が二人と一匹と、一

機

俺は話しかけて来た人物を見る

零 「・・・・・・・・・・メイド?」

??「はい。私は岡崎教授により作られた給仕ロボット、るくことです」

るくことと名乗る少女が傘を持って近付いてくる

るくこと「安心してください。例え全員が貴方を忘れても皆様が笑顔で語っていた貴方を忘れる事はありません。寝るときはちゃんとリセットを押しながら電源を切つてますから」

椀「零さんもそうですよね？それは確かに百より無いのかもしれない。たまにしか光らないのかも知れない。何時もふざけてバカやって、寝癖でいい加減だった、鈍感の朴念仁だった。何時も私達を困らせていた。こどもっぽかった。でも、百の圧力で固められた偽りの光なんかより、怒るときは心から怒って、笑うときは心から笑っていた。零さんの居た黒い光の方がずっと綺麗だった。」

椀の言葉を俺は黙って聞く

椀「あの光、忘れてなんか居ませんよね？偽りの数字に何か騙されたりしていませんかよね？なら、もう一度立ち上がって剣を握ってください！貴方は、私のお兄ちゃんなんですから・・・」

俺は少し笑って木刀を握る

零「つたく、無茶苦茶言ってくれるぜ・・・。知らねえ間に主人公奪われるわ、新キアラでるわ、知らねえ所で関係発覚しちまつてるわ。・・・でも、悪くねえ。」

俺の光はテメエラの色が混ざりあつた、鮮やかな黒色だあ！」
俺は地面を木刀で削る

『サラサラヘアーにろくな奴は居ない！』

超発明、ニトロニックギア

俺は家のインターホンを押す

零「あの一、すいません！百君居ますか？」

百『すいません！今風呂入ってるんで、ちよつと待って貰えますか？』

零「ああ、態々いいです、いいです。じゃあここに果たし状置いとくんで……あ、後日来た方がいいですウ！」

いきなり頭をモツプで殴られた

るゝこと「何やってるんですか。遊びに来たんですか、バカなんですか？」

零「いや、だって自分の家だからね！なのに入り辛いし、派手にも出来ないし……」
るゝこと「早くこつちに来てください。何の策も無しに勝てると思ってるんですか？」

るゝことが俺の耳をひっぱる

千切れそう……

椈「わたしだって暇じゃないんですよ！只でさえ仕事サボってる訳ですから！」

零「もし追い出されたら家に住めば良いじゃん」

椀「!?／＼／＼／＼／＼／＼」

るゝこと「これが零さんの口説きテクですか。データに加えて置きます」

椀「つて、加えなくていいですから！」

るゝこと「ハッキリ言つて今の貴方では彼には勝てません」

零「あんれえ？さつき椀が俺に百には負けないつて言つてた時何か黙つて見てなかつたっけ？」

るゝこと「白髪サラサラヘアー身長180のイケメンで人柄も真つ直ぐ、稼ぎも良い貴方のコンプレックスを全て克服した彼にどうして貴方が勝てるんですか？」

零「え？何？お前人のケツを叩きたいのか人のケツから直腸引きずり出したいのかどっち？」

るゝこと「直腸でケツを叩いているんです」

俺が溜め息を付いているとドアが開いた

百「すいません。遅くなりました。頭、洗つてたもんで」

そこに居たのは頭を物理的に持ちながら洗っている百だった

零「え？何あれ？」

百が家に入った後の開口一番がこれだった

椀「そう、風切百とは小傘さんを気づかつた蛮奇さんの依頼で作られたにとりさんが

作りし代理用万事屋リーダー、零さんの弱点を全て克服したパーフェクトな風切零、超合金制完全体、風切零2号機です！」

零「ん？待って待て。何でそれが俺に成り代わろうとしてんだ？」

椛「それが・・・私にも分からなくて・・・」

るゝこと「今日、立ち上がると既にこの状態でした」

俺は家を見る

るゝこと「何処にいくんですか？」

零「ああ？決まってんだろ？皆の記憶を取り戻す！」

そして来たのがプリズムリバー・三姉妹の屋敷である

椛「あの・・・何でここに？」

零「勘」

椛「ええ・・・」

俺達は屋敷の扉を開けて入る

声が聞こえる

どうやら居るには居るようだ

俺達は階段を登って二回に上がる

声が聞こえた部屋に入る

そこに居たのはプリズムリバー・三姉妹とミスチー、文に小傘に蛮奇、百だつたリリカ「ええ!?! 誰!?!」

ミスチー「あ! あの時のお客さん!」

文「あやや、椀、居ないと思つたらそこに居たんですか・・・」

椀「え!?! ホントにいたんですけど・・・。どうなってるんですかるゝことさん?」
るゝこと「私達は万事屋下つ端鬼機です。何か困つた事はありますか?」

椀「無視ですか!?! てか、下つ端鬼機つて何ですか! まさか下つ端つて私じゃ無いですよね!?!」

文「何言ってるんですか。椀は下つ端の白狼天狗でしょ?」

椀「文様まで・・・」

椀が部屋の隅でしよげ始める

零「だ、大丈夫だつて。お前は俺の大事な友達だから」

椀「零さん・・・」

椀が涙を拭いて抱きついてくる

そして俺も抱き返す

蛮奇「ねえ、私達何見せられてるの?」

メルラン「なかなか愉快な人だね」

ルナサ「・・・困ってる事ならある」

リリカ「姉さん!？」

ルナサの言葉に皆の視線がルナサに行く

ルナサ「カラオケが壊れて動かない・・・」

ルナサが後ろのカラオケを指差す

小傘「安心して!百ちゃんがきつと何とかしてくれるから!」

零「機械の修理か・・・。俺やったことねえんだよな・・・」

るゝこと「ここは私に任せて下さい」

零「え?」

椀「るゝことさんは壊れた機械と対話して直すことが出来るんです」

零「何だそのどつかの漫画にありそうな設定・・・」

椀「てか既にタグで銀魂ネタってあるじゃないですか。ならいつそ弾けましようよ。

この話自体銀魂パクってますから」

零「パクりじゃねえ!パロディと言え!」

蛮奇「そもそも危ない話を止めなさいよ!」

さて、さつきからるゝことと百がバチバチやってる訳だがそろそろ決着は着いたかな

?

ミスチー「悲しみを知り独りで泣きましよう♪そして輝くウルトラソウル♪」

『ハイ!』

ま、負けた

てことで次!

白玉楼で幽々子のご飯を作る依頼だ

妖夢「幽々子様がたまには私以外の手作り料理を食べたいと……。料理が得意な百さんならと思っ呼んだのですが……。」

零「オーケーオーケー、分かった分かった。幽々の惑星ジエネシスパターンね。大丈夫だよ俺達に任せておけば」

蛮奇「オイ! アンタらしい加減にしなさいよ! 何時まで私達の邪魔するつもりよ!」

椀「どうぞ。オムライスです」

零「オィィィィ!!! 一つの間にか椀が料理作ってたんだけど!? しかも一人前! あれじゃあ幽々子にやたんねえぞ!」

幽々子が一口食べるとそのままスプーンを置き首を振る

零「ああ! やっぱり駄目だ! やっぱ幽々子の舌を肥やすには妖夢以上の腕がねえと

！」

次に百が何か稲〇浩志顔を変えてステーキ三十人前を出す

幽々子がそれを食べると盛大な丸を腕で作った

小傘「流石百ちゃん！一瞬で胃袋を掴んじゃった！」

零「待てエ！百ちゃんじゃねえよそれ！万事屋リーダーじゃないよ！良く見て、別のリーダーだよ！」

百「それじゃあ皆でそして輝くウルトラソウル♪」

『ヘイ！』

零「何でさつきからウルトラソウルで閉めてんだ！つか、椀もるゝことまで何で合わせてんだ！」

そして場所はまたまた変わって紅魔館

???「止めなさい！」

着物に赤髪でメガホンを持った女性が叫ぶ

彼女は小兎姫と言うらしい

稔子「来ないで！飛び降りるわよ！」

レミリア「どうやら秋が去りそうでこんなことをしているらしいわ。全くいい迷惑

よ・・・」

零「ブルー入ってんだけどちょっと一人になりたいからあっち行ってくれない？」
俺はカルピスゆ飲み干して話しかける

蛮奇「危ない奴行ったア！」

百「落ち着けよ。死ぬ前に茶でも付き合ってくれねえか？」

蛮奇「百も行ったア！」

るゝこと（零さん。直接対決です！ここは絶対に負けられませんよ・・・）

稔子「それ以上近付かないで！ほっといて！」

百「ほっといてほしい奴はこんな派手な死に方選ばねえさ」

零「最後に真つ青な空がみたかったのさ。俺の心を写した空を・・・」

椀「零さん全く説得するつもりありませんよ!?!」

百「話してみろよ。知らねえ奴だからこそ話せる事もあんだろ」

零「お前に話しても・・・」

咲夜「アンタじゃないわよ！」

椀達の近くに居た咲夜が叫ぶ

レミリア「だつたら私が聞いて上げる！これも上に立つものの義務よ」

咲夜「お嬢様!?!」

稔子「後私にもなんだけど冥土の土産にするから話してもみなさいよ」

蛮奇「アンタもかい！」

小兎姫「私にも話してみて！」

椀「もう良いですよ！」

零「うるせえ！優しい言葉をかけんじやねえ！泣きそうに何だろうが！最後におめえらみていに俺なんか知らなくても優しくしてくれる奴らに会えて良かったよ・・・」

俺は縁に登る

るゝこと「・・・」

るゝことが俺をじつと見る

俺は稔子に走りよる

零「ああ、ごめん！自分の心が重くて体が滑ったア！」

俺が百を蹴ろうとすると稔子が割り込んできた

稔子「そのバカを蹴っていいのは私だけよ！」

蹴りが稔子に当たって稔子が落ちた

百「零、これでお前さんはしまい!？」

俺は飛び降りて紅魔館の壁を走る

そのまま稔子をキャッチして地面にぶつかった

ヤクザじゃない！

目を覚まして起き上がる

椀「あ、起きました？」

椀が顔を覗かせる

零「ここは・・・？」

椀「私の家です」

俺は辺りを見渡す

零「るゝことは？」

椀「人里に買い物に」

零「!？」

俺は急いで人里に走り出した

今るゝことら俺の味方と百に知られている今人里に行ったらどうなるかは一目瞭然
だ

零「まさかそれが目的じゃねえよな・・・ッ！」

人里に入ってあちこち見渡す

鈴奈庵や寺子屋、甘味処などあちこち探したが居ない

とうとう残ったのが路地になった

俺は路地に入る

そこに居たのは両足と左腕を無くし頭に穴が開いたるゝことと喉にモツプが刺さつた百だった

るゝこと「れ、い……さん。やっぱり、貴方は……」

百「ああ？」

俺は百の後ろに回り込み金○を握る

金○を引きちぎつて百の目と口に突つ込み木刀で壁に叩き付ける

零「ツたく！ばか野郎！テメエ何でこんな……。待つてろ！今すぐにとりの所へ！」

俺は急いでるゝことを背負いにとりの工房に急ぐ

途中何度も声をかけるが返事がない

その次の朝にとりの工房では

文「では、にとりさん、この男を見つけたら連絡を……」

にとり「分かったよ。さ、行った行った！」

にとりが俺を探す文を追い払う

どうやら百は本格的に俺を潰すようだ

にとり「……金槌とバルブを取ってくれるかい？」

俺は言われた二つをにとりに投げる

にとり「良いのかい？文を気絶させなくて」

零「安心しろ気絶させなくても百をぶつとばしや解決だ。にとりの方こそ俺を匿って

大丈夫なのか？」

にとり「君がるゝことをやったと聞いていたけどそれにしてもあまりに真剣に修理を頼みに来たしね。それに、ロボットは人より信じ続ける。るゝことが信じた君を半分親の私が信じなくてどうする」

俺は溜め息を吐いて工房を出る

にとり「相手はかつての家族、仲間。君に勝ち目は果たしてあるのかね」

工房の入り口に持たれていた槌が俺に近付く

零「そんなの……」

槌「関係ありません！」

俺達は人里の家の屋根から皆を見る

零「さて、とうとう二人だが槌、一足す一は二だと思おうか？」

椀「いいえ」

零「だよな……。さあ!これより始めるは下剋上!カチコミ何ざちやちなもんじや断じてねえ!ヤクザもビックリな大舞台だ!」

俺が叫ぶと下に居た全員がこちらに気付いた

鈴仙「アンタよく顔を出せたわね!一度だけ聞くわ!ホントにるゝことをやったのは貴方!」

鈴仙が前に出てくる

零「お前らの信じるおてんとさんが言うならそれでいいんじゃないやね?オラアその光を飲み込んで全部元に戻すだけさね」

人里の全員が家に入ってくる

零「いいか、椀。俺がどうなってもお前は走れ」

俺と椀は丸薬を噛み砕く

すると椀が大狗になり俺の分身を背負って走り出す

俺は皆が行ったのを確認すると立ち上がる

咲夜「やっぱり残ってたわね」

咲夜が後ろからナイフを突き付けてくる

零「おいおい、物騒だぜ?メイドなら笑顔で接待してほしいもんだ」

咲夜「安心しなさい。これが紅魔館のメイドの接待よッ！」

咲夜がナイフを俺の首元に刺そうとすると妖夢が止めに入った

咲夜「……………何をしているのかしら？」

妖夢「この人は私の獲物です。邪魔しないで下さい」

妖夢がこちらを振り向き刀を向ける

妖夢「本当に、貴方がるゝことさんを…………？」

零「だーから、お前が信じるおてんとさんがそう言ったんだろ？」

俺は向けられた刀を素手で握る

妖夢「ッ!？」

妖夢が少したじろぐ

咲夜「もう良いでしょ？ さあ！ 早く退きなさい！」

鈴仙「それは貴方もよ」

咲夜の頭に指を向けて鈴仙がそう言った

零「おいおい、仲間割れか？」

鈴仙「いえ、私は提案しに來ただけよ。アンタを樽に入れてあらゆる角度から刺して死んだらソイツが殺ったことにしようってね」

零「お前そりゃ只の集団リンチだろ！」

俺は屋根から飛び降りて走り出す

咲夜「クツ！」

俺の背後にナイフが現れる

もう一度目の前を見るとそこには美鈴が居た

咲夜「美鈴！貴方何してるの！」

美鈴「え？え？」

鈴仙「いえ、そんなことより……」

鈴仙と妖夢が俺を見る

妖夢「美鈴さんを……庇った？」

俺は背中に刺さったナイフを手の届く範囲でぬく

零「美鈴、怪我は無いか？」

美鈴「え？あ、はい……」

俺は全員が呆然としている内に逃げる

零「はあ、はあ、百の奴、何処に……」

走りながらキョロキョロしているとある違和感に気付いた

零「人が……居ない？」

気が無い

俺を探しているのなら居ないのは可笑しいのだが……
つか、ヤバい

血イ流しすぎた……

妹紅「生まれ！」

何時のにか大勢に囲まれていた

零「あらら、どうやら誘い込まれたみたいだな……」

背後には妖夢、咲夜、鈴仙

前には妹紅……どうやら逃げ場は無いらしい

咲夜「貴方……何してるのよ……」

妖夢「その腰の刀もろくに握らずに……」

鈴仙「それに私達と戦っていると言うよりまるで……」

零「どうやら、俺はお前らを甘く見てたらしいわ……。るくこと一人のためにここまでいろんな奴が動くんだ。紫も藍も……良く作ったもんだ」

俺はその場に座る

妹紅「何を……」

零「さ、煮るなり焼くなり好きにしな！」

木刀を投げ捨てて目を瞑る

妖夢「ど、退いて下さい。この人は私の獲物と言ったでしょう」

咲夜「貴女こそ、聞き分けが無いんじゃない？わたしがやる」

鈴仙「なんで、皆引かないのよ。お願いだから退いて・・・」

三人の声と手が震えているのが分かる

俺は後ろを向く

零「・・・流石に、そんな泣きつ面の奴に殺られるのは嫌だぜ？」

涙を浮かべる三人に言つてから妹紅の後ろに居る百を見る

百「おいおい、女泣かせるたあ、罪な男だね。だが、心配いらねえよ。尻は俺が持つ
さ」

百が木刀を抜く

百「さあ、皆！幻想郷の敵、俺達の敵の最後を見守つてやんな。こいつで終めえだよ、
零」

俺は少し笑う

零「ああ、終めえだ」

次の瞬間全員が百に武器を向ける

百「・・・どう言う事だ？」

零「何故俺が一人で走り回つてたと思う？」

俺はポケットからとりから貰ったステイックを取り出す

百「……………」

零「これはにとりから貰ったお前の洗脳を解く機器何だけだよ、使うにや範囲を作る必要がある」

百「まさか!?!」

零「ああ、椀に走って貰ったのは陽動でもなんでもねえ。この人里全域に洗脳を解く結界を張るためさ!」

妹紅「それにしては大胆だったな」

零「シツシツシ、の方がカモフラージュ出来るのさ」

妹紅「確かに」

俺は投げ捨てた木刀を拾い百を見る

零「形成逆転だな」

百「ハハハ、やられたよ。だが、俺、いや、太歳星君様はこのままでは終わらない」
そう言うとうと百が霧になる

百『いづれ、この幻想郷は滅びるぞ』

そう聞こえたと思ったら俺は目を覚めした

零 「あれ？俺寝てたのか・・・？・・・どんな夢だったつけ？」

トリック・オア・トリート

零「ハロウィン？」

慧音に寺子屋に呼び出され俺と小傘はその言葉に？を浮かべた

慧音「ああ、香霖堂にあった雑誌にあつてな、良ければ

人里全域で催そうと思つてな」

なるほど、確かにあそこなら外の雑誌も売られている

香霖堂はコーりんが経営している道具屋である

俺も無縁塚で拾い物をする時によくコーりに会うし何なら買い取りとかもして貰う

ちなみに本名は森近霖之助で魔理沙がそう呼んで居たので俺も呼んでいる

小傘「零ちゃん、ハロウィンって何？」

零「ん？起源はケルト人の祭りだったけどイギリスでこの月の三十日になると吸血鬼とかフランケンシュタインとかが人間に交じって街に現れる訳、んでソイツらに襲われないように自分も化けるってのがあったんだけど今じゃお菓子を子供達が仮装して貰いに回るイベントになったわけ・・・だったっけな？」

小傘「けると? いぎりす?」

イギリスを聞いたことが無いのか頭を抱える小傘

慧音「イギリスと言うのは外の世界のはるか西方にある国さ」

小傘「へく……」

慧音「まあ、そう言う事だから零と蛮奇でお菓子の用意を頼む。小傘は仮装の用意を」
て事で今は自宅に戻ってクッキーを作り始めた

蛮奇「事情は分かっただけど料理ならアンタだけで大丈夫じゃない?」

藍「何を言っている。この人里にいたい何人の子供が居ると思つて居るんだ。それに私の可愛らしい橙も参加するんだ。量も質もちゃんとしたのでないとな」

藍の親バカはほつておいて俺はクッキーにチョコを塗る

零「はいはい、喧嘩する前にお菓子作ってくれ」

俺がそう言うと二人は黙りこくつてお菓子を作り始める

そして次の日

『トリックオアトリート!』

俺と蛮奇は寺子屋に来て慧音とハロウィン仕様に寺子屋を変えているとチルノ達が入ってくる

零「お、来たな。あれ? お前ら仮装は?」

俺が聞くとチルノが笑い出す

チルノ「フツフツフ、アタイは気付いてしまったんだ。幻想郷にいる奴らは年中仮装しているようなものだ！」

言われてしまえば確かにそうだな・・・

ルーミア「ただ衣装が無いだけなのか」

チルノ「あ、こら！ルーミア！」

零「何だそう言う事・・・。んじゃま、衣装は用意してるから好きなを選びな」

ミスチー「零さんは仮装しないの？」

零「ん？俺の仮装はこれ」

俺は狐の面と耳、尻尾を見せる

リグル「狐？」

零「そうそう。これを付けて妖気を纏えばほら」

大妖精「妖狐ですね！」

零「その通り！」

俺は他の皆の仮装を見る

慧音が魔法使い、小傘がお化け、蛮奇がろくろ首、藍が・・・何だろ？キョンシー？

??? 「トリツクオアトリート！」

そう考えて居るとちなみに橙がパンプキンの仮装で入ってくる

藍「ちえエエエエエエん！」

藍が橙に飛び付こうとするが俺はそれを止める

藍「何をするんだ！」

零「そりやこつちの台詞だ。やるなら家でやりなさい」

橙「……あの」

零「ん？ああ、はい。お菓子」

俺は橙にお菓子を渡す

橙「ありがとうございます！」

俺は橙を撫でてから離れる

藍「橙はやらんからな？」

零「別に狙ってねえよ……」

俺はそう言つて縁側に座る

慧音「……今日はありがとうな」

しばらくして隣に慧音が座る

零「あ？大丈夫大丈夫。俺も楽しいし」

慧音「今日だけの事じゃない。お前が、この幻想郷に来てからずっと助けられてばか

りだ。私が知らない所でもずっと誰かを救ってきたんだろ？」

零「俺はやりたいと思つたことを行動に移しただけさ」

慧音「それができる者はそうそう居ない」

俺は一度だけ慧音を見た後ポケットからチョコクッキーを渡す

零「ハッピーハロウィン」

慧音は最初躊躇っていたがすぐに笑つてクッキーを受け取る

妹紅「お、何だ？良い雰囲気だな」

慧音「からかうんじゃない！私は今までの事に零を言つていただけだ」

零「そうそう。ほら、妹紅にもあるぞ」

妹紅「ありがとう。でも出来るなら酒が良かったな」

零「安心しろ。俺の独断と偏見で一部の奴には酒入り菓子だ！これがトリックアンド

トリート！」

慧音「そうか！そこに直れ！説教だ！」

零「ゲエツ！逃げろ！」

慧音「待て！」

妹紅「全く・・・零が居ると騒がしくてしかたないね」

こうして何気ない日常が今日も過ぎていく

東方星蓮船

新たな異変は宝探し?夢の国のネズミーマウス!

ハロウィンが終わりしばらく経ったある日、俺は無縁塚で何時も通り物を漁っていた

小町「アンタも懲りないねえ・・・」

零「まあ、向こうの物があるからなく。懐かしいのさ。・・・ん?何だこれ?」

俺はキラキラ光るものを見つけて拾う

何やら宝玉の様だが社の様な装飾がほどかされている

小町「おや?それは宝塔じゃないかい」

零「宝刀?これの何処が刀何だ?」

小町「宝刀じゃなくて宝塔!刀じゃなくて塔さ。今なら確か毘沙門天の代理が持つてたんじゃなかったかな・・・」

零「毘沙門天の代理?・・・まあ、取りに来るまで預かるか・・・。んでさ、聞いたいことがあるんだけど・・・」

小町「奇遇だね。アタイもだよ」

俺と小町が空を見る

零小町 「あの船、何（だい）？」
空には空飛ぶ大きな船があつた

一方その頃守矢神社では・・・

早苗 「神奈子様く諏訪子様く」

早苗が神奈子と諏訪子を探していた

神奈子 「何だい？どうしたんだ早苗」

早苗 「あ、神奈子様見てください！」

早苗が取り出したのは一つの未確認飛行物体、UFOである

早苗 「これがあちこちに飛んでるんです！」

神奈子 「異変かい？」

早苗 「かもしれません」

神奈子が早苗を見る

神奈子 「異変解決を試みてみて顔だねえ」

早苗 「はい！」

神奈子 「よし、行っておいで早苗」

早苗 「はい！」

そのまま早苗が部屋を出て走り去る

神奈子「・・・これで良いんだろ?」

神奈子が隠れていた諏訪子に話しかける

諏訪子「うん。ありがとう」

神奈子「あの子が危険な目にあっても?」

諏訪子「それはあの子が一番分かかって着いてきてくれたんだよ?今さら言ってもね
。・・・それに、ここに来る前よりあまり心配はないんだよね。神奈子もそうじゃな
い?」

神奈子「ああ、そうだったね」

神奈子を早苗の後ろ姿を見ながら少しの間家族であった少年の顔を思い浮かべるの
だった

零「UFO狩りじゃアアアアアアアアア!

俺が空飛ぶ大きな船を追っていると何故かUFOを見つけ拾った

そしてこれを売れば金になると思つて集めている

もちろん船を追いながらだ

早苗「あれ?先輩、何してるんですか?」

俺に気付いたのか早苗が飛んできた

零「おお、早苗か。今はUFO採りながらあの船を追ってる所さ」

早苗「先輩も異変解決に乗り出したんですか!？」

零「異変?・・・あ、よく考えりやこれ異変か・・・」

今更ながら気付いたがまあ、乗り掛かった船なのでそう言うことにしておこう

零「まあ、そうだな」

早苗「じゃあ一緒に行きましょう!」

零「ん?まあ、別にいいぞ」

こうして俺達の協定は結ばれた

???「全く、こんな忙しい時に人の船の後ろをチヨロチヨロと、何だい君は?」

そこに現れたのはネズミ様な少女だった

零早苗「○○○○!？」

???「・・・は?」

早苗「貴女、某夢の国のネズミーマウスの彼女さんですよね!？」

???「それが誰かは知らないが全くの別人だ!私の名はナズーリン。毘沙門天様の遣い

「キ

零「あ?毘沙門天?ならこれ」

俺はナズーリンに宝塔を見せた

ナズーリン 「な!?!ご主人、また無くしてたのか・・・」

ナズーリンが溜め息を付いて近付いてくる

ナズーリン 「じゃあ、その宝塔と零の持っている宝を渡して貰うよ!」

ナズーリンが俺の持っていたUFOと宝塔が奪われた

ナズーリン 「じゃあね、零。協力感謝するよ」

そう言うとなズーリンが船に飛んでいってしまった

小傘のビツクリ大作戦、入道使いは怒り心頭

俺達は急いでナズーリンを追っていた

早苗「先輩」

零「ん？」

早苗に呼ばれて振り向く

早苗「さっきのナズーリンって子、何故先輩の名前を知ってたのでしょうか？名乗ってもいないのに・・・」

零「そう言われりや妙だな。まあ、そういう事がよくあるからあまり気にしてなかったけど」

早苗「先輩が記憶を無くす前の知り合いって事ですか？」

零「かもな」

だいぶ船に近付いたその時だった

小傘「おどろろけけ」

小傘が上から降ってきた

小傘「あれ？零ちゃん。どうしてここに？」

零「そりゃこっちの台詞だ。何やってんだ？」

小傘「霊夢がね、宝集め手伝いなさいって」

つまりは霊夢から依頼があったわけだ

今度守矢神社が幻想入りした時の分と合わせて依頼料徴収しねえとな・・・

零「よし、じゃあそれは俺が引き継ぐから小傘は昨日あった簪修復の方を頼む

小傘「うん！」

それだけ言う和小傘は家に帰っていった

早苗「そうこうしている間に船に追い付きましたよ」

俺達は甲板に降りて辺りを見渡す

零「遠目でもだけど近くで見たらやつぱデケエな・・・」

???「誰ッ！」

俺はいきなり大きな何かに殴られた

早苗「先輩!？」

???「あら？誰かと思つたら裏切り者じゃない」

俺は立ちあがって犯人を見る

法衣を着た女性とピンクの・・・雲親父？

いや、そんなことより・・・

零 「裏切り者とは言うじやねえか。てめえ何者だ！」

??? 「忘れたの？まあ、良いわ。教えてあげる。私は雲居一輪、そして隣の雲は雲山。アンタが地底に封印した妖怪よ！」

零 「俺が・・・封印した？」

俺にそんな力はあるのだろうか？

憑依の力がある今ならある程度出きると思うが・・・

一輪 「・・・あら？よく見たらアンタ飛宝の破片を持つてるわね？」

零 「飛宝？それってこのUFOの事か？ナズーリンも言ってたがこりや一体・・・」

一輪 「今さら、姐さんを復活させてどうするつもり!？」

零 「姐さん？」

一輪 「いや、そんな事どうでも良いわ。アンタがそれを渡して帰ってくればね！」

雲山が殴りかかってくる

俺は避けて木刀を持つとうとして早苗に止められた

早苗 「先輩は先に行ってください。ここは私が何とかします！」

俺は早苗の顔を見てから木刀を収める

零 「気を付けろよ」

俺は一輪を抜けて船内に入る

一輪「行かせない！」

一輪が追いかけてよとしますが早苗に止められる

早苗「先輩の邪魔はさせません！」

一輪「貴女もアイツの仲間よね？なら、先ずは貴女から倒す！」
雲山が早苗に殴りかかる

そして船からは一つの煙が上がるのだった

夜叉の性

俺は一輪を早苗に任せて船内を探索する

零「たく、どうなつてんだ。俺が妖怪を封印した？どうしてこうも言つて知らない知り合いがいきなり因縁かけてくんだよ。萃香も確かそうだったし……」

ナズーリン「まあ、君は色んな女に手を出しまくつてたしね」

零「やな言い方すんじゃねえよ。つか俺はまだ童て……つて、何で当たり前の様にいんだテメエ！」

俺は隣を歩いていたらナズーリンから離れる

ナズーリン「安心してくれ。私は一輪や村紗と違って君を怨んじやいない。そもそもが彼女達の勘違いな訳だしね」

零「じゃあ何故それを一輪とその……村紗？に言わない？」

ナズーリン「君が言つたんだろ？怨みの的は俺だけで十分だ。アイツらに人は殺させないって」

俺は呆れた顔をしているナズーリンを見る

嘘は言っていないらしい

ナズーリン「勿論雲山や私のご主人もそれは了承している」

零「あ？雲山？そいつさっき俺に思い切り攻撃してきたぞ？」

ナズーリン「あれは芝居さ。雲山は一輪の親代わりみたいな物だしね」

俺はまた歩き出す

すると足元に錨が突き刺さった

???「おい、ナズーリン。お前の隣に居るのはまさかと思うが零じゃねえのか？」

殺気の籠った声に少したじろぐ

ナズーリン「ああ、そうだよ村紗」

ナズーリンが答えると村紗が舌打ちを打つ

村紗「ナズーリン、そいつは聖を封印するのに賛成した裏切り者だぞ？忘れたのか？」

ナズーリン「ああ、そうだったね。だが、零にも理由はあったんだ」

村紗「それは、聖を封印して私と一輪、雲山を封印した理由になるのか？」

村紗が錨を引っこ抜いて手に持つ

零「・・・ならねえよ」

ナズーリンが驚いてこちらを振り向く

零「どんな理由があるうともお前の日常を奪っちゃったのは確かだ。だからお前は黙ってここで待ってろ。俺が全部元に戻してやる」

村紗「全てを奪ったお前が全てを元に戻す？ふざけるのも大概にしろ！」
村紗が錨を投げてくる

俺はそれを避けるが床の破片が頬をかする

ナズーリン「どうして君はこうも状況を引つ掻き回すのかな!？」

零「悪い悪い。でもな、ナズーリン。俺は鬼だ。約束は守る」

ナズーリン「散々天邪鬼って言っておきながらよく言うよ」

村紗「死ぬッ！」

俺は村紗の錨を掴む

零「おいおい、仮にも女の子なんだから言葉にや気を付けようぜ」

村紗「うるさい！この口調はお前に影響されちまったんだよ！」

零「ああ!？人のせいにするんじゃないやねえよ！」

俺は錨を村紗に向けて投げる

ナズーリン「で、実際どうするんだい？」

零「……仕方ねえ！今は一旦気絶させる！」

村紗「やってみろ！」

村紗が突っ込んでくる

それを俺はギリギリで避けて木刀の柄で村紗のみぞおちを打って村紗を気絶させた

ドジツ虎武将の毘沙門天

俺が甲板に出ると雲山の上で早苗と一輪が眠っていた

ナズーリン「雲山、お疲れ」

ナズーリンの言葉に雲山が親指を上げる

この親父、実は結構ユーモラスあるんじゃないか？

それにしてもだ

零「何だここ……。空は赤いし何か禍々しいし……」

ナズーリン「ここは魔界だよ？禍々しいのは当たり前さ」

零「魔界って……。その聖って奴は一体どんなことをやらかしたんだよ？」

俺達は船からは飛び降りて飛びはじめ

ナズーリン「……。人と妖怪の仲人さ」

零「は？何でそれで封印されんだよ？」

ナズーリン「昔じゃ妖怪は抹殺対象だったのさ。今の幻想郷なら昔みたいなのは起こらないだろうし封印も弱まってる頃だろうしね」

俺は目を一度瞑ってから気になることを聞いてみる

零「なあ、昔の俺はお前からからしたらどういいう存在だったんだ？」

ナズーリン「そうだね……。一言で言えば半端者かな」

俺は目を細める

ナズーリン「妖怪でもあり人間でもあり神でもある。何者であり何者でもない」

零「俺が一輪と雲山、村紗を封印したってのは？」

ナズーリン「何時も通りに妖怪に説法をしていた時に京の僧達私達を封印するために攻めてきた。だが、聖は自分が封印される代わりに私達を助けたのさ」

???「そして、聖を助けようと動きだそうとした村紗達を貴方が聖を復活させるまで地底に封印したんです」

そこに居たのは金髪の赤い法衣を来た女性だった

ナズーリン「全くと主人、宝塔を見つけて来たぞ」

???「あ、すいませんナズーリン」

零「ご主人？てことはあいつが毘沙門天の代理……」

???「貴方の境遇は知っています。私は寅丸星。毘沙門天の代理であり命蓮寺の御本尊です」

星が宝塔を受け取って槍を持つ

星「久しぶりに貴方と手合わせしてみたいですが今は聖の復活を優先しよう」

零「おい、何か途中から口調変わってなかったか？」

ナズーリン「ご主人は普段はゆるふわのドジツ虎だが本気を出そうとすると口調が武将のようになる所謂二重人格さ」

星「零、お前の集めた飛宝を」

零「飛宝ってこれの事か？これは一体・・・」

俺はUFOを見る

星「それは飛倉。亡き弟様が残した秘宝」

零「てことはこのUFO倉の破片って事か」

ナズーリン「まあ、そういう事さ」

俺はUFOをみるがそこに居たのは白い蛇が乗った木片だった

零「何が何だかよくわかんねえけどホラよ」

俺は飛倉を投げる

星「感謝する」

星は槍を回し始める

星「飛倉よ！今こそ、聖を封印せし結果を解除せよ！」

星が叫び槍を前に突くと空が割れた

零「結果!？」

星 「さあ、行け！」

零 「おう！」

俺は先に進み始めるのだった

??? 「ケケケケケケ・・・」

何処からか笑い声が聞こえるのも知らずに

いざ南無三!

こうして零は最奥に着いた

さつきとは何か違う

零「禍々しさが感じられない。それに何か……」

???「ああ、法の世界に光が満ちる」

零が辺りを見ると目の前に法衣を着た女性が降りてくる

零「お前が、聖……」

聖「零、貴方がこの世界を解放してくれたの?」

零「……違う。解放したのは星達だ」

聖「久しぶりに力が沸いてきました。ありがとうございます」

零「別に礼を言われるようなこととはしてない」

聖「いいえ、何れ外でお礼をさせていただきます」

零は聖を見る

零「一様聞いとくけど聖は外で何をするんだ?」

聖「人間と妖怪の平等を願います」

零「平等？」

聖「虐げられた妖怪達を救うのです！それが魔法使いの私に与えられた使命」

零「使命ねえ……」

聖「どうかしました？」

零「ケケケケケ、それは無理な話だ。聖白蓮！」

聖「……零？」

零「今のこの時代は妖怪が人間を虐げる大妖怪時代なのだよ！そもそも人間でないお前が平等を説いたところで無駄だと思うがね」

聖「それでも必ず平等を願う者は居るはずですよ！」

零が下卑た笑みを浮かべる

零「それは俺が殺したあの妖怪どもの様にか？」

聖「あの妖怪どもってまさか!?!……私が寺に居た頃と零は人間の風潮に当てられて変わってしまったようですね。つまりは人間は変わっていない。誠に愚かで、自分勝手であるッ！いぎ、南無三！」

聖がレーザーを撃つが零は木刀でそれを防ぐ

零「ケケ、そんな攻撃俺には効かん！」

聖「寺に居たときの貴方は妖怪でありながら人にも優しく接する人でした。それなの

に何故!？」

零「そんなの只の気紛れだ！人間と言う弱者への憐れみ、優越、そんな言葉が相応しいか……」

零は聖の背後に周り込む

零「死ねえ！」

零が聖の心臓に木刀を刺そうと星が槍で受け止めた

星「何をしているんだ零！」

零「ケケケ、邪魔が入ったか……」

零が下を見るとそこには早苗、ナズーリン、一輪、雲山、村紗がいた

村紗「あのやろう！やっぱり聖を殺すつもりでッ！」

一輪「姐さん！今助けにッ！」

二人が飛ばうとするとナズーリンが止めた

村紗「なんで止めるナズーリン！」

一輪「アンタ、アイツの肩を持つの!？」

ナズーリン「ああ、そうさ。零なら……本物の零なら、絶対に聖を殺そうとしない

！」

村紗「何故分かる!？お前も見ただろ！零は聖を殺そうとした!」

ナズーリン「零は私が認めた男だ！それに二人とも零に封印された事を根に持つてるみたいだがあの時一番皆のことを考えていたのは零だ！」

一輪「どういう事？」

ナズーリン「あの時聖の封印に抵抗していたら私達は殺されていた。かといって聖の封印が始まれば二人とも助けに向かつて殺される」

村紗「私達が人間に負けるって思ってたんのか!？」

ナズーリン「違う！確実に二人とも聖の封印を推薦した人間を殺すだろ？その時点で今までの君たちは死ぬんだよ」

村紗が錨を落とす

村紗「じゃあ何だ？私達は今の今まで私達を思ってくれていた相手を怨んでたのか？」

ナズーリン「……ああ」

一輪「そんな……」

二人が膝を崩す

早苗「何が何だか分かりませんが恐らく先輩は操られているんです」

村紗「何!？」

一輪「それは本当!？」

早苗「はい。この感じ前に感じたことがあるんです。あれは確か諏訪子様が暴走された時と同じです」

ナズーリン「と、言うことは誰かが零を操っているんだね?」

早苗「はい」

早苗の返事にナズーリンは目を閉じる

ナズーリン「(ここには隠れられる場所なんてない。なら奴は何処から零を操って……。操る……。待て待て何も意識を乗つとる必要は無い。……。そうか!)
村紗!一輪!零の影を狙え!」

村紗一輪「(おう(分かった)!)」

二人が零の影に攻撃する

零「ギヤアアアアアアアア!!」

すると零が苦しみ始めた

そして零が気を失うと影から黒い人影が現れた

???「ネズミ風情が良くこの俺、十二怪異の影法師様の存在に気付いたな」

ナズーリン「ネズミを嘗めていると死ぬよ?零を操れるとしたら影の中しか考えられないしね」

早苗「諏訪子をあんな風にしたのも貴方だったんですね!」

影法師「ケケケ、あれは良い被験体だった」

影法師が笑うと後ろから星の槍が飛んでくる

星「貴様だけは許さん！」

影法師「おく、コワイコワイ。ここは撤退する方が吉かね」

そう言つて影法師は消えた

正体不明のお祝いパーティー

さて、皆に質問だ

俺は今回村紗としか戦つてない筈なのに何故永遠亭に居るのでしよう

しかも鈴仙が離れてくれません

鈴仙「零さん動けますか？ご飯食べれますか？」

零「おう、鈴仙と永琳のおかげで大分良くなった」

鈴仙が嬉しそうに笑う

俺はわきに置いていた新聞を取る

見出しは勿論聖達の事だ

かなり誇張はされているがまあ、読めなくは無いので続けて読むことにする

零「人里に命蓮寺を開いたのか。なるほど、人妖問わずねえ・・・」

俺は鈴仙を見ると鈴仙はキョトンとした顔でこつちを見る

零「そういや今日が異変解決の宴会だよな？」

鈴仙「あ、はい。零さんも出席するんですか？」

零「うくん・・・そうしたいけど俺彼処の若干二名に毛嫌いされてるからなあ・・・」

そう考えていると俺はいつの間にか鈴仙に縛られていた

零「え？何してんの？」

鈴仙「このままじゃ来そうに無いのもう無理矢理連れていきますね」
こうして俺は鈴仙に引つ張られる形で命蓮寺に赴くのだった

既に命蓮寺では一定の賑わいを見せていた

鈴仙「さあ！行きますよ！」

零「だあもう分かったよ！」

俺は命蓮寺の扉を開く

そこではまあ、何時も通りに皆呑んでは暴れている

萃香「おお零！遅いじゃないか。ほら呑め呑め」

零「ウプツ！」

鈴仙「零さん!？」

???「兄貴から離れろ〜！」

その時上の方から誰かが降りてきた

萃香「誰だあ？」

俺が見たのは六つの赤と青の

??? 「私は封獣ぬえ！平安時代からの兄貴の妹分！」

鈴仙 「知ってます？」

零 「いんや、知らねえ・・・」

ぬえ 「ええ!？」

悲しそうな顔をするぬえを撫でて視線をぬえに合わせる

零 「忘れちまったのは悪かった。だからよ、これからも俺の事兄貴って呼んでくれるか？」

ぬえ 「・・・うん！」

鈴仙 「あの、零さんって昔からあんな感じ何ですか？」

萃香 「ん〜？そうだね〜何時もドギマギしてたよ」

俺は立ち上がって両腕を上げる

零 「よーし、萃香！呑み比べだ！」

萃香 「よしきた！零も宴会の楽しみ方を分かってきたみたいだね！」

俺はお猪口を萃香に渡し酒を入れて貰う

数分後・・・

零 「ヒツク、萃香〜もう限界だ〜」

俺は床に寝転がる

萃香「もうかい？ほら、しっかりしなつて。勇儀なんてお前の数倍呑んでるよ？まあ、零は人間でもあるからねえ・・・」

華扇「仕方ありません。兄さん、これを」

そういうと華扇は俺の口に丸薬を突っ込む

華扇「酔いをさます薬です。少し横になれば気分も良くなりますよ」

俺は目を瞑ってしばらくの間寝るのだった

天摩様だーれだ

文「さあ、天摩様ゲームの始まりです！」

『いえーい！』

零「んあ？」

文の声と皆の歓声が聞こえた

起き上がると壇上に文と椀が立っている

椀「えー、メンバーを発表しますね」

そう言う椀が巻物を広げる

椀「ナズーリンさんと星さん、蛮奇さんとパルスイさん、勇儀様と零さんですね」

あんれえ？さらつと勇儀を様呼び？しかも俺もやるの？

文「ルールはこの棒を皆さんで引いて赤いテープを付けた棒を引いた人が棒の番号を
言つて命令できます」

なるほど・・・これは所謂王様ゲームだな

文「じゃあ始めますよ！皆さん集まってください！」

俺達は壇上に上がる

柊「では、天摩様ゲームスタートです！」

『天摩様だーれだ！』

勇儀「お、私だね」

パルスィ「無茶振りは控えなさいよ？」

勇儀「分かっているよ。じゃあ三番は私と腕相撲をしてくれ」

・・・俺だ

これ拒否出きるかな？

文「あ、ちなみに天摩様の命令は絶対です！」

零「ちきしょう！」

勇儀「お、零が三番かい？」

零「ああ、そうだよ！」

俺は既に腕相撲の体制に入っている勇儀の手を握る

柊「ハツケヨイイ・・・のこった！」

次の瞬間俺の手は地面に付いていた

勇儀「なんだい？力無いねえ」

零「悪かったな！はい次！」

『天摩様だーれだ！』

星「あ、私ですね。じゃあ二番は四番に愛を囁いてください」

零「ゲエツ！俺二番だ」

ナズーリン「なっ!？」

俺は何故か震えるナズーリンを見る

蛮奇「零、多分二番はその子よ」

零「あ、そうなの？じゃあ・・・」

俺はナズーリンを床に押し倒して壁ドンならぬ床ドンをする

零「どんな障害があってもお前となら俺は乗り越えられるよ」

ナズーリンの耳元で囁く

ナズーリン「な、なななななな／／／／／／／／／／／／／／／／／」

ナズーリンは顔を赤くして倒れていた

星「さ、続けましょうか」

それで良いのかご主人様・・・

文「では代わりに村紗さんに入って貰いましょう」

村紗「お、私か？」

『天摩様だーれだ！』

蛮奇「あ、今度は私ね・・・」

蛮奇が少し悩んだ顔をしてから目を開く

蛮奇「じやあ、一番は今度買ひ物の荷物持ちね」

零「さつきから何故俺ばつか・・・」

蛮奇「天摩様の命令は？」

零「絶対なんだろ！分かつてるよ！はい、次い！」

『天摩様だーれだ！』

パルスィ「私が天摩様何て妬ましい」

零「お、今度はパルスィか・・・」

パルスィ「なら二番はクリスマスイブを私と過ごしなさい」

零「え、そんなんでいいの？つか、やっぱ二番俺なのね」

『天摩様だーれだ！』

村紗「私だな。一番は三番を膝枕だ」

零「いや、まあ役得ではあるけれど何故か毎回俺が当たる・・・」

俺が周りを見ると今度は星が顔を赤くしている

零「じやあちよつとお膝拝借」

俺が星の膝に頭を乗つけると何故か懐かしく暖かく何より懐かしい気がして俺はそ

のまま眠るのだった

万事屋零ちゃん旧作篇

ヒロインって、何なんだろうね

星「朝ですよ。起きてください」

星の声が聞こえて俺は目を覚ました

零「あれ？膝枕のまま……」

星「あの後貴方が寝てしまってそのまま宴会はお開きになったのだけど気持ち良く眠っていたので……」

零「そりゃ、悪かったな」

俺は起き上がる

星「いえ、私も久しぶりに零に膝枕できて嬉しかったですよ」

星が笑って言うてくる

星「あの……一つ良いですか？」

零「ん？」

星「その……踏ませてください！」

零「へ？」

何を言っているのだろうか？こいつはSか？サディストか？と思ったが思い出した
こいつは毘沙門天の代理だ

毘沙門天と言ったら何か天邪鬼を踏んだ伝説があつた

零「あー、うんまあはい。・・・どうぞ」

これも星に迷惑かけた分、こんなので許されるなら安いものだ

村紗「星く、外に零の客が・・・」

そんな時だった

村紗が部屋に入ってきた

村紗「ま、まあ、人それぞれ趣味はあるよな。悪かつたな」

零「待つて！何かとんでもない誤解してらっしゃる！」

襖を閉めようとする村紗を止めて俺は状況を説明した

村紗「なるほど、理由は分かった」

零「良かった・・・で、俺に客つて？」

村紗「今聖がはなしを聞いてるけどそれじゃあ収まりそうもなくて・・・」

と、言われたので敷地まで出てみれば・・・

静葉「だから、まだ秋じゃない！」

レテイ「こんなに寒いんだから冬に決まってるでしょ！」

聖「お二人とも落ち着いて……」

零「なーにやっつてんだ二人とも……」

俺は二人に話かける

静葉レテイ「零（零）さん！今は秋か冬、どっち！」

零「どっちつつわれてもな……」

静葉「もちろん秋よね？まだまだ実りはあるのだし！」

レテイ「なに言ってるの？今辺りの実りは冬に食べるものよ？冬に決まってるじゃない

い

聖「と、このような言い争いが続いていまして……」

零「なるほどねえ……」

俺は今も睨み合う二人を見る

零「てことで第一回、秋冬決定戦！」

『いぇーいー』

俺の言葉に周りが叫ぶ

零「はい、始めましたこの戦い。司会は私風切零と……」

文「射命丸文がお送りします」

ナズーリン「な、なんだいこれは……？」

一輪「秋と春を決める戦いだって……」

聖「争いは駄目ですからね！」

聖が手を合わせながら言ってくる

零「分かっているって……じゃあ、審査員！」

文「あ、はい。審査員は貸本屋の看板娘、本居小鈴さん！そして現稗田家当主、稗田

阿求さん！」

小鈴「よろしくお願ひします！」

阿求「頑張ります！」

零「じゃあ一回戦！季節の料理対決！」

文「今回は冥界の魂魄妖夢さんと紅魔館の十六夜咲夜さんが一品ずつ料理を作ってくれますのでお二人はそれぞれの季節に会った食材を提供してください。それではス

タート！」

零「てかき、何で稔子は参加しないんだ？」

稔子「私はそこまで秋に執着ないから」

零「秋の神様としてそれで良いのか・・・」

稔子「私は秋じゃなくって稔の神様だから！」

零「ふ〜ん」

しばらく雑談していると料理が出来たようで二人に運ばれてくる

妖夢「秋はやはり食欲と芸術です。なので私は柿をふんだんに取り入れたケーキを作ってみました！」

妖夢が出したのは色合いが綺麗なケーキだ

咲夜「冬はやっぱりこれね。外の世界のクリスマス料理の色合いを足してみたわ」

咲夜の七面鳥も上手そうに出来ている

阿求「では、ケーキから」

二人が妖夢のケーキを食べ始める

小鈴「美味しい！柿のケーキって食べたことないから不思議な感じ！」

阿求「ほんと！これを食べたなら普通のじゃ満足できないかも！」

妖夢「当然です！剣と同じくらいに料理も精進していますから！」

咲夜「なら、次は私の番ね」

咲夜がそう言うのと二人が七面鳥を食べた

阿求「！何このお肉。全然油がしつこく無い……」

小鈴「それで持つてあっさりともしてない……なんて絶妙なバランスなの……」

咲夜「当たり前でしょ？ 完全に瀟洒なメイドは料理にだって余念がないのよ」

文「さて、それでは結果を見ていきましよう！……て、あれ？ 零は？」

文がそう言つて辺りをキョロキョロ見渡す

ナズーリン「零ならあそこだよ」

ナズーリンが指差したほうを見ると俺が料理していた

聖「零、何をしているんですか？」

零「料理」

聖「いや、そうではなくて何故料理をしているんですか？」

零「いや、柿の皮やら盛り付けの残りやらが勿体無いからこれで料理しようかなつ

て……よし」

俺は出来た料理を二人に出す

零「柿の皮の唐揚げだ。トッピングは咲夜が残したやつね」

そして二人がそれを食べる

阿求「！これ、本当に残り物で作ったんですか!？」

零「ん？おん」

小鈴「じゃあ決まりましたね」

阿求小鈴「優勝は零さんです!」

俺はドヤ顔で両腕を上げる

文「なんと！零さんが勝ってしまいました!」

零「いや、アハハハ! って、あれ?」

俺は殺気に気付いて後ろを向く

零「あの・・・咲夜さん？妖夢さん?」

俺が逃げ出すと後ろからナイフや段幕が飛んでくる

零「にやアアアアアアアア!!」

星「いいんですか？助けなくて?」

聖「ええ、二人とも本当に殺す気は無いみたいですし、見てください。皆、笑っています」

ナズーリン「人と妖怪が手を取り合う世界、聖が望んだ世界・・・」

村紗「なんか、アイツはアイツで結構頑張ってたんだよな・・・」

一輪「そうね・・・」

こうして幻想郷に命蓮寺が出来たのだった

静葉「そう言えば何でこんなことしてたんだっけ？」

レテイ「さあ？」

実体と幽体

小傘「零ちゃん起きて！お客さんだよ！」

零「うーん、客？誰だよこんな朝っぱらから・・・」

俺は起き上がって部屋を出る

リビングを見るとそこに居たのは

魅魔「零、お前は会うたびに寝ているな」

魅魔だった

零「んで、何の用？」

魅魔「依頼を持ってきたんだ」

零「依頼い？」

俺がいぶかしんで居ると魅魔が封筒を出す

魅魔「前金だ。これからお前には一緒に魔界に来てもらう」

零「はあ!？」

魅魔「依頼はそこに居る魔界神のものさ」

俺は溜め息を吐きながら魅魔を見る

零「あのさ、何でお前がその魔界神と知り合いな訳？」

魅魔「昔ちよつとな」

零「ま、良いや。正直魔界は苦手だけど何とかなるだろ」

俺が立ち上がったその時だった

アリス「零くいるく？シチュー作りすぎたからお裾分けに来ただけど・・・」

アリスが家に入ってきた

魅魔「どうやら依頼は達成したい」

零小傘「「え？」」

次の瞬間風が吹いたと思っただらアリスと魅魔が居なくなりシチューが床に零れてい
る

小傘「零ちゃん・・・」

零「・・・ちよつと出てくる」

俺はそのまま家を出た

その頃、人里では魔理沙が買い物をしていた

魔理沙「今日は良いキノコ日和だぜ。たまには店でキノコを見るのも良いよな」

て、ん？」

魔理沙が空を見る

魔理沙「魅魔様!?!それに一緒にいるのはアリスじゃないかぜ？」

そう言うのと魔理沙は走り出した

俺はそのまま歩いて博麗神社の裏に来た

ちよつと前に酔った霊夢から魔界のゲートを聞いた

しばらく歩くと洞窟が見えた

隣から先ほど呼んだ妹紅が歩いてくる

???「何者だ！」

???「・・・人間? 悪いけどここから先は危険よ。いったい何のよう?」

陰陽師らしき男と赤髪の角を生やした女が立ちはだかる

???「我らはシンギョク! 貴様ら何をしに来た！」

男の方が叫ぶ

シンギョク女「まさか魔界を攻めに!?!」

零「いやいや、そんな物騒な・・・」

妹紅「私達はこの先にいる友達に用があるだけさ」

俺たちは二人を殴り飛ばす

妹紅「あーあ、やっちまったな。どうする?」

零「どうするも何ももう後戻りは出来ねえんだ。やるしかねえよ」

俺たちはゲートを通り抜けて魔界に入る

零「さあ!こつからはR18Gしていタイムだ!死にてえ奴から出てきやがれ!」

???「うるさーい!」

上からピンクの髪の少女が降りてきた

???「いきなり魔界に来て何なのアンタ!」

零「俺か?俺は風切零!アリスを連れ戻しに来た!」

???「アリス?ああ、神綺様の娘様ね。彼女ならついさっき家出を終えられたところよ」

妹紅「連れ去ったくせに何言ってるんだ!」

???「はあ、アンタらがアリス様を連れ戻すって言うならこのサラが全力で阻止するわ

!

サラがそう言うのと殴り掛かってくる

妹紅「零!こいつとは私がやる!早く行け!」

俺は頷くとそのままここから見える一番デカイ建物に走った

魔界の一般人?

俺は走って入り口まで来た

零「ハアハア、結構距離あつたな・・・」

俺は辺りを見渡す

零「静かすぎて不安になる・・・。法界たあまた別の気持ち悪さだ・・・」

???「あら、気持ち悪いなんて失礼しちゃう」

俺は建物から出てきた金髪の帽子を被った少女を見る

零「・・・お前は誰だ」

???「私はルイズ」

零「お前も敵か？」

ルイズ「そうね・・・。貴女、アリス様を連れ戻しに来たんでしょ？」

ルイズが笑って聞いてきた

俺は拍子抜けしながらも頷く

ルイズ「案内して上げてても良いわよ。ただし、今度そつちを案内してよ。昔旅行しようと思ったら博麗の巫女に邪魔されたし・・・」

零「はいはい。分かったよ」

ルイズ「契約成立ね！」

こうして俺はルイズの後を歩くのだった

妹紅「クツ！いい加減に諦めろ！」

サラ「いやよ！あの半妖はともかくアンタが行った所でどうにもならない！」

私はサラが殴り掛かってくるのを避ける

妹紅「そんなのやってみないとわからない！」

サラ「分かるわよ。神綺様はこの魔界で最も強いお方。下手したらかの八雲紫と同等かそれ以上……。その上アリス様まで関わっているものね」

???「ほお、なら私ならどうだ？」

後ろから段幕が飛んでくる

私が後ろを見るとそこには魔理沙が居た

サラ「霧雨魔理沙……」

魔理沙「お、なんだ？随分前に会っただけなのに覚えてたのか」

妹紅「何しに来た？」

私がサラを見ながら魔理沙を問い質す

魔理沙「なに、ただ恩師を追ってきただけだぜ」

妹紅「恩師？」

サラ「魅魔の奴、隠密にしろって言ったのに・・・」

魔理沙「ところで、新玉が倒れてたけどお前がやったのか？」

妹紅「あ？ああ。通してくれそうに無かったから零とな」

サラ「零!？」

サラが驚いて叫ぶ

妹紅「何だ!？」

サラ「あの半妖、見覚えがあると思ったら通りで・・・」

そう言うとサラが走り出した

魔理沙「なんだ？」

妹紅「逃がすか！」

私と魔理沙はサラを急いで追いかける

サラ（もしあれが本当に零だったとしたら・・・神綺様と鉢合わせなんてしたら・・・

魔界が滅びる！)

零 「

アリス 「

ルイズ 「

魅魔 「

「

「

「

「

結局後の祭りである

妬ましい・・・

ルイズに連れられ来てみたが何だろう、この全員に見られてる感じ・・・

魅魔「零、来ると思っていたぞ」

零「目の前で誘拐されちゃあねえ」

俺は木刀を抜く

魅魔「面白い。一度お前とは殺りあつて見たかつたんだ！」

???「待つて、魅魔」

銀髪の何処と無くアリスに似た女性が魅魔を止める

魅魔「神綺、何故止める？」

神綺「何故私が零にアリスちゃんを連れてこさせようとしたかわかる？」

魅魔「さあな、昔からお前の考えはよく分らん」

神綺「フツフツフ、なら教えて上げる！」

魅魔「いや、別に要らんが・・・」

俺は二人が言い争っている内にアリスに近づき縄をほどく

零「大丈夫か？」

アリス「ええ、ありがと。ごめんなさい、こんなことに巻き込んで・・・」
零「大したことじゃあねえよ」零にアリスちゃんのお婿さんになってもらいたくて「ごめん、大したことだったわ」

俺は振り返って神綺を見る

神綺「そうすれば零は魔界に住むことになってアリスちゃんも帰ってくるでしょ？」

アリス「ママ！私は零と結婚しないし魔界にも帰らないわ！それに私にはやりたいことがあるの！」

神綺「それは隣に居る人形のこと？何だったかしら、人形に感情を居れる事だったかしら？・・・貴女には無理よ、アリスちゃん」

神綺がアリスに向かって歩いていく

俺は木刀を投げつける

木刀は神綺に当たらずに神綺に当たった

???「貴様！」

金髪メイドがナイフを向けてくる

???「夢子!？」

アリス「夢子ちゃん。私は大丈夫だからナイフをしまつて」

夢子「・・・・・・・・・・・・・・・・」

夢子がナイフをしまい、後ろに居た帽子を被つた金髪と青髪の少女が安堵の息を吐いた

神綺「さて、なんで邪魔したのかしら？零」

零「テメエがごちゃごちゃうつきかつたからだよ！アリスが上海に感情を入れ無いつて誰が決めた！アリスが何時、弱音を吐いた！コイツの努力を無駄だと言う権利何てテメエにも俺にも誰にもねえ！」

神綺「……………知つてるからこそ、それが無駄だと分かっているから、止めようとしてるのよ……………」

さつきより強い魔力が辺りを覆い尽くす

魅魔「不味いッ！ユキ！マイ！夢子！お前たちはここをはなれろ！」

ユキ「でも！」

魅魔「お前たちじゃあの二人は止められない！じきここは火の海だ！」

夢子「くッ！行くぞ！ユキ！マイ！」

三人が逃げるのを見届けて魅魔が俺達の方を向く

零「……………皆逃げたか……………」

俺は木刀を壁から抜いて神綺に向かう

神綺「ずいぶん甘くなつたわね……………」

零「あ？」

神綺「昔の貴方なら逃げたあの娘たちも殺していたわよ」

零「昔の俺なんて興味ないな。俺は俺だ」

神綺「そう……」

俺と神綺は互いに走り出して攻撃しようとしたその時入り口から燃えた釘が飛んできた

私はサラに案内されて魔理沙と一緒に城内を歩いていた

魔理沙「なあ、何処に向かっているんだ？」

サラ「王の間」

妹紅「そこに零が……？」

サラ「出来ればそうで無かったら良かったけどどうやら状況は最悪みたいね」

奥からすごい量の魔力が流れてくる

その時だった

後ろから白い何か私達の間を通り抜けた

俺の釘が刺さって壁に固定された

??? 「妬ましい・・・。ああ、妬ましい・・・」

現れたのはパルスイだった

零 「パルスイ!？」

パルスイ 「ねえ、今日は何の日か知ってる？」

零 「何の日か？」

アリス 「分かった！クリスマススイヴよ！」

零 「クリスマススイヴ・・・あ！」

俺はこの前の天摩様ゲームを思い出す

零 「わりい！完全に忘れてた！よし、行くぞ！」

アリス 「エツ!？ちよ！」

パルスイ 「あ・・・」

俺はアリスとパルスイの手を握って引っ張る

しばらく走ると妹紅が居た

零 「逃げるぞ妹紅！」

妹紅 「ええ!？」

魔理沙 「零！魅魔様は!？」

零 「まだ奥に居る！」

後ろを見ると神綺が俺を追ってきている
俺は皆を見る

いつの間にか敵も味方も関係なく逃げている
そして俺は笑っていた

零「ししし、につげろ〜！」

パルスィ妬むの止めるってよ

零「あの……パルスィさん？」

パルスィ「……」

零「悪かったって」

パルスィ「……じゃあ、今日はずっと一緒に居て」

零「わ、分かった」

俺達は神綺から逃げてきた後、人里の甘味処に居た

アリス「私達、お邪魔かしら？お礼とか言いたかったんだけど……」

妹紅「まあ、アイツも礼とか言つて貰う為にしたわけじゃないさ」

アリス達が何か話しているみたいだが余り聞こえない

パルスィ「じゃあ、行くわよ」

そう言うのとパルスィが俺の手を絡めて繋いでくる

アリス「……やっぱり、尾行しましょう」

妹紅「そうだな」

こうして結局地底に来た

パルスィ「ここで過ごしましょう」

俺は辺りを見渡す

何時もパルスィが居る橋だ

零「ここで本当に良いのか？」

パルスィ「ええ、ここが一番落ち着くの」

零「ふくん……」

アリス「何かしらこの感じ……。なんか、思いを伝えられない二人を見てる感じでもどかしいわね……」

妹紅「ああ、零に関しては殆ど意味が分かってなさそう……」

俺がブーツとしてしばらく経った頃だった

勇儀「パルスィ、また何時もの所で呑みに行かないかい……。って、なんだい。零じゃないか」

零「おっす」

パルスィ「……悪いけど、今日は止めとくわ」

俺と勇儀はパルスィを見る

勇儀「そうかい。なら、明日までお預けかね」

パルスィ「・・・そうね」

零「明日？明日何かあんのか？」

俺が聞いてみるとパルスィが溜め息を付いた

パルスィ「明日、クリスマスパーティが地霊殿で開かれるの。地上と地底の交流を深めるって言うのが名目だけど本当はあそこの主含む親バカ達が自分達の娘みたいな妹、もしくは生徒がサンタは居ないと言う事実を隠すためのパーティーよ。それで、私はサンタ担当」

零「ふーん・・・」

パルスィ「さ、分かったなら帰るわよ」

零「帰る？何処に？」

パルスィ「私の家」

俺はまたパルスィにずるずると引っ張られた

勇儀「そう言う事だよ。後は私に任せて二人ともとつと帰んな」

そう言ううと勇儀も踵を返して旧都の人混みに消えていった

パルスイの家に着き、俺達はご飯を食べる事にした

ご飯はお米に魚、味噌汁に漬け物

零「つて、朝飯のメニューじゃねえか」

パルスイ「残り物よ。文句有る？」

零「いや、寧ろ残り物なのに上手い。パルスイはきつといい嫁さんになるな」

パルスイ「そ、そう？／＼／＼／＼／＼」

頬を赤くそめたパルスイがこつちを見る

零「……そういや、今日はあんまり妬んで無いな」

パルスイ「そうね……。この時期になると嫉妬心が勝手に集まって来るからね」

零「へへ……」

全国の非リア諸君、健闘を祈る

パルスイ「さ、明日も早いわ。もう寝ましよ」

勇儀「なんだい、もう寝るのかい？」

零「ウオツ！いつの間に……」

パルスイ「はあ……とつと寝るわよ」

そのまま俺達は川の字になって眠った

メリークリスマス!

朝になり俺達は地霊殿に向かった

既に何人が集まっているみたいでパーティ会場を作っている

空「あ!お兄さん!」

零「おお、お空。久しぶりだな。どうだ、能力の方は?」

空「大丈夫だよ。お兄さんのおかげで八咫鳥様の能力も扱えるようになったの!」
零「すげえじゃねえか」

俺はお空を撫でる

空「えへへくだって約束だもんね」

お空が俺に抱き着いてくる

何か自分より大きな子が子供みたいに抱き着いてくるのは違和感あるな・・・

パルスィ「妬ましい・・・全く持って妬ましいわ」

勇儀「なんだ、結局妬むのかい」

パルスィ「あれ、見なさいよ。あそこだけ空気が違うのよ?」

勇儀「・・・まあ、私からしたらあれも酒のつまみにしたら上手そうだけどね」

パルスィ「アンタねえ・・・」

燐「も〜！お空、ちゃんと手伝つてよ！」

しばらくお空を撫でているとお燐が近付いてきた

燐「あ、お兄さんじゃん。パーティーの準備を手伝いに来てくれたの？」

零「おお。パルスィと勇儀もな」

燐「それは有りがたいよ。今、人手が足りないかったからね」

てことで何だかんだ用意も整ってパーティーが始まった

蛮奇「いきなり帰ってきて何かと思つたらまさかクリスマスパーティーとはね」

小傘「ねえ、零ちゃんは？」

小傘が蛮奇に訪ね、蛮奇が辺りを見渡す

蛮奇「そう言えば居ないわね・・・」

「「ホッホッホ、メリークリスマスマス！」」

大声が聞こえて二人が振り向くとそこには赤い服に帽子、袋と髭を携えた三人が居た

「どうも、零サンタです」

「・・・パルサンタ」

??? 「勇サンタだよ。宜しくね」

小傘 「わあ! サンタさんだ!」

零サンタ 「今日は良い子の皆にプレゼントを持ってきたぞ」

パルスィ 「さ、ならんで」

そう言うのと見た目少女の面々がならびに来る

最初に来たのはフランだった

フラン 「メリークリスマス!」

零サンタ 「メリークリスマス。君は確かお姉ちゃんと言ったフランちゃんが手を繋いだぬいぐるみだったかな?」

フラン 「うん!」

零サンタ 「はい。どうぞ」

零サンタがアリスから朝受け取ったぬいぐるみをフランに渡す

フラン 「ありがとう!」

フランはぬいぐるみを抱き締めてレミリアの元に行った

ぬえ 「メリークリスマス!」

パルサンタ 「メリークリスマス。貴方は確かアニキと一緒に居たい、だったわね?」

パルサンタが零サンタを睨む

零「よ、よろし。それじゃあ、そのアニキに連絡を取ってここに呼んで上げよう」
そう言うのと零サンタは何処かに走り去った

零「零サンタに呼ばれて零さん登場！」

ぬえ「アニキー！」

ぬえが抱き着いてくるの

零「お、よしよし」

俺はぬえを抱き上げたまま蛮奇達の所に向かう

蛮奇（アンタ何やってんのよ？）

零（仕方ねえだろ。このパーティー事態子供達にサンタは居ないと言えない憐れな大人
が開いたやつなんだから）

蛮奇（じゃあアンタ小傘にサンタは居ないって言える？）

零（……言えないな）

蛮奇（アンタも一緒じゃない）

俺達は、パルサンタと勇サンタが皆にクリスマスプレゼントを渡す所を見る

零「なあ、ぬえ。今日はどうだった？」

ぬえ「楽しかったよ！今日だけじゃなくって地上に出てからずっと！」

零「そうか・・・」

俺は少し笑ってぬえを見る

勇サンタ「さあ！次は大人へのプレゼントだよ！」

勇サンタの声が聞こえて見ると子供へのプレゼントは終わったらしい

勇サンタ「さあ！皆で酒盛りだ！」

辺りから歓声が上がって酒を飲み始める

蛮奇「結局、何時も通りになるのね」

零「そうだな・・・でも、それで良いんじゃないかね？」

蛮奇「・・・そうね」

俺と蛮奇は向かいあって笑った

零蛮奇「「メリークリスマス」」

東方神靈廟

お前みたいなの一ボスが居るか！

俺は今、ある目的の為に外に出ていた
しかし・・・

零「何っだこれ・・・」

辺りにスタンドが飛び回っていた

零「霊って言ったら白玉楼・・・」

華仙「じゃあ行ってみましょう！」

零「そうだな。・・・って、うおっ！」

後ろから話し掛けられて俺は腰を抜かす

華仙「どうしたんですか？」

零「いや、何でいんだよ・・・」

華仙「兄さん、思い出してください。私と修行した日の事を」

零「修行した日イ？」

俺は華仙と修行した日を思い出す

暇でゴロゴロしてたら華仙が来てそのまま仙界に行つて小傘が影になつて戦つて……
零「やつぱ何も無かつたような……」

華仙「もう! 今回の神霊廟篇は私がパートナーって話してたよね!」

零「あ……したな、そんな話。でも俺が言ったのは出番があるって言っただけだし……」

華仙「え……じゃあ……」

零「お前の出番、ここで終わりだな」

華仙「そ、そんな……」

俺は膝を付く華仙をほつといて白玉楼にむかうのだった

白玉楼に付いて俺は欠伸をする

そう言えばもうすぐ日の出だった

零「つたく、初めてだよ。異変解決に乗り出して即行犯人に辿り着いたのは……」

妖夢「あの……さつきから何言ってるんですか?」

目の前に立っている妖夢が不思議そうな顔で聞いてくる

零「いや、今為地上でさ、スタンドが飛び回つてもしかしたら幽々子がまた何かしてるのかな、て」

妖夢「地上でそんなことが・・・あ！でも幽々子様は関係ありませんよ！」

零「ああ、何となく分かった。後は、まあ本人にでも聞くなり」

妖夢が俺の視線を辿って後ろを見るとそこには幽々子が立っていた

幽々子「アラアラ、零じゃない。どうしたの？」

零「下のスタンド、知らないとは言わせないぜ？」

幽々子「フフフ、何のことかしら。私一ボスだから分からないわ」

零「嘘付け。お前みたいな一ボス居るか」

笑っている幽々子に俺は餡パンを投げつける

幽々子「うくん・・・。あ！最近できた寺の墓地、そこには何も無いわよ」

零「墓地？」

俺は少し考えてから幽々子を見る

ずつと笑顔で嘘か本当か分からない

零「・・・まあ、お前が犯人じゃないってのは何となく分かった。スタンドはス

タンドでもここに居るのはまた違うみたいだしな」

妖夢「あの、私も着いていって良いですか？」

俺はもう一度幽々子を見る

幽々子「妖夢をよろしくね」

てことで妖夢と一緒に俺は命蓮寺に向かうのだった

一方その頃・・・

華仙「そんな！どうしてあなたが・・・!?」

山彦と唐笠とゾンビと

俺達は命蓮寺に来た

??? 「おはようございまーす！」

大音量のその声に俺は耳をふさいで相手を見る

そこに居たのは犬耳をした幼女だった

零 「朝もくつそ早い中ご苦労だねえ・・・」

俺は幼女に近付いてきた顔の高さを同じにする

零 「お前、名前は？」

??? 「私は幽谷響子です！」

俺は響子の頭を撫でながら笑う

零 「おはよう、響子」

響子が小さな唸りを上げて顔を赤らめる

何だか椀に似ている

妖夢 「ム・・・」

振り向くと後ろで妖夢が頬を膨らましているのが見えた

零「もしかして・・・拗ねてる?」

妖夢「拗ねてません・・・」

俺は妖夢に近付いて頭を撫でる

妖夢「うえ!?!/!/!/!/!/」

零「安心しろって。俺はお前ら全員と平和に暮らしたいだけさ」

俺が先に進もうとすると中から小傘が出てきた

零「小傘!?!何でここに!?!」

小傘「お、お墓にぞ、ゾンビが居たの!」

零妖夢「嘘だあ!」

俺は小傘の肩を掴む

零「良いか小傘。ゾンビなんてのは架空の生き物だ!」

小傘「で、でも、倒しても倒しても起き上がってくるの!」

妖夢「き、きつと当たり所がよかったんですよ!」

小傘「で、でも!わちきを庇って華仙ちゃんが!」

俺はそれを聞いて走って墓地に向かった

墓地に着いて辺りを見渡すが誰も居ない

ナズーリン「おや、珍しいね。君が早朝から墓参りとは……。誰か友でも眠っているのかな？」

俺はナズーリンに近付く

零「おい、ナズーリン！ここに何かねえのか！」

ナズーリン「何かかってなんだい？」

零「ゾンビとか、何かあるだろ！」

ナズーリン「ゾンビかどうかは分からないがこの奥に元からある墓ならあるよ」

俺はナズーリンから離れて走り出す

妖夢「待つて下さいよ……」

ナズーリン「ああ、君はちよつと待った」

妖夢「はい？」

ナズーリン「零は何故、あんなに焦っているんだい？」

妖夢「……多分、妹の華仙さんを思つての行動だと思います」

ナズーリン「華仙？ああ、良く人里の甘味処で見かけるね。……ん？零の妹？零つ

て妹がいたのかい？」

妖夢「あ、はい。と言つても血は繋がってないみたいですけど……」

ナズーリン「血は繋がっていなくても家族の為にあんなに必死になる……実に零ら

しいね」

ナズーリンが笑っていると妖夢がいぶかしんでナズーリンを見る

ナズーリン「良いかい、半人半霊。あれは家族の事になると人一倍周りが見えない体質だ。だから君が、いや。君にしか零を止める事は出来ない」

妖夢「・・・・・・・・そんなの、分かってますよ」

妖夢はそのまま走り去った

昔の友は今の敵

皆さんこんにちわ

茨木華仙です

今私はゾンビを追って洞窟に入った

ゾンビの姿を見つけて私は壁際に隠れる

そこにはもう一人青髪の女性

??? 「帰ったぞせーがー」

??? 「お帰り芳香ちゃん・・・あら？誰か、招かざる客もいるみたいね」

芳香 「おー？」

私は直ぐに隠れるのを止めて出る

華仙 「ワタシは茨木華仙！貴女達、ここで何をしているの！」

??? 「これはこれはかの有名な淫乱ピンク様ではないですか」

華仙 「誰が淫乱ピンクですか！茨木華仙ですよ！」

芳香 「せーがー、お腹減ったぞー」

??? 「芳香ちゃん、もうちよつと我慢しましょうね」

華仙「よし、か・・・？」

??? 「あら？ 芳香ちゃん、知り合い？」

芳香「知らんぞ〜」

私は包帯の腕で殴り飛ばそうとしたが避けられる

華仙「貴様！ 芳香に何をした！」

??? 「アラアラ怖いわ〜。さすが、平安時代に暴虐の限りを尽くした茨木童子ね〜」

華仙「質問に答えろ！」

??? 「簡単よ。芳香ちゃんが病死した後、このお札でキョンシーにしたのよ」

女性が札を胸の間から取り出す

華仙「同じだから分かるが、お前仙人だな？ 人の魂を何と心得ている!？」

??? 「残念ですけど私は仙人でも邪仙、申し遅れました。私は霍青娥、又の名を青娥

娘々。他の方からは穴抜けの邪仙と呼ばれていますわ」

華仙「邪仙・・・」

私は話を聞きながら芳香を見る

零「華仙！」

華仙「兄さん!？」

兄さんは木刀を抜いて邪仙を見る

青娥「また貴女ですか・・・」

零「は？お前誰だよ。この霊どもはなんだ？」

青娥「安心なさい。そろそろ準備は終わった頃よ」

華仙「準備だと・・・？」

私が聞くと邪仙が黒い笑みを浮かべた

青娥「この神霊に見える霊はただの小市民の欲。放っておけばすぐに消えるし何にも害はないの」

華仙「質問に答えろ！これで何度目だ貴様」

零「華仙、何かキャラが崩壊してゐるぞ？」

青娥「もうすぐあの方が復活するの。それは異教の預言者が、処刑後三日目に復活した時より盛大で神聖な物になるはずよ」

零「それが後ろの墓にいる奴なら、お前は悪い奴って事だよな？」

青娥「あら？邪仙なのだから悪いのは当たり前でしょ？でもね、この上に寺を建てた尼僧よりはマシよ」

零「それはどう言うって・・・」

兄さんは頭を見る

芳香「おー、こいつ上手いぞ〜」

青娥「芳香ちゃん！そんなの食べちゃ駄目！」

兄さんは顔に血が垂れたまま芳香を離して歩きだした

青娥「……………一つ、警告しておきますわ。あのお方はずっと貴方を探し求めていたわ。この世から、消すためにね」

華仙「ッ!？」

青娥「それでも行くと言うなら行きなさい」

兄さんは墓の扉を開きかけて立ち止まる

零「おい、邪仙。俺も一つ警告しておくがな、別に俺はそいつの復活阻止するために行くのでも自殺するために行くんでもねえ。そいつの目的確かめるだけだ。後……………」

私と邪仙が兄さんを見る

零「墓、行きたくない……………」

華仙青娥「早く行きなさい！」

私と邪仙は兄さんを蹴り飛ばして墓に入れたのだった

聖徳王の帰還

二人に無理矢理墓に押し込まれて俺はとぼとぼ歩きだす

零「あーもう！何が悲しくてスタンドまみれの墓場なんかに来なきやなんねえんだよ
！そりゃあれだよ？行く前にちよつとカッコつけた後のあれだったけどあんな扱いは
ねえだろ？」

??? 「誰か居るのか？」

零 「ん？」

辺りを見渡すと上からスタンドが降りてくる

俺は急いで穴を掘り頭を隠す

??? 「・・・何やってんの？」

零 「いや、この下にアンダーワールド扉があるって反応があつてな」

??? 「そんなものは無いと思うがなつて、ん？お前、ちよつと顔みせろ」

俺は誰かに顔を引っ張り出されて顔を見られる

??? 「・・・なるほど、そう言うことか」

そこに居たのは緑髪の女性だった

??? 「着いてこい」

零 「ま、待て！お前はいつたい誰なんだ！」

??? 「ん？ああ、そうか、千年も前じゃ忘れるよな。私は蘇我屠自子、亡霊さ」

零 「亡霊なんて居ないしい！スタンドだし！」

屠自子 「ハイハイ。昔ッからお前はそうだったな。ほら、とつとと行くぞ。太子様も待つてるから」

俺は横に居る屠自子を見る

しかし……

零 「なあ……」

屠自子 「……なんだ？」

零 「何でそんな超至近距離で腕組んで歩いてるの？」

屠自子 「何だ？私に抱き付かれるのは嫌か？」

零 「いや、まあ、嬉しいけど……お前美人だし」

屠自子 「全く……嬉しい事言ってくれるな。よし、もうすぐ着くぞ」

そう言われて前を見るとメツチャデカイ塔が見えた

屠自子 「じゃ、行くぞ」

??? 「あいや、待たれよ！」

塔から出てきたのは白い袴を来た幼女だった

屠自子「何だ布都か。もう目覚めたのか？」

布都「ム？屠自子ではないか。何をしているこんな所で？」

屠自子「あ？零を太子様の所まで連れていくところだよ」

布都「そうか。まあ、零が行くなら大丈夫であろう」

そう言つて俺と屠自子は布都を通り過ぎる

俺はそれを疑問に思いながら塔に入る

屠自子「ん？どうした？」

零「いや、邪仙からお前らが言う太子様つてのは俺をこの世から消したいんじや……」

屠自子「あんの邪仙……、余計な事言いやがつて……。いいか、太子様はお前を

恨んでる訳じゃない。ただ自分よりモテて殺意を芽生えてるだけだ」

零「人はそれを逆恨みと言う。それに俺はモテやしないと思うがね」

屠自子が溜め息を着いて俺の腕から離れる

屠自子「ほら、着いたぞ」

零「着いたつて……ここホントに墓か？生気に満ち溢れてて逆に気色悪イんだけ

ど……」

俺は辺りを見る

スタンドがあちこちに飛んでいる

零「にしても良くここまでスタンド集められたよな……」

???「違う、勝手に集まってきただけよ」

零「さすが、聖徳〃太子〃様だ。毎日毎日十の要望を聞いてただけはある」

屠自子「なんだ？ 思い出したのか？」

零「いや、全然。でも神霊つてのは欲なんだろう？ んで、太子と来たら人間の欲を一気に十聞くことの出きる聖徳太子って訳さ」

???「……私は豊聡耳の神子、人は私を聖徳王と零「あ、いや、別にそこら辺は知ってるしいいや」……」

屠自子「チョツ!? 零！」

神子「フム、君は私達と別れた後はあの妖怪僧侶に与したようだ

零「あ？ 何の話だ？」

神子「私が君の十の欲……正確には二つ抜けて八つの欲だがそれを読めば君の出生から何まで生まれたての赤子同然さ」

神子が笑いながらこちらを見る

神子「そしたらどうだ。君からは四つの人生が読み取れる。幾つも塔が並び妙な衣に身を包んだ人間が居る第一の人生、第一とあまり変わらないが妖怪が蔓延る第二の人

生、そして自ずから妖怪となり、神となった第三の人生。最後に今の人生・・・」
神子が腰に携えた剣を抜く

神子「人間が私の存在を否定し、伝説となる時を待っていたわ！さあ！私を倒してみせよ！そして私は生ける伝説になる！」

俺も木刀を抜けて神子を見る

零「つたくよお・・・伝説になるとかならないとか・・・俺には関係ねえ！」

俺は神子に向かって走り出す

俺は神子を叩き斬ろうとするが神子が剣で防ぐ

神子「零、君の良いところはその真つ直ぐな所だ。でもそれは総じて悪いところでもある」

神子の剣が俺の左腕を抉り左腕が宙ぶらりんになる

神子「あまりに真つ直ぐ過ぎて剣筋が読めてしまう」

俺は神子の言葉を聞きながら腕をくつつける

神子「・・・はあ、君が二つの欲を無くした理由。不老不死、か」

俺はもう一度神子に突つ込む

神子「人の話は聞くものだ。その殺気も私達が初めて殺しあつた時もここまで殺気は無かつたよ。自分を見透かされ本能的に私を消したいみたいだ」

零「ごちやごちやと勝手なこと言ってるじゃねえ！」

俺はおもいつきり木刀を振り下ろす

零「自分を見透かされて本能的に消したい？んなわけねえだろ！俺がムカついてのはそんな事じゃねえ！」

神子「クツ！」

神子を吹き飛ばしてもう一度突っ込む

だが神子がそれを受け止める

零「なら、俺もお前を見透かしてやるよ。お前のその殺気はただ単に俺に向けられる訳じゃねえな。そう、例えば妖怪、とかな！」

神子「ツ！」

零「妖怪を撲滅するつもりか？」

神子「………そこまで分かって、何故私の前に立ちはだかる！君なら分かるだろ！妖怪は人に害をもたらす！家を、食料を、命を奪われるのは何時も人間だ！私が先導して妖怪に奪われない人間社会を作るんだ！」

俺は溜め息をついて木刀から手を話す

それでバランスを崩した神子が剣が俺の心臓に刺さった

神子が慌てて剣を抜こうとするが俺は神子を抱き締める

佐渡の大親分と鬼の小子分

さて、異変も解決したことで今日宴会が開かれる事となった
ちなみに場所は命蓮寺で年末年始の宴会も含めるとの事だ

零「なあ、藍……」

藍「……なんだ？」

零「俺って、何なんだろうな……」

藍「あのミミズクに何を言われたかは知らんが零は零さ。それ以上でもそれ以下でもない。今の自分を信じる事だ」

零「そう、か。うん。そうだよな！ありがとよ、藍！おかげで楽になったよ！」

俺は藍の部屋を出て自室に戻るのだった

ぬえ「アニキ！お帰りなさい！」

戻るとぬえが俺のベッドでゴロゴロしていた

零「おお、ぬえ。どうした？何か用か？」

ぬえ「えつとね、昨日聖人が復活したでしょ？」

零「聖人？神子の事か？」

ぬえ「うん！それでね！そいつをやつつけるために外の世界から助つ人を連れてきたの！」

零「助つ人？それって……」

俺はぬえを蹴り飛ばそうとするがぬえが跳んで避ける

零「お前の事か？」

ぬえ？「なんじゃ、気づいておったのか。流星は鬼の太子分と言った所じゃ」

零「匂いが違ったからな」

ぬえ？「なんと、お主は幼女の匂いを嗅ぐ変態であつたか！」

零「止めてくれないその言い方！お前動物臭いんだよ！」

ぬえ？「なっ!？」

ぬえ？「から煙が出たと思つたらメガネをかけた狸が現れた

零「で、何者だよ」

???「ワシは二ツ岩マミゾウ。佐渡の大親分じゃ」

零「佐渡？佐渡つつうと日本にあるあの佐渡か？」

マミゾウ「うむ。そうじゃ」

零「で、その大親分が何で家に来たんだ？」

マミゾウ「風切零！今日の宴会でワシと勝負せい！」

零「ハア!？」

マミゾウ「ちなみに皆了承済みじゃて逃げる事は出来んぞ。ではな」

零「ま、待て！」

俺はマミゾウを捕まえようとしたが既にマミゾウの姿は無かつた

そしてとうとう宴会に来てしまつた

マミゾウ「うむ。逃げずに来たようじゃな」

零「いやいや、狸風情に逃げるほど俺は落ちぶれちやいないさ」

マミゾウ「今や人間のお主がよく言つたものじゃ」

零「ハハハハハハハハハハハハハハハハハハ」

マミゾウ「ハハハハハハハハハハハハハハハハハハ」

零「ハハハハハハハハハハハハハハハハハハ」

マミゾウ「ハハハハハハハハハハハハハハハハハハ」

次の瞬間辺りに煙が広がつた

零「ランダム七変化！」

マミゾウ「マミゾウ化段幕十変化！」

皆が酒を呑みながら戦いを見る

霊夢「アイツってホントなんでもやってるわね・・・」

魔理沙「面白いじゃないか。それを着に私達は酒を呑むんだろ？」

霊夢「まあ・・・そうだけど・・・」

俺は狼になってマミゾウに向かう

しかしマミゾウはデカイ狸になって俺を踏みつける

マミゾウ「他愛も無いのう。それでは生き残れんぞ？」

零「・・・・・・・・・・」

マミゾウ「ん？殺しては無いはずなんじゃがな？」

マミゾウが倒れた俺を見る

しかし次の瞬間マミゾウが地面にひれ伏した

マミゾウ「な!?!どうして・・・」

俺はデカイ狸のマミゾウの頭を踏みつけながら見下す

零「あのなあ・・・、俺は天邪鬼だぞ？騙くらかし合いなら負けねえよ」

マミゾウ「クッ！」

俺はマミゾウから降りてさつきくすねた酒を置く

マミゾウ「はえ？」

零「どうしたんだよ？呑まねえの？」

マミゾウ「いや、敗者のワシが呑んでもよいのか？」

零「おお、ここは宴会の場だしな。それに・・・」

俺は神子達と団欒する蛮奇と小傘、影狼とわかさぎ姫を見る

零「神子が妖怪を抹殺しようとしたのは確かだが、その心配なんてもう無いんじゃないのか？」

マミゾウが変化を解いて酒を呑む

マミゾウ「・・・プハツ！確かに、そうみたいじゃな」

マミゾウが懐かしそうな顔で俺を見る

マミゾウ「お主も立派に成長したもじゃ。昔は周りなんて見んチンピラじゃったんがな・・・」

幽々子「あらあら、楽しそうねえ」

幽々子が来てマミゾウが立ち上がる

マミゾウ「じゃ、楽しめたしワシは移動しよう」

幽々子が座って来る

幽々子「貴方、今回妖夢を置いて行ったでしょ？」

零「あ・・・」

幽々子「たまにはあの子に構ってあげなさいな。あの子、貴方を妖忌と同じ位に慕っ

てるのよ？」

零「だったらあんまり危ないことはさせたくないんだけどなあ……」

幽々子「そう……。なら、依頼をさせて貰うわ。明日から一週間、家で妖夢のお手伝いをお願いね」

俺は苦笑いを浮かべながら頷く

幽々子「あ、それと……」

零「？」

幽々子「明けておめでとう」

零「！ああ、おめでとう」

万事屋零ちやん宗教戦争篇

妖夢の恋愛七日間戦争

白玉楼に来て一日目

今日から一週間白玉楼で泊まる事になった

まあ、小傘や蛮奇、藍や次の冬まで居候する事になったレテイも居るし家の事は大丈夫だろう

朝からご飯を三十二人前作って疲れた

途中で妖夢が顔を赤くして話し掛けてきたがよく分からなかった
後ろから幽々子が見てくるし何かあったのだろうか？

まあ、話したくなったらまた聞く事にしよう

昼になり妖夢の剣術指南を見学した

幽々子は刀を扇子と思っているのだろうか、何かもう舞っている
俺も一度正したが幽々子はのほほんと舞っていた

次は俺が妖夢の剣術の特訓をした

妖夢は剣筋が真つ直ぐだと確かに言った

でも神子から見たら俺もそうらしい

俺もまだまだ修行が足りないと言う事だろう

その後は地獄の用な家事が続いた

白玉楼に来て二日目

今日は藍が家事を手伝いに来てくれた

おかげで妖夢は修行に集中出来て俺もゴロゴロ・・・おつと誰かが来た

白玉楼に来て三日目

妖夢が何だか風邪気味で家事と幽々子の剣術指南を俺が受け持つ事になった

幽々子の剣術指南はまだ何とかなったが家事は中々に大変だった

これを妖夢が一人でしているととなると妖夢の苦勞がわかってきた

白玉楼に来て四日目

妖夢も元気になって今日は1ヶ月分の食料買い込み日と言う事で人里に来た

総合的な重さは約1t

これは妖夢がスーパーマサラ人になる日は近いかもしれない

何とか運んだが体がもうバツキバキで明日は動けなさそうだ

白玉楼に来て五日目

案の定、今日は筋肉痛で動けていない

妖夢や幽々子もたまに様子を見に来てくれてるから退屈はしなかった

夕方頃に鈴仙が薬を届けに来てくれた

晩には、治って射るらしい

白玉楼に来て六日目

昨日の晩、幽々子に話を聞かされた

妖夢の師であり祖父、魂魄妖忌の隠居についてだ

俺が妖忌と決闘して俺が勝ったかららしい

妖夢はまだ小さくて今では記憶が無いらしいがその当時、相当俺を恨んだらしい

てか、それを話されていったいどんな顔で会えば良いのだろうか

ただ分かるのはそんな俺が妖夢の剣の修行に付き合っただけなのだけなのだ

私は零さんの日記を読んで生唾を飲む

妖夢「何なの、これ・・・？」

今日、零さんの様子が少し可笑しくて部屋を調べてこの日記を見つけた

妖夢「師匠が何処かに行ってしまったのは、零さんに負けたから・・・？」

私がじつと日記を見ていると襖が開く音がして振り向く

幽々子「あら・・・妖夢・・・どうしたの？」

妖夢「幽々子様は知ってたんですね？」

私は幽々子様に見せる

幽々子様が見ると何時もの優しい目ではなくたまに見せる真剣な目をしてい
た

幽々子「妖夢、ここに綴つてあるのは全て真実よ。妖忌を隠居に追い込んだのは紛れ
もなく零。それを知つて妖夢、貴女はどうするの？」

私は黙つて部屋を出た

俺は今日の晩ご飯を作りながら今後の事を考える

零「はあ、幽々子の奴、何であんなこと言い始めたんだ？黙っていれば良かったのに……」

ご飯が出来て幽々子用の皿に盛り付ける

別に逃げる訳では無いが記憶がない過去を言われたとしてどうすれば良いのか分からない

それは幽々子も十分知っている筈だ

妖夢「零さん。今、良いですか？」

妖夢が厨房に入ってくる

何だか元気が無い

零「よ、妖夢。ど、どうした？」

妖夢「師匠を……倒したんですか？」

零「ツ!？」

俺は料理の手を止めて妖夢に向く

零「……それを知ってどうする？」

妖夢「何時か、貴方をこえます！師匠を越えた貴方を！」

俺は笑って料理に向き返る

零「そんな日が来れば俺も全力で向かえてやるさ」

結成！野良神連合軍！

零「野良神連合軍だあ？」

稔子「ええ。今人里じゃ、宗教戦争真つ盛りでしょ？」

俺は最近人里で演説をしていたり戦っていたりしているのをよく見る

零「つか、俺は確かに現人神だけど別に野良じゃねえよ」

稔子「神社に奉られてなかったら皆野良よ」

零「で、入ったら俺は何をすれば良いわけ？」

稔子「他の奴らと戦うの！勝って人気を勝ち取るのよ！」

零「いや、別に俺信仰に困ってねえし・・・」

俺がそう言うのと稔子が胸ぐらを掴んでくる

稔子「アンタが勝ちまくって人気を集めれば私達にも注目が集まるでしょうが！バカ

なの？死ぬの？」

俺は稔子を一発殴って外を見る

・・・一輪と布都が戦っている

零「・・・まあ、俺も暴れんのは嫌いじゃねえからなっ！」

俺は窓から飛び降りる

民衆全員が俺を見る

小傘「れ、零ちゃん？」

蛮奇「アンタ何空から落ちてきてんのよ？」

零「我、黑夜クロクヤシヤ又大権現!命蓮寺の雲居一輪殿と神霊廟の物部布都殿に決闘を申し込みに参つた!」

辺りがざわめき一輪と布都が顔を見合わせる

一輪「零、それは本気なの？」

布都「止めておけ。お主一人で我らを相手に出きる訳が無かろう。それよりもどうじゃ。我と共に妖怪寺のこやつをやらんか?きつと太子様も喜んでくれるはずじゃ!」
一輪「何言ってるのよ!毎日懲りずに放火しに来て!零、一緒にこいつメましょ!」

俺は布都を拳骨する

布都「な、何をするんじゃ!」

布都が頭を抑えながら踞る

零「アホか!放火なんてね、やったって何の得にもなりません!」

布都「お主・・・、しばらく見ん間に屠自子に似てきたかの?」

零「ハイハイ。とりあえず俺も依頼でな。これ以上信仰に興味はねえし人氣も要ら

ねえけど・・・」

俺は笑つて木刀を抜く

零「決闘には興味あるんでな！」

俺は走り出す

布都「仕方ない。おい！一時休戦じゃ！」

一輪「仕方ないわね！」

布都が俺に皿を投げてくる

俺は走りながら木刀でそれを悪と雲山が殴りかかつてきた

俺はそれを防いで雲山を蹴り飛ばす

蛮奇「あのバカ・・・本気で楽しんでるじゃない・・・」

小傘「あんなワクワクした零ちゃん久しぶりに見た・・・」

萃香「お、やってるねえ」

人混みの中から萃香が現れる

蛮奇「な、なんでアンタがこんな所に？」

萃香「ん？霊夢がかきいれれ時とかで構つてくれないから零の所に来たんだけどね、ま

さか零も参加してるなんてね」

萃香が目を細めて俺達を見る

萃香「まあ、今の零ならあの二人には勝てるよ」

萃香がそう言った瞬間爆発が起こった

そこでは一輪と布都を倒した俺が息を切らしながら立っていた

野良神連合軍とひじみこ

次の日

静葉「昨日は稔子がごめんなさい！」

零「いや、良いさ。こっちも結構乗り気だったし」

藍「本当に何をしてるんだお前は」

隣に座っていた藍が溜め息を吐きながらジト目で見てくる

萃香「まあまあ、見る分には面白いし良いじゃないか。それで、信仰はどうなったんだい？」

静葉「その・・・ちよつとは集まったんですけどまだ人気は他勢力が大多数で・・・」

他勢力と言うと博麗神社、魔理沙、命蓮寺、神霊廟、後こいしだ

ちなみに守矢神社は今回は静観を決め込んだようだ

零「また決闘相手探すしかねえか・・・」

萃香「・・・いや、どうやらその必要は無いみたいだよ」

零「え？」

酒を一杯呑み扉を見る萃香をみて俺は扉を見る

いきなり爆発して扉が飛んでくる

零「ああ！また壊れた！何回壊れるんだ家の玄関！」

神子「そんな事よりも・・・」

聖「昨日の出来事の説明をお願いします！」

神子と聖が入ってくる

零「い、いや、それはだね・・・あの・・・その・・・」

静葉「ごめんなさい！全部私のせいなの！」

聖「どう言う訳か、説明頂けますか？」

聖が静葉の向かいのソファに正座する

神子も食卓の椅子に座った

静葉「私、今殆ど信仰が無い状態なんです。毎年そうなんですけど今年はかなりヤバくて・・・だから稔子と雛が零に頼んで人気と信仰を集めて貰おうと・・・」

神子「なるほど・・・。零からは特にそんな欲は聞こえないのは？」

零「おら別に月からの信仰で事足りてるし、人気になったって面倒くさいだけだろ？」

神子「で、本当は？」

零「人気になって女子にちやほやされたいっす！」

神子「素直でよろしい」

聖「零、そんな煩惱があつたら悟りの道は開けません。今からでも寺に来て共に修行しませんか？」

神子「いや、君は仙人に向いている。私の弟子にならないか？」

俺は溜め息をついてキッチンに向かう

零「俺はたまにやる華仙の修行だけで十分だったの。それに俺は今のままでいいさ」

俺はコーヒを入れて二人の前に置く

萃香「アハハ、実に零らしいね。じゃあこんなのはどうだい？お前さんらが零に勝て

たら零が願いを聞き入れる。零が勝つても人気とか集まるから好都合だろ？」

藍「待て。零が一気に二人を相手するのか？」

萃香「うくん・・・その秋の神にでもして貰おうと思つてたけど流石に相手が相手

だしね・・・よし、私も零に付くよ！」

こうして俺達は決闘をすることになるのだった・・・

椀「それで、何で山でやるんですかアアアアア」

下で椀が叫ぶ

萃香「ステイブステイブ！いいじゃんか、減るもんじゃ無いんだからさ」

椀「私が怒られるんですけど!?零さんも何とか・・・って、あれ？零さんは？」

聖「そう言えば居ませんね・・・」

神子「さつきまで居たんですが・・・」

その日、俺こと風切零は幻想郷から姿を消した

小傘の傘を持った少年だった

??? 「何で俺が顔も知らない親父の墓参りなんかしなきゃいけないんだよ・・・」

え？今、俺の事親父って言ったのかコイツ？

聖 「あまりそんなことを言っただけじゃありませんよ。傘^{さん}」

少年がぶつくさ言っていると聖が歩いてくる

零 (聖!?)

傘 「でも聖、親父が居なくなったのは100年も前に行方不明なんだろう？」

零 (ツ!?)

俺は驚いて声が出掛けるが寸で止める

聖 「零が居なくなったのは私と神子さんと決闘しようとした時です。彼はいつの間にか居なくなっていた」

零 「・・・・・・・・・・」

俺は自分の家があるだろう人里をみようとして目を疑った

聖 「今の幻想郷を見たら、零はどう思うのかしら・・・」

そこには廃れた人里の真ん中にある一つの塔だった

零 「嘘だろ・・・、只のドツキリだよな？だって、100年何て経ってる訳がねえ」

俺は人里の道を歩きながら考える

店も殆ど閉まっていてさつきまでの賑わいもない

零「いったい、何で……」

???「何か困ってるの？」

後ろから声をかけられて力無く振り向くと首かフヨフヨ浮いた赤髪に少し黒髪が混じったメイド服の少女だった

零「えつと……お前は？」

???「私は赤蛮鬼。今は紅魔館でメイドをしてるの」

俺は少女が口にした名前に目を丸くする

零「蛮奇!」

蛮鬼「え? うん……でもお兄さんが知ってるのはきつとお母さんの方の蛮奇だと思
う」

零「お母さん! ち、ちなみにお父さんの名前って……」

蛮鬼「会ったこと無いんだけど、風切零だって聞いた事があるよ」

俺は膝を崩す

零「は、ハハ……笑えねえよ。その冗談……」

蛮鬼「? 冗談じゃないよ?」

傘「蛮鬼、どうしたんだ？」

蛮鬼「あ、お兄ちゃん！」

俺は先ほども聞いた声に冷や汗をかきながら振り向く

そこにはやはり傘が居た

零「……………」

蛮鬼「あ、彼は多々良傘。私の腹違いのお兄ちゃんなの」

また乾いた笑みが出てくる

傘「？蛮鬼、誰だそいつ？」

零「えっと、俺は……ッ！」

俺が辺りを見ると骸骨やリザードマン、悪魔が俺達を取り囲んでいた

周りの開いてた店が一斉に閉まる

傘「挨拶はコイツらぶっ飛ばした後だな」

そう言うとう傘が傘を閉じて持つ

傘「蛮鬼は下がってる。おい、アンタ。その木刀、ちよつとは戦えるんだよな？」

俺はハっとして立ち上がり木刀を抜く

零「ハア……俺は黒。覚えとけ」

俺達は少し笑うと大群に突っ込むのだった

悪魔の仔犬“達”

大群を退けて俺達は地面に座り込んでいた

零「ハアハア・・・いったい何なんだよ・・・」

傘「ハアハア、コイツ等は百鬼夜行だ・・・」

零「百鬼夜行!? 100年経っても居んのかよ」

蛮鬼「どうしたの?」

零「い、いや、何でも無い」

俺は敵が落とした狐の面を顔に着ける

零「さて、んじや行くか」

蛮鬼「行くって何処に?」

零「ん? 紅魔館。働き口がねえと生きてけねえだろ」

傘「んじや、俺は家に戻るわ」

そう言うと傘が立ち上がって去っていった

蛮鬼「それじゃあ、案内するね!」

こうして紅魔館の門まで来た

来た訳なのだが・・・

美鈴「ZZZ・・・」

???「ZZZ・・・」

美鈴と美鈴に似た黒髪の少年が立ったまま寝ていた

蛮鬼「もう、美鈴さん！美麗君！起きて！」

蛮鬼が揺するが二人が起きない

気付くと二人の頭にナイフが刺さっていた

咲夜「貴女達はロクに門番も出来ないの？」

美鈴「咲夜さん!?寝てません！寝てませんよ！」

美麗「ぼ、僕も寝てません！」

咲夜「そう・・・。で、蛮鬼、そっちは？」

蛮鬼「はい！黒さんです！ここで働きたいみたいで・・・」

咲夜「ふーん・・・」

咲夜が俺をマジマジと見てくる

咲夜「まあ、良いわ。蛮鬼は仕事に戻りなさい。黒、アンタはこれから来る咲螺に案

内させるから」

そう言うのと咲夜は消えてしまった

それにしても美麗に咲螺、やつぱり皆結婚して子供も出来て・・・

蛮鬼「あ、もしかして咲夜さんが消えた事に驚いてます?」

零「え?あ、うん。まあな・・・」

蛮鬼「咲夜さんは時間を操る程度の能力で時を止めて移動してるんです!」

零「ふーん……。ずっと使い続けたら寿命が無くなっちゃうのに・・・

美鈴「・・・・・・・・・・・・・・・・」

俺達はそのまま紅魔館に入るのだった

入るとそこにあつた光景は何時もの紅魔館の玄関だった

やはり100年経つても紅魔館は紅魔館だ

???「お待たせしました!」

右の廊下から銀髪に少し黒髪が混じつた女の子が飛び出してくる

???「私が紅魔館のメイド見習い、十六夜咲螺です!」

零「これはご丁寧に。俺は黒だ」

咲螺「それでは、お嬢様の元にお連れします」

そう言うつと咲螺は左の廊下に向かって歩き出した

零「あれ？そっちなのか？」

咲螺「はい。お嬢様は地下にいらっしやいます」

俺は少し疑問に思いながら咲螺に着いて行くのだった

咲螺「お嬢様、咲螺」

???'「入って」

零(?)

レミリアでは無い聞き覚えのある声に疑問を持ちながら部屋に入る

フラン「良く来たわね。私がこの紅魔館の主、フランドール・スカーレットよ」

零「・・・・・・・・・・・・・・・・フウ、

!!!!!!だ!何!!!!

俺の叫びは幻想郷全体に轟いたと言う

で

天の子狗 “達”

結局あの後何だかんだ面接してちよつとした実技やって合格した

フラン「じゃあ、これからよろしくね」

零「あ、はい」

フラン「えつと、今日の業務は万事屋零ちゃんと山の天狗と合同でお姉様達の救出ね」

零「了解しました……ん？」

てことで咲夜と一緒に人里に来た

零「……なあ」

道を歩きながら咲夜に声をかける

咲夜「……何？」

零「紅魔館の主つてレミリア・スカーレットじゃなかったっけ？」

咲夜「そうね。妹様は代理よ」

零「お前つてさ、今何歳？」

次の瞬間頭にナイフが刺さる

咲夜「女性に年齢を聞くのはナンセンスじゃなくて？」

零「でも紅魔館のメイド長は人間で100年前の紅霧異変に幻想入りしたんじゃ？」

咲夜「幻想入りしたのは100年より前。だいたい110年前ね」

零「へー、てことは今118歳な訳か」

また頭にナイフが刺さる

しばらくすると里の真ん中を流れる川にある人集りが見えた

零「？何の集まりだ」

咲夜「見てれば分かるわよ」

俺達は人集りに入って最前列に来る

そこには檻が三つあった

零「んだ？打ち首か？こんな所で一体誰が？」

檻から誰か出てきて目を丸くする

出てきたのは何とにとりだった

零「・・・あれは？」

咲夜「あの河童、昔は温厚だったんだけどね。零が居なくなつて荒れちゃつて、里にあつた力○ネル人形を改造してた所、敵に見つかったのよ」

零「つか、何で力○ネルがあんだよ！」

「最後に言い残す事はあるか？」

俺はにとりに手を振る

零「おーい、にとり！こつちだ！こつちだ！いったい何があつたんだ！」

にとりがこつちを向き筆を啜えてこつちを見る

零「やつぱ何か知ってるんだな！いったい何を・・・」

にとりが紙を口に啜えてこちらに見せる

にとり『キュウリを食べたい人生でした』

零「すいません。コイツの首俺に斬らせて下さい」

「な、何だ貴様!？」

骸骨が驚きこちらを見る

俺は頭にナイフを刺されて咲夜に引きずり戻される

零「てか、にとりがこうなってるんだから将棋仲間の権が黙ってねえだろ？」

次に檻から出てきたのは権だった

零「・・・・・・・・あれは？」

咲夜「人里で鬼に絡まれたみたいでね、酔っ払った上げる改造された力○ネル人形の服を着せ替えた所を敵に見つかつたみたいね」

零「また力○ネルかい！アイツ等力○ネルに恨みでもあんのか！」

「何か言い残したい事は？」

零 「楯！聞こえるか！」

楯がこつちを見るとにとりと同じように筆を啜えて紙に書く

楯 『犬じゃなくて狼です』

零 「すいません。コイツの耳と尻尾、おれに斬らせて下さい」

「だから何なのアンタ！さつきから！」

骸骨がまた叫ぶ

零 「うるっせえ！」

また頭にナイフが刺さり咲夜に引きずり戻された

零 「つか、レミリアは何処にいるんだよ？」

咲夜 「それは……」

咲夜が処刑場を見て俺も後を追う

そこには最後の檻から出されたレミリアが居た

零 「……あれは？」

咲夜 「お嬢様、カ○ネル人形の変装をして敵に侵入しようとしたらいきなり改造されたうえ衣装まで帰られて手のバズーカに引火、爆発して人里を燃やしてしまったの」

零 「カ○ネルお前だったんかい！奇跡だよ！バカどもの奇跡の共演だよ！」

骸骨が刀を振り上げる

零「ヤベエ！」

俺が走り出そうとした瞬間骸骨の一人の頭が砕けた
驚いていると川から誰かが上がってくる

正邪「万事屋零ちゃん、鬼人正邪参上！」

傘「同じく多々良傘参上！」

正邪と傘だった

「クツ、かかれ！」

「待て！土手にも誰か居るぞ！」

土手を見るとそこにはたくさん天狗と文が居た

文「椀とにとりさんは返して貰いますよ！」

「天摩だ！」

零「・・・・・・・・・・」

咲夜「私達も忘れて貰っちゃ困るわね！」

咲夜もナイフを持って前が出る

「木花咲耶姫命!?!コイツらいったい何なんだ！」

零「もう、頭がパンクしそう・・・・・・・・」

全員が骸骨に向かっていく

周りの一般人が逃げていくなか俺は呆然と立ち竦んでいた

零「おいイイイイ！何で昨日まで幻想郷だったやつが万事屋零ちゃん率いてんだ！何で昨日まで人間だと思ってた奴が神になってんだ！何で昨日までパラツチバ烏天狗だった奴が天摩になってんだ！」

俺は自棄糞になって走り出そうとすると首に冷たい何かが触れた

???「動くな。動いたらその首をかつ斬る」

零「お前は誰だ・・・」

???「俺は犬走紅葉^{クレハ}。母さんを斬ろうとしたお前を行かせるわけにはいかん」

俺が振り向くとそこには耳と尻尾が生えた黒髪の白狼天狗が居た

???「紅葉そのまま押さえて置いてください。後で事情徴収をしますので」

紅葉「はい、恋様^{コイ}」

そこに居たのはカメラを持った烏天狗の少女だった

結局骸骨は全員倒されて俺は二人に拘束された

亡霊に発情期つてあるんですか？

恋と紅葉に捕まって先ほどの処刑場に拘束された

零「え？なにこれ？」

恋「貴方に質問する権利はありません。それに質問は既に尋問に変わっているんですよ」

後ろの紅葉が刀を首筋に向ける

零「やれるもんならやってみろ！ただし！それをやった瞬間お前らは俺以下の外道に成り下がるがな！」

紅葉「貴様！」

恋「落ち着きなさい紅葉」

紅葉「……はい」

恋が俺に顔を近付ける

恋「まずは、素顔でも拝見しましょうか」

恋が仮面に手を付ける

零（ヤベエ！ヤベエヤベエヤベエ！）

このままじゃ俺の正体がバレてしまう

そう思った時、俺の額にナイフが刺さった

レミリア「家の使用人に余り手荒な事はしないで貰いたいわね」

俺は額からナイフを抜いて地面に叩きつける

零「助けるなら助けるで普通にしてくんない!? 今日で何回頭にナイフ刺されたと思つてんだ!」

咲夜「助けて貰っただけ有り難いと思いなさい」

俺は立ち上がって紅葉から離れる

紅葉「クツ! 動くな!」

零「……………動くな? そう言うのは……………」

俺は紅葉の刀を握って刀を奪い手刀で気絶させる

零「自分より弱い奴に言う言葉だぜ?」

恋「紅葉!」

咲夜「動かない方が身のためよ?」

恋が俺に団扇を向けようとしたが咲夜にナイフを向けられて動きが止まった

文「はいはい! 双方落ち着いてください」

文が割っては入り俺達は動きを止める

恋「どうして!？」

文「恋、この人は貴方じゃ敵いませんよ。例え、全天狗が動いたとしても、ね」

恋「ツ!？」

椀「それに、本当に斬る気はありませんでしたよ。その人」

恋「・・・・・・・・・・」

零「何とかなつたのか・・・」

にとり「手が振つて近付いてくる

にとり「やあやあ、助かったよ」

零「・・・・・・・・」

にとり「ありや?もしかして怒ってるかい?」

零「バカどもがバカしたせいで余計な労働してんだよこつちは」

にとり「あはは、ところで・・・」

にとり「顔が顔を耳に近付ける

にとり「君、零だろ?」

零「ツ!？」

俺はにとりの顔を見ることが出来ずにそのまま立ち止まる

にとり「お面を付けているのはそれがバレたくないからかな?」

零「……何で分かった？」

にとり「簡単だよ。君は私の名をあの時呼んだよね？」

俺は橋でにとりに手を振ったのを思い出した

にとり「私と君は初対面の筈なのに可笑しいよね」

零「もしかしたら俺が一方的に知ってるだけかもしれないだろ」

にとり「それも考えたけどね、椀の様子を見て確信を持ったよ」

にとりの視線を追って椀を見る

尻尾を振ってこちらを見つめてくる

にとり「椀がそこまで尻尾を振るのは零か文位なもんさ。文が来る前から振ってたから残る可能性は君だけ、だろ？」

俺はしばらく黙ってから溜め息を付く

零「騒ぎは起こしたくないから黙ってるけど確かに俺は零だ。100年前に決闘しようとして気付いたらここに居た」

にとり「何故居るかはどうやら分からないって顔だね」

零「ああ、だから紫を探す」

にとり「探すって言っても幻想郷は広い。何処に向かうんだい？」

零「冥界」

階段を昇りきって門を潜ろうとした時、突如目先に刀が現れた妖夢「何者だ」

そこには左目に刀傷を受けた妖夢が居た

零「西行寺幽々子に用があつてきた。そこを通して貰いたい」

妖夢「幽々子様には？」

???「師匠！離れてください！そいつは俺が！」

後ろの少年が木刀を向ける

幽々子「あらあら、何の騒ぎかしらあ？」

白玉楼から幽々子が出てくる

妖夢「幽々子様、申し訳ありません。いま侵入者を斬り捨てます！」

幽々子「ダメよく妖夢く」

妖夢「何故ですか幽々子様？」

幽々子「その人は私の友人よ」

妖夢「え!？」

妖夢が俺を見る

幽々子「妖夢、妖牙、お菓子お願いね」

妖夢妖牙「は、はい．．．．．」

零「……………」

幽々子「……………」

俺は今、何故か幽々子の寝室に連れてこられている

幽々子「さて、何から話そうかしら」

零「……………その前に、お前は俺の事が分かるのか？」

幽々子「勿論よ。だって貴方をこの時代に連れてきた一人だもの」

零「ッ!？」

俺は驚いて立ち上がる

すると幽々子が立ち上がって俺を押し倒す

幽々子「ねえ、貴方はいったい誰なの？」

零「俺は風切零だ。それ以外の何者でもねえよ」

幽々子が俺の仮面を外す

幽々子「貴方にとって私は何？」

零「?そりゃ幽々子だろ。白玉楼の主で俺の友達」

幽々子「友達……。貴方からしたら私はその程度なのね。いえ、私だけじゃなくて

妖夢も、紫も、藍ちゃんもそうなのよね」

何故か幽々子が顔を近付けてくる

幽々子「貴方は行方不明になっているって言うのは？」

零「知ってる。で？」

幽々子「実は貴方の能力の暴走が原因なの」

零「俺の・・・能力？」

俺は話を聴きながら幽々子から抜けようとするが如何せん力が強すぎる

幽々子「貴方の能力はありとあらゆる矛盾を司る程度の能力よ」

しばらく思考が停止してすぐさま復帰する

零「ちよつと待て！そんなさらつと能力言うのかよ！お前、古代の話で俺能力伏せて

たじやん！」

幽々子「でも伸ばしに伸ばしてもしらけるだけでしょ？」

零「それもそうか・・・。じゃあさ」

幽々子「？」

零「何で俺の上で寝てるの？」

幽々子「フフフ♪」

何故だろう幽々子の様子が可笑しいような・・・

零「いちよう健全な小説だからね！このままじゃR—18指定行になっちゃうから

！」

幽々子「そこら辺は濁したら良いのよ」

幽々子が服を脱ごうとする

幽々子「貴方の暴走を食い止めるために山の神が作った術式で貴方の子供を授かる娘が出てきたの。私もそうしたかったけど亡霊だから無理だったわ」

零「落ち着け！一先ず落ち着くんだ！」

幽々子「さ、今日は寝かせないわ」

零「まだ昼！ああもう！」

俺は目を閉じて幽々子の唇に自分の唇を合わせる

所謂キスである

幽々子「ッ！／／／／／／／／／／／／／／／」

妖夢「幽々子様、お菓子をお持ちしま・・・」

そこに妖夢が入ってくる

零「ちよつとは落ち着いたか？」

幽々子「そうね、今はこれで満足よ」

妖夢「な、な、な、何やっつてんですかアアアアアアアア!!!」

妖夢が刀を抜いて迫ってくる

俺は幽々子を押しして反対側に飛び仮面を付ける

妖夢「貴様！幽々子様にあんなことを！叩き斬ってやる！」

零「待って待って！あれは幽々子に押し倒されたからやっただけなんだって」

妖夢「問答無用！」

零「幽々子！お前から何とか・・・」

幽々子「妖夢く、その人は私にとって大切な人だからあまり手荒な事はダメよ」

妖夢「貴様アアアアア!!!」

零「ギヤアアアアアアアア!!!火に油注いだアアアアアアアア!!!」

妖牙「やはり貴様はここで叩き斬ってやる！」

零「しかも増えたアアアアアアアア!!!」

しかし何ともどれだけの月日が経ってもやってることはバカ一辺倒な事に何処か安

心する俺がいた

人里の小鬼、リュウグウノツカイ

あの後結局幽々子に捕まって抱き枕にされて早朝に抜け出して三人の飯を作り終わって紅魔館に戻る

零「あゝ、どつと疲れた・・・」

美鈴「や、やつと帰ってきましたね」

そこに居たのは凍えている美鈴だった

零「ちよ！何でそんな凍えてんだよ!？」

美鈴「れ、零さんが帰ってこないからじゃないですか」

零「わ、悪い！ちよつと冥界で帰れなくて・・・」

俺は美鈴に上着を着せて入る

美鈴「・・・やっぱ優しいですね、零さんは」

改めて美鈴の言葉を聞き足を止めて美鈴を見る

零「なんで・・・」

美鈴「その不思議な気は零さんしか無いですしね・・・」

俺は溜め息を付いて美鈴の前に戻る

零「その事を皆には？」

美鈴「言つてませんよ。お面で顔を隠してるのはバレたくない理由があるからでしょ？」

零「あ、ああ・・・」

美鈴「なら、私は何も言いません。あ、それと」

零「？」

美鈴「今から人里の貸本屋に本を返しに行きなさい、とお嬢様の言付けです」
そう言うのと美鈴が胸の間から本を取り出した

零「何でそんなところに・・・」

美鈴「中華服なんでここくらいしかありませんでした」

美鈴は満面の笑みだが俺はただただ苦笑いするしかなかった

人里に来て俺は目を疑つた

一週間前の静けさが何処に行つたのやら賑わいを見せている

俺は鈴奈庵の暖簾を潜る

??? 「いらつしやい！」

そこには小鈴そつくりのポニーテールに鈴をくくりつけた黒髪の少女だった

零「えっと、紅魔館からこの貸本を返しに来ただけで小鈴は居る？」

???「えっと、お客さん。小鈴は私の母です。でもずっと前に亡くなりました・・・」
俺はとんでもないことを聞いてしまった

ここは100年後の幻想郷、小鈴が生きている訳が無い

零「ごめん。悪い事聞いちゃった」

???「だ、大丈夫！半妖の父もこの空の下の何処かに居るはずですし！それまで私、本居小鈴音が店番です！」

俺は小さな息を漏らす

その父がおそらく自分だとは言える訳もないのだ

鈴音「それに私、四半妖ですから普通の人間よりは寿命も長いですし」

鈴音は笑ってそう言うが一人の寂しさは生半可な物ではないのを俺は知っている

小鈴も一人で貸本屋を切り盛りしていたが母親や毛根元死刑囚も居た

俺はコイツの側に居ることも出来ていない

例えそれが未来の俺だとしても、だ

俺は知らぬ間に鈴音を撫でる

鈴音「あ、あの・・・」

零「あ、悪い！そう言えば外の賑わいって何なんだ？」

鈴音「あ！今、仙人様と天人様がいらっしやるんです！」

零「仙人と天人？」

鈴音「はい！しかも仙人様は父の妹、つまり私の叔母なんですよ！」

と言う事は仙人は華仙の事なのだろう

零「んじゃ、邪魔したな。・・・父親、帰つてくると良いな」

鈴音「え!？」

そのまま俺は店を出た

しばらく歩いてみると人集りが見えた

遠巻きから見てみるとやはり華仙と天子、衣玖と衣玖に似た黒髪の少年が居た

「仙人様、畑が妖怪に襲われて大変なのです！どうかして頂けませぬか！」

華仙「分かりました。何とかしましょう」

「ありがとうございます！」

零「へえ、仙人つてあんなこともやるんだな・・・」

衣玖「仙人に興味がおありで？」

零「ウオツ！」

後ろから衣玖に声をかけられて尻餅を突く

零「いつの間に……」

衣玖「空気を読んで退散しました。ところで、この辺りでは見かけない方ですね。面霊気何ですか？」

零「その面霊気とやらは知らんがおら只の半妖だよ」

衣玖「今時半妖とは珍しい……」

零「そうなのか？」

衣玖「はい。今、幻想郷はその殆んどを百鬼夜行に蹂躪されている状態です。だからこそ、人間と妖怪の間は広がる一方何ですが……」

衣玖が天子と少年を見る

衣玖「やはり中にはそう言う妖怪も居るんですね……」

零「アンタの息子さんかい、ありや？」

衣玖「はい。永江一鬼と言います」

零「……旦那は？」

衣玖「……今は何処に居るのやら。でも、きつと何処かを呑気に歩いてるんじゃないですかね」

衣玖が空を見上げながら遠い目をする

衣玖「……あ、すいません。貴方には関係の無い話でしたね」

零「いや、参考になった。ありがとよ」

衣玖「いえいえ」

俺は歩いて紅魔館に帰る事にした

しばらく森の中を歩いていた時だった

零「……………あれ？ここ、どこだ？」

迷った……………

零「いやいや、流石にこの年で迷子って無いわ」

俺は辺りをみわたす

全く見覚えがない

藍「……………何をしている？」

声が聞こえて後ろを見るとそこには藍が居た

藍「お前が居るべきはここじゃないだろ？」

藍は俺の溝内を殴って仮面を取る

額に札を張られ俺は気を失った

私は零を元の時代に戻して零の封印場所に向かう

零の封印にはあの忌々しい殺生石が使われている

私はその前に仮面を置いて立ち上がる

藍「紫様と幽々子様も戯れが過ぎる。何故零を今の時代に連れてきたのだ・・・」

紫「それは、零にはこの現状を知って欲しかったからよ」

紫様がスキマから現れる

紫「今回の件で零は少なからず自分の置かされた状況は理解したはずよ。後は、零に任せましょう」

そう言つて紫様はスキマに消え、私も橙のご飯を作るために帰路に突いた

その殺生石にひびが入っていると知らずに・・・

万事屋零ちやん宗教戦争決戦篇

親分と無意識こいし

零「う、ううん……」

マミゾウ「む？目が覚めたか」

俺が起き上がるとそこにはマミゾウが酒を呑みながら座っていた

零「……ここは……」

マミゾウ「ん？命蓮寺じゃ。お主、墓地で倒れておったんじや」

零「おめえ、酒呑んで良いのかよ？」

マミゾウ「わしや、出家してないしのう」

俺は布団に寝転がる

マミゾウ「……お主、今まで何処に居た？」

零「うゝん。言わない。言っても信じないだろうしな……」

マミゾウ「……そうか」

マミゾウが立ち上がって部屋を出る

しばらく寝転がりながら月を見る

今日は満月だ

その時廊下から走ってくる音が聞こえてバンと襖が開く

小傘 蛮奇 「「零（零）ちゃん！」」

小傘と蛮奇の二人が抱き着いてくる

ナズーリン 「全く、零が目覚めたと聞いたたら人の話を聞きもしない……」

零 「二人とも……ナズーリンも、心配させちまって……」

ナズーリン 「全くだよ。二人の話を聞いた限り君は何時も無理して二人を心配させてるみたいじゃないか。今日はここに泊まれば良いきさ。聖も、泊まる事は許してくれさ」

ナズーリンが部屋を出て部屋は異様な雰囲気にも包まれる

零 「あー、えつとな。二人には悪いと思ってるよ？でも俺はフツツに過ごしてるだけで、何か色々巻き込まれると言いますか……」

蛮奇 「アンタ、ちよつとは私達のことも考えてよ！」

蛮奇が俺の首を絞める

小傘 「蛮奇ちゃん！落ち着いて！」

蛮奇 「小傘！アンタも何か言つてやんなさいよ！コイツが何時も何時も問題に捲き込まれてアンタを蔑ろにしてるんでしょ！」

俺は蛮奇の手を退けようとするのを止めて寝転がる

蛮奇「……何してるのよ」

零「悪いのは俺なんだ。煮るなり焼くなり好きにしろ……」

俺が目を瞑っていると頬に熱い何かが落ちてきた

蛮奇「何で……何でよ……。何で何時もそうなのよ！」

蛮奇が俺の胸を殴る

流石に痛い

蛮奇「何時もは仕事を私達に押し付けるくせに！何で大事な事は一人で背負い込むのよ！そんなに私達は頼りない！」

零「ち、違ッ！」

蛮奇「違うじゃないでしょ！」

蛮奇に遮られて俺は黙りこくる

だが……

小傘「それは違うよ。蛮奇ちゃん」

小傘が口を開いた

小傘「零ちゃんはあちき達を一番大事にしてくれてるんだよ。だから危ないことに捲き込ませないんだよ」

蛮奇「なんでそんなこと分かるのよ……」

小傘「ちよつと前にあちきが帰ってこなかった事あったでしょ？あの時あちき、魔法の森に居たの。辺りは薄暗くて身動き取れないし、大雨だから叫んでも聞こえない。でも零ちゃんは見つけてくれたの。髪も服も濡らして息も切れて。あちき驚いて聞いたの。どうして傘をささなかったの？って。その時零ちゃんは俺の傘はお前だけだしなって。零ちゃんはちゃんとあちき達を見てくれてるんだって思ったの。だから蛮奇ちゃんも……」

そこまで言うとお傘が倒れた

零「小傘!？」

立ち上がろうとすると蛮奇の力がナイコとに気づいた

蛮奇を見るとどうやら気を失っているらしい

零「こりやいったい……」

こいし「感情が奪われてるんだよ」

声が聞こえて振り向くとそこにはこいしが居た

零「何時から居たんだ？」

こいし「えつとね、忘れられし者達の楽園位から？」

零「それ100年後の万事屋篇の最初じゃね？」

こいし「うゝん、分かんない！」

零「さ、流石無意識・・・」

俺は立ち上がってこいしを撫でる

零「教えてくれてありがとう。んじや、行ってくる」

俺は二人を寝かせて部屋を出ようとする

مامィゾウ「そう言う事ならワシが案内してやろう」

こうして最後の人気争奪戦に乗り出した

能楽舞う面霊気

マミゾウに連れられて人里に来た

そこには何とも無表情な人達が外に居た

零「アンタらいったい何して・・・」

マミゾウ「待て」

人里の人に近付こうとしてマミゾウに止められた

マミゾウ「あそこを見てみい」

マミゾウの指を辿るとそこには面を被った少女が居た

零「誰だ？」

???「・・・」

零「無視？」

マミゾウ「んじやまあ、ワシはお暇するとするかの」

マミゾウが消えてもう一度少女を見る

???「私は秦ころ」

零「あ、喋った」

「こころ」博霊の巫女に退治され私は更正した。そして我は気付いたのだ。目眩ましのよな弾幕、ド派手な光線、圧倒する体術！感情をかき乱していたのはお前達宗教家ではないか！」

零「おら何も知らん」

こころ「私はそれを正さねばならぬ」

俺の主張を無視するこころに少しムカツとしながらも俺は木刀を構えた

零「やるしかねえか・・・」

神子「その決闘、私達も一つ嘯ませて貰おうか！」

空から神子と聖が降りてきた

聖「零、貴方はまだ身体が治りきっていないのにどうしてここに來たの？」

零「いや、マミゾウに連れて來られた」

マミゾウ「来る気満々じゃったくせによう言うわい」

何処かに行つた筈のマミゾウが建物の屋根からこちらを見る

マミゾウ「何かおもしろくなりそうじゃから物見させて貰うぞい」

神子「うむ。まあ、戦いの支障にはならなそうですし良いですよ。ではこころ、行き

ましようか」

零「へ？」

「こころ「おー？」」

神子がそう言うところの前に出る

聖「零、貴方は言葉では分からないみたいだから少し力づくにすることにしたわ」

零「聖まで・・・」

マミゾウ「ニヤツハツハツ！こりや面白い事になったのう」

俺はマミゾウに弾幕を飛ばした後に木刀を抜いて走り出す

神子「聖、遅れを取るなよ」

聖「誰に言っているのかしら？」

こころ「宗教家を根絶やしだ！」

こうして俺達はぶつかった

マミゾウ「イタタ、もう少しワシを労って欲しいもんじゃ・・・」

マミゾウが起き上がって額を撫でる

勇儀「何だい。一番乗りだと思ったら誰かいるじゃん」

そこに着物を着た勇儀が歩いてくる

マミゾウ「なんじゃ？お主も観戦かの？」

勇儀「そりゃ、弟分の大舞台を見ないわけにもいかないだろ。あ、あと二人来るから

ね」

マミゾウ「その二人は酒呑童子と茨木童子かの？」

勇儀「ん？ああ、そーいやアンタは佐渡の狸の大親分だったか」

マミゾウ「これ、ワシの事よりちゃんと勝負を見んか」

神子とところが剣と薙刀を振ってくる

俺は木刀でそれを受けて風払う

神子「クツ！一旦引こう！聖、任せる！」

聖「あらもう？それじゃあこころちゃん。行きましよう！」

こころ「おー！」

聖が殴りかかってきてこころのお面から弾幕が撃たれる

零「あーもう！しやらくせえ！」

勇儀「零、押され気味だな・・・」

マミゾウ「先ほどまで寝ておつたんじゃ。それに加えて相手は幻想郷主要勢力のトツ
ブ二人、劣勢なのも無理は無いのう」

勇儀とマミゾウが酒を呑みながら俺達の戦いを見る

萃香「もう！華仙がグズグズしてるからもう始まつてるじゃんか！」

華仙「萃香が酒を呑んでるからでしょ！」

萃香「何おく！」

華仙「なによ」

二人が胸を擦り合わせる

これがいわゆる胸囲格差

マミゾウ「これこれ、鬼の頭領と副頭領が聞いて飽きれるぞい。それよりほら、零の観戦に来たんじゃろ？」

マミゾウが指を指すと二人がこちらを見る

萃香「押されてるじゃん！」

華仙「しかも何ですかあれ！多勢に無勢ですよ!？」

マミゾウ「この劣勢をどう切り抜けるかが彼奴の腕の見せ所じゃのう」

零「おら！」

聖「ッ！」

聖の足をはらってここに斬りかかる

しかし神子に防がれて俺は一旦下がる

神子「こうなれば三人で一斉攻撃だ！」

聖「仕方ありません」

「こころ」「やるぞー！」

三人が一齐に弾幕やらレーザーやらをハナツテクル

零「こつからが本番ってか？なら！」

俺はポケットからメダルを取り出す

零「憑依『佐渡の大親分』！」

俺はマミゾウを憑依させて立ち上がる

正直この憑依、作者すら忘れていた技であるの

ONE PIECEで言うところのゴムゴムのピストルだからね

マミゾウ「ヌオツ!? 零がワシそっくりになったぞ！」

萃香「お！久し振りに零の憑依が見れたよ」

三人が弾幕を撃ってきて俺はそれをギリギリで避ける

そのまま丸薬を口に含んで噛み砕く

零「零さん化弾幕七十変化ッ！」

俺から煙が出て張れると俺が70人に増えていた

神子「増えた!？」

聖「いったい本物は何処に……」

二人が混乱しているところが薙刀で一氣に10人の俺を斬り捨てた
こころ「全員斬れば解決する」

神子「それもそうだ!」

聖「いぎ、南無三!」

二人もこころに続きどんどん俺を倒さしていく
とうとう最後の一人となつて、憑依を解除した

そしてまたメダルを取り出す

零「憑依『小さき百鬼夜行』!」

今度は萃香を憑依する頭に二つ額の右に一つ角が生えた

勇儀「あの角……何だか昔の零を見るみたいだねえ」

不意に勇儀がそう漏らす

マミゾウ「ワシもいつぺんしか屋根八津を見たことが無かったがああ、あの黒く輝く角はよ
う覚えておるよ」

萃香「いや、零のすがたを見てると何だか昔に戻ったみたいだね」

華仙「兄さんは角があっても無くてもそのまま何ですね・・・」

華仙が自分のシニョンを触りながら呟いた

その時、何かどす黒い妖気が辺りを包み込んだ

神子「何だ・・・先程までの澄んだ妖気じゃない？全てを怨むような、そんな感じだ」
「こころ「あいつの姿が変わった辺りから変わったぞ？」」

七人が零を見る

しばらく力無く項垂れていた零が顔を上げると血走った目と狂気的笑みを浮かべた
零が顔を見せた

無邪気とはすなわち狂気である

華仙「何で兄さんが!?」

華仙が零を包帯で縛り付けながら言う

萃香「分からない!でもこのまま野放しにしていたら必ず幻想郷の結界が崩壊するよ!
!」

勇儀「何かこのバカを止める方法は無いのかい!」

マミゾウ「バカを言え!ワシ等七人でこれじゃと言うのに倒せると思うか!」

萃香と勇儀が零の頭を殴りつけて地面に叩き付ける

直ぐ様マミゾウが地蔵になって零の上に乗る

神子「一旦零を人里から出す事だけを考えろ!ここじゃあ人間に危害が及ぶ!」

聖「それには賛成ですが一体どうやって・・・」

そうこうしていると零がマミゾウを蹴飛ばして包帯を千切りこのころに向かつて走り出した

神子聖「(このころ)(このころちゃん)!!」

零がそのままこのころを引き裂こうとしたその時、零の動きが止まった

零は何かに苦しみだしそのまま飛んで何処かに行ってしまった

神子「こころ！大丈夫か？」

神子と聖がこころに近づくと

こころ「……かつた」

聖「え？」

こころ「感情が見えなかった……」

神子「それはどう言う意味だ？」

こころ「あれはさつきまでのアイツじゃない……。アイツは別人、生ける屍だ……」

『……………』

こころの話しを聞いて全員が下を向く

その時全員の後ろから足音が聞こえた

蛮奇「アンタら！こんな所でへばってなにしてんのよ！」

蛮奇が萃香の胸ぐらを掴んで顔を近付ける

蛮奇「アンタ零の頭領何でしょ!?部下があんなになつて何とも思わないの!?!」

萃香「思わないわけ無いだろ！」

萃香が蛮奇の胸ぐらを掴み返す

勇儀「お、おい萃香！おちつけ！」

華仙「蛮奇さんも落ち着いて！」

蛮奇「だったら今すぐに零を助けに行きなさいよ！」

萃香「何も知らない癖にッ！」

マミゾウ「止めんか！」

萃香が蛮奇を押し倒してマミゾウが止めに入る

萃香は蛮奇を話して立ち上がる

萃香「……何も出来ない癖に、弱い癖に！」

萃香の顔から涙が零れ落ちる

萃香「私に……零を止めるだけの力がないことなんて知らない癖に……勝手な事

をぬかすな！」

そう言つて萃香が霧になつて消えた

蛮奇「……………」

蛮奇はその無い後ろ姿をずっと見ているのだった

幻想郷の霧の湖

そのほとりに建っている紅い館、紅魔館

その地下に悪魔の少女が一人、今狂気に飲まれていった

俺は目が覚めて立ち上がる

真つ暗な空間、完全な暗闇がここにあった

零「ここは・・・」

???「ここは君の心の中です」

振り向くとそこには頭の長い男が立っていた

零「お前は、誰だ？」

???「私は君の父親ですよ」

零「・・・」

???「まだ名前を名乗っていませんでしたね。私は奈落濡羅吏、百鬼夜行の頭領です」

俺は一気に濡羅吏に詰め寄り木刀を振る

しかし濡羅吏は笑顔を崩さず指一本で木刀を止めた

濡羅吏「まあまあ、話を聞きなさい。今、十二怪異の一人、卑弥呼が君ともう一人、フ

ランドール・スカーレットを暴走させて居る」

零「・・・それを俺に言っただうなる？」

濡羅吏はふと笑い笑みの消えた顔をこちらに見せる

濡羅吏「護りたいなら護ってみろ、クソガキ」

そう、一言そう言った

紅魔館の門番、美鈴がいつもどおりに門番眠っをしてていると門が開いた

美鈴が起きて門をみる

美鈴「妹様？」

そこにいたのはフランだった

美鈴がフランに腕を伸ばすと美鈴の腕が吹き飛んだ

美鈴「ッ!？」

フランが美鈴を向きその狂気に染まった目を見せる

美鈴は血がドバドバと流れる腕を抑えながら構える

フランが美鈴に飛び付こうとしたその時、空から紅い槍が振つてきた

二人が空を見るとそこには空を飛ぶレミリアの姿があつた

レミリア「………咲夜」

咲夜「ここに」

レミリア「美鈴の手当てをして上げなさい」

咲夜「かしこまりました」

そう言うとき咲夜は一瞬で美鈴の元に行き美鈴を担ぐと美鈴と共に居なくなつた

レミリア「さてフラン、申し開きはあるかしら？」

フランはレミリアの言葉を無視してレミリアに襲い掛かる

レミリア「まったく、今回は流石においたが過ぎるわね。いくら狂気に飲まれてるか
らと言つても、少しお仕置きするわよ！」

そう言つてレミリアはグングニルを手取る

フランもレイヴァテインを手に取り互いに武器が交わつた

マミゾウ「よし、集まったの」

その頃勇儀達は零を止める戦力を命蓮寺に集めていた

幽香「いきなり呼びつけて何の用かしら？」

幽香が殺気を孕めて言ってくる

勇儀「まあ、待ちなつて。お前は零と仲が良いだろ？零の事も良く知ってるし」

幽香「それは私がアイツのご主人様だからよ」

勇儀と幽香の間に緊張が走る

さとり「あ、あの・・・」

その緊張を破るようにさとりが手を上げる

聖「どうしました？」

さとり「具体的にはどうやって零さんを元に戻すんですか？」

神子「こころの話しによれば零は狂気に心を飲まれてしまっている。だから君の力を使って誰かを零の心に送り込み狂気を祓うと言うのが作戦だ。八雲紫が動かないのが気掛りだが今はこれしかない」

神子が説明すると周りの全員がさとりを見る

さとり「・・・分かりました。彼にはお世話になりましたし」

さとりが溜め息を付きながらそう言う

聖「未だ目覚めない方も居るなか皆さん、集まって頂きありがとうございます。今一度お礼を言わせてください」

今ここに居るのは先ほど零と戦った萃香除く六人と幽香、さとり、小傘である
その時寺の扉が開いた

フランと戦っていたレミリアが膝を付く

パチュリー「レミィ！」

レミリア「来ちゃダメ！」

パチュリーがレミリアに近付こうとしたその時、フランがパチュリーに気付き襲い掛かる

小悪魔「パチュリー様！」

パチュリー「……え？」

小悪魔がパチュリーを押し倒す

パチュリーは倒れる刹那振り返り小悪魔を見た

そこにいたのは

今まで見たことの無い顔をした悪鬼^零羅刹だった

パチュリー「れ、零？」

パチュリーが零を呼ぶが零は振り向かずフランに木刀を向ける

レミリア「ッ！パチエ！零から離れなさい！」

パチュリーが茫然としているとレミリアがそう叫んだ

しかしパチュリーの身体が動かずじっとしていると小悪魔がパチュリーを掴んで離れる

レミリア（フランの相手だけでも大変なのに一体何なのよ！）

レミリアがそう心で舌打ちを打ちながらグングニルを投げる

しかし零はそれを掴み捨てるとフランに向き直る

レミリア「こつちに興味を示さない……？」

萃香「おい吸血鬼！」

レミリアが怪しんでいると霧が集まって萃香が現れた

萃香「力を貸せ！」

レミリア「随分いきなりね。でも良いわ。こっちもフランをどうにかしたかったし、それに・・・こんなに血が滾るのはいつぶりだろうな」

レミリアの顔つきが変わり空気が揺れる

そこに居たのは何時ものレミリアでは無くカリスマと言うに相応しい紅魔館の主、レミリア・スカーレットだった

零は先程よりも深く笑いフランに飛び込む

そして木刀でフランの腹を斬る

するとフランの背からフランの形をした黒い何かが出てくる

その黒い何かを零が食べるとフランが力無く落ちる

次の瞬間フランが消えてレミリアの隣にフランを抱えて立つ咲夜が居た

レミリア「咲夜!？」

咲夜「お嬢様、応援を連れてきました！」

レミリア「そうか・・・」

レミリアが目を瞑りクワツと開く

レミリア「咲夜！零を止める。手伝いなさい！」

咲夜「はい！」

萃香「ツ！・・・すまない」

レミリア「・・・なに、フランを助けてくれた礼さ」

萃香「本人はそんなつもり一ミリもないだろうけどね」

レミリアがまたグングニルを握る

レミリア「いや、それが無くともさ」

レミリアが動き出そうとすると動きが止まった

萃香が驚いて零を見ると腕と足に包帯が巻き付けられていた

華仙「萃香！大丈夫！」

萃香「華仙!？」

勇儀が飛んで零を地面に殴り付ける

勇儀「こら、大人しくしろ！」

レミリア「地底の鬼がどうして・・・」

幽香「零だからよ」

零が勇儀と華仙を振り払って幽香に襲い掛かる

眉一つ動かさずに零を踏みつけた

幽香「皆、コイツに救われて惚れた口なのよ」

レミリア「いや、行動が惚れた奴のそれじゃないんだが？」

さとり「そのまま抑えていてください！今道を作ります！」

零が暴れるが聖と神子、マミゾウに抑えられる

神子「少し大人しくして貰おう」

聖「安心してください。すぐにその狂気、取り除いてあげますから！」

マミゾウ「ちと手荒じやが勘弁しとれよ！」

さとり「よし！小傘さん！手を！」

さとりがサードアイで零が見ながら叫び手を伸ばす

小傘はその手を取り眠りに付いた

勇儀「何してるんだい萃香！お前も早く！」

萃香「え？」

萃香が驚いて勇儀を見る

幽香「こつちよりも心の中の方が危険でしょ。あの子だけじゃ無理よ」

レミリア「安心しろ！こつちは我々が何とかする！」

萃香「・・・頼んだよ！」

そう言つて萃香は走り出し小傘が握っているさとりの手と逆の手を握つて眠りに落

ちた

濡羅吏「もうすぐだ。もうすぐで君の肉体は私のものに・・・」

大バカ野郎

小傘「う、ううん……」

零の心の中に入り気を失っていた小傘が目を覚ました

萃香「目、覚めたかい？」

小傘の側に座っていた萃香が小傘が起きた事に気付いて振り向く

萃香「悪いが私には零を救う資格は無いらしい」

小傘が寝ぼけ眼で辺りを見るとそこには色んな体勢の零が浮いていた

萃香「零とは昔ツからの付き合いだがまさかここまで闇が深いとは……」

辺りから零の弱音が口々に聞こえてくる

小傘は生唾を飲みながら辺りを一望する

萃香「で、どれが本物か分かるかい？」

小傘「……」

小傘が目を閉じて零の気を探す

それを見た周りの零が小傘に襲い掛かった

萃香が零を殴り飛ばすと黒い霧になった

萃香（この霧・・・やっぱり瘴気かッ！私は大丈夫だけどコイツには毒か・・・）

萃香は後ろの小傘を見た後小傘を抱き抱えて飛ぶ

萃香「どうだい？零は見つかったかい？」

小傘「・・・見つけた！アツチ！」

萃香「わかった！」

萃香が小傘の指差す方に急ぐ

零が追ってくるが萃香の速さに敵うわけも無くドンドン

引き離されて行く

しばらくして萃香達の目の前に黒い半透明の球体が現れた

中には確かに零が居る

萃香が球体に触ろうとすると球体に弾かれた

萃香「・・・何でだよ」

萃香は小傘を下ろして球体に近づく

小傘「駄目だよ！危ないよ！」

萃香「こんな所で立ち止まっては居られないんだ！」

萃香が球体に腕を突っ込む

すると稲妻が走ったかのような痛みが萃香に襲い掛かる

小傘「萃香ちゃん！」

萃香「こんな痛み……おい、聞こえてるんだろ！ここから出てこいよ！」
零「……………」

更に萃香は球体に身体をめり込ませる

更なる痛みが萃香に襲い掛かり萃香は気絶しそうになる

萃香「この……大バカ野郎ッ！」

萃香が倒れるのを踏み留まって零を殴り飛ばす

すると零は吹き飛び黒い球体から出る

萃香も直ぐ様飛び出して零の胸ぐらを掴む

萃香「お前に分かるか!? 私含めここに集まった皆が何の為に戦っているのか! お前に分かるか!? 自分に力が無いことを知っているから人に頼んだ奴の気持ちか!」

零「……………」

小傘「萃香ちゃん……………」

萃香が零を殴り付ける

萃香「何か言い返せよ! それがお前だろ! バカで純粹で! 勝算が無くても向かっていく無鉄砲! それがお前、風切零だろッ!」

零「……………つてえな……………」

萃香「何だつて!?聞こえないよ!」

零「痛エなつたんだよこのドクされ幼女!」

死んだ目をしていた零が目を見開き萃香を殴り付ける

小傘「零ちゃん!」

零「つたく、ピーチクパーチク長ツ垂れた説教はもう聞きあきたぜ」

萃香「それでこそ零だよ」

零は腕に力を籠める

零「んじやまあ、ここから出るか」

零が上を見てそれに釣られて二人も上を見る

濡羅吏「まさか、酒吞童子自らが助けにくるとは・・・」

萃香「残念だったね!零は返して貰うよ!」

萃香が叫ぶと濡羅吏が溜め息を付き消える

濡羅吏「今はまだ君達に預けおこう。ただ・・・いづれは我々が貰い受けるがな」
しばらくその場に静寂の時が流れた

一方その頃外では・・・

レミリア「?大人しくなった・・・?」

マミゾウ「と言うことは……」

零の口が開きその中から零が出てくる

零「お？ 出れた？」

神子「何故そんな所から……」

萃香「お、やっと出れたね」

次は萃香が零の股間部から出てくる

零「てめえはどんなとつから出てんだ！」

「こころ」「先ずは自分の姿を見ろ。そつからツツコめ」

零が萃香を見てツツコむが零も零で完全に可笑しな所から出ているのでこころに

つっこまれる

小傘「ふえく零ちやくん」

今度は小傘が零のケツの穴から顔を出す

零「小傘！ ちよつと待ってろよ！」

萃香「私と扱いちがくない!？」

零「お前自分で出れんだろうが！」

その光景を遠目で見ていた幽香が溜め息をつく

幽香「結局、零は何処まで行っても零ってことね」

聖「安心しました？」

幽香「まさか。寧ろこれからも拘束の必要性が高まって頭が痛いわ」

そのまま幽香は聖の隣を過ぎ去って帰っていった

紫「さて、喜んでいるところ悪いけど少し話を聞いてくれるかしら？」

いきなり紫の声が聞こえて全員が振り向く

萃香「紫、今更どうした？」

零「てか、冬眠から覚めたのか？」

紫「お陰様だね。本題に移るけど零、今から貴方の力を封印するわ」

そう言つて紫は零達が出てきた零を触る

今やその零も黒い物体になり動かない

紫「フランドール・スカーレットの狂気を取り込んだ貴方はもはや幻想郷の脅威でし

かないの」

零は目を閉じて紫の話を聞く

零「・・・分かった。やってくれ」

小傘「零ちゃん！」

小傘が近付こうとしてマミゾウが止める

マミゾウ「止めてやるな。幻想郷を護る為に男が一本筋を通したんじや。カッコいい

じゃないか……」

紫がお札を取り出す

そして紫がそのお札を零の姿をした物体に張り付ける
するとお札に黒い物体が吸い込まれた

紫「はい終わり♪」

紫がそう言うと全員が零を見て唾然とする

零「?どうしたよ?」

レミリア「れ、零が……」

『小さくなった!?!』

零「……はい!?!」

ほろ苦いチヨコは恋の味

パルスィ「それでそんなに小さくなっちゃったの？」

パルスィが橋の取っ手に凭れながら聞いてくる

零「ああ。まあ、力が衰えた以外何の支障も無いから良いんだけどな」

パルスィ「で、何で地底に来たのよ？」

零「お前、今日が何日か知ってるか？」

俺はパルスィに自嘲気味な笑みを見せながら質問を質問で返す

パルスィ「何日って如月の14・・・あ」

零「つまりはそう言うことだよ」

今日は如月、つまり二月の14日な訳で察しの良い君達なら分かるだろう

そう今日はバレンタインである

パルスィ「何か勇儀が柄に無くチヨコを作ってたのはそう言うわけだったのね。そう

言えばヤマメとかキスメとかさとの所とかも作ってたわね・・・」

零「逆にそれでも気付かなかったのかよ・・・」

俺はパルスィに呆れながら人里の風景を思い出す

パルスィ「また地上に行くの？」

勇儀「ああ、コイツを届けたくてね」

コイツとはおそらくチョコの事だろう

勇儀「ほら、アイツ周りに女多いし早めに渡したいしさ」

そう言つて勇儀は橋を渡っていく

それにしても勇儀の好きな奴は中々の色男のようだ

女性比率が多い幻想郷の女性は一癖も二癖もあるくせ者揃いだ

そんな奴らが好いてるんだからきつとその男もくせ者なのだろう・・・妬ましい

ヤマメ「おく、パルスィ。今日もやってるんだ」

パルスィ「それが仕事だしね。ヤマメとキスメも外に行くの？」

どうやら次に来たのはヤマメとキスメらしい

ヤマメ「も？てことは先越されちゃったか。多分姐さんかな？キスメ、急ご！」

そう言うときヤマメとキスメが走っていつてしまった

パルスィ「・・・私ちよつと用があるから離れるけど大人しくしてなさいよ」

パルスィが行つてしまい俺は一人になる

しばらく堀の川を見ていると何やら声が聞こえた

空「さとり様！早く行きましようよ！」

さととり「こらお空、走らないの」

燐「まあまあ、さととり様。お空はこれを渡すためにずっとチョコを作れ練習をしてたから緊張してるんですよ」

こいし「そうだよお姉ちゃん！空気読もうよ」

次に来たのはどうやら地霊殿の面々らしい

燐「あれ？パルスイさんが居ませんね」

こいし「あの人にチョコでも私に行つたんじゃない？」

空「エヘヘ、これあげたら喜んでくれるかな〜♪」

さととり「きつと喜んでくれるわよ」

四人が行つたのを見て俺は橋の下から出て橋の上に行く

零「何やってんだろうな・・・」

俺は頭をかきながら皆の行方を考えてみる

きつと好きな奴に想いを伝えて笑っていれのだろう

パルスイ「あら、もう良いの？」

後ろを振り向くとパルスイが立っていた

零「悪いな。やっぱ帰るわ」

パルスイ「・・・そう」

パルスイが懐から何かを取り出して投げてくる

俺はそれを受け取ってみるとそれはチヨコだった

パルスイ「一応言っておくけど義理だから・・・」

零「それでもうれしいぜ！有り難う！」

俺はこうして飛び立った

そして幻想郷に来て一年、今までで一番皆と笑い会った

白い日

零「いやー、前回投稿して役一ヶ月、久しぶりだなあ！」

俺がソファに座ってそう呟いていると後から蛮奇に頭を殴られる

蛮奇「久しぶりだな、じゃないわよ！一体何で一ヶ月も投稿空いたか説明しなさい！」

小傘「零ちゃんお願い！」

零「い、いやさ、次から輝針城篇な訳なんだけど……。柳とか出てくるし3月終盤に投稿しようと書き進めて予約は入れてんのよ。今は六面」

俺が作者の代入りで事情を説明する

蛮奇「……何か言うことは？」

俺はソファからとりあえず画面の前の君たちに向かって俺は伝家の宝刀土下座をします

零「えー、一ヶ月間投稿しなくて、すんませんでしたー！」

零「はい、今謝ったんで東方鬼神録本編始めます」

蛮奇「ふざけんな！」

零「あた」

3月・・・弥生の十三日、皆はこの日が何の日か知っているだろうか？
そう、ホワイトデーである

何だかんだ皆から義理チョコを貰った限りはちゃんとお返しはしなければならぬ
零「はい、てことで用意したものがこちらになります」

俺は机においたクッキーの袋を見る

零「これを皆に配って行こうと言う訳だ」

文「なるほど。そこでこの幻想郷最速の私に配達の手伝いをして欲しい訳ですね」

零「しよゆこと〜」

俺は文にクッキーの袋を投げる

文「おっと、ありがとうございます！では早速一組目行ってみましょう！」

てことで文に紅魔館に運んで貰った

美鈴「あれ？零さん。どうしました今日は？」

零「届け物だよ」

俺は美鈴の手にクッキーを置く

零「バレンタインのお返し。皆で食えよ」

美鈴「あ、はい！ありがとうございます！」

俺は文にしがみついて飛び立つ

それから・・・数ヶ月の月日が・・・

文「流れてませんからね!?物の三行しか流れてませんよ!」

零「え、別に良いじゃんかよ。三行だろうが数ヶ月だろうが一緒だろ」

文「一緒じゃありませんよ!何だかんだ紅魔館、人里、永遠亭とクツキー配ったですけどまだまだあるでしょ!ちなみに地底には一緒にいきませんよ」

零「だーもう分かったよ!とどのつまりこうだろ?」

・・・かくして俺達のクツキーを渡す旅が始まった

零「俺達の冒険はこれからだ・・・」

蛮奇「じゃ、無いでしょ!手抜きにも程があるわよこれ!」

小傘「何だかんだクツキー渡したシーンがほとんど無いよ・・・」

零「つたく、分かったよ・・・」

二人に攻められて俺はまた考えを巡らせる

紅魔館で・・・

レミリア「おめでとう」

白玉楼で・・・

幽々子「おめでと〜」

永遠亭で・・・

輝夜「あ、スター。おめでとう」

地霊殿で・・・

さとり「おめでとうございます」

人里で・・・

小鈴「おめでとー！」

守矢神社で・・・

神奈子「おめでとさん」

万事屋で・・・

零「ありがと」

この小説をお気に入りにしてくれた方々にありがとう
自分の無計画性にさようなら
何だかんだこんな感じでごめんなさい

蛮奇「つていい加減にしなさいよ！これもうホワイトデーの話じゃなくなってくつてお気に入りに入り100人突破記念でしょうが！」

零「良いじゃねえか。エヴァ」

蛮奇「誰もエヴァの話なんてしてないわよ！」

蛮奇と小傘が外に向かう

蛮奇「もう勝手にしなさいよ！」

小傘「待つて蛮奇ちゃん！」

零「・・・おい」

蛮奇「今度は何よ！」

俺は二人がこつちを振り向いたと同時にクツキーを投げる

二人がそれをキャッチしてポカンとした顔でこつちを見る

零「お前らにはさあ・・・一番迷惑かけてるしさ・・・。まあ、なんだ・・・。ありがとよ」

そう言つて俺は恥ずかしさのあまりソファに不貞寝した

東方輝針城

秘境の人魚姫

段々と気温が暖かくなった今日この頃

俺はミスチーの依頼で霧の湖まで鰻釣りに来た

零「最近蛮奇が顔出さねえんだよ。何か知らね？」

わかさぎ姫「うくん・・・私も最近蛮奇ちゃんには会ってないのよ」

零「そっか・・・」

俺は頭を悩ませながら釣り針を見る

零「ところでさ・・・」

わかさぎ姫「？」

零「邪魔・・・なんだけど・・・」

わかさぎ姫が釣り針の近くをフヨフヨと泳ぐ

わかさぎ姫「あら、良いじゃない」

零「いや、良くないよ。一応依頼で来てる訳で・・・生活が懸かってるわけよ」

わかさぎ姫「私達だって命が懸かってるのよ・・・」

俺達の間には不安な空気が流れる

「今までもたまに久佐のねネットワークの女子会に強制送還された時よりも気まずい零」と、とりあえずさ鰻5匹だけ釣らせてくれよ」

わかさぎ姫「駄目」

零「……………」

わかさぎ姫「……………ねえ」

俺がどうしようか悩んでいるとわかさぎ姫が声をかけてきた

わかさぎ姫「何で草の根ネットワークが出来たか知ってる？」

零「どうしたんだよいきなり……………」

わかさぎ姫「それはね、私達が弱いからなの」

零「……………」

わかさぎ姫「タイマンが駄目だから数の暴力に頼る……………弱者の知恵よね」

わかさぎ姫に手を伸ばそうとしたが何故か俺は躊躇ってしまったて手がとまった

わかさぎ姫「でもね、もう必要ないの」

零「ッ!？」

わかさぎ姫から異様な妖気が流れて来て俺は釣竿から手を離して木刀を握る

しかし木刀からも異様な妖気が流れて始めて俺は木刀から手を離す

わかさぎ姫「どうしたの？来ないならこっちから行くわよ？」

わかさぎ姫が段幕を撃つてくる

俺はそれを右に飛んで避ける

わかさぎ姫「あの娘達のお陰で私達はここまで強くなれた！もう弱者を虐げさせたりしない！」

零「私達？おい待て！まさか蛮奇と影狼も!？」

わかさぎ姫「質問なら私を倒してからにしなさい！」

咲夜「あらそう？じゃあお言葉に甘えて」

わかさぎ姫が咲夜にナイフで殴られて気を失った

零「さ、くや・・・？」

咲夜「何してるのよ。ほら立ちなさい」

咲夜が手を伸ばして俺はその手を掴む

そのまま立ち上がると咲夜に担がれた

零「なして？」

咲夜「今のアンタじゃ移動で日が暮れちゃうでしょ？今幻想郷中で道具と下級妖怪が暴れ回ってるのよ」

咲夜が俺の木刀を拾って飛び始める

咲夜「奴ら何て言つてたかしら？ひつくり返す者だつたかしら・・・」
零「ひつくり返す者か・・・。とりあえず今は蛮奇と影狼の様子を確認しないと！目的地は迷いの竹林だ！」

咲夜「分かったから暴れないで！」
こうして俺達のダイヘン解決が始まった

??? 「もうすぐだ・・・。今に見ていろ！」

影狼DAYS

咲夜に連れられて迷いの竹林に入る

咲夜「ここに異変の首謀者がいるの？」

零「それは分からない。でも手掛かりはあるはずだ」

咲夜「……そう」

咲夜が歩きだし俺も後を着いていく

何処からか狼の遠吠えが聞こえてくる

咲夜「……どうやらお出ましみたいね」

俺が構えると後ろの茂みからなにかが飛び出してきた

咲夜がナイフを投げるとなにかがナイフを弾く

なにかが地面に着地してようやく姿を見ることが出来たか

零「影狼……」

影狼「ずいぶんと遅い到着ね。そこまで姫に苦戦したのかしら？」

咲夜「ずいぶんと口の減らない野良犬ね。ちょうどいいわ。この剣のサビにして上げ

る！」

そう言うとは先ほどのナイフとは違う短剣を投げる

影狼はまた短剣を弾くと飛び掛かり俺の喉元に赤い爪を突きつけた

しかし次の瞬間視界が変わる

隣を見ると咲夜が短剣を構えながら影狼を睨む

影狼「お笑いものね。今まで蛮奇ちゃん達を護っていた貴方が今や足手まといにしかならないじゃない」

俺は血が出るほど下唇を噛む

影狼の言うことは正しい

影狼「最も、心配させたら護ってても意味がないけど」

零「……ああ、確かにお前の言う通りだよ……。おらアイツら護ってたつもりになつてただけだ。心配させてちゃ護ってるなんて言えねえわな……」

俺は木刀を握る

異様な妖気が手に絡まるが気にせず抜く

零「でも俺は戦う！皆に傷ついて欲しくねえから！」

影狼「そのせいで蛮奇ちゃんが何時もどんな気持ちなのかアンタには分からないの

!？」

影狼は爪を突き付けて走ってくる

俺はそれを避けて影狼の溝を木刀で撃つ

零「知ってるよ。知ってるから戦ってる。皆を護るために……皆を悲しませないくらい強くなるために」

影狼が倒れて木刀を収める。すると先ほどまで黙っていた咲夜が近付いてくる

咲夜「この野良犬も大概だけどアンタも大概よね……」

零「あ？」

咲夜「悲しませない為に戦ってるはずが結局は悲しませてるだけなんてね」

俺は話を聴きながら倒れた影狼を竹に座らせて咲夜を見る

零「戦いなんて皆そうさ。悲しみしか生まない。戦いに勝つってこたあ必然的に負かした相手を悲しませてんだよ」

咲夜「……それでも戦いを選ぶのね。そんなに戦いがお好き？」

零「誰が……。俺だって痛いのは嫌さ。でも俺が戦わなきゃ皆居なくなるような気がしてな。俺が俺じゃなくなるような……そんな気が……。切り裂きジャックもこんな気持ちだったのかな……」

俺が空を見ながら話しているといきなり咲夜が震えだした

零「？咲夜？」

咲夜「な、何でも無いわ。それより早く行きましょう。まだ蛮奇つて言う娘が残って

るんでしょ？」

零「お、おお・・・」

咲夜はまた俺を担いで飛び立った

しかし先ほどの咲夜の目はまるで何かを恐れているようだった

蛮奇の想い

結局影狼から話は聞けずに俺達はふらふらと辺りを飛んでいた

咲夜「結局、分からず仕舞いね」

零「いや、そうでもねえよ」

俺の言葉に咲夜が首を傾げる

零「今この木刀は何らかの力によって妖気を感じ取れるみたいなんだ」

咲夜「みたいて何よ？丸で誰かに聞いたみたいな言い方ね」

零「コイツの意思かは知らねえけど頭に語りかけて来やがった」

咲夜「ふーん・・・で、次の目的地は分かりそう？」

零「ああ、こつから真反対だな」

咲夜「早くそれを言いなさいよ！」

俺は咲夜に頭をナイフで刺され気を失った

しばらくして目が覚める

咲夜「ちょうどお目覚めね。着いたわよ」

俺は咲夜に下ろして貰い辺りを見渡す

そこには小さな一軒家に後ろには小川が流れ、そのわきには柳が咲いている
咲夜「にしても驚いたわ。人里の隅にこんな所があるなんてね」

零「人里なのか？」

俺は更に辺りを見渡し静かな所には目立つ赤い頭を見つけた

咲夜「柳の下の飛頭蛮^{デユラハン}・・・」

蛮奇「・・・・・・・・遅かったわね」

蛮奇が振り返ってこつちを見る

零「蛮奇・・・・・・・・」

蛮奇「零、こつちに来なさい」

蛮奇が手を広げてそう言う

俺も自然に蛮奇に向かって歩く

咲夜「零ッ！」

零「ッ！」

咲夜に肩を掴めれ俺はハツとする

蛮奇「邪魔をするなッ！」

蛮奇が咲夜に襲いかかる

咲夜はそれを避けながらナイフを投げる

蛮奇「零は私が護る！」

咲夜「アンタじゃ力不足よ。護られるのが関の山」

蛮奇「黙れツッ！だから私は力を手に入れた！もう足手まといにはならない！」

蛮奇が頭を増やして咲夜にぶつかっていく

咲夜「ツク！」

咲夜が倒れ、蛮奇が俺に近付いてくる

蛮奇「零……アンタは何時私を護ってくれた。でも力が封印されて力も私と同じくらいになった。それなのになんで戦うの……？」

蛮奇が悲しそうな顔で見つめてくる

俺は蛮奇に近付いてくる抱く着く

零「蛮奇……。すまねえ……。でもおれはお前に救われてんだ」

蛮奇「見え透いた嘘を付くな！」

零「嘘じゃねえ！お前が……お前らが居るから俺は戦えるんだ！例え力が無くなっても関係ねえ！相手がどんなに強かろうが立ち上がれる！それはお前が待っていてくれるからだ！」

蛮奇「……………」

零「お願いだ蛮奇……。元に……。戻つてくれ！」

蛮奇「……………」

蛮奇の周りを飛んでいた蛮奇のあたまが消え蛮奇が膝を付く

蛮奇「何よ……。それ……。そんなの聞いちやったら私……」

蛮奇の目から涙が零れ落ちる

俺は蛮奇が泣き止むまでそのまま抱き締め続けた

辺りは嵐で全身ビシヨビシヨだ

咲夜「ああ、もう！服が濡れて体に張り付くし最悪！とつとと解決してお風呂に入りましよ！零、貴方はどうする？」

零「と、とりあえず袋が欲しい・・・ウプ」

咲夜「大丈夫そうね」

俺は吐きかけながらも何とか耐えて前を見る

まあ、見たとして真つ暗過ぎて何も見えないんだけど・・・

零「・・・？」

咲夜「？どうしたの？」

零「いや、なんか・・・」

俺は耳をすます

琵琶と琴の音がする

まあ、雷が五月蠅くて良く聞こえないし気のせいかも知れないけど・・・

零「やっぱ何でもない」

咲夜「隠したって無駄よ。さっさと吐きなさい」

零「・・・綺麗な音がする。琵琶に・・・琴だ」

???「わっほーい。貴方、良い耳してるわね」

いきなり目の前に茶髪の少女が現れる

スカートには弦があつてどうやら琴の音はあそこから鳴つていたようだ

咲夜「貴女何者？」

???「私は九十九八橋。琴の付喪神よ」

零「琵琶の音は何処だ？」

八橋「姉さんならこの先よ。じゃ、私もこの先で待つてるから出来るだけ早く来てね」

そう言うのと八橋が雲の中に消えていった

また咲夜が俺を運びながら飛び始める

・・・状況を整理しよう

先ずこの中には二人の付喪神がいる

一人は琴の付喪神、八橋

そして琵琶の付喪神である八橋の姉

零「二対二か・・・」

咲夜「自信が無いの？」

零「いや、大丈夫だ。俺達なら出きる」

咲夜「あら、今更何当たり前の事を言ってるの？」

???「みーつけた。私の相手になってくれそうなひと！」

次に出てきたのは薄い青紫色の髪の少女が現れた
どうやら今回はちゃんと琵琶を持っているようだ

零「敵か」

咲夜「敵ね」

俺達が武器を構える

八橋「ちよつと待つてよ！そいつらは私が見つけたのよ!?後から来て横取りなんて狡いわ姉さん！」

???「良いじゃないの。それに戦わなくても分かる。あの男の子、アンタの手ぬるい音
楽じゃあ無理よ。あの小さな付喪神使いを倒すには」

零「付喪神使い？」

俺は首を傾げる

確かに小傘は付喪神で雨のときには一緒に来て貰ったりするが・・・

???「その木刀、どう見ても付喪神じゃない」

零「そうなのか？そういうやコイツに名前が無かったな・・・。これが終わったら付けてやるか・・・」

八橋「ふーん。まあ、良いや。この子は姉さんに任せるわ。そこの銀髪のアンはこつちで私と楽しみましよ」

そう言うと八橋が飛び去る

咲夜「・・・負けるんじゃないわよ？」

零「わあつてるって」

咲夜が俺を下ろして八橋を負う

俺は空を浮くのに慣らしながら木刀を抜く

???「何もかもが逆さまな下克上のこの世界。最強の道具が誰なのか、今ここで決めるわよ！九十九弁々、参る！」

弁々がいきなり段幕を撃ってくる

俺はそれを避けながら弁々に接近する

木刀を振り込むが弁々に避けられる

弁々「どうやらあの娘達の言っていた事は本当みたいね」

零「？」

弁々「貴方、力を封印されてるんでしょ？その子供の姿も封印された姿なんでしょ？

零「全く誰なのかねえ・・・。そんな秘密をばらす輩は・・・」

俺は不適な笑みを浮かべながら弁々に近付く

弁々も音符の形の段幕を放って来るが避ける

零「いくら封印されてもおら俺だ。テメエらが何のために下克上何ぞ企ててんのかは

知らねえが万事屋として、幻想郷に生きるものとして、この下克上は阻止させて貰う！」

弁々「弱者を踏みにする強者が・・・綺麗事を抜かすなアアアアアアアア!!!」

弁々が物凄いスピードで飛んでくる

俺はそれを受け止めて頭を撫でる

零「大丈夫。大丈夫だ・・・」

次第に弁々の動きが止まる

どうやら弁々が泣いているようだ

零「大丈夫だから。俺は、お前らを見捨てない！」

弁々「ほ、本当？」

零「おうよ！鬼は嘘をつかないんだ」

弁々「・・・じゃあ、しばらくこのままでいて」

零「それだけでいいのか？」

俺はしばらく弁々を撫で続ける

八橋「あー！姉さんひどーい！」

八橋の声が聞こえ振り向くとボロボロの八橋と咲夜が来る

八橋「私が頑張つて戦つてる間姉さんその子とイチヤイチャして！」

弁々「い、イチヤイチャなんてしてないわよ！／／／／／／／／／／／／／／／／」

咲夜「……………」

零「しないから」

咲夜「……………はあ、分かったからとつと次行くわよ。場所は妹の方から聞いたから」

こうして俺達は次なる目的地に向かって飛び立つのだった

天邪鬼と鬼邪天

あれから俺達は更に飛び続けた

雲を抜け積乱雲の中心に出る

そこにあつたのは逆さまになつた城だつた

咲夜「何あれ・・・」

零「何つて・・・城だろ？」

咲夜「なんで逆さまなのよ？」

零「知るかななこと。でも、逆さまの城・・・ひつくり返す者レジスタンスにやお似合いの拠点じゃ
ねえか」

俺は木刀を抜いて城に向ける

零「一度やつて見たかつたんだ。傾城国崩し」

咲夜「国、とは言い難いけどね」

零「細けえこたあ良いんだよ」

俺は木刀を城の一番上部分を狙つてブーメランのように投げる

木刀が城の襖を破る

俺達が城に入るとそこには小さな角が生えた少女が居た

??? 「よくここまで来たな」

零 「お前はッ!?!」

咲夜 「なんでここに・・・」

??? 「フッ、探していたのはこちらの方だ」

零 「誰だっけ?」

俺のその言葉に二人はずっこける

??? 「鬼人正邪だよ! 宵闇妖怪を暴走させた張本人だよ!」

零 「あー、あれか・・・」

俺は鼻くそをほじりながら思い出す

正邪 「とにかく! 弱者が虐げられない世界を作る為にも今貴様らに邪魔をされるわけにはいかない!」

正邪が段幕を撃ってくる

俺と咲夜は避けようとするが避けた矢先に当たってしまう

咲夜 「何で!?! 確かに段幕を避けたのに!」

俺はもう一度左前から飛んできた段幕を右に避けようとして右前の段幕に当たる

零「何だ？思った方向と反対から段幕が飛んで来やがる」

正邪「ハハハ！私の能力は『何でもひっくり返す程度の能力』だ！貴様らに下克上の恐ろしさを見せてやる！」

零「久しぶりに聞いたよ程度の能力！つか teme エ俺とキャラ似てんじやねえか！」

正邪「知るか！」

正邪がまた段幕を飛ばしてくる

俺は俺は目を瞑って段幕を切り捨てる

正邪「なッ!？」

咲夜「段幕を・・・斬った・・・」

零「なあに、慣れれば簡単だ」

次は段幕が上下に反転してくる

俺はそれを避けながら正邪に近付く

正邪「これでも駄目なのかよ！ならこれはどうだ！」

今度は上下左右逆転してしまう

零「・・・ウプ・・・」

正邪咲夜「・・・え？」

零「オロロロ」

正邪「ギャアアアア！吐いたアアアアアア！」

俺が吐きながら正邪を追い掛ける

正邪も涙目になりながら逃げる

しばらくすると頭にナイフが刺さってゲロの中に沈む

咲夜「いい加減汚い」

零「フア、ファイ・・・」

俺は倒れたまま頭からナイフを抜く

正邪「クソツツ！今に見てろよクソゲロ親父！」

正邪が逃げていき咲夜の顔を見る

咲夜「・・・・・・・・・・・・・・・・」

零「ゴミを見るような顔するの止めてくれない？」

咲夜「アンタ・・・何時からよ？」

零「全く記憶にございません！」

結局俺は咲夜に何本もナイフを刺され先に進むのだった

もちろん、今はギャグパートなので次話には完治している

きつと・・・・・・・・たぶん・・・おそろく・・・

小人族の姫

逃げた正邪を追い掛けて城を上る

咲夜「ねえ！アイツアンタのこと親父って言ってたわよ!? 本当に何も知らないの!？」

零「ああ!? 何も知らねえよ！」

俺はしばし考えて月での出来事を思い出した

零「……そう言や前に月面戦争止めてしばらく月に行った時、公衆トイレでサグメが言ってたんだ。鬼人正邪って……」

咲夜「サグメって言うのが誰かは知らないけどアンタはそいつと公衆トイレに居たわけね？」

零「え？」

次の瞬間頭にナイフが刺さる

零「なして？」

咲夜「もう知らない！」

何故か咲夜がそっぽを向いてしまったので俺は黙って進む事にする
しばらくしてお腕が上から振ってきた

俺達はお腕を怪しい目で視ているとお腕が動いた

??? 「うんしょ。うんしょ」

咲夜 「なにこれ？小人？」

零 「みたいだな」

お腕から出てきたのは出てきたのは小槌と針を持った小さな少女だった

俺は少女を捕まえて手に乗せる

??? 「おろして！」

少女が暴れるので下ろすと俺達に針を向けてきた

零 「ええ!？」

咲夜 「落ち着きなさい。先ずはあなたが何故こんなことをしているのか話して貰おうかしら」

咲夜がそう言うのと少女が針を向けながら話し出した

??? 「私は少名針妙丸。小人族の末裔よ。私は身体相応の力しか無かったからずっと虐げられてた。貴方達強者には弱者の気持ち分からない。だから下克上するの！」

咲夜 「そんな事で……」

針妙丸 「そんな事？……そう。やはり、強者と弱者は相容れない……。だが、私の手には夢幻の力が……。正邪がくれたこの打出の小槌の力がある。あわてふためくが

いい。私には逃げ惑う強者の姿が見える。さあ、秘宝よ！身体小さき者に夢幻の力を与え給え！」

針妙丸が小槌を振ると針妙丸の身体が大きくなった

針妙丸が針で俺を刺そうとするが俺はそれを難なく木刀で防ぐ

零「嘗めんじやねえよ。おら強者でもなんでもねえ！」

針妙丸「じゃあ何故邪魔をする！」

零「おら、今の幻想郷好きなんでね。強者が弱者を虐げる？大いに結構！・・・只なソイツ等は何にも分かっちゃ居ねえんだ。己が何れだけちっぽけな存在なのかを！」

俺は距離を置くために針妙丸の腹を蹴る

針妙丸「ガッ！」

零「弱者が何だ。強者が何だってんだよ！強いて言うならそんな観点でしか物が見れない奴らが弱者だろうが！前を見ろ！目を見開け！今お前の前に居る半端者は、お前にはどう見える！」

針妙丸「うおおおおお！小人の一族がどのような屈辱を味わって来たのか、貴方達に分からせるまで！私は諦めない！」

針妙丸が突っ込んでくる

あの目・・・全てを憎むような目、前にも見たことがある

あれは何処だったか・・・
テメエなんて大ッ嫌いだ！

零「ツ！ああ・・・そうかよ。なら・・・」

俺は木刀を構える

針妙丸とすれ違った瞬間に針妙丸の首根っこを掴んで上に引き上げる

すると先程針妙丸が居た場所から剣が突き出ていた

俺は木刀をそこに突き刺すと何かが刺さった手応えがあり、引き上げてみると目で見たリザードマンだった

咲夜「一体どうなって・・・」

零「それはわかんねえが、どうやら俺等は嵌められたみたいだ・・・」

いつの間にか周りにリザードマンや鬼が居る

針妙丸「いつの間に・・・一体なんで!？」

零「決まってんだろ！こんなこと出来る奴は・・・」

俺は集団の中に立つ一人の少女を見る

針妙丸「正邪！」

正邪「姫、大人しくその秘宝を渡してください」

針妙丸「・・・え？」

正邪「私は今、脅されています。秘宝を渡さなければ私の命は無い、と」

大蛇「そう言う事だ。さあ、その秘宝、打出の小槌を渡して貰おうか！」

針妙丸「……分かった」

針妙丸が大蛇に打出の小槌を渡す

すると大蛇は針妙丸をその首で吹き飛ばした

針妙丸「正……邪」

針妙丸が気を失うと正邪が笑いだす

正邪「ギャハハハハハ！お人好しにも程があるだろ！お前なんてもう用済み何だよ
！」

大蛇「ああ。用済みだ」

大蛇がそう言うのと二人のリザードマンが正邪の背中を斬り付けた

正邪「カハッ！」

大蛇「貴様のような雑魚を殺す時間も惜しい。とつとつと我の前から消え失せい！」

正邪が傷口を押さえながら立ち去っていく

咲夜「どうするの？このままじゃ私達も……」

零「どうするかって？逃げるに決まってるだろ！」

俺が針妙丸を担いで咲夜に投げる

大蛇「逃がすなあ！奴らの首を討ち取れえ！」

「ウオオオオオオオオオオオオオオオオ!!!」

俺は迫ってきたリザードマンが刀を奪い襲ってきたリザードマン三人を切り捨てる

零「殿なら引き受けてやるよ！」

咲夜「……死ぬんじゃないわよ」

零「……互いにな」

一人の鬼が俺に金棒を振るう

金棒が頭に直撃するがそのまま立って心臓を刺す

次は槍を持ったリザードマン達が投げて来る

俺は飛んできた槍を掴み投げ返す

リザードマン達が頭から血を流し死んだのを確認して天井（床）を見る

天井に張り付いたりザードマンが毒霧を吐いてくる

俺が逃げると迫ってきた鬼二匹が絶命する

俺は床（天井）に落ちてある槍を拾ってリザードマンに突き刺す

大蛇「何をしている敵はたった一人だぞ！八雲紫が冬眠から目覚める前に討ち取れ

！

大蛇はそう叫んでいるが周りの鬼やリザードマンは既に戦意喪失した様子で及び腰

になっっている

零「……紫が目覚める前？なに言ってるんだ」

大蛇は大蛇を指差す

零「紫なら、お前の後ろに居るじゃねえか」

大蛇「な……」

大蛇が振り返ろうとした瞬間大蛇の首が落ちた

紫「私が冬眠する時期を狙って私の愛する幻想郷を破壊しようとする愚か者よ。死になさい」

俺はそれを見ると糸が切れたように意識を手放した

プリズムリバー楽団VS九十九姉妹withHV S鳥獣 伎楽

目が覚めるとそこは洋風な部屋だった

頭に包帯がされていて上半身裸の状態で包帯が巻かれていた

まだ重いカラダを持ち上げ当たりを見る

何処かで見覚えのある部屋だが思い出せない

俺が頭を悩ませていると部屋の扉が開いた

ルナサ「……起きた？」

部屋に入ってきたルナサがベッドのとなりにある机に水を入れた桶を置いてタオルを濡らす

零「……ルナサが居るってことはここはルナサン家て事か……」

ルナサ「そう……。紅魔館のメイドに貴方を助けてって頼まれた」

零「咲夜に？……そりやあまた……」

俺は倒れる前の事を徐々に思い出しハツとする

零「異変は!？」

ルナサ「解決した……」

その言葉に安堵しながらまた寝転がる

ルナサ「……貴方は無茶をしすぎ」

零「……蛮奇や小傘にも同じ事を言われた」

ルナサ「……心配させたがり？」

零「んな訳ねえだろ！」

リリカ「大変だよお姉ちゃん！」

俺とルナサが話していると突然扉が開き新聞を持ったりリリカが入ってきた

リリカ「あ、良かった！目が覚めたんだね！」

零「あ、ああ……。それよりどうしたんだよ？」

俺が聞くとリリカが新聞を渡してきた

それを俺とルナサが一緒に見る

零「八雲紫が鬼人正邪を指名手配……」

リリカ「そっちじゃなくてこっち！」

リリカが指を指す方に視線を向ける

ルナサ「三大幻想郷楽団の決着……」

零「プリズムリバー楽団と鳥獣伎楽と最近幻想郷の仲間になった九十九姉妹with

Hが真の一番を決める大会？」

リリカ「今メルランお姉ちゃんが新聞屋に問い詰めてるけど・・・」

俺達はリリカを見てもう一度新聞を見る

八橋「わっほーい！それについて話があるの！」

零「お、お前は！・・・誰だっけ？」

俺が質問すると八橋がズッコケた

八橋「九十九八橋よ！この前会ったでしょ！てか、地の文で八橋って言ってるじゃない！」

零「地の文？なに言ってるんだ？」

八橋「あんた今まで散々地の文弄ってたのに今更何抜かしてんのよ！」

零「もうそれで良いからとっとと本題入ってくれよ」

八橋は不服そうな顔をしながらルナサとリリカを見る

八橋「雷鼓姐さんのおかげで身体を手に入れた今、やることは一つ！貴女達プリズムリバー楽団と鳥獣伎楽を倒して天下を取る事よ！」

ルナサとリリカが顔を見合わせる

八橋「対決は宴会の日！首洗って待ってなさいよ！」

八橋は部屋から飛び出して走り去った

リリカ「私達を倒しても天下は取れないんだけどなあ……」
ルナサ「……………うん」

そしてとうとう宴会当日……

俺は万事屋のメンバーで宴会の席に来ていた

霊夢「あんたやつと来たわね。素敵な賽銭箱はあそこよ」

零「ハイハイ……」

俺は100円硬貨を賽銭箱に入れて手を叩く

零「……………あ、そうそう。お前、針妙丸を預かってんだろ？」

新聞に書いてあつた事を思い出して霊夢に聞く

霊夢「あく？まあね。話を聞く限り鬼人正邪つて奴に騙されてただけみたいだしね」

小傘「ねえ零ちゃん。早く行こ！」

零「お、お……」

小傘に引つ張られて俺は神社の境内に向かった

文「さあ、始まりました！天下一楽団会！司会は何時もの清く正しい射命丸文が努め

させて頂きます！先ずはこのお二人！」

文に呼ばれて出てきたのはミスチーと響子だった

零 「鳥獸伎楽つてあの二人だったのか・・・」

蛮奇 「命蓮寺で会つてピンと来たみたいよ」

俺と蛮奇はパンクロックを歌う二人を見ながら話す

蛮奇 「・・・てか、鬼人正邪？そいつアンタの娘みたいじゃない」

零 「え・・・」

蛮奇 「てことは守矢の神様以外に嫁が居るつてことよね？」

零 「・・・え・・・」

蛮奇 「ついでに言うなら小鈴ちゃんと結婚してるわよね？」

零 「・・・あ」

蛮奇 「吐きなさい。洗いざらい」

俺は嫌な冷や汗をかきながら視線を反らす

零 「い、いや・・・俺も覚えてなくて・・・」

てる 「教えてやろうかウサ」

そこにてゐが近付いてきた

反転家族

零「で、てる？何でお前が知ってるんだよ？」

てる「私にこの話をしたのはお前ウサ」

零「え、そうなの？」

俺が思い出そうとするがやはり思い出せない

てる「仕方無いウサね。鳥獣伎楽も終わって次は九十九姉妹 with H U サね。
じゃ、第二幕の始まり始まりウサ」

これはむかーし昔、諏訪の国譲りの少しあとの物語

神の子一人有り

名、風切零

またの名を黒夜叉大権現

零「……………どうしよ……………」

彼は今、困っていた

そう！すぐく困っていた！

零「諏訪子様の元を離れて早一年……………暇だ……………」

そう、零は諏訪の土着神の元を離れて旅をしていた

しかし如何せん彼は暇を持って余っていた

零「そもそも何で旅に出たんだっけ……………あ、そうだ。海賊王に為るためだ。海

賊王に俺はなる！」

零がそう叫びと近くススキの原っぱに何かが落ちるのが見えた

零「何だあ？」

零が何かが落ちた場所に向かって歩き出した

そこに居たのは片方の羽を腕がれた女と腕がれた羽にくるまれた赤子であった

零「……いやいやいや、これは無い」

零は首を振りながら目の前の光景を見なかったことにしてその場を立ち去ろうとする

すると赤子が大きな声で鳴き始めた

零は立ち止まり振り返り溜め息を付く

零「あーハイハイ！分かったよ！」

零は女と赤子を担いで歩き出した

しばらくして小屋を見つけた零は小屋で二人を下ろして寝かし付ける

零「女の方は良いとして赤ん坊がなあ……。こんな事になるんだったら侍従達に赤

子の世話の仕方を聞くんだった……」

零を育てたのは土着神の侍従達だった

だから零は土着神よりも侍従達に懐いていた

零「やっぱ乳か？俺出るかな？」

……出るわけ無いウサ

何だかんだ零が思考錯誤していると女が目を覚ました

零「あ、起きた？」

???
「……………」

女は辺りを見渡してから零を見る

零「俺は零だ。お前さんの名前は？」

女は何かを言おうとして口を塞ぐ

零「何だ？喋らないのか？」

女が頷く

零「……………その怪我じやまともに動けねえだろ。幸い家主は居ないみたいだししばらくは護つてやるよ。こう見えて神様見習いだしな」

女が深々と頭を下げた

零「礼なんて別に良いさ。それよりお前さんはその赤子を世話してやんな」

零が小屋を出て月を見る

零「今日は満月だ……………」

てゐ「てな感じに、それからお前は三人仲良く暮らしたウサ。でも時は非常で月の連中が女を連れ去ったウサ」

蛮奇「それで！その女って誰なのよ！」

蛮奇がくいぎみに聞いていく

てゐ「女は連れ去られる前日に一言こう言つたウサ。天探女、と。まあ、零がめんどくさいからつて勝手に稀神サグメつて改名したんだけど……」

蛮奇「アンタ……記憶無くす前からそんななのね……」

零「……今日は満月、か……」

俺はただ月を見つめた

鬼と一寸法師の一寸の喧嘩

てゐるが永琳達の元に戻っていく

その後ろ姿を見ながら九十九姉妹 with H の演奏が終わったのを確認して立ち上がる

小傘 「零ちゃん何処に行くの？」

零 「しょんべん」

俺は厠で用を足した後神社の縁側に座る

針妙丸 「ねえねえ！」

俺の手の甲に針妙丸が座ってくる

零 「……何だよ。また俺の命狙ってきたのか？」

針妙丸 「違うの！ その……謝りたくて……。ごめんなさい！」

俺は溜め息を付いて針妙丸を掴み頭の上に乗せる

零 「手の甲じゃロクにライブ観れねえだろ？」

針妙丸「・・・あ」

俺はそう言つてまた針妙丸を頭から下ろして服を剥ぎ・・・

零「ておい誰だこんな変な地の文呼んでんの！」

萃香「フッフッフ、私だよ零」

頭の上から声が聞こえて誰かを掴まむ

そこに居たのは萃香だった

零「萃香テメエ、何時から頭の上に居やがった？」

萃

香

ワカサギ姫辺りから頭の上にスタンバってました」

零「知るかアアアアアア！」

俺は萃香を投げ捨てる

萃香は直ぐ様体勢を立て直して身体を元の大きさに戻して綺麗に着地する

萃香「だから悪いね一寸法師。そこは私の席なんだ。退いてもらうよ」

零「いや、お前の席じゃねえよ？」

針妙丸「嫌よ！今日からここは私の席なんだから！」

零「お前の席でもねえよ！」

針妙丸が頭を降りて萃香に針を向ける

萃香がまた小さくなって腕を鳴らす

俺はまた溜め息を付きながら萃香と針妙丸を頭の上に乗せる

零「たく、2人仲良く座れての。第三幕の始まりだぜ？」

そのまま俺は小傘と蛮奇の元に戻って飲み始めた

しばらく皆と飲んでいると先ほど弁々と八橋と一緒に居た女性が隣に座ってきた

零「お前だれ？」

???「私は堀川雷鼓だよ。アンタにお願いがあつてきたんだ」

零「御願い？」

雷鼓が頷いて小傘を見る

雷鼓「この子はアンタの傘かい？随分大切に使われてるんだね」

小傘「うん！零ちゃんも捨てられたあちきを拾ってくれたの！」

雷鼓「アンタなら安心出来る。どうか私達の持ち主になってくれ！」

一瞬頭が真っ白になって全てを理解する

零「ああ、良いよ」

蛮奇小傘萃香針妙丸「「「ええ!」「」」」

万事屋零ちゃん現代入り？篇

零さん現代？に行くの巻

宴会が終わった次の日何だかんだで四人家族が増えました

零「あー？未来の外の世界に行ってるくことの一部貰ってこい？」

紫「そのあー？って霊夢と同じね。まあ、霊夢に頼まれちゃってね」

紫が写真を取り出すそこに写ってるのは赤髪の女性と黄色い髪の女性、紫に似た女性と茶髪の女性だった

紫「この赤髪の女性がるくことを作った岡崎夢美。で、外の世界に旅行ついでで良いから行つてらっしゃい」

零「え？」

俺はそのまま紫のスキマに落ちた

レティ「悲鳴が聞こえたけどどうしたの〜？」

小傘「零ちゃん大丈夫!？」

レティが三階から降りてきて小傘が多々良場から上がってくる

紫「あら、良かった。ちょうど藍を付き添いで送ろうとするつもりでしたわ」

俺はちゆりに持ち上げられて連れていかれた

これは紫から聞いた話だ

少し昔、博麗神社の隣に遺跡が現れたらしい

名は夢幻遺跡

そこに入れば幸せなプレゼントがある

だが定員は一人

集まった七人が勝負した異変があった

そこには霊夢・・いや、霊夢、魔梨沙、魅魔も居たらしい

さて、研究室に連れて来られるまでに分かったことがある

ここは俺達が居る時代の近未来に位置する時代で首都が東京から京都に遷都されて
いるらしい

ちゆり「悪いね。手荒なまねして。私は北白河ちゆり、助教授だよ。宜しく」

零「あ、これはどうも」

ちゆりが俺の手錠を外しながら話し掛けてくる

手錠が外れて手首を回しながらちゆりを見る

零「えっと・・・ちなみにモルモツトって・・・」

ちゆり「安心してくれ。別に薬の投与をするわけじゃない。少し話を聞かせて貰いたいだけさ」

零「・・・で、肝心の教授は？」

ちゆりが奥に歩いていく

俺も付いていくとそこには何かの機械があつた

ちゆり「これは教授が発明した妖力を関知する装置だ。君の居た場所にも反応があつた」

俺は装置を見て生唾を飲む

ちゆり「君と同じような後二つ。教授は今そっちに向かっている。ま、もう少しで帰ってくるから」

ちゆりが近くにあつた冷蔵庫からカルピスを取り出して俺に投げる

俺はそれを受け取ってちゆりを見てからカルピスを飲む

「まあまあ、先つちよだけだから！」

「教授、幾らなんでも横暴ですよそれ！」

「大丈夫大丈夫！」

「貴方はもうちよつと考えるから行動して！」

四人の声が聞こえて研究室の扉を見る

??? 「戻ったわよ！早速始めましょう！」

一番最初に入ってきたのは写真に写って居た岡崎夢美であった

ちゆり「お帰りなさい教授」

??? 「あ？何だこのガキ？」

次に入ってきたのは俺にそっくりな簀巻きにした誰かを持った男だった

??? 「零、いい加減におろして上げたら？」

??? 「メリー、あの子コイツに似てない？」

名前まで同じと来た

コイツは一体何なのだろうか

夢美「じゃあ零君、その二人を解放して上げて」

現代零「はい」

現代零は簀巻きを下ろして簀巻きを解く

すると中から小傘とレティが現れた

零「小傘?!レティ!？」

夢美「やっぱり知り合いか・・・」

メリー「あの、教授。何故私達も呼ばれたのでしょうか？」

先ほどメリーと呼ばれた少女が恐る恐る夢美に聞く

夢美は二人を揺する俺を見ながら口を開く

夢美「この三人は別の世界から来たのよ。それって貴女達の出番じゃないの?そう
でしょ? 秘封倶楽部の宇佐見蓮子君」

万事屋と秘封倶楽部

零「何でこうなったんだ・・・」

俺達は秘封倶楽部の部室にお邪魔して風切家緊急家族会議を行っていた

小傘「紫さんの依頼は？」

零「一様話したんだけど」

夢美『それはしばらく時間がかかるからしばらくは蓮子君達と行動しといて
つてさ』

レテイ「なかなか真似が似てるのね〜」

レテイが俺を膝に乗せて抱き締める

小傘「じゃあ三人で観光しよ！」

小傘が俺を引つ張つて俺を連れていこうとした時に扉が開いた

蓮子「ちよつと頼みたいことがあるんだけど！」

しばらくの静寂の後俺はハツとして蓮子を見る

蓮子「アンタら万事屋でしょ！じゃあ依頼するから相談に乗って！」

俺達は机を跨いで蓮子の前に座る

零「それで、依頼は？」

蓮子「私のデートの手伝いをして欲しいの！」

小傘「デート!？」

レティ「あら、青春ね」

二人が顔を赤くしながら俺を抱き締める

零「まあ、分かったよ。相手はどうせあの零だろ？」

蓮子「う、うん／＼／＼／＼」

俺が頷いていると上で二人がこそこそ話し出す

小傘「零ちゃんって実は恋愛に敏感なのかな？」

レティ「自分に向けられる感情に鈍感なのよ、きつと・・・」

俺は少し溜め息を付いて二人を見る

零「何人の頭の上で話してるんだよ？ここの言うのは女子の方が詳しいんだからな。

ちよつと行つてきてやれ」

小傘「じゃああちきが行くね」

そう言う二人が出ていった

俺はレティを見つめる

レテイ「な、何かしら／＼／＼」

零「いや、何か冬以外のレテイは新鮮だなくって」

レテイ「そ、そう？／＼／」

俺は机に置いていたペットボトルのお茶を飲む

そのままゆつくりと時間を過ごしているとまた扉が開いた

そこに居たのはマエリベリーハーン、通称メリーだった

レテイ「あら、メリーじゃない。どうしたの？」

メリー「えつと・・・ここにお茶とか・・・」

メリーが何かを言い掛けてワナワナ震える

メリー「ま、まさか・・・飲んだの・・・？」

零「お、おう。なかなか上手かったぞ？」

メリー「そ、そんな・・・」

メリーが床にへたれこむ

レテイ「えつと・・・どうしたの？」

メリー「そのお茶、実は零君に飲ませようと思って教授に作って貰った惚れ薬な

の・・・」

俺とレテイがお互いの顔を見つめ合う

零「・・・特に何の反応も無いぞ？」

メリー「え!？」

メリーが近付いてきて御茶を見る

メリー「これ、惚れ薬入りのお茶じゃないわね・・・」

レテイ「え?じゃあ本物は・・・」

俺達は頭を傾げる

零「・・・ん?」

俺は机の下を見る

レテイとメリーも釣られて机を覗く

???「前回からずっとスタンバってました・・・」

そこに居たのは科学服を来た眼鏡の女性だった

俺達はそのままそつと立ち上がり部屋を出る

???「え!?!ちよつとお!」

零「いやいや、何あれ?!なんで知らねえ奴が机の下でお茶持ちながら座ってんだ!？」

メリー「それよりあの人の持ってたお茶!惚れ薬入りのだったわよ!」

レテイ「と、とにかく夢美さんの所に行きましょう!」

俺達は急いで夢美の研究室に向かうのだった

科学者対魔法使いとデートの行方

メリー「大変です教授！」

メリーが研究室の扉を開く

ちゆり「め、メリー!?!どうしたんだいきなり……」

メリー「あ、助教授! 部室に不審者が！」

ちゆり「不審者? どんな見た目だった？」

零「えつと……科学服を着てて……」

レティ「眼鏡をしてたわ」

俺達が見た目を口にだすとちゆりが頭を手で抑える

ちゆり「アイツか……」

一方その頃小傘の方は……

蓮子「ほほほ、本日はお、お日柄も良く！」

現代零「お日柄……そんなよろしく無くね？」

現代零が空を見る

明らかに曇っていてパラパラと雨も降っている

小傘「もしかして蓮子ちゃん・・・デート始めて？」

会話を遠巻きに見ていた小傘が肩を落とす

夢美「蓮子君はああ見えて初なんだよ。そもそも今回のデート、そう思っているのは彼女だけよ。零君は只蓮子君の買物持位にしか思っていないのよ」

小傘「ふくん・・・っ!？」

小傘が振り向くとそこには夢美が居た

小傘「な、なんているの!？」

夢美「ん？教え子達の色恋を見守るのも教師の役目だと思つてね」

夢美が二人を見ながら感慨深い顔をする

夢美「でも、零君に先にアプローチするのはメリー君の方だと思つたけど・・・、ま

さか蓮子君とはね」

夢美が話していると夢美のポケットから着信音が鳴り響く

夢美「もしもし?・・・え?理香子?うくん、分かったわ。とりあえずこつちに連れてきて。場所は・・・」

小傘が夢美から振り返って現代零と蓮子を見る

すると二人は既に歩き始めていた

小傘「あ！早く追わないと！」

小傘は電話をしている夢美を尻目に二人を追いかける

夢美「さてと、二人はくつと・・・居ない・・・」

場所は変わって大学では・・・

ちゆり「とりあえず追いかけて来てるなら教授の所まで逃げるぞ！」

零「逃げるつたつて何か後ろから空飛んで追いかけてんだけど!?あれジェットパックじゃね？」

俺は走りながら理香子なる人物を見る

理香子「逃がさないわよ！」

レティ「撃ってきた!？」

俺達が更に急いで走ると先ほど走って居た場所が爆発して焦げ跡が残っている

また理香子を見ると肩に羽が生えた目玉が浮いている

ちゆり「あれはイビルアイΣ!？」

零「イビルアイΣツ？」

メリー「何ですかそれツ？」

ちゆり「とある戦車技師が作った対ロリコン用飛行型戦車だ！」

レテイメリー零 「飛行型戦車（対ロリコン用）ッ!？」
俺達は驚きながらちゆりを見る

ちゆり 「ちなみにイビルアイΣを止めるには幼女を見せるしかないッ!」

零 「結局対ロリコン用兵器が一番ロリコンじゃねえかッ!」

俺は振り返る

イビルアイΣからレーザービームが飛んでくる

俺はレーザービームを木刀で弾いて近くにあつた箒を投げる

箒がイビルアイΣに突き刺さりイビルアイΣが爆発する

零 「ヤベエ・・・」

ちゆり 「何やってんだアアアアアッ!」

俺達は降り注ぐイビルアイΣの破片の下を走り抜けた

一方その頃蓮台野・・・

現代零 「あゝ蓮子さん?」

蓮子 「なな何!？」

現代零が辺りに建っている墓を見る

現代零 「いや、あの・・・何で墓地?」

蓮子「いや、その……思い出の場所だし？」

現代零「思い出って……あの時俺目を瞑ってメリーの手を握ってただけなんだけど……」

現代零が目を瞑って蓮子の袖を掴む

夢美「あ、良い雰囲気かも」

小傘「あれが良い雰囲気に見えるなら目を取り替える事をオススメするよ」

小傘が溜め息を付きながら二人の観察を続ける

夢美「……そろそろかな」

小傘「？」

そう呟いた夢美を小傘が振り向いた瞬間近くで大きな爆発が起こった

小傘蓮子現代零「ニッ!?」

三人が爆発した方を振り向くとそこには理香子から逃げてきた俺達だった

零「つて、墓場じゃねえか！」

俺はまた振り返る

零「もう我慢の限界だ！止めてもやるからな！」

俺が木刀を抜くと後ろから赤い十字架が飛んできた

その十字架を理香子が弾く

理香子「久しぶりなのに随分なご挨拶ね」

俺が後ろを見ると魔方阵を展開した夢美が近付いてくる

夢美「私の知り合いを襲っておいて随分な言い草ね」

俺は何故夢美は魔法を使えるのかと疑問に思いながら夢美を見る

ちゆり「この世界はな、重力、重力・電磁気力・原子間力の全ての力が統一原理によつて説明されているんだ。

でも教授は統一理論に異を唱え、これに当てはまらない力『魔力』が存在するという
☒非統一魔法世界論☒を学会で発表した。でも学会の連中は認めなかった」

幻想郷では魔法が普通に存在していたので忘れていた

現代には魔法も妖怪も存在出来ない

証明出来ない物は信じない

零「世知辛いなあ・・・」

俺は戦う二人を見ながら呟いた

そうこうしている間に戦いが更に激しくなる

零「レティ！皆を安全な場所に！」

メリー「え!？」

メリーが驚いているすきにレティがメリーとちゆりを担ぐ

それを見た小傘も現代零と蓮子の手を引つ張つて逃げ始める

蓮子「待つて！あの子は!？」

小傘「零ちゃんなら大丈夫！きつとあの二人を連れて帰つてくる！」

蓮子の質問に小傘は走りながら答える

そして後ろを走っていたレテイもメリーに蓮子と同じ質問をされていた

レテイ「幾らやられても立ち上がるのがあの人。朴念仁で子供っぽくて・・・でも」

小傘レテイ「零（零）ちゃんは強いッ！」

俺はスペルカードとメダルを取り出す

零「憑依『スキマ妖怪の式』！」

藍のちからを憑依させて九尾の尻尾に狐耳、角が生えてくる

体を回転させて二人に段幕を飛ばす

二人が段幕を防いで俺に攻撃してくる

夢美「ちよつと！邪魔しないでよ！」

理香子「そうよ！」

零「シヤラップ！そしてダイ！こちとらるゝことの部品受け取りに來ただけなんだよ

！何が悲しくてテメエらの喧嘩の巻き添えを食わなきや何ねんだ！」

完全に八つ当たりな訳だが俺は勢いに任せて二人をの頭殴る

二人が氣を失つて落ちるのを止めて地面に寝かす

零「流石に一人じゃ運べねえな・・・」

俺は辺りを見る

使えそうな物は何もない

つか、あつても墓のなんで使えない

俺は溜め息をついて二人が目覚めるのを待つのだつた

あれから数日、何だかんだあつたが夢美と理香子のおかげでるゝことの部品も全部受け取つて帰る所だ

しかしそこで問題が生じた

零「どうやって帰ればいいの？」

そう。帰り方である

零「ヤベエよ。帰り方なんて考えてねえぞ？」

レティ「私もクローラーが効いた部屋が恋しくなつて来たわゝ」

小傘「わちきも本体作業場に本体置いてきたままだし・・・」

零「え？それ色々ヤバくね？」

色々考えていると頭に何かがぶつかった

見るとそれは虹色の球だ

小傘「零ちゃんなにそれ？」

零「さあ……」

現代零「それはオカルトボールだ」

俺達が球を見ていると現代零が近づいてきた

レティ「オカルトボール？」

現代零「オカルトボールは都市伝説異変の重要なアイテムだ。ソイツがあれば幻想郷にも帰れるだろ。ああ、安心してくれ。皆には俺から適当に理由付けとくさ」

零「お前……まさか!？」

現代零「おっと、ソイツあトツプシークレットだ」

現代零がオカルトボールを掲げる

すると後ろの空間が歪み俺達は吸い込まれた

零達が歪みに吸い込まれてしばらくしてから現代零が歪みにオカルトボールを投げ捨てる

またしばらくの静寂の後現代零の目が赤くなる

現代零「越えてみる。この俺を……ッ！」

蓮子「零く」

現代零「おくう」

次は～きさらぎ～

幻想郷に戻ってすぐに霊夢にるゝことの部品を渡してベッドで寝た

何か博麗神社に穴が開いてたような・・・

気のせいだよな？

零「で、どうするよこのボール」

蛮奇「知らないわよ。こっちも天邪鬼の追跡とかで忙しいのなに今度は変なボール？」

俺達はオカルトボールを机に置いて見つめ合う

零「雷子達は今三階でセツションしてるから邪魔出来ないし・・・」

蛮奇「小傘は仕事、レティは寝てるし・・・」

零蛮奇「……………」

針妙丸「あれ？オカルトボールじゃん」

俺達がじつとオカルトボールを見ていると針妙丸が俺の頭の上で座りながらオカルトボールを指差した

蛮奇「知ってるの？」

針妙丸「知ってるも何も私これでちよつと前に外に行つたばかりだもん」

俺達は針妙丸の言葉に啞然とする

俺はハツとして立ち上がる

零「よつしや針妙丸！行くぞ！」

針妙丸「行くつてどこお！」

俺は走つて命蓮寺に向かった

零「たのもお！」

命蓮寺に入つて一番そう叫んだ

響子「おはようございまアアアアアアアす
!!!!!!」

すると響子が大声でさけんでくる

零「おゝ久しぶりだな。元気してたか？」

俺が響子を撫でると尻尾を振り始める

やつべ、犬みたいで可愛い・・・

一輪「ポッポッポッポッポ」

零「ん？」

俺がその声に振り返ったが誰も居ない

針妙丸「・・・ねえ」

針妙丸が髪を引っ張ってくる

俺は針妙丸を見てから針妙丸の視線の先を見る

一輪「ポツポツポツポ」

聖「い、一輪？どうしたの？」

零「・・・何あれ？」

あれから一輪が落ち着き俺は聖と向かいあつて座っている

聖「ドタバタしてごめんなさい」

零「いや、別に良いんだけど・・・」

俺は話をしている一輪と針妙丸を見る

聖「最近流行りのオカルトボールの影響なのか一輪が可笑しくなってしまうて・・・」

零「何かあるのか？」

聖「オカルトボールの持ち主はオカルトの力を使用することが出来るの。私はターボ

ばb・・・おばあちゃんです」

零「今言い換えた？」

俺はオカルトボールを取り出して床に置く

一輪「オカルトボール？」

零「ああ。……そう言やお前のオカルトは……いや待て当ててやる。……八尺様だろ」

一輪「スゴい！何で分かったの？」

零「そりゃポッポポッポ言つてりゃ誰だつて分かるわ……」

針妙丸「ちなみに私はリトルグリーンマンだよ」

リトルグリーンマンとは何か知らないがまあ、リトルで緑な奴何だろう

聖「それで零、貴方のオカルトは？」

零「……きささらぎ駅……」

一輪「何それ？」

零「わかんねえ」

俺達が頭を悩ませていると針妙丸が頭に乗ってくる

針妙丸「じゃあ、零と一輪さんで戦ってみたら？」

一輪「え!？」

零「そうだなそっちの方が分かりやすい」

一輪「え!？」

聖「まだまだ修行が必要みたいね、一輪」

一輪「お、お手柔らかに・・・」

そう言うのと一輪は雲山を連れて肩を落としながら寺に入る

針妙丸「やったね！」

針妙丸が頭の上に乗ってくる

聖「それでは、私もこれを」

聖が出した手にはオカルトボールが乗っていた

俺はそれを手に取りポケットに入れる

聖「これで今零の手には三つのオカルトボールがあることになります」

針妙丸「待った！私のも合わせて四つよ！」

針妙丸が自分のオカルトボールを掲げる

聖「では、後三つのオカルトボールが必要ですね」

零「つまりオカルトボールは七つ必要と・・・何処の何とかボールだよそれ・・・」

俺は溜め息を付きながら呟いた

聖「・・・ところで、次も目的地はもう決めていきますか？」

零「あゝ・・・そう言や決めてないな・・・」

聖「でしたら神靈廟に向かってください。神子さんと布都さんがオカルトボールを

持っています」

零「決まりだな」

俺は墓地に向かって歩き始める

そして……………

零「……………そう言やあそこスタンドいるじゃん……………」

赤か青かを選んで皿は割れる

何だかんだで神霊廟への道が続く洞窟に着いた

芳香「たーちーさーれー」

すると芳香が洞窟を塞ぐ

俺は芳香を担いでそのまま進んだ

芳香「はーなーせー」

芳香が暴れるが構わず無視して歩く

針妙丸「ねえ、本当に良いの？」

零「青娥が出てこない時点で大丈夫だよ。それに……」

俺は初めて青娥に会った時を思い出す

零「何かアイツは紫みたいに匂うからな……」

そうこう話していると神霊廟の前に着いた

零「たーのーもーッ！」

布都「何じゃ!? 妖怪寺の敵襲か!？」

俺が叫ぶと廟から松明を持った布都が出てきた

布都が辺りを見渡し俺と目が合う

布都「何じゃ、零ではないか。して、何用じゃ？」

零「いやさ、お前オカルトボールを持つてるだろ？」

布都「うむ、確かに持って居るが・・・何故それを聞く？」

零「今集めてんだよ、それ」

布都が考える素振りを見せた後に笑みを見せた

布都「良かろう！なら、私の修行に付き合ってくれ！そしたらこの玉、お主にやろう

！・・・ところで・・・」

布都が俺の腕を見る

先ほどから持つている芳香殿と頭の上の小人は

針妙丸「やつと気付いてくれた！」

芳香「おー？」

それぞれが準備を終わらせて向かい合う

屠自子「何で私が巻き込まれてんだよ・・・」

布都「そうしよげるでない。ただ屠自子に立会人をしてもらいたいのじゃ。・・・」

本当は太子様をお願いしたかったのじゃが……」

屠自子「聞こえてるぞ」

布都が俺に振り返る

その瞬間俺はハツとして辺りを見る

周りに皿が飛んでいる

布都「一枚……二枚……三枚……」

零「え？ふ、布都？」

布都「四枚……五枚……六枚……」

芳香「お前うまそーだなー」

針妙丸「キヤアアアア！」

屠自子「止めろ！」

布都「七枚……八枚……九枚……」

神子「何の騒ぎですか？」

布都が周りの皿を集め終わると何処からともなく井戸が現れて吸い込まれる

布都「*死んでも一枚足りない！*ツ！」

布都が皿でスタンドとともに俺に俺にアツパーをかましてくる

布都「やったぞ！成功じゃ！」

零「ば、番町皿屋敷……」

布都「む？そう言う名の怪なのか？我にはこの幽霊がお菊であることしかわからん」
零「……………」

番町皿屋敷の内容を知ってるからあれだが何ともなあ……

布都「約束じゃ。この玉は譲ろう」

俺は布都のボールを貰いポケットに入れる

これで集まったのは五つ

次は……………」

神子「さ、皿が……………」

屠自子「あれ、一枚幾らですか？」

神子「大体八十錢ほど……………」

大体日本円で8000円……………」

九枚全部割れたから……………」

零「72000円……………うへエ……………」

神子「こうなったら……………零！私と勝負しなさい！」

零「はあ!?!」

神子「私が勝ったらお皿を、弁償して貰おう！」

零「じゃ、じゃあ俺が勝ったらオカルトボールを貰うからな！」

俺はそれだけ言つて神子に斬りかかる

神子がマントを広げると赤と青のマントになった

神子「さあ、どちらを選ぶ？・・・いや、*特別に両方選ばせてやろう！*！」

そう言うのと赤マントと青マントが迫ってくる俺はそれを避けて神子に接近する

零「悪いが俺も急いでるんだ。*こちらきさらぎ駅前*！」

俺は線路の遮断機を持ち出して神子を突く

そのまま神子が吹っ飛んでいく

青娥「はい、皆さんお元気？」

すると飛ぶ神子の先に青娥が現れた

そのまま二人はぶつかり気絶してしまった

零「・・・やべっ！」

俺は急いで二人に駆け寄る

すると神子からオカルトボールが飛び出して俺の懐に入った

零「二人は大丈夫か？」

屠自子「ああ、シヨックで気を失つてるだけだ。零のせいじゃない」

零「無事なら良かった・・・」

俺が安心すると針妙丸が頭に乗る

針妙丸「早く行こ！じゃないとゾンビに食べられちゃう！」

零「分かった分かった！じゃあな！神子に宜しく！」

こうして俺は神子に急かされるように神霊廟を去った

人と鬼の間

日も暮れて来たのでそろそろ博麗神社に向かうことにした

零「なあなあ〜」

針妙丸「ん〜？」

零「とうとうオカルトボールが後一個な訳何だけど・・・どうすれば良いと思う？」
一
応博麗神社に向かってんだけどよ・・・」

針妙丸が頭に座って足をバタバタさせて考える

針妙丸「う〜ん、今ね、博麗にちょうど穴が開いてるの。そこを守ってる山の仙人もね、オカルトボールをもってるの」

零「華仙が？・・・んま、とにかく博麗神社が次の目的地で間違いは無さそうだ」

俺はまた歩き始める

しばらく針妙丸と雑談しながら歩いて人里を抜け、参道を抜けてとうとう博麗神社の階段まで来た

針妙丸「・・・何か騒がしくない？」

耳をすませてみると確かに爆発音が聞こえる

俺は急いで階段を登りきる

そこにいたのは妹紅と華仙だった

妹紅「何だよ！別に良いだろ!？」

華仙「駄目よ！これ以上誰かに誰かに引つ掻き回されたくはないの！大体アンタ一回行つたでしょ！」

二人が戦いをしながらなにやら言い合いをしている

針妙丸「どうする？」

零「どうするってお前……」

俺は二人を見た後溜め息を付いて遮断機を持つ

遮断機を二人の間投げると二人が気づいたのかこつちをみる

零「まあまあ、二人とも落ち着いて、ここは折衷案で俺達が行く。異論は……妹紅華仙「ありに決まつて（るでしょ）んだろ！」……あ、やつぱり？」

華仙「大体兄さんは何時も何時も異変に首を突っ込んで！異変解決は博麗の巫女である霊夢の仕事です！あまり霊夢を甘やかさないで下さい！」

妹紅「これに関わるなどは言ねえけどお前も分かるだろ？不老不死にとって暇が一番の天敵だ。私の暇潰しを邪魔すんじゃないねえ！」

妹紅がいきなり蹴ってくる

俺はそれを避けて無数の遮断機を飛ばす

零「つまり暇が潰せれば良いわけだな？上等だ。俺がお前の相手になってやんよ！」

妹紅が遮断機を全部燃やして突っ込んでくる

俺は妹紅を向かえ打とうと木刀を構えた瞬間妹紅が全身を燃やした

妹紅「*こんな世は燃え尽きてしまえ！*」

炎が広がり俺を包み込む

炎が収まって前を見ると既に瀕死の妹紅が居た

零「なるほど、人体発火現象か・・・」

妹紅「今のは・・・渾身の一撃だったんだけどなあ・・・」

零「妹紅、お前さんはもう戦え無さそうだな」

妹紅「・・・ああ、参った。私の負けだよ」

妹紅がそう言うのと妹紅のオカルトボールが俺の懐に入ってきた

俺は妹紅を木陰に寄せると肩に針妙丸を乗せた華仙をみた

零「・・・針妙丸？」

針妙丸「いやあ、あのままだったらもやされそうだったから・・・」

零「たく・・・華仙、これでオカルトボールは七つ集まった。これで俺にも行く権

利はあるんだろ？」

華仙が俺をあきれた目で見て溜め息を付く

華仙「詰めが甘い！」

華仙がそう言った瞬間後ろからでかい手に捕まえられた

針妙丸「零！」

華仙「兄さん、確かにオカルトボールを七つ集めればここを通ることが出来ます。しかしそれだけ。通ることは出来ても私が通すことはありません！」

針妙丸「え？でも私が行った時は勝つたら通してくれただじやない？」

華仙「あの時は状況が状況だったわ。でも今は違う。既に手は打ってある」

俺は華仙を見てから俺を掴んでいる手を見る

華仙「大体兄さんは幻想郷のパワーバランスの一角を担う存在なんですよ？」

零「え？待ってそれ知らないんだけど!？」

華仙「はあ、良いですか？今や万事屋零ちゃんは相当な勢力になりました。妖怪三人、小人一人、付喪神四人・・・兄さん含まず内二人は各勢力トップに互角とは言わないものの渡り合える力があります。もう既に万事屋零ちゃんは・・・兄さんは・・・幻想郷の重鎮なんです！」

今初めてそのことを聞き俺は頭をかく

俺はただ自由気ままにやってただけだ

異変解決はただの暇潰しだし、家に皆を住まわせてるのは大勢居た方が楽しいからだし……つか、俺人の上に立つ性分じゃないし……

針妙丸「……ちなみに内二人って？」

華仙「貴女と和太鼓の付喪神よ」

華仙がそう言うのと針妙丸がドヤってこつちを見てくる

零「あゝ、ハイハイ！悪いがな、俺は行くぞ！そこの世界からここに干渉する無茶苦茶な奴に会ってみたいんでね……」

華仙が俺を睨むがしばらくしていつもの呆れ顔に戻る

華仙「もう何を言っても聞きそうにありませんね……。分かりました。行きたいならどうぞ」

針妙丸が頭の上に乗ってくる

零「……今度人里の甘味奢ってやつから勘弁してくれ」

俺がそう言うのと華仙の目が光る

華仙「じゃ、じゃあ、南門近くの甘味処のトロピカルワガママフルーツパフェを！」

零「おお、良いぞ」

あれ糞ほど高いからあんまり嫌なんだけど……

ついでに家は蛮奇がお金の管理してて小遣い制何だよなあ……

オカルティックJK

穴から出るとそこにはビルが立ち並んでいた

深夜にも関わらずうるさいクラクシヨン

深夜にも関わらず明るいネオンや会社の電気

間違いない

零「私は帰ってきたあ！未来過去には行ったことあったけど現代は初めてだ！この匂い！この音！フハハハハハハハ！」

針妙丸「れ、零が壊れた・・・」

???「初めての男の子だ」

零「？」

振り向くとそこにはJKが浮いていた

・・・ん？浮いていた・・・？

零「ほへ、最近のJKって浮くのか」

???「浮かないわよ？何言ってるの？」

俺の言葉をバツサリ切り捨てるJKを見ながら俺は木刀に手をかける

??? 「私は宇佐見董子、秘封倶楽部会長よ。て言っても私しか会員は居ないんだけどね」
零 「秘封倶楽部？ 宇佐見？」

聞き覚えのある言葉に頭を傾ける

董子 「……て、ああ！ この前の小人ちゃん！」

董子が俺の頭の上に居る針妙丸を見て近付いてくる

針妙丸 「来るな変態ッ！」

針妙丸が俺の上着の胸ポケットに入ってくる

それにハツとして現実に思考を戻す

その時だった

零 「思い出した！ 蓮子だ！ お前蓮子にそっくり何だ！」

董子 「え？ 蓮子？ だれそれ？ 私は董子よ？」

俺は董子のメガネを外す

零 「蓮子じゃん！」

董子 「アワワ、メガネメガネ……」

メガネを外され董子があたふたし始める

董子にメガネをかけ直して離れる

董子 「ちよつと、何なのよ！ 幻想郷の住民は揃いも揃って人の話を聞かないわね！」

俺と針妙丸はそれを聞いてニヤリと笑う

零「そうか、じゃあこつちも知ってるだろ？ 幻想郷の住民は……」

針妙丸「血の気が多いのよ！ 覚悟しなさい変態！」

俺はスペルカードとメダルを取り出す

零針妙丸「『憑依』『小さな小人の姫』ッ！」

俺は針妙丸を憑依した

しかし……

零「あれ？ 何も変化無し？」

しかし辺りに針妙丸は居ない

針妙丸「何これ？」

針妙丸が喋ったと思ったら俺が針妙丸になっていた

董子「へく、二人で一人か……って、二対一は卑怯よ！」

零「ああ！ もう仕方ねえ！ スペルカード！ 凶符『線路の向こうの四輪駆動車』ッ！」

針妙丸「スペルカード！ 釣符『可愛い太公望』！」

俺のスペルで出た車の段幕と針妙丸の段幕が飛んでいく

董子「スペルカード？ 銃符『3Dプリンターガン』！」

董子の弾丸が俺達の段幕をすり抜けてやってくる

俺はその弾丸を弾いて董子に突っ込み刀の先を首もとに向けた

零「俺“達”の勝ちだ」

董子「あくあ、負けちやった。ま、いつか。次は幻想郷で会いましょ？」

零「何を・・・」

針妙丸「零！」

針妙丸と呼ばれて気付くと俺は外に出た時の穴に吸い込まれた

董子「もう少し・・・もう少しよ」

苦し紛れの春ですよー

??? 「春ですよー、春ですよー」

その声に俺は目を覚ました

隣を見ると針妙丸が寝ていた

マミゾウ「む？目が覚めたか・・・」

零「・・・何か目を覚ますとマミゾウが良く居るような・・・」

マミゾウ「気のせいじゃ。それより零。お主に提案があるんじゃないか・・・」

零「提案？」

俺は頭を傾げてマミゾウを観る

いつも通りにキセルを吸うマミゾウからポンツと煙が出て次に見えたときにはスー

ツ姿のマミゾウが居た

マミゾウ「何、ちと今回の異変の犯人に幻想郷流の歓迎でお灸を据えてやろうと思っ

ての」

零「ほお・・・」

俺は布団からでてその布団を針妙丸にかける

マミゾウ「簡単に言えば順番に奴を脅かせれば良い。お主には簡単な話じゃろ？」
零「確かに化かす位ならイタズラの伝道師零さんにとつてはお茶の子さいさいよ？でもなあ……」

マミゾウ「何じゃ？」

俺は少し頭を上げてマミゾウを見る

零「確かにプランは出来上がってんだけど人手が足りねえ」

俺がそう言うのと驚いた顔でずれたメガネを直す

マミゾウ「そんなことか……。お主には頼れる友がおるじゃろ？何なら儂からも人手を貸すが？」

零「佐渡の大親分から何か借りたら後が怖いから止めとくよ。人手は自分で何とかする」

マミゾウ「懸命じゃな……」

リリーホワイトが空を飛び告げる春

俺達は空を眺めた

そして夕暮れ

俺は化かす手伝いをしてくれるメンツを集めて博麗神社の境内に居た

まずメンツを紹介しよう

腹を満たすために来てくれた俺の愛傘、小傘

俺と化かしたいと無邪気な理由で来てくれた、ぬえ

霊夢が構ってくれないからと駄々を捏ねて参加した、萃香

零「よーし、とりあえず準備するぞー」

小傘ぬえ萃香「二オーツ！」

そして夜……

俺が華仙と一緒に境内で座っていた

零「本当に来るのかねえ」

欠伸をしながら呟く

華仙「そうじゃないと困ります」

零「まあ、来ないに越したことはない。俺達が暇なだけここは平和ってことさ」

俺は眠気に襲われ華仙の肩に頭を寄せる

すると華仙が俺の頭を華仙の膝に乗せて撫で始める

華仙「全く兄さんは子供ですね。それなのに霊夢には実の親のように甘やかして……」

零「別に……甘やかしてる訳じゃないよ……？ 霊夢には霊華の分まで親の愛情を

知って貰いたいんだ……」

頭を撫でていた華仙の手が止まり俺は華仙を見ようとす

しかし……

華仙「……来たみたいですね」

俺は眠気を押さえ立ち上がる

華仙が先に行き俺は小傘お手製の駅長の帽子を深く被って顔を隠し着いていく

何やら華仙と話している董子が居た

華仙「……行きたいなら行きなさい。ただしこれに乗ってね」

華仙の後ろに電車が現れる

董子「で、電車？何で幻想郷に……」

華仙「そして、その旅先案内人もつけて上げる」

華仙が包帯で俺を捕まえて引っ張り出す

零「ウワツプ！」

董子「あ！昨日の男の子！」

華仙「私の兄さんよ」

董子「兄?!え、でも見た目的に……。あ、もしかして……シヨタコンとか？」

華仙「しよた、こん？」

董子の言葉に華仙が首を傾げる

零「うちの妹にへんな言葉教えないでくんない？」

董子「そう言えば何でアンタは私の言ってることが分かるの？」

零「そりゃ俺、外から来たから」

董子「え!？」

零「んじや始めますか・・・」

俺はゲスな笑みを浮かべて董子を電車に乗せる

董子「イタタ・・・ちよつと！何すんのよ!？」

零「本線はまもなく発車いたします。次の行き先は人里く人里く」

列車が董子に乗せて走る

俺も列車に乗りこの恐怖の旅先案内が始まった

恐怖の董子探検記

俺は電車の扉を閉めて適当な席に座る

それを床に尻を着けたままの董子が怪しい目で見てくる

零「まあまあ、座んなさいよ。旅はまだまだ序章も満たしてないんだぜ？」

董子「アンタ何なの？」

董子が立ち上がって俺を睨み付ける

零「華仙から聞かなかった？俺は旅先案内人だよ」

董子「今すぐ解放してよ！犯罪よ!？」

零「先に幻想郷を脅かした罪人はそっちだろ？俺達はそんなお前に念願の幻想郷旅行を企画してやっただけ」

俺は立ち上がって董子の顔を掴み自分の顔に近付ける

零「あんまガタガタ抜かしていると殺すぞ、ガキ」

ドスの聞いた俺の脅しにビビったのか董子はそのまま座って震えていた

零「……………(やべ、やり過ぎたか?)」

心の中で董子に謝りつつ俺は窓を見る

外に見える人里を背にまた董子を見る

零「まもなく人里々人里々。本線は各駅停車、必降車です。お降りの方は人里の大通りを真つ直ぐお進み下さい」

電車が人里に着いて董子が降りる

それを確認して電車の扉を閉める

そのまま電車がうごきだし人里の反対側に止まった

萃香「いや、流石の迫力だったよ」

萃香が現れて俺の隣で酒を飲み始める

零「一樣逃げないように布石を打ったつもりだったけどやり過ぎだった」

萃香「いや、零は正しかった。あのままだったら十中八九ここから逃げるだろうからね」

今は一輪とところが董子と対峙している頃だろう

俺は欠伸をしながら人里を見る

たまに段幕の光が見えたり銃声が聞こえてくる

光も音も無くなったタイミングで俺はいつの間にか座っていたぬえの頭を撫でる

零「じゃ、よろしく頼むぜ。ぬえ」

ぬえ「うん！」

俺はぬえに帽子を被せて電車の先頭に向かった

董子「ひ、ひどい目にあつた・・・」

董子がようやく電車にたどり着くとぬえが電車から出た

ぬえ「ようやく来たわね！私はぬえ！兄貴の代わりにアンタを案内して上げる！」

董子「まだあるのお？お願いもう帰してよ！」

董子が地面にへばつてしているとぬえが董子を持ち上げる

ぬえ「ホラホラ！へばつてないで乗りなさい！」

董子「ま、待つてえ」

二人が乗り込み董子の前にぬえと萃香が座る

萃香「私は伊吹萃香。泣く子も黙る鬼さ」

董子「・・・」

萃香「緊張なんてしないで良いよ。それに零には普通に話してただろ？」

萃香が盃の酒を焔つて董子を見る

ぬえはベントラーに乗りながら辺りをクルクルしていた

董子「ねえ、あの子何なの？バカみたいな事するのに勝負は強いし・・・」

董子がうつむきながら言葉を紡ぐ

それに盃を持っていた萃香の手か止まった

萃香「……お前がどう思ったかは知らないし興味は無いけどこれだけは言える。お前は死なない」

萃香の言葉に董子が思わず頭を上げる

いつの間にかベントラーが止まっていてぬえが萃香をじつと見つめていた

萃香「零はあんな事言つてたけど人一倍死には敏感だ。仲間が死ぬことも殺す事も許さない」

董子「そうには見えなかったんだけどなあ……」

萃香「いづれ分かるよ」

萃香が静かに酒を飲み始めるとチャイムがなった

零『次は霧の湖く霧の湖でございます。お降りの方は真つ直ぐ紅い館の前にお向かい下さい』

放送が終わると扉が開いて董子とぬえが外に出た

萃香「……余計なことだったかね？」

俺はまた席に戻つて萃香の入れた酒を呑む

零「ああ、本当にな……」

俺は窓から戦っている董子を見る

今戦っているのは魔理沙だろうか？

スッゴいビームが出ている

萃香「にしてもこんな面白いことが起こってたなんて知らなかったよ」

零「寝てたのか？」

萃香「勇儀と呑んでね。上の事なんて知りもしなかったさ」

俺は鼻をほじりながらそとを見る

零「さて、俺は神社に戻るから後は頼むぞ」

萃香「おっ」

俺はそのまま神社に飛んで戻った

博麗の巫女の務めとは

神社に着いて俺は外に繋がる穴を見る

マミゾウ「何じゃ？もう戻ったのか？」

後ろにいつの間にか立っていたマミゾウが酒を呑みながら近付いてくる

零「暇だったからな。向こうで華仙と待つつもりだ」

マミゾウ「……………一つ忠告じゃ。奴には気を許さない方が良いぞい」

零「ソイツアどう言う……………」

俺が振り返るとすでにマミゾウが居なくなっていた

俺はいぶかしみながらも外に向かった

ネオン輝く夜の街

そんな街の中に佇む一つのビルの屋上に華仙は居た

華仙（必ず何処かにあれがあるはずよ。あれはここにあつて良いものじゃない。必ず見つけ出さないと……………）

零「何かお探しかね？可憐なお嬢さん」

俺は華仙の後ろから近付いて華仙の肩に手を置く

華仙「兄さん……」

零「何か悩みがあるなら俺に言えよ？俺はお前の兄貴なんだから」

華仙「……いえ、これは私の問題です。私が起こした私の不祥事」

華仙は何処か別の何かを見ながらそう言った

何の事かは正直分からなかったが華仙が何かを思い詰めて居るのは分かる

零「気霽れては風新柳の髪を梳る」

華仙「ツ!？」

零「氷消えては波旧苔の鬚を洗ふ」

華仙「兄さん……どうして……」

華仙が今まで見たことないほど目を丸くして驚く

零「都良香らげうもんを過て一句を吟じて曰く、「気霽風梳新柳髪」と。

その時鬼神一句をつぎていはく、「氷消波洗旧苔鬚」と。……簡単に言えば羅生門で

都良香つつう官人が歌を読んでいると茨木童子つつう鬼が歌を詠み返したって話だな」

華仙「それを……どうして私に？」

零「知らん。何かしたくなかった」

俺はビルの下を見る

酔ったおっさんどもが肩を組みながら千鳥足で歩いている
しばらくして華仙が俺の手を握ってくる

華仙「しばらく・・・このままにしてください」

零「・・・・・・・・」

靈夢「何イチャイチャしてんのよ？」

華仙「れ、靈夢!？」

ジト目で降りて来た靈夢に気付いた華仙が手を引つ込める

華仙「靈夢こそ！アイツはもうすぐ幻想郷に戻るわ！早く帰りなさい！」

靈夢「緊急事態よ。今すぐソイツに会わせなさい」

零「緊急事態？」

華仙「駄目よ。貴女は正式な手順で一時的に出ているの。そんな状態で戦えば目立たない訳がない」

靈夢「だから！緊急事態なの！ソイツが幻想郷に戻ってくるのは危ないの！」

何時もダラダラしている靈夢がここまで言うとは退つ引きならない理由があるのだ
ろうか？

零「とにかく靈夢。まずは全部話せ」

靈夢「・・・オカルトボールにはイレギュラーが混ざってた」

華仙「あれは外の世界のパワーストーンでしょ？」

霊夢「でも月の都のボールだけ外の世界の石じゃないわ！もしかしたらソイツも利用されていたかも知れない。おそらく気付いていないかも知れないけど……」

華仙「月の都……」

華仙が慎重な顔をして考え出す

零「話は読めねえけどとにかくあいつからオカルトボールを奪えば良いんだな？」

霊夢「ええ」

零「よしわかった！行くぞ霊夢！」

霊夢「アンタも!？」

俺が飛んで霊夢が着いてくる

それを見ていた華仙はそのまま黙って幻想郷に戻って行った

霊夢「見つけたわよ」

しばらくして童子を見つけた霊夢が童子に近付く

童子「まさかこつちにまで追ってくるなんて！ねえもう許してよう」

零「おいおい、誤解すんな。俺らはお前のオカルトボールが欲しいだけだ」

童子「そんなこと言ってまだ帰してくれないのー？」

何か話が食い違っている

零「いや、だからオカルトボールが欲しいんだって！」

董子「判りました判りました。もう良いです。私、秘封俱樂部会長として最後の大事な事をします」

霊夢「ちよつと、全然聞いて無いわよ？それに大仕事？」

董子がオカルトボールを周りに浮かす

董子「結果どうなるか判らないし、幻想郷の誰か他の人にやらせるつもりだったけどもうオカルトボールの力を解放するしかない！解放して自らが幻想郷の結界を破壊する鍵になる！」

俺達は驚いて目を見開く

霊夢「いや、ちよつ待つて！それは罨よ！」

董子「追い詰められた女子高生の死に様はさぞかし記憶に残るでしょう！ああ、何て美しい死。何て価値のある死……」

霊夢「そんなの美しくない！自爆に価値は無い！」

霊夢が叫び俺は董子に近付く

零「お前、魔理沙にこう言ったらしいな。外の世界で唯一無二の最強無敵の種族、それが女子高生だって」

董子「……………」

零「待つてろ！今ぶん殴つてテメエの腐った考えを治してやる！」

董子に木刀を向ける

霊夢「私は楽園の巫女、博麗霊夢である！」

零「万事屋、風切零！」

霊夢「どうあつても結界を守る！」

零「俺の周りも纏めてな！」

董子「人間界、最後の夜を」

霊夢「幻想郷、最初の夜を」

零「森羅万象、普通の夜を」

董子霊夢零「遺伝子の奥底に（悪夢を見飽きる）（そのトラウマに）まで刻み込めッ

！」」

俺と霊夢は董子に向かって飛び始める

董子「念力『テレキネシス不法投棄』！」

下に落ちていたゴミが飛んでくる

俺達はそれを避けながらさらに進む

董子「まだまだ！*現し世のオカルティシャン*！」

オカルトボールが迫ってきて俺達は動きを止めてオカルトボールを弾く

霊夢「ああ、もう！鬱陶しいわね！」

零「なあ、霊夢」

霊夢「何!?!」

零「俺に良い考えがあるんだがどうする？」

霊夢が俺をじつと見る

霊夢「ああ、もう！乗ってやるわよ！」

零「よしきた！」

俺は霊夢の首もとを掴んで董子に投げる

零「だらつせえええい！」

霊夢「うわつと！もうちよい加減しなさいよ！でも・・・」

霊夢は体制を整えて董子に向かって飛んでいく

霊夢「*あんな隙間に巫女がいるなんて！*」

霊夢の怪ラストワードが董子を襲う

そのまま董子が落ちていく

しかし・・・

董子「敗けるもんか！*神秘のオカルティックセブン*！」

あらゆるオカルト現象が董子の周りで起き始める

霊夢「最後まで世話が焼けるわねッ！」

俺は霊夢を後ろに退かす

霊夢「ちよつと！」

零「あのバカ！」

俺はオカルト現象をくらいながら董子に近付く

零「*異界へ繋がる鬼の腹*！」

俺は段幕で鬼を作り大きな口を開けて董子を丸のみにする

鬼が消えるとそこには気絶した董子が居た

零「つたく、焦らせやがって・・・」

俺は董子をビルの屋上に寝かして霊夢と一緒に幻想郷へと帰るのだった

万事屋零ちゃんヤンデレ篇 ピーしないと出れない部屋

それから数日董子は寝ると幻想郷にこれると言う夢遊病らしき症状に見舞われてい
るらしい

・・・って、今はそんなことどうでも良いんだ
何故なら・・・

穰子「・・・・・・・・・・」

零「・・・・・・・・・・」

零穰子「「こつち見んな」」

この有り様である

何故こうなったのだろうか・・・

話すと朝に遡る

董子「だーから！一緒に妖怪の山に行こつて！」

零「何でだよ！」

あれ以来董子が家に居座り混み霊夢には俺と華仙でこいつの監視を言い渡された

零「つーか、行きたいなら一人で行けよ。監視の方法は俺と華仙に一任されてるし。それにロープウェイだってあるんだから・・・」

守矢神社と河童、山童が作った参拝用ロープウェイがある

天狗は最後まで反対したらしいがまあ、どうでも良い

董子「・・・そう。なら、仕方ないわね・・・」

気付くと頭に衝撃が走って俺は気絶していた

そんなこんなで今この状況である

零「・・・なあ」

穰子「・・・何よ？」

零「あの出口に書いてるピーって、何？」

穰子が何故か信じられない物を見るような目で見てくる

穰子「それ、マジで言ってる？」

零「うん」

穰子「いい？ピーって言うのは簡単に言えば子作りの事よ」

零「ああ、なるほど」

俺は部屋の床に置かれている布団に入る

穰子「……………何してんの？」

零「めんどくさい。寝る」

そして俺はそのまま寝るのだった

零が寝て私は壁にもたれて座った

お姉ちゃんに零と仲良くしなさいってここに閉じ込められたけどまさか仲良くがこの域とは思わなかった

仲良くって言うか夫婦だ

私はそつと寝ている零の顔を覗く

呑気によどれを滴しながら気持ち良さそうに眠っている

穰子「こう見れば可愛いんだけどなあ……………」

思えばコイツと喧嘩してる原因も私からだった様な気がする

暴走する私達をボロボロになってまで助けてくれて……………

穰子「……………お礼、まだだったよね？」

私は寝ている零に顔を近付ける

あともう少しで唇が合わさろうとした瞬間……………

零「ハクシユン！」

零の大きなくしやみが私に掛かった

穰子「起きなさいよコラ！」

いきなり穰子にひっぱたかれる

零「何すんだ馬鹿神！」

穰子「アンタこそ何すんのよ！私の顔にくしやみかけて！」

零「くしやみ？」

そう言えばさつきドレミーと話してて一回したかも・・・ん？

零「ちよつと待て。てことは何か？お前はくしやみが届く位俺の顔に接近してたのか？」

穰子「!？」

零「何顔赤らめてんだ？」

穰子が目を見開いて俺を押し倒す

零「グヘ！何すんだよ！」

穰子が俺の胸に顔を擦り付ける

零「ほ、ホントに何なんだよ・・・」

穰子「こうしないと出れないのよ。我慢しなさい」

穰子が服を脱ごうとしたとき部屋のドアが吹っ飛んできた

俺が急いで立ち上がったって外を見るとそこに居たのは葦子と静葉の首根っこを引つつかんで笑顔で立っていた幽香だった

零「ゆ、幽香……」

幽香「あら、無事だったの。扉に頭挟まって死ねば良かったのに」

零「何か今日の幽香は冷たくない？」

幽香「浮気者には当然の対応だと思うわ」

零「浮気者って……」

幽香が二人をこつちにほおり投げてくる

難とか二人を受け止めて床に下ろす

幽香「……その二人、ちゃんとお灸を据えときなさいよ」

そのまま幽香は踵を返して歩いていく

不思議に思っていると幽香が足を止めた

幽香「そうそう、秋の神の実ってる方」

穰子「穰子です」

幽香「その馬鹿を襲うならそれ相応の覚悟をしときなさい」

一瞬の殺気に身震いしながら幽香を見る

穰子は顔を青くしてへたり込む

穰子「た、たすかった・・・？色んな意味で・・・」

零「何だっただんだ？幽香の奴・・・」

これがとんでもない異変の前兆とはこの時、幽香以外誰も知らなかったなであった

ヤンデレ再来！

零「え？何このサブタイ？ヤンデレ再来・・・？」

そして俺は辺りを見る

真つ暗な空間に俺一人が座っている

ドレミー「目が覚めましたか。と言つてもここは夢の中なのですが・・・」

零「ドレミー・・・」

瞳に光の無いドレミーに不信感を覚えつつドレミーに近付く

零「夢の中つて言つたな？」

ドレミー「ええ、言いました。それが？」

零「寝た記憶がない。さっきまで童子と静葉に説教してたはずなんだけど？」

ドレミー「私が此方に誘いました」

零「・・・何のために？」

俺が聞くとドレミーが不適な笑みを浮かべ始めた

ドレミー「貴方を、他の雌ブタから護るためですよ」

ドレミーが俺を珠に閉じ込めて鎖を付ける

零「はあ!?!嘘!?!」

ドレミー「嘘では無いですよ・・・」

ドレミーが珠の壁越しに俺を見る

ドレミー「これで貴方は目覚めることはありません。身体は穢されますが、貴方の魂は清いまま私と共にある事でしょう」

駄目だ・・・

今のドレミーは話を聞く耳がない

ドレミー「何と素晴らしいでは無いですか!これで私達の仲を邪魔する不屈きものは・・・」

ドレミーが言いかけて俺を閉じ込めている珠が爆発した

ドレミー「・・・おやおや、もう真実にたどり着いたんですね・・・」

そこに居たのは炎を手から出す妹紅と釘とトンカチを持ったパルスイが黒い顔で立っていた

妹紅「・・・おい、ソイツは私のだ・・・早く返せ」

パルスイ「それは聞き捨てならないわね・・・。ソイツは私の旦那よ。早く返しなさい」

あつちはあつちで何か別に干渉されてる・・・

つか、いつの間にか俺は妹紅の所有物兼パルスイの旦那になったの？

いや、美人にそう言われて嬉しいよ？

まるで夢みたい・・・あ、夢だった・・・

ドレミー「夢の住民である貴方達が夢の支配者である私に敵うとでも？」

妹紅「ああ、思うさ。不死鳥フェニックスは何度でも甦る。何度殺されようとお前を燃やし尽くしてやる」

パルスイ「妬ましい・・・。零の側にいるアンタが妬ましい。零を独占するアンタが妬ましい」

三人がぶつかり衝撃波が珠を襲う

珠揺れ酔いに襲われる

零「待て待て！吐く！吐いちゃう！」

俺が珠にへばり付いていると珠が消え去った

ドレミー「!?何故!？」

ぬえ「兄貴！大丈夫!？」

零「ぬ、ぬえ・・・？」

ぬえが俺を抱き締めて珠を出す

零「悪いぬえ、助かった」

ナンデナンデナンデナンデナンデナンデナンデナンデナンデナン
デナンデナンデナンデナンデナンデナンデナンデナンデナンデナン
ンデナンデナンデナンデナンデナンデナンデナンデナンデナンデナ
ナンデナンデナンデナンデナンデナンデナンデナンデナンデナンデ

零「うわあああああああああああああああ!!!」

大天狗と百足の姫

零「うわあああああああああああああああ
!!!」

起き上がったて息を整える

そして辺りを見渡してみる

見たこと無い和室に微妙に見たことのある景色

ここは……

零「妖怪の山のどっかか……」

???「そうだよ。ここは妖怪の山の天狗の屯所にある私の部屋さ」

そこに居たのは烏天狗の女性だった

???「おや？私を見て驚かない……」

零「そりやお前みたいな烏天狗の馬鹿ラツチを毎朝毎朝見てるからな」

???「射命丸の事か？あれは人一倍お前を慕っているからな」

俺は出されたお茶を飲んで女性を見る

零「……なあ。アンタいったい誰なんだ？」

???「ふむ。妖怪の賢者に記憶と力を奪われたお前に今さら何を言うつもりもない。私

は飯綱丸龍めくむ烏天狗の大将をしている者だ」

零「とこたあ大天狗か」

俺は立ち上がって外を見る

龍「おっと、あまり外に出ない方がいい」

零「あ？」

龍が襖を閉めて部屋を隔離する

龍「匂い消しの結界から出れば犬走に見付かってしまうぞ？」

零「椀に？」

俺は襖からゆっくり離れて龍をみる

龍「ああ。外ではお前を血眼で探す者が多発している。見付かったらどの様な目に合

うか・・・」

想像して俺は身震いを起こす

龍「・・・そんなことよりも、だ。お前に一つ依頼がある」

龍がそう言うのと襖が叩かれた

??? 「姫海棠です」

龍「・・・入れ」

襖が開き入ってきたのは以前ドレミーと夢で見た少女・・・姫海道はたてだった

龍「紹介は・・・そうだな。姫海棠よ。コイツは風切零だ」

はたて「は、はあ・・・」

困った顔ではたてが俺の顔を見てくる

龍「今典つかさが私の友を呼んでいるから姫海道はこの異変の詳細を零に話してくれ」

はたて「はッ」

はたてが礼をすると龍はそのまま部屋を出ていつてしまった

はたて「・・・じゃあ話すけどいい？」

零「ああ」

はたてがこつちに近付いて座り治す

俺も連れてはたての前に座る

はたて「先ずは・・・これを見て」

はたてがガラケーの画面を見せてくる

そこに写っていたのは・・・

零「・・・鬼人正邪じゃねえか？」

はたて「ええ。問題はコイツの焚いてる奴よ」

はたてが指差した所を見ると何かハートの形をしたお香があった

零「お香？」

はたて「天摩様の宝の一つ、愛染香よ」

零「愛染香……？」

はたて「吸ってから最初に見た者を好きになるお香なの。また、想いを増長させたりね」

俺は溜め息を付いて寝転がる

はたて「他人の仕事部屋でよくゴロゴロ出来るわね……」

零「龍の友人つてのが来るまで暇なんだ。別に良いだろ？」

???「その心配はねえよ」

声が聞こえて起き上がる

???「龍に呼ばれて来てやったぜ！この俺、姫虫百々世様かな！……ん？」

零「……………」

百々世「……………」

零百々世「……………あ」

百々世「いやー、あの時龍の大切な壺割つちまって弁償代稼いでたんだよ」

百々世が笑いながら胡座をかいて座る

俺はそれを見てからまた寝転がる

はたて「……………」

龍「皆集まつてるな？」

襖が開いてそこからエプロン姿の龍が入ってくる

はたて「い、飯綱丸様……。その姿は？」

龍「ん？この姿か？ほら、話し合いをするしおにぎりでもと。ほら、お前も食え」

はたて「し、しかし……ムグツ！」

零「まあまあ、先ずは食おうぜ」

俺ははたての口におにぎりを突っ込みながら自分もおにぎりを食べる

百々世何て両手におにぎり持ってガツガツ食っている

はたても渋々と言った感じで食べ始める

零「で、話しははたてに聞いたけど正邪は何処に居るんだ？」

おにぎりを飲み込んで龍を見る

すると龍とはたてが何故か下を向き始める

零「なんだ？そんなにヤバいところなのか？」

鈍感が愛染香を吸うとどうなるのか

零「え？何このタイトル？もしかして今回俺が吸っちゃう系？To Loveの主人公みたいになれちゃう系？」

俺はタイトルの書かれた紙を見ながら呟く

結局二人で地底を降りている

百々世が穴を掘ってくれているお陰で落石を気にせずゆっくり歩いて降りることが出来た

百々世「気を付けろよ？地上もそうだったが愛染香にやられた奴がほつき歩いてんだ」

確かに地上にも文に楳、いつそうヤバくなった雛やにとりにとりの色違い

確か守矢直通のロープウェイを作った山童の山城たかねだったような気がする

零「分かってるよ。お前だって気を付けろよ？」

百々世「わあってるっての！」

とうとう橋まで来たその時

百々世「下がれ！」

百々世の言葉に俺は後ろに飛ぶとさつきまで居た場所に釘が刺さっていた
百々世「一気に走るぞ！地霊殿まで！」

百々世が走り出したと思つたらいきなり動きを止める

そして何故かピエロが良くやるまるで壁があるかのような動きを始めた

零「どうしたんだよ？パントマイムなんて始めやがって。まるで壁があるみたい
に……」

百々世「……あるんだよ。壁……」

零「はあ!？」

俺が近付くと確かに透明な壁がある

次に戻ろうとするが……

零「……げ、こつちも塞がってる……」

百々世「発泡塞がりか……」

俺達が溜め息を付いてどうするか考える

蹴つたり木刀やツルハシ、スコップで殴つてもびくともしない

零「アアちくしょう！」

俺が壁を蹴りまくって顔を擦り付ける

??「いい加減諦めたら？」

声が聞こえて上を見るとそこにはにとりに似た赤髪の少女が座っていた

百々世「…………お前は？」

???「…………みとり。河城みとり。嫌われものの半妖だ」

百々世がみとりに近付いて耳元に近付く

百々世「すみません。背中に道路標識引っ付いてますよ？今なら俺しか気付いてない

みたいだから…………」

みとり「……………」

零「フアツションンンンンンツ！それフアツション！そう言う格好なの！」

百々世「え？じゃあ何？これわざとなの？何で？何で動きにくいのにそんなかつこう

してるの？」

みとり「べ、別に…………これなんてどうでもいいし…………／／／」

零「照れた!？」

俺が次の言葉を喋ろうとしたら声が出なかった

零（声が出ない!?何かしやがったのか?）

みとりが百々世に絡まれながらもこつちを見てニヤ付いてくる

みとり「私の能力は『あらゆるものを禁止する程度の能力』。お前達をここから先に行

かせることは出来ない」

百々世「なるほど。この先に行けないのはお前のせいか」
みとり「ええ。かと言って無闇に帰すわけにも行かない」

百々世「どう言う事だ？釘を投げてきたのもお前か？」

みとり「釘？」

みとりが釘を見て笑う

次の瞬間喉が軽くなる

零「え？あ、喋れた！」

みとり「釘は知らない。私は勇儀の姐さんにここの封鎖を頼まれただけ」

零「勇儀が……？」

みとり「変なお香が地底に出回って姐さんはその香の回収に動いてる」

百々世「だから！俺達はそれを回収しに来たんだって！遣いの百足も送ったはずだ

！

みとり「百足？ああ、それなら……」

みとりが溜め息を付いて旧都に指を指す

見るとそこにはヤマメに群がる百足の群れがあった

百々世「……あれは？」

みとり「どうやら土に煙が染み込んでたらしい。で、出てすぐにヤマメを見てあの状

態さ」

零「て事は……」

百々世が振り返って俺に飛び付いてくる

百々世が俺に引っ付いて手や腕、首や頬を甘噛みしてくる

零「痛い痛い！」

百々世「何だよ、噛ませろよ」

俺が百々世をひっぺがすと百々世がシユンと縮こまる

そして俺はある結論へと至ったのだ

零「まさか、まさか……鈍感って、百々世の事オオオオオオ

二話連続の叫びオチである……

!!!!!?????」

君の瞳にFOR IN LOVE

結局みとりに旧都に行く許可を貰い甘噛みしてくる百々世を引き刷りながらみとり同伴の下さとりと勇儀が居る地霊殿に向かつていた

零「・・・・・・出回ってるって聞いたけど？」

みとり「裏ではね。表沙汰にしたらそれこそさとりや姐さんに掴まるよ」

百々世「♡♡♡♡」

何時もの旧都、何時もの光景を見ながら俺は百々世を見る

惚れ薬でたらしこむ何ぎエ口も風情もねえ事は俺はしたくは無い

零「なあ、百々世。ちよいと噛むの止めてくんね？さつきから地味に痛い・・・」

百々世「ヤダ♡」

零「・・・・・・」

みとり「アンタも大変ね・・・」

そんな会話をずっと繰り返してようやく地霊殿に着いた

中に入って辺りを見渡す

ハシビロコウや犬、鷹などがじつとこつちを見据えてくる

さとり「何か怖い、ですか・・・」

声に気付いて階段の方を見るとそこにはさとりと勇儀が立っていた

さとり「すいません。この子達は人一倍警戒心が強い子達で・・・。それと、そちらの方の威嚇を止めていただいで大丈夫ですか？」

零「あ？」

俺が横を見ると何故か百々世が動物達を威嚇していた

俺はとつさに百々世の頭に拳骨を落とす

小傘蛮奇「「零（零）ちゃん！」」

零「小傘!? 蛮奇!?! 何でここに!?!」

さとり「二人には押収した愛染香の処分をお願いしました。零さんには二人の護衛を頼みたいんです」

百々世「待てよ! 俺はどうすればいいんだ?」

勇儀「お前さん既に愛染香にやられてるだろ?」

百々世「・・・・・・・・」

勇儀「だったらお前さんはこつちだよ。私等と一緒に調査だ」

百々世が俯いて黙る

小傘が声をかけようとするが蛮奇に止められる

さとり「それでは宜しくお願いします」

小傘「行つてきまゝす」

俺達は愛染香山のように入つた台車を引きながら旧都の道を歩いていた

小傘「フンフンフン♪」

零「楽しそうだな、小傘」

蛮奇「久しぶりにアンタにあつたからでしょ？」

零「久しぶりつて昨日、一昨日からだろ？」

蛮奇「出番何話ぶりだと思つてンのよ？」

零「うゝん……五話くらい？」

蛮奇「九話ぶりよ」

零「あゝ……」

蛮奇「一樣私達アンタに一番近い立場なんだけど？銀○ね二人だつて長い間放置されないうわよ！」

百々世「まあまあ、落ち着けよ我が娘」

蛮奇「誰がアンタの娘、よ……」

蛮奇に詰め寄られ俺が押さえていると荷台から百々世が蛮奇を止める

・・・・ん？百々世が・・・？

零「何してんだ、テメエは！」

百々世「あつちは人手が足りてるからな！寧ろお前らがどう香を処分するか心配だ！」

零「ご心配なく！荷台に乗ったバカごとマグマに叩き込めばいいんすよね!!」

百々世「え、マグマまで一緒に行つて良いのか!？」

零「行つて良いのか!?!、じゃねえだろ！」

百々世「えゝ良いじゃんかよゝ♡」

零「ぬわっ!？」

百々世が飛び付いてきて俺は後ろにたおれる

すると荷台の取っ手に倒れこんで愛染香が出店の屋台にすべて飛んでいき煙を上げ

始めた

「火事だアアアアアアア！」

蛮奇小傘「「・・・・・・・・・・・・・・・・」」

蛮奇「何やってんのよバカ！」

小傘「早く消火しないと！」

蛮奇が扉をバンツと開く

蛮奇「すいません！近所で火事が！」

小傘「水を貸して貰えませ・・・」

そこにいたのは零と桶に入ったキスメだった

キスメ「ねえ、次は何时会える？」

零「悪いな。二度寝はしない主義なんだ。夢に溺れるといけねえ・・・。俺の事はお忘れな。・・・てか、普通に喋ってね？」

キスメ「分かっている。調子が悪かったただけだって。役にたなんて、誰にも言わない」

蛮奇は扉を閉め火元に戻る

百々世「お前ら！水はあったか!?!」

百々世が水をかけ火を消し二人を見る

小傘「・・・涙でいい？」

百々世「何があったア!?!一体何があったんだ!?!」

小傘「零ちゃんか・・・やられちゃった・・・」

三人が零を見る

零「ヘイ！そのブーメランハニー！俺とゲートボールより良い玉突き合わない？」

零が年寄りの妖怪を口説いていた

蛮奇「しかもよりによつて……」

零「とりあえずあつちの宿で休憩しようか！大丈夫だから、なにもしないから。ちよーと腰のマツサージするだけだから！」

蛮奇「とんでもないモンスターハンターになつてる！」

百々世とパルスィが零に蹴りと釘を入れる

パルスィ「何してんのよ、アンタは！」

百々世「戻つてこい！それはゲートボールじゃない！魔界のゲートだ！まだ間に合うな！今からでも遅くない！私のゲートを使え！」

蛮奇「止めるのか進めるのかどっちかにしなさいよ！」

小傘「零ちゃん！」

零が起き上がり四人の手を握る

零「小傘、蛮奇、パルスィ、百々世。今まで近すぎて気付かなかつたが、お前達は俺にとつてかけ替えのない存在だ。一緒に幻想郷青少年保護条例の向こう側へ言つてみないか？」

蛮奇パルスィ「見境い無しかいっ！」

蛮奇とパルスィが零の顔を殴り飛ばすがスツと立ち上がり髪を整える

百々世「な、何てこつた……。熟女もロリコンも関係なし。女と見れば揺りかごか

ら墓場まで手当たり次第にくどくどんでもない助込ましになってやがる……。最初に見た奴を好きになるだけじゃねえのか!？」

パルスィ「吸いすぎて理性が飛んだのよ!しかも今まで朴念仁だった分尚更達が悪い……」

零がヤマメと勇儀を見つけて走り出す

零「ハニー!」

勇儀「なんだい?どうしたってんだい?」

零「ハイ!ハニー達!よかったら俺と一緒に夜の運動会開催しない?」

ヤマメ「もしかして零、愛染香に当てられたんじゃ……」

勇儀「ちよつと不味いね……」

周りの妖怪達が立ち上がる

全員が全員目がハートになっている

「姐さん……一緒に遊びやせん?」

「ヤマメちゃん。俺と一緒に遊んでよ」

勇儀「お前ら落ち着きな!」

ヤマメ「そーだよ!皆落ち着いて!」

妖怪達が二人に近付いた瞬間零が殴り飛ばした

零「おい、俺の女に手を出すな。俺がコイツらの先約だ。誰にも指一本触れさせねえ。力づくで女を手込めにしようとするお前らに渡す女は居ねえ。全幻想郷の女はランドセル背負った小学生からサロンパス背負ったババアまで全部俺ののだあ！テメエ等鬼畜が女遊び何て100万年早え！テメエ等は一緒春画でナニ弄つてろ！但し、その春画のモデルになった女も俺んのだがな！」

零がさらに暴れまくり蹴つて殴つての大立周りを繰り広げる

勇儀「鬼畜はアンタだよ！」

ヤمام「落ち着きなつて！皆香の煙にやられてるだけなんだから！」

零「分かつてるさハニー！」

零が小傘、蛮奇、パルスィ、勇儀、ヤمام、百々世の腕を引つ張つて走る

零「既に地底は色魔の巢！堂々と歩くのは危険だ！裏道を行くぜハニー達！」

全員が走っていたのは宿・・・つまりはラ○ホが立ち並ぶ通りだった

パルスィ「何企んでんのよ！一番危険な色魔はアンタでしょ妬ましい！」

零「誤解するなハニー！俺は色魔どもからハニー達を守りたいだけだ。目立つ動きは避けた方が良い。な、ハニー！」

『はい、ダーリン♡』

零が後ろを向くとそこにいたのは目をハートにした女性妖怪達だった

小傘「わちき達で皆の中から犯人を探し出すよ！」

零「・・・分かった。じゃあ、行くぜハニー達！」

零が目がハートになっている小鈴と神子と手を繋ぎ歩き出す

パルスィ「死ねえ！」

零「ギヤアアアア！」

両手に釘が刺さり血が吹き出す

パルスィ「ねえダーリン。何故聖人と貸本屋の子がここに居るの？」

ヤマメ「惚れ薬を利用して知己にまで手を出したのかい？」

零「お、落ち着けてハニー！俺は一人でも多くのハニーをチョメ、いや、救いたかつ

ただけだ！まだ手もち○コも出してないよ！ね、ハニー達よ！」

小鈴神子「「出番がなあい！」」

二人が零の腰を掴みそれは見事なジャーマンスーププレックスを決める

蛮奇「アンタら・・・惚れ薬でこいつに惚れてたんじやないの!？」

神子「ハハハ、冗談はよしてくれ」

小鈴「零さんにもつと純粹でいて欲しいんです！」

小傘「純粹？今の零ちゃんは純粹じゃないの？」

蛮奇「小傘、今は少し黙ってようか」

勇儀「ん？何してるんだい？」

勇儀が零の近くでしゃがんでいる神子をみる

神子が立ち上がるとそこにはチ○コに重りを付けられた零がいた

神子「これくらいしておかないと女性達に危険が及ぶだろ？」

パルスィ「危険なのはアンタよ！どんだけ他の女にてを出さないか心配してんのよ

！

皆が言い争っている内に零が匍匐で逃げる

すると手に鉄のたまが触れた

宣造「心配することはない。じき馴れるさ。これでお前達も仲間だ」

零「は、ハゲ……。既に忘れ去られかけてるハゲ！」

全然が宣造の目がハートになっていると気づいたときにはもう遅かった

神子と小鈴が皆を鎖で縛り付ける

勇儀が契ろうとするかま千切れない

宣造「ケダモノ達よ。その節操な儀色欲を矯正し、その愛を我らが神、愛染明王様に

捧げるのだ！」

周りに男が集まってくる

零「愛染明王……。だと……。？」

天邪鬼と鬼邪天Ⅱ

一方その頃お燐、お空、みとりは・・・

空「ねえ、お燐。私達は何をすれば良いの？」

燐「さつきさとり様が言ってたでしょ？ハートの形をしたお香を回収するの」
空「お香？」

みとり「これよ、これ！」

みとりがお香を手に乗せてお空に見せる

空「あ、それなら私も嗅いだよ！」

お空の言葉に二人が目丸くする

燐「ウソ!?!何時!?!」

空「えつとね、さつき」

みとり「冗談は止しなよ。じゃあ何でアンタは誰かしらに惚れてないのよ？」

空「うにゅ？」

三人が顔を見合っていると大名行列のような長い列が向かってきた

その中には、零や小傘、蛮奇や百々世と言った面々が並んでいた

燐空みとり「!!」

正邪「良いぜ良いぜ!このまま地霊殿に下克上だ。・・・もちろん、お前らも一緒にな!」

正邪が指を指すと三人の周りに香を持った妖怪達に囲まれる

しかし次の瞬間香が入った坪が割れる

零「悪イが、二度寝はしない主義なんぞな。夢なら一人で見な、ハニー」

百々世「自分の娘にハニーたあ、とんだタラシだな、ダーリン」

勇儀「そっちの方が零らしいがね!」

パルスィ「まったく、妬ましいわ・・・」

正邪「な、なんで無事なんだ!」

正邪が後ずさると後ろから宣造とほかの妖怪達が飛んでくる

宣造「賊どもから明王様を守れえ!」

しかし小鈴が宣造達を殴り飛ばす

小鈴「お父さん!何アレアレしてんのよ!愛染明王様、愛染明王って、前は娘ラブだったのに・・・ば、馬鹿みたい」

宣造「バツ!」

小鈴が頬を赤らめ宣造から顔を反らす

小傘「まさか・・・」

蛮奇「惚れてたの・・・」

ヤマメ「アツチイイイイイイイ!?」

小鈴が宣造の玉に付いた玉を持ち上げ笑う

そのまま小鈴が逃げる宣造を追いかけ、さらに零が小鈴を追いかける

百々世「つか、なんでお前も参加してんだ!」

零の頭に百々世のシャベルが刺さる

正邪「まだ異分子が・・・」

神子「ここにも居るぞ」

神子が正邪の頭に剣を突きつける

神子「悪いが世の中には君の手練手管でも手に負えない輩もいるんだ。だがおかげで私も自分の気持ちに気付けた。これで私も1本だけを見て進んで行ける」

零「そうかそうか、この小説じゃそんな描写無かつたけどどうとうお前もハニー達の尻を追わなくなるのか。じゃあこの際だ。1本と言わず俺が二、三発手解きを・・・」

零が神子の肩を持つが神子は離れて剣で零の金玉を指す

神子「い、いや、1本で良い。あ、アレだけ貰えれば」

燐「1本でそつちイ!」

神子が逃げる零を追いかけ、その後ろからパルスイと百々世、キスメが追いかける
みとり「おい！アンタら一体どんな状況で惚れ葉嗅いだ!?てか、なんで三人も参加し
てんのよ!？」

そう！小鈴は気付いてしまった！自分に絡んでくる度にウザい、キモい、臭いと思っ
ていたが居なくなつて気付いてしまったのだ！その気持ちは嫌悪から来るものではな
い！それはただの思春期なのだ！

小鈴「お父さーん！」

小鈴が立ち止まり宣造の玉が引つ張られる

小鈴「なに他の女にデレついてんのよ！アンタは二十四時間監視された檻のなかに入
れられたハゲであると言う事を忘れんな！」

宣造「ギヤアアアア！たしゆけて！あいじえんみようおうしやま！とれりゆ！アレ
とれりゆ！」

それを見ていた周りの男達が騒ぎだす

「な、なんだあの女は!?!ここは危険だ！早く明王様を・・・ギア！」

「な、なんだ!?!」

男の上に男が跳んできて周りの男は男が跳んできた方向を見る

そこには神子が居た

そう！神子も気付いてしまったのだ！周りの女子に持てる零に、嫉妬にも恋慕にも似た感情を抱き続けてきた神子！しかし気付いてしまったのだ！神子が見ていたのは零ではなく、零の凛とした、股に生えたあれだと言うことに！

蛮奇「何でよ！」

小傘「零ちゃんのアレはそんなに大きくないよ？」

蛮奇「そうそう、大きくな・・・え？」

フンスと神子を見る小傘を困惑しながら蛮奇が見る

しかし神子はこう思った！股から生えたアレなら誰のでも良いと！

みとり「誰のでも良いんかい！チ○コと言う存在その物に恋慕!？」

神子「一つ残らず刈り尽くしてやる・・・金玉狩りじゃあ！」

神子に金玉を引つ張られる男達を見てまだ無事なら男達が慌て出す

「御輿を捨てろ！」

「壁だア！」

「一歩たりとも奴らを通すな！」

鎖が千切れた音がなり宣造が飛んでくる

そして宣造すら気付いてしまったのだ！

宣造「愛染明王？何処の馬の骨とも知れん女に心を奪われるとは・・・。全て思い出

した……。俺の心の中にあるのは、俺が惚れているのは……。ケツだけだ！あらあ
ん、ごめんなきあい。美味しそうな男子のケツが見えたんで」

蛮奇「取れたア！アレ取れて別の道に目覚めたア！」

宣造「愛染明王なんかより私達ともっと楽しいことしなあい？」

宣造の後ろに玉に付いた玉が無い男達がセクシーポーズを決めながら並ぶ

勇儀「軍団出来る！金玉取られた連中で一大軍団が出来る！」

オカマ軍団が無事男達をおい始める

小傘「やった！皆の協力のおかげで道が！」

蛮奇「いや、どいつもこいつも本能のまま好き勝手してるだけだど!?」

百々世「感謝するぜテメエ等！お前らの心は絶対取り戻す！」

百々世達が走り出すと勇儀とパルスィ、ヤマメ、みとり、お燐が振り返る

勇儀「ここは私達に任せな！」

ヤマメ「皆はあの迷惑な子鬼を早く反省させてよ！」

零「ああ、任せとけ！必ずあの寝ぼけ眼のハニー叩き起こしてくらあ！」

零が百々世に抱えられた状態で叫ぶ

蛮奇「降りろ！」

そしてここは旧地獄の端の端に位置した場所である

そこで正邪は逃げる準備をしていた

しかし後ろの気配に気付いたのは正邪が笑い出す

正邪「ここまでか・・・」

百々世「ああ。後はテメエを捕まえて解毒薬を奪えば全部解決だ」

百々世が近付こうとして零がそれを止める

零「娘がやった事だ。親父の俺にも責任はあるんだぜハニー」

百々世「ダーリン・・・」

正邪「親父？今の今まで私の事を放置してた奴がか？」

零が黙る

それを見た正邪が更に嗤う

零「ああ、だからこそ、今から俺は初めて父親としての責務を全うする」

零は木刀を抜いて正邪に向ける

零「先ずは俺に下克上しやがれハニー！」

『・・・・・・・・・・はあ!?!』

全員が目丸くする

正邪「な、何言つてやがる！」

零「俺に下克上出来なきや幻想郷に下克上出来るわけねえだろ？」

正邪「……………」

零「その間、お前が幻想郷に仇なきないなら俺が何としてでも指名手配を取り消す」
そう言つた瞬間扇子を持つた手が迫つてきた

扇子の先が喉に当たりかけて止まる

紫「駄目よ。ソイツには私の愛する幻想郷に仇なした。死を持つて償つて貰わないと」

零の後ろにスキマが現れ中から紫が姿を出す

零「……………ハニー、ハニーは昔俺に言つたよな？幻想郷は全てを受け入れるって……
だつたらさ、こいつの事も受け入れてやってくんねえかな？」

零が後ろを向いて土下座する

正邪「おい……。何してやがる……？」

零「……………土下座」

正邪「お前は、私の親父でも血も繋がつてねえ……。赤の他人だろ!？」

零「例えそうだとしても、親父として、家族として、ここを譲る訳にやいかねえんだ」
紫が零を冷たい目でしばらく見つめ、一つ小さなため息を付くとスキマに姿を消して

行つた

そして零が立ち上がり正邪を見る

零「ハニー、先ずは後始末だ。解毒薬は？」

正邪「……………ねえよ」

零「そっか……………」

零が考えを巡らすなか蛮奇と小傘が心配そうに眺める

空「あるよ」

『え!?!』

零「それは本当かハニー!?!」

空「うん。私もそれで効果切れたもん」

蛮奇「それでそれ何処にあんのよ？」

空「えつとね……………変な神様のところ!」

その後、変な神様大搜索網が敷かれ、ヘカーティアの家にあつた愛染香と対を成す愛断香を使い異変は終息した

とあるカセットテープ収録

零「所でお空は何で愛断香がヘカーティアの屋敷にあるって分かったんだ？」

空「えつとね、教えてくれたの！」

零「誰が？」

空「お兄さんに似た男の子と女の子！男の子の方は栗色に黒色が混じった毛でお芋の匂いがしてて、女の子は私に気配が似てた！」

零「へえ・・・」

東方紺珠伝

兎の兎による月の為の代理戦争

永琳「経過は順調よ。もう少しで完治するわ」

異変が終わり愛断香を嗅いだが完全に治ったわけではなく、俺は永琳の世話になつていた

零「正直な話、俺その時の記憶無いんだよな。どうなつてんだ？」

永琳「私に聞かれてもねえ・・・」

俺は直ぐに立ち上がつて扉に向かう

零「んじや、またな」

永琳「待つて」

俺が扉を開けて部屋を出ようとしたら永琳に止められた

零「何だ？まだ何かあんのか？」

永琳「いいえ、ただこれを飲みなさい」

そう言つて永琳が取り出したのは一錠の薬だった

永琳は水を入れたコップを渡してくる

俺はコップと葉を受け取り葉を口に入れ水ごと飲み込んだ

永琳「……………さて、零。一つ頼みたいことがあるの」

零「？」

それから一時間後

俺は鈴仙と一緒に霧の湖に向かって歩いていた

零「やっぱ地に足付けて歩くのは良いよなあ」

鈴仙「普段飛んでますからね」

零「にしてもよ、最近見知らぬ兔が霧の湖を占拠してるって本当なのか？情報源チルノなんだろう？」

鈴仙が苦笑いを浮かべながら前を見る

鈴仙「それは間違いありません。何故かこの近くの波長は懐かしい感じがするんです」

零「懐かしいって、まさか玉兔か？」

鈴仙「かもしれません」

???「あれれ？懐かしい顔だ！」

いきなり森から清蘭が飛び出してきた

零「清蘭!？」

清蘭「お久しぶりです」

何故か敬語の清蘭に違和感を覚える

それを気にせず清蘭は耳に手を当てる

清蘭「メーデーメーデー! 緊急事態発生!」

鈴仙「そうそう、テレパシーで自分勝手な月の兎伝えなさい。今からそつちに行くつてね」

清蘭「零様を発見! 直ちに保護する!」

清蘭を抱き締めて持ち上げる

そのまま清蘭は俺を抱えて飛び去った

鈴仙「あ、コラ! 待ちなさい!」

霧の湖に着いて俺は地面に下ろさせる

すると周りに居た玉兎達が俺の前に綺麗に並ぶ

そろそろ暗くなる時間だ

今回は永遠亭に付き添いに来てくれた雷鼓に事情説明したから大丈夫だがご飯はど
うしよう

鈴瑚「お待ちしておりました。零様」

零「あー・・・、うん。とりあえず敬語は止めてくれ」

鈴瑚「そう？いやー、零はフランクで助かるよ」

零「で、説明してくれ。今月で何が起こっているのか、幻想郷に何しに来たのかを」

鈴瑚が目を閉じてしばらくしてから目を開く

鈴瑚「もうすぐ地上は浄化されるんだよ。それ以上は私からは言えない」

零「月に行くにはあれを使えば良いのか？」

俺は湖に浮かぶ穴を見る

鈴瑚「え？あ、うん」

鈴仙「零さん！」

鈴仙の声が聴こえて後ろを向くと鈴仙が清蘭達を倒して立っていた

鈴仙「大丈夫ですか!？」

零「あ、ああ・・・」

鈴瑚「変わったね。昔はこんなことに首を突っ込んだりしない奴だったのに・・・」

鈴仙が鈴瑚を見てから穴を見る

鈴仙「悪いけどこつちも仕事なの。でも案外楽しいわよ？変化があつて。まあ、住め

ば都つてね」

鈴瑚「そう、私も地上に住みたいな。仕事も何もかなぐり捨てて」

零「住めばいいじゃん」

鈴瑚「え？」

零「幻想郷は全てを受け入れる。例えそれが幻想郷の敵であつたはずの月の兎であつても、ね」

俺は穴に向かつて歩き出す

零「じゃ、通路は使わせて貰うぜ」

鈴仙を来たことを確認して穴に飛び込もうとする

鈴瑚「・・・一つだけ忠告しといて上げるよ。今、月の都は一人の狂人によつて可笑しくなり始めている。昔の極楽浄土はもう見る影も無いと思つてね」

俺達はそれだけ聞くと穴に飛び込んだ

夢の支配者の憂鬱

目を開けるとそこには宇宙が広がっていた

零「ん、ん、んじゃここは!?!」

前には月、後ろには地球が見える

鈴仙「ここは第四槐安通路だと思えます。……久しぶりだから少し忘れちゃてますけど……」

鈴仙の無事を確認して会話に集中する

零「へく……ん? じゃあ月から帰るときレイセンの羽衣じゃなくてこつち使ったらよかつたんじゃ……」

ドレミー「それ以上はいけません」

頭上からドレミーの声が聴こえて俺は少し驚いた

零「お、ドレミー。もう大丈夫なのか?」

ドレミー「はい。あの後サグメ様に治して貰いました。それより、こちらも仕事です。貴方をここより先に通す訳にはいきません」

鈴仙「なんで貴女がそうまでするのよ?」

ドレミー「この件には私も少し関わってしましてね。この程度の仕事は義理で引き受けた形です」

零「通路に敵を配置するたあ、誰か、俺達を誘い込んでるな・・・」

俺は木刀に手をかけドレミーから離れる

ドレミー「地上と月の都の都の連絡通路は精神世界である。ここは夢の世界。ドリームワールド 夢を喰い、

夢を創る私に敵うと思うなよ！」

ドレミーが段幕を放とうとした瞬間俺はドレミーの手を握る

零「止めてくれハニー。俺はハニーと戦いたくない。戦うとしても回転ベツトの上で戦いたい」

ドレミー「はあ!? // // // // // // // // // // //」

鈴仙「少し黙っててください！」

鈴仙が零に愛断香の成分が入った注射針を首に刺す

零「ハッ！俺は何を!？」

ドレミー「// // // // // // // // // // //」

零「?ドレミー?」

ドレミー「と、とにかく! 生身の貴方方を通す訳にもいきません! // // // // // // // // // // //」
それは困った

何か事情は知らんが月が危ないのは確からしい

俺にも信仰やら何やらもある

関わりが無い訳じゃ無いのだ

俺は鈴仙とドレミーを交互に見る

ドレミー「ま、まあ、貴方が私の要求を飲んでくれるのなら、やぶさかでもありません」

鈴仙「要………求？」

ドレミー「………して下さい」

零「？」

ドレミー「抱き締めて愛を囁いてください！」

鈴仙「ええ!？」

零「そんなに良いのか？」

俺はドレミーに向かって歩く

そのままドレミーを抱き締める

ついでにドレミーを押し倒して顎を持上げ手をドレミーの横辺りの床に付き顔を近づける

零「ドレミー、俺と一生を歩んでくれ」

ちよつとかつこよさげな声色にして更に顔を近付ける

つか何か前も同じようなことをやった記憶があるのだが……まあ、思い出せないってことはどうでも良いってことだろう

ナズーリン「ヘクチツ！」

星「おや、風邪ですか、ナズーリン？」

ナズーリン「そうだね。昨日土砂降りの中宝塔を探し回ったから冷えたらしい」

星「す、すいません……」

ドレミー「ひや、ひやい！／＼／＼／＼／＼」

ドレミーが顔から煙を吹かすとそのまま倒れてしまった

零「お、おい!？」

鈴仙「……大丈夫。只の知恵熱です」

鈴仙がドレミーを見てそれだけいとそそくさと飛んでいってしまった

こんな時、俺が何かいとうと確実に火に油を注ぐことに成りかねないので黙っておこう

天邪鬼一家

通路を出て辺りを見渡す

鈴仙「誰も居ませんね・・・」

零「ああ、静かだ。静かすぎる。まるで人が寝静まった田舎みたいだ」

建物の中に入ってみても人の気配がない

俺はカゴメカゴメを歌いながら歩く

零「カゴメカゴメカゴメカゴメ籠の中の鳥は、何時何時であくう♪夜明けの晩に、鶴と亀がすくべった♪後ろの兎はだくれ♪」

後ろを歩いている鈴仙が辺りを見ながら歩いている

俺が振り向くと鈴仙がビクツと肩を震わせてこつちを見る

零「え、何でそんなに驚いてんの？」

鈴仙「う、うし、うしうしうし・・・」

零「後ろ？」

俺が後ろを振り向くとそこにはサグメ、豊姫、依姫が居た

俺は一旦前を見てもう一度振り向く

やはり三人居た

依姫「で、何をしているのか聞いても良いですか？」

零「……………散歩？」

依姫「……………」

依姫が刀を抜きかける

零「待った待った！言う！言うってば！」

依姫が刀を戻して俺は安堵の溜め息をもらす

零「……………幻想郷にイーグルラビイが現れて鈴瑚に理由を聞いたんだよ。んだらびつくり月が危ないらしいじゃ無いの。で、何で人っ子一人居ないんで？」

三人が顔を合わせて豊姫が前に出てくる

豊姫「都の住民は夢の世界に作った仮の都に居るわ」

鈴仙「夢の世界……………」

零「なるほど、勘違いして過ごしてるわけだ。まるで狂夢だな」

豊姫が頷く

豊姫「まさか、あの獺がこちらに通すとは思ってなかったけど……………」

零「ドレミーなら気を失って寝てるぞ？抱き締めて愛を囁いくなんてこっぴばずかしいことしたのに残念だ」

豊姫依姫 「その話を詳しく！」

豊姫と依姫が近付いてくるが二人が顔を見合せ最終的に顔を赤くして戻っていく
そんな豊姫の肩をサグメがたたく

サグメ 『二人は八意様によってここに導かれた。可能性があるかもしれない』

豊姫と依姫がハツとしてこちらを向く

依姫 「お姉さま」

豊姫 「ええ、もしかしたらそうかも知れないわね」

豊姫がまた一歩近付いてくる

豊姫 「今、月の都はある敵によって侵略されようとしているわ」

零鈴仙 「侵略!?!」

依姫 「それも我々が手を出せない生命の力で・・・」

豊姫 「慌てて月の都を凍結停止させて全員を待避したけど・・・」

零 「そろそろ限界、か？」

豊姫が頭を縦に降る

依姫 「だから早い内に幻想郷に遷都しようと考えました」

鈴仙 「うひょ!? 遷都!?!」

零 「なるほど、だから玉兔が幻想郷に溢れてたのか・・・」

豊姫「もちろん兎達はその事を知らないわ。サグメ様と依姫のお陰で地上に月の都の別荘を作ろう程度にしか思っていないはずよ」

俺は鈴瑚の顔を思い出す

やつぱは鈴瑚は切れ者何だなく、と感心しながらサグメを見る

零「とりあえずお前ら、サグメの考えてることは分かった。要はあれだ。お前等に討てない敵俺等に討たせようって腹積もり何だな？」

サグメが俺の視線に気付き顔を反らす

鈴仙「零さん……」

零「鈴仙、先に行つといてくれ。後で追い付く」

鈴仙「……はい」

鈴仙が踵を返し歩いていく

零「さて、サグメ……」

サグメを呼ぶとゆっくり顔を上げる

零「正邪は無事だ」

サグメ『!?』

サグメがスケッチブックを見せってくる

俺はスケッチブックを奪い取り後ろにほおり投げる

依姫「何を!？」

豊姫「依姫」

依姫が刀を抜こうとして豊姫が依姫を止める

依姫「お姉さま!」

豊姫「……………」

依姫の言葉を他所に豊姫は零を見る

零「お前にこんなの要らねえだろ?」

サグメ「……………」

零「テメエの能力か何か知らねえがな、んなの俺が何とでもしてやる!だから俺が側

に居るときはその口で喋りやがれ!」

サグメの胸ぐらを掴んで顔を近付ける

零「言いたい事はそれだけだ。じゃあな」

俺は踵を返して鈴仙の後を追う」

サグメ「待って!」

聞きなれない声が聴こえて売り向くとサグメが顔を赤くしてこつちを見る

サグメ「私をこうした責任は、とって貰うから……………」

零「ああ、取ってやるよ。責任だろうが何だろうが……………。俺達は正邪の親何だから

な・・・」

俺は少し笑いそのまま歩き出した

I t ' s S o C r a z y

月の都を出て目の前の光景に目を疑わせた

そこには妖精が大量に飛んでいた

妖精なんて生命そのものであり穢れその物だ

零「豊姫達なら畏れるに足らない位なんだけどなあ……」

足を進めて辺りを見る

よく見たらどの妖精もボロボロで逃げている

零「鈴仙も派手にやってるなあ……」

???「ちよつと待ったア！」

いきなり呼び止められて上を見るとそこには全身タイトの星条旗クラウン妖女が居

た

しかも既にボロボロだ

零「妖精……？」

???「アタイは地獄クラウンピース。さっきの兔には負けたけど、人間のアンタなら話

は別よ！」

クラウンピース・・・長いからクラピで、クラピがいきなりド太いレーザーを撃つてくる

それを避けたと思つたら星の弾幕が大量に飛んできた

零「おいおい、こりゃ・・・妖精の出して良い弾幕じゃあねえぜ！」

クラピ「純化した妖精のエネルギーは鬼神を越えるって言われたもん！月の民の嫌う生死の穢れをたつぷり喰らって初めてのので地獄に落ちるがいい！」

俺は避けながら何とか策を考える

しかし弾幕が濃すぎて考えが出てこない

俺はポケットからカードとメダルを取り出す

零「・・・頼むぜ。上手く行ってくれよ・・・。憑依『怪力乱心星熊童子』！」

勇儀の力を憑依させた瞬間月の弾幕に押し潰される

しかし流石勇儀と言うべきか全然痛くない

むしろちよつと肩凝りに効く位だ

俺は月の弾幕を砕いてクラピに投げる

それがクラピに当たってクラピが落ちた

俺はクラピに近付いて顔を見る

零「お前さん本当に妖精かい？何だその圧倒的な力は・・・」

クラピ「何で・・・また。生命の象徴である我々妖精がここを支配している限り月の民は手を出せないって聞いたのに・・・」

零「そりゃ、運が悪かったな。俺も鈴仙も元は月の民さ。でも今は地上住み、穢れきつてんのよ。で、誰からそんなの聞いた？」

クラピ「ご主人様の友人様よ。妖精達の力を純化してくれたのもそのお方」

零「その純化ってのは？」

クラピ「アタイにも良く分からないけど凄いいことらしいよ？」

零「へっ・・・んじや、案内してくれるかい？」

クラピ「案内・・・？」

零「ああ、お前のご主人様の所に」

静かの海・・・

それは海と言っても魚は居ないし生命も一切住んでいない

そんな場所

そんな場所には表と裏がある

結界の外側、表の静かの海

結界の内側、裏の静かの海

そこに兎と仙霊が二人

「何故お前はそこまで穢れている？」

「何故お前はそこまでミスを受け入れているのです？」

兎が何かを仙霊に話す

「月の民にそんな奇策が？」

「素直に感心したわ！」

「でも奇策は奇策。月の民も愚かなミスをしている」

「この地上の兎は必要以上に穢れを負っているわ……」

これでは私の力の前では無力！絶対的無力！

……だが不倶戴天の敵、嫦娥よ。見ているか？お前が出てくるまでこいつをいたぶり続けよう！」

そして、兎と仙霊の戦いが始まった

なんてないけどね！」

??? 「あら？また客人？」

零 「へ？」

前を見直すとそこには黒い中国の昔のお偉いさんが来ていそうな服を着た女性がい
た

??? 「あら、さつきは穢れた兎だったけど今度は穢れて居ない人間を送り込んだのです
か？月の民の心意が見えないわ」

零 「？何をごちやごちや言ってるんだ？」

??? 「やはり只の一般人・・・狂気の民が正気に落ちたのかな？」

零 「さつきから全然人の話聞いてねえよこいつ・・・」

??? 「・・・今一度お前に問おう。月の民の心意は何だ？」

零 「俺が知るかよ。んなの。お前さんの言う狂気が何で正気が何かも正直分かっちゃ
居ねえ。でもな、一つだけ言える」

俺は木刀を女に向ける

零 「月の民は狂気だぜ！まごう事なき、ぜったい敵狂気！・・・じゃなきや己が神
を戦地に送り出さねえつつうの」

??? 「ほう・・・そこまで言うのならお前には秘密があると言うのです？私に気付いて

いない月の秘策が……」

零「だから知るかよ。IQ高い奴の思考なんざ偏差値低い俺に分かる筈もねえしな」
俺は笑って女を見る

零「だが、俺達はサグメと豊姫と依姫の依頼で来てんだ。運命は、逆転を始めているんだぜ！」

???「面白い……月の民が私を厭わないと言うのならかかってきなさい。月の神に何が出きるのか、月の民は何を考えているのか、見せよ！穢れた月の民の成れの果てを！そして見よ！純粹なる瑕疵の向こう側を！我が名は純狐！月に仇成す仙霊である！」

零「我、クロノヤシヤダイゴンゲン黒夜叉大権現、風切零！我が信者の為にも貴様の侵略を止めさせて貰おう！」
俺達が互いにつつかろうとしたその時……

ヘカーティア「ストツプストツプ！もう戦わなくていいわよん！」

零「……へ？」

誰が変態で変なTシャツの地獄神：略して変T神よ！

零「おいテメエらしい加減にしろよ！一々自分の意思サブタイにしか出せねえのか！」

ヘカーティア「今更ね。今までさんざんサブタイトルで遊んでたんだから別に良いじゃない」

ヘカーティアが降りてきて俺を純狐から離す

零「いや、一様サブタイは話に関係ある奴だから！お前らの場合只の叫びと前回来たコメントへの文句だろうが！コメントくれた方ありがとう！」

俺は空を見てカツと叫ぶ

純狐は何だか不服そうな顔をしながらこちらを見る

ヘカーティア「もう、純狐。そんな顔しないの。兎ちゃんに約束したんでしょ？」

純狐「ええ。しかし彼：：月の秘策である神が一体何を見せてくれるのか、気になつてね」

ヘカーティアが俺を見てからまた純狐を見る

ヘカーティア「純狐、この子はね、地獄の問題を解決した子よん？」

純狐「ほう、と言うことはあの暴動を収めたのはこの子供と言う訳か……。数にし
て数万と聞いたが良くもまあ、収めた物だ」

純狐が踵を返し歩いていく

零「……………」

へカーティア「さ、行きましょ。兔ちゃんもまつてるわよん♪」

零「あ、ああ……………」

しばらく二人に付いて歩いていると見たことの無い、月ではない場所に来た

零「ここは……………」

純狐「私の仙界だ」

仙界、と言えば華仙の屋敷や神霊廟がある場所だが、一重に仙界と言つてもその個人
が作った空間であり他の仙界とは無関係だ

鈴仙「零さん！」

零「鈴仙！良かった。無事だったんだな」

鈴仙「はい。何とか……………」

俺は鈴仙が怪我をしていないのを確認して二人を見る

零「さて、と。じゃあまず、何でこんなことしたのか教えて貰おうか？」

純狐が椅子に座り俺達は純狐に近づく

純狐「……何から話そうか……。先ず私には夫が居た。その夫は私の不倶戴天の敵、嫦娥の夫でもあった。しかしある日夫は私の息子を殺した。それを怨み私も夫を殺した。……しかし純粋なる怨みだけの私はそれだけでは怨みが晴れなかった。そして私は夫の縁者である嫦娥と、それを囲い護る月の都に怨みの矛先を向けた」

零「まるでどつかの誠だな……。で、ヘカーティアは何で参加したんだ？」

ヘカーティア「ん？ 私は地獄の闇を深くする太陽を嫦娥の夫に撃ち落とされたから復讐してるのよ♪」

つまり結局はその糞旦那が全ての始まりと言うわけだ

鈴仙「あ、あのくそれって止めていたただく訳には……」

純狐「ウドンちゃん。それは無理な相談よ。私達はここまで来てしまった。もう止められない止まらない」

零「カツパエビセンじゃねえんだからさ……。なら、少しの間休戦して貰いたい」
ヘカーティア「休戦ねえ……。期日は？」

零「俺が死ぬまで」

そう言った瞬間、意識が飛んだ

目を開け辺りを見回す

そこには涙目の鈴仙とヘカーティアに叱られている純狐が居た

鈴仙「零さん！大丈夫ですか!?!私が分かりますか!?!」

零「鈴仙……。あれ？俺、何が……」

ヘカーティア「ごめんなさい。純狐がいきなり貴方を純化して粒子までバラバラにしたの」

俺は純狐を見る

純狐「だが、おかげで分かったことがある。お前が大ボラ吹きだと。一体不老不死がどうやって死ぬのか、教えて貰いたい物だな」

零「……んなの俺が知るかよ」

純狐「ッ！」

零「そこがお前さんの頭の使いどころだろうが。どうせサグメらと平日昼間から将棋とか碁打ってる爺の如く読み合いにしか使ってねえんだろ？」

純狐がたじろぐ

零「だつたら俺を殺す方法を考えるのに頭を使え！それで俺が死んだらその方法を妹紅と輝夜、永琳に教えてやってくれ。……。それはそうとヘカーティア」

ヘカーティア「ん？どうしたの？」

零「どーせ、月の民が夢の世界に待避してるのもお見通しなんだろ？」

ヘカーティア「ええ、そうね」

零「じゃ、何か対策、取ってんだよな？」

ヘカーティア「……完敗よ。月の民も解放して上げるわ。良いわよね純狐？」

純狐「……ええ」

こうして異変は解決したのだ

とある通信機の会話にて

零『そう言えばさ、サグメ達は何で今更幻想郷の侵略を始めたんだ？』

サグメ『……純狐の妖精を使った襲撃が始まったのは数ヶ月前』

零『うん』

サグメ『都に籠り状態になって月の都を幻想郷に遷都しようと考えたわ』

零『それでそれで？』

サグメ『それを成すための策は一つ。外の世界の都市伝説を利用して幻想郷に都を作ること』

零『な、何だっつてえ!?!』

サグメ『宇佐見董子が持っていたオカルトボールの一つは月の都が作った。つまり、ワアガ月の民の技術力は世界一イイイイイイイイイイイイイイイイ』

零『お前って、意外とお喋り何だな……』

!!!!!!!』

操られし二人

異変解決をしたとして博麗神社で宴会が行なわれる事となった

企画はヘカーティア、純狐、サグメ、綿月姉妹、永琳である

その準備の為俺は家で宴会料理を作っていた

百々世「お、上手そうだな」

ルーミア「そーなのかー」

そして先程から涎を滴しながら見てくる少女と幼女が二人

そう、百々世とルーミアである

零「何だよ？誰かと待ち合わせか？皆もう宴会に行っちゃってるぞ」

百々世「違う違う。俺はお前に用があつてきたんだ。こつちのちびとはさつきそこでな」

俺は宴会料理を少し味見用の小皿に入れてルーミアに渡す

ルーミアは目を煜かせてそれを食べる

零「そうかい。で、何か相談事か？」

百々世「ああ。この前の愛染香の異変についてな」

零「……………そうか。お前も感じてたか」

百々世「……………ツ!?じゃあ、お前も……………」

零「ああ」

百々世「……………人里は……………」

零「地底は……………」

零百々世「お前に任せるぜ」

と言う所で百々世は地底の穴を降りていた

百々世「で、何でお前まで付いてくるんだよ、ちび」

ルーミア「ちびじゃないもん！」

万事屋の前に居たちび、ルーミアがあらうことか百々世の後ろをフワフワ飛んできたのだ

ルーミア「……………お前は何で零に相談しに来たのさ？」

百々世「お前じゃねえ、百々世だ。零に相談しに来た理由？」

ルーミア「百々世は強いのだ。並大抵の妖怪じゃ束になっても勝てないのか」

百々世は近くの岩に座る

ルーミアは自分のリボンであるお札を解いて身体が闇に囲まれ、闇が晴れると真の姿になっていた

百々世「それがお前の本当の姿か？」

ルーミア「ええ。もつとも、この姿を保てるのは精々3分。意識を保つのはあの身体じや一時間位かしらね」

百々世「……………目の前に立って分かる。お前、相当強いな」

ルーミア「あら、そう感じる？でも残念。私は零に負けた弱者よ」

百々世「零に？それで封印されたのか？」

ルーミア「まあ、零も封印術は霊夢や紫みたいに長けてないのか知らないけど零とこの札の距離によって封印の強さは変わるみたいだけど」

ルーミアは札を頭に付けて元の幼女に戻る

ルーミア「さ、行きましょ。私の時間も無いことだし」

百々世「あ、ああ……………」

俺は人里にある古本屋、鈴奈庵の暖簾をくぐった

小鈴「いらっしやいませ〜。あ、零さんどうしたんですか？今日は宴会があるんじゃない……………。それに小人ちゃんも……………」

零「おう。ちよつと見たい文献があつてな。……? 小人?」

小鈴が俺の頭の上を見て俺も後を追う

そこには満面の笑みで座っていた針妙丸の姿があつた

零「いつの間に……」

針妙丸「正邪がね、零の事見張つてろーつて、私達の居ないときに絶対何かに巻き込まれるからつて」

零「勘の良い娘を持つて父ちゃん嬉しい限りだよ……」

小鈴「あの……」

小鈴に声を掛けられてハツとする

小鈴「どの様な文献ですか?」

零「えつと確か……」

俺は考える素振りを見せた後小鈴の前に置かれた本を指差す

零「その本」

小鈴「……」

百々世とルーミアが地底の橋まで着くとそこには何時ものパルスイの姿があつた
パルスイ「あら、珍しいメンツね」

百々世「ああ。テメエに聞きたい事があつてな」

パルスイ「・・・・・・・・・・」

百々世「愛染香の異変で俺と零が橋を渡ろうとした時、攻撃してきたよな？」

パルスイ「それは貴方達の足を止める為よ」

百々世「なら足元で良いだろ？何で本体を狙った？いや、それ以前に橋は半妖の河童が護つてた筈だ」

パルスイが目を閉じてしばらくしてため息を付いた

パルスイ？「やれやれ、唯の脳筋と思つていたがどうやらそうではないらしい」

ルーミア「・・・・・・・・・・ようやく本性を表したわね」

パルスイ？が黒い笑みを見せる

姿が霧散して巫女装束の女が現れる

???「私は卑弥呼。十二怪の一人」

ルーミア「十二怪？ああ、幻想郷に茶々入れては零達に撃退されてる・・・・・・・・」

卑弥呼「フフ、それは大蛇ですわ。全く恥さらしにも程がある。・・・・・・・・水橋。パル

スイは今も自分の家で眠つて居るでしょう。早くしないと手遅れになるかも」

それだけ言うとう卑弥呼は消えた

小鈴「……何故この本を？これは妖魔本です。零さんには毒だと思ひますが？」

零「お前には毒じゃ無いのか？」

小鈴がたじろぐ

針妙丸「どう言う事？」

零「もつと簡単に言つてしまえば今の小鈴は本当に人間なのかつて事さ」

針妙丸「？人間じゃないの？」

零「針妙丸、たまに来る小鈴の依頼つて何だっけ？」

針妙丸「えつと……本を稗田亭に返すこと？」

零「ああ。重いから手伝つてくれつてな。確かに小鈴は力がない。それは俺も知つてゐる。でもあの時、確かに小鈴はハゲを振り回していた」

俺は小鈴に近付いて匂いを嗅ぐ

零「それに今の小鈴からは妖怪とゲロ以下の奴の匂いがプンプンするぜ！」

俺が妖魔本を燃やすと中から妖怪が現れた

???「アチチチチ！何するんだ！」

針妙丸「貴方は何時も通りで占いをしてる易者さん!？」

易者「クッ！」

俺は易者の首に木刀を付ける

零「小鈴、人里の人間が妖怪化したら犯罪だ。霊夢と紫に消されちまう。そう、こんな風になっ！」

木刀で易者の頭を割ると易者が倒れる

針妙丸「……ちよつと厳しくない？」

零「殺してねえ分優しいだろ？」

俺は木刀を戻して小鈴に近付く

すると小鈴が後ずさる

そのまま壁まで追い詰めて方を掴む

そして唇を付け妖気を吸い取る

針妙丸「え、エエエエエエエエエエ!?」

唇を離し妖気を吐き出して斬り捨てる

零「たく、おら小鈴に死んで欲しくないんだぜ？これに懲りたらもう妖怪になろうと

するんじやあねえぜ」

小鈴「……はい……」

俺は小鈴に手を差し出す

零「ん」

小鈴「え？」

零「行くんだろ？宴会」

小鈴「は、はい！」

小鈴が俺の手に捕まる

針妙丸「宴会料理を忘れないでね？」

零「お、そうだな。針妙丸専用の料理もあるからな」

針妙丸「本当に!？」

お待たせしました!本当に久々の宴会回!ちなみにニコ童祭初日から書いてます!

零と針妙丸、百々世が色々動いているその時小傘と正邪、蛮奇、董子が参道を歩いていた

ちなみに雷鼓、弁々、八橋はライブの用意があるため先に行った

正邪「・・・・・・・・・・」

小傘「どうしたの?」

正邪「・・・・・・・・何でもねえ」

正邪が鳥居をくぐるとそこには片翼の女性、サグメが居た

サグメ『・・・・・・・・・・』

正邪「・・・・・・・・・・」

蛮奇「え?あれ誰?」

蛮奇がサグメとサグメを見る正邪を見ると何かに気付いたのか董子が蛮奇と小傘を押し始める

董子「ホラホラ、二人は何か知り合いみたいだし私達は先に霊夢達に会いに行こ!」

蛮奇「ちよ、ちよつと！私姫と影狼を待たなきや・・・」

小傘「わちきも聖に頼まれてた鈴が・・・」

童子「良いから良いから！それなら向こうで待てるでしょ！」

三人が置くに引つ込みその場に正邪とサグメが残される

サグメ『えつと・・・』

正邪「変わってねえな」

サグメ『・・・』

正邪「その能力、その能力のせいでお前は喋れない。あの時も、お前が月に行った時も何も言わずに出て行って・・・」

正邪がサグメからスケッチブックを奪い取る

正邪「お前の能力位私が能力でひっくり返してやる！だから私が近くに居るときはその口で喋りやがれ！」

サグメ「ッ!？」

サグメは驚いた

正邪が自分の心に素直にしたがって動いているからでは無い

零と同じことを言ったからである

サグメは次第と目から涙が溢れた

零「とうちやーく!」

そんな折、空気を読めない声の一つ

何とか宴会料理を運びながら階段を上りきる

するとそこには正邪と涙を流すサグメだった

零「え、何この状況・・・」

ふと目線が下に行くくと正邪の手にあるスケッチブックが目に入った

そこで俺は二人が何を話していたのかを察した

いや、察してしまった

小鈴「零さん?」

針妙丸「どうしたの?」

零「・・・・・・・・悪い小鈴。針妙丸と一緒に先行つといてくれ」

小鈴「・・・・・・・・はい」

そのまま二人が歩いていくのを見送り正邪達を見る

正邪「・・・・・・・・随分遅かったな」

零「ああ、おかげでな」

俺は正邪とサグメの手を握る

零「ほら、宴会行くぞ」

サグメ「え？」

零「何だよ？お前主催者だろ？雷鼓達が演奏で盛り上げてくれるけど主催者は宴会を盛り上げないとな」

とりあえず五円玉を三枚指で弾いて賽銭箱に入れて神社の裏手に向かった

そんな三人を見る怪しげな影が二つ

「ひもじいよお」

「姉さん静かにバレたらどうすんのよ」

「そんな事言つたてひもじい物はひもじいんだもん」

「ほら、ちやつちやと練習するわよ！そうすればガッポリ稼げるんだから！」

ドラゴンイーター

辺りでどんちゃん騒ぎが聴こえるなか俺と鈴仙は純狐とヘカーティア、サグメと豊姫が面と向かつて座っているところになぜか座らされた

零（なあ、鈴仙。一体何故俺達は宴会の中こんな重苦しい空間に居なきや行けないんだ？）

鈴仙（仕方無いですよ。師匠がこの会談の仲介役になれって・・・）

零（仲介って・・・。こいつら皆性格とかファツションセンスと裏腹に一人で幻想郷潰せるくらいの実力者だぞ？そんな化け物どもの仲介なんて一介の半妖と兎で出来るわけねえだろ！）

サグメ純狐「零（うどんちゃん）」

零鈴仙「はい？」

何故か俺はサグメに鈴仙は純狐にぬいぐるみのように抱きつかれる

そして二人の顔を見るとドヤ顔、豊姫とヘカーティアに至ってはどうかしろと目で訴えてきている

サグメ「貴女がもしまた都を襲撃しようものなら私の夫が黙っていない」

零「え？」

純狐「うどんちゃんに負けたお前達の命令は聞かん。私はうどんちゃんとうどんちゃんに付き従うそちらの最終兵器の条件を飲んだまで。彼を殺せばまた始める」

鈴仙「え？」

二人がバチバチしているなか俺は半分考えるのを止めていた

しかし次の瞬間転機が訪れた

ルーミア百々世「れ〜い〜」

零「あ？」

振り向くと百々世とルーミアに嘔みつかれ俺は血を吹き出す

サグメ豊姫「「零!」」

二人をひっぺがして百々世を見る

零「百々世、地底はどうしたんだよ？」

百々世「無事終わったよ。今パルスイは勇儀が見てる」

なるほど、宴会なのに勇儀が来ていないのはそのせいか・・・

にしても・・・

零「あのお、サグメさん？豊姫さん？殺気が後ろで駄々漏れ何ですけど・・・」

豊姫「貴方は少し黙って！」

零「あ、ハイ」

百々世とルーミアが頭に？を浮かべながらも戦う体勢をとる

サグメ「地上はやはり穢れている」

ルーミア「何を言っているのー？」

サグメが何かのボタンを押す

すると空からよくクイズ番組とかに出てくる奴が現れた

零「な、何だこれ・・・」

レイセン「対戦争用の兵器です」

鈴仙「これが？」

どこから現れたのかレイセンが俺を抱き上げて説明をする

レイセン「この兵器の名前はツキオネア。血を流すことなく戦争を終結させる兵器です！」

零「へく、月ってスゲェんだな・・・」

サグメ「当然よ。月の、もとい八意様の医学薬学科学力は世界一！一！不可能は無いんだから」

零「最近それ流行ってんの？」

ドレミー「サグメ様は何時もこうですよ。今まで喋れなかった分それが爆発している

んでしよう」

いつの間にか隣に居たドレミーに驚きつつもとりあえず回りを見る

ツキオネアが落ちた衝撃で酒やら料理やらが溢れている

それをそとから見ていた霊夢が何やら呪い言を呟きながら針と大幣を持っている

零「先ずは片付けだな、こりゃ」

水曜日のサグンドレン

ドレミー「さあ、始めました。本日のサグンドレン。司会のドレミー・スイートです。先ずは本日のゲストを紹介しましょう」

零「おい待てこら・・・ドレミー」「先ずは我らが武神、風切零さん」聞けよ！」

ドレミー「暴飲暴食、ルーミアさん」

ルーミア「おー？」

ドレミー「多少ルーミアさんとキャラが被ってる姫蟲百々世さん」

百々世「腹減った・・・」

俺達三人が座ってドレミーが司会をしている

つかサグンドレンって言ってんのにさつきからサグメ見当たらないんだけど？

ドレミー「それでは今回のプレゼンターはこの方です！」

ドレミーがそう言うとき空からレイセンが降りてくる

レイセン「どくもく」

ドレミー「レイセンさんです」

レイセン「今日私が提唱したい説はこれです！」

『風切零が実はロリコン説』

零「待たんかい！」

画面に出てきた説を見て怒鳴る

宴会に来ている他の皆もこつちを見る

零「結局ミリオネアなのか水曜日ダウンタウンなのかどつちだよ！つか、前回の喧嘩零困気どこ行つた！」

百々世「ロリコンには触れないのか？」

ドレミー「それではVTRをどうぞ」

零「無視かよ！」

忘れ去られた者の最後の楽園、幻想郷……

そこに住む一人の男、風切零

我々取材班は彼の実態を知る者に直撃した

霊夢「零？　そう言えばよく妖精と一緒に居るところ見かけるわね。あ、素敵なお賽銭箱はあそこよ」

魔理沙「これはこーりんから聞いたんだがよく命蓮寺のネズ公と無縁塚で宝探ししてるらしいぜ」

鈴仙「最近零さんがてるとトラップを竹林に仕掛けまくってるから大変よ」

神子「布都も零にはよく懐いているよ」

いかがだろうか

零「やべエよ、顔モザイクで変声入ってるけど誰かわかっちゃまうよ・・・」

俺は霊夢と魔理沙、神子を見る

しかし三人共目を反らしてこっちを見ない

百々世「俺も子供は好きだぜ？上手そうで」

ルーミア「わはー」

零「え、こわ」

ドレミー「さて、ここで問題です！零さんが手を出した少女の人数を答えて下さい！」

零「はあ!？」

ルーミアと百々世が考え始めていると隣で音が鳴った

そこに居たのはサグメだった

ドレミー「はい、サグメ様！」

サグメ「七人」

ドレミー「正解です！」

零「はあ!?!」

ドレミー「はい、誰かと言いますとキスメさん、萃香さん、チルノさん、大妖精さん、ミステイア・ローレライさん、ルーミアさん、リグル・ナイトバグさんです。それでは次のVTRに参りましょう」

その後もあること無いこと暴露され疲れた宴会だった

ちなみに撮影協力が文々。新聞と花果子念報であるとしり文とはたてにはきっちりオハナシをさせていただきました

兎と獺

次の日、目が覚めると小傘と弁々、針妙丸が俺の上に眠っていた

いや、もう平常運転過ぎて慣れてしまった

いや、なれちや駄目なだけどさ・・・

??? 「あのくすいません！」

玄関から声が聞こえて三人を起こさないように起き上がる

零 「はいはい。お客さん？」

扉を開けるとそこに居たのは鈴仙に似て居るが鈴仙より少し小さい黒髪の女の子
だった

??? 「えつと・・・、私は蓬琳・優曇華院・因幡つて言います。実は父と、腹違いの兄
を探して欲しくて」

俺は名前を聞いて一気に眠気が覚める

今、彼女は何と言った？

優曇華院・因幡？

蓬琳 「あの・・・」

零「ハッ！わ、悪イ。父親はどうか分かんねえが兄貴の方はどうにかなるかも知れねえ」

蓬琳「本当ですか!？」

零「ああ、とりあえず名前と見た目を教えてくれ」

蓬琳「はい。名前はナイト・スイート。身長は私と同じ位で少々おつとりしてます！」

おい、またきいたことある名前出てきたぞ！

ドレミーの子供か!？」

零「ちよ、ちよつと待ってるよ」

俺は扉を閉めて呼吸を整える

零「紫！いるか!？」

紫「何よ……。朝っぱらから？まだ眠いんだけど？」

俺が添乗に向かって叫ぶと紫がスキマから出てくる

零「鈴仙の娘が来てんだけどお前の仕業か？」

紫「ああ、それ？何か未来の私が許可したらしいわ。自分の親がどんな妖怪なのか見

せるためね」

零「冗談じゃあねえぜ……」

俺はパジャマを脱いで服を着て洗濯機にパジャマを入れる

零 「よし！行くか！」

蓬琳 「は、はい！」

とりあえずは先ず人里から回ってみる事にした

蓬琳 「へく、鈴奈庵って昔はこんな感じだったんだあ」

零 「昔？」

蓬琳 「え？あ！何でも無いです！」

しばらく歩いて鈴奈庵の前を通っていると蓬鈴が呟く

清蘭 「寄つてらっしゃい見てらっしゃい！清蘭屋のみたらし団子！」

鈴瑚 「鈴瑚屋の三色団子！美味しいよ！」

清蘭と鈴瑚の団子屋台を見て蓬琳が涎を垂らしている

俺はポケットから蝦蟇口をだして小銭を出す

零 「両方2本ずつくれ」

清蘭鈴瑚 「「毎度あり！」」

俺は団子を受け取ってそれぞれ1本ずつ蓬琳に渡す

零 「奢りだよ。好きなんだろ？」

蓬琳 「あ、ありがとうございます……」

そのまま時は流れて昼下がりに

俺は重大なことを思い出した

零「ヤベ！そう言えば昼から雷鼓達のライブの会場設置の手伝いがあるんだった！」

しかし今は仕事中心……

途中で投げ出す訳にもいかない

蓬琳「あの、兄なら危ないことは無いと想うので先にそちらに行ってくれても……。

何なら私も手伝いますよ？」

零「マジでか!?ありがとう！じゃあ行くぜ！」